まんじ

No.135

2015.2.1

まんじ第百三十五号　目次

致知対談「道徳教育のススメ」への読者感想……三戸岡道夫…4
一寸の虫……太田精一…12
国宝・別所安楽寺の八角三重塔……新井宏…20
キャンペーンソング「過疎」……古屋富雄…26
私説　余一物語……横山正義…33
モカの緊急手術……漆原直子…47
短歌　三十首……曽根竣作…52
短歌　行雲流水（四十四）……石黒修身…56
古い物・遠い夢……忠内正之…59
人類の仲間（八）……鈴木守…66
（司馬雑感三十六）請西藩と飯野藩……山田嘉久…80
目耕録（その十六、終章）……山本鎭雄…88
漢詩　潮騒錄（七十九）《漢詩の流れ67》……鯨游海…97
関東管領始末記⑯　落日の譜……千坂精一…101
つれづれの源氏物語　第五回　青年時代その三……小田紘一郎…108
―賢木の巻、花散里の巻―
小説　田方農業高校物語（三）……堀内永人…125
殉教（六）……鍋屋次郎…136
千家尊福伝（六）……村上邦治…146
「口紅」解題……山本勉…153
密室銀行（十八）……匠克仁…157
空飛ぶ人喰いイカ……匠克仁…162
編集後記……編集子…171
表紙絵……田寺怜華

致知対談「道徳教育のススメ」への読者感想

三戸岡道夫

人間学を学ぶ月刊誌「致知」（平成二十六年十一月号）で、私は「道徳教育のススメ」と題して、山谷えり子大臣（参議院議員）と対談を行った。そしてその号を友人、知人に贈ったところ、沢山のご返事をいただいたが、その中にはたんなるお礼状でなく、日本人の道徳についての様々な意見、感想などが書かれており、そのまま文箱に納ってしまうのは勿体ないようなものが多かった。それでそのような部分だけを、断片的ではあるが次に紹介させていただくことにした。こうして集めてみると、日本の道徳に多面的に光が当てられ、なる程と思われ、非常に参考になると思われる。

Aさんの場合

今まさに日本の教師だけでなく、日本人全体がぜひ「致知」を読んでほしいという気持になりました。とくに古事記、日本書紀の例まであげて、教育の本質のみならず、道徳教育の本髄にまで突っこんで述べられており、私の常日頃考えていることと同感でした。

「道徳科」を「人間科」にしたらという山谷先生の考えに大賛成です。さすが山谷大臣ですね。私には思いもつきませんでした。

人間学についての本も読んだこともありますが、最近の若者を見ていると、反社会的な行為が目立つ世の中になってしまっているので、急がねばならない施策だと思います。

私も現職中（Aさんは学校の先生をやっていた）、道徳の授業では、偉人伝を多く取り入れて児童たちに聞かせ、涙を流しながら聞いていた児童もいました。

Bさんの場合

年代を問わず、日本人の道徳心がなぜこうも衰退してしまったのか、山谷先生が、GHQが日本人から国家意識をなくそうとして、「道」を求める心を失くす手段として、「道」のつくものを禁じたと言われたのに、大変共鳴いたしました。剣道、柔道、茶道、華道、香道、書道、棋道、さらには、武士道、人道まで含めて、「道」とはすなわち、道義、道徳を指すものと理解しておりましたが、山谷先生のご指摘に更めてその思いを強くした次第です。

しかし、我々を含めて代々の先祖が作り上げてきた「道」そのものが、現代を担う若者達の価値観と相容れないのも事実と思われ、新しい価値感の下に、新しい「道」を拓く後押しをしつつも、彼等の価値感に基づく新しい「道」が、彼等の手で出来上ってくるのを待つしかないのでは、とも思います。

Cさんの場合

道徳教育が最近小学校の教育科目に採用されていますが、やはり大切なのはその親世代、すなわち我々の子供世代をしっかり教育していくことが、もっと大切であると痛感して、今日に至ってまいりました。

余談になりますが、二十年ほど前から私が所属している××研究会（創立百年をこえる）で、今年、「二宮金次郎の一生」という本が図書委員によって購入され、倶楽部会員のもっとも眼にふれる場所に置いてあります。また月刊の「致知」も毎月、雑誌コーナーの正面に置いてあり、私の友人も読んでおります。

当研究会では毎週一回講演会があり、最近では裏千家のトップの千玄室先生が来演されました。九十歳を超えておられますが、さすがに特攻隊の経験もあり、声も若くはつらつとしていて、深く感銘いたしました。

Dさんの場合

今の日本に道徳教育は大切なことだと思います。私も現在、小学一年生から中学三年生までの子供に、週三回、ボランティアで卓球を教えております。始めてから今年で三十年になりますが、その中から見ても、心（気持）の問題が大切かと思います。

親が学力社会に育ったこともあり、勉強さえ出来れば良い学校に行き、良い企業に就職し、豊かになれるという考え方が強く、人間として基本的な「人に迷惑をかけない」、「感謝の気持を持つ」などという心を、忘れていると思います。

また現在の社会は、道徳教育を民主主義の逆とはき違

えて、拒絶反応を示しております。いずれにしても今の日本の教育には、人の心を育てる道徳教育が必要だと思います。

九月に猪苗代湖に行き、土津神社で保科正之公のお墓にお参りしてきました。まさに「ならぬことは、ならぬ」です。その教育が必要です。

Eさんの場合

いま心配されることは、母性が切り離されていること。スマートホンなどで読書量が少くなっていること。

大学受験が楽になり、勉強する生徒が少くなっていること。

私もこれ以上便利になることを望んでおりません。昨日の定例の研究会で、報恩感謝と道徳が研修の中心になりました。

Fさんの場合

道徳は単に学校教育だけの問題でない時期に来ていると思います。

今回のノーベル賞などの喜しい明るいニュースの裏で、成人、男女、青少年の、区別ない暗いニュースを見聞きする時、たんに学校教育における問題だけではないと思います。学校における道徳教育と同時に、世間全体の総合的な施策が大切だと思います。種々複合する中での対応は、極めて難かしいものとは思います。雇用制度の問題にせよ、労働時間のことも、少子化のことも、すべて絡み合って生れている問題ですから、一家団欒など心の通う時間などと、道徳的な心や行動にも、つながってくると思います。

昔から「子供は親の背中を見て育つ」と言われているように、子供は世の中を敏感に見つめて生きています。児童・生徒の「いじめ」や、家庭における学習時間なども、文明の利器であるスマホによって影響され、プラス面よりもマイナス面がクローズアップされています。「人を殺したかった。誰でもよかった」と、前途ある女性を殺害した大学生。その生い立ちや環境はどうだったのか。「人」という字の如く、お互い助けあって生きていく、そのつながりの基盤こそ、道徳生活だと思います。

Gさんの場合

立派な人間が育っていかなければ、日本は淋しい国になってしまいます。

ガキ大将の掃除班長の話は印象的でした。よいところも見出してもらい、どんなに学校がたのしいものになったことでしょう。

最近はよいところをほめることが、少なくなりました。長所を伸ばしてゆくのは、ほめてあげることであり、道徳教育にとっても大事なことだと思いました。

Hさんの場合

気候もおかしい、冷たいドラスチックな世の中になり、地球も人の心も軸がぶれてしまったのではないかと思うほど、最近はスッキリしないことの多い時代ですが、人の道の原点を説かれた対談に感動しております。

私は「致知」を継続的に愛読しており、また、すでに十数人ぐらいの友人に「致知」を紹介し、喜んでいただいております。

「致知」は、人間として未熟な私にとっては、人生道場になっております。もっとも、身につくまでは、なかなかですが……。私のホームページの一つのコーナーで「人生道場」を開き、関連会社や同業者などから、叱咤激励を受けています。「致知」によって、

(人や自然に心の温かい日本人)

(心を正し、努力する日本人)

が、たくさん生れてくることを信じております。

Iさんの場合

いま××市（Iさんの住む町）の小学校では、三年生以上の生徒に、「道徳の教え・二宮金次郎」の勉強を教えております。

市内の二十二の小学校のうち、このうち三校だけが二宮金次郎像が無かったのですが、この十二月で全校に二宮金次郎像が建立されました。

これから先、全校小学生がこの二宮金次郎像の下で報徳を勉強し、道徳心を養ってくれればと願っております。

Jさんの場合

敗戦時の、アメリカの「道徳＝軍国主義」の見方から、わが国の道徳教育が悪とされ続けられました。戦後すでに七十年になるにもかかわらず、古来の神道や仏教から武士道に至るまで、日本の道徳は、学校教育では小さな存在のままです。我々戦後教育を受けた者でも、現在の日本で、痛ましい事件が次々に引き起っているのは、まさに道徳教育の消失にその原因がある、としか思えてなりません。

私には、日本の道徳と、民主主義と資本主義とは、決して対立するものではなく、日本独自の道徳が、行きすぎた民主主義や資本主義を、うまく修正してくれるものと思います。

Kさんの場合

山谷先生の「いま日本の教育問題で一番課題となっているのは、十五歳以上の教育のあり方です。日本の子供たちが高校生なると、突如勉強しなくなる」という御指摘は、私が考えていたこととまったく同じです。

一部の進学校ではスムーズに質の高い授業が進んでいますが、いわゆる教育困難校、とくに普通科の中レベル以下の高校での学習指導は大変です。

現在の高校生の大半は大学進学を希望していますが、それほど努力しなくても入れる大学が沢山あり、また入学して殆んど勉強しない者も多く居ります。山谷先生の言われる「十五歳からの数年間を無為に過して社会に出る若者」が多いのも、実情です。

それに対して専門学校（農、工、商、水産など）では、生徒は就職を十分意識して技能の修得に努めるとともに、学校での挨拶、マナーなどの指導も行き届いています。

「道徳教育も授業で説明するだけでなく、日々のあらゆる活動を通して、一人一人が持っている道徳心をどう伸していくかが重要だ」との指摘も、まったく同感です。

私はこの二年間ほど、ある私立高校の三年生の世界史を担当しました。必修四時間と、演習（大学入試のための学力養成）四時間です。同校は進学校ですので、生徒はまじめで熱心なので、教え甲斐がありました。道徳教育や日常の礼節指導などが身についていることに感心させられました。公立校ではなかなかこのようにはいきませんので、教師がもっと指導する必要があることを痛感しています。

私の娘も公立高校で国語の授業を担当していますが、教師は多忙を極め、授業以外では、（コンピューターに向っていない教師は、無能だと見られがちな風潮がある）

と言っております。生徒の心に行き届く指導など出来にくくなっている、のではないでしょうか。

今後、グローバリゼーションの大浪が更に高まってくる中で、日本人のアイデンティティをどう守るかが最大の課題である今日、道徳こそがその鍵を握っていると思います。

「致知」の巻頭の言葉「日本の未来を明るく」の結びに、「国民力の低下が国家の衰退を来し、人口の減少を招く」とありましたが、至言であり、また歴史の教訓でもあると思っております。

Lさんの場合

今たしかに道徳を求める空気が、世の中に醸成されつつあると思います。昨今新聞を開きますと、児童の虐待

や、いじめの記事が載っていない日はないような気がします。それというのも、何が良いのか、悪いのか、正義とは何なのかという、人生を生きる上での基本的な道徳の教育が、十分でなかったからではないでしょうか。マニュアル通りの教育の欠陥が如実に現われているような気がしてなりません。その点、ガキ大将を改心させた記事は、大変興味深く読ませていただきました。教育はマニュアルに沿ってやるだけでは駄目で、やはり個々の性格に合った教育をしなければなりませんね。

ひるがえって現在の世の中を見ますと、グローバル社会のためでしょうか、競争の悪い面が見えて仕方がありません。弱者切り捨てという大人の社会の負の側面が、子供たちの弱い者いじめに連っているのかもしれません。弱い者は助けるという正義の考え方を徹底するためにも、道徳教育は必要です。

Mさんの場合

「致知」の「道徳教育のススメ」は、教育に携わっている私には、とても胸に染み入る内容でした。

最近のニュースは、事件や不祥事の話題ばかりで、漠然とした不安が心のどこかに残るものです。すると皆、無意識に悪い所やマイナス部分ばかりに目が行ってしまうがちになりますが、ガキ大将の話にも通ずるものがありますが、意識的に良い部分に目を向けることが、いずれは全てにおいての成長や活力につながり、道徳教育の核心はそこにあるのだと、改めて気付かされる思いでした。

Nさんの場合

たまたま先日のテレビのニュースで、道徳教育の具体化について、中教審からの答申に基き、具体化をする旨の報道がありました。そして次の日の新聞にも、同旨の記事が掲載されていました。

思いますに、昔のように国定教科書で号令一下というわけにはいかず、多様な考え方との調整が必要であろうし、とくに進め方の上では、現役の教職員や親世代の多くが、まったくといっていいほど「人の道」について教育を受けていない実状から、道徳教育をすすめるといっても、どう進めていけばいいのか、難かしいところではないかと案じられます。しかし遅ればせながらでも、教育の基本として道徳教育が具体化されることは、実に喜ばしいことです。

そして又、これを機に学校教育だけに任せるのではなくて、家庭や企業や、社会も、一体となって、「人の道」の大切さを再認識し、日頃の生活の中で、あらゆる場面で道徳を心がける生活に戻るチャンスと認識せねばなら

ぬと思います。
私としても残り少い人生ですが、秘が事と受けとめ、昔習った教育勅語の精神や、歴史の中の多くの偉人の教えを再度思い起こし、惰性に流されている己れを振り返り、少しでも改善せねばと思っています。

Oさんの場合

道徳教育の必要性とその効用のほか、現行教育の問題点、さらには今後の教育内容、対象者など、対談内容が多岐にわたって詳述されており、すべて傾聴すべきものと感じました。
とりわけうれしく感じたのは、私もかねがね「…をしてはいけない」という、不作為を求める道徳教育に偏重している現状を改め、「…をすべきである」という作為を指向する道徳教育に力点をおくべきであるとの主張を持っていたところ、対談の中で、
「暗い話ばかり取り上げず…、子供を救った美談とか、明るい話を報道すべきである」
という発言に対し、私の年来の主張にお墨付きがついたように思えたことでした。

Pさんの場合

日本人には今のところ、まだ基本的な倫理観、あるいは道徳観が残っていますが、国によってはそれが無いのが問題です。インド人にはヒンズー教のおかげで倫理観があります。
教師の養成を駅弁大学に任せてはいけません。教則課程を履修すれば教員免許が得られる今の制度は、アメリカで失敗したやり方を、GHQが失敗を承知で、日本弱体化のために、押し付けたものです。憲法のみならず、教員養成制度も作り直す必要があります。
ある国際的経営研究会の機関紙に、「人を見て法を説け」との論文が出現し、また英フィナンシャル・タイムズ紙には「総領の甚六」が出る時代です。日本的道徳観が世界で再発見されてると言えます。

Qさんの場合

小四を頭に三児の母として、興味深く読みました。道徳教育のススメは大賛成です。特に小学校においては、詰め込み教育ではなく、人間形成の場として、いかに正しく生きるかを教える場であってほしいと切に願っています。
子供が言うのには、道徳の教科書は学校へ置き放しであり、授業にも使わないそうです。それ故に、道徳教育にこれほど力を入れ、かつ真剣に考えてくださっていると思います。

方がいると思うと、気持が明かるくなりました。母性の大切さに己れを返り見、肝に銘じなければと思いました。

Rさんの場合

一時に比較すれば、道徳教育への関心は高まってきているように感じますが、学校教育の現場では依然として抵抗があるとのことで、やはりそうかと思うと同時に、残念でなりません。左傾化した時代に教育を受けた人達が教師となっている時代が過ぎないと、その影響を避けるのは難しいと感じます。
宗教とか道徳教育とか、子供の頃に接したものは、一生忘れずに身に付くものと思います。私の中学、高校は浄土系の学校で、とくに仏教の授業はありませんでしたが、校長以下、僧侶の先生が何人も居られ、お釈迦様にかかわる出来事の日である、花祭り、生誕の日、成道会（悟りを開いた日）、涅槃会（死亡した日）などの日には、一堂に会して式典に参加し、校長からお釈迦様に関する講和を聞くという教育を六年間経験しておりますので、自然に神仏を崇める気持があるように感じております。
親や祖先を敬うというのは、自然な感情だと思いますが、時に親殺しなどのニュースを聞くと、やりきれない思いがします。
自然な形で道徳教育を受けられるようになれば、よいと思います。

Sさんの場合

道徳教育は学校での教育もさることながら、まず家庭での教育が大切ではないかと思います。基本は入学前の、親または祖父母による愛情と「しつけ」が、子供の小学校から大人への行動の基本になるのではと考えます。
その意味で、大人への道徳教育と、マスコミによる質の悪い報道（バラエティ等）は、悪い影響を与えていると思います。
また最近の経済の収益偏重主義（株主利益重点主義）も、よくありません。三カ月ごとの決算とか、収益が出なかったり、低下した場合には、役員から排除するなど、日本人の基本的な考え（長期的な、おだやかな、そして社会や従業員などのことを考慮した経営）には、適さないと思います。
いずれにしても、現在の日本の置かれた立場を考えた時、考えなくてはならない一番の問題は、財政再建を真剣に考えることです。
自分達だけが良ければいい、という考え方が世を動かしているのを、直さなくてはならないと思います。

一寸の虫

太田精一

一・御茶壺道中

御茶壺行列が、東海道浜松の宿に入ったのは、日暮れも迫る暮れ六つ頃であった。

宇治を立ってから七日、旧暦六月の蒸暑い日のことである。

ペリーの来航以来、開国か攘夷かで国論が二つに割れ、幕府の権威も衰え、世の中も騒然とし始めていた。

日中は晴れていた。だが、浜松の宿場の西の出入り口、西番所のある成子坂を越え、塩町に差し掛かった時、にわかに夕立雲が、空を覆い、激しい雨が降って来た。

「御茶壺を雨に濡らしてはならぬ。急ぎ杉浦助右衛門本陣に参り、雨具の用意を持参するよう申し伝えよ」

御茶壺道中の旗本大御番衆御朱印持組頭の牧田重兵衛は、従士の中野久三郎に命じた。

「かしこまりました」

久三郎は、ほんの二、三町ほどの距離にある宿泊先杉浦助右衛門の本陣に向けて馬を飛ばした。

重兵衛は、老中堀田正睦から安政四年正月、採茶師の役目を仰せつかった。

同年三月、彼は、同じく採茶師の命を受けた数名の旗本及び茶坊主たちを率いて御茶壺行列を編成、宇治での採茶を終え、江戸に帰着する途上のことであった。

御茶壺道中は、将軍が喫する宇治茶を江戸城に運ぶため編成された宇治採茶使一行の行列である。寛永十年（一六三三）三代将軍家光の時代に始まり毎年連綿と続いている。この行列は、将軍家の権威を表わすため、十万石の大名行列に匹敵するほどの格式を備え、行き交う諸侯も道を譲るほどであった。

御茶壺道中に参加する採茶師は、毎年幕府から任じられる。例年江戸を四月半ば頃出発し、五月上旬の採茶を終え、六月の土用三日前頃には江戸に帰着する慣わしとなっていた。

御茶壺道中の一行は、年によって異なる。この年は、護衛武士として御朱印持組頭と従士三人、御茶壺組頭と采領五人の計十人、それに、御茶衆として御数寄屋頭と茶道二人のお坊主が加わり、計十三人である。その他お荷物持ちの五人が加わり、十七名の一行であった。

御茶壺は、九つある。羽二重でくるみ、その上に綿入れの袱紗で包んだ御茶壺を箱に入れ、その箱を葛で編んだ籠に据えて固定してある。落としても割れないような仕組になっている。なかでも太閤殿下が寅の日にご覧になって中の日にお買い上げになった御茶壺と太郎五郎といわれる大きな御茶壺が、特に大切に取り扱われた。

宇治での将軍家献上茶は、二度にわたって摘まれる新芽が充てられる。それらは初音（はつね）と後昔（あとむかし）と呼ばれ、それぞれ五斤ずつに分けてお茶壺に詰めてある。他に、御茶壺道中一行は、普通のお茶も沢山買い入れて行列は一町ほど続いていた。

重兵衛たち御茶壺道中にかかわる者たちは、挽茶を入れた「御風味」と称する小さな壺を宇治の茶業者から贈呈される。なかにはそれを道中の土産として各宿場の宿泊先の主人、番頭に与え、格別な便宜を図らせる者もいた。

御茶壺道中一行は、浜松宿伝馬町諏訪小路の杉浦助右衛門の用意した厚い渋紙を荷駄にかぶせ、旅籠屋の並ぶ道筋を急ぎ、杉浦本陣に駆けこんだ。

当時の浜松は、城下町であり、宿場町であった。戸数千六百二十戸、人口約六千人である。江戸と京都のほぼ中間点にあり、東海道五十三次のうち熱田、桑名、岡崎、小田原、品川に次ぐ大きな宿場で、旅籠の数が九十八軒、本陣が六軒あった。その中の杉浦助右衛門本陣は、最も古く格式が高い。

杉浦本陣に、旅装を解いた採茶師の一行は、遠州灘で獲れた新鮮な魚介類に舌鼓を打ち、酒宴を大いに楽しんだ。

だが、重兵衛たち護衛の武士たちは江戸に着くまで、気を許すことは出来ない。万一お茶壺が、強奪されたり、盗難事故に遭ったりすれば切腹は免れないからである。部屋に置かれたお茶壺を警戒し、交替で夜通し見守っていた。

ちょうど中野久三郎が、警護に当たった時である。長旅で疲れた久三郎は、夜中に睡魔に襲われ、つい居眠りしてしまった。

すると、昨夜来、飲まず食わずで、天井裏に潜んでいた一人の盗賊が、天井板を外し、そっと将軍家献上の御茶壺に近づいた。葛で編んだ籠の中に入っている箱を取

り出し、袱紗包みを解いて御茶壺の蓋を開けた。そこから将軍への献上の挽茶を一握り取り出し、持参の小袋に入れて持ち去った。久三郎が、目を覚ますと、御茶壺の蓋が何者かに開けられたままとなっている。

蓋の空いている御茶壺は、太閤殿下ゆかりの御茶壺のみである。

久三郎は、口の開けられた御茶壺の中身を改めてみた。挽茶がわずかに減っている。盗られたお茶は、ほんの一握りだけである。

「御茶壺道中への意趣返し、将軍様のお茶を一握り頂戴仕る。詮索無用。風の闇太郎」

口の開いた御茶壺の中には、稚拙な字で書かれた一片の紙切れが残っていた。

(何故このような大それたいたずらをしたのだ。風の闇太郎とは何者だ。このことが発覚すれば責任は免れず、切腹は必定である。夜の明けぬうちに何とかしなければならぬ)

久三郎は、すぐさま牧田重兵衛に被害状況を告げた。幸いにして誰も気付いていない。

重兵衛は、御茶壺の置いてある部屋に駆けつけ、口の空いている御茶壺を見て中味を吟味した。その結果、被害が少なく、大事に至る前に取り繕うことが出来ると判断した。

「誰にも気付かれなかったか。このことは、拙者とそなただけ知り置くこととする。他言は無用じゃ。よいな、久三郎」

二人は、夜の明けぬうちに、早速御茶壺に蓋をし、羽二重で巻き、綿入れの袱紗で包み、箱に戻した。

翌日、御茶壺道中は、何事もなかったように杉浦本陣を出発したのである。

昨夜の雨は、まるで嘘のように上がり、朝靄の中の富士が次第にその雄姿を見せ始めていた。

二、表と裏の家業

話は三年前に遡る。

御茶壺道中が、天竜川を渡り、見付の宿に差し掛かった時、五歳になる女の子が、飛んでいる蝶を追って御茶壺道中の前を横切ろうとした。すると従士の一人が行列から離れ、その子を足蹴にして道から追い落とした。女の子は、もんどりうって転げ落ち、木の根に足を打って大怪我をした。その後右足が不自由となってしまったという事件があった。

その子の名は、とよ。父親の名は、多蔵と言った。

多蔵にとって、とよ、はたった一人の可愛いい娘である。娘を片輪にされた多蔵は、御茶壺道中に恨みを抱くようになった。それから仕返しは出来ないものかとずっと思案を重ねて来た。

多蔵は、見付の宿では、腕のいい大工として知られている。大工の息子に生まれ、親元で修業を積むうちにいい腕になった。だが、一人前の大工に育つと酒と博打に手を出すようになった。金遣いが荒く借金が重なり、その埋め合わせに人の家に忍び込んで盗みを働くようになったのである。度重なる盗みを重ねるうちにそのスリルと高揚感が、忘れられなくなり、とうとう盗みが病みつきになってしまったのだ。

いつしか多蔵は、東海道筋では、名の知れた盗賊となっていた。深夜、風のように現れ、風のように消えることから、『風の闇太郎』と呼ばれ、軽業師のような盗人として知られるようになっていた。表の顔と裏の顔を使い分け、上手に世間を渡っていたのである。

彼は、徒党を組んでの盗賊ではない。悪徳商人や悪代官を狙って盗みを働くいわゆる一人働きの盗賊である。

盗みの手口は、まことに鮮やかで他の盗賊も舌を巻くほどであった。綿密な調べを重ね、錠前を外す方法を事前に探り、忍び込む。また時には、一、二日前に屋敷の中に忍び、じっと耐え、頃合を見計らって金品を盗み、闇にまぎれて立ち去って行った。だが、一度も人を殺したり、女を犯したりしたことはなかった。第一、盗み出すところを人に見られたことがなかったのである。

(本物の盗人というのは、誰にも知られずいつの間にか金品を奪い、足のつかないように気を配ることにある)

多蔵は、そのことを念頭に用心深く、職人がその腕を誇るように盗みの技術を磨いて行った。

本業の大工仕事も続け、評判もよかった。そのため、世間では腕のいい大工の多蔵さんで通っている。

大工の多蔵は、安政四年二月、知人の紹介で島田宿の材木屋の普請を頼まれた。その時の宿泊先の旅籠屋で、川根の茶師中澤忠兵衛と相部屋となった。夕飯を共にし、酒を酌み交わすうちに、二人は親しみが湧き意気投合した。

「わしは、お茶を作って三十年、いまだに宇治の茶には敵わない。その宇治の茶の中でも最高の品とされている将軍家御献上のお茶とは、どんなものか、一度この手に取ってその肌触りや香りに触れ、味も試したいと思っている。わしが宇治で茶師の修業している間に、何とか将軍家献上茶を手に入れようとしたが出来なかった。まして今となっては、かなわぬ夢となってしまったようだ。御風味と称する小さな茶壺の中身を分けてもらい喫したことはあるが、川根の茶とは違っていた。きっと将軍家の喫するお茶は、挽茶、煎茶、玉露いずれも他のお茶とは、香りも味も格段に優れたものに違いない。せめて、挽茶だけでも味わってみたいものだ」

川根の茶師中澤忠兵衛は、多蔵に呂律の回らぬ舌で語った。

「忠兵衛さん、将軍様の飲むお茶をそんなに味わってみ

たいかい。命を懸けてでも手に入れたいとお思いならよろしゅうございます。あっしが引受けやしょう」

「そう安請け合いされても困る。でも、どうやって手に入れるのだね。まさか江戸城に忍び込んで盗って来るのではないだろうね。それとも、御茶壺道中の御茶壺でも狙おうというのかね」

「そのまさかのうちの一つ、御茶壺の中身のほんの一部を頂こうという寸法でさ。全部で九つあるお茶壺のうち一つでもそっくり盗られたら厳しい詮索となる。もし見付かれば、獄門さらし首は間違いない。盗まれた採茶師も切腹をまぬがれないことになり大騒ぎとなる。ところが、御茶壺のお茶の中身がほんの一握りほど盗まれたぐらいであれば、何としても誤魔化せる。役人のことだ。誤魔化してその場を取り繕い、落度を逃れようとするに違いない。詮索はしないことになると思うね。その盗んだ一握りのお茶を忠兵衛さんに進ぜようという寸法さ」

「そんな芸当が、あんたに出来るのかね。見るからに律儀そうな多蔵さんが、そんな大それたことが出来るなんてとても思えないがね」

「こう見えてもあっしは、少しは名の知れた大工だ。自慢じゃあないが、家普請のことにかけては、この遠州では誰よりも詳しい。その上身も軽い。まあ見ていておくんなさい。実は、忠兵衛さんの話を聞いて、ふと娘の仕返しをしたくなったのでさ」

三、茶師との約束

大工の多蔵は、娘のとよが、御茶壺道中の従士から受けた被害について語った。その顔は、恨みを募らせ耐えてきた『風の闇太郎』の顔になっていた。

「ちょうど三年ほど前、あっしは、天竜川に沿った豊岡村の野部というところで、請負仕事があったので、そっちに出掛けていて、娘が御茶壺道中の行列から酷い仕打ちを受けたことを知りやせんでした。可哀そうな話じゃありやせんか。御行列の十間ほど前を横切ったと言うだけで、足蹴にされ大怪我を負わされたのですぜ。たった五つの子だ。何もわかりゃしません。これから嫁に行く年頃になると思うと不憫でたまらず何とか恨みを晴らしたいと思っていやした。ですが何といっても将軍様の御茶壺道中での出来事、そう簡単には手を出せません。忠兵衛さんの話を聞いて、ふと献上茶を一握り盗み出し、鼻をあかせてやりたいと思ったのです。『一寸の虫にも五分の魂』というじゃあ、ありやせんか。金にはなりませんが、この見付の多蔵、お上の権威とやらに傷をつけることによって、沿道の人たちを苦しめる御茶壺道中のような馬鹿げた行列を痛い目に合わせたい。いくら将軍様の飲むお茶だといっても、人間の命には代えられません。そのことを少しでも分かってもらえばと思っていやす。そんなわけで、単に忠兵衛さんへ将軍家御献上のお茶を進呈したいというだけではありやせん。あっし自身の仇討でもあるのです。ただ、万一あっしが捕まった場合、Iが裂けてもあなたの名を出すつもりはありやせんが、何かの拍子にあなたとの関わりが知れた場合、類が及ぶかもしれませんので、その点は、ご覚悟下さい」

「分かり申した。わしも茶師としての誇りにかけて、最高のお茶を作ってみたいという思いでいっぱいだ。そのためには、たとえ命を落とそうとも悔いはない。どうか存分にお働きなされ。吉報を待っていますよ。そして、この手に将軍家献上のお茶を握らせて下され」

多蔵の決心が並々ならぬものであると感じた忠兵衛は、その娘を思う親心の強さと命懸けの決意に胸を打たれ、感動で身を震わせながら万一の時の覚悟を決めた。

当時、御茶壺道中は、庶民の顰蹙を買っていた。各宿場では、多数の人足・伝馬を徴発したので、農繁期に当る沿道の住民には、非常に迷惑となっていたのである。「茶壺に追われてどっぴんしゃん」と子供の唄にも唄われるほど、かかわりを恐れ、敬遠されていたのだ。

「ところで多蔵さん。あんたは、大工の腕は達者で、身も軽いことは分かった。だが、盗みを働くのは、容易なことではない。まして警護の固い将軍家のお茶壺道中を襲うのだ。どうやって献上茶を盗み出すのだね」

「それはちょっと秘密にしておきやしょう。まあ『細工は流々仕上げをごろうじろ』といったところです。もし、捕まって獄門首にでもなったら、線香の一本も上げておくんなさい。今日話したことは、一切口外しないと約束してくださるね。首尾よく献上茶を手に入れたら、どこで受け渡しをするか決めておきやしょう」

忠兵衛は、多蔵の自信ありげな口振りとその鋭い目付きから、多蔵は、盗賊『風の闇太郎』であることに薄々感づいていた。

「そうさな。掛川辺りがいいかな。御茶壺道中が掛川を過ぎた二日後、六月十五日、掛川の濱田屋という旅籠で暮れ六つ半に会いましょう」

「よし分かった。それじゃ忠兵衛さん。首尾よく行くよう祈っていてくだせいよ」

二人は、日と日でお互いの再会を誓い合い、島田の宿を後にした。

多蔵は、厳重な警戒の中の大仕事であることから、今度こそ捕まるかもしれないとの一抹の不安が頭をよぎった。そんな中で、この大仕事を最後に、足を洗おうとする思いも多蔵の心に芽生え始めていたのである。

御茶壺道中に一泡吹かすことが出来た。

多蔵は、盗んだ一握りの挽茶を箱根細工の小箱に入れて家に持ち帰った。

女房のたねと娘のとよに一つまみ取り出し茶碗にいれ、鉄瓶の湯を注いだ。

「お前さん。このお茶はどうしたのだい。挽茶なんか飲むのは、生まれて初めてだよ」

「そうだな。家では茶といったら番茶で、煎茶も滅多に飲んだことがないからな。まあ、一生に一度将軍様の飲むようなお茶を飲んでも罰があたらねえと思って、浜松まで出掛けて買って来たのよ。とよが三年前の怪我から立ち直って、やっと杖を突いて歩けるようになってから二年になる。御茶壺道中への恨みは消えるわけではないが、せめて将軍様と同じものを飲むことによって、とよの恨みを和らげることが出来れば、と思ったのだ」

多蔵は、これは俺が命懸けで、御茶壺道中からせしめて来たものだと言いたかった。

「この茶は、俺が懸命に働いた金で買って来たものだ。浜松の茶屋は、これを飲むとお前の足も良くなると言っていたので、十匁買って来た。薬だと思って飲んでごらん。番茶とは違う味がするだろう」

多蔵の家では、茶は貴重品である。特別な祝い事とか、客が来た時以外は、たまに番茶を飲む程度であった。そのため、茶の良し悪しなど判断はつかない。

「苦い。まるで薬のようだね。でも、いい匂いがする。あ、それから舌の先が甘くなってきたみたい」

多蔵は、その言葉を聞いただけで、これまでの恨みが、多少なりとも和らいだような気がした。

これまで、悪徳商人や悪代官を狙って盗みを働いて来たため、罪悪感もそれほど湧かず「ざまあみろ」と思って留飲を下げて来た。ところが、悪銭身につかずとは良く言ったもので、盗んだ金は、博打と酒に使ってしまっていた。

（このまま盗みを続ければ、いずれお縄になるに決まっている。そうなれば女房とこの不憫な娘も路頭に迷ってしまい、世間から白い目で見られながら一生暮らさなければならない。また、体も四十の坂を越え、衰えを感じ動きが鈍くなって来た。このあたりで盗人稼業からは足を洗い、本業の大工に精を出すことにしよう）

多蔵は、そう決心して、二日後に忠兵衛との約束を果たすべく掛川の濱田屋に出掛けた。

四．喜びの再会

すでに忠兵衛は、濱田屋に到着し、多蔵を待っていた。

「多蔵さん。こうして約束の刻限に無事戻って来なさるところを見ると、どうやら首尾よく行ったようだね。それにしても御茶壺道中は、すでに大井川を越え、駿府に向かっている。おかしな噂は、少しも立たず、何事もなかったようだが、将軍家への献上のお茶は手に入れなすったかね」

「確かに手に入れ、ここに持って来やした。ただ、これが御茶壺のお茶であるという証拠はどこにもない。忠兵衛さんのその眼と鼻と舌でお確かめ下さい」

「分かり申した。多蔵さんは、将軍家献上のお茶であるかどうか、この茶師のわしの五感で確かめてみなさいと言うわけですな。ただ、わしも宇治の茶は、喫したことがあるが将軍家献上の茶畑から摘んで、将軍に供するよう手を加えたお茶を喫したことはない。味わってみましょう」

茶師の忠兵衛は、多蔵の持参した小箱の中のお茶を取り出した。一匙のお茶をすくいまず香を嗅ぎ、抹茶茶碗に移し、鉄瓶のお湯を注いで、茶筅でかき混ぜた。それから茶碗を手に取り、お茶を口に含んで舌で転がし、喉に流し込んだ。

忠兵衛は、得心したようにうなずいた。それから静かに茶碗を傾け、口に付け、中のお茶を愛おしむように喫した。

すべて喫した後、忠兵衛は、茶碗を置いておもむろに言葉を発した。

「香といい、味わいといいそれがしがこれまで喫したお茶とは、明らかに異なっている。まろやかで、苦みが抑えられ、後から甘味が口の中に広がって来る。素晴らしいお茶だ。さすが将軍に献上するだけのお茶である。感服いたした。どのようにしてこの挽茶を手に入れたか。恐らく命懸けの働きによるものに違いない。お陰様で念願の献上茶そのものを手に入れ、喫することが出来申した。茶師冥利に尽きる。この残りの挽茶を川根に持ち帰り、川根茶の質を高めることに役立てたい。ついては、多蔵さんにお礼を差し上げなければならないが、いかほどお支払すればよいかな」

「いいえ、お代は受け取る訳には参りません。もはやお察しのことと思うが、元は掛かっちゃおりやせん。お陰様でお茶壺道中の横暴さに一泡吹かすことが出来やした。独りよがりではありますが、三年来の胸のつかえが下りた気がいたしやす。これからは、大工仕事に打ち込んで、百年でも二百年でも残る立派な普請をしたいと思いやす。もう会うこともないでしょうが、この界隈であっしの残した建物をご覧になったなら、いい仕事が出来ているかどうか確かめてみておくんなさい。自分が納得のいかない仕事は一切しないつもりでございやす。では、女房も子供も待っておりやすんで、これにて失礼いたしやす」

多蔵は、大仕事をやってのけた充足感で満たされていた。

久しぶりの快晴である。富士山が、東方の空に屹立している。その姿が、多蔵には、新しい人生の門出を祝福するかのように見えるのであった。

（完）

国宝・別所安楽寺の八角三重塔

新井宏

十月中旬の連休、日本計量史学会での講演のため上田市郊外の別所温泉を訪れた。松茸の名所とかで、観光客で混み合っていたが、私の目当ては、安楽寺の国宝八角三重塔である。なにしろ、この禅宗様（唐様）の八角三重塔は、私にとって永年の「あこがれの塔」なのである。

学生の頃、古寺巡礼に凝っていた。和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物詩』を片手に、学割で夜行列車に乗り、奈良や京都に向かっては、寺院を見て回っていた。観光バスも利用したが、お金が無くなると、コッペパンを噛りながら歩くしかなかった。そのおかげで、奈良・平安期の建築様式にも多少通じるようになり、我が生涯のテーマ「建築尺度研究」にのめり込むきっかけを作ってくれた。

いま、手元には訪問した各寺院で入手した「古いパンフレット」がたくさん残っている。ひとつひとつ思い出が込められているし、もう世の中に残っていないものもあると思うと捨てがたい。

その他にも、国宝等の建造物や彫刻の古びた「写真集」が結構ある。その中には、分不相応に講談社版の『日本の美術大系』もある。全十一巻で定価を見ると二万二千円とある。昭和三十四年の発刊であるから、大学三年生の頃に買ったことになるが、よくお金を工面できたものである。

その第一巻が「建築」である。国宝が七十一件、重要文化財が二十五件、未指定の建造物も十件以上載っている。未指定の建造物には、伊勢神宮、金閣寺、桂離宮、修学院離宮や京都御所などがある。新らたに再建した場合は対象外らしいが、桂離宮や修学院離宮が重要文化財にも入っていないのに驚く。

ところで、現在、国宝に指定されている建造物は百二十四カ所、二百十六件ある。その内、畿内に六十九カ所、百四十一件あるので、『日本の美術大系』に載るような有名建造物は、今までにほとんど見ている。ところが、『日本の美術大系』には安楽寺の八角三重塔は載っていないのである。

安楽寺の八角三重塔の写真を初めて見たのは、社会思想研究会出版部刊、〈国宝シリーズ2〉伊藤延男著『日本の建築』である。昭和三十四年刊、葉書サイズ百五十三頁の小冊子で定価は百二十円、本の背中はもうぼろぼろになっている。

載っている八十二件の国宝は、ほとんど『日本の美術大系』に見ることができるが、頁をめくって行くと、突然、場違いともいうべき安楽寺の八角三重塔が現れる。

それまでに見て回った、重厚な法隆寺五重塔、凛れる音楽と称される薬師寺三重塔、雄大な興福寺五重塔、可憐な室生寺五重塔などの端正な姿とは全く異なる。そもそも背景の山の斜面には、雑木や雑草が生い茂っていて、国宝建造物の在るところというより、荒れ果てた山寺の雰囲気である。

建築様式は、室町時代初期の禅宗様とあり、高さは十八・八メートル、初層に大きな裳階が付いているので、まるで四重塔である。柿葺（こけらぶき）の八角屋根は軒先を大きく反らせて華やかなのだけれど、垂木が細く、十六・一メートルの室生寺五重塔よりも、むしろ華奢に見える。山間にひっそり佇む姿は、その後の禅宗文化の「侘び・寂び」を先取りしているかのようである。初めて見た時は、「山村の塔」が、なぜ国宝なのかと思ったほどであった。

禅宗様のことを、かつては唐様と云っていた。唐様とは、和様に対する用語であるが、唐の様式と思うと大間違いである。そもそも和様というのが誤解のもとなのである。和様とは、飛鳥、白鳳、天平様式の影響下にあるそれまでの建築様式のことであり、それこそ「唐の様式」が中心である。それが鎌倉時代になって、新しく宋の建築様式が入ってくると、それらを天竺様とか唐様と云ったために、「昔からの様式」を「和様」といったのである。

当然のことながら、学術用語としては天竺様も唐様も不適切なので、今では大仏様とか禅宗様という。

天竺は本来インドを意味するが、実際には中国南部の福建省あたりのようで、木材の乏しい中国で「最小限の材料」で大建築を可能にするために発達した様式だという。

治承四年（一一八〇）、平重衡の「南都焼討」によって焼失した大仏殿を重源が建久元年（一一九〇）に再建する頃には、日本でも巨木の入手が困難になっていた。そのため、宋代の建築様式を最も早く導入したのが大仏様で、その後も大建築に主として用いられている。

その一方で栄西や道元らは、宋の中央部の寺院建築様式、すなわち禅宗様を導入した。列柱の間に、貫を通し

て相互間を固定するので、細い柱でも安定した強度を保てる。良く知られている建物には鎌倉円覚寺の舎利殿がある。

禅宗も仏教であるから、円覚寺のように佛舎利を納める舎利殿がある。しかし、禅宗寺院に舎利塔は珍しく、あったとしても旧来の「和様」の建築がほとんどで、禅宗様の塔はここだけである。第一、日本には、この塔以外に八角塔は存在しない。

とにかく、初めて写真を見た時の印象は奇妙で強烈であった。言うなれば、室生寺の五重塔を山間に咲く清楚で華麗な美人とするならば、質素ながら華やかさのある八角三重塔は、青春の想いを引きつける佳人であった。

いつか、その佳人に会いたいと想いながら、もう五十五年も過ぎてしまった。

別所温泉にあるということ以外に下調べもせずに出かけてきたが、昔の写真で見ると、荒れた山の斜面にあるので、結構山奥にあり、歩くと一時間ほどはかかるだろうと思っていた。しかし、案内板を見ると意外に近そうである。近くには北向観音や常楽寺もあると言う。

まずは、北向観音に向かう。道すがら、別所生活改善委員会の掲示板の訃報に、告別式を安楽寺で行うとある。今も地域に密着した寺院なのであろう。

道路沿いの左側の渓流にかかる橋を渡ると「ほら貝」の音が聞こえる。朝から何かの勤行かと近づくと、石工が電動工具で北向観音堂の石段を一生懸命に削っている音であった。

北向観音という名称は堂が北向きに建つことに由来する。「北斗七星が世界のより所となるように」という観音の誓願によるとあるが、それよりも、南向の長野善光寺が来世の利益、別所の北向観音が現世の利益をもたらし、善光寺のみの参拝では「片参り」になるとの説明に説得力がある。実にうまい宣伝を考えたものだ。

境内には、崖地に建つ医王尊瑠璃殿がある。その様式を懸造りと言うが、大規模のものに「清水の舞台」がある。鳥取県三朝山中の三仏寺奥院、国宝の「投入堂」を思わせる造りであるが、山国の日本には、百近くの例がある。

また、川口松太郎の「愛染かつら」で有名な樹齢三百年ほどの柱の木も境内にあり、「縁結びの霊木」として親しまれていると云う。だから別所温泉では安楽寺よりも北向観音の方が有名なようだ。

北向観音の境内を一回りして元の道に戻ると、その交差点のすぐ前に、安楽寺の黒門がある。崇福山という扁額が掲げられている。参道の右側には蓮池があり、坂道を登って行くと、瀟洒な山門に出る。韓国で古寺を訪れた時に見かけた一柱門に似る。そう言えば、韓国の仏教

の多くは禅宗系である。

山門の脇に、思いがけない掲示文を発見した。「年輪年代法」という年代測定法があるが、それを日本で初めて開発した光谷拓実氏が、翌十二日に講演会を当地で開くとの案内である。私も年代測定法では、色々と発言をしているので、年輪年代法や光谷拓実氏を良く知っている。

こんな山中の町まで、考古学ブームが及んでいるのかと思って驚いたが、調べて見ると、八角三重塔の木材の伐採年代が年輪年代法によって、西暦一二八九年と判明したとのことである。

安楽寺は当地の守護として信州一円に威を張った塩田北条氏の庇護によって栄えた寺なので、設立年代は、鎌倉末期以外に考え難かったはずなのに、なぜか室町初期の建築と考えられていた。質素な佇まいが影響したのであろうか。

もし設立年代が一二九〇年代となると、禅宗様の建築では、仏堂、仏門、仏塔を含めて、最も古い建築となる。従来は、鎌倉円覚寺舎利殿とされていたが、鎌倉市西御門にあった尼寺太平寺(廃寺)の仏殿を移築したものと分かり、今では南北朝時代のものと推定されている。その上、北条時宗(一二八四年)の創立と伝えられていた東京都東村山の正福寺地蔵堂も、実際には室町時代の一四一七年創建と分かり、安楽寺八角三重塔よりもずっと新しくなった。鎌倉末期の山口県功山寺仏殿(一三二二年)や和歌山県善福院釈迦堂(一三二七年)なども、安楽寺の塔より新しくなる。

そもそも安楽寺は、『大覚禅師語録』(建長寺開山蘭渓道隆の遺著)によれば、「建長(鎌倉の建長寺)と塩田(安楽寺)とは各々一刹により、或は百余衆、或は五十衆、皆これ聚頭して仏法を学び、道を学ばんことを要す」とあり、鎌倉時代中期、すでに相当の規模をもった禅寺で、信州の中心道場であった。庇護者は北条義政から三代続く塩田北条氏である。

北条義政は、文永の役(一二七四年)の渦中、連署として執権北条時宗を補佐し、文永の役の直後には、蒙古襲来に対する防塁を築くばかりでなく、高麗に遠征して元の拠点を制圧する計画さえ作成している。

その頃、幕府は意外に強気であった。倭寇で勝手知った高麗の造船基地を叩くのは、専守防衛よりも理にかなっている。もっとも、文永の役では恩賞の財源が出なかったために、御家人達を納得させる口実としての計画であったかも知れない。

しかし義政は、建治三年(一二七七)に突如出家して、信濃塩田庄に引き籠ってしまう。国難の折から、政治的な対立があったのかも知れないが、塩田北条家二代目の国時も、三代目の俊時も、元弘三年(一三三三)の鎌倉幕府の滅亡に際して、鎌倉へ馳せ参じ討死している。したがって、八角三重塔が室町時代の建築とは考え難いので

や毛越寺、円覚寺舎利殿などのキイワードに出会うと、熱弁が止まらなかった。おそらく、私が安楽寺の八角三重塔の写真に惹かれたのも、国木田独歩の『武蔵野』の雰囲気を残す正福寺地蔵堂や深大寺の白鳳仏「釈迦如来像」を見て回っていたからであろう。

山門を過ぎて、緩い坂を進むと本堂と庫裡がある。寄棟造りで大屋根を乗せ、安楽禅寺の額を掲げる本堂も風格があるが、新築と思われる庫裡は、絵に描いたような禅寺建築である。

本堂の前を左に回ると、石段の坂道が現れ、全高十八・八メートルの塔が見え始める。登り口には窪田空穂の歌碑がある。

老いの眼に　観る日のありぬ
別所なる　唐風八角三重塔

空穂の八十歳過ぎてからの作であるが、私も眼の衰えを感じるこの頃だけに、「観る日のありぬ」に、強い印象を受けて、歌碑の元にしばし佇む。

モノクロ写真で知る「侘しい塔」は、屋根軒裏の放射状になった二段の扇垂木がうっすらと赤身を帯びて、意外に華やかである。檜皮葺の屋根の下は、柱の上だけでなく柱間にも組物を密に配し、柱の根元にはソロバン状の礎盤を置き、頭貫の端に木鼻を施す点など、細部に至るまで忠実に禅宗様で造られている。

ある。

それにしても、宋の建築様式が、信州の片田舎に伝えられたのはなぜだろうか。

安楽寺の開祖、樵谷惟仙は建長寺を開いた蘭渓道隆と同船で帰国した入宋僧、二代目の幼牛恵仁は宋からの来朝僧であるが、信州にやって来たのは、おそらく北条義政の出家の時であろう。その頃には既に鎌倉では禅宗様の寺院が作られていたが、禅宗様が盛行したのは、おそらく南宋の滅亡した一二七九年以降に違いない。

それは、唐の文化が滔々として入ってきた白鳳期にあっても、法隆寺、法起寺、法輪寺など「飛鳥様式」の氏寺が数多く造られたことに似ているだろう。百済の滅亡によって多数の建築技術者がやって来て、唐様式よりも古風な朝鮮様式の建物を造ったように、南宋を逃れてきた建築家も多数いたはずである。やはり僧侶だけでは建造物は作れない。

ついでながら、正福寺地蔵堂のことも述べて置きたい。私が高校生の頃には、東京にある唯一の国宝建造物であり（後に迎賓館赤坂離宮も国宝となる）、日本史の山田先生から教えられて見に行ったことがある。日本大学の大学院生であった山田先生は、授業で、法隆寺の救世観音、百済観音、東大寺の三月堂や不空羂索観音、中尊寺

勉強のため、細部の写真をたくさん撮ったが、塔の全体像もいろいろの角度から撮りたい。坂を登って、上空からの写真を撮ろうと思ったが、周りの墓地の保護のためか、舎利塔を上から撮影するのは礼を失すると掲示があるのでやめた。背骨を圧迫骨折した後遺症もあるので、坂を登らなかったのは正解だったかも知れない。

写真集で見た時は、雑草と雑木で寂しかった背後の斜面が、今では大きく育った樹木の緑で覆われて、淡い朱色の木組みが映える。やはり日本最古の禅宗様の国宝建造物だけのことはある。

安楽寺八角三重塔に学生の頃から注目していたことで、先見の明があったような気分になり心が弾む。ずっと心に止めていたことが、報われた気持ちで誇らしい。

塔は、清楚な美しさから、修復後は、かなり化粧しているとは言え、ますます美しく、青年時代の恋人を偲ばせる。

やっと会えた

帰路には、常楽寺や別所神社にも立寄って行こうと、山際の道を採ると、伝芳堂という小堂に出る。中には、開祖の樵谷惟仙と二代目の幼牛恵仁の像があり、そばには島木赤彦の歌碑が立っている。

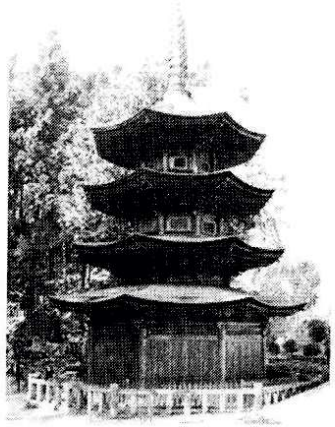
山かげに　松の花粉ぞ　こぼれける
ここに古りにし　み佛の像ある

み佛の像とは、開祖と二代目の木彫のことであるが、堂内が暗くてよく見えない。窪田空穂と云い、島木赤彦と云い、長野県出身の歌人は多いようだ。一茶、窘良、藤村からの伝統であろうか。

別所神社から見下ろす別所温泉の町並みはくすんだ秋の色に覆われていた。小学生の頃、鮮やかな紅葉よりも、少しくすんだ秋の広葉の緑黄朱色を画用紙に描いて見たかった。それが今では、デジカメで簡単にできる。

別所温泉から、娘や孫たちが住む安曇野までは、直線距離なら四十キロメートルほどであるが、上田から新幹線で長野に出て、松本に戻り、大糸線に乗ると二時間以上かかるであろう。

今夜は、安曇野で祝杯をあげよう。



キャンペーンソング「過疎」

古屋富雄

私の作った歌の中に「過疎」というものがあります。今から40年ほど前に大学の学園祭に所属していたサークルから依頼されて作った次第です。サークルが取り組んだテーマは、「山地（やまち）酪農」でした。

従来、牛は牛舎飼いや牧草地での放牧が一般的な飼育方法でした。そして、国土の70％を山林が占める日本では、平野部での酪農は物理的に無理と考えられていました。

一方、1960年頃に植物生態学者、猶原恭爾（なおはら　きょうじ）博士は、山林で牛を飼う手法を提唱されました。それが「山地酪農」です。当時の山林は、輸入木材の台頭や厳しい就労条件などの問題で荒廃化が進行し始めていました。（1964年木材輸入の全面自由化）

このような中、先生は「急峻な山地でも日本芝や葉草など、その土地に自生している草を植えることにより、餌場としても優れた安定な草地を作り出すことが出来る。さらに、その草が台風や大雨に際しても土砂流亡を防ぎ、良好な環境を取り戻すことも出来る。」と「山地酪農」の可能性を広く説かれていました。まさに、70％の山林を逆手に取った発想です。

サークルのメンバー達は、いち早く「山地酪農」を実践している熊本県小国町へ訪れることになりました。メンバーが作成したビデオの中で40年経った今でも印象に残っている映像と言葉があります。それは、山林で牛を飼い始めた家族のインタビューの中で、おばあさんが「今まで、畑の雑草として厄介者の葉草を牛の餌として、山に植えるとは夢にも思わなかった。」と話す姿です。

また、サークルでは、小国町の離農者の増加による「過疎化」にも注目をし、未来志向の「山地酪農」をテーマとしつつ、現実問題として存在する「過疎化」を、

文化祭を通して知らしめたい。そして、その効果を醸し出すテーマ曲の依頼が私にされました。

あれから40年、「山地酪農」は、残念ながら全国的な広がりには至らず、自然と調和する酪農法として、岩手県岩泉町などで引き継がれています。

しかし、現在、再び、脚光を浴びる可能性が出てきています。

それは、近年、繁殖牛の子牛が1頭、60万円強の相場で推移しており、牛の平均的な肥育期間（約20ヵ月）を考慮すると、子牛の肥育期間（8～10ヵ月）の方が遥かにその利益率は高く、魅力的な経営と考えます。

そして、更なる経費削減を図るため、その飼育を増加する「耕作放棄地」に求めました。「耕作放棄地」での飼育は、そこに自生する草木が餌になるため餌代は、一般飼育の1／3に抑えることが出来、さらに自然の中で育てるためストレスが無く、丈夫な子牛を育てることも出来ます。加えて、「耕作放棄地解消」にも役立つなど、新たな農業・農村のビジネスモデルとして注目されています。

この「耕作放棄地」での成功事例が広まることにより、同じ様な手法を持つ「山地酪農」に、いずれシフトすることは、自然の流れではないでしょうか。

このような光明を見出すことが出来ずに過疎化が進んでしまった集落や市町村が見受けられ、近年「限界集落」や「消滅市町村」という造語を耳にするようになりました。

「限界集落」とは、社会学者の大野明氏（高知大学教授）が1990年頃に提唱したとされています。過疎化や高齢化などが進む中、経済的、社会的な共同生活が、その集落単位ではできなくなる恐れがある集落を指しています。

また、2006年の総務省の調査によると、過疎地域などの62，271集落のうち、10年以内に消滅する可能性のある集落が422、10年以降に消滅する可能性のある集落は、2，219と予測され、「消滅市町村」と称されています。

急速な地方（農山漁村）の衰退が進む現実が存在しています。

このような状況を踏まえ、安倍晋三首相は、地方の人口減少や地方経済などの課題に国を挙げて取り組むため、2014年9月3日に行った、内閣改造で「地方創生」の担当大臣に石破茂衆議院議員を任命し、そして、首相みずから本部長とする「まち、ひと、しごと創生本部」を立上げています。

しかし、真の地方創生は、農山漁村の振興が図られて、初めてなし得るものと考えます。

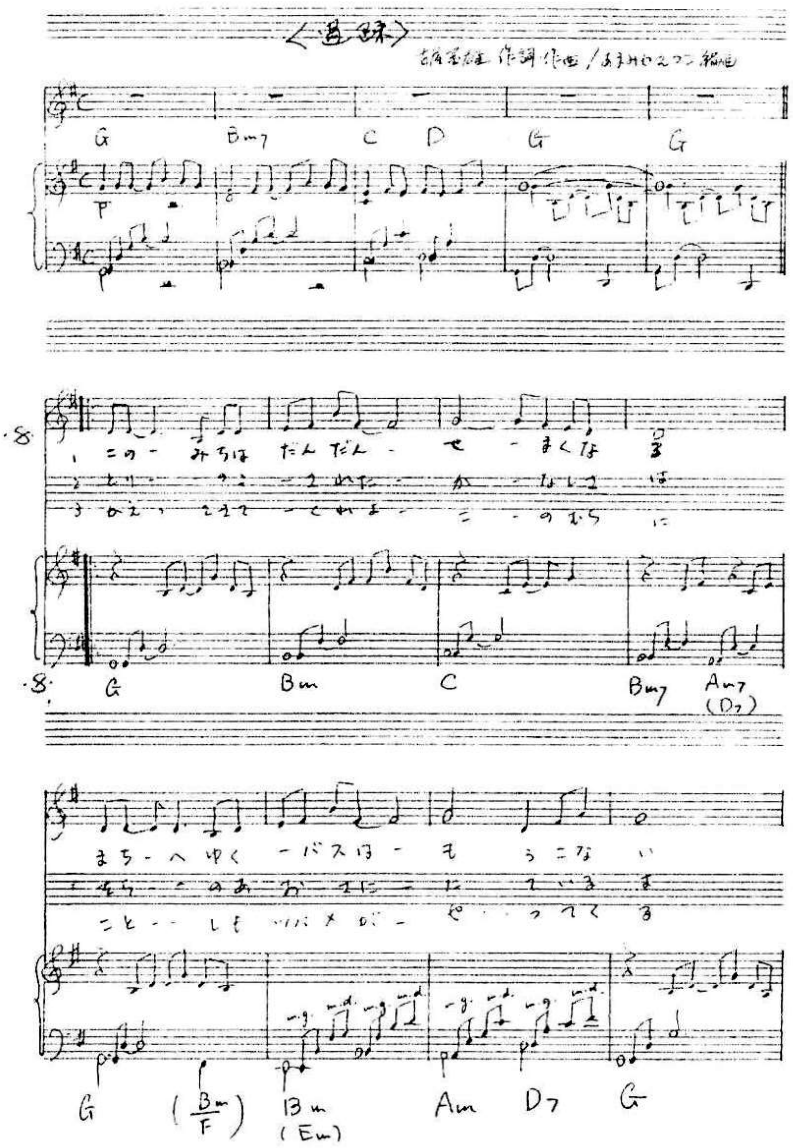
そのため、第一次産業である農林水産業を主管する農林水産省には、ハード・ソフト面での多様な支援事業を

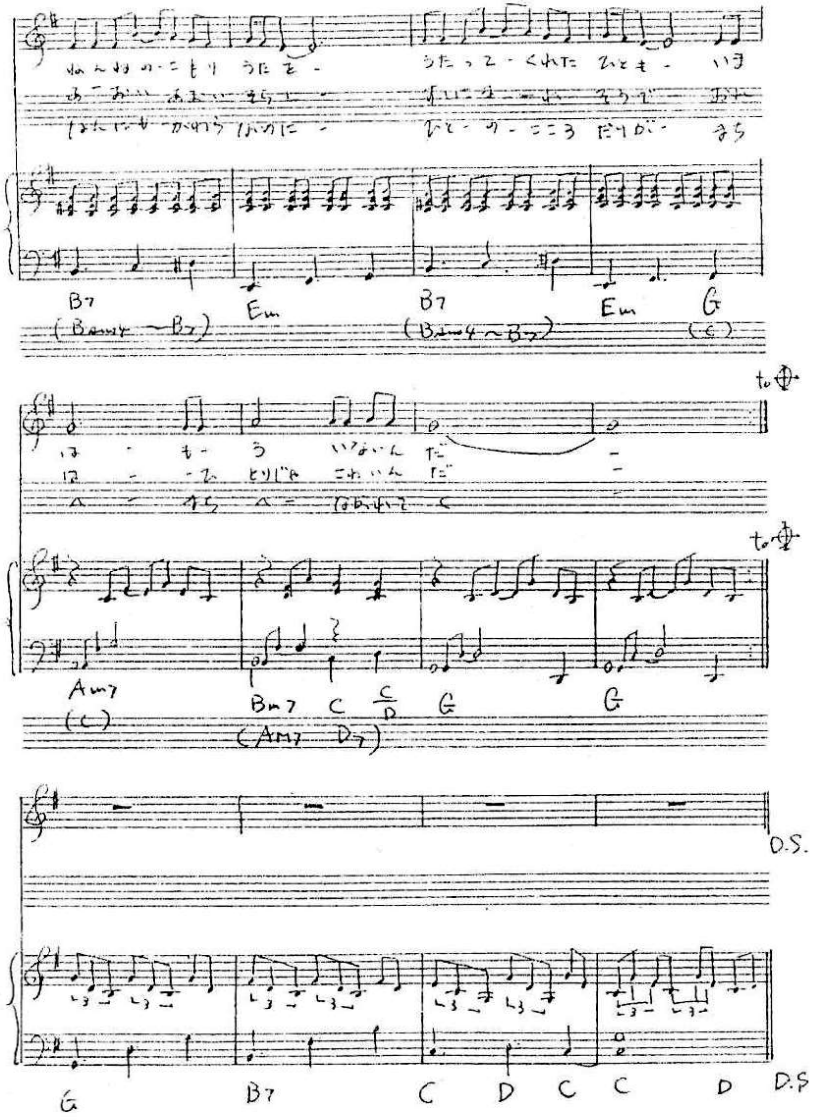
起こす必要があると考えます。

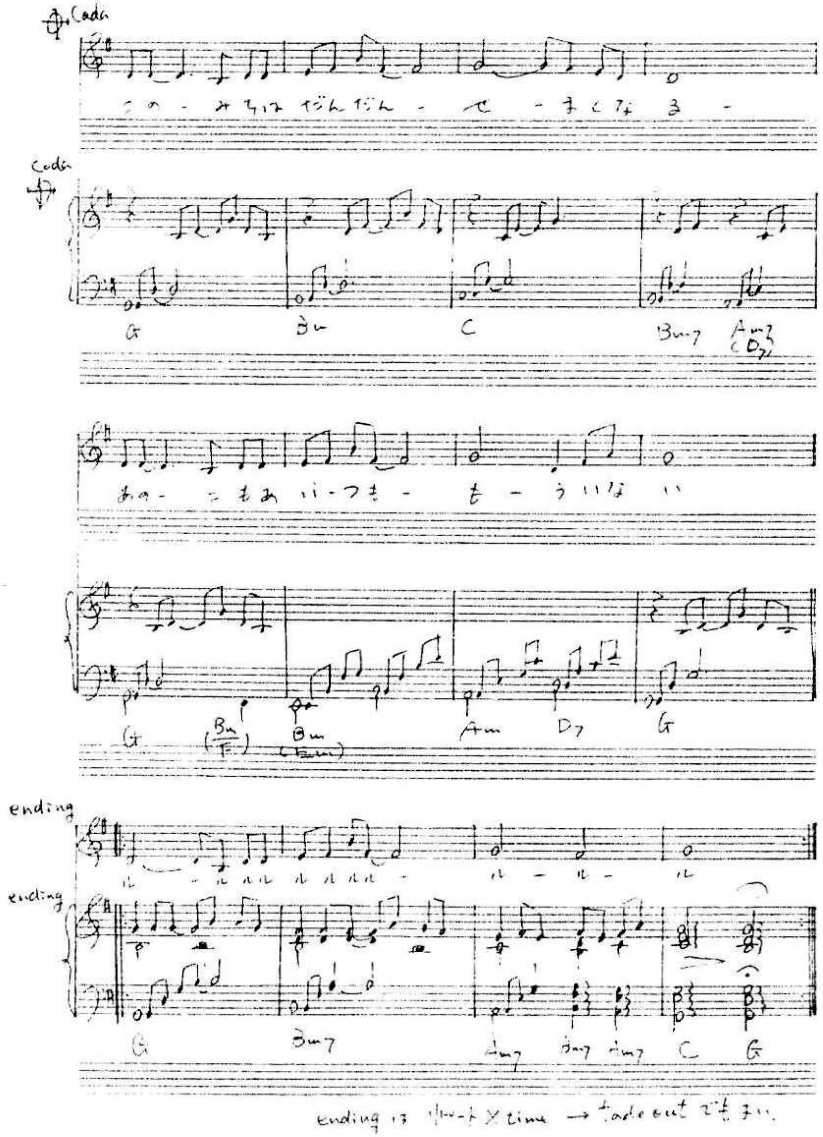
先般、農林水産省にその一つとして、限界集落や消滅集落防止の警鐘を鳴らすキャンペーン事業の実施を提案しました。

さらに、この事業を盛り上げるため、そのキャンペーンソングとして、「過疎」をリメイクしました。

この歌が、40年の時を経て、地方創生や農山漁村の振興に役立つことを願いつつ。







ending は 小ヘ-ト X time → fade out でもよい.

過疎

この道はだんだん狭くなる
町へ行くバスはもう来ない
ねんねの子守唄を歌ってくれた人も
今は　もういないんだ

取り残された悲しさは
空の青さに似ているよ
青い　青い空に吸い込まれそうで
俺は一人じゃ　怖いんだ

帰ってきてくれよこの村に
今年もツバメがやってくる
何にも変わらないのに人の心だけが
町へ　町へ流れてく

この道はだんだん狭くなる
あの娘もあいつも　もういない



私説　余一物語

横山正義

まえがき

私の住む、静岡県菊川市内田に鎌倉時代、内田三郎致茂と称する地頭が、住んでいました。致茂は藤原南家の工藤伊豆の武士団と関係あることは確かです。工藤祐経の子、祐時の子すなわち、祐経の孫という文献がありますが、祐という通し字がない、年齢的に無理があり不自然です。また、代か三代内田で代を重ねているなどの諸説があります。しかし詳細は不明です。

致茂は承久の乱で、尼将軍の弟・東海道総大将北条時房より十九万騎の先陣を切る、使命を受け、駿河次郎三浦義村より暖かいご助言を頂いています。他の武士からすれば垂涎の名誉です。

平家物語で熊谷直実が宇治川の先陣、一の谷戦いなどで、あれだけ先陣を切るのにこだわったのか、褒章がおおきいからです

私は門外漢なので、くわしいことは解からないが、この致茂は「余一」という人間ではないかという、仮説を立てて物語をつくりました。

これは承久記、慈光寺本では承久の乱に参戦者の順位が伊豆の国、伊藤祐時（工藤祐経の子）、宇佐美左衛門尉、余一とあり、承久記、古活字本では伊藤祐時、宇佐美左衛門、内田五郎と続くからです。

一、曽我物語　建久四年（一一九三）

＊五月二十二日

鎌倉殿（源頼朝）が梶原景時に富士野でまき狩りを施行したい、と命令を出したという情報を得た、曽我五郎は兄十郎に相談しました。

兄十郎は「今度こそ仇討ちのチャンスだ。曽我からの場所も近い。一度と曽我には帰るまい。決死だ」

弟五郎「鎌倉殿（源頼朝）は明日発つという。お世話になった懐かしい三浦の伯母の所に知られないように、それとなくお別れの挨拶に行ってこよう。」

兄十郎「そうしよう、伯母は兄弟にやさしくしてくれた。」

三浦の伯母の館（三浦義澄の室、義村、胤義の母）

三浦の伯母「今日はばかに丁寧な挨拶だね。なにかあるのかね。まさか仇討ちでも考えているのではないだろうね。曽我の姉が悲しむからそれだけはやめておくれよ。命を落とすよ。皆、貴方達が元気の姿を見るのが一番うれしいのだから、くれぐれもたのむよ。また会いたい、おいでよ。」

兄十郎「伯母様そんなこと思いもよらぬこと、心配なさらないでください」

やさしい三浦の伯母の館をあとにした。

近くに三浦の伯母の前男、伊豆武士団の重鎮、狩野茂光との子供、余一が住んでいました。

余一の父は曽我兄弟の曽祖父であり、母は曽我兄弟の母と姉妹である。

したがって、三浦義村、胤義と母を同じくする兄である。

兄弟には近い従兄弟なので、我々の仇討ちの仲間に加わらないか、誘ってみよう、と余一の館に立ち寄りました。

十郎「明日催される富士のまき狩りで、工藤祐経に親の敵、あだ討ちをしよう、と決心した。三浦余一殿、我々にお力添えをたまわれませんか。」

余一「何を言うか、今、そんなことを企てれば直ちに捕らえられ、殺害されるのが落ちだ。冷静に考えよ。時代が変わっている。今は平和な時代だ。わからないのか。」

十郎「冗談に言ったのに真顔でとらえておかしい人だ。」

五郎「臆病者のお前になんか、相談したのは誤りだった。」

余一は切れた。

「臆病者と言ったな、それまでいうなら、よし鎌倉殿（源頼朝）に相談して、工藤祐経の命を狙う兄弟を殺害するよう、進言しよう。」

余一は馬の手綱をとり、鎌倉に向かった。

途中まで来ると、和田義盛殿、畠山重忠殿三十騎ほどの武士団と出会いました。

畠山重忠殿「これ三浦余一殿どちらへお出かけか。」

三浦余一「鎌倉殿（源頼朝）に急遽、お知らせしなければならないことが、勃発いたしまして。」

畠山殿「どうもおかしい。さきほど曽我の兄弟と出会ったが、様子が異常だった。下馬して挨拶を交わしたが、

眼が血走っていた。不審だ。まさか仇討ちを相談され、同意しなかったのではないだろうな。」

畠山殿、和田殿が余一の馬の行く手を塞いだ。

畠山殿「余一殿、立派な良い武士というものは、強いだけでは、部下の信頼を得られない、哀れみの感情がないと　どうですか、義盛殿。」

義盛殿「私も同感だ。」

余一「私はそこまで思い至りませんでした。」

余一は和田義盛、畠山重忠の軍勢と三浦に帰って行きました。

建久四年（一一九三）五月二十三日

富士野のまき狩りのさい、曽我兄弟の仇討ちは決行されました。

曽我兄十郎祐成二十二歳、弟五郎時致二十歳の春でした。

討たれし、工藤祐経三十八歳。子息犬吠丸（祐時）九歳でした

のちにこの事件を伝え聞いた鎌倉殿（源頼朝）

「三浦余一は私に訴えて兄弟の首をはねようとしたのは、情に欠け武士として、信頼を得ることはないであろう、今後役にも、たつことはない。むしろ害になり邪魔になるであろう」と称したので、余一は三浦には居づらくなり、どこかに消えさつたということである

うわさでは高野山で仏門に入門し、入道になったといわれたりしました。

二、余一から内田三郎致茂

「しかし、余一が正論を吐いているのに、鎌倉殿（源頼朝）の意見で余一の武士としての将来がなくなるとは、不条理だ。」と宇佐美祐茂は思いました。

工藤祐経の弟、宇佐美祐茂が余一の武士としての将来を救うことを決心したのでした。

余一の父、狩野茂光は宇佐美祐茂の相談役として面倒を見、烏帽子親になって、名前に茂という字を与えていたのです。

宇佐美祐茂は余一の異母兄で、鎌倉殿（源頼朝）から依頼され源範頼を修善寺に幽閉したとき、協力しあつた狩野宗茂と相談することにしました。

狩野宗茂は弟のこと、相談にもちろんのりました。

かって、工藤祐経は京で平家に仕えていましたが、源頼朝に紹介したのは弟の宇佐美祐茂と狩野宗茂で、頼朝に使え信頼され、幕府のナンバーツゥーとして重用されていたのです。

狩野宗茂は慈円に相談しました。

慈円とは知故で、慈円の兄、興福寺別当恵信、弟弟子忠快等伊豆に流されたとき、あずかって、面倒をみたか

らです。

すると、慈円は言いました。

「遠江の国、内田というところに、私が座主を勤める青蓮院の荘園がある。そこに身をよせてはどうか。」

宇佐美祐茂

「余一は工藤祐経を救うことを考えたが、畠山重忠、和田義盛に阻止されたのだから、子も同然だ。」

慈円の主張、『公武合体の政治の実現・具体化であった。』

私の仮説では、余一は義直と呼ばれ、祐村と呼ばれ、そして狩野宗茂より名を受け継ぎ内田宗茂と呼ばれるようになりました。のちに北条時政は母の姉妹の連れ添いであるが、致茂は得宗家ではないので、宗という字を本とし、土という字のはいった致という字に改め、代々の通し字としたのではと思います。

私は軍記の流れから見て、承久記慈光寺本の内田五郎、内田三郎、承久記古活字本の内田四郎など同一人物内田三郎致茂としました。

これから、十八年後

三、承久の乱　承久三年（一二二一）

＊五月十五日

三代目将軍源実朝が暗殺され、混迷を始めた鎌倉幕府

武士政権と写ったので、後鳥羽上皇は政権奪還を決意しました。北条義時追討の計画を能登守藤原秀康に命ずる。秀康は北条氏に恨みを抱く三浦胤義を説得し、兄の三浦義村に協力を依頼するも、義村は拒否する。後鳥羽院、兵を遣わし、京都守護伊賀光季を討つ。

北条義時追討の院宣、五畿し道諸国に発せられる。

＊五月十九日

討幕の報、鎌倉に届く。

＊五月二十二日

東海道の先陣は相模守時房。この手についた人数は、城入道・森入道・石戸入道・本間左衛門・伊藤左衛門・可持井。丹内・野路八郎・河原五郎・強田左近・大河殿・大見左衛門・宇佐美左衛門・内田三郎・久下三郎・北条時盛を始として、其勢二万騎となる。

余一は内田三郎として先陣に入ったのである。

二陣、二万騎、三陣、二万騎で東海道は全てで七万騎。山道、五万騎。北陸道、七万騎。山道、東海道、北陸道すべてで十九万騎である。

＊五月三十日

先ほど、東海道の先陣、東海道の先陣相模守、北条時房殿が遠江国橋本の宿に着いた。

都に居られる下野守（下総前司盛綱。盛綱は横山党に属し、小野成綱の男。京方として戦い、乱後殺される。）の配下の玄蕃太郎（筑井太郎高重）という者は安房の国に住んでいます。鎌倉幕府に官物の納品にきたところ、武士であるので哀れにも妻子に別れの挨拶もせず、北条時房の手のものにまぎれて、橋本の宿まで来ました。

「武士の身分であると、京におられる我が殿を、生きておられる今、一度、拝顔致したい。」と思い至り、十九騎の軍勢で橋本の宿を夜立ちで相模の守の御前を下馬もせず、遠慮会釈もなく通りました。

相模守（北条時房）は是に気づき、内田党を召し寄せ、申されました。

「いかなる奴だ。時房が宿の前を、下馬もせず通るとは怪しい。見て来い。」

三浦義村「敵は我が軍勢のなかにまぎれこんでいるか、宿に紛れ込んでいるかもしれない、くれぐれも用心して任務を果たして下され。」と申されました。

内田三郎（致茂）が確認してきて、報告しました。

「下野殿の郎党玄蕃太郎（筑井太郎高重）でありました。」

相模守（北条時房）、重ねて言われました。「優れた軍は天より下り、地より湧き出るものだ。坂東の武者は馬が疲れていて動けない、遠江の侍、進撃せよ」

内田党は命令を受け、百騎の軍勢で出陣しました。

三河国、高瀬・宮道・本野原・音和原を打ちすぎて、石墓で追いつきました。

内田三郎（致茂）が叫びました。

「御玄蕃太郎（筑井太郎高重）と見奉る。そうでいらっしゃったら、相模殿のお使いで内田党が参った。戻ってください、お話したい。」

玄蕃太郎（筑井太郎高重）これを聞き、戻ってきました。

馬の鼻を並べて走り、言われたことは「殿（内田三郎致茂）、お聞き下さい。武士の身であってみれば、都に居られます我が殿に一度拝顔したく、悲願かなったら、我も部下たちも討ち死にしよう。と考えています。」

敵だ。十九騎で内田党は十一騎を刀で討ち取りました。

八騎は弓をとり、射る。そして取っ組みあいの末、戦いました。

内田党の三十五騎は討たれ、負傷した者も多数いました。

敵、最後の八騎は大道より南の連なる宿の頭の屋敷に逃れ、門を閉ざしてしまいましたので、我らが火をつけたので、面々は自害してしまいました。

内田三郎（致茂）はこれを見て十一騎の首を取り、本野原に竿に掛けて帰ってきました。相模殿（北条時房）の居られる橋本の宿に帰り、この報告をいたしましたところ、

「時房、今度の戦いは打ち勝った。」と申され、矢に箙を

付し軍神として奉りました。
承久の乱で内田党は、みごと十九万騎の名誉ある、先陣を切ったのでした。

＊六月六日
鎌倉勢、尾張川、黒俣川を渡り追撃する。京方杭瀬川に残り戦うも敗走する。

＊六月七日
鎌倉勢、美濃野上・垂井に着き、京都進攻の部署を定める。

＊六月八日
京方の武士、帰京し敗戦を報告しました。

＊六月十二日
後鳥羽院、諸将を勢多・宇治・竹洗・淀等に遣わし、鎌倉勢の進攻を防ぐ。

＊六月十三日
鎌倉勢、宇治川瀬瀬に進攻する。

＊六月十四日
鎌倉勢、総攻撃を開始する。

夜中に宇治橋近くに攻め込んで、三浦義村、作日の怪我の軽い手負いの若党たち、弓矢の射ち合いを始めて戦った。
武蔵前司の手の者たち、押寄せ戦い、しばらく支えて引き退がった。
二番手の相馬五郎兵衛・土肥次郎左衛門尉・苗田兵衛・内田三郎致茂・吉河小次郎、押寄せて散々に戦う。少々負傷して引き退がった。
三番に新開兵衛・町野次郎・長沼小四郎、各々、「其国住人、某某」と名乗って、橋桁を渡り掻楯の際迄、攻め寄せたところ、敵数多く寄ってきて、三人三所にて、討たれた。
四番に梶小次郎・岩瀬七郎、攻め込んで散々に戦って、退く。
五番に波多野五郎信政、引たる橋の際まで攻めた。是は、去る六月六日、杭瀬川の合戦に、尻がない矢で額を討たれて、長い間、腫れていた。
進み出て名乗る。「相模の国住人、信政」と言って橋桁を渡り、向より敵の射矢、雨のようで、向の岸を見んとして振仰ぐと、右の眼をしたゝかに討たれて、河のなかに落ちた。橋桁に取りついて、気持ちを落ち着けて、戦おうとすれば先も見えず、帰ろうとすれば敵に後ろを見せる事は、口惜しく思ったので、前を見て後ずさりして、橋の上へあがり、取って返る所に、一郎等則久はすばやく、肩に引懸、ひっくり返し、河端の芝の上にふせて、二人左右より寄って、膝で押さえて矢を抜いた。血が出て、鎧に紅を流して、誠におびただしく見えた。
内田三郎致茂は京都宇治まで戦いを挑んだのである。
戦後、後鳥羽上皇は北条泰時に院宣を与えて義時追討の宣旨をとりけし、挙兵が一分の武将によるもので、後鳥羽上皇、自らは一切関知しないものであるとしました。

『承久記(前田本)』
「坂東方のつわものども（中略）あるいわ一、二万騎、あるいわ四、五千騎、旗の足を翻して乱入す。三公・郷相・北政所・女房・局・雲客・青女・官女・青侍・遊女以下に至るまで、声を立て、おめきさけび、たち迷う。天地開闢より王城洛中のかかることいかでか有るべし。かの保元のむかし、又平家の都を落ちしもこれほどにはなかりけり」承久の乱の顛末を伝えているのです。
京方の武将藤原秀康、三浦胤義らの追討宣旨をしました。
内田四郎、三浦義村の弟・三浦胤義は兄義村に恨み言を云い自害。
内田は青蓮院慈円より後鳥羽上皇の皇子、朝仁親王（道覚法親王）に譲られていた荘園を北条義時の希望により、北条氏の信奉する、三井寺の荘園となっていくのです。

四、褒章

①貞応元年（西暦一二二二）八月十七日、幕府、遠江国内田宗茂を石見国貞松・豊田地頭職に補任する。
六七〇關東下知状写内田文書
睦奥守朝臣（北条義時）
②貞応元年九月十日、六波羅探題、遠江国内田宗茂に石見国貞松・豊田地頭職補任を施行する。
武蔵守（北条泰時）相模守（北条時房）

五、その後の内田氏

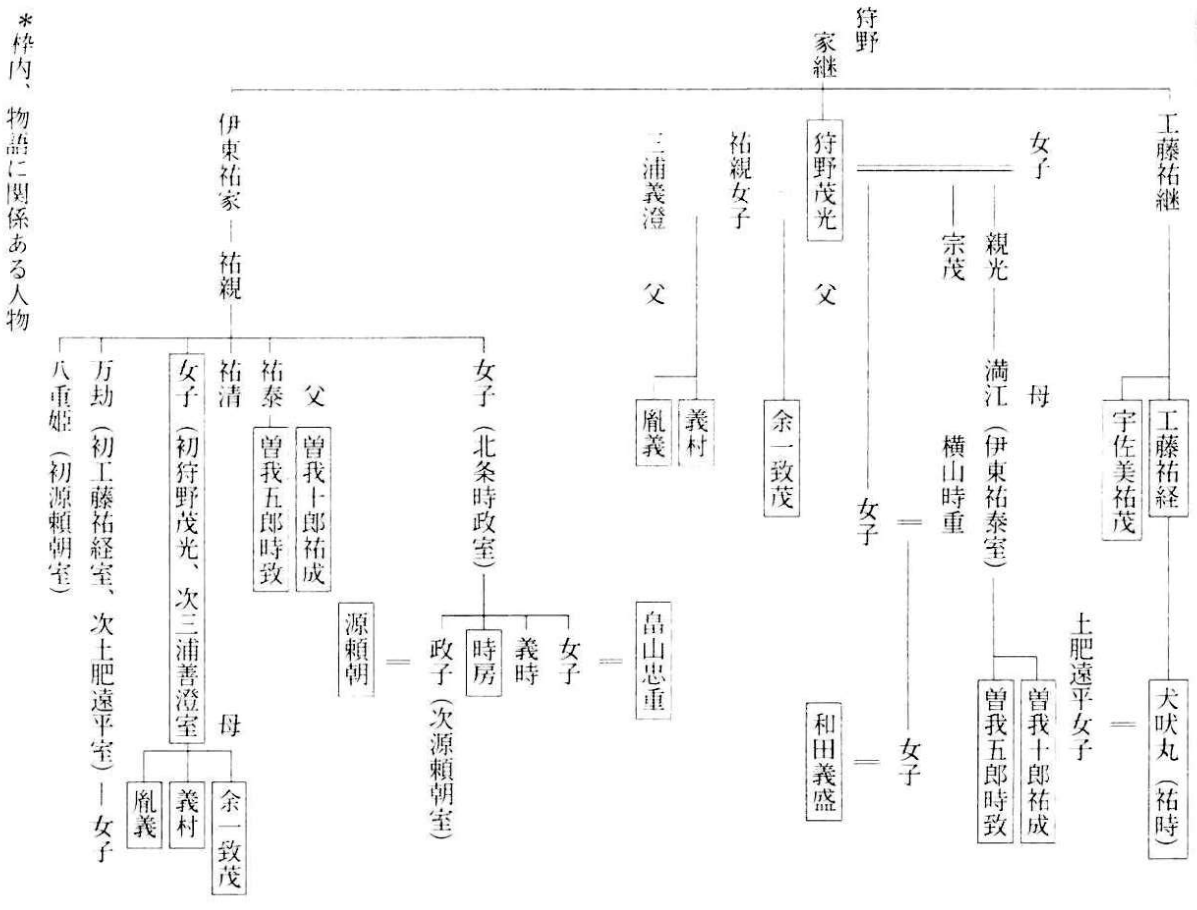
現在、菊川市内田には内田姓は一軒もありません。
島根県浜田市内田町の内田氏は益田氏や周布氏などと縁組を結び、益田市、周布町などの中心人物として発展しています。
島根県益田市横田の内田氏は子孫代々医師あり、初代村長あり、名家として連綿としてひきつづいています。
内田三郎致茂の墓標あり。
大分県杵築市山香町広瀬の内田氏は工藤姓で百軒以上
＊山香町誌（大分県）

となっています。

現在菊川市の内田は秋には田が黄金色に、冬はレタスで緑色に染まるのどかな田園風景が広がる農業振興地帯です。

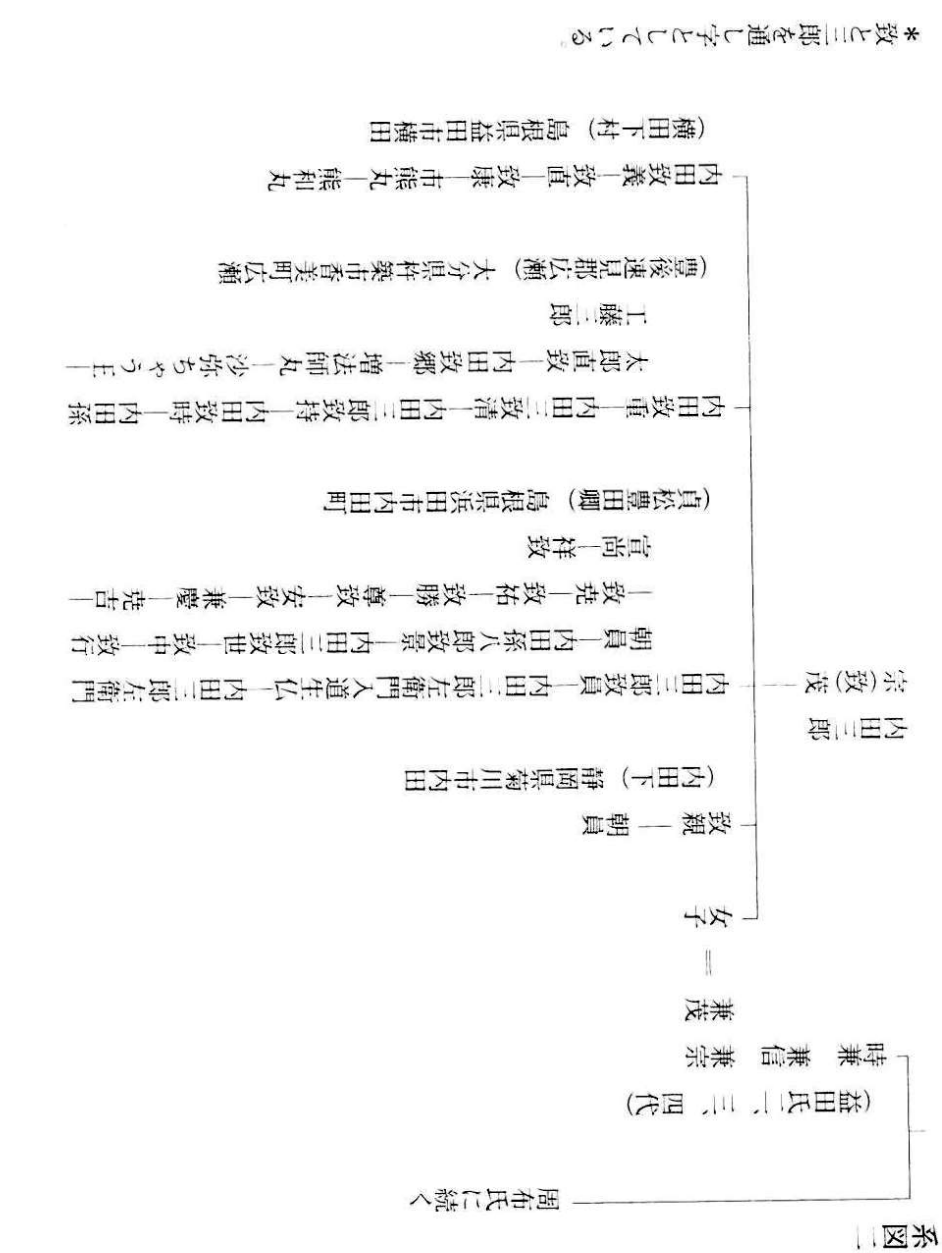
つわものどもの気配は全くありません。

系図一



＊枠内、物語に関係ある人物

系図二



＊致と三郎を通し字としている。

あとがき

資料より内田三郎致茂は工藤祐経、伊藤祐時の子という文献があります。

一、内田家文書は『永田秘録』巻六十四「工藤号内田後益田」と題する一冊のなかに九十点修められている。『永田秘録』は、萩藩閥閲録の編者永田瀬兵衛政純が写した、全百六十一巻に及ぶ記録で、右田毛利家文書（山口県文書館蔵）に入っている。『永田秘録』巻六十三所収の内田系図は「内田宗茂」を工藤祐経の孫、伊東祐時の子供としている。

二、『江津市誌』上巻島根県内田三郎致茂は工藤祐経の子孫、祐時の子供である。

三、山香町史（大分県杵築市山香町広瀬）『弘安図田帖』に「広瀬村六町段大遠江国内田工藤三致清跡三郎致持相続」とある。源頼朝の寵臣の工藤祐経の子孫である。祐経は頼朝より日向国に所領をうえられたが、祐経の孫の九郎（三郎？）致郷（致茂？）は遠江国内田庄を領し、内田工藤と称した。

四、静岡県小笠郡誌大正四年七月二十日発行
原氏の事跡については他の諸氏と同様さだかでないが、伊東大和守祐時の状に「本郡本郷に居住したる原氏の祖たり、祐時は伊豆の人、工藤祐経の子幼名は犬房丸、祐経は源頼朝に仕えて伊東三ヶ荘を領す。建久四年曽我兄弟のために富士野に討たれる。犬吠丸家を継ぎ、伊東大和の守祐時と称す。日向、遠江の地頭に補す。二子あり、祐朝、祐光という。祐朝左衛門次郎といい、日向地頭職を継ぐ。日向伊東氏の祖なり。次男祐光大和の守と称し遠江国地頭たり」とある。伊東祐光すなわち原祐光で原谷に居城し原氏十代の祖となったという。

伊東大和守祐光

伊東大和の守祐時の次男本州の地頭に補せられ、原谷に居住し、因に原氏という、原大和守祐光と称す。

五、曽我物語

五郎が「屋形のようすはいかがでしたか」と、きがかりの様子で尋ねると、

十郎「屋形が隙間も無く立ち並んでいたので、家主が誰であるともわからなかった。少々知っている人々の屋形をだいたい語ろう。

鎌倉殿の屋形を中心として、二重に子柴垣をめぐらして四方に四つの門をたて、それぞれに扉がある。小路を通し、館がその左右に連なり、屋形の門と門とを向かい合わせにして、諸国の武士たちが君を守護し申しあげて

いる

外陣の左の列遠江の国の住人原小次郎忠義・同じく小太郎・同じく三郎・堺小太郎・内田小四郎兄弟五人が並んでいる。」

内田小四郎について

頭注、工藤氏の一族。遠江国城飼郡内田荘（掛川市から菊川市）を本拠とする。

（祐時の子祐光と兄弟だといっているのである）

慈光寺本『承久記』下。内田小四郎は打田党・打田三郎と見える。

参照、曽我物語新編日本古典文学全集53　小学館梶原正昭大津雄一　野中哲照

六、遠州内田荘下郷の開発領主遠州御家人内田氏の史的考察

（内田家文書と俣賀家文書を中心に）　大山喬平

『吾妻鏡』に見える「内田四郎」も致茂の「三郎」とは違う人物のようで、承久合戦当時、内田氏は四郎・三郎があい並んで合戦に参加していたものとみてよいだろう。

『吾妻鏡』承久三年（一二二一）五月晦日条には東海道大将軍北条時房が遠江国橋本駅に到着したさい、その軍勢のなかに「内田四郎」なるものがいて、夜に入り、先陣を越えてひそかに先を急ぐ筑井太郎高重の一隊の勇士十余輩をあやしんで、尋問し、誅伏したことがみえる。この人物は『承久記』では「遠江国住人内田四郎」として現れ「内田四郎・同六郎・新野右馬弼」ら「内田の者共六十余騎」と記されている。事件のおきたのが遠江国橋本駅近辺であることから見て『承久記』が内田四郎を「遠江国住人」として記していることには、「新野某」の名称とともに近辺の地理を熟知するものの行動としての合理性を存している。これらのまだ不確実で断片的な材料から、おぼろげであるが平安時代の末ごろには遠江国に「内田の者共」として近国に知られる武士団が成立していたと判断することが可能である。

彼らの子孫はのちに石見国に移住するが、江戸時代になって、みずからを藤原南家の流れで藤原南家の流れで工藤祐経の後裔であるとする系図（『永田秘録』巻六十三・六十四所収内田系図）をもっていた。祐経は曽我兄弟の敵役で、『曽我物語』では建久四年（一一九三）の富士野のまき狩りのさい、一族内部の所領争いがもとで兄弟に討たれることになっている。

私説。

しかし曽我兄弟仇討ちが施行されたのは建久四年（一一九三）五月二十八日。

工藤祐経は三十八歳、子息犬吠丸（祐時）は元服も済

んでいない、九歳である。犬吠丸は十三歳のとき、源頼朝が烏帽子親となり、元服したのです。

すると犬吠丸の子、致茂が二十八年後、承久三年（一二二一）に地頭、侍大将として、活躍すること、富士で、犬吠丸、祐時の子・原三郎が曽我五郎時致と戦い殺されることになり、年齢的に不可能です。

しかし曽我物語はあくまで物語として工藤祐経の三十八歳という説は曽我五郎が十三歳のとき、工藤祐経を見た時、二十一、二歳に見えたという根拠に基づくものです。工藤祐経は十三歳で祐親を烏帽子親として、元服し祐親の女子と結婚し、京勤めを十年以上しているので、その間子供がないのは不自然である。祐経四十八歳、祐時三十歳と仮定すればこの説が成り立ちます。しかし伊藤祐時は吾妻鏡によれば建長四年（一二五二）六月十七日六十八歳で亡くなっています。祐時三十歳と仮定すれば二十歳フラスで八十八歳まで生存したことになり、当時の武将の生活環境からすれば、現実性の薄いようにも思います。

内田三郎宗茂（致茂）は余一ではないかと門外漢の私が仮説を立てました。

余一とはあまり者というような意味です。

一、承久記で北条時房、三浦義村と知故で大変親しい会話をする。（時房は母方の従兄弟、義村は異父兄弟）

二、吾妻鏡、承久記では参加武士として伊豆・伊藤祐時、宇佐美五郎兵衛、余一（祐村）は通し字で祐時の祐と義村の村が入っています。

承久記慈光寺本では宇佐美左衛門、内田五郎となっています。

三、宗茂（致茂）は通し字として余一の父狩野茂光、兄の狩野宗茂、そして工藤祐経の弟宇佐美祐茂と大変近しい関係が想像されます。余一の父、狩野茂光は宇佐美祐茂の烏帽子親だという説があります。

私は以上のことから余一物語をつくりました。私はこの物語を作るにあたり承久記慈光寺本の内田五郎、内田三郎、承久記古活字本の内田四郎など流れから同一人物と判断致しました。

『参考文献』

＊承久記　慈光寺本
＊承久記　古活字本
＊承久記　前田家本
＊吾妻鏡
＊曽我物語
＊遠州内田荘下郷開発領主遠州御家人内田氏の史的考察
　大山喬平
＊永田秘録
＊江津市誌（島根県）

＊静岡県小笠郡誌
＊伊豆武将物語　駿遠豆・ブックス4　小野真一
＊石見内田文書について　山口県文書館研究記要第一号
一九六一年
山口県図書館、大分県立図書館　国守　進
＊旧内田家文書の紹介　郷土石見第十五号
石見郷土研究懇話会　遠藤一郎
＊横田物語　白想社　大庭美一
＊ふるさとの歴史（一〇五）益田市周辺の山城
要害山城　浜田市内田町美川
石見地方未完資料刊行会㈱　報光社
岩崎　健
＊華頂要略、鎌倉遺文　建暦三年（一二一三）
二月慈鎮所領状案

モカの緊急手術

漆原直子

我家には〝モカ〟という猫がいる。雑種のキジトラで、オス。年は7歳半過ぎ位で、人間の年齢に換算すると四七歳位。体重は8kgを超えており、抱きかかえるとズッシリと重いメタボリックシンドローム猫である。階段を駆け下りる時はドタドタッという音がし、テーブル等から飛び降りる時は〝ドタッ〟と何か物が落ちるような音がする。普通猫は狩りの習性を持つ動物なので、あまり物音を立てないと思っていたが、モカは違う。猫の姿はしていても、猫らしくない・・・。

モカが我家に住むようになったのは、実は捨て猫で、私の職場に捨てられていたのを、貰い受けてきたのである。生まれてまだ何日も経たない、眼も開かないような状態の時に、スーパーの袋に入れられて捨てられていた他にも黄土色と白の茶トラと、黒色の2匹の兄弟がいた一番おとなしそうだったキジトラのモカを選んだ。

本来なら、その時点ですぐに動物管理事務所に引き取ってもらうのだが、この時は職員で猫を飼っている人がいて、このまま引き渡すのはかわいそうだということになり、貰い手が現れるまでということで、密かに職場の中で飼いだしたのである。夜は交代で自分の家に連れ帰った。

我家の場合、前々から子供たちは何か動物を飼いたいと言っていた。ただ、忙しくて世話ができない。私からすればすでに2頭の大型動物を飼っている・・・。3匹目の世話なんか大変・・・特に犬だと毎日散歩に連れて行かなければいけない　とても無理、と思っていた。

しかし、下の娘が小学校3年生で学童保育を利用していたが、翌年からは学童保育が利用できなくなるので、下校後は1人で留守番することになる。中学生の上の娘

が帰宅するまで1人でいるのも寂しいのではないかと思い、この捨て猫を飼ってみようかという気持ちになった。私自身、子供のころからずっと猫を飼いたいと思っていたが、アパートやマンション住まいで猫を飼うことはできなかったので、代わりに、金魚やセキセイインコを飼っていた。ともかく猫の世話は犬ほどには手がかからない。トイレと餌の世話だけしていればよく、外へ出さないように室内だけで飼うとすれば、何とかなると思われた。人間側の身勝手な判断で、猫にとってみれば窮屈な生活を強いられることになるかもしれないが、ともかく1匹だけ飼うことにしたのである。他の2匹は他の人が引き取って行った。

家族に私から猫を飼おうと言った時、子供たちは大変喜んだ。夫は子供の頃、関東平野の真ん中あたりの田畑の中に住んでいたので、色々動物を飼っていた。犬、猫、兎、モルモット、鶏、チャボ、雉、トカゲ、亀・・・。ペットというか、家畜的なものが多く、餌やりなどの世話をさせられていたという。中には食用になるものもいたそうだ。特に猫の場合、冬は行火替わりで、家族が交代で布団に入れて使用していたそうである。ともかく、夫も猫は嫌いではない。ちなみに夫は私の6歳上である。

子猫の世話の仕方を職場の人に教わり、本も買い込んで、受け入れ態勢を整えてから、モカを連れて来た。このころには生後2週間位になっていた。

まだしばらくの間は、哺乳瓶でミルク（猫用）をあげ、オシッコはまだ自力では出せないので、ティッシュペーパーで刺激して出してあげていた。親猫であれば、なめてあげるのだろうが、さすがにそこまではやれない。離乳食もあげなければいけないのだが、モカは離乳食を嫌がり、無理矢理口に押し込まなければならなかった。これは、成長してからも、餌の好みとして表れていて、缶詰などシーチキンのようなウエットタイプの物は決して食べようとしない。ドライ系のキャットフードばかりで、魚も鰹節や煮干し、干物に反応する。特に煮干しに対しては、「フニャ～ン」と、顎を震わせながら猫撫で声を出しながら、頭をすり付けてきておねだりしてくる。また、鯵の干物など焼いて食卓に置いておくと、盗まれそうになる。また、コーヒーと漢方薬が好きで、私が飲んでいると、鼻をひくひくしながらすり寄って来て、空いたカップの中に顔を突っ込んだりする。変わった猫だと思う。

こうして、猫1匹家族の一員になったわけだが、餌と水とトイレの世話をする位で、手はあまりかからないが、時々悪さをするので注意したり、怒ったりしないといけなかった。例えば、窓の金網に飛びついていたり、戸や壁をよじ登ろうとしたり、突然歩いている人の足に飛び

かかったりする。また、時々こちらの隙をついて、窓から外へ脱走する。決して遠くへは行かず、家の周りに潜んでいるか近所の空地へ行って30分ぐらいして戻るのである。但し、体全体が黒っぽいので、夜に外へ出ていかれると探せない。首に着けている鈴の音が頼りだが、姿が見えない。戻ってくるのを、窓を開けて待つしかない。こんな時は、大好きな煮干しを窓側から、家の中に入ってくるように、点々として置いておく。本当にちょっとやんちゃな男の子が1人増えたような感じであった。

下の娘が中学生になり、ある日学校から帰ってきて、家の鍵を持っていなかったことがあった。私の帰りがいつも夕方過ぎるので、4時間以上待たねばならなかった。高校生になった上の娘も帰宅時間は夕方である。しばらく外の縁台に腰かけていると、室内のモカが窓の所に寄って来て、娘が外にいることがわかったらしい。ガラス越しに娘が手を振るとそれに反応して飛びつこうとする。30分くらい手を上下に振っていたら、モカの前足がサッシの鍵に引っ掛かるようになり、なんと鍵が開いてしまった！おかげで、娘は家の中に入ることができたのである。このような事態がその後も起きて、モカに窓の鍵を開けてもらったという。本当にモカがいなかったら、どうなっていたことか・・・。娘には、モカに足を向けて寝てはいけないと諭しておいた。

昨年の10月、モカが急に吐く回数が増えた時があった。内容物は無いのに、胃液や胆汁を吐く。餌を食べないし、排便もない。だんだん駆けたりもしなくなり、ジッとしているだけになり、2階にも上がれなくなってしまった。近所のかかりつけの動物病院に連れて行った。病院では、「漆原モカ」という名の診察券ができていて、私は「お母さん」と呼ばれる。はじめは抗生物質の錠剤の処方と吐き気止めの注射をしてもらっていたが、吐く回数が減っても餌を食べず相変わらず排便が無い。点滴を受けるようになり、点滴をすると少し元気が出て動くが、毛づくろいもせず、トイレでオシッコをするのがようやっとという状態であった。病院で血液検査や造影剤によるレントゲン検査をしてもらったが、胃腸がどういう状態になっているのか、特別な異変が見つからないためよくわからない。血液検査では、肝機能値がやや高い他は特に異常は無かった。何か異物を食べたりしなかったかと聞かれたので、思いつくのは、時々風呂場に来て、行水臭のするタイルの上や桶の水を飲みに来ること、毛玉を吐くためにビニールを時々食べること、猫草があるのだが、生ものは食べないこと。あと、木綿の糸を時々裁縫箱から取り出して食べていることが、思い起こされた。この中で一番怪しいのは、糸であった。腸内で絡ま

っていたりすると、場合によっては結紮されて、腸捻転状態になっている可能性があるという。それもあって、造影検査を受けたのだが、ハッキリ出なかったので、CT（コンピューター断層撮影）等これ以上の検査はここではできないし、手術が必要になった場合もここでは設備が無いからということで、東大病院を紹介された。私は、学生時代東大病院で実習したことがあったが、外来にペットを見てくれる科があっただろうかとしばし考えてしまった。詳しく聞くと、隣接する農学部に動物病院があり、そこは色々設備もあるので、対応してくれるだろうとのことで、即座に予約を取ってくださった。診察台の上のモカを見ながら、早く良くなるといいわねと、近所の動物病院の先生は親身になって心配されていた。先生曰く、

「・・・東大病院の〝小児科〟を予約しましたから、そこでよく診てもらって・・・」

とうとう、モカは人間の子供になってしまった・・・。

飼い主としては、想定外の出来事である。本当にどうしてこうなってしまったのか、原因不明でこのまま行ったのでは、やがてモカは死んでしまうかもしれない。まだあと5～6年は寿命があるのに、ここでみすみす死なれるのはかわいそうで嫌だ。また、一緒に生活している者が、原因不明の病気であるのは、ひょっとしたら、私たち人間の健康状態も何らかの危機に瀕しているかもしれない。水俣病が発生した時、最初に異変が起きたのは、猫等の小動物であった。死んだ魚を食べた猫が、痙攣が起きて死んだりしたという。現在においては、3年前の東日本大震災による福島の原発事故で、東京も放射能汚染に見舞われ、一時、浄水場の放射能の値が基準値より上がり、ペットボトルの水が配給されたことがあった。飲み水は同じ水道水の水を使用しており、一応浄水器も利用してはいるが、何らかの影響があったかもしれない。猫のような小動物は、人間より影響を受けやすいのではないかということも考えていた。ともかく、原因を何としてでも知りたかった。

2日後に東京大学動物医療センターの外来に、朝一番に夫と2人でモカを連れて受診した。体重は多少減ったものの、まだ7Kgはある。1人で抱えて歩くのは結構大変であるし、入院するかどうかもハッキリしなかったので、2人で行った。

東京大学動物医療センターは、その前身が家畜病院で、日本政府に雇用されてドイツから派遣されたヤンソン先生（Dr. Johannes Ludwig Janson）の指導のもとで獣医臨床教育の場として活動を開始したそうだ。外来も、内科と外科等に分かれていて、ちゃんと看護師もついていて専門性が高そうである。待合では犬の患者の方が多いようだったが、猫も数匹いた。色々診察した結果、やはり腸を切り開いてみないとわからないと言われて、即日入院し、夜8時～緊急手術することになった。主治医は、内科と外科双方からついて、手術が終わったら電話するので、家族は帰ってもよいと言われた。電話は夜の12時に来る予定であったが、来なかった。明日の朝になるかと思っていたところ、その1時間後に夫の携帯に電話が来た。手術は無事終了し、小腸に糸が詰まっていたという。原因は糸だったのである。翌日お見舞いに行き、取り出された糸を見たら結構な量であった。【写真①】



↑【写真①】小腸から取り出された糸

1週間で退院したが、しばらくは餌を食べようとしなかった。1週間後に抜糸をしたところ、ようやく餌を食べるようになり、また煮干しをねだるようになった。最近になってようやく部屋の中を駆け回るようになって、術後の傷痕も目立たない。今回の治療にかかった費用は、総額約10万円であった。医療保険が無いので、全部実費である。これも、飼い主としての責任上仕方ないか・・・。当面無駄遣いはせず、モカには、このあと10年位は生きてもらわねばならない。相手は猫と言う他は、人間と同じようなことがおきるものだと実感できる、貴重な体験だった。









【←退院して抜糸した後のお腹。手術のために、きれいに毛が剃られている。下の写真は1ヶ月半位して、少しづつ毛が伸びてきて、また虎のような縞模様になりつつある。（2014年12月30日撮影）】

【手術翌日　腹部にかかれ、首にかけてあった包帯がカラーはずれ、巻きがちょっとカラーあげてだらしなくカ→】

短歌　三十首

曽根竣作

裳裾に引きて

腰越の釣り宿朝よりさわがしき秋も終りかしほ風の吹く

由比ヶ浜洋凧（カイト）が泳ぎしまらくを霧笛のひびき遠のきてをり

月光に杖が先づ出て降りくる人いくたりか居てバスは発進

松が岡いくとせ経（ふ）るも閑止めなく松が減りゆく平成の秋

浅黒き平面的なるタヒチの人ゴーガン描く女身（じょしん）まばゆき

なかなかに拉致未解決　かの国にクーデターなど勃（おこ）らぬものか

老（おい）と言ふ言葉はうたに使ふまじ　思ひてつひに米寿にいたる

白鳥（はくてう）の数羽が連なりゆったりと湖（うみ）抱くごと大きく着水

朝焼けの観音の峯かたち良く淡水渓を裳裾に引きて

台北（たいぺい）の西本願寺の裏手なり住みしわが家いかに過（すご）すや

純潔

凹みある岩をさがして清流の山女（やまめ）焼きをり秋もはじめの

昏れ方の池の面（も）に立ちさざ波の風となるとき落葉片寄る

その上（かみ）の不良に侠気感じつつ泰山木（たいさんぼく）のまうへに純潔

果つるとは光ることとぞ舟べりに蛍烏賊群れ分厚く游ぐ

佇めば我も遊子ようす紅の合歓が夕べに開くときのま

うす絹の雲の彼方に月満ちてわがポロシャツの紺も褪せたり

晩学をためらふなかれ蝉しぐれ夕べいとはず鳴きやまぬなり

サングラスにシャネルの5番匂はせて妻に非ざる人通り過ぐ

いつの日か一人になるを考へて目刺焼きをり目に滲ませつ

今もなほ〝BANZAI・CLIFF〟そのままに兄舞へる人の日傘まばゆき

〝BANZAI・CLIFF〟は戦中、民間人が何人も自殺した硫黄島の断崖。

「一炊の夢」

つばくらめ右に左にとびめぐり波止場の空を自在に泳ぐ

台風の吹きすさぶ夕べ〝鬼平〟の上方よりも鱧とどきたり

鷹渡す日の空深く澄みとほり差し羽の群れの柱なすなり

古書街のはづれの茶房シャンソンの高鳴りて茜の夕陽落ちたり

何度でも振り返りつつわが通ひし銀行に対し頭を下げる

配流てふ島はすすきの風のなかさかりともなく吾亦紅咲く

編笠でこのふか秋を歩きたしきつねの剃刀誰ぞ野に研ぐや

わが胸をぷいと吹きぬけ秋の風瀬戸早鞆の霧笛を知らす

「一吹の夢」に凍て蝶ふるひつつうすき命を惜しむつかのま

個としても一きは冴ゆるオリオンのみ空にふかし冬の星座は

短歌

行雲流水（四十四）

石黒修身

近詠二十首

世相・時局

先の日に逝きし名優「高倉健」舞台となせし夕張はいま

咄々と味わい深き語り口「菅原文太」逝く春を待たずに

ひと月に名優二人の訃を聞けり吾と同年昭和を生きし

国民の期待を担い宇宙の児「はやぶさ二号」は六年（むとせ）の旅に

喧噪の師走を巡る選挙カー争点は何大義は何処に

電源のプラグ入れ替え確かめるセットにも似た政権選挙

身辺・日常

たまさかに友を誘いて駒形の「どぜう鍋」啜る熱燗傍に

老友の集いで再会約せども今日の一会が最後となるやも

少年が書店の隅でひたすらに立読みしてる読書週間

「見習い」の札下げし少女懸命に検索しくるる読書週間

根つめし読書は苦手となりたれど習慣のごと書店さ迷う

日記帳五年もの終え次は如何に迷いし挙句三年もの購う

卒寿なる姉の心を癒すなく傘寿の吾は黙然と座す
人生の終末のこと姉に説き吾が身省みしばし虚しく

季節・他

不規則な暑さに耐えて早や寒気錦繍の秋は短かかりけり
霜月とう異称さながら肌寒く故郷は早や霜から雪へ
この街に見事な銀杏並木あり黄金の落葉夕陽に映える
吾の住むこのマンションの高窓ゆ見下ろす銀杏は黄金の吹雪
故郷に近き町なり「余市」では「まっさん」ブームに賑わう予感
「余市」では「ニッカ」工場いくたびか見学をせしレトロが懐かし

古い物・遠い夢

忠内正之

「織部」いま（茶道史余滴）

（二）織部十作の制定から利休の死まで
（織部四十歳から四十八歳まで）

茶人として歩み始める

天正十一年（一五八三）織部四十歳、一月中川瀬兵衛とともに、伊勢国・亀山城（城主・滝川一益）攻略に参加した。四月賤ヶ岳の戦いで義兄の中川瀬兵衛が四十二歳で戦死したため嗣子の膳兵衛・秀政（十二万石）の後見役となった。

賤ヶ岳の戦で柴田勝家を破り大勝した豊臣秀吉は賤ヶ岳七本槍として戦功のあった福島正則、加藤清正、片桐且元などを後に大名にひき立てた。加賀の前田利家、さらに滝川一益などが秀吉に降って九月には大坂城が築城され、城内に山里の自然を背景とした数寄屋（茶室）が設けられ、千利休が秀吉の御茶頭の地位についた。

十月十五日の大坂城内での茶会に、千利休、今井宗久、津田宗及を茶頭とした秀吉の茶会に初めて古田織部の名が出ている。

また十二月十四日付の数内剣仲宛利休の書状に古田左介（織部の通称）の名が出ており、古田織部がその頃より茶人のなかで着実に地力をつけていることが窺われる。

金山城主の森長可（後に古田家と姻戚関係となる）が妻木城、苗木城、久々利城をおとし東濃地区を平定する。森長可二十六歳である。

この頃美濃地区では各地で窯の開窯が盛んとなったと考えられる

天正十二年（一五八四）、織部（四十一歳）は二月か

ら四月にかけて小牧・長久手の戦いに中川秀政をつれて参戦する。

この戦いでは金山城主・森長可（二十七歳）が戦死する。従って六男仙千代十五歳が元服して忠政となり金山城主を継ぐ。（本能寺で戦死した森蘭丸の弟である。）

小牧・長久手の戦は織田信長の遺子・織田信雄と徳川家康の連合軍を敵とした戦いで、前後二回にわたって講和交渉、二回目が十一月の矢田川原の交渉、ここで豊臣秀吉と織田信雄が和議を行った。

古田織部は三月頃から十二月前後まで参戦して小牧附近の戦野にいたと思われるが、十月十五日および十二月二十二日、いずれも津田宗及の茶会に出席しており、十月頃には帰ったものと言える。

その頃イスパニアの商船が長崎に来航していたと伝えられる。

天正十三年（一五八五）、古田織部は、豊臣秀吉が関白となるにともない、従五位下、織部正に叙位。山城西の岡二万五千石が与えられた。そして秀吉のすすめにより実父・重定（篠原の勘阿弥と称していた）は還俗して従五位、主膳正となり三千石の知行が与えられた。

（なお、織部正とは、令制によって大蔵省に属し、綾・羅・錦などの織物、染物のことをつかさどる役所の長官をいう。さしずめ現代風にいえば、経済産業省の繊維局長とでもいうべきか）

古田織部は、さきの中川瀬兵衛、戦死ののち秀政があとを継ぎ、その後見役となっていたが、秀政が茨木から播州へと所替えとなるにともない、その役を九月には免除された。また義弟の古田重継（養父重安の実子）を美濃から呼び、次女・千を中川秀政の長女に仕立ててめとらせ、中川家臣とした。（二千三百石客分）この重継の子孫が、古田家断絶後も中川家の家老古田氏として残ることとなる。

なお、古田織部は信長の例にならって織部十作を選定して、夫々に窯印を与えて美濃窯業の発展を支援した。

織部がかかわった桃山陶の時期は、三十年そこそこの短いものであるが、そこで花開いた芸術の美はたとえようもない程大きい。しかしそれを容易ならしめたものは美濃の窯業の歴史でもあった。

織部のやがて花ひらくデザイン感覚も、美濃焼のながい伝統を陶工たちのすぐれた技術によって実るのである。

この年豊臣秀吉が紀州根来、雑賀一揆を平定するため出陣するにともない、古田織部もこれに従軍している。三月の根来、雑賀退治に続いて、四月から六月にかけて、四国・長宗我部元親討伐にも出陣している。

一方、千利休もそれまでの千宗易から利休の名を用いるのはこの年の九月七日で豊臣秀吉が禁中小御所において、正親町天皇にお茶を献じたとき利休居士号を戴いたのである。

二月十三日、古田織部は始めて、自らの茶会を開いている。（記録上にみえるのはこれが始めて）それは「津田宗及茶湯日記」に次の如く記されている。

「古田左介の朝会であった。客は堺衆の住吉屋宗無と津田宗及である。炉に二重釜を自在でつるし、瀬戸茶盌を使う。」

といった名物、道具ぬきのきわめて質素な朝会であったと想像される。

天正十四年（一五八六）織部四十三歳

古田織部は千利休に鐙（馬具）を贈っている。この時の利休の禮状が残っている。この頃織部の利休への師事が始まったと思われる。

豊臣秀吉は、大坂城から「黄金造りの茶室」を京都にはこび、組立てて後陽成天皇を招き茶湯を献じた。（現在この茶室の模型が熱海のＭＯＡ美術館に展示されている）

秀吉はこの時太政大臣に任ぜられ豊臣姓を賜わった。五十一歳であった。一方徳川家康は秀吉の妹・朝日姫をめとった。十二月には家康は駿府城に移っている。家康四十五歳。

さきに織田信長に反抗して、摂津の有岡城を捨てた荒木村重（道薫）が没し、また、豊臣秀吉に対抗した滝川一益も六十二歳で没した。

古田織部は十二月二十六日、千利休の茶会に今井宗久、小西行長とともに招かれた。

天正十五年（一五八七）織部四十四歳　豊臣秀吉の九州征伐に従軍する。この九州征伐は秀吉にとっては、対明国および朝鮮への示威の意味もあって、兵力二十五万、一ヵ年分の兵糧三十万人分、馬二万頭の飼料を集めるという壮大なものであったという。

一月、宇喜多秀家の先陣が進発、三月秀吉は佐々成政、浅野長政を従え出発した。古田織部はこれに加わった。

秀吉軍は九州各地を制して、遂に五月島津義久を降伏させた。秀吉はこれを許して六月十八日、箱崎の千代の松原で茶事を催し千利休は松原の老松に雲龍釜を吊って茶をたてたと伝えられる。

かくて七月一日、博多発、七月十四日に大阪城に凱旋をした。

十月一日から十日間、九州平定戦勝祝賀大茶会として、貴賤をとわず空前絶後の大茶会を北野天満宮社頭の松原で開催した

この茶会は秀吉の企画の大衆性がよくあらわれている

もので秀吉の人物像が窺われる。お茶頭は千利休で古田織部もこれが成功のため、奔走している。

これより先、前年の春から起工していた聚楽第が九月十三日に完成し秀吉は大坂城から移っている。華麗かつ壮大な邸宅であったといわれる。

十月十二日、古田織部は新装の聚楽第で千利休、細川藤孝、神屋宗湛とともに茶会に招かれている。

一方、バテレン追放令がだされてキリスト教が禁圧をうける。千利休の門下である高山右近は城主の地位を捨てて信仰に生きる道を選んだ。

翌、天正十六年（一五八八）四月十四日、豊臣秀吉は後陽成天皇を聚楽第に招き、諸大名に忠誠を誓わせることとした。このとき、古田織部は天皇行幸の先駆をつとめたといわれる。また、秀吉のお伽衆に加えられた。

千利休は秀吉の御茶頭として聚楽第の利休屋敷や、大坂城内の山里の数寄屋で茶会をひらいていた。しかし利休の禅師である大徳寺第一一七代古渓宗陳が秀吉の勘気にふれて九州に配流されることとなった。（一説によると石田三成の讒言によるものという）

九月四日、利休は聚楽第の利休屋敷で、朝会をひらき大徳寺の春屋宗園、古渓宗陳、玉甫紹琮および三井寺の本覚坊遍好らの和尚を招いた。古渓送別の茶事であった。

秀吉と利休との間に吹いた一陣のすきま風といえないであろうか。後年、国家安康の鐘銘を書き、徳川・豊臣の対立の引き金となった清韓和尚を古田織部が招いて茶会をひらき徳川家康の逆鱗にふれる慶長十九年（一六一四）の事件と考えあわせたい。

古渓宗陳は、筑前・博多で神屋宗湛と島井宗室が建てた大同庵で、略一年余りの間秀吉から赦しのでるまで暮らした。

天正十七年（一五八九）四月古田織部は豊臣秀吉の有馬湯治に随行をしている。

この年、京都ではキリスト教寺院が焼かれ、宣教師は捕えられて長崎に送られている。また、茶道の上では「山上宗二記」が書かれた。利休の高弟である山上宗二（一五四四―九〇）が利休から茶の極意を聞き書きして記したもので現在も利休茶道の研究資料として最も高い評価をされている。

十月京都・大徳寺の山門が完成している。この山門に千利休が自らの立像をおいたことが豊臣秀吉の怒りを買った。

秀吉の天下統一

天正十八年（一五九〇）　織部四十七歳　四月、織部は関東の北条氏討伐のため、豊臣秀吉の旗本先手として出陣する。六月、伊達政宗は小田原に出むいて降伏する。七月、北条氏降伏して滅亡。小田原城落城。北条氏の旧領を徳川家康にうえる。ここに於て秀吉による全国統一はほぼ完成した。秀吉五十五歳であった。

七月、徳川家康、関東八ヵ国を領し、八月家康は江戸城に入った。

この間、小田原陣中にあって秀吉の怒りをかい、千利休の高弟、山上宗二が耳・鼻をそがれて斬殺されるという事件があった。

古田織部と千利休の師弟関係をものがたる「武蔵鐙の文」が知られている。転戦のつれづれに消息をしたためた織部の文に対して、小田原の陣中にあった利休が、竹花筒をつくり、これに消息ならびに歌を添えておくったものである　また織部から利休に対する返事の交換がなされている。

竹花筒は「尺八」、「園生寺」、「音曲」、他で後世に伝えられている。

武蔵国から帰った古田織部と千利休が夏頃熱海で入湯したという

千利休の死

天正十九年、秀吉の御茶頭として勢威をふるっていた千利休に対し、一月十三日、秀吉は堺の自宅での蟄居を命じた。

二月二十八日、秀吉から上洛を命ぜられて利休は切腹を仰せ付けられる。京都・葭屋町の利休屋敷であった。

利休は次の頌（偈）を残している。

人生七十　力囲希咄
吾這宝剣　祖仏共殺
提ぐる我得具足の一つ太刀
今此のときぞ天に抛つ

この辞世の頌は「七十年もの長い人生を過ごしてきたが、眞にしっかりと大法を会得するのは容易なことではないぞよ。が今や、わがこの明暗の両頭を切断すべき名剣をふるって、佛陀も祖師もともに滅殺し、無位の眞人と成りおおせた」という意味になる。（桑田忠親著作より）

豪快実に天地を圧するの気概があり、彼がひととおりの人物ではなかったことが推測される。死に臨んでの覚悟は、禅僧や武将のそれに勝るとも、劣るところは決してなかったといってよい。

利休は古稀を迎えて生涯をとじた。

これより先、豊臣秀吉の弟であった豊臣秀長が一月二十三日、五十一歳で没している。千利休のよき理解者であったと伝えられている。

また当時の天下の三宗匠は、千利休、津田宗及、今井宗久といわれており、千利休の死に続いて四月二十日、津田宗及が没した。

後年表千家四世、江岑宗左（千宗旦の三男）の「江岑夏書」により利休七哲という表現が用いられて、次の七名があげられている。

蒲生氏郷（飛騨）、細川忠興（三斎）、瀬田掃部、芝山監物、高山右近、牧村兵部、古田織部また、織田有楽あるいは荒木村重（道薫）を加えている著書も見受けられる。

利休処罰の原因は、多くの説があるがここでは表面的な理由としていわれている、紫野大徳寺の山門に利休の木像を造って載せておいた、それがけしからんというので罰せられた。という一点にだけ留めておきたい。

大政所や秀吉の正室の北政所などは、利休のために命乞いをするから、何とかして関白秀吉に謝罪するようにと密使をつかわしてすすめたけれど、利休は頑として聞き入れない。「それがし天下に名ある者が、婦女子のために死をまぬがれたとあっては、後世の聞こえもいかが」とこれを固辞し、従容として死についたといわれている。

織部は利休を淀の渡しで見送る

古田織部と千利休の師弟愛を語る逸話として、豊臣秀吉から処罰をうけて、堺へ下る利休を、細川忠興、とともに淀の渡しで見送る美談は、いまに語りつがれている。

利休七哲の一人である蒲生氏郷もこの両名に勝るとも劣らぬ利休の信奉者であったが、在藩であったため参加できなかった。

常日頃、利休と親しくしていた諸大名も秀吉への思惑から見送りをためらい、遠慮をしていた。人情の薄さを利休はしみじみ感じとったであろう。

堺への追放の命を伝えたのは、利休の茶の弟子でもあった富田左近将監と柘植左京亮の二人の上使である。ときに二月十三日。利休は早速に聚楽第の屋敷を出て、舟で淀川を下り、その夜、自宅へ帰りついたという。悲壮ながらも、静かな退去であった。

そのとき、淀の見送り場に古田織部と細川忠興の姿を見かけたのである。そのことは翌二月十四日付、松井康之（細川藩家老）あての文書として伝わっている。（松井家文書）―俄に昨夜罷り下り候。仍て淀迄、羽与（細川忠興）様・古織（古田織部）様御送り候て、舟本にて見付け申し、驚き存じ候。忝き由、頼み存じ候。恐惶

謹言。とある。

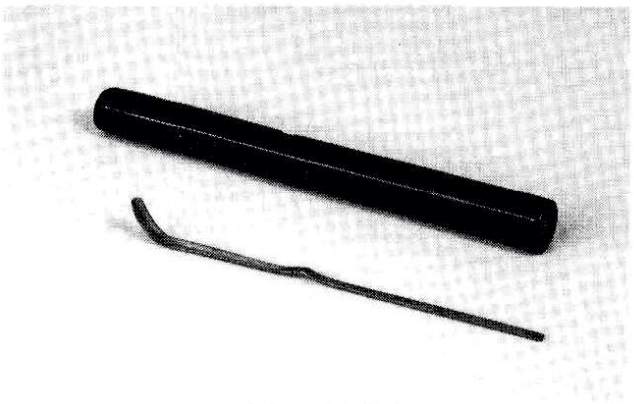
このとき利休の心にまた織部の胸に去来するものは何であったろうか。春なお浅い淀の舟着場に展開された、送るもの送られるもの、ともに万感胸に迫ったに違いない。

現在、徳川美術館に収蔵される「汨の茶杓」は利休が最後に織部に贈ったもので、織部はこれを利休の位牌のごとく、日夜拝したという。（茶杓の写真御参照）

このとき、豊臣秀吉五十六歳、徳川家康五十歳、千利休享年七十歳、古田織部四十八歳であった。小堀遠州は十二歳でまだ世に出ていない。

そして古田織部が茶人としての本領を発揮するのは利休の死後からであった。

続く



利休作　汨の茶杓

人類の仲間（八）

鈴木守

第九節　現生人類の系譜

『人類の仲間』最終節に、我ら仲間たち発祥に関する血の繋がり、所謂、『現生人類発祥の系譜』を辿って締めとする。

現在知られている我々人類の仲間は、サヘラントロプス・チャデンシスを皮切りに初期猿人5種、アウストラロピテクス、華奢型猿人6種、パラントロプス、頑丈型猿人3種、サピエンス種を除いたホモ属5種、ホモ・サピエンスの亜種4種、併せて23種である。

だが、この23種のヒト科動物全てが我々現代人の直系の先祖であると云い難い。例えば、頑丈型3種は華奢型アファレンシスから分家した種類であって、直系の祖先とは云えない。そして、華奢型はホモ属の直系の関係にあることは間違いないが、直接の祖を確定することは難しい。最初に発見された華奢型猿人、アフリカヌスもまた、現代人の直系の血脈とは外れている。我々の祖は華奢型ガルヒからホモ・ハビリス→ホモ・エルガステルの順にバトンが渡された可能性が高い。

ところで、一九二四年にアウストラロピテクス・アフリカヌスが発見され、二七年にアレッシュ・ヘリチカが「現代人はネアンデルタール人を祖先とし、猿人→原人→旧人→新人の順に進化」とするネアンデルタール人段階説を唱えて以来、ホモ属人類の進化に関わる動向を中心に数多くの仮説が提出された。曰く、単一起源説、多地域連続説、多地域進化説、多地域混血説、二地域進化説等々であるが、今のところ『アフリカ単一起源説』と『多地域同時進化説』の支持者が多いようである。従って、この両説を柱にホモ属以降の人類の系図を作り上げることにしよう。

尚、前節までと同様、ホモ・エレクトスを原人、ホモ・ハイデルベルゲンシスを古代型人類または古代型、ホモ・ネアンデルタレンシスを旧人型人類あるいは旧人、並びにホモ・サピエンスを現代型人類もしくは現代型と略記する。

一項　人類進化の概要

多地域同時進化説（同時進化説と略）とアフリカ単一起源説（単一起源説と略）を紹介する。

① 同時進化説：この説は、三九年にF・ワイデンライヒらが提唱した仮説で段階説とも云い、「凡そ一二〇万年前頃に、世界中に拡散したホモ・エレクトスが、ほぼ同時期に各地でホモ・サピエンスに進化」と云う説である。彼らは現代中国人は北京原人、オーストラリアのアボジリニはジャワ原人を祖とし、アフリカ人はローデシア人、現代ヨーロッパ人は旧人子孫と考えていたようである。

② 同時進化説：この仮説は、C・ストリンガーが八四年に提出した説で、二次出アフリカ・モデルと云われているように「ある時アフリカに出現した単一の集団（著者注、現代型サピエンス）が一〇万年前前後の頃アフリカを出て、ホモ・エレクトスに替って、全ての現生人類の祖になった」とする説である

③ エルガステルとエレクトス：同時進化説と単一起源説とも、ホモ・エルガステルの名称が不在の頃の説であり、「一二〇万年前頃、ホモ・エレクトスが出アフリカを実施」と述べているが、八四年の国際会議で、早期アフリカ原人と後期アジア原人の異同が討議され、アジア原人はアフリカの母集団とは遺伝的に隔離され、「移住地の環境に適合した形質を獲得した異集団」と認定。学術名としてアフリカ系原人に〝ホモ・エルガステル〟、アジア原人に〝ホモ・エレクトス〟の名を与えた。また、出アフリカの時代も一五〇万年前に前倒しされているので、今後の自説には、「一五〇万年前頃、ホモ・エルガステルが出アフリカを敢行し、新しい地域環境に適応してホモ・エレクトスに進化」を採用する。

二項　人類進化の実際

これまで述べてきた、第一節から第八節までの証拠資料を、人類進化の舞台となったジャワ・オーストラリア地域、東アジア地域、ヨーロッパ地域、並びに人類の故郷・アフリカ地域に別けて纏め直すことにする。

1．ジャワ・オーストラリア地域

① ジャワ原人とソロ人：中東から東漸したエルガステルは、寒冷期の一〇〇万年前頃に大陸と地続きにな

ったスンダランドを経てジャワ島のトリニールとサンギランに到達。新天地の環境に順応して、ホモ・エレクトスに進化。学名ピテカントロプス・エレクトス、通称はジャワ原人。次いで二〇万年前頃、ジャワ島ガンドンに古代型ソロ人の姿が現われた。

② オーストラロイドの出現：五万二千年前頃にはオーストラリア北部・アーネムランドに人影が見られるようになり、四万から三万五千年前には現代型人類の時代に入り、ウィランドラ湖人等が登場。一万年前前後の頃には、カウ・スワンプやキーラーにアボジリニが現われ始めた。アボジリニは形態学的にジャワ原人やソロ人に似通った点が認められると云い、同時進化論者たちは「この区域では、ジャワ原人からオーストラロイドへ向かう系列は、ソロ人→ウィランドラ湖人→カウ・スワンプ人の順に連続的な形態変化が認められる」と主張している。言い換えれば、アボリジニはジャワ原人の子孫と云うことになり、同時進化論者たちの主張の原点となっている。従って、ジャワ原人はアボジリニたちの祖父母に該当することになる。

2．東アジア人の血統

東アジア人と云っても、我々日本人や蒙古人は当然として、アメリカ・インディアンやイヌイット、タヒチ人、ハワイ人等を含むモンゴロイド成立の過程を示す。

① 原人と古代型サピエンス：アフリカを離れて東へ進んだエルガステルたちは、一五万～一一〇万年前に中国藍田に到達。四六万年前頃には北京郊外周口店に登場。この間に東アジアの気象条件に順応してホモ・エレクトスに進化。その名はシナントロプス・ペキネンシス、北京原人。彼らは二三万年前頃まで周口店で過ごしたと云う。

未だ北京原人が健在だった一八万年前には、金牛山人、次いで一三万～一八万年前に大荔人、一四万～一二万年前に馬壩人等、古代型サピエンスの姿がみられた。

② 現代型サピエンスの登場：古代型馬壩人の後、五万年前頃に柳江人、次いで三万年前頃の周口店上洞人が出現。柳江人、上洞人共にモンゴロイドの祖である。日本や東南アジア並びにオセアニアの島々には柳江人系の人たちが拡散する傾向が見られ、モンゴルやシベリアの内陸へ侵出して北方民族的な資質を得た上洞人系のモンゴロイドが、陸続きのベーリンジア経由で新大陸に拡散。アメリカ・インディアンやイヌイットの祖になったと云われている。

3．ヨーロッパにおける人類の消長

熱帯地方を故郷とする人類にとって、ヨーロッパの気象条件は厳しいものであり、古人類の歴史を辿ると、ヨーロッパへの侵出には幾多の苦難が伴われていたことが

窺える。

① ヨーロッパの原人：段階説や多地域同時進化論者は「五〇万年前頃のハイデルベルグ原人を始祖としてネアンデルタール人が生れ、現代ヨーロッパ人を形成」と主張している。彼らの云うハイデルベルグ原人は、現在では、古代型サピエンスに類別されているが、祖のことは別として、ヨーロッパ原人の名は馴染みが薄いため、現在知られている最古のヨーロッパ人を探してみた。

ヨーロッパ最古の人類は、七〇万年前頃のローマ郊外に住んでいたチェプラーノ人とされ、彼らはアジアの後期原人に形態的類似性が云われているので、ヨーロッパ原人と見做し得るであろう。

これとは別に、ヨーロッパ原人のリストが見つかったので良を開くと、チェプラーノ人の他にイタリアのイゼルニア人（七三万年前）、ギリシャのペトラローナ人（六〇万年前）、フランスのテラアマータ人（四〇万年前）、ハンガリーのベルテシュシェレス人（三〇万年前頃）等の名が連なっていた。

② 古代型人類：ヨーロッパの古代型サピエンスとしては、五〇万年前頃のドイツ・マウエル人（旧名ハイデルベルグ人）を初め、イギリスのスウォンズクーム人（四〇万～二五万年前）、スペインのアタプエルカ人（五万～一二万年前）、ギリシャのペトラローナ人（三〇万～二〇万年前）、フランスのモンモーラン人（一九万～一三万年前）等々が知られている。

古代型人類の一員にギリシャのペトラローナ人の名が見られた。この名は六〇万年前の原人にも認められたので、ギリシャのペトラローナでは、原人から古代型人類が発生したことを暗示している。ましてや、ジャワや東アジアでは原人から古代型への進化が成立しているので、ヨーロッパでも原人から古代型人類が発生したと考えても不当とは云い得ないであろう。

③ 旧人ネアンデルタール人：三〇万年前頃のヨーロッパには、古代型サピエンスから分岐した旧人ネアンデルタール人が出現。彼らはその後ヨーロッパ各地に生活圏を広げたが、二万七千年前頃、消息を絶った。旧人型人類は現代型人類の兄貴分に当たるが、直接的な血縁関係についての資料はない。

④ コーカソイドの誕生：ヨーロッパに最初に現われた現代型サピエンスは、コーカソイドの祖となったクロマニヨン人であり、四万年前頃のことである。クロマニヨン人と同時代とされる人骨はフランスのソリュトレーやオーリニャック、イタリアのグリマルディ等々で発見され、一万年前頃までの現代型サピエンスの遺跡は30ヶ所以上と云われている。

4．人類揺籃の地・アフリカ

人類発祥の地・アフリカはホモ属人類誕生の地でもあ

る。それに加え、一五〇万年前頃に至ると、ホモ・エルガステルが一次出アフリカを、次いで一〇万年前頃には、現代型サピエンスが二次出アフリカを敢行して、人類をユーラシア大陸並びに新大陸へ送り込んだ人類揺籃の地である。

① ホモ・エルガステルの進化：猿人時代のことは扨ておいて、ホモ属人類初期の時代、二〇〇万年前頃から一〇〇万年前頃までは、ホモ・ハビリス、ホモ・ルドルフェンシス並びにホモ・エルガステルが活躍していた。エルガステルは一五〇万年前前後の頃、出アフリカを実行して、移動先でホモ・エレクトスに進化し、夫々、ジャワ原人、北京原人、ヨーロッパ原人になった。

② 古代型サピエンスの発祥：一〇〇万年前頃、エリトリアにおいて、エルガステルが古代型サピエンスに進化したと云われており、六〇万年前頃にはエチオピア・ボドに古代型人類が認められるようになった。

その後、三〇万年前には、ザンビアのブロークン・ヒルのローデシア人や二五万～二〇万年前のモロッコ・ザレーの古代型人類が知られている。斯くして、アフリカでサピエンス化した古代型人類はヨーロッパの地へ進出。五〇万年前頃のマウエル人等、ヨーロッパの古代型人類を形成した。

③ 現代型サピエンスの発生：古代型人類はアフリカで、現代型人類に進化したとされている。事実、アフリカ特に南アフリカには初期現代型人類の遺跡が多く、一二万年前頃のクラシーズ河口洞窟、九万～七万年前のボーダー洞窟、七万五千年前のブロンボス洞窟がある。クラシーズ化石人骨の骨格は、現代のコイサン族に類似しているため、彼らの祖先とされている。コイサン族はコイコイ人（蔑称ホッテントット）とサン人（蔑称ブッシュマン）の集合民族である。

その他、現代型人類誕生を示唆する資料として、「六七年に出土したエチオピアのオモ・キビッシュ一号化石が現代型最古の化石」とか「現代型人類最古の二六万年前の頭蓋骨断片が南アのフローリーバッドで発掘」があり、モロッコのジェベル・イルードで一〇万六千年前の人骨が発掘されているので、現代型サピエンスはアフリカで発祥したことは確実である。

④ 中近東の遺跡：一〇万年前前後の頃になると、中近東の地に現代型サピエンスの姿が認められ、イスラエルには九万二千年前のカフゼー、一〇万年前頃のスフール、それ以前のタブーン等に足跡が残されている。この地では、ヨーロッパから南下して来たネアンデルタール人と共存していた。彼らはこの地を起点として、ユーラシア大陸へ進出して行った。

三項　人類の系譜を辿って

人類の仲間を知るには、系図を作るのが手っ取り早い。系図と云っても、猿人の時代は別として、一項に示した人類進化説の『多地域同時進化説』並びに『アフリカ単一起源説』に準拠して、ホモ・エルガステル以降の人類の系譜を辿ることにした。

従って、進化説を復習して頭の中を整理すると、同時進化説は「一次出アフリカを果たしたホモ・エレクトスが、ほぼ同時期に各地でホモ・サピエンス化した」とする説である。他方、単一起源説は「ある時アフリカに出現したホモ・サピエンスが二次出アフリカを行い、エレクトスに替って、全ての現生人類の祖になった」とする説である。両説の相違は前者が一次出アフリカ、後者が二次出アフリカにポイントを当てていることである。しかし、斯かる解釈の相違はあっても、両説の根底に横たわっている考古学的なエビデンスは同じである。従って、二項に紹介した事実関係から系図を素描することにしよう。

1．系図のイメージ

先述の人類進化二説は、一二～一〇万年前頃に出アフリカしたホモ・エレクトスから話を始めているが、八四年の国際会議で、アフリカの原人ホモ・エレクトスをホモ・エルガステルと命名することになり、また、出アフリカの時代は一五～一〇万年前に修正されている。従って、アフリカには原人不在と云うことになるので、この系図では、エルガステルを元祖として話を進める。

同時進化説では、原人→古代型サピエンス（若しくは、旧人ネアンデルタール人）→現代型サピエンスの順に並ぶので、我々現代型サピエンスは原人の孫に該当する。また、エルガステルは原人の親であるから、我々の曾祖父母に相当する。

次に、単一起源説の主張に基づいて親子関係をみると、現代型サピエンスの両親はアフリカ在住の古代型サピエンスに限定される故、ジャワ原人や北京原人は我々の祖父母にはなりえない。我々の祖父母はエルガステルである。では、原人は我々の何に当たるかと云うと、原人は古代型サピエンスより早く誕生しているので叔父母ではなく、伯父母である。

序でにネアンデルタール人に触れると、彼らは現代型誕生以前に古代型から分離しているので、現代型の兄姉に相当する。系図には記載しないが、ホモ・サピエンス・イダルツはネアンデルタール人の弟妹、現代型サピエンスの兄姉に位置する。

以上のように、エルガステル以降の系類を二つの進化説に則って確認できたので、このイメージに従って、現生人類までの系譜を生物学的人種名（太枠内）で示すと、ホモ・エルガステル、ホモ・エレクトス、ホモ・ハイデルベルゲンシス（古代型）並びにホモ・サピエンス（現

代型）がピック・アップされ、この太枠内に二項で拾い集めたジャワ原人とかクロマニヨン人等のような通称、乃至は一般名を生息年代と共に地域別に記載する。

人類先進地としては、ジャワ・オーストラリア、東アジア、ヨーロッパ、並びにアフリカの四地域があり、夫々の地にオーストラロイド、モンゴロイド、コーカソイド及びネグロイドが育まれたのである。

2．血統の存続

血統存続の状況をジャワ・オーストラリア、東アジア、ヨーロッパ及びアフリカの四地域ごとに纏める。

① ジャワ・オーストラリア：一五〇万年前頃に出アフリカしたエルガステルの集団は東進し、ジャワ島のトリニールに一〇〇万年前頃、次いでサンギランに七〇万年前頃に到達。ジャワ原人に進化。二〇万年前頃に古代型サピエンス・ソロ人がガンドンに出現。

次いで、四万年前頃から現代型サピエンスの姿がオーストラリア各地に散見。四万年前頃のウィランドラ湖人、三万五千年前頃のマンゴー湖人、一万五千年前頃からカウ・スワンプやキーラーに現代アボリジニの祖となるオーストラロイドが出現。

この流れに対し同時進化説の論者たちは、「ジャワ原人からオーストラロイドへ向かう系列は、ソロ人→ウィランドラ湖人→カウ・スワンプ人の順に連続的な形態変化が認められる」と主張しており、現時点では彼らの主張を覆す意見が見られないので、ジャワ・オーストラリア地域では、ジャワ原人の血統は現代まで存続し、現生のアボジリニたちはジャワ原人の孫に位置付けることになる。

② 東アジア：出アフリカしたエルガステルの集団は、一一五万～一一〇万年前に中国藍田（らんでん）、四六万年前頃周口店に出現。北京原人に進化。二三万年前頃まで周口店に残存。北京原人が残留していた二八万年前には古代型サピエンスの金牛山人、次いで二三万年前には北京原人の生れ変りの如く大荔（ダーリ）人が誕生。最も新しい古代型サピエンスは一四万～一二万年前の馬壩（マーバ）人であった。その後、五万年前頃に柳江人、三万年前頃に周口店上洞人などの現代型サピエンスが登場。

以上のように、東アジアでは北京原人の血統は、古代型サピエンスの金牛山人乃至は大荔人に受け継がれた公算が大であるが、古代型から現代型への継承状況をみると、古代型最後の馬壩人の一四万～一二万年前に対して、現代型サピエンスの発生は五万～三万年前の柳江人や上洞人であり、この間の七万年以上の時間間隔は血統維持の可能性に対して否定的である。従って、北京原人から古代型へ受け継がれた血統は、現代型サピエンスまで引き継がれたとは考え難い。今後、一〇万年前前後の古代型或いは現代型サピエンスに関する考古学的発見がない

万年前頃に到達

代型サピエンス・ソロ人がガンドンに出現

次いで、四万年前頃から現代型サピエンスの姿がオー

ストラリア各地に散見。四万年前頃のウィランドラ湖人、

三万五千年前頃のマンゴー湖人、一万五千年前頃からカ

ウ・スワンプやキーラーに現代アボリジニの祖となるオ

ーストラロイドが出現。

この流れに対し同時進化説の論者たちは、「ジャワ原

算か

と、古代型最後の馬壩人の一四

現代型サピエンスの発生は五万～三万年前の柳江人や

洞人であり、この間の七万年以上の時間間隔は血統維持

の可能性に対して否定的である。従って、北京原人から

古代型へ受け継がれた血統は、現代型サピエンスまで引

き継がれたとは考え難い。今後、一〇万年前前後の古代

型サピエンスに関する考古学的発見がない

○ 血統維持　× 絶滅種

括弧内数字は生息年代（単位：万年前）

限り、東アジアにおける同時進化説に賛意を表することは有り得ないだろう。

③ ヨーロッパ：　この地には、原人としてイタリアに七三万年前のイゼルニア人、七〇万年前のチェプラーノ人、ギリシャに六〇万年前のペトラローナ人、フランスに四〇万年前のテラアマータ人、ハンガリーに三〇万年前頃のベルテシュシェレス人が登場。

古代型サピエンスは、五〇万年前頃のドイツ・マウエル人、四〇万～二五万年前のイギリス・スウォンズクーム人、三五万～二〇万年前のスペイン・アタプエルカ人、三〇万～二〇万年前のギリシャ・ペトラローナ人、一九万～一三万年前のフランス・モンモーラン人であった。古代型サピエンスの一員・ペトラローナ人の名は六〇万年前の原人にも認められ、ギリシャ・ペトラローナでは、原人が古代型へ進化したことが窺われ、その上、ヨーロッパでは原人と古代型が同時代に共生していた事実を加えると、原人と古代型間の血脈継承が可能だったと推察される。

次いでヨーロッパでは、三〇数万年前頃、古代型人類から旧人ネアンデルタールが分枝。二万七千年前に消滅。旧人と現代型人類の直接的な血縁関係を示す資料はなかった。

ヨーロッパに最初に現われた現代型サピエンスは、コーカソイドの祖になった四万年前頃に生息していたフランスのクロマニヨン人、ソリュトレー人やオーリニャック人、イタリアのグリマルディ人である。尚、グリマルディ人を黒人の祖とする説がある。しかし、この説は首肯し難く、寧しろ、この説からグリマルディ人の皮膚色が黒かったことが想起されるので、個人的な見解を述べると、グリマルディ人は黒人から白人へ転化する過渡期の人類だったのではなかろうか。

以上のように、ヨーロッパに現われた人類の足跡を追うと、原人と古代型間の血統授受を暗示する資料は認められたが、古代型最後のモンモーラン人（一三万年前）と現代型最初のクロマニヨン人（四万年前）との間の血統維持は時間的に不可能であると云わざるを得ない。従って、ヨーロッパにおいても東アジアと同様、同時進化説は成立しなかった。

④ アフリカ：　一次出アフリカ後にアフリカに残留したホモ・エルガステルのうち、エリトリアの集団がほぼ一〇〇万年前に古代型サピエンスに進化し、六〇万年前頃にはエチオピア・ボドに現われた。アフリカでサピエンス化した古代型サピエンスも、エルガステルと同様に出アフリカを行い、ヨーロッパへ進出して五〇万年前頃のマウエル人を始め、ヨーロッパの古代型サピエンスを構成した。

ところで、前出③ヨーロッパの項で「原人と古代型人類間の血統継承の可能性」を示唆したが、この示唆の是

非を再考すると、「アフリカから進出して来た古代型ペトラローナ人は、好適な生活環境のペトラローナを居住地に選んだが、偶然、その地はペトロラーナ原人の故地であった」と云うことではなかろうか。ペトラローナは古人類の生活環境として望ましい地方だったに相違ない。と云うような理由で、前出の推論を「ヨーロッパの古代型サピエンスは、アフリカで誕生して出アフリカを果たした集団」に置き換え、ヨーロッパに関しては同時進化説の主張に対して否定的立場を執ることにする。

アフリカの人類進化に戻る。その後の古代型サピエンスは、三〇万年前ザンビアのブロークン・ヒルではローデシア人として知られ、二五万～二〇万年前のモロッコ・ザレーにも足跡が残されている。

古代型人類はアフリカにおいて、現代型サピエンスに進化したとされており、現代型人類の遺骨が二六万年前の南アフリカ・フローリーバッドで発掘されているので、アフリカにおける古代型と現代型の受け継ぎは円滑に進められたものと推測される。その後、一二万年前のクラシーズ河口洞窟、九万～七万年前のボーダー洞窟、七万五千年前のブロンボス洞窟、一〇万六千年前のモロッコのジェベル・イールド等で発見されている。

以上の証拠から、アフリカにおいては、エルガステル→古代型→現代型の順に血統が保たれていたことが窺われた。

尚、二次出アフリカを示す遺跡がイスラエルの各地に残されている。それらは九万二千年前のカフゼー、一〇万年前頃のスフール、それ以前のタブーンの各洞窟である。

以上、三項の結果を小括すると、ホモ・エレクトス不在のアフリカは別として、一次出アフリカによって人類が始めて足跡を記した三地域における血統伝承の様態は三者三様であり、ジャワ・オーストラリア地区では原人→古代型→現代型への受け渡しが認められ、東アジアでは原人→古代型間の授受はあったが、古代型→現代型への襷リレーは不成立。ヨーロッパでは原人→古代型→現代型間のいずれも血統授受は見られず、アフリカから養子を向かえると云う状況であった。従って、多地域同時進化は不成立で、同時進化論者の主張するパターンはジャワ・オーストラリアの一地域に見られるのみであった。

四項. ミトコンドリア・イブ説

三項では形態学的にみた古人類学の資料を中心に、人類進化の様相を多地域同時進化説とアフリカ単一起源説に沿って検討した。その結果、多地域同時進化説に対して否定的な様相が見受けられたが、同時進化説と単一起源説のいずれが正しいかを決定する結論に至らなかった

ので、これまでとは異なった手法で得られた資料に基づいて人類進化の過程を検討することにしたい。

近年は分子生物学の進展が著しく、二〇世紀末以降、古人類学の領域でも分子生物学、就中、遺伝子解析の技法を活用して、現代人の生体資料から過去を推測することが可能となった。その一つにミトコンドリアDNAを解析して生物起源を辿る方策が利用されるようになった。ここで述べるミトコンドリア・イブ説は、カリフォルニア大学のグループが、八七年に〝ネイチャー〟に発表した論文『ミトコンドリアDNAと人類進化』に基づくものである。

この論文の意味を十分に理解できないが、要旨を紹介すると、「アフリカ、アジア、ヨーロッパ、ニューギニア、オーストラリアの五地域の女性胎盤中のミトコンドリアDNAを解析し、これらの全てのミトコンドリアDNAは、二九万～一四万年前（中央値で二〇万年前）に、恐らくアフリカで生きていたと思われる一人の女性から派生」と云う結果を発表。この論旨を意訳すると「世の中の全ての人たちは、二〇万年前頃のアフリカの一黒人女性の子孫」と云うことになるので、この仮説に飛び付いたジャーナリストたちは、この一女性を旧約聖書に語られているイブになぞらえて、ミトコンドリア・イブと名付け、「二〇万年前にアフリカに住んでいたミトコンドリア・イブが人類の祖」と報道したため、ネーミングの妙に釣られて一般人にも知られるようになり、ミトコンドリア・イブが一人歩きするうになった。

このミトコンドリア・イブ説には、賛否両論はあるが、前出アフリカにおける早期現代型サピエンスの考古学的証拠を踏まえて考察すると、現状では「現代型サピエンスの誕生は二〇万年前前後」と云うのが妥当な線と思われるので、イブ説に賛意を表して、三項で描いた系図の修正を施すことにしよう。

イブ説は「二〇万年前前後の頃に、アフリカ在住の黒人女性が現生人類の祖になった」と云うことであるから、ネグロイドは元よりコーカソイド、モンゴロイド、オーストラロイドの祖になったイブの両親は、アフリカに住む古代型サピエンスでなければならない。

図1で説明すれば、図左側の古代型サピエンスから現代型サピエンスへ向かう矢印が作動して、図右翼のソロ人からオーストラロイドへ進む道が閉鎖される（図2参照）。

従って、三項の推論では「東アジアとヨーロッパ地域の進化の流れは単一起源説に属し、ジャワ・オーストラリア地域は同時進化説」としたが、イブ説を容認すれば、同時進化説は全面的に否定され、「現代人は全てアフリカ起源の現代型サピエンスから派生し、結局は単一起源説支持」と云う推論に到達するので、ジャワ原人からソロ人を経てオーストラロイドへ向かう系列も閉ざされる

ことになり、ジャワ原人は現アボジリニの祖父母ではなく、伯父母に位する。

『人類と仲間』を閉じるに当たって一言述べると、「人類の歴史は猿人、原人、旧人、新人の順に進化した」と我々世代の者は教えられてきたが、古人類の残した足跡を辿ると、図2に太線の矢印で示したように、ホモ・エルガステル→古代型サピエンス（ホモ・サピエンス・ハイデルベルゲンシス）→現代型サピエンス（ホモ・サピエンス・サピエンス）の順に進化し、我々の血管内に原人や旧人の血は流れていないと云う推論が導かれた。

引用文献

富村傳、文明のあけぼの、講談社新書、一九七三

今西錦司他、人類の誕生、河出書房新社、一九八九

F・ファッキーニ著、片山一道訳、人類の起源、同朋出版、一九九三

馬場悠男他、人類の起源、集英社、一九九七

諏訪元、『人類を育てたアフリカ大陸』、新書アフリカ史、講談社、一九九七

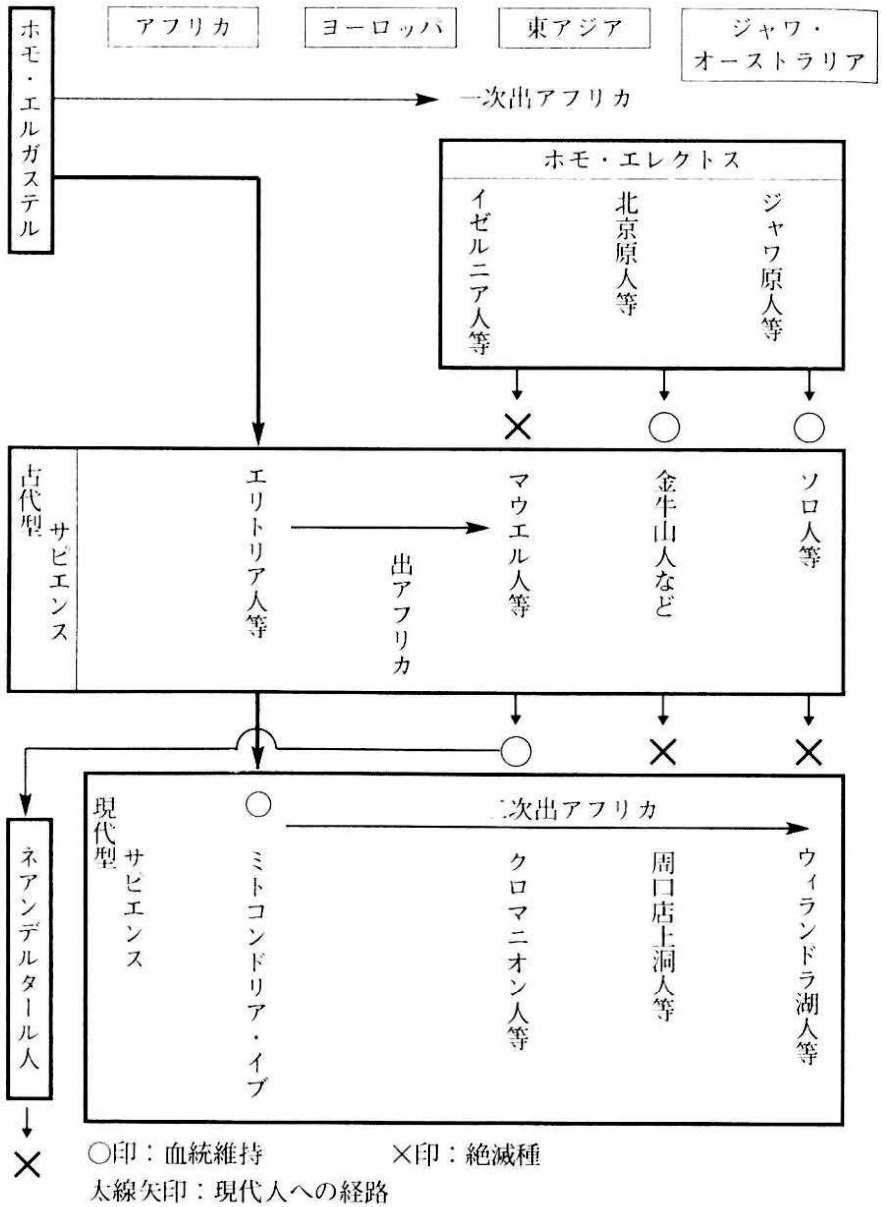
葉山杉夫、ヒトの誕生、PHP新書、一九九九

河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九

貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社、二〇〇〇

［人類の仲間・完］

図2．人類の系譜（修正図）



○印：血統維持　　×印：絶滅種

太線矢印：現代人への経路

太線枠：種、亜種別の種類名

（司馬雑感　三十六）

請西藩と飯野藩

山田嘉久

いずれも昭和一ケタ生まれの我々三人組が木更津在住のMさんの案内で木更津近辺の城跡を訪れたのは、暑さのまだ残る九月中旬だった。

Mさんは戦後直後に地元の木更津高女に通っていたという元祖「歴女」である。

房総地方には幕末、十七もの藩が所在した。

現在は茨城県に属するものを除いても十五を数える。しかも明治元年には徳川家達が静岡で駿河遠州七十万石を与えられたのに押し出される格好で、この両国から七藩が房総半島に引っ越してきたので、これらを加えると総計二十二となった。

これら房総の諸藩は江戸開城の後も、二十二藩の一つで木更津の山手にあった請西藩（一万石）というちっぽけな藩の殿様林忠崇（十九才）の破天荒な行動に振り回されることになる。

そのため請西藩は、全国三百藩のなかでただ一つの取り潰しの「栄誉」を担うことになったのである。

一、脱藩大名―請西藩の場合

「請西藩」の陣屋（真武根陣屋）跡は木更津市の郊外（旧上総請西村）にあった。

しかし遺跡の標識と、それを示す石碑が建っているのみで、驚くほど何も残っていなかった。幕末の藩主出陣に際して、自ら火を放ち陣屋全部を焼いてしまったためである。

陣屋跡は目下、土地造成中で、ブルトウザーの音のみが響いていたが、石碑が「兎」の形をしていたのはご愛嬌だった。

1　林家の先祖

請西藩の藩主林家の先祖は清和源氏小笠原氏の流れをくむ家系である。

徳川家康から八代前の祖松平親氏が上野新田郡から三河松平郷に移る途中、林家に宿泊した。が、もてなす料理がない　そこで当主みずから山野に出て兎一羽を得て、元旦の吸い物として饗したら喜ばれたという伝承がある

こうして林家では代々元旦には徳川家に兎を献上して、諸侯に先だって最初に杯を賜ることが恒例となった。（「献兎賜杯」の儀式）

幕末、一万石の小大名が、なぜ強大な新政府軍に立ち向かおうとしたのかの素朴な疑問は、徳川家と林家のこの特別な関係に求められるであろう。

ともかく、そのような縁で林家は、江戸時代には旗本となり、元禄十六年（一七〇三）には町奉行も勤めた。

十一代将軍家斉の時代には側近として重用され、文政八年（一八二五）には一万石の大名となり、初めて上総貝淵村に陣屋を設けた。（貝淵藩）

その後、上総国請西村に陣屋を移し真武根陣屋と称した

移転の理由はこの頃、もし外国船が江戸湾内に侵入した場合、貝淵陣屋では無防備なため内陸の台地に移転したためである。以後、請西藩と呼ばれるようになった。

幕末の藩主忠崇は慶応三年十月には江戸城清水口の定番を勤めたが、同月には大政奉還があり、十二月には王政復古の大号令が発せられた

徳川十五代将軍慶喜は江戸城を出て上野東叡山で謹慎し恭順の意を示したが却下された。忠崇はこれを不服し軍備を整え始めたものである。

2　請西藩と戊辰戦争

明けて慶応四年正月三日、鳥羽伏見の戦いが勃発して戊辰戦争が始まった。

陣屋では新政府に服従か、徳川家のため戦うかを議論したが、どちらかとも決めかねていた。

四月十三日に江戸から脱走した福田八郎右衛門率いる撤兵隊およそ三千人が木更津に上陸し、福田自身が忠崇に面会を求め徳川方につくことを懇請すると、忠崇はこれに賛同して戦争の用意に取りかかった。

しかし撤兵隊は粗暴な振る舞いが多く規律も乱れているのに対して、その後に木更津に上陸した遊撃隊三十余名は隊士の素行も良く真の忠義の志を持つとみた忠崇は遊撃隊を気に入り、以後遊撃隊と行動を共にすることになる。

忠崇の出陣（脱藩？）には請西藩の家老以下藩士数十名が同行した。病気で寝たきりのある武士は槍を杖代わりによろめきながら参陣したと伝えられる。拠点真武根陣屋の表門を開いた時には、大砲を一発、放った。轟音が響き渡った。

それを合図に領民は沿道に集まり、義のために決起した林軍を見送ったという。全国で唯一の「脱藩大名」の

出陣であった。

通常、「脱藩」とは例えば、水戸の関鉄之介、薩摩の有村次左衛門、土佐の坂本竜馬、白河の沖田総司のように脱藩者＝下級武士が常識だが、林忠崇はわずか一万石の大名とはいえ、れっきとした譜代藩の当主であった。

しかもその脱藩は単身いずことなく姿を消すという風ではなく、家老以下おもだった家来たちと連れ立ち、領民たちに見送られて陣屋を去るという威風堂々たるものだった。

まず最初に隣地の飯野藩陣屋（現富津市）を取り囲み、武器、兵員と軍資金を受け取った。

その後、館山（現館山市）に向かい、和船二隻に分乗して対岸の真鶴（神奈川県）に渡った。

すぐさま雄藩小田原城に赴き藩主以下に対面してこの度の決起の盟主になるよう説得したが断られ、崔山、御殿場、沼津あたりを転々した。

五月十九日の江戸の彰義隊の決起に対応して新政府軍を挟撃するため、箱根に着陣、関所を守備する小田原藩の軍勢と激しく戦っている。

しかし忠崇が箱根に進撃する二日前には、新政府は請西藩領の没収を決定して、同時に忠崇を「残賊」と規定していた。これにより請西藩一万石の領地は没収されたばかりでなく江戸の藩邸も京都屋敷も取り上げられしまった。

因みに請西藩の江戸上屋敷は日本橋蛎殻町に、下屋敷は本所菊川町にあった。

一方、小田原勢と遊撃隊の兵力の差は歴然のため、遊撃隊は退却を余儀なくされ、熱海を出帆、館山に入港したが、前述の通り忠尚には帰るべき領地はなかった。

そこで旧幕府軍の長崎丸に便乗して奥州越列藩同盟の戦列に加わるため海路北上した。

六月三日、小名浜（福島県）に上陸し、平潟の戦争に参加、その後、会津若松、米沢（山形県）など各地を転戦した。

やがて同盟の盟主仙台藩が降伏するが忠崇の戦意は衰えない。

この上は榎本武揚や土方歳三ら徹底抗戦派と蝦夷地に渡る決意を固めるが、徳川宗家が駿府七十万石として存続するとの報に接して、九月二十一日に仙台（宮城県）で投降した。

その時、忠崇は死を覚悟して「辞世の句」を詠んでいる。

「真心の、あるかなきかはほうり（屠り）出す　腹の血しおの色にこそ知れ」

半年近い行軍の末、当初五十九名だった忠崇と請西藩士の一行は戦死や病死などで二十名にまで減じていた。

3　維新後の林家

請西藩は慶応四年五月に所領を没収され、全国の大名

で唯一取り潰しの処分を受けたのは前述のとおりである。

戦後、忠崇は親族の肥前唐津藩小笠原家に身柄預けとなり謹慎の後、明治五年（一八七二）、罪を許されたが、ほかの藩主のように華族の特典に浴することはなかった。そのため林家は華族ではなく、士族の身分に甘んじざるをえなかった。

維新後、かって忠崇が君臨していた真武根陣屋は「西林」と改称され、「開発場」に指定され農民五十三人が入植したが、なんとその中に忠崇がいたのである。

かって一万石の大名だったものが自分の領地内に一介の農民として入植する―この選択に踏み切った忠崇の胸中は如何ばかりであったであろう。

幕末には、幕閣からの期待も大きく、将来は閣老となる器と評されていた人物が、である。

しかし此処での帰農生活も長くは続かなかった。

明治六年（一八七三）暮、彼は東京府に十等級の下級官吏として任用され、学勤課に勤務することになる。因みにこの時の東京府知事は旧幕臣の大久保一翁であった。

しかし此処も長くは続かなかった。その後、大阪府庁に勤務するなど転職と窮乏の日々が続いた。その後の彼は官吏のほか商家の番頭、神主など職を転々とした。

明治十七年には華族令が発布され、「勲五等」（公候伯子男）が設けられ、旧大名はすべて子爵以上を受爵したが、林家は男爵さえなれなかった。この時には大名以外の文武の功臣二十余名（勝海舟、田中光顕など）が華族に列せられている。

その後、林家周辺の「家格再興運動」により、ようやく明治二十六年（一八九三）に家督を継いだ甥の忠弘が男爵を受爵して（しかし普通の大名よりもワンランク下）名誉回復がかなった。

忠崇は昭和十六年に九十四歳で死去するまで、昭和まで生き残った「最後の殿さま」として、それなりの人気は集めた。忠崇の死が、我が国最後の大名の死だった。

とはいえ、彼の死んだ場所は次女ミツの経営するアパートの一室だった。

臨終に際して、辞世の句を促されたが、既に慶応四年、新政府軍に投降した際に詠んでいると断ったという。彼によれば自分の人生は幕末に既に終わっていると云いたかったのであろう。

最近評判の「ちいさな城下町」（安西水丸著）でも、「若さというか、お坊ちゃん気質というか、いずれにしても好きな人物である」と評価している。

また「脱藩大名の戊辰戦争」を書いた作家中村彰彦は晩年の忠崇が記者たちから幕末時の心境を聞かれたことに対して「琴となり下駄になるのも桐の運」と俳句で答えた話を披露している

二　「上総の剣客」と「アメリカの剣客」
―飯野藩の場合

遡って慶応四年（一八六八）四月、旧幕府の回復を図ろうとする請西藩主林忠崇を総督とした請西藩軍は近くの富津陣屋を包囲したことは先に述べた。

陣屋では大砲六門のほか小銃、食糧、金千両を与え足軽ら二十余名を請西藩軍に参加させた。しかしこの事が後に新政府軍に知れ、その責任をとって飯野藩士野間銀治郎らが切腹して謝罪することによって罪を免れた。

なお、野間銀次郎は講談社初代社長である野間清治の伯父に当たる。

1　飯野陣屋跡

我々が木更津市内を南下して、隣の富津市下飯野にある飯野陣屋跡に到着したのは正午前だった。驚いたことには其処には、地元の歴史愛好者の人々数名が我々を迎えてくれた。事前にMさんが依頼しておいてくれたらしい。

その中の代表者S氏から、まず飯野藩の歴史についてのレクチャーを聞き、同氏の案内で陣屋周辺を巡った。

飯野陣屋は下飯野山王にあって、飯野藩二万石、保科氏十代、二百二十年余りにわたる居城である。

陣屋の広さは内郭が約四万坪、外郭と周囲の藩士の邸宅を合わせると七万坪（二十八ha）あり、他の城郭と比較しても、会津若松城二十一ha、姫路城二十三haと遜色なく、そのため日本三大陣屋（長州徳山、越前敦賀、上総飯野）の一つと云われる。城に準じて本丸、二の丸、三の丸と区分されている。

外郭は約二㌔の土塁と幅六㍍の水掘りで囲まれ（県指定文化財）、東側に表門、西側に裏門があった。戦国時代に見られる築城の遺構も残っている。

飯野陣屋は「城を持たない大名の大名陣屋」の代表格であろうが、因みに「陣屋」にはこのほか、

1　旗本が知行地支配のために設けた「旗本陣屋」
2　他地域の大名が飛び地支配のための「出張陣屋」
3　幕府の領地を管理する「代官陣屋」
4　異国船に備えて海岸線に設けた「海防陣屋」　などがある。

なお、飯野陣屋の北側にある「おおてばし」から笹塚地区に入る路は藩主の参勤交代に使用された路であるといわれるが、藩主代々、江戸城の定番を勤めていたので、江戸の藩邸で暮らすことが多く、この道路はあまり使わなかったとはS氏の説明だった。

（大阪城の定番も勤めているので、現豊中市にも陣屋を持っていた。）

また陣屋東側には明治初年まで飯野藩校「明新館」があった。

外郭は上級藩士の邸宅や長屋があったが、その形跡は

全く残っていなかったが、周囲は約二㍍の溝で囲まれている。道路はどこの城郭でも見られるように、防御のため直角に曲がった「桝形道路」である。

飯野陣屋は江戸時代前期の慶安元年（一六四八）に初代藩主保科正貞によって築造され、明治四年（一八七一）の廃藩置県によって第十代保科正益（まさあり）が飯野藩知事を免じられるまで二百二十三年に渡って存続した。その間、藩主はすべて保科氏であり、他からの転封の全くない、江戸時代では珍しい「純潔の藩」である。

2　飯野藩と会津藩

飯野藩は二万石の小藩だったが、初代正貞の母は徳川家康の妹であり名門の出である。また正貞の父祖の系譜を辿れば武田信玄、勝頼に仕え、正貞の父正光は信濃の高遠城主であった。

そこに送りこまれてきたのが、正貞の甥に当たる二代将軍徳川秀忠の子幸松（後の会津初代藩主保科正之）である。実子のない正光は、当初、正貞を養子としていたが、正之の出現により正貞との養子縁組を反故して（正貞は精神障害者として）正之に家督を継がせた。

そのため、正貞は高遠藩を出奔するが、一方、正之は三代将軍家光の異母弟ということもあって出世していく。出羽最上藩主から会津若松藩主二十三万石藩主へ。

（会津藩の歴史については司馬遼太郎に随筆「一回の浮気が歴史を作った」がある）

一方の正貞はようやく家光より三千石の旗本として召されるが、その後、正之から保科家宗家の印状一式を譲り受け、晴れて保科家再興を果たすことが出来た。正貞この時すでに五十歳、高遠出奔より二十四年が経っていた。

幕末の会津藩主松平容保は悲劇の京都守護職として有名だが、彼の義姉は飯野保科家から養女に入った「照姫」である。

そんな関係から幕末、房総の沿岸警備にあたったのは会津藩であり、富津陣屋を拠点にした。

3　森要蔵（「上総の剣客」）

幕末、飯野藩には著名な剣術指南役として森要蔵がいた。

要蔵は北辰一刀流の千葉周作に師事し、道場「玄武館」の四天王の一人と称された。彼の道場は江戸麻布永坂にあったが、譜代大名の中でも名家といわれる上総飯野二万石の領主保科弾正忠正益の江戸詰めの剣術指南役をつとめた。

「保科に過ぎたるもの二つあり表御門と森要蔵」と称されるほど高名な剣豪して知られる。

その森要蔵について、司馬遼太郎は短篇「上総の剣客」を書いている。

要蔵が江戸の道場から、久しぶりに南総飯野に帰った

翌日、お目見得以上のものが藩主正益よって、広間に集められた。一同、平伏して待つなかを藩主は着座したが、一言も発せず、そのまま席を立った。が、後になって、その夜、藩主は船を仕立て家老一人、近習数人を連れて飯野から海上に出た事を要蔵らは知った。

正益はそのまま海路、伊勢の四日市に到着して、陸路草津に入ってそこから京に使いを出し京に入った。直ちに「勤王詔書」を上程して参内して天機を奉伺した。そして滞京中、所領を朝廷に献上している。

これらの事は、上総の田舎にいた家臣たちには一切相談なく、彼らにとっては全くの寝耳に水であった。家臣一同、「藩主に捨てられた」と思ったのは当然であっただろう。

最後の藩主正益は大阪定番を経たのち、若年寄りにまで昇進して、第二次長州征伐では幕府軍の指揮を務めた。

そんな譜代の飯野藩主が保身のためとはいえ、一夜にして転身を図った行動は、隣合わせの、同じ幕府名門の請西藩の行動と比べると驚かざるをえない。

しかし正益はいち早く機敏な転身を図ったものの、親戚に当たる会津藩が徹底抗戦の構えを取ったため、連座によって謹慎処分となった。これに対して正益のとった行動は幕府側に組した家臣らを処刑したことであった。これによって彼はようやく罪を許された。

藩主の保身のため、犠牲になったのが家臣の森要蔵や野間銀次郎らであった

結局、この藩は「藩主は西軍、藩士は東軍」で戊辰戦争を迎えることとなった。

森要蔵の隣家の野間銀次郎は、藩士二〇名とともに脱走して、旧幕臣が組織した遊撃隊に投じ、箱根で官軍を防ぐために出て行った。のちに敗れて帰国して切腹したのは前述の通りである。

（因みにこの銀次郎の弟好男が要蔵の長女ふみと結婚、その次男が講談社を創設した野間清治である。）

森要蔵は当初、幕末の政局には野間のような関心を示さなかったが、この藩主の行動を見て、隣国の請西藩主林忠崇軍に加わり、門弟二十八名を率いて会津に向かった。七月一日、白河口雷神山の戦いで土佐兵と対戦、三男寅雄とともに敵陣に突進し、父子とも戦死した。寅雄この時十六歳。

その日の模様を、白虎隊の生き残りで、後に東京大学総長となった会津藩士山川健次郎が、晩年くりかえし物語って涙を流したと司馬は書いている。

雷神山の森隊は、丘陵下から討ちあげてくる官軍の銃火にほとんど艶された。身辺すでに十数名になったとき、要蔵は古風な長沼流の軍学どおり、日の丸の軍扇をあげ突撃を命じた。

官軍の大将板垣退助はその武者ぶりの見事さに「撃つな、生きどりにせよ」と命じたらしい。「まるで名人の

二人舞いを見るようだった」と語ったと云う。

二人の遺体は要蔵の弟子によって戦場に近い大龍寺に葬られた。

墓は地元の浄信寺にある。

その浄信寺もSさんに案内してもらったが、浄真寺は保科氏ゆかりの寺であり、二代藩主正景の墓や正景寄進の石灯籠などがあった。また野間銀次郎の墓も此処にある。

4　その後の森家と野間家（「アメリカの剣客」）

森要蔵と野間銀次郎は隣同士で姻戚関係にあることは前述の通りだが、昭和に入ってからの両家の関係についても、司馬は語っている。

昭和九年、いわゆる昭和天覧試合の東京府予選の決勝を争ったのは、要蔵の義理の孫である森寅雄（同姓同名）と銀次郎の甥野間清治（講談社の創始者）の一子恒（ひさし）であった。

結局、野間が勝ってこのときの大会の優勝者となった。

この当時、寅雄は野間家の養子になっていたので、二人は従兄弟同士に当たっていた。いずれも幕末の要蔵の血を引いているので剣術は強かったが、通常は寅雄の方が腕前は上だったらしい。だが、この予選では恒が勝った。

その後の寅雄について、司馬は短篇「アメリカの剣客」を書いている。

その後、寅雄は野間家を出て森姓に戻った。

それと同時に日本を脱出して渡米した。米国剣道連盟の総師範を務めるかたわら、フェンシングを習得して、米国太平洋フェンシング選手権も獲得した。

戦前、タイガー、モリという名はアメリカのフェンシング界で知らぬ者はなかったという。戦前のベルリン五輪、戦後のローマ五輪ではアメリカ、フェンシングチームのコーチも務めた。

その後、剣道とフェンシングの道場をロスアンゼルスにつくり、養家の姓をとってノマ道場と称した。

その関係で、現在でも講談社では剣道が盛んで、社内に自前の道場を持っている。

ともかく、上総の隣り合わせの、しかも共に徳川譜代の名門小藩が幕末の時代、全く正反対の行動をとった。

司馬は明治維新を「立派な革命」だと云う。

多くの歴史家（特に左翼系の）が明治維新は単なる支配階級の権力の移譲にすぎないという歴史観に比べると際立って異質な歴史観（司馬史観）である。

たしかに中国風の解釈（革命とは「天命を革める」）から見れば、明治維新は「革命」ではないかも知れない。

しかし身近に郷土の請西、飯野両藩の維新時の行動をみると、司馬の言い分も納得せざるを得ない。

目耕録（その十六、終章）

―田中淳夫著『いま里山が必要な理由』を読む―二〇一一年、洋泉社、改訂版）―

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（『世説新語』）。

山本鎭雄

里山への関心

森林ジャーナリストの田中淳夫は本書の「はじめに」で、二〇世紀の終わりごろから静かな里山ブームが起きていると感じた。その後、里山ブームは一過性に終わらず、都市住民に里山の風景にどこか懐かしい気持ちを提供し、里山はなぜか身近な自然として注目されるようになった、と指摘している。

リーマンショックは世界経済を震撼させ、「お金がお金を生む」という経済システムの再検討がますます迫られるようになった。投資資本（ファンド）の運用による金融商品を頂点とする「マネー資本主義」にたいして、里山に住む人々が自らの生活と価値観を見直し、絶えず創意工夫を凝らし、頑固に生きる「里山資本主義」が提唱されるようになった。都市に住む若者にも一定の関心が寄せられ、里山を含む、農山村に生きがいを見出し、定住することも時代の一つの風潮となった（『まんじ』一三三号、「日耕録」、その十四）。

「里山」について言えば、『明鏡国語辞典』では、「人が住む地域に隣接した、小山や林や沼などの自然環境」、要するに、「里の山」を意味する。さらに「人が住む地域に隣接する海」、つまり「里山」の海版、「里海」という造語も案出され、しかも「里地」という言葉も使用されるようになった。もっとも、『広辞苑』によれば、「里道は「国道・県道以外の道路の旧称」だが、「里道」は「里山」ブームで案出された造語であろう。

「里山」の意味

「里山」は、「奥山」（深山）、つまり「人里離れた奥深い山」（『広辞苑』）と対比されて解釈されてきた。山国の日本列島では人跡未踏の「奥山」が圧倒的に存在する。ところが、私が耕作している山梨県東部の梁川の山狭村から眺望する「里の山」、つまり人里から地理的にそう遠く離れていない、標高一〇〇〇m未満の山地や山林（林道を除く）はほとんど地権者や管理者が立ち入ることのない「奥の山」同然となっている。

今日では、「里山」は人里と、里人の生活と結びついた山地や山林、要するに、「里の山」ではなく、「里と山」を意味する。農業統計の地域区分で言えば、平場、中間地、山村の三類型のうち、後二者を総称して「中山間地域」にほぼ該当する。この地域は平野部が乏しく、農業として立地条件に恵まれない。ちなみに、山村では傾斜地の畑で農作業をするとき、野良着ではなく、「山着」に着替え、「山仕事」に出かけるという。

都市住民の自然志向の高まり、自然環境に対する意識の変化、巨大都市の弊害にたいして「里と山」が注目されるようになった。この地域は平地農村とは異なり、著名な観光地や行楽地とは別に、「里山」と称して、そこを舞台にハイキングや自然観察、NPOや地方自治体、地域農協などの「里山の保存活動」やグリーンツーリズム、農家民宿の開業、市民農園の開園、農産物直売所の開設など、村人は都市住民に開かれた「里の山」の「内発的発展」を積極的に志向するようになった。

「里山」の多面的機能

従来、農政や農政学を始め、農村経済学、農村社会学などでは、一般に政策的・学問的には「農山村」が対象とされている。「農山村」は「農村」と「山村」に加えて「漁村」を含み、実質的には「農山漁村」を意味する。近年、「農業・農村の多面的機能」が注目され、「農山村」は農畜産物の生産、土砂災害防止などの国土の保全水源の涵養、生物多様性の保持などの自然環境の保全、人々の心が安らぐ良好な自然景観の存在、農山村起源の文化の伝承など、多くの役割を有する「多面的機能」が強調されるようになった。

ちなみに、田中敦夫は奈良県の西南の生駒山中に二畳程のデッキを造り、それを「森遊び研究所」と称し、雑木林や鎮守の森、さらに何千の棚田、数多くの溜め池、散在する人家、山中に伸びた山道を眺め、それらを「里山」と称している。それは「里の山」ではなく、明らかに「里と山」を意味している。

私の身近な「里の山」の観察

私が野菜作りのために通うJR中央線沿線の山梨県東部の「郡内」は、東京の八王子や立川は優に通勤圏であるが、標高約二八〇〇mの畑から眺める標高約八〇〇m以上の山々は、確かに「里の山」である。そこを人跡未踏と言うのは余りにも大げさな表現だが、いずれにせよ、「奥山」に近い。だが、その尾根伝いにハイキングコースが整備され、標高一〇〇〇m級の山頂はハイカーには人気のスポットで、そこから秀麗な富士山を眺望することが出来る。

ところが、皮肉なことに、この「里の山」を開発するために、行政はスーパー林道を計画し、毎年予算を付けて延長しているが、未だに全通していない。この林道は林産物の運出のために使用されず、大型トラックが桂川渓谷に土砂を捨てるために利用されている。捨場の地権者には大型トラック一台につき相応の対価が支払われるそうである。さらに皮肉なことに、この林道の道路脇の各所に産業廃棄物禁止の立札が立てられている。

かつて鮎漁の解禁日には近くの桂川の渓流に、釣り人が早朝から殺到した。私は、まだ若い頃、解禁日に鮎釣りをしたことがある。鮎よりも釣り人の方が多かったように見かけただけではなく、しばしば釣り人の釣糸が絡まる場面も見かけた。観光用の鵜飼い漁は主として海鵜を飼い慣らして鮎をとる漁法だが、皮肉なことに、何処からか大群をなして飛来した海鵜が好物の鮎を大量に捕食している。そのため、漁業組合はその対策に難儀している。すでに桂川の渓流の近くの釣り場には、ほとんど釣り人を見かけなくなった。その近くの友鮎を売る販売所も閉店し、釣り場へ行く農道には雑草が生い茂るようになった。

里芋の意外な大豊作

十一月から初霜まで、里芋掘りの時期である。今年二月、二度も記録破りの大雪が降った。そのためであろうか、四月に地中から掘った種芋用の里芋は凍みて傷んでいたので、その箇所を包丁で除いた。もし、里芋が発芽しなければ、それで仕方がないと考えた。土をかまぼこ状に高畝にして、その上に黒マルチフイルムを覆い、駄目元と思い、かなり大量の土垂れと八っ頭の種芋を黒マルチに穴を開け、土中に深めに埋めた。

梅雨明けから目に見えて茎と葉が生長し、真夏は雨が降らず、十分に水も撒けなかったので心配したが、その後も葉と茎が見事に生長した。何が里芋の見事な生長に「幸い」したのか分からないが、今年もまた大豊作だった。

里芋を土中からスコップで土塊を掘り出すのにあまり苦労はしなかったが、親芋から小芋・孫芋を切り離し、芋に付いたヒゲ状の根と皮を一つ一つ鋏で切り離すのにかなり手間と時間がかかった。当分の間、食用にする里芋は畑小屋に収納し、さらに温度が低下すれば、ダンボールに入れ、ボロのタオルケットで覆うことになる。それ以外は、来年の種芋に使う親芋と小芋を土中に埋けた。その作業が終了したのが、初霜が降りた当日だった。

食害された葉菜類

時期的に前後するが、九月になって、親しい村人から白菜の苗二五本とブロッコリーの苗五本をもらい、さらに隣の畑の村人から余ったかき菜の苗をもらった。その他、ホームセンターで購入したキャベツの苗も高畝に植えた。保温と防虫予防のために、高畝の上に園芸用の不織布をしばらくベタガケにした。その後、根付いたのを確認して、ベタガケを外した。白菜などの葉菜類は大きく生長し、晩秋から冬にかけて収穫を楽しみしていた。

ところが、立派に生長した白菜、キャベツの葉は外から内部まで、またブロッコリー、チンゲンサイの葉もアオムシ、ヨトウムシ、コナガ、ハスモンヨトウの幼虫などに盛大に食害され、白菜やキャベツの葉を取り除いてみないと、どこまで食害されたか、分からない。近くの農薬を散布した畑を除き、周りの畑の耕作者に聞いたところ、例年になく、今秋は盛大に食害されたとのことである。

かき菜の苗は雨が降らず、十分に水を撒けなかったので、貧弱に生長したが、害虫に食害されなかった。かき菜は丈夫な野菜なので、無事に越冬してくれるだろう。

冬になって、小松菜、ほうれん草、春菊、チンゲンサイの露地植えの葉菜類の収穫が終わる四、五月頃、マイナーな野菜のかき菜は葉と茎を掻いても、すぐにたくましく生長してくれ、とくに茎に甘味があって、大変有難い葉類だ。

今秋は、大根、ニンジン、カブなどの根菜類と玉ねぎの苗やニンニクの球根を蒔く場所を約二〇〇坪の畑の西側にした。畑の東側には小松菜、ほうれん草、チンゲンサイ、春菊などの葉菜類の種を蒔くことにした。最初に種を蒔いたほうれん草の葉はかなり食害されたが、残った葉と茎を収穫して湯がいて食べたが、特有のほのかな甘味に欠けていた。それ以上に、無残だったのはチンゲンサイだった。種を蒔いたあと、ベタガケをしなかったため、幼苗はすべて食害されてしまった。

「里の山」の景観

畑仕事にくたびれて、小椅子に座り、南側の桂川の深い渓谷の向こうに標高一〇〇〇m以下の「里の山」を眺望することが出来る。畑仕事を始めた頃、小椅子に座って野菜作りのテキストをながめ、それに従い、野菜作りをした。もはやテキスト類は不要となった代わりに、加齢のため、小椅子に座る機会も多くなった。今秋は『いま里山が必要な理由』を開き、眼前の「里の山」の紅葉

と書いている（一三章）私は、「暗く慄然」としているというよりも、むしろ広葉樹のぼんやりした赤色、黄色、茶色の多彩な紅葉林の中で、植林された杉の木立は濃緑の「暗く陰鬱」とした光景を呈していると、実感している。もっとも、同じ「陰鬱」な光景は、杉の木立だけではなく、官庁の指示と補助金を受けて、植林された常緑樹の檜の木立も同じである。

楓は紅葉を代表する。「もみじ」は「もみづ」（紅に染まる）という表現から生まれたそうだ。他に、紅葉する樹木は漆、櫨も有名だが、銀杏、プラタナス、ダケカンバなどは黄葉し、それを「黄葉だす」とも表現するようだ。それは黄色の「籾」に由来するのであろうか。黄葉は訓では紅葉と同じく「もみじ」と読む。

紅葉は人里の家の塀や壁などに這う蔓性の蔦などに始まり、次第に山々の下から上の山頂に雑木林の落葉樹に及ぶことが観察された。私は山々の赤色、黄色、茶色に全山錦繍の景観を堪能したいが、残念ながら、あの濃緑の陰鬱な杉と檜の木立の針葉樹林帯が妨害し、十分に満喫出来たとは言えない。もっとも、近視の私はこの綿繍の景観をただ漠然と眺望するだけで、まして広葉樹の樹木やその名称までは分からない。旧暦で立冬を過ぎれば、錦秋とは言わず、俳句の季語では、冬紅葉と言うそうである。

私は「花より団子」の類で、率直に言えば、「洒なくを熱心に眺望した。

当地の「里の山」は、戦後の国土復興のために森林は盛んに伐採され、都市の住宅建設の木材として大いに搬出された。さらに木炭の材料として伐採された。ところが、木材の自由化によって安い木材が輸入されるようになり、製材業者は廃業し、山仕事の木材の伐採や運搬の仕事もなくなった。聞くところによると、一人の製材業者は盛業期には俄か成金となって、近くの石和の温泉場で芸者をあげて、盛大にどんちゃん騒ぎをした。その後、閑業期になると、競馬のギャンブルに凝り、ますます零落したということである。さらに、いわゆるエネルギー革命によって山林の炭焼きの仕事はなくなり、炭焼き（人）は仕事を失い、炭焼きの経験を生かして定住し、都市に稼ぎに行くか、都市に移住するか、いずれかの選択を余儀なくされた。当地ではすでに炭焼きの経験者はいない。

里山の紅（黄）葉

だが、一時期、「分収造林」という制度―官行林業の一環―で、集中的に檜や杉などの常緑樹が植林された。言うまでもなく、その一帯は紅葉せず、当地を取材した三島由紀夫は、のちに小説『奔馬』で記述した。三島は、晩秋の空の下で「どの山も杉が多く、杉木立の部分だけが、まわりの温和な紅葉の中に、暗く慄然としている」

て何のおのれが桜かな」の類であろう。もっとも、畑で小椅子に座り、「里の山」の紅葉を観賞しながら、昼間から飲酒する心境にはなれず、そういう生活習慣はまったくない。せいぜい魔法瓶に入れた温かいお茶を飲み、パンを頬張ることにしている。むしろ清々しい秋空の下で「お茶飲みは紅葉の景観よりも良い」というのが、本当の心境だろう。

里山のニュータウン

田中淳夫著『いま里山が必要な理由』を検討しよう。田中は森林ジャーナリストとして日本最古の里山、大阪と奈良の堺に位置する生駒山とその裾野を拠点にして、日本各地の里山、さらに外国では焼畑農耕のボルネオや人工林のアマゾンの里山に出かけた。そこで、「原生林と都市の間には、人の手を加えつつ豊かな里山の自然が存在する。そして里山こそ人類とともに歩んできた自然環境である」（三三頁）として、人類と自然のなかに里山の存在とその歴史を位置づけている。

田中は「里と山」の再生という観点から、その自然生態系や生物多様性に注目しながら、里山に「人の手が入りすぎる」という「開発」（破壊）による「危機」と、里山に「人の手が入らない」という「放棄」（衰退）による「危機」という二つの現象の問題を、それぞれ指摘している。

前者は、私が通う身近な里山で言えば、山梨県東部の上野原市四方津コモアの大規模なニュータウン、つまり住宅団地、学校、診療所、スーパー・マーケット、さらに農協が経営する直売所とレストラン、そこから眺望できる広大なゴルフ場が造成された。最寄りの中央線の四方津駅からこの一〇〇〇戸の戸建ての住宅に住む通勤・通学者のために、山腹の急斜面に簡易なケーブル・カーが敷設され、さらに甲州街道との自動車の往来のために、山腹を掘って道路トンネルが築造された。

宮崎駿監督のアニメーション映画「千と千尋の神隠し」の冒頭のシーンは、この道路トンネルをイメージして映像化されたと言われている。宮崎駿自身の意図は分からないが、私は、このような住宅団地とゴルフ場の大資本と地方自治体による山地一帯の大規模な開発にたいして、環境保護派の宮崎が警鐘を鳴らしているのではないかと、推測している。だが、「里の山」が開発され、この「緑の町」に新たな人間関係や都市的な生活様式が形成され、さらに伝統的かつ都市的なイベント、例えば、自治会主催の団地運動会や演芸会、神社のお神輿かつぎなどが挙行されている。

「里と山」の危機

後者の里山に「人の手が入らない」格好の事例は、私が野菜作りのために通う「里と山」であろう。桂川の河

岸段丘の上段（梁川町綱の上）と下段（同町綱本）の農地は、かつて水田耕作を可能にするため生産基盤が整備された。その一帯は区画が整備され、桂川の水を揚水機でポンプアップし、コンクリートの水路も設置されている。

上段の水田には新たに農用の土を入れ、畑地として耕作され、もっぱら高齢の年金受給者によって自給用の野菜が栽培されている。下段の平地はただ二戸の農家だけが水田耕作をしているが、老朽化した揚水機はたびたび故障し、修理しながら、使用している。いずれにせよ、将来は水田耕作の中止を余儀なくされるであろう。

常時、二戸の農家が交代で六枚の水田を管理している。稲刈りのあと、その稲を横に組み上げた竹に掛けて干す「稲架」という作業は、すべて晴れ日が続き、他出している息子を呼び寄せ、一家総出で短期間に終了しなければならない。さらに、収穫した籾米を精米して白米にする。自給用の白米は金銭的には決して割が合わない。毎年、二戸の農家は水田耕作を今年も継続するのか、今年で中止なのか、真剣に考え込んでいるように見える。

上段では畑地で自給用の野菜作りをしているが、その一角は高齢化のために農作業を止め、今までその畑で見かけなかった後継者が農作業を引き継いでいる。しかし、雑草が生い茂る耕作放棄地、荒地、さらに雑草を農用トラクターで刈り取るだけで、不作付け地にしている畑地を見かける。

私の妻は下段の畑地を相続し、下段に住む農家にただで貸していたが、耕作者は高齢化を理由に、妻に返却した。そこで、私は耕作放棄地や不作付け地にするよりも、畑の雑草を草払い機で除草し、緑肥用の蕎麦、クローバーの種を蒔き、さらに向日葵、秋桜などの種を蒔き、花を咲かせようと考えた。ところが、重い草払い機を担いで、上段と下段の崖ぷちの急峻な農道を往来する苦労を経験した。私の当初の意図は挫折し、雑草の茂る耕作放棄地にしてしまった。

気になる記述

田中は、すでにふれた里山（中山間地域）の生態系と「多面的機能」を自らの体験と観察をまじえて、極めて具体的に記述している。私は「里と山」の観察と記述に大いに啓発されたが、私の里山体験から見て、何点かの疑念を払拭出来ないでいる。

まず、第一に田中は生駒山を事例にして、「里山の危機」の一例として「イノシシが里山から人を追う」と記述している（八四頁）。嗅覚が鋭く、夜行性のイノシシは人里に出没する。秋、私は村人が盛んに「イノシシが出たゾ」と言うのを聞いた。イノシシはさつま芋が大好物で、食餌にされることを心配した。畑に三十本の挿し穂を植え、生長したさつま芋の葉と茎は、何事もなかったが、その下をスコップで掘り返すと、さつま芋はイノシシにすべて食餌され、ただ唖然とした。その後、自治体から補助金が交付されたこともあって、周囲の村人と相談して、畑の周囲にフェンスを建てた。

夜間、イノシシは相変わらず出没しているようだが、フェンスを越えてさつま芋を食餌されたことはない。ところが、里山の畑をフェンスで囲っても、猿の群れはそれを簡単に乗り越え、猿の被害に合い、耕作を断念したというを話しは、しばしば耳にする。要するに、イノシシが「里山から人を追い出す」ことはないが、賢い猿の群れによる被害によって耕作を断念させられたのである。

第二の疑問点は、農薬散布の問題である。田中は「通常残留する農薬の濃度の低さは、人体に影響を与えるように思えない」。だが、農薬が環境ホルモンのように内分泌系に影響を与えることも考えられる。しかし、残留農薬に「それほど神経質になることもない」と指摘している（九五頁）。そのことに関連し、無農薬で病気や虫食い状態の野菜は、防御用に「毒性物質」が分泌されている可能性があると指摘している。

私は、農薬で野菜の病害虫を殺すよりも、虫が好んで食う野菜だから、野菜についた病害虫の葉を取り除き、湯がいて安心して食べることができると楽観していた。だが、程度の相違はあろうが、虫食い状態の野菜にはそのメカニズムとして「毒性物質」が分泌されているという指摘を読み、そのことが果たして何処まで真実かどうか、不明だ。今後、多少でも虫食いの野菜を食べることにいささか不安を覚えた。だが、適切な農薬散布か、野菜の「毒性物質」の分泌されるのか、私には今のところその安全性について真偽の程は分からない。

里山再生は果たして可能か

私が通う畑の周辺は、まさに「里と山」である。都市に通勤可能な都市近郊の里山で、大部分の高齢者は年金で生活し、自給用に野菜を作る。それ以外に年々そのメンバーは減少しているが、午前と午後の二回、ゲートボールに興じている。私は週一回、一泊二日の野菜作りに多忙で、ただ、里山の村人と農道や畑の柵越しに今年の作柄や世間話しをする程度である。私は妻が相続した実家と畑を往来し、畑で小椅子に座り、この「里山」を観察しているに過ぎない。

大月市梁川町の活性化を図るための一環として、『山紫水明』と題して、歴史と古跡を写真入りの立派な冊子が出版されている（梁川町の活性化を考える会、二〇〇七年）。それによれば、甲斐の国と武蔵の国や相模の国との人々の往来と物資の運搬のために、桂川南岸に道幅の狭い鎌倉道があったと伝えられている（鎌倉に向かう道とみなされ、そのように称されたという説もある）。

また、桂川北岸には同じく道幅の狭い江戸道（甲州古道）があって、住人、さらに身分を隠す人々や通行手形を持たない人々が往来した。

この二つの古道の跡を散策道に整備し、案内板の他、神社、仏閣、霊場、史跡などの由来の掲示板を設置すれば、都市に近い格好のハイキング・コースとなり、都市住民に里山の自然と景観に触れる機会を提供することになるだろう。自然散策コースという地域資源は、自治体か、地元住民による持続的な整備と維持管理によって利用可能である。だが、高齢化と過疎化の著しい「里と山」で、果たして再生のための地域資源として活用できるであろうか。

それを実現するには、グリーンツーリズムという都市農村交流の一環として位置づけ、収益性が見込まれる体験教室、農産物直売所、観光農園、市民農園、農家民泊などの経済的な資源が有効に活用されて、初めて可能であろう。

追記

これまで「日耕録」と題して、本誌に十六回も連載して頂いた。「農」をめぐり日で耕す（読者）のための素材を渉猟した。当然とは言え、これほど「農」をめぐる著作があることに驚いた。ただその書物を読み解くには苦労した。だが、野菜作りは毎年の繰り返しなので、その記述には重複に重複を重ね、好意的な読者は「またか」という感想を抱いたであろう。そこで、本号をもって最終号とさせて頂くことにした。

かねてから、私がすでに出版した『時評家　新明正道』（時潮社、一九九八年）の増補改訂版を生前の「遺著」として刊行することを考えていた。『時評家　新明正道』を出版したあと、すでに収集した膨大な評論を厳選編集して、『新明正道時評集』（日本経済評論社、二〇〇七年）を出版した。本書は望外にも、中央紙二紙、地方紙一紙、書評紙一紙に書評・紹介されるという栄光に浴した。

今後、私が新たに発見した資料や新たに世上で話題になった事柄に関連させ、日本の社会学を代表する新明正道博士の時局的な政治・思想評論を中心に、その「追録」を本誌の次号以降に寄稿しながら、すでに触れた「増補改訂版」を出版したいと考えている。

（二〇一四年一一月二三日、擱筆）

漢詩

潮騒録（七十九）

鯨游海（くじらゆうかい）

地中海賛歌1伊太利亜・威尼斯

平成二六年四月

海上古都樓閣巡
羊腸水路扁舟頻
年間訪客二千萬
八百八橋人又人

押印・巡頻 人

〈地中海賛歌1伊太利亜（イタリア）・威尼斯（ヴェネツィア）〉

海上の古都に　楼閣巡り
羊腸の水路に　扁舟頻りなり
年間の訪客　二千万
八百八橋は　人また人

〔注　解〕

威尼斯＝ヴェニス。古代希臘（ギリシア）羅馬（ローマ）文明を支えた商都。イタリア礼賛の作家塩野七生はヴェニスではなくヴェネツィア（伊）、ワインではなくヴィーノ（伊）に固執する。

扁舟＝小さな舟。ここはゴンドラ。観光客を乗せて羊腸の如き水路を人力で遊弋するヴェニスの名物風景。

扁舟は全てが漆黒。塩野七生によると「或る時、華美を競って金銀緑朱と際限なく多彩となり、また舟内装備も贅を尽くすようになった為に、市議会で議論し、多数決で黒一色の標準仕様を定めた」という。

年間の観光客は二千万で世界一。因に日本は一千万人。

〔口語訳〕

洋上に浮かんだ不思議な古都。街区ごとに楼閣が巡り、古色蒼然とした茶褐色の錬瓦と石壁とに覆われている。

街を巡る迷路のような小路は石畳で舗装され更に羊腸の如き水路には客を載せたゴンドラが頻に遊弋している。

世界中の観光客が往き交う八百八橋は人また人だ

☆シャイロック何処に居るや石顧左眄
羊腸の迷路尋ね歩きぬ

地中海賛歌2希臘・聖托里尼
平成二六年四月

白堊露臺穿翠壁
朱葭茶館彩桃源
追從驢馬辿千仞
溶解碧空無一痕

押印・源　痕

〈地中海賛歌2希臘・聖托里尼〉

白堊の露台　翠壁を穿ち
朱葭の茶館　桃源を彩る
驢馬に追従して　千仞を辿れば
碧空に溶解して　一痕無し

〔注　解〕

堊＝壁。白い壁。塗る。白堊の殿堂＝白壁の堂。亞は①次ぐ②準ずる③類。非メインの意で壁の意はない。故に白亞と書くのは本来誤りで堊が意味上正しい表記。

起句は白い石造の多数の露台が幾何学的に並んださま。葭いらか。平凡な瓦より瀟洒なのでこう表現した。

仞＝高さや深さの単位。両手を広げた長さで尋ともいう。一仞＝七～八尺。

辿る＝ゆっくり歩く。たどる（和語）。音は「てん」。

なお桃源（陶淵明・桃花源記に在る理想郷）や驢馬は共に道士の仙界を暗示する語で、結句への布石。

地中海の東端、多島海の南、クレタ島の北に位置する絵のように美しい島。

〔口語訳〕

白壁の露台が織りなす幾何紋様が山の翠の斜面を穿ち、朱の葭を葺いた茶館がこの桃源郷を美しく彩っている。

（私は）驢馬の群れにまじってゆっくりと後を追いながら、山の頂上に続く九十九折の道を辿ってゆくうちに、身も心も碧空に吸い込まれ、跡形もなく溶けて了った。

☆驢馬追ひて桃源郷をさ迷へば
空の碧にぞ溶けて痕なき

地中海賛歌3希臘・雅典
平成二六年四月

神殿門前儀仗兵
威風甲冑佩刀鳴
往時榮譽却彷彿
壁落梁崩列柱横

押印・兵　鳴　横

〈地中海賛歌3希臘・雅典〉

神殿門前の　儀仗兵
威風の甲冑・佩刀鳴る
往時の栄誉　却って彷彿たり
壁落ち梁崩れ　列柱横たわれば

〔注　解〕

神殿＝アテネ市内を一望すれば、あちこちの丘に神殿や競技場、集会所、浴場等遺蹟が見える。栄華の遺蹤だ。

補修工事中の所もあるが、多くは石造の梁や柱、壁や屋根が崩壊し、無残な姿をさらしている。横たわる円柱の陰に雑草がはびこる。

ギリシア経済の危機は深刻で、市街地到る所荒廃が目立つ。それが古代文明発祥の地の栄光を却って想起させる。有為転変、盛者必衰の現実がうら悲しい。

儀仗兵＝儀は儀式。仗は儀礼用の武器。ここは神殿に在したゼウス等神々を尊び、警護すると同時に観光客用に配された兵士たち。

彼らの大兜得を切る動作は歌舞伎役者の如くであった。

冑＝兜。鎧。なお冑＝あととり、あと次ぎ、とは異字。

佩刀＝腰に帯びた刀剣。甲冑と併せ金属の触れ合う音が響く。

〔口語訳〕

神殿を守護する門前の儀仗兵。威厳あり気な甲冑と腰に帯びた刀剣の音が響く。古代文明発祥地の栄光が却って想起されるのだ。崩落した壁や梁横転した柱を見れば。

☆見得を切る歌舞伎と紛ふ儀仗兵
往時の栄華しばししのばん

地中海賛歌4克羅地亞・杜布羅夫尼克
平成二六年四月

亞銅里亞海眞珠
杜布羅夫尼克都
幽婉古城疑淨土
比喩其味似醍醐

押印・珠　都　醐

〈地中海賛歌4克羅地亞・杜布羅夫尼克〉

亜銅里亜海の　眞珠とは
杜布羅夫尼克の　都
幽婉の古城　浄土かと疑ひ
其の味を比喩すれば　醍醐に似たり

〔注　解〕

「亞銅里亞」の銅は詩的宛字。本来は得と書く。伊太利亜の東が亞得里亞海。対岸が旧ユーゴスラビア＝克羅地亞。その南の港街が杜布羅夫尼克の古城である。その美しさは地中海の中でも極立っており、「亜得里亜海の眞珠」と呼ばれている。勿論世界文化遺産

幽婉＝奥深くてしとやか＝優婉にも通じる。

浄土＝この世の最高の所＝極楽浄土。佛の居る清浄地。

醍醐＝乳で作る甘酸っぱい酥＝現世最高の味＝醍醐味。

☆瀾閑か亜得里亜海の黒眞珠
浄土と紛ふ月下の古城

《漢詩の流れ67》 現代中国・毛澤東

毛澤東（一八九三～一九七六）字は潤之。湖南省出身。若くして革命に奔走、一九二一年紅軍を作り共産党のリーダーとして台頭した。

一九四九年、蔣介石を打倒し中華人民共和国を成立させ自から国家主席となり、その後長く君臨した。

文才に恵まれ多くの作品を残したが、詞が多い。これは韻や平仄の規則が近体詩程厳しくなく、多忙な毛澤東はこの形式を好み、自由奔放に歌っている。

日本との戦いに勝利し、重慶での平和交渉の為飛行機に載った時、機上から祖国の風光を詠んだ詞である。

沁園春・雪（沁園春は詞牌の名・雪が標題）

北國風光　　北国の風光は、
千里冰封　　千里氷に封され、
萬里雪飄　　万里に雪ひるがへる。
望長城内外　　長城の内外を望めば、
惟餘莽莽　　惟だ莽々たるを余すのみ。
大河上下　　大河の上下は、
頓失滔滔　　頓に滔々たるを失ふ。
山舞銀蛇　　山には銀蛇舞ひ、
原馳蠟象　　原には蠟象馳せ、
欲興天公試比高　　天公と高きを比ぶるを試さんと欲す。
須晴日　　晴日を須って、
看紅裝素裏　　紅く装い素く裏るを看ば、
分外妖嬈　　分外に妖嬈たり。
江山如此多嬌　　江山かくの如く多だ嬌かしく、
引無數英雄　　無数の英雄を引きて、
競折腰　　競って腰を折らしむ。
惜秦皇漢武　　惜しむらくは秦皇と漢武とは、
略輸文采　　略文采に輸り、
唐宗宋祖　　唐宗と宋祖とは、
稍遜風騒　　稍風騒に遜る。
一代天驕　　一代の天驕たる、
成吉思汗　　ジンギスカンも、
只識彎弓射大雕　　只だ弓をひいて大雕を射るを知る」。
俱往矣　　倶に往きぬ。
數風流人物　　風流の人物を数へんには、
還看今朝　　還た今朝を看るべし。

（注）莽莽＝荒涼とした。蠟象＝白色の象。妖嬈＝艶かしい。文采＝文藻、文章。風騒＝詩文、詩趣。大雕＝大鷲。往きぬ＝過去の人物たち。今朝＝現代また将来の人物。分外妖嬈＝ことの外なまめかしい。

引無數英雄競折腰＝（我が国土が美しく妖嬈かしいので）古来多くの英雄が争って膝を曲げ媚を求めた。

関東管領始末記⑯

落日の譜

千坂精一

一

関東管領上杉顯定が長尾爲景に討たれたことはすぐには鉢形城に届かなかった。一行が全滅してしまったので関東も越後も状況把握が随分遅れてしまったのである。

ひとあしさきに帰国の途に就いていた養子憲房は、山内上杉の上野守護本拠地平井城（藤岡市西平井）に入って伊豆の早雲宗瑞の動きを探っていたところへ養父の悲報を受けたのだが、地団駄踏んでも後の祭りであった。

悲報は公方家からの養子顯實の鉢形城にも届いた。

顯實は、直ちに古河の兄足利政氏に詳細を報告した。

政氏は公方でもないのに顯實を関東管領に据えた。

そのことを知った憲房は、自分こそ上杉家の血筋を引く養嗣子であると主張したが、政氏は顯定との盟約だと突っ撥ねて一歩も譲らず、ついに押し通してしまった。

憤懣遣る方ない憲房は実力で奪い取ろうと企んだ。

この対立は、関東管領家の分裂にほかならなかった。

これが嫡出子同士なら長男すなわち嫡男相続ですんなりいくし、嫡出子と庶出子となら嫡子相続で異議はないのだが、養子同士となると誰もが納得する〈長幼の序〉というわけにもいかず判断が難しいから、行き着くところは実力行使で結着をつけることになってしまう。

実子に恵まれず家名存続のためやむなく養子を迎えるのなら一般的には一人のはずなのに、顯定の場合は養父山内房顯の甥憲房を迎えておきながらやむを得ない事情があって元鎌倉公方足利成氏の二男顯實をも迎えたからには顯定自身が憲房と顯實のいずれを継嗣にするか決めなければ収まりがつかないのにその本人が急死してしまったのだからほかに決着のつけようはずはなかった。

とにかく関東管領職を横取りされてしまった憲房は、実力で取り返すべく着々と準備をととのえていった。

そんなおりもおり扇谷朝良の臣上田政盛が伊豆國の早雲宗瑞に通じて寝返り、武蔵國權現山城（横浜市神奈川区幸ヶ谷）に立て籠もって山内、扇谷両家に叛いた。

ここを早雲に奪われて稲毛城や丸子城を陥とされれば、東相模を抑えている三浦義同の居城岡崎城や三浦半島の新井城（三浦市小網代）が孤立する虞があった。

扇谷朝良は山内憲房に救援を求めてきた。

憲房は顕實に拙んでる好機到来と勇んで快諾した。

このとき扇谷朝良は、この山内憲房の協力によって權現山城を陥として上田政盛を敗走させることができた。

この上田政盛が調略されたことによって、小田原城を陥として西相模を略取した早雲宗瑞が東相模から武蔵一帯をも制覇しようとしている魂胆が明白になってきた。

これまで山内と扇谷の両家は同族でありながらながいあいだ反目し合ってきたが、ここへきて早雲宗瑞という両家にとって共同の敵が出現したことによって、遺恨を水に流して結束せざるを得ない情況になった。

早雲は両家の協力態勢の模様眺めを考えてか、翌年扇谷朝良に和睦を申し入れてきたので、朝良は承諾した。

まず和睦という手段を講じて相手を油断させておいて、機を窺い突如侵攻を謀るのは早雲の常套手段である。

はたして早雲は翌年三浦義同の相模國岡崎城を攻めた。

不意を衝かれた義同は住吉城（逗子市小坪）に後退し、さらに三浦を目指して敗走、新井城に立て籠もった。

太田道灌の嫡男資康は三浦義同の女婿だったので舅の危機を救おうと扇谷の軍勢を率いて駆け付けたが、利あらずして敗死してしまい、新井城は孤立無援となった。

山内軍が動けなかったのは、元公方家の足利政氏・高基父子の対立に巻込まれ、管領顕實は父政氏を憲房は嫡男高基を支持して内紛に発展してしまっていたのだ。

この養子同士の唯み合いは山内家の血筋憲房を支える家臣たちが多く、顕實は憲房の奉行で足利荘代官の長尾景長に鉢形城を逐われ養家を捨てて古河の父政氏の許へ逃げ帰ってしまったので憲房が管領の座を取り戻した。

そんな事情で山内軍は三浦義同を救援できなかった。

援軍を頼めぬ籠城戦ほど惨めな戦いはない。兵粮が尽きれば万事休すである。新井城は風前の灯であった。

もはやこれまでと覚悟した義同は、嫡男義意とともに全軍を率いて打って出ると白兵戦を挑んで一矢報いた。

そして義同は、義意とともにみごと自刃して果てた。

うつものもうたるるものもかわらけよ
くだけて後はもとの土くれ

三浦義同（道寸）の辞世である。

相模國を奪取した早雲宗瑞は、次に武蔵國を狙った。

永正十五年（一五一八）四月二十一日、扇谷朝良が

歿して弟朝寧の嫡男朝興が養子入りしてあとを嗣いだ。

その翌年八月十五日に風雲児早雲宗瑞が伊豆國韮山城（伊豆の国市韮山）で八十八歳の生涯を閉じた。

二十三歳の嫡男氏綱があとを嗣ぎ、鎌倉幕府執権北條氏が発祥の地に因んだことに慣い、北條氏を名告った。

関東の地をめぐってたがいに鎬を削り合った三人が去り、上杉氏は山内家が憲房、扇谷家が朝興、それに早雲家は北條氏に名告りを変えて氏綱とそれぞれに代替わりはしたが、当主が入れ替わっても時の流れは変わらず、そのままの情勢でさきをいそいですすんでいく。

二

さきに変化を起こしたのは古河の元公方家であった。

長いあいだ反目し合っていた政氏・高基父子がようやく和解すると、こんどは高基が弟の義明と対立した。

義明はまえにも述べたように山内顕定に鎌倉鶴岡八幡宮別當にさせられていたのだが、僧籍を嫌って還俗し古河へ帰ったものの兄高基が北條に接近して嫡男晴氏の室に氏綱の女を希んでいることに反駁して不和になった。

義明は古河を去ると上總國畔蒜荘椅原郷の眞里谷城（木更津市真里谷）主武田信勝に迎えられて庇護を受けた。

そして、信勝に奉じられて下總國小弓城（千葉市中央区南生実町）の千葉氏分流原行朝を攻略して住居とし、そこを小弓御所としてみずから小弓公方と自称した。

武蔵國を窺う北條氏綱は父早雲同様智謀に長けていた。

曽祖父持氏を自害に追い込み、祖父成氏を鎌倉府から追い出した上杉一族に遺恨をもつ古河の足利高基の嫡男晴氏を懐柔すると、扇谷家の重臣太田資長（道灌）の孫で江戸城代の康高にも女を嫁がせて陣営に引き入れた。

要所を抑えた氏綱は大軍を率いて武蔵國へ侵入した。

大永四年（一五二四）正月、急報を受けた扇谷朝興は、山内憲房とは齟齬を来していて頼めぬので自軍だけで江戸城を出ると西へ向かい、迎え撃つ態勢をとった。

両軍は十三日に高縄原（港区高輪）で激突した。

はじめのうちは両軍一進一退の揉み合いがつづいて優劣がつかなかったが、やがて扇谷軍が押されて受け身に立つとずるずる後退してついに敗走を余儀なくされた。

江戸城へ逃げ帰った朝興だったが氏綱の追撃の手は弛まず、そこへもってきて重鎮の太田資高・資康父子の謀叛があって支え切れず、ついに河越城へ逃げ延びた。

切羽詰まり、背に腹はかえられぬと思い立った朝興は、形振り構わず山内憲房に救援を要請した。

憲房も両家共同の敵北條氏綱を目前にして唯み合っている場合でないことは承知しているので、朝興に呼応すると直ちに平井城を出陣して鉢形城に入った。

そして、北條方に寝返った国人たちの討伐に南下して

毛呂城（埼玉県入間郡毛呂山町）主毛呂顕季を攻めた。

この報に氏綱も江戸城を出て救援に向かい毛呂城を挟んで両者対陣したが、上杉方の足利長尾憲長や天神山城（埼玉県秩父郡長瀞町）主藤田康邦の仲裁で和睦した。

その条件は毛呂城を上杉方に明け渡し城主毛呂顕季とその家臣たちは北條方へ引き渡すというものであった。

しかし氏綱は僅か四箇月後の大永五年（一五二五）二月六日に突如として朝興の将太田資頼の岩槻城（さいたま市岩槻区太田）を攻め、澁江三郎の内応で占拠した。

乱世の約束事などその場限りの便法にすぎなかった。

和睦や盟約は弱者のほうはそれに縋るが、強者は成り行きで一方的に破棄して憚らない不安定なものである。

それから二箇月後の四月十六日、山内憲房が上野國高山荘平井城で病歿した。五十九歳の生涯であった。

遺された嫡男憲政はこのとき十九歳になっていた。

山内家の重臣たちは北条氏綱との抗争の最中に憲房を喪い若い当主憲政と扇谷朝興だけでは心許なく思い、先代憲房の例に倣って前公方家の与力を恃み足利高基の二男晴直を養子に迎えて名を憲廣と改めさせた。

関東管領といっても昔日の権威はなく、すでに形骸化されていたが、公方とともに名誉だけは遺っていた。

山内家の重臣たちは当主が公方家の血筋になったのをさいわい、顕定を返り討ちされた怨讐を超えて越後の長尾爲景と和解させると北條との対決に引き入れた。

爲景の盟約によって勢いを得た扇谷朝興は、反撃に転じて氏綱に寝返った澁川氏の蕨城（蕨市）を攻略した。

このころ、北条氏綱は武田信虎に駿河國東部や相模國北西部を侵略され、さらに小弓御所足利義明を奉じた安房國稲村城（館山市）の里見實堯にも侵犯されていた。

里見は水軍を保有していたので、鏡ヶ浦（館山湾）から浦賀水道を北上して金澤（横浜市）に上陸すると鎌倉を攻めてきた。この合戦で鶴岡八幡宮が炎上した。

里見氏は清和源氏新田義重の二男義俊が上野國碓氷郡里見荘に住んで荘名を名告りにしたのが始祖という。

その末裔にあたる家基は結城合戦のとき嫡男義實とともに鎌倉公方足利持氏の遺児春王丸・安王丸兄弟を奉じて結城城に立て籠もった結城氏朝・持朝父子を支持してともに籠城したが、武運拙く落城となったとき、家基は義實を逃がしておいてみずからは打って出て果てた。

結城城を脱出した義實は少数の家子郎等とともに相模國三浦半島まで逃げ延びて新井城の三浦時高を頼った。

と『里見九代記』などには述べられているのだが―。

鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉憲實が対立したさきの〈永享の乱〉のとき、鎌倉府留守役だった三浦時高は千葉胤直らと上杉憲實に応じて公方持氏を攻撃しているのだから、この〈結城合戦〉においても関東管領側であるはずなのになぜ里見に頼られたのか理解に苦しむ。

里見義實が扇谷上杉家の重鎮三浦時高を頼ったというのはおかしな話なのだが、義實が形振りかまわず、

「溺れる者は藁をも掴む」

だったのか、それとも時高が、

「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず」

で寛大な処置をしてやったのかはさだかでないが、ともかく時高は義實を匿って様子を窺い、密かに相模灘を挟んで相対している房総半島先端の安房國白濱（南房総市白浜町）を選んでそこへ逃がしてやったのである。

のちに時高の養子義同（道寸）が早雲宗瑞に新井城を攻められて嫡男義意と自刃して果てたとき、時高の幼ない実子高教が安房國へ逃れて里見氏の庇護を受けた。

高教は平郡正木郷（館山市正木）で養育され、成人すると正木時綱の名告りを与えられて里見義通に仕えた。

こうして無事に三浦氏の血筋を存続することができたのは、このとき三浦時高が飛んで火に入る夏の虫の里見義實を捕えて斬罪せずに、安房國へ逃がしてやった情けが三浦氏の血統を繋げる因になったのだから、まさに、

「情けは人の爲ならず」

であったのだ。

二

里見實堯が北条氏綱を鎌倉に攻めてから三年ほどは上杉・北條との激突はなく、小競り合い程度の繰り返しだったが、享禄三年（一五三〇）六月に北條側が動いた。

氏綱が十六歳になった嫡男氏康を初陣させて扇谷方の小澤城（稲城市矢野口町）を攻めて破り、さらに氏綱の女婿吉良頼康の世田谷城（世田谷区豪徳寺）を固めた。

小澤城救援に向かった扇谷朝興は小澤原で北條軍を迎え撃ったが破れ、単独軍ではかてなくなっていった。

翌年七月十八日武藏國久喜の臨濟宗永安山甘棠院を隠居所にしていた古河の足利政氏が六十六歳で歿した。

山内憲政は好機到来と上野國寺尾城（高崎市乗附町）の義兄関東管領上杉憲廣を逐って山内家を嗣いだ。

旧姓足利晴直に戻った憲廣は、古河へは戻れず上總國の里見實堯を頼ったが、その後については定かでない。

長いあいだの合戦で消耗し尽くした扇谷軍はもはやゲリラ戦しかできず、相模國に侵攻しても大磯や平塚あたりを放火する程度で北條側に打撃は与えられなかった。

足利政氏が歿して四年後の天文四年（一五三五）六月八日に父のあとを追うようにして里見に庇護されている晴直の父高基が五十一歳で歿し、嫡男晴氏が嗣いだ。

衰えたとはいえ公方家の存在を誇示していた父政氏を喪った晴氏は弱体化した上杉を見限り氏綱と和睦した。

その四箇月後、北條氏綱は扇谷上杉の牙城河越城を攻撃してきたが、このときは必死の防戦でよく堪えた。

翌天文五年、両上杉氏が頼みにしている越後國の長尾爲景が春日山城（上越市中屋敷）で病歿してしまった。

そのまた翌六年（一五三七）四月、十七日北條に勝て

ぬ無念を遺して上杉朝興が五十歳で病歿した。あとは嫡男朝定が嗣いだがこのときまだ十二歳の少年であった。

朝定は父朝興の遺志を継いで三箇月後には勇躍出陣したが、少年を棟梁に戴く扇谷軍将兵の士気は揚がらず、武蔵國三木（狭山市東三ツ木）で北條軍と戦ったが一蹴されて初陣を飾れず、居城に戻る余裕もないままついに河越城を捨てて松山城（比企郡吉見町）に逃げ込んだ。

城将難波田弾正父子は松山城を出て河越への血路を開こうとして戦ったが、敗れて逃げ帰ってきてしまった。

扇谷朝定が北條氏綱に拠点の河越城を奪われて武蔵國の一隅へ追い遣られてしまったことによって、山内憲政の所領もまた拠点の平井城を中心とする上野國だけに押し込められる状態になってしまった。山内・扇谷両上杉との抗争に一段落ついたとみた氏綱は、ここで南関東の下總（千葉県）に眼を向けはじめた。

まず下總國葛西城（東京都葛飾区青戸）を攻め陥とし、ついで元荒川右岸の台地上にある平城で扇谷家重臣太田資時（道灌の弟の系統）が城代の岩槻城を攻撃しておいて、踵を返すと下總國へ向かった。初陣から八年経つ嫡男氏康も同行していた。

「北條軍来攻」

の報に小弓御所足利義明は里見義堯とともに上總・下總の軍勢を動員して江戸川の東岸國府台に布陣した。

國府台は古代下總國の國府がおかれたところで現在は和洋女子大などがあり、近くの里見公園内にはこのときの足利・里見軍の陣地とみられる土居壕の跡がある。

この激突はどちらが野心を抱いて動いたかは定かでないが、足利義明は甥の晴氏を斃して鎌倉を占拠し公方家の嫡流として関東に号令したい思いに燃えて武蔵國侵攻を謀っていたし、北條氏綱は房総制覇を狙っていたから双方の決戦はいずれ起こる不可避の動きであった。

このとき北條氏綱は江戸城で休息し軍容を整えた。

そして、十月五日に國府台に到着すると北方に布陣して双方戦闘態勢に入り、七日に戦端が開かれた。

戦闘は一進一退が繰り返されたがいつか北條軍が攻勢に転じて足利義明をいただく里見軍は守勢にまわった。

その混戦の最中に馬上で陣頭に立って采配していた義明が北條軍の三崎城代横井神助の強弓に胸を射抜かれて落馬したところを松田彌次郎に首を討たれてしまった。

これによって戦意喪失した足利・里見連合軍は総崩れになって敗走したので、北條軍の大勝利で幕を閉じた。

小弓城にいた義明の嫡男義純と二男頼純それに女は、逃げ帰った少数の家臣たちに伴なわれて安房國へ落ち延びた。

この系がのちに秀吉によって喜連川（さくら市喜連川）三千五百石を与えられ、喜連川氏を称した。

四

古河の足利晴氏は僅か四年のあいだに祖父政氏と父高基を喪い悖む上杉も衰退し、敵視されていたとはいえ叔父義明も里見義堯とともに北條氏綱と対決して敗死してしまったので、もはや庇護してくれるところは北條をおいてほかになく、落着かぬ状態に陥ってしまっていた。

晴氏が氏綱を頼り、氏綱も公方家を奉戴すれば関東制覇に大義名分が立つと考えていたので利害が一致した。

そこで氏綱は、晴氏が擦り寄ってきたのをさいわい女を嫁がせて足利公方家を北條一門に取り込んだ。

こうして北條氏綱は山内・扇谷上杉氏の所領関東を侵蝕しつづけているのとときをおなじくして、甲斐國の猛将武田信虎もまた信濃國佐久郡を攻略しはじめていた。

天文十年（一五四一）五月、信虎は諏訪頼重らと海野幸綱を攻めたので、幸綱は山内憲政を頼ってきた。

その一箇月後、信虎は嫡男晴信（信玄）に追放されて駿河國の女婿今川義元を頼って落ち延び隠棲した。

山内憲政はこの武田父子内紛の隙に乗じて信濃國長窪に出陣し、諏訪頼重と交渉して和睦を取り付けた。

この年七月十九日に北條氏綱が小田原城で病歿した。五十五歳の生涯であった。あとを嗣いだ二代氏康はすでに二十七歳の頼もしい青年武将に成育していた。

「北條氏綱病歿する」

の報らせが上杉陣営に齎されると、扇谷朝定は北條方の動揺の虚を衝くべく勇躍出陣して河越城を攻めたが、城将北條綱成の固い守りに跳ね返されて涙を呑んだ。

翌天文十一年（一五四二）三月、信濃守護小笠原長時は諏訪頼重と北信濃四郡を領有する埴科郡坂城（坂城町）の葛尼城主村上義清を誘って武田晴信攻めに向かったが、甲斐國との境に近い瀬澤（長野県諏訪郡富士見町瀬沢）に布陣していた武田軍に迎撃され敗退してしまった。

その意趣返しに晴信は、諏訪家の内紛に乗じて分家の諏訪頼繼や諏訪下社の金刺大祝を手懐けて諏訪へ侵攻し、頼重の本拠上原城（茅野市上原）を陥とし桑原城（諏訪市四賀桑原）へ追い詰めて、七月五日に降服させた。

晴信は和睦と偽り頼重を同行して帰国すると東光寺へ幽閉したので、頼重は謀られたと覚り自害して果てた。

諏訪惣領家を滅亡させた晴信は、さらに分家の頼繼をも斃して信濃國諏訪郡を奪い取ったので、守護小笠原長時の命を受けた村上義清が武田攻めに向かったが信濃國大門峠（長野県小県郡長和町）で撃退されてしまった。

こうして武田晴信は北信濃奪取を狙い、北條氏康は隣国駿河の今川義元と対峙するという構図になり、また越後國では猛将長尾爲景の死後継嗣晴景を武将の器量に非ずと断じた一部諸将の反抗に弟景虎（のちの謙信）を利用したことで遂に景虎の人気が高まり、兄弟への支持が分裂するという東国の乱世に突入して行くことになる。

（つづく）

つれづれの源氏物語

第五回　青年時代そのⅢ

——賢木の巻、花散里の巻——

小田紘一郎

はじめに

一、合評会というのがある。これは、まんじに載せた執筆文について、筆者が説明、出席した会員がそれぞれ質問や意見を言うというもので、発行月の最終土曜日に行われている。ある面では勉強になり参考になるものであるが、他方では厳しい面をも持っている。

先日第一三四号について昼食を含め四時間程行われた。一つの作品について平均にすると一〇分余であるが、欠席者もあるので、私の書いた「つれづれの源氏物語」については、三〇分程要した。

二、私は説明はなるべく簡単にすませ、会員からの意見を待った。

大きくわけて二つ指摘された。

一つは、話が大き過ぎ話題があちこちに飛び、全体が良くわからないこと、もっと簡単に短かくしすっきりと要領よくまとめた方が読者の為に良いこと。

二つは、一回の分量が多すぎて読むのにあきてしまう、苦労するということであった。

前者については、なる程御指摘の通りだと思いつつ、今回つれづれの源氏物語を書くに当って①第一回で指摘しているように他の分野（例えば音楽、他の文学等）に幅を拡げその観点からも比較しつつ読んで見たいこと②源氏物語自体が大きく深い為各巻において次々と課題が変っていくこと③この物語は、重ねの文学であるので、一つの記述の中にいくつもの要素がとりこまれていること④またある記述においても単純にずばっと書いてないこと、いくつもの解釈が出来ること⑤更には、物語は、

結局は「人生」と「人間」について書いているもので、それらは、はなはだ単純に言い表せない内容を含んでいること。数学のように一＋一は二には必しもならないこと。一＋一が〇のことも四のこともある、ここが物理等と異なる点でかつ面白い⑥一つのこと、例えば紫の上の人生も飛び飛びに各巻に出てくること⑦人間関係も一対一ではなく一対二というように複雑な要素から成っていることが多い等々の為なか〳〵書いていて難かしく、整理できない点があるからであろうかと考えつつも、何よりも著者が源氏物語の内容を十分理解していない為に起るものだと考えており、御指摘の点は十分考慮しつつ今後よく読み、書いていかなければならないと考えており、貴重な意見に感謝をしている次第である。

後者についても、確かにその通りで、今回も「賢木の巻」から「明石の巻」まで四巻一気に書こうと思っていたが、いずれもが源氏物語にとって物語のすじを動かす極めて重要な巻々であるので二回に分け、今回の第五回においては一巻（賢木の巻と花散里の巻）にしぼって書いて見たいと思っている。

三、「賢木の巻」は、光源氏の青年時代において、極めて重要な内容を持っていること、又「花散里の巻」は短かいもののなか〳〵味わい深く意味のある巻である。

四、この書について、筆者は「つれづれ」に書いており、他分に私の源氏物語勉強ノートのような性格を持っているものであって、読者諸氏もその辺りを十分くんでいただいて今後ともおつきあいをと願いしたいと思っている。

一、賢木の巻

（一）巻名の由来

常用源氏物語要領（中野幸一編、武蔵野書院）によれば、六条御息所の歌「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがえて折れる賢木ぞ」

（神垣には訪れる目標もないのに何をまちがえてお出になったのです。円地訳）と

これに対する光源氏の返歌「小女子があたりと思えば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ」による

（斉宮のおいでになるあたりの榊葉の香を慕ってあなたをお訪ねしてまいりました。）

前者の歌の前に、光源氏は「この榊の葉の色のように、変らぬ心に導かれて、神の斉垣を越えて参りました。それなのに、なんと冷たいお扱いでしょうか」と歌を読んでいる。

（二）冒頭文

「斉宮の御下り近うなりゆくままに、御息所、もの心細く思ほす。やむごとなくわずらはしきものにおぼえたまへりし人殿の君も亡せたまひて後、さりともと世人も聞

えあつかひ……知り果てたまひぬれば、よろずのあはれを思し棄てて、ひたみちに出で立ちたまふ」

（大殿の君＝葵の上）（さりとて世人も聞えあつかひ＝光源氏の妻になる）

（二）意義、内容

①光源氏二三才の秋から二五才の夏までの記述。

②光源氏の青年期を書いた巻々の中で最も重要な巻。重大な事件が次から次に起り（後述）、スリリングに満ちており小説の醍醐味を味わせてくれる（瀬戸内コメント）もので、須磨流謫の原因が起されている。

③ＮＨＫテキスト（鈴木一雄）によれば、次の一四回に分けて、じっくり時間をかけて購読されている。

○嵯峨野の秋（一）　○嵯峨野の秋（二）　○伊勢下向　○桐壺院崩御　○寂寥　○密会（一）　○密会（二）　○雲林院参籠（一）　○雲林院参籠（二）　○朱雀帝と源氏　○藤壺落飾　○情勢悪化　○源氏と頭中将　○朧月夜との密会露見

④一言で言えば、この巻は別れの巻とでも言える。

第一に、光源氏と六条御息所の嵯峨野の秋の別れ（御息所にとっては都との別れでもある）

第二は、桐壺院の死（現世との別れ、光源氏から見れば父との死別）

第三は、藤壺の出家（藤壺にとっては、現世との別れ、又、光源氏とのこれまでの関係の別れ）

第四に、光源氏都との別れ（須磨下行）

この四つの主な別れを中心にしながら、その周囲での出来事が書かれており、光源氏の運勢は大きく下向過程をたどるのである。

以下、もう少し詳しく読んでみよう。

⑤嵯峨野の別れ

㋐名文で知られており、源氏物語で一―一を争う。

「はるけき野辺を分け入りたまふより、いとものあわれなり。秋の草みなおとろへつつ、浅茅原も枯れなる虫の音に、松風すごく吹きあわせ、その音とも聞き分れぬるほどに物の音も絶え絶え聞こえる、いと艶なり」となっている。

㋑言葉の解釈　訳者により次のように異っており興味がわく。

あわれ　　艶なり

○円地訳…ものあわれなる風情　なまめかしい、

○瀬戸内訳…しみじみとものあわれなる風情、優艶、

○林望訳…源氏万感胸に迫る思いがした、たいそう幽玄な趣き、

㋒本文章の意味を味わう

○光源氏は、「はるけき野辺」を時間をかけながら、困難をおして、何の目的で訪ねて行ったのか。最後の別れにか、もう一度よりをもどすためか、あるいは世間から冷たい男だと見られたくない為のジェスチャーか、また〈伊勢下向を思い留めさす為にか。

以下の文に「心の中に、いかにぞや瑕ありと思ひきこえたまひにし後、はたあわれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを…」とあることから光源氏は六条御息所との仲は全くさめてしまっているのである。

「瑕ありと」とは、例のいきすぎま事件（葵の上に生霊としてとりつき、葵の上を殺してしまう＝葵の巻）のことである。

自然と人間の対照

衰えていく自然（秋の草衰えつつ）と光源氏の青年としての盛り（春）の対照。又、衰えは両者の恋の終りを暗示している。通常は、自然は盛りで、人間が衰えるものであるが、その逆を言っているのは面白い。

枯れ枯れなる虫の音。恋につかれ果てた六条御息所の心。

○松風、松虫。松つは待つとの掛言葉。表面は、面会をこばみつつどこかで光源氏の来訪を待っている女（六条御息所）心。

美しいだけでなく意味の深い文章で景情一致の文体と内容を、じっくり味わうべきところである。

㋓最終的には、男と女は面会し思し乱れつつ別れの歌を読み合う。

光源氏「あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな」

御息所「おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫」

解釈しなくてもよくわかる歌である。

㋔時間の推移を見てみれば、「夕月夜」「月も入りぬる」「明けゆく空の気色」となっており、時間が刻々と経っていることが月によって示されている。

㋕六条御息所という女と艶歌

前回までかなりのスペースを費し六条御息所との人生と人柄について記述してきた。

私は、この賢木の巻の六条御息所の所を読むといつも次の二つの艶歌（歌謡曲）を思い出す。

○一つは「嵯峨野の女」（米若里子歌）

「乱れてしまえばすむことでした、それが出来ずに別れてきたの……固く結んだ女帯」

この源氏物語の女は帯を解いたであろうか。学界でも見解が別れているとのことであるが何も書いてなく想像力を働かせるしかない。

どう読もうと読者の自由であるが、この物語の底辺には権力対人間の問題があり、権力の一つとして道徳や宗教（仏教）等あると思うのだが、それを越えて人間対人間の問題として考えてみると私は女は帯を解いたと思う。

そして「もののあわれ」を尽して両者は最後の別れをしたと想像する。

「御手をとらえて休みたまふ」や「若き人々は身にしみて過ちもしつべくめできこゆ」の文章の中にそのことが

暗示されているとも思うが、実際には如何なものだったであろうか。読者はどのように読むのであろうか。

○二つは「細雪」（五木ひろし歌）である。

「不幸続きの女に似合う、つかむそばから消える雪」

雪は幸に通じ、細雪は不幸なことを表わしておりこの女（六条御息所）は、まさに不幸続きの女であった。本文を見てみよう。「一六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞまた九重を見たまひける」東宮の后となって、東宮が生きていれば中宮の位にもつける幸福な人なのであった。東宮は若くして亡くなったのである。女は二〇才で未亡人となったのである。

光源氏との関係も見てきた通りで正妻葵の上が亡くなった後、御息所がそのあとがまになるのではないかという世間の目、又本人達もそれを期待していたがいつのまにか立ち消えてしまい、都には居づらくなって娘の斉宮に伴い伊勢に下ることになったのである。本文では「親添ひて下りたまふ例（れい）もことになけれど…」となっているが、史実によれば斉宮規子に母徽子女王が付き添ったという唯一の例がある。この史実を下敷にしている。（NHKテキストより）

その時の独詠歌

「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞ悲しき」

（昔のことは、今は思うまいと耐えてみても心の内に抑え切れない悲しさが湧く　円地訳）

御息所の歌には心に響く良いものがあり、なかんずく独詠歌が秀れているように感じられる。

六条御息所の不幸続きは、六年の月日を経て帰京するも、病気―出家―死という人生をたどる。

六条御息所の話しは、以降、娘（斉宮、前斉宮、梅壺女御、秋好中宮）に移っていく。母は不幸、娘は幸せ（冷泉帝の中宮）と人生の対照をなして進んでいくのである。この賢木の巻では、この娘について、帝（朱雀帝）が関心を示し源氏も同様のようで、以降の物語の伏線（薄雲の巻、光源氏の中宮への思慕）をなしていることに注意を払っておく必要がある。

㋔「はるけき野辺」のこの文章を読んでいてふと思いついたのは、江戸時代の近松門左衛門の著「曽根崎心中」の一節である。

原文をさがしたが直ちに見つからないので、高校時代暗記したものを記してみれば、（記憶違いのところもあろう）

「この世の名残、夜も名残、死に行く身をふればあだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあわれなれ。あれ数ふれば暁の七つの鐘が六つなりて残る一つが今生の…」名文である。両者には、何か共通点がある。村山リュウ氏の講演テープを聞いていると近松は源氏を読んでいたが、井原西鶴は読んでいないとの事であ

った。どうであろうか。

㋒男女の別れは、古今東西、古きもの新しきものを問わず出てくる定番であるが、今聴いているワーグナーのオペラ「ローエングリン」においても最後に出てくる。

人の国におりてきたローエングリンは、素性が明らかにされないことを前提に「エルザ」と結婚するのである。しかし、愛するあまり妻「エルザ」が「ローエングリン」の素性をしつこく聞いた為、元の国に帰らねばならず別れていく場面である。

美しい主題の音楽（メロディ）に沿って帰っていく「ローエングリン」は、ワーグナー歌劇の名作であり楽しんでいる。

⑥桐壺院の死

㋐神無月に「隠れさせたまひぬ」と記されている。

㋑死の意味。桐壺帝は、「花宴の巻」で譲位し、長男の朱雀帝が後をついだが、上皇として政界に君臨してきた。桐壺院の死は政治状況に決定的な影響を及ぼした。即ち、権力の実権は左大臣側より右大臣側に完全に移り、光源氏を始めとする左大臣側の勢いは全く不利となった。

この辺りの記述が、前記の○寂寥○情勢悪化○源氏と頭中将の項に良く表されている。

㋒遺言の重要性

死に際し桐壺院は、遺言を行っておりその中味は春宮（後の冷泉帝）の事や大将（光源氏）の事であるが、「大小のことを隔てず何事も御後見と思せ」とある。光源氏を後見役と思うよう遺言している。

源氏物語における遺言は大事なものであり、六条御息所の死の際の光源氏への遺言（澪標の巻）、宇治十帖での八の宮の遺訓（椎本の巻）等あるがいずれも物語を動かす重要なものである。

⑦藤壺の出家

何故、藤壺は若くして出家したのか。この巻の藤壺の年令は二八才～三〇才である。複雑な要因が考えられる。

㋐世の中を常々無常に感じており、厭しいと思っていた。

㋑光源氏の愛欲を寄せつけないため。

㋒周囲に権力欲がないことを示すため。特に右大臣側にそのことを示す必要があったこと

㋓光源氏との密事がばれないため。ばれたら子供の将来に一番悪影響を与える事。

㋔罪の意識。桐壺帝という絶対的な夫を持ちながら、光源氏とも交わったこと。（若紫の巻）

前記の㋑についてもう少し説明を加えよう。

瀬戸内の解説によれば（源氏物語のしおり）

「源氏は生涯の中で二つの恋の禁忌を守っている。

一、出家した女、つまり尼は犯していない。

二つには血のつながった母親の場合、母親と通じたらその娘には決して子をつけていない」

つまり前者は藤壺であり、後者は玉鬘（母親夕顔）秋好

中宮（六条御息所）ということになる。

㋓については、常々指摘しているよう、一夫にまみれた女性は出家させ、そうでない女性は出家させていない。このことを考えると作者の意図には何か深い意味があるのであろうか。

更に藤壺出家について書いておかなければならないいくつかの事として

㋐出家が突然であったこと、周囲が気当日までがつかない。

㋑季節は雪の降る冬、このことはすごく暗示的意味があるように感じられる。これまでも記した通り、黒い灰色に近い現世から純白な白の世界への転進を暗示していること

㋒光源氏との男女間の関係を絶ちつつ新たな協力関係、政治的同盟とでも言える関係を構築していったこと、藤壺は、恋人、女から政治家へ変っていったのであり、その根底には我子供（将来の冷泉帝）の立身出世を願う母親へと大きく転進していったのである。それが花開くのは中年期を待たなければならない。二人の間に生れた子供（東宮）が、天皇となったのは澪標の巻である。

⑧朧月夜との密事

㋐光源氏が朧月夜という女性と知り合ったのは「花宴の巻」であり既にその経緯とその人となりについては、記してきた通りである。

㋑光源氏側より見れば、藤壺とうまくいかない、求めていたが機会がない、そんな時に朧月夜と運命的に出会うのである。

㋒朧月夜（尚侍君）は、右大臣側（六番目の姫）で朱雀帝にお輿入れが決っていた女性。光源氏は左大臣側、対立する両大臣を背後にひかえての恋である。政治（権力）を越えた人間対人間の関係である。

㋓密事が娘の父右大臣により見つけられ、妻弘徽殿の大后に光源氏は強くにらまれることとなる。

㋔大后は、「御機嫌悪く（この行為＝密事に対して）こちら側（右大臣側）を軽んじ愚弄していると思い、この機会に源氏の君を失脚させるよう計りごとを企てるにはちょうど都合がいいとあれこれ御思案をめぐらす」（瀬戸内訳）のである。

その企ての中には、官位はく奪、遠国への流罪等あったと推料される。

この朧月夜との密事、その露見こそ光源氏の須磨流摘の直接的な原因となったのである。

二、花散里の巻

（一）巻名の由来

光源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散里をたずねてぞ問う」による。（ほととぎす＝光源氏、花散

里＝女性）問うとは訪れる（林望）、この家に来た（円地）の意味。本歌（引歌）は、古今和歌集の有名な夏の歌、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」「懐旧の情を底流」（NHKテキスト）に持っている。

（二）冒頭文

「人知れぬ御心づからのもの思はしさは何時となきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへわずらはしう、思し乱るることのみまされば、この心細く、世の中をなべて厭はしう思しらるるに、さすがなること多かり。」

①恋の煩悩のみならず俗世のあり様にも心乱れるという光源氏の今の気持を表わしている。もう少し具体的に考えて見れば、右大臣側に政治的勢力が移っていったこと、御息所の伊勢下向、父の死、藤壺の出家、朧月夜との恋等々の賢木の巻で転開した事実を指している。

②「さすがなること多かり」の訳も多様である。

林望「そう簡単に捨てられる世でもなかった」

円地「捨てかねる絆も多いお身の上である」

瀬戸内「いざ出家ともなれば、さすがに名残惜しく捨ててゆけないことも多い」と三者三様であり興味をひく。

（三）意義・内容

①「賢木の巻」と「須磨の巻」という二つの大作の間にはさまれた間奏曲のような短い巻。須磨下行の原因を書いた「賢木の巻」から直線的にその結果を書いた「須磨の巻」に行かず、一まず筆をとめて書いたものである。

②古来から花散里の巻の意味・意義について様々な考え方、見方があるようである。

③源氏物語五四帖の巻々には、長いもの、短いもの、中位のものと様々あるが、この花散里の巻は短い範ちゅうに入る。一番短いのは「篝火の巻」（約一七五〇字）で、この「花散里の巻」は二番目に短い（約二千字）。以下、「空蝉の巻」（二一〇〇字）「関屋の巻」（二五〇〇字）となっている。宇治十帖の「早蕨の巻」は約一万字ある。

④自ら須磨下行を決意した光源氏は昔を思い出して女性を訪ねる。

一人の女性（中川の女性）は、問うても迎え入れようとしない。新しい恋人が出来たであろうと推量する。

もう一方の女性（麗景殿の女御とその妹の三の宮＝花散里）は受入れて親しく話をする。和歌の贈答をする。

⑤逆境にある光源氏が時流に流されず、須磨行きを前に心静かに優雅に事に処する態度が良く表われており、それは「もののあわれ」にも通じ、読む我々もほっとするのである。

（四）花散里の意味

①光源氏の側から見てみれば、この頃の置かれた立場、生活は、青年時代前期のような花が咲き乱れた時期と異なり、逆境であってまるで花の散った里に住んでいるよ

うだ。

②女性の側から見てみれば、この女主人公は花散里と呼ばれるが麗景殿の女御（桐壺帝の妻の一人）の妹であり、女の花盛り（春）が過ぎた、花が散ってしまっている年令（夏）の女性で、今で言うアラフォー世代であろうか。

③ここではあまり書かれていないが、性格が穏やかで母性的な人柄の持主で、光源氏がかつてはかない契りをかけた女性であった。逆境の光源氏を心よりなぐさめたであろうし、源氏も須磨下行を前に心おだやかになり大いに慰められたであろう。

④男性読者の中には、この花散里のような女性こそ一番好ましいと思っている人が多いと言われている。わかるような気がする。

⑤この花散里は、光源氏家の家計の元じめ的地位にもあり、後に重要な役割を担うのである。いくつか挙げておこう。

○息子夕霧の母親代り
○玉鬘と同居して教育係
○六条院の夏の御方として重要な妻の一人
○源氏物語には書かれていないが、光源氏の最後を見取った女（ユルスナール「源氏の君の最後の恋」）

三、光源氏の恋愛（そのI、青年時代）

シュトルム・ウント・ドランク（怒涛疾風時代）は、誰の青春にもあるが、光源氏の場合まさにそれが顕著であり青春そのものであった。その中心をなすのは女性との恋愛である。既にこれまでの記述においてのべてきた通りであるが、ここで青年時代の恋愛についてその特徴を抽出しつつ整理しておきたい。政治家としての中年時代と決定的に異なり、恋愛に冒頭したと言っても過言ではない。

（一）特徴

①数多くの女性と同時的に恋愛をした何人もの女性を同時に愛することが出来るであろうか。そういうものを愛と言えるであろうかという疑問は誰にでもわくことである。対象は上流社会の女性のみならず中流社会の女性をも幅広く含み、又、年令層も年老いた色好みの源内侍（六〇才位）から若紫（一〇才）と幅広い。

②我々の今の感覚から考えると恋愛を経て夫婦になるというケースが多いが、光源氏の場合既に結婚（政略結婚、光源氏十二才の時、四才年上の妻葵の上「桐壺の巻」）しており、それを前提として多くの女性との恋である。今で言えば不倫ということになろうか。

③平凡な世間にありふれた恋ではなく困難を伴った障壁の多い恋に精を出したことである。例えば、父の妻＝藤壺、兄の嫁になる人＝朧月夜の君、未亡人（かつて

父の弟の后）＝六条御息所、これらは上流社会の女だが、これに対し中流社会の女として人妻＝空蝉、夕顔＝友人頭中将のかつての愛人等々とこれも幅広い。

④どちらかというと年上の女性が多い。また、これらの女性は既に世の中（男女間の仲）を知っている人達である。これと対照的に中年の恋愛の対象は、年下の女性、明石の君、秋好中宮、玉鬘といった若い女性が多い。

⑤年上の女性だけでなく若紫、軒端荻、末摘花、明石の君、朧月夜の君等は光源氏と初めて契ったものと推料される。

⑥どの女性とも最終的には別れている。

⑦藤壺は出家、六条御息所は伊勢下向、朝顔の君は光源氏に近ずかず又、空蝉も一回のみで以降拒否、というようにいずれも女の自らの強い意志によって光源氏から離れている。

光源氏という男は、最終的に女性にもてたのであろうか。女性達は光源氏をどのように見て対処し考えていたのであろうか。よくよく、今後考えていきたい。

作者自身はどのような人物像として光源氏を描きたかったのか。

⑧作者の描きたかった「よき人、慈悲の人」「歌におけるまことの人」として後々の谷崎や上田、正宗白鳥等の「嫌いな男」「執念くねじけたる所ある人」「人生におけるまことの人」と異なるのは面白いし、前にも（第一回）記した通り、作者は光源氏の晩年を何故あのように厳しく冷たく描いたのであろうという事が思われる。

⑨これらの女性達とのつき合いにおいて光源氏は、二人の女性（夕顔と葵の上）の死に直面している。又、光源氏と交わった多くの女性が出家をとげている。この事情をどう考えるべきか。

⑩これら青年時代につきあった（関係のあった）女性達との後日談は中年期以降に再会という形で語られることとなる。六条御息所（澪標の巻）、末摘花（蓬生の巻）、空蝉（関屋の巻）、明石の君（松風の巻）や朝顔の君（朝顔の巻）。死に直面した女性達は、その娘（夕顔―玉鬘、玉鬘十帖）（六条御息所―秋好中宮、薄雲の巻）との関係である。又、朧月夜の君とは、晩年時代、二〇年振りの再会ということになる。（若菜上）

⑪これらの多くの女性遍歴の中にあって苦悩をかかえつつも終生光源氏と歩んだのは紫の上である。

⑫多くの女性達と別れる中で、六条院の四季の町に選ばれて住んだのは、夫婦としては紫の上（春の町）、花散里（夏の町）明石の君（冬の町）であり秋の町は、秋好中宮が里邸として使用した。これは玉鬘十帖での話しとなる。

（二）女性達の身分（地位）

青年時代のみならず亡き後の宇治十帖に登場する女性達を親の身分により分類した表を作って見た。

御参考にしていただきたい。

この時代の女性達は、親、なかんずく父親の身分により品定めされると共に母親の出にも大きく影響を受け、人生が大きく規定されたのである。

女性達の地位　　筆者作成

子供＼親	天皇	親王	大臣(1・2位)	納言3位	受領5位	参考
女性達	(今上帝(明石中宮))	(前東宮(六条御息所))	(昔の頭中将)(?)	(光源氏(明石君))	唯光の娘(受領)	八の宮の召人
注)：	●女一の宮[薫]	●秋好中宮[冷泉帝]	＝・太政大臣	●明石の姫君(今上帝)	●藤式部永[夕霧]	●中将の君
(父親＝母親)	(今上帝(明石中宮))	認知されず	●玉鬘[ひげ黒]		義父(常陸の介)	(宇治)
[夫]	●女二の宮[匂宮]	＝	●雲井雁[夕霧]		(中将の君)	●中務の君
	(今上帝(明石中宮))	(八の宮)(中条の君)	●弘徽殿女御[冷泉帝]		●浮舟	●中将の君
	●女三の宮[独身]	●浮舟	(左大臣の一人娘)		(入道)(北の方)	召人
	(朱雀院(更衣))	(八の宮)(北の方)	●葵の上[光源氏]		●明石の君[光源氏]	
	●落葉の宮[夕霧]	●中君[匂宮]	(右大臣)			
	＝(朱雀院(更衣))	●大君[独身]	●六条御息所[前東宮]	(三位の中将)		
	●女二の宮[柏木]	(常陸の宮)	(右大臣の六女)	●夕顔		
	(朱雀院(女御))	●未摘花宮[独身]	●朧月夜[朱雀帝]	(御門督)(?)		
	●女三の宮[光源氏]	(式部卿の宮)	(右大臣の四女)	●空蟬[伊予の介]		
	(先帝)(?)	●朝顔の君[独身]	●四の君[頭中将]	(大納言)(?)		
	●藤壺[桐壺帝]	(兵部卿の宮)	(右大臣一女)	●桐壺の更衣[桐壺帝]		
		●紫の上[光源氏]	●弘徽殿大后[桐壺帝]			

(二)　恋愛の系図

多彩な光源氏の恋愛系図をわかり易く作成して見たら別表のような略図が出来た。特徴をいくつか挙げて見れば

①まず何と言っても亡き母親(＝桐壺の更衣　光源氏三才の時亡くなった)を慕っていること、これが光源氏恋愛の原点である。このことは、源氏物語のみならず、ワーグナーの著作品にも多く見られる事であり興味を覚える。

②その母親に似た人として藤壺を求める(数回？の密事、子供出生)指環におけるジークフリトがブリュンヒルゲを求める場合もそうである。

③藤壺という女性(永遠の女性、理想の女性、しかし手の届かない女性)のかわりとして

○そのゆかりとして長期的には紫のゆかりとして若紫(後の紫の上)を発見・結婚、更に晩年時代の遠くたって女三の宮の嫁家問題が起る。

○短期的には藤壺と同じような上流の人

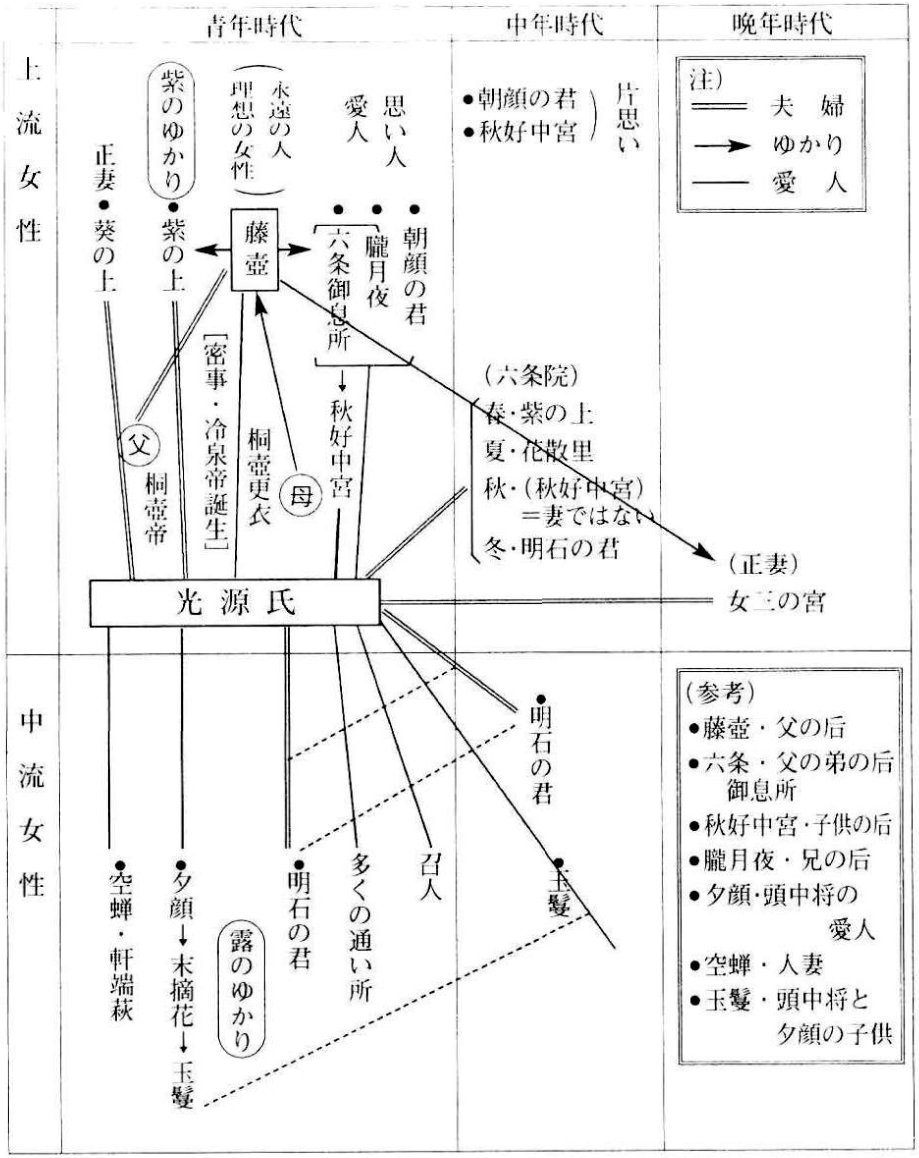
例えば六条御息所、朧月夜、朝顔の君等が恋の対象となる。

○更に好奇心から中の品の女性達(空蟬、軒端の荻、夕顔、未摘花との恋愛(帚木三帖・未摘花)が挙げられよう。夕顔は、露のゆかりである。

④更に、ここで明石の巻まで登場する主な女性達の一覧を作成して見た。御参考にされたい。

光源氏の女性関係略図

筆者作成



物語の主な女性（明石の巻まで）　筆者作成

巻＼女性	藤壺	紫の上	葵の上	六条御息所	朧月夜	朝顔の君	末摘花	明石の君	空蝉	夕顔
	上流の女性							中流の女性		
①桐壺	○ 入内		○ 源氏と結婚							
②帚木三帖 ④	○ 源氏の心の中		○ 不仲	○		○ うわさ話し			○ 不倫	○ 死
⑤若紫	○ 密事	○ 発見	○ 不仲					○ うわさ話し		
⑥末摘花		○ 対比					○ 思いこみ			○
⑦紅葉賀	○ 出産・苦悩	○	○ 不仲							
⑧花宴					○ 出合い					
⑨葵	△	○ 新枕	○ 和合、死	○ もののけ		○ 傷心				
⑩賢木	○ 出家	○		○ 別れ伊勢下向	○ 密通	○ 源氏の思い				
⑪花散里										
⑫須磨	○ 別れ、文通	○ 別れ		○ 文通	○ 文通	○ 文通		○ 評判	●関屋	●娘が 玉鬘十帖
⑬明石	○ 再会	○		△				○ 契り		
●夫	桐壺帝	光源氏	光源氏	前東宮	朱雀帝	×	×	光源氏	伊予介	×
女1対男2	1対2	1対1	1対1	1対2	1対2	×	1対1	1対1	1対2	1対2
●光源氏	○	○	○	○	○	×	△	○	○	○
●出家	○	×	×	○	○	○	×	×	○	×死
●源氏との関係	永遠の人 密事	妻	正妻	愛人	愛人	思い人	思い込み	妻の一人	思い人	愛人
●子供	冷泉帝	×	夕霧	姫(前東宮)	×	×	×	姫君 (後中宮)	×	○ 玉鬘
●父	先帝	兵部卿の宮	左大臣	右大臣	右大臣	式部卿の宮	常陸宮	明石入道	衛門督	三位中将
●階級	上流	上流	上流	上流	上流	上流	中流	中流	(三位) 中流	中流
●意義	密事 出家 政治家 物語の根幹	最も愛された女 苦悩・成長	不仲 早死	愛人 しっと 別れ 遺言	密通 政治的 意味 須磨流謫	結婚 拒否	思い込み	忍従 最給 幸	光源氏を 拒否	恋におぼれる 死→子供 (玉鬘)
●その後	死 (薄雲の巻)	源氏との 夫婦生活 波乱死 (御法の巻)		上京 出家 死 (澪標) 娘、秋好中宮	再会 (若葉上)	相変らず 結婚 (朝顔の巻)	貧乏生活 (蓬生の巻) 二条東院	別れ 子供 六条院へ 国母	別れ	死

(四) 愛の陶酔について

①これまでの記述において、源氏物語には、ワーグナーの諸作品（トリスタンとイゾルデ、ニーベルングの指環）等に比べ愛の陶酔、愛の二重奏がなく、女性がどこかさめていて恋に熱中していないのではないかと考えてきた。

②しかし、改めて源氏物語を男女の愛という点から読み返してみて、愛の陶酔がないという事は物事を極めて単純に両極端においてとらえすぎるのではないかと考えるに致った。

③時代の差、東洋と西洋の人間や風土、週刊、生活の違い、又、表現の仕方等の違いがその根底にあるのではないか。源氏物語においても光源氏と藤壺の恋、柏木と女三の宮の恋、薫と大君の恋、等々における男と女の行動や贈答歌等を読んでいくと、それなりの激しい燃焼があったのではないか。勿論、不完全燃焼の恋も多くある様には形態の夢を描いているのである。

④ただ男女不平等社会（男優位、身分も男女平等でない社会）において女性が心から恋に陶酔できなかったことも事実であろう。これは歴史の差ということにもなろう。複雑な女性の心、例えば身分に対する事、夫へのためらい、世間へのはばかり、経済的な思い、打算等も女性の心の底にはあったであろう。愛欲だけでは恋愛という事は進まないのである

このような観点からこれまで記述した事を改めて吟味して見たいとこれから展開する恋愛を楽しみつつ読んでいきたい。

(五) 本居宣長説について

ここでやや唐突であるが、江戸時代の国学者・本居宣長の「源氏物語論」、「恋愛論」、「もののあわれ論」について、宣長の若い頃の著書「紫文要領」に基づいていくつか記しておき、今後考えていきたい。

①まず、「ただ人情の有りのままを書きしるして、みる人に人の情はかくのごとき物ぞという事をしらする也。是れ物の哀れを知らする也」と源氏物語の意義と価値を捉えている。物語、小説というのは、「空事」ではなく「人の世に経ること」を書いたものである。これは、玉鬘十帖の「蛍の巻」における光源氏の考え方であるが、同時に作者紫式部の考え方である。

②「古来源氏物語を勧善懲悪のため、ことに好色のいましめに書くというは、大きなひが事也」と古説をくつがえしている。

③「本意とはいかにというに、人の心を感ぜしめ物の哀れをしらす故也」

「男女のなからひの事のみおおくは」「人の情の深くかゝること恋にまさること故也」

④「物の哀れをいみじういはんとてはかならず秘事は、其の中におほくまじるべきことわりなり」「色欲はこと

に情の深くかかる故也」秘事（密事）、色欲に積極的な意味を持たらしているようにも思え、なか〳〵素直にはいそうですかと言う訳にはいかない点でもある。

平安、鎌倉、室町時代等の先人達による源氏物語の見方、評価を変えたのは、江戸時代のこのような本居宣長で、今小林秀雄の書（本居宣長）を読み、講演テープを聞いているものの、なか〳〵難しく十分理解できていないが、今後じっくり対処していきたい。理解した暁には源氏物語に対する見方が大きく変ってくるであろう。

四、光源氏の出家願望

光源氏の青年時代を読んでいて恋愛を強く志向する心と秘かに出家したいという願望が同時的に存在していることに注目しなければならない。中年期になるとこれに権力志向が強まり複雑な人間像となっていくのである。しかし藤壺（女性）はさっさ出家し光源氏（男性）は死のまぎわまで出家出来ないという大きな対照をなしている。恋愛と仏の道というある面で相反する心は、宇治十帖の世界においても主人公薫の心の中にも強くあるものである。

ここでは光源氏の出家願望についてまずその巻々と契機、文章を松風の巻まで整理しておきたい。

巻	契機	文章（原文）
若紫	僧都との出会い	家の事　家族の事　後の世のいみじかるべきを、思し続けて
葵	妻（葵の上）の死	願はしき様にもなりなまし
賢木	藤壺との事	律師のいと尊き声にてなぞやと思しなるに
	雲林院巻籠	さすがなること多かり
花散里	—	釈迦牟尼仏弟子と名のり
須磨	都を離れて	ゆるやかに誦みたまえる
	無常の世を思う	常なきものに世を息して…
絵合せ	栄華の裏腹	なお世を背きなん
松風	御堂造営	御堂つくらせ給ふ　造らせたまふ御堂は大覚寺の南

次回は、大作であり源氏物語にとって極めて重要な意義と意味をもつ須磨、明石の両巻についてじっくりと記してみたい。

（27・1・8）

小説　田方農業高校物語（三）

堀内永人

六、田方農林学校を創立し校長となる

仁田大八郎が、東京駒場の農科大学で身につけた先進農芸化学は、伊豆地方の農民に強烈な刺激を与えた。

この当時、韮山中学校へ通学している生徒は、それぞれの村の地主などの有産階級か、教師などのインテリ層の子弟であって、農家の子弟はごくわずかであった。

大八郎は、自分が理想とする、農民の地位向上と意識改革を達成するには、

『無知こそ農民の人格の立ち遅れ』

の問題を解決しなければならない。

そのためには、農民のための教育が必要であり、韮山中学校とは別の、《農民にこそ必要な学問、技術》を、教える学校を創設しなければ駄目だと考えていた。

まず初めに、仁田大八郎は、自宅屋敷内に、

『私塾仁田塾』

を開設した。

この私塾には、毎晩、地域の青少年が大勢集まり、農業に関連する学問を熱心に学んだ。

この仁田塾は、伊豆の人たちから、

『私立仁田農学校』

と、呼ばれて親しまれた。

仁田塾を開設した大八郎は、自分が東京の農科大学で学んだ農業の知識や技術を、地域の農民に惜しみない愛情をもって接し、かつ、教えたのである。

しかし、彼個人が私塾でどれほど指導しても、それには限界があった。

（このままでは、多くの農民の意識改革と地位の向上を期待することはできない）

と、いうことで、仁田塾の十倍も二十倍も規模と内容が大きく、充実した教育機関を創る必要があると考え、農業校設立の構想ができていったのである。

一方、行政としても、農業振興を図るためには、農業の実務を教える実業学校の創設が必要であるという観点から、農業学校の設立機運が高まってきた。

田方郡会において農業学校設立が計画され、明治三十五年（一九〇二）、仁田大八郎のところへ話が提示された。

大八郎は、田方郡会（現在の県議会、市議会の中間的な機関）の設立準備委員と種々協議の結果、大八郎の『無知こそ農民の人格の立ち遅れ』の哲学と一致をみて、『私立仁田農学校』を発展的に解消して、農業学校を設立することになった。

学校を設立するために、まず、第一に決めなければならないことは、

①どの程度の規模の学校にするか、

②その建設資金の調達方法をどうするか、

という問題である。

大八郎は、日頃から考えていた構想をベースにして、田方郡会議員をはじめとして、各方面の有力者と協議し、

□場所は、田方郡函南村塚本（現在の田方郡函南町塚本）

□建設資金三五〇〇円（現在の約十億円相当）は、

イ、静岡県出資……一〇〇〇円

ロ、仁田大八郎出資……一五〇〇円および農具、農業機械など

ハ、敷地……仁田家所有地一六〇〇坪（五一八〇平方メートル）

という案で、農業学校の設立計画が進んだ。

農業学校の設立計画が決まると、仁田大八郎は、

□敷地の測量

□建物の設計

□工事の監督

□行政機関（文部省、静岡県庁）への認可申請手続きを行った。

その結果、

『勤勉、誠実、自治』

を教育理念として、

『西の中泉農学校（現在の静岡県立磐田農業高等学校）』

『東の田方農林学校（現在の静岡県立田方農業高等学校）』

と謳われる名門農学校が誕生したのである。

認　可……明治三十五年（一九〇二）三月十二日

校　名……静岡県田方郡立田方農林学校

開　校……明治三十五年（一九〇二）四月十六日

校　長……仁田大八郎、

教　員……教頭、望月精太郎（後に第二代校長となる）

教諭、津田勉造（後に第三代校長となる）

修業年数……三か年（乙種実業学校）

生徒数……一年生　二十五名（卒業時二十三名）

二年生　二十一名（編入）（開校後に中途入学があり、卒業時二十名）

仁田大八郎は、初代校長に就任（三十一歳）し、大正八年（一九一九）（四十八歳）四月に退職するまで、十八年間、校長を務め、今日の静岡県立田方農業高等学校の基礎固めに、心血と資金を注いだ。

この当時の学制によれば、中等学校は、

イ、中学校

ロ、実業学校（明治三十二年、実業学校令公布）

農業学校

商業学校

工業学校

実業補習学校

と分類され、静岡県における最初の農学校は、中泉農学校（現在の静岡県立磐田農業高等学校）で、明治二十九年（一八九五）開校時の校名は、『磐田、豊田、山名三郡組合立中遠簡易農学校』といった

中遠簡易農学校と田方農林学校は、農業学校の双璧として、文字通り静岡県の中等実業学校を牽引したのである

参　考

同時期に設立された農業学校

―中泉農学校（現、静岡県立磐田農業高等学校、明治二十九年《一八九六》創立）

②浜名郡蚕業農学校（現、静岡県立浜松大平台高等学校、明治三十年《一八九七》創立）

③御殿場実業学校（現、静岡県立御殿場高等学校、明治三十四年《一九〇一》創立）

④田方農林学校（現、静岡県立田方農業高等学校、明治三十五年《一九〇二》創立

⑤沼津農学校（現、静岡県立沼津城北高等学校、明治三十五年《一九〇二》創立）

⑥藤枝農学校（現、静岡県立藤枝北高等学校、明治三十六年《一九〇三》創立）

⑦佐野農業補修学校（現、静岡県立裾野高等学校、明治三十六年《一九〇三》創立）

⑧周智農林学校（現、静岡県立遠江総合高等学校、明治三十九年《一九〇六》創立）

⑨小笠農学校（現、静岡県立小笠高等学校、大正元年《一九一二》創立）

⑩安倍農学校（現、静岡県立静岡農業高等学校、大正三年《一九一四》創立）

育英事業

仁田大八郎は、田方農林学校の創立時、生徒を募集するため、手弁当、脚絆巻きで伊豆半島の各地を訪問した。

その時に、小学校で成績は良いが、経済的な事情で進学を諦める生徒には、

「農業の手伝いで進学を諦めるというならば、雨の日に登校して勉強すればよい」
「学費が無くて進学を諦めるというならば、私（大八郎）の家から通学すればよい」
と言って、進学を勧めた。

その頃、明治政府は、明治五年（一八七二）に制定した近代学校制度を推進するため、奨学金制度を制定し、これを全国に施行した。

田方郡に初めて奨学貸費規程が一般に示されたのは、明治三十四年三月であった。

大八郎は、自ら資金を拠出して、大正五年（一九一六）四月に、私設育英機関として、『田方タイムス社田方郡篤志育英部』を設置し、その責任者として育英事業（給付と貸費制度）を推進した。

その後、大正六年（一九一七）六月には、東京在住の三島町出身の医師宇野朗氏（医学博士で東京築山堂病院長）が、同病院設立二十周年記念として、『田方タイムス社田方郡篤志育英部』の育英基金に一〇〇〇円（現在の三億円相当）を寄付して多くの人々の耳目を集めた。

この宇野博士の寄付に触発されて、田方タイムス社田方郡篤志育英部へ寄付する篤志家が増加し、全国に同育英部の名と共に仁田大八郎の名声が広まった。

この育英部が、他の育英資金の貸与制度と大きく異なる点は、

一、貸与を受けた奨学金の年間返済額は、総貸与額の一〇分の一以上とし、育英部でやむを得ないと認めた時は、返済を延期する。

二、育英部の都合で、奨学金の貸与を廃止した時及び奨学金の貸与を受けた生徒が死亡した時は、返済を免除する。

という点にあった。

雑誌社『田方タイムス社』の育英制度が進むに従い、創設者の仁田大八郎は、同育英部から奨学金の支給を受けた生徒とその家族は勿論、全国民から感謝と賛辞が贈られ、静岡県の教育界に大きな足跡を残した。

七、耕地整理や畜産の組合で地域をリードする

今、東北地方や新潟県の米どころへ行くと、碁盤の目のように整地された農地が広がっている。

この整然とした農地も、元は雲形定規のような形をした田圃がひしめいていたものである。

これが、明治三十二年（一八九九）に施行された耕地整理法の適用を受け、改良に改良を重ねて、今日の素晴らしい農地となったのである。

耕地整理とは、土地の利用を多目的に活用し、米麦などの農産物の収穫を増加させる目的で、土地の交換・分合、区画・形状の変更、開墾および道路・畦畔・溝渠の変更・廃置、湖海の埋立・干拓または排水・灌漑などの設備の改良を行うことをいう。

仁田大八郎は、曲りくねった畦道により複雑に区切られた伊豆地方の農地の現況を、効率的、合理的な農地に改良しなければ、農業、否、農家の生活向上は不可能だ。そのためには、耕地整理は絶対に必要だ、と農民を説いて回った。

そうして明治四十四年（一九一一）十月十五日に、函南村仁田耕地整理組合を設立し、大八郎は組合長に就任した。

この間に、大八郎は、耕地整理の賛同者、西原助太郎、三田勇次郎らと、愛知県中島郡起町へ視察見学会を実施するなど、研究に研究を重ねていた。この時、大八郎は、四十一歳であった。

参考

田方郡下の耕地整理組合の設立状況

□田方郡三島町茅町耕地整理組合……明治三十四年（一九〇一）十二月二十七日

□田方郡土肥村土肥耕地整理組合……明治三十八年（一九〇五）八月五日

□田方郡北狩野村浮橋耕地整理組合……明治四十二年（一九〇九）二月七日

□田方郡西豆村八木沢耕地整理組合……明治四十二年（一九〇九）四月二十一日

□田方郡中郷村赤玉耕地整理組合……明治四十二年（一九〇九）十二月二十二日

□田方郡中郷村大場耕地整理組合……明治四十三年（一九一〇）十一月十九日

□田方郡函南村大土肥耕地整理組合……明治四十四年（一九一一）二月二十三日

□田方郡函南村柏谷耕地整理組合……明治四十四年（一九一一）二月二十六日

□田方郡対馬村池耕地整理組合……明治四十四年（一九一一）九月二十六日

□田方郡函南村仁田耕地整理組合……明治四十四年（一九一一）十月十五日

□田方郡中郷村大場南部耕地整理組合……明治四十五年（一九一二）三月二十七日

□田方郡函南村仁田西部耕地整理組合……大正十年（一九二一）一月十五日

□田方郡函南村稲妻耕地整理組合……大正十年（一九二一）一月十五日

このうち、耕地整理後の耕地面積が広かったのが、

□中郷村大場南部耕地整理組合の五十三町歩（約五十三平方キロメートル）

三島町茅町耕地整理組合の四十八町歩（約四十八平方

キロメートル）
であった。

当時、この周辺の農地は、冷水が各地で湧出して稲作に支障があり、長い間、農家の頭を悩ませていたが、耕地整理により、この問題が解決し、仁田大八郎は大いに感謝されたのである。

また、大正七年（一九一八）着工、昭和九年十二月開通した国鉄東海道本線最長（七、八四キロ）の丹那トンネルは、交通機関の発展に大いに寄与したが、その反面、トンネルの開鑿により、大量の地下水が湧出して、地域の灌漑用水を枯渇させてしまった。

仁田大八郎は、直ちにその対策を講じ、大正十年（一九二一）一月十五日に仁田西部耕地整理組合を設立して組合長となり、さらに柏谷・仁田両地区からなる稲妻耕地整理組合を設立、来光川の豊富な水を揚水ポンプで汲み上げて乾田となった農地へ流し、十年余の間、枯渇に苦しんでいた水田を、見事に往時の良田によみがえらせるという大事業を完成させた。

このように、函南村の農民は、丹那トンネル開削工事により被った農業用水の枯渇という逆水難から逃れることができたのである。

かつて仁田大八郎は、米の収穫時以外に現金収入のなかった農家に、乳牛を飼育させ、牛乳を収荷販売して、生活の糧とさせていた。

ところが、平和な日本に、大きな悲劇が襲ってきた。

大正十二年（一九二三）九月一日正午前、相模湾を震源としたマグニチュード七、九の大地震が発生し、関東全域にわたって甚大な被害をもたらした『関東大震災』である。

被害は、

死者……九万九千人
行方不明……四万三千人
負傷者……十万人
被害世帯……六十九万世帯

におよび、京浜地帯は壊滅状態となった。

この大震災は、伊豆地方にも大きな打撃をあたえた。

そして第一次世界大戦中の好景気がおわって不況となり、平和で豊かな生活を得つつあった伊豆の住民にも、その余波が襲い掛かり、周章狼狽の極致に陥った。

仁田の農民、塚本儀十は、

「茂吉さぁ、折角、仁田の大八郎日那が俺ら農家にも、現金収入があるように、と乳牛の飼育を指導してくださり、なんとかそれが軌道に乗り始めたかと思ったら、今度の大地震と不況とかで、牛乳がぜんぜん売れなくなってしまったし、そのうえ、値段は下がるしどうしようもない。なんちゅうこった」

と、同じ村の酪農業の青木茂吉に愚痴をこぼした。

「そうだ、本当に困ったもんだ。牛乳は搾るけんど、捨て場もない始末だ。知り合いに配って、無理に飲んでもらっているが、それでも牛乳が余ってしまう……」

と、茂吉も半ば捨て鉢気味であった

儀十は、ちょっと考えていたが、

「だけんど、大八郎日那に、なにか良い案があるらしいが……」

と、先日、大八郎がふと漏らした言葉を思い出した。

「儀十さぁ、その仁田の日那さまの考えているちゅうことは何だい……」

「うん、俺もよくわからないが、俺らが一人、二人で牛乳を売っても、商人に大刀打ちできないから、《田方の酪農家が一つにまとまって交渉するようにしたらどうだろうか……そうすれば商人に値をたたかれることもないだろう》ということらしい」

と、塚本儀十は、仁田大八郎の構想の一端を青木茂吉に話して聞かせた

「なるほど、なるほど……仁田さまの日那は、帝大を卒業しているだけあって、考えることが違うわ……」

と、茂吉は感心すること頼りであった

ちなみに、その頃の物価は、

牛乳……一〇〇ミリリットル（約一合）
九銭（現在、五円＝一六六倍）
郵便はがき……一枚、一銭五厘（現在五円＝三四六六倍）
白米……十キログラム、一円五〇銭（現在三七八〇円＝五二倍）

（フリー百科事典『ウィキペディアwikipedia』より）

であり、現在の物価と比較すると、当時の牛乳は、かなり高価な飲料であった。

仁田大八郎は、牛乳の生産過剰と安値で苦しむ酪農の苦衷を打開するため、田方農林学校第四期生（明治三七年四月―明治四〇年三月）で、腹心（信頼する）の友、塩田利夫に、

「塩田君、私は農家の人たちに、少しでも協力できればと思って、酪農を勧めたが、大震災以後の不況で、かえって、みんなに苦労させているような状況になってしまった。さて、どうしたものであろうかな……」

「いやいや、これは一時的な現象だと思いますから、そんなに気にすることはありません　そんな弱音を言うなんて強気の仁田さんらしくないですね……」

と、励ました。が、本当のところ、塩田自身も不況という社会的な現象に対して、

（打つ手はないのでは……）

と、思っていた　が、そんなことを言えないので、ただただ励ますのみであった。

そんなある日、大八郎は、

「塩田君、実は私は、田方郡下の酪農家の皆さんから少しずつ協力してもらい、組合のような団体をつくって、組合で生乳を処理し、組合で牛乳を販売する。その方が、酪農家が一人で商うよりも、はるかに効率的ではないか、と考えているのだが…」

と、日頃の構想を打ち明けた。

すると、塩田利夫は、ポンと手を打ち、

「なるほど…農家が百軒、二百軒とまとまって組合を創り、生乳を集乳から、殺菌、瓶詰、販売まで一貫して行えば、これは強力な生産販売団体となり、強者の揃いの商人に対抗できるでしょう。これはいい案ですね。さすが仁田さんですね。考えることが違う。仁田さんの帝大卒は、伊達ではない…」

と、しきりに感心し、賛意を示した。

大八郎は、農家の苦境を打開するため、

1　伊豆畜産販売購買利用組合の設立

2　牛乳処理工場の建設

3　低温殺菌生乳の東京での販売

を計画し、田方郡下の農家に協賛を呼びかけた。

大八郎は、大正十五年（一九二六）に、函南、韮山、伊豆長岡、大仁、修善寺、中伊豆などの農家の有志を集め、現在の社会情勢や経済不況の見通し、組合の業務内容などを、噛んで含めるように詳しく説明して組合参加を求めた。幸い、多数農家の賛成により、一口五十円の出資を得て、

『伊豆畜産販売購買利用組合』

を、設立することができた。

組合が設立されると、大八郎は、組合員の満場一致の推薦により組合長に就任、直ちに駿豆鉄道大場駅前に生乳の低温殺菌処理工場を建設した。

工場が建設されると、仁田組合長は、信頼する若き友、塩田利夫を工場長にして、早速営業を開始し、工場の従業員に集乳を指示した。

塩田工場長は、かって農林学校下校中に、誤って用水路に転落した大八郎の幼い長男孝を救出した経緯もあり、仁田家とは、公私にわたって密接な間柄でもあった。そのうえ、真面目で責任感が強く、かつ、勤勉、努力家である。多忙な大八郎に代わって工場を取り仕切るにはうってつけの人物であった。

塩田工場長以下従業員は、早速農家を一軒一軒回って生乳を集めた。が、当初計画していた量の生乳が、なかなか集まらない。

数日後の夕方、塩田工場長が、組合事務室の組合長席の前に来て、もじもじしながら、

「ご相談したいことがありまして…」

と言って口籠った。

「なんでしょうか…」

と言って大八郎は、律儀（実直）な塩田工場長の日焼けした顔を見上げた。

「実は、その…」

と、いったまま、拳を握りしめ、塩田工場長は、なかなか口を開かなかった。

「…」

温厚な大八郎は、塩田工場長の言い出すのをじっと待っていたが、遂にしびれを切らして、

「塩田君、話してくれなければわからないよ。そんなに言いにくいことかね…」

と、塩田工場長の心情を察しながら、やさしく諭し、話すように促した。

すると塩田工場長は、

「はい、それが大変いいにくいことですが、どうも牛乳の集まりが悪いようで…」

と、ようやく重い口を開いた。

大八郎は、一瞬、

（塩田工場長は何を言うんだ）

と、思いながら、

「牛乳が集まらない？…それはどういうことかね」

と、怪訝な顔で問い質した。

「集乳の初日はまずまずでしたが、二日目、三日目と少しずつ集乳量が減っていくのです」

大八郎は、塩田工場長が意外なことを言うものだと思い、

「牛の乳の出が悪いのではないのか…」

と問うと、

「そうではないようで…」

と、塩田工場長は申し訳なさそうな顔をしているばかりで、話の核心に触れたがらなかった。

「それでは、集乳量の少ない原因は何ですか？」

温厚な大八郎も、塩田工場長の煮え切らない態度に、少しいらいらしてきた。

「それが…」

「それが…？　なんですか？」

大八郎は、立ち上がりかけて、半分腰を浮かした。

すると、塩田工場長は、もはやこれまでと観念して、

「実は…、農家の中に、《今度の組合が行う生乳の販売は大丈夫だろうか…ちょっと心配だから、少し様子をみよう》という者がいるようで…、それで農家の人が出荷量を控えている、ということのようです」

と、肩をすぼめ、うなだれて説明した。

大八郎は、

「君、何を言ってるんだ。まだ事業を始めたばかりで、最初から計画通りにいかないこともあります。だが、努力してやっていけば必ず成功します。初めからそんな弱気なことでは、できることも、できなくなってしまいます。工場長の君がそのようなことでは困ります。意を強

くしてやって下さい」
と励ました。

仁田大八郎という人物は、
『実る稲田は頭垂る』（人は、学問や道徳的行為が深まるにつれて、考え方や行動が謙虚になる）
の諺そのもののような人格者である。決して、上から命令してことを進めるような頑迷、高圧的な人ではない。
農家の人たちが動揺している。これは人任せにはできないと判断し、農家の理解を得るために、翌日から、自ら牛を飼っている農家を一軒、一軒回って、怒らず、威張らず、焦らず、腐らず、根気よく説明し、協力方を要請した。
このあたりが、大八郎の傑物たる所以である。
こうして、伊豆半島の北半分、田方郡下の集乳量が、少しずつ増えていった。
ちなみに、牛乳が生産され、家庭に配達されるまでの工程は、
① 牛乳は、肥沃な牧草地で、たくさん牧草を食べた乳牛から搾乳される。
② 搾乳された牛乳は、集乳所へ集められ、タンク車で乳製品の製造工場へ運ばれる
③ 工場へ運ばれた牛乳は、検査してから、一旦受乳槽へ貯えられる。
④ 貯えられた牛乳は、受乳槽から清浄機へ移され、ゴミなどを除去してきれいな牛乳にする。
⑤ きれいになった牛乳は、均質機で牛乳に含まれている脂肪を細かくされる。
⑥ さらに、殺菌機で細菌を完全に殺菌する。
⑦ 無菌になった牛乳は、冷却機で、摂氏四度以下に冷却される
⑧ 冷却された牛乳を、瓶詰打栓機で瓶に詰めて蓋をする。
⑨ 牛乳の入った瓶は、箱に詰められ、冷蔵庫で摂氏十度以下の低温で保管される。
⑩ 瓶詰の牛乳は、配達日の早朝、牛乳小売店を通じて、学校や家庭など消費者に配達される。
（学習研究社『学研現代百科事典』一九六五年、二巻、五三二五頁）
牛乳の生産工程で問題になったのが、牛乳の酸度が高くなる現象である。いわゆる《牛乳の変質》である。
この牛乳の変質は、アルコールを牛乳に混ぜて検査する過程で、牛乳とアルコールが分離状態になる不良品の問題で、組合長である仁田大八郎は、これを改良するために塩田工場長らと手を尽くした。が、始めはなかなか思うようにいかず、ほとほと困却した。
大八郎は、
「塩田君、生乳の加工の具合はどんなですか……」
「それが組合長、どうも検査の段階でうまくいかなくて

……」
大八郎と塩田工場長は、牛乳の変質をなくすために苦心し、主な従業員と一緒になって研究した。
「それでは塩田君、検査の時に使う試薬の量や、試薬を入れるタイミングなどをいろいろ変えてみてはどうだろうか」
とアドバイスし、自分も一緒になってテストにテストを重ねた。
そして、試行錯誤の末、牛乳の変質問題は、なんとかクリアできた。
伊豆畜産販売購買利用組合は、（伊豆は勿論、中伊豆方面（伊豆半島の天城山から北の地域）の農家からも牛乳を集め、それを工場で低温殺菌して瓶に詰め、東京で販売することにした
ところが、新規参入であるから、計画通りに売れない日がしばらく続いた
大正十二年（一九二三）には関東大震災が起こり、昭和二年（一九二七）には、銀行が倒産する『金融恐慌』が起こることになるのである
こうした経済不況が日本全国に襲いかかり、さらに不景気が追い打ちをかけるように庶民の懐を直撃し、生活が苦しくなるばかりであった
当然、牛乳販売の業界も、熾烈な販売競争に明け暮れた
仁田大八郎は、
（このままでは駄目だ。わが組合の牛乳は新規参入だ。いくら牛乳の品質が良いと説明しても、なかなか皆さんに理解してもらえないだろう。なにか他社の牛乳との差別化を図らなければ駄目だ。それにはどうすべきか……）
を考えた。そして組合牛乳を、
『三島牛乳』
と命名し、ブランド品として販売することにした。
大八郎は、なかなかのアイデアマンである。
大八郎は、田方郡下の生乳を集めて低温殺菌処理し、これを瓶詰めにした。だが、この瓶詰めにした牛乳を、最高の鮮度を保ったまま、東京に送る方法がない。
諸所に交渉した結果、東海道本線の冷蔵貨車に積んで東京に送って売り出すことにした。
このようにいろいろと苦労したが、販売事業は、実に画期的で、全国で初めての試みであったので、世間の耳目を集めた。
この新しい牛乳販売方法が成功して、三島、函南を含めた田方郡下の農家は、酪農の先進地として、全国にその名を馳せた。がこれらの事業は、いうなれば、大八郎のアイデア、企画力、決断力の賜物である。

つづく

殉教（六）

鍋屋次郎

金沢教会の献堂式を六日後に控えた七月一八日の午後、教会のほど近くの自宅で、高山右近は茶室で一人、茶を点てながら追放以後のことを振り返っていた。小豆島で教会に行くこともできない、信仰の話をする友もいない、食と住が与えられてはいるが、見張られた生活があるだけの時期（領主小西行長は決してそうは思わず、右近一家の世話をしているつもりが、右近側から見れば見張られていると映っていた）、これから自分がどのように歩いて行ったらよいのか、先の見通しは全く立たなかったことを思い出していた。その時に渇望していた信仰生活が、この様に恵まれた形で与えられたことは、只々「神の恩寵」としか考えられず、ひたすら感謝の祈りをささげていた。

右近は、同時に教会堂落成後の加賀でのキリシタンの信仰生活と、それを支える教会の働き、教会としての地域への宣教のあるべき姿を考えていた。

それについて、右近は高槻・明石での宣教では一時（いっとき）、キリシタン天国が出現したかの喜びに包まれていたが、それは自分が領主で、誰も反対できない領内統治構造だったからできたのであって、高槻でも神社・仏閣の取り壊し、明石でも右近着任以前に噂を聞きつけた仏僧たちが仏像をもって大挙逃げ出すという騒ぎがあった。その結果、高槻でも明石でも、右近失脚と同時に反動がおき、キリシタンは迫害を受けた。

ここは前田領であって、自分が領主ではない。同様なことをして前田家に迷惑をかけてはならない。今の加賀藩の政治的安定を前提とした社会の中で、右近が加賀を去ってからも世に受け入れられ、世から評価され、仏教徒も、神道に従う人たちも、キリシタンに反対しないような、キリシタン宣教を行っていかなければならない、

と過去の自分を猛省していた。

翌日、右近が考え続けていた教会堂完成後のキリシタン宣教のあり方を、神父達に理解してもらうために、ヴァリニャーノ師とオルガンチーノ師並びに二年前に前田家を頼って客将として招かれている内藤如安の三人を自宅に招き、自宅にただ一つ設けていた洋室で三人と丸テーブルを囲んだ右近は

「これからの日本国でのキリシタン宣教ですが、基本的には日本の既存宗教の存在を認める中でキリスト教の宣教を行うべきと考えます。神父方はローマからここまでの航海の途中、未開民族を征服して、そこで現地の宗教も否定、根絶して、一神教であるキリスト教を強制して来ています。スペイン・ポルトガルといえども、民族の優秀なこの日本を征服することは不可能でしょう。そのような中で、この日本で他宗教を排他的に扱って行くと、必ず施政者から「キリシタン禁教命令」が出され、宣教者は自国へ戻らされることとなるでしょう。また、洗礼を受けた一般信徒は迫害を受けて強制的に棄教を命ぜられることとなりましょう。その時点でそれまでの宣教はゼロどころかマイナスになります。

そこで、私の考えは、ここまで増えてきたキリシタンを更に平和的に増加させて行く、このためのあり方は、キリスト教が、この日本での既存宗教と共存できる世を作って行くことです。

私が高槻や明石で、神社・仏閣を破壊して、その信徒たちから危害を加えられなかった理由は、私が絶対権力を持った領主だったからです。私が追放になってから、そこのキリシタン達は迫害を受け多くの人たちが棄教しています。私が神社・仏閣を破壊したのは、自分の驕りでした。私が永久にそこの領主では有り得ないわけですから。信徒になった人たちにお詫びの仕様がありません。二度とこのような状態は作りたくはありません。いつの日か、私が加賀を去ったときでも、迫害されない、棄教を命ぜられない、日本古来の諸宗教と共存できる体制を作るべきと考え、お二人の師と、加賀での同志である内藤殿に、私の考えを申し上げる次第です。

献堂式の後に行われるお披露目には、金沢に住まいする信徒は勿論、私の知行地能登末吉地区からも多くの信徒がやってきます。その人たちは、どこにも負けない立派な自分たちの会堂ができたことを何よりも喜んでいます　どうか、その人たちの喜びを、永遠に続く喜びとさせてください。

そのためには、デウスへの信仰により天国を仰ぎ望み、地上での歩みの中でデウスが順守するよう命じられた「慈悲の十四箇条」を守ってゆかせたいと思います。もしも慈悲の十四箇条の一つにでも自分が違反したと思ったら、教会に来て告解をして罪の許しを受けることです。

世の人たちに「キリシタンはそんなに立派な思いで毎日を生きているのか」と思って貰えれば、それは大きな宣教になります。共存も可能です。会堂ができた次は、私はそのような世界を作ろうと思っています。キリシタン信徒が、宗教的にも、人間関係においても、この世から孤立してはなりません」

右近のこの言葉に、オルガンチーノ神父は

「高山殿、我々はこの日本を征服に来ている訳ではありません。しかし、一神教の世界では、自分の神以外の神を認めません。日本人全員にキリシタンになって貰って、信者として、人間として、神の前に正しく歩んでもらいたいのです」

「オルガンチーノ師、私が認めると言ったのは、その宗教の正当性とか、自分たちがその宗教理論を認める、ということ言っているのではなく、キリシタンの世界では認めることができない日本古来の宗教、つまり神道、仏教のこの世での存在と、それを信仰する人たちが存在する、という事実のみを認め、キリシタンも、仏教も、神道も、それを信奉する信徒と共に共存することを認めあう、そして互いに干渉することなく共存する世の中を作って行きたいということです」

ここでヴァリニャーノ神父が

「高山殿、オルガンチーノ師、内藤殿、高山殿の言うことは、この日本においては大変重要なことと思います。ここで四人だけで取り決めるわけにはいかないので、マカオの東アジアを管轄する司教区で高山殿のご意見をもとに、日本宣教のあり方としてよく検討させていただきましょう」

の言葉で、この右近の発言は、宣教師の指導的立場にあるヴァリニャーノ・オルガンチーノ両神父に、日本での宣教のあり方として重要な問題を提起したことになった。

慶長九年（一六〇四）七月二十日、高山右近は完成した金沢教会堂内部を丹念に見回った後、会堂内に設けた茶室に入り、四日後のキリシタン方式での「献堂式」の手順を再検討していた。

ヴァリニャーノ神父ほか六名の神父たちは既にその日のために金沢へ来ており、更に三人が京都から来る予定になっている。

献堂式には主賓として藩主前田利長や豪姫、家老たちも出席することになっており、献堂式はイエズス会の式次第で行うこととしていたので、藩主以下家老など藩の主要な人たちには、神父の祈祷文言を翻訳したものを渡すことにして、それは既に用意されている。また、オランダから献堂式用にオルガンが一台到着していて、神父が

奏楽をすることとなっている。

一般信徒対象の「お披露目」は、献堂式の翌日から二日間行うこととし、加賀・能登・越中国内の洗礼を受けた信徒一人ひとりに右近自らが招待状を出していた。そして、その折、八人の神父がそれぞれ信徒から告解を受ける場所等の準備も完了していた。これら信徒にはお披露目の日程内でなくても、場合によれば夜道も歩くことになる事を考えて、洗礼を受けた一人ひとりに提灯と蝋燭を添えて、一月くらい前から地域ごとの世話人によって配っていたので、信徒たちは、献堂式が待ちきれなくなっていた。

能登その他遠方の信徒たちの宿泊は、金沢に住んでいる信徒が、それぞれの自宅を開放し、宿泊希望者が多いときは家族も信徒も同じ部屋で寝起きすることにもなっていた。

これらのことは、右近の知行地にある末吉城から篠田伊織を呼びよせて、諸々の準備をさせていたが、準備の人員が不足気味で、金沢在住の信徒も動員していた。

献堂式当日、教会では藩主前田利長・豪姫・家老はじめ要職の人たちが来賓席に座るのを待って始まった。

ヴァリニャーノ師の司式で始まり、オルガンの前奏に続き、神にこの会堂を献ずることができた感謝と、この会堂を通して神の聖心（みこころ）を加賀の地に宣教することへの神の導きをお願いする祈りと、その後、オルガンの前奏に続く神父・修道士たちによる讃美歌により、会堂内は荘厳な中に献堂式が進められていた。

右近は奏楽と讃美歌が終わった時点で、ヴァリニャーノ神父の祈りと、讃美歌の歌詞の要点を来賓に説明して、藩主はじめ来賓の方々に感謝とお礼を述べて、献堂式は終わった。

来賓たちは、初めて聞く荘厳なオルガンの響きに、献堂式が終わってからオルガンの周りに集まってきて、どうしたらあのような音色（ねいろ）が出るのか、神父達に説明を求め、その場で奏でられる音色を聞いて不思議がっていた。

右近は来賓一同に会堂内部の案内を始めた。一階は主にミサや儀式用スペースに用いられ、一階奥は、神父の祈祷、説教、聖体拝受などに用いるため、柱、祭祀用具、蝋燭台などの表面は金箔が用いられ、荘厳な感じをかえていた。二階は主に神父事務室、小集会室の他には、金沢は都からも離れているため、出張神父宿泊施設も用意されている一部に三階があり、そこから鐘楼に出られるようになっていて、朝夕、時の鐘を鳴らしている。

その後に行われた一般信徒のミサと聖体拝領が終わって

からの見学が大変であった。一階のホールに椅子を敷き詰めるように置いて、何とか百人は座れるようにして、神父の祈祷、短時間ではあるがミサ、その次が右近のリードによって、日々の生活でキリシタンとして生きる証しとしての「慈悲の所作」十四箇条の実行の誓いの斉唱。それが終わると、信徒は十人の神父の前に一列十人ずつ並び、聖体拝領を受けた後静かにホールを出て、会堂の二階や鐘楼を見学して帰ることとなっているが、会堂の中も外も溢れるような信徒で、篠田伊織は既に嗄れた声で汗だくになって整理している。

中でもこの日一番の圧巻は、毎回百名の信徒を前にしての、右近のリードによって行われた、信徒の「慈悲の所作」十四箇条の斉唱であった。

右近が最初に「身体についてのしつのすすめ」というと、会衆は、直ちに

一、飢えている人に食べさせること。
二、渇いている人には飲ませること。
三、はだかの人には着せること。
四、家のない人を泊めること。
五、病気の人を見舞うこと。
六、囚人の面倒を見ること。
七、死者を葬ること。

次に「魂についてのしつのすすめ」が続き

一、他人に良い忠告をすること。
二、無知の人を教え導くこと。
三、叱らなければならない人を叱ること。
四、悲しんでいる人を慰めること。
五、危害を加える人をゆるすこと。
六、はずかしめを受けても耐えること。
七、生きている人と死んだ人のために神に祈ること。

を会衆全員が大きな声で斉唱した。(注 ①)

斉唱が終わったとき、右近は両手を広げて

「皆さん、毎日朝起きたらこの慈悲の所作十四箇条を、心の奥から唱えて、夜寝るとき、今日一日の中で、これに反したことがなかったか、必ず自分自身を確かめてください。もし反したことがあったら、寝る前に神様に許しの祈りをしてください。そして教会に来たとき、または神父さんにあったとき、その罪を告解して許しを得てください。これにより、貴方方は死後、必ず天国でデウスの御許にいることになるでしょう。それを信じて日々、信仰に精進するように」

というと、会衆一同は

「南坊(みなみぼう)様、(注 ②)お約束します」

と元気よく答えて会場を後にしていった。

(注 ①) この「慈悲の所作」十四箇条はインターネット http://d.hatena.ne.jp/yuruyurutei.20070207 より引用。当時の言葉でなく、現代文に修正してあります。

(注 ②) 高山右近は数年前からお茶席の時、また一般信徒と会うときなど、自分の号を「南坊」と名乗っていたので、会衆は親しみを込めて「南坊」と呼んでいた。

教会堂の献堂式、披露が終わった二日後、右近はヴァリニャーノ神父、オルガンチーノ神父と共に金沢城の前田利長にお礼の挨拶に行った。その時、豪姫が「会いたい」と言っているとの伝言を聞き、城内の豪姫の居所を尋ねた。

三人が豪姫の使っている客間に案内されて、献堂式のお礼を申し上げると、豪姫は

「右近殿、本当におめでとうございます。右近殿が高槻・明石とご苦労なさった後、追放から貴方のキリシタン宣教の拠点が無くなってしまって、ここに、貴方が夢に描いてきた世界が立派に誕生したことを、豪は心からお慶び申し上げます。豪もキリシタンの一人として、この加賀にこのような世界ができたことを心から嬉しく思います。是非、これを長続きできるようにしてください。差し出がましいようですが、ここは前田領内であって、右近殿が領主で絶対権力を持っていた高槻や明石と異なります。それだけに、キリシタン信仰を持続させることは上からの圧力でなく、民衆から湧き上がる力が必要です。それと、仏教であれ、神道であれ、キリシタンがそれら宗教を敵視するようなことは一切やってはいけません。加賀の地で、宗教同志仲良く共存することが必要です。今後のために、豪は右近殿にこのことをお願いしたくてお呼び致しました」

右近は驚いた。右近自身がヴァリニャーノ・オルガンチーノ両神父に言ったことと全く同じで、

「豪姫様の御申し条は、誠にその通りで、右近賜りましたお言葉を肝に銘じて今後対応してゆきます」

と挨拶した。

その後、教会に戻った右近は、右近が主張した「他宗教との共存姿勢」について、神父間でよく協議をしてもらうようバリニャーノ・オルガンチーノ両神父にお願いして自宅に戻った。

そして、右近は豪姫が何故右近の言ったことと全く同じことを言ったのか考えると

「加賀の領主は前田家です。前田家はキリシタンに協力はするがキリシタンではない。高槻や明石での右近殿とは違います。だから、もしも貴方方が領民である仏教徒や神道信仰者と揉め事を起こした場合には、前田家といえどもキリシタンを支援し協力することはできなくなる」

という意味であることを理解した

ようにしているだけです。今は亡き蒲生氏郷殿には、「貴殿の清めは過ぎたる清めだ、病的だ」と言われたことがあります』

「まあ、そうは言わないが、右近殿の特徴だな」

その後、出されている茶道具の話が終わった頃、利長は「城で話したくないので出向いてきたわけだが、珠姫付の侍女どもが、時折城内の動きを江戸幕閣に送っているとのことで、それは当然ありうることだが、何をどのように考えて、幕閣の誰に送っているのかが分からない。城内の出来事を正確に把握して知らせているのであれば問題ないが、考えが未熟のまま伝わることには危険がある。右近殿はどのようにお考えか」

「大変難しい問題ですね。当家側が珠姫様の御付き侍女を監視はできませんし、と言ってその内容は知りたいですね」

右近はここまで言ってしばし空間を見つめていたが

「殿、この様なことは如何でしょうか。というのは江戸幕閣に親しく、ものが言える人物を、前田家の家老の一員に迎え入れることは如何でしょう。そうすれば、その人物は江戸からの指令部分と自分の判断の両方を江戸に情報として送るでしょうから、それが珠姫様御付きの侍女達からの情報と食い違うことがあれば、江戸では迎え入れた家老の情報に信憑性を置くのではないでしょ

翌日、城から使者が来て

「殿が教会の茶室で、右近と二人の茶会をしたい」

との意向が伝えられ、早速明日午前に行うこととした。

教会に茶室を作ることは、イエズス会の日本宣教の一つの手段として、有力武士、有力町民との関係の親密化には茶室は日本では必要な設備で、欠くことはできないとの考えから数年前から行っていた。

教会の裏庭は金沢城の石垣に接していて、教会の建物と石垣の間の空間を露地として利用して茶室を設けていた。躙り口もある。

右近は藩主利長と二人だけであることから、躙り口でなく教会内部から茶室に案内した。

茶室の内部は利休好みで、簡素で色調は床の間・家具什器共に黒色を基調としていた。

最初に右近が点前を行った。客としての利長は、右近の棗・茶杓・茶碗の清め方をじっと見つめ、やがて点てられた茶を飲みほして茶碗を拝見した後、右近に返却した。

右近は返された茶碗・棗・茶杓をまた丁寧に清めて点前を終了した。そこで利長は

「右近殿、茶碗・棗・茶杓などの清め方がご丁寧ですな」

の発言に

『はい、一期一会の精神に則って、お客様に失礼のないようか」

「そんな人物はいるか」

「はい、今どこに仕官しておられるか調べなければわかりませんが、本多正信殿の一子政重殿を考えても良いのではないでしょうか」

「成程な」

「もしもそのようなことができれば、江戸幕閣から前田家への信頼はより強固のものとなり、繋がりは一層密接なものとなりましょう」

「分った、考えよう　ただし、このことは他言無用」

「承知いたしました」

一呼吸おいて

「ところで、一昨年客将として迎え入れた内藤如安は、熱心なキリシタンと聞くが、右近殿は良く話し合っておられるか」

「はい、客将同士で御家の政や表向きのことを話題にすることは避けています。もっぱらキリシタン宣教と、出来上がった教会堂をどのように使うかを話し合っています」

「そうか、また、何かあれば右近殿の意見を聞きに来よう」

といって城に戻って行った。

それから四日後、教会堂自体の運営管理と信徒管理を行う神父として、一年前から金沢に来て働いているジェロニモ・ロドリゲス神父が任命された。同時にロドリゲス神父の助手として日本人修道士ジアンが任命され京都から着任した。

これらは、右近が早くからヴァリニャーノ神父、オルガンチーノ神父にお願いしておいたのが、マカオの日本宣教本部からの承認を得て実現した。

右近は早速二人と会い、日本古来の宗教との共存体制の中で宣教を行うことを話し、既に二千名程度に増加した加賀・能登・越中の信徒教育と管理をどのように行うかを打ち合わせた。

年が明けて慶長十年（一六〇五）六月、藩主利長は突然隠居を宣言した。四十三歳での利長の隠居は、後継の利常は十一歳と若いが、次期将軍の家光は利常の義弟になることから、徳川家と前田家の紐帯強化を更に図ることを考えての隠居と右近は理解していた。

利長は金沢城から富山城に移った。しかし富山城で火災に遭い、右近に高岡城建築を命じ、一切の縄張りを右近に命じて、百日あまりで城は完成、右近は金沢に戻り利常に仕えた。

慶長十一年（一六〇六）、金沢教会常駐の修道士ジアンがイエズス会を脱退したことにより、後任に修道士ミ

ゲル木村が就任した。

利常の時代になると、加賀藩は徳川家との安定した基盤に支えられ、平常時のことは利常を取り巻く家老たちで処理され、重要なことは利長にお伺いを立てるので、右近の出る幕は少なくなり、右近は教会業務に多くの時間を割くことができ、慶長十二年（一六〇七）年には教会に登録されている加賀・越中・能登での信徒数は二千五百人を数えるまでに成長した。

慶長十三年（一六〇八）、キリシタン宣教と茶の湯の世界で、悠々自適の暮らしを楽しんでいた右近一家に思いがけない不幸が押し寄せ、春には長男夫妻が数日の間に相次いでなくなり、右近夫妻は五人の孫を引き取った。夏には病気療養中の右近の母が亡くなったが、右近自身は、徳川政権のキリシタン禁制に向かう流れをひしひしと感じ、悲しみに浸っている精神的余裕はなかった。

慶長十二年（一六〇七）には、有馬晴信が旧領を戻してもらうための江戸幕閣への働きを本多正信の与力岡本大八に多額の賄賂を贈って依頼したが、それが発覚。二人とも死罪。その後、二人がたまたまキリシタンであったことから、家康は徳川領内にキリシタン禁教を発令、その後城内侍女がキリシタンであることが判明し、禁教を自領のみでなく日本全土に広げた。

慶長十八年（一六一三）に家康が全国的にキリシタン禁教を命令したことから、その年の八月、加賀藩にも江戸幕府から「自領内でキリシタン信徒を発見した場合は、棄教させること」の達しがあったが、前田家としては「江戸幕閣は加賀における高山右近の全貌を把握しているのだから、それについて何か言ってこない限り、しばらく様子を見よう」ということにして、横山家老がその旨を右近に知らせるのみにとどめていた。

右近は今回の家康のキリシタン禁令は、秀吉の時のような不徹底なことでは終わらない、と考え、遅かれ早かれ禁教は徹底されるので、今年のクリスマスまでに幕府または前田家から何の達しもない場合は、最後のクリスマスとして教会側、信徒側だけで思い残すことのないようなクリスマスを行うこととし、ロドリゲス神父と修道士ミゲル木村に「前田家を巻きこまないで、教会と信徒だけで行う盛大なクリスマス」を企画するように指示した。

また、日を追うにしたがって、各地域での「信徒狩り」の情報も流れてくるので、今から準備することとして教会の信徒資料、つまり洗礼を受けた信徒名簿、洗礼は受けていないが教会に出入りしている者の名簿、神父・修道士名簿などが教会外に出ることのないように厳重な管理を指示した。

右近の研ぎ澄まされた耳目には、豊臣の弱体化による家康の国内政権基盤の確立、長崎を窓口とした交易の一手独占が達成された今、外国人宣教師による宗教は、家康にとっては政権運営上邪魔者でしかないことが読み取れていた。それだけに見えない弾圧の波が押し寄せてくることも覚悟でき、むしろ殉教の時が迫った思いでいた。

続く

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇一七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

千家尊福伝（六）

明治天皇に借金を申し込んだ神道管長

村上邦治

はじめに

明治一〇年代、神道界で最も注目されたのは、千家尊福であった。

神道家・国学者を二分した祭神論争では、出雲派の旗頭として、多くの神官を統率し、政府に後押しされた伊勢派と、神道教義について激論を戦わした。その決着には、政府高官でも抑えきれず、天皇の勅裁という、究極な聖断を必要とした。

明治一五年、神官教導職分離令が出された後には、神道事務局から独立し、新たに神道大社教を設立した。短期間に、東京を始め全国に教会所を開設し、いち早く、大社教の布教を、軌道に乗せたのである。

尊福の目覚ましい活動には、当然膨大な資金を必要とした。しかし、出雲大社や大社教、及び千家家の資産では、到底賄うことができるものではなかった。やむなく借財を重ねてきたが、もはや明治一六年には限界に達し、一族は、破産のがけっぷちに立たされたのである。こうした事態に直面した尊福は、突拍子もない行動に打って出た。

あろうことか、天皇陛下へ、借財の申し込みをしたのである。

一　島根県令への届出

明治一六年七月、尊福は皇室に窮状を上陳し、借財を願い出る前に、事の重大さから、島根県令境二郎（元長州吉田松陰門下斉藤栄蔵）に、恩顧貸の願いを、事前に

知らせるとともに、地元に果たしている出雲大社の存在と、万一の時の影響について、訴えた。

「祖先以来、御県下に住居致し、一家の盛衰は差し置いて顧みずとも、教導の興廃は、県治上の利害に少なからず有る。現に、神官を始め杵築の人民の生活を得ているのは、大社の神徳であり、これまでの教導の力によるものである。それゆえ、一家破産し信用を失っては、教導の道が塞がってしまうことになり、その影響は、千家一家に止まらず、出雲大社により生計を立てている、この地の者皆に、影響を及ぼすことになる。」

県下、特に西部地方（現出雲市）に、累が及ぶことの懸念を、伝えたのである。

こうした手順を経て、同月御恩貸の請願書を、宮内卿徳大寺実則に、提出した。

二　恩顧貸請願書

まず、出雲国造家の由来から始める。

「わが祖先は天穂日命で、皇祖天神天照大神の勅により、出雲大社に奉仕して以来、大国主神の祭祀を行うとともに、皇室の繁栄を祈り、また、神道を人民に説き、人心を正してまいりました　こうして祖業を相続して、私で、八〇代に及びます」

と、出雲国造家は、古来より長きにわたり、大国主神を祀り、皇室をお守りするとともに、神道を人民に広めてきたことを述べる。

しかしその後、石高を大きく失ったことについて、次のように言及した。

「中世武門政権が続いて以来、大きく所領を減削され、資産は僅少になり、祖業を続けることも、難しくなってまいりました。」

と、豊臣秀吉の時代に、多くの家領を失ったことについて、申し述べた。天正一九年（一五九一）、朝鮮出兵のおり、人夫の派遣要請を、渋ったことによるものであった。当時、石高五、四四五石から、千家一、一七八石、北島一、一二八石、合計二、三〇六石（以前の約四割）に、削られたのである。これにより比較的安定していた出雲大社の財政は、一挙に困窮することになった。そしてこの石高は、明治維新における、社寺の所領奉還まで続いたのである。

「そうした苦しい状況に陥るとも、一族飢えることなく、祖業を守ることができたのは、ひとえに天神の霊と、皇家の徳行によるものと、誠に有難く、感恩致しております。」

と、減石された後も、天照大神と皇室のお蔭により、祖業が保持できたことに、感謝するのである。

「ところが、明治五年の神社改正令により、私は、出

雲大社宮司と、神道西部管長という教導職の責任者に任ぜられました。維新日浅く、人心が定まらず、このときにこそ、古来の神道を拡張して、人心を強固にまとめなければ、皇室に申し訳なく、我が祖先に忠誠の志を継承した、とは申されません。

命ぜられた責務を果たすため、私産をなげうち、東奔西走し、人民に国体を講義し、人心を正してまいりました。しかしながら、余りに急ぎすぎたため、家産が傾き、一家を保持することが、苦しくなるに至りました。誠に申し訳ないことでありますが、不肖にして、自らの資力を考えず、みだりに行き過ぎた行動に走った、ことによるものであります。

しかし、維新以来、技術は日ごとに進化致しておりますが、徳義はますます衰退し、芸術は欧米に偏重して、理論刻薄の風習の傾向が、強くなってまいりました。果たして、このまま進みますと、国体を顧みない者が増加していき、実に国家の為、もはや黙視できない徴候が、あらわれてきたのであります。

そのため、自ら奮い立ち、一家を率いて、祖業を拡張して、古来のしきたりを維持せんと致しましたが、如何せん、これを成し遂げる資金を、支えてくれるところが見当たりません。しかし現下の時勢は、一日も躊躇できず、やむなく私産をなげうち、この二〇年間で、数万金に及ぶことになりました。」

と、維新以来、進出するキリスト教と、西欧思想に対抗するため、已むに已まれず、私財を投げ打って、国民の神道教化に全力を尽くしたことを、切々と訴えたのである。

「借財が多額になりましたのは、東京出張所の建成と、各府県下に、教会所を設立したことによるものであります。」

と、その資金の主要な使途を挙げている。一五年に立ち上げた神道大社教、なかんずく、東京出張所（東京分祀）の創建と、全国に教会所を八〇余設立した、ことによるものとしている。しかし、

「まだ端緒を開いたにすぎず、将来なすべきことが多く、さらに今後も、多額の資金を必要と致します。」

と、今後もなお、多くの費用がかかる見通しを述べ、

「信徒に、資金を負担させることを指示するならば、信徒は耐えて、義捐してくれるものと思われますが、創業日浅く、信徒に資金を求めるのは、忍びないことでございます。信徒の中には、まだ尊福の心情を、理解していない者もおるかもしれず、布教を口実にして私財を肥やす、と誤認するならば、布教上大きな障害になり、また家名を汚すことになってまいります。」

と、その苦慮する心情を綴るのである。

確かに、神道大社教の創設と、全国各地へ教会所を設けることに、多大な資金を必要としたことは、確かであろう。特に、出雲本院から遠く離れ、手薄な東日本の拠点とした東京出張所の開設には、多額の資金を必要とした。明治一一年出雲大社教（出雲敬神講改称）時に、東京神田の神田神社内に、東京進出を果たし、明治一五年麹町に移転し独立するなど、拠点開設の準備を着々とすすめていた。こうして、神道大社教創設の半年後には、東京分祀（東京出張所）を創建しており、迅速に、最大拠点を設けることができた。各府県の教会所についても、敬神講から引き継いだものが多く、素早く実現されたのである。

西部管長としての教化活動や、神道大社教の創設と共に、私財を投じざるをえなかったのは、願書には全く触れられていないが、五年にわたる祭神論争であった。出雲派の盟主として、大国主神の幽冥界主宰神論を支持する全国の神官を主導し、政府が支援する伊勢派との、「激しい教義論争や、汚い中傷合戦、伊勢派の動向」など、各地に散らばる神官への連絡や印刷物の作成、同志会議開催の費用、賛同する幹部との懇親等、これら、長期間にわたったことで、多くの負担を余儀なくさせられたことは、想像に難くない。また、論争が長引き、年数回に及ぶ、出雲から東京往復の交通費も、多額にのぼった。片道四～五泊要し、列車、船舶、馬車、馬などを乗継ぎ、いつも従者として、五名程度が付き添ったのである。

かくして、明治一六年夏ごろには、借財は三万金にのぼることを、明らかにするのである。さらに年月が経過すれば、金利がかさみ、この数倍の資金が必要となることを訴えた。当時、銀行の貸出金利は、年二割から三割していたので、それ以外からの借り入れでは、五割を超えたであろうから、この訴えは、誇張ではない。

この三万金は、返済を迫られており、今すぐ用立て出来なければ、お守りしてきた大国主神を祀る大社祭祀は、続けることができなくなってしまう。祖先天穂日命以来、連綿と相続してきたのであるが、こうした事態になれば、尊福は、

「万死に当たる」

と、その切羽詰まった心中を、吐露した。

そして、恩顧貸しを、必死に頼み込むのであった。

「ここに至っては、御助けを仰ぐのは、これまで皇室の御為にご奉仕してきたところであり、厚い朝恩を受けてきた皇室にしかない、と思うにいたったのであります。尊福、御恩貸を急ぎ懇請するのは、これまで手掛けてきた事が、衰退してしまうことに、耐えられないからであります。」

そして

「尊福の苦衷を御照覧になり、一五年賦をもって、三万金をお貸し下されにつき、特別の御詮議を嘆願し、お聞き入れの程お願い奉ります。」

と結んだのである。依願者は、従四位千家尊福とする個人名であった。

千五百字に及ぶ願書であるが、祖先天穂日命以来、皇祖天神と皇室をお守りしてきたこと、維新以後神道の教化に力を注いだこと、一年前より神道大社教の布教に当たっている事を、縷々述べた上で、これらは全て、「皇室の繁栄のためにおこなった」ことであると、申し述べた。そして、もはや借財により、「一家破産の危機」にある、ことを繰り返し述べ、急ぎ恩顧貸の実現を願うのである。

宛先は、余りに畏れ多きことから、宮内卿徳大寺実則としたのであった。

三　恩顧貸額

尊福が、恩顧貸しを願った三万金とは、現在では、どのくらいになるのであろうか。

代表的な物差しとして、白米がある。当時一〇キロ一円前後であり、現在は、五千円程度なので、五千倍となる。郵便はがきは一銭であったので、五千二百倍である。大工の労賃は一日八〇銭であったが、現在二万円とすると二万五千倍である。不動産不況時では、一万二千円程度なので、一万五千倍に低下する。朝日新聞の購読料は、十六銭であったので二万五千倍、公衆浴場は、四万倍になる。倍率が最も高いのは、銀座の地価で、三十万倍である。

これら倍率から判断して、約二万五千倍から二万倍と推量すると、現在の金額としては、五億円程度であろうか。金利については、まったく触れていないので、無利息の依頼と考えられる。それを、一五年の分割返済として、申し込んだのである。

四　一族からの諫言

一家は、資産困窮し、借金で危機に陥った。尊福が天皇に借り入れの申し込みをした後、家の子郎党が集まり、次々に苦言を呈した。

「私財が乏しくなったからといって、天子様に借金を申し込むとは、とんでもない事です。もう少し、慎んでもらいたい。」

「ここにおれば、人は、皆神様扱いをしてくれるのにもかかわらず、日本中を駆け廻り、歩いて人にバカにされている。ただじっとしていて下さい。」

など、これまで千家家の当主である尊福に、従順であった者からも、苦言や戒めの発言が、相次いだのである。それだけ、千家家の資金は、ひっ迫していたのであった。当主尊福の、家財を無視した行動に対し、皆不安を募らせていたのである。

これに対し、尊福は、

「皆の言うことは、よく分かる。しかし、自分が全国を東奔西走しているのは、自分の栄誉明達のためではない。世は鹿鳴館時代の欧化万能の思想から、皇室がお倒れになる恐れがある。皇室がお倒れになるならば、その前に千家の家は亡ぶべきだ。とめてくれるな。」

と、皆に自分の信念を、打ち明けたのである。

尊福の深く皇室を尊崇し、その繁栄を願う思いを知り、もはや、これ以上の苦言を、申し述べる者はいなかった。千家家や出雲大社のことだけでなく、日本一国や天皇・皇室の、存続と発展を一途に願ったことからの、恩顧貸願書であったことを、思い知ったのである。

尊福はその後も、大社教布教のため、全国を巡教したが、その活動は以前と全く変わらなかった。尊福の巡教は、何処へ行っても、多くの人が歓迎した。特に、中国地方では、熱狂的と言っても、過言ではなかった。

おわりに

尊福の恩顧貸の願いは、無論、実現しなかった。千家家の財務危機が、どのように処理され、解決したのかの資料は、公にされていない。

天皇への願書は、一部の者からは、売名行為として、顰蹙を買った。当時の常識からすれば、とんでもない所業であり、大きな咎めがあったとしても、不思議ではない。しかし、一切、尊福に処罰はなかった。その証拠に、五月に提出した後、七月には太政官より、右大臣岩倉具視の葬祭斎主を、九月には宮内省より、明治天皇第四皇女章子内親王の葬儀斎主に、それぞれ任命されている。次年には、宮内省より、男爵を授けられ、太政官からは、従四位から、新たに従三位に叙せられたのである。

尊福の行為は、非難されるどころか、かえって、高く評価されたのである。大国主神の神徳と皇統守護神を唱え、古くから続く神道の発展と教化に尽くしたことは、誰もが知っていた。かれの願書には、尊福の思いが切々と述べられており、うそ偽りのないことを、政府首脳にも、理解されていたのである

前代未聞の、天皇への恩顧貸願書については、不問に

付される共に、尊福の行為は、多くの人々に、大国主神が真の皇統守護神であることを、強く印象づける結果となった。

もっとも、こののち、貴族院木曜会の指導者になり、政治家として一派を率いるのであるが、この時も、やはり多額の借財を背負い、その処理をするのに、大変であったことが、明らかになっている。

どうも、尊福という人物は、「金銭は二の次であり、自分の信念を達成せんとする行動の方を、いつも優先してしまう」、そういう男であったのであろう。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

『口紅』解題

山本勉

『口紅』は現代中国文学を代表する女流作家池莉の作品である。

池莉は、一九五七年一月二一日、中国湖北省仙桃市に生まれる。出生後の一九五七年に大躍進政策、一九六六年に文化大革命が始まり、中国社会に大きな変化を起こしたこの時期に、幼少期・青年期を送っている。一九七四年高等学校卒業後、文化大革命時に知識青年として農村に下放される。一九七六年に医学専門学校で勉強し、卒業後は武漢鋼鉄衛生所の医者として勤務する。一九八二年に社会人大学を受験し、武漢大学中国文学部社会人クラスに入学、一九八七年に卒業する。その後武漢市文学芸術界連合会「芳草」編集部文学編集の任に当たる。

一九九〇年、武漢市文聯の専業作家となり、武漢市作家協会副主席も兼任する。一九九五年に文学院院長、一九九七年には中国作家協会主席団委員となり、二〇〇〇年、武漢市芸術界聯合会主席となる。二〇〇七年、湖北省文学芸術界聯合会副主席となり現在に至る。

また、社会的には第九期から十一期の全国人民代表大会代表であり、武漢市中国人民政治協商会議常任委員でもある。

池莉はおびただしい小説を執筆しているが、その中で著名なものは『ショーンヤンの酒家』、『来来往往』、『不談愛情』、『太陽出世』、『煩悩人生』、『小姐你早』、『有了快感你就喊』で、これらの作品はテレビドラマ化、映画化され、海外でも翻訳出版されているものもある。また全国優秀中篇小説賞、第一回魯迅文学賞、紅河文学賞などを受賞している。池莉はその後も多くの作品を発表し続け、現在まで第一線で活躍し続けている。最近では、二〇一二年に『她的城』で文学賞を受賞する。居住地、武漢を舞台に、市井の人々の暮らしや生活に関する作品を数多く執筆している

日本では次のような作品が翻訳紹介されている。『生きていくのは（上）』（市川宏訳、季刊中国現代小説第一六号）、『生きていくのは（下）』（市川宏訳、季刊中国現代小説第十七号）、『愛なんて』（市川宏訳、季刊中国現代小説第二二号）、『真夜中の踊ろうよ』（市川宏訳、季刊中国現代小説第四一号）、『初恋』（田畑佐和子訳、早稲田大学出版部）、『太陽誕生』（田畑佐和子訳、早稲田大学出版部）、『ションヤンの酒家』（久米井敦子・市川宏訳、小学館文庫）、『このひと夜、バラのごとく』（池上貞子訳、小学館文庫）である。

小説『口紅』の舞台は湖北省武漢であり、労働者階級の趙耀根一家と知識階級である江暁歌一家、そして趙耀根と江暁歌の共通の友人寧岸を軸にストーリーは展開する。『口紅』は、文革の終焉から改革開放へと向かう中国社会の混沌とした時代を背景としている。実は、この『口紅』は、中国でテレビドラマ化されて評判を呼んだ脚本を元に改稿された作品である。池莉は、『口紅』を出版するに当たってテレビドラマと内容を一部変え、よりストーリーに変化を持たせた小説に仕上げている。中国一般大衆は、テレビドラマにより池莉の『口紅』の存在を知ることになる。そして、テレビドラマ放映後に、原著『口紅』の出版となる。テレビドラマの時代背景は、原著の時代背景とほぼ同時期であり、テレビドラマ、原著共に、一九五七年毛沢東が発動した反右派闘争が伏線となっていると思われる。

池莉は、『口紅』第一章を以下のように書き出している。「武漢、この町は息づいている。時は流れる水の如く過ぎ去っていく。ふと振り返ってみると、人間の足もとで二十年前に起こった出来事が、意外にも今日の全ての結果の原因であることに気づく。何故、人生はいつもこうなんだろう。人間に与えられるものは結果であるが、私達は自分の運命の原因をコントロールすることはできないのだろうか」

この書き出しこそが、文革終焉から改革開放へと向かう時代に生きてきた、『口紅』の登場人物達や、池莉自身の偽らざる思いが込められた一文になっているように思える。この一文に凝縮された、登場人物達が様々な試練を経て中国社会を生き抜いて行く姿が、ドラマの骨格となっている。

ヒロイン江暁歌に次々と困難が襲いかかる。趙耀根と親友の寧岸はともに江暁歌を好きになるが、趙耀根が江暁歌の心をとらえる。二人の間には階級という大きな溝が立ちはだかるが、双方の家庭の反対を顧みず二人は多くの仲間に祝福され結婚する。ある時、趙耀根は

妻江暁歌の弟を救うために自分が罪を被り監獄へ入るが、江暁歌は自らの命を省みず趙耀根を救い出す。世の中の不条理に憤慨した趙耀根は職を投げ打って深圳に行き、自分の命運を賭けた。深圳での生活はどん底を極めたが、あることがきっかけとなり莫大な金を手に入れる。趙耀根は様々な誤解や感情のもつれから妻子を捨て、唐燕影との危険な恋に落ちていった。一方、江暁歌は勤めていた会社をリストラされ、露天商や売血、そして衣料品の闇市等で身体を酷使しながら、幾多の失敗や困難を乗り越え、遂に自分の服飾会社を立ち上げた。親友の寧岸は失意の中で邪道に陥り、江暁歌の弟江暁鳴も株式を不当に売り飛ばし死刑囚に成り果てる。趙耀根は自分の過ちに気づき、唐燕影と別れ妻との復縁を決意する。しかし、それを妬んだ唐燕影は彼らの愛娘を誘拐する。愛娘を救い出すため趙耀根は・・・・・。

池莉は、原書のカバーに以下のように記している。「『口紅』は、私達自身の歴史であり、私達の身近な親戚や友人の歴史である。『口紅』は中国女性が封建社会の因習と戦い、明るい未来に向かって命がけで頑張って来た物語である。そして『口紅』は物語の行方が神秘的であり、女性の奥深くに永遠にひるがえる旗（応援歌）である」と。『口紅』は、中国の激動期をけなげに逞しく生きた「女性賛歌」とも言える文学作品である。実際江暁歌そのものに、文革が終焉し中国経済が発展していく中で、光明を目指して逞しく生きていく女性達の姿が垣間見える。

最終章にヒロイン江暁歌と藍雲との次のようなくだりがある。

藍雲は、
「どんな色の口紅が好きなの？絶対、本当のことを言ってね」
と江暁歌に訊いた。
「みんな好きよ」
「どうしてなの？」
「私は色々な色が好きで、特に濃くて鮮やかな色の口紅が好きよ。口紅は、私にとって希望と幻想よ」

口紅は文字通りこの小説のタイトルである。口紅は、ヒロイン江暁歌が反右派闘争で実母を失い、文革を経て改革開放へと向かう激動の中国社会を趙耀根や親友寧岸らと共に生きてきた証でもある。口紅は、中国社会を生き抜く希望でもあり、中国社会に翻弄されてきた江暁歌の幻想でもあったのだろう。

應義塾大学准教授吉川龍生は、その著『失われた理想

の姿』において池莉の作風を五期に分けている。第一期は詩歌や散文を中心とした作品を発表し始めた一九七八年頃から腫瘍が発見され入院手術をした一九八二年まで。第二期は病から生還し武漢大学中文系に学び、恋愛・結婚をした後の一九八六年頃から一九九〇年頃まで。第三期は武漢市文聯の専業作家となり、武漢市作家協会副主席に就いた一九九〇年頃から一九九四年頃まで。第四期は一九九四年頃からテレビとのコラボレーションが活発化する一九九八年頃まで。第五期は一九九八年頃から現在に至るまでとしている。第五期は多くの作品がテレビドラマ化や映画化され「池莉ブーム」・「池莉現象」という言葉が生まれたと吉川龍生は指摘している。『口紅』は二〇〇〇年に江蘇文藝出版社から出版された作品であるが、吉川龍生の分類した池莉の作風としては、第五期に当たる。日本において翻訳出版された池莉作品の中では、比較的新しいものと言えよう。

タイトルの由来は実母の遺品の口紅である。また、先程述べたヒロイン江暁歌と藍雲の会話の口紅についてのくだりである。池莉と言えば武漢、武漢と言えば池莉と言われる。武漢はご存知のように中国湖北省の省都であり、長江と漢江が交わる場所に位置する。

結びにあたり、『口紅』との出会いを作っていただき、センテンス毎に中国語の訳に丹念に目を通していただいたJ&Cランゲージ代表橋本佳子氏、父の友人であり、『口紅』の出版に心を砕いてくださった同人誌『まんじ』発行人、日本における二宮尊徳研究の第一人者である三戸岡道夫氏、校正をしていただいた静岡県立掛川東高等学校国語科教諭山田純子氏、三省堂創英社から四月出版予定の『口紅』の表紙の絵を描いて頂く静岡県湖西市在住の水彩画家今田信勝氏、池莉との橋渡しのきっかけを作っていただいた佛教大学名誉教授吉田富夫先生、『口紅』の出版を誰よりも待ち望み、影ながら応援してくださった原作者池莉女史にこの場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

池莉女史とは、今でも書簡やメールのやりとりが続いている。二〇一四年、年が改まったばかりの頃、池莉女史から般若心経の写経が送られてきた。金箔がちりばめられた和紙に一字一字見事な筆跡で般若心経が書かれ、二六二文字の般若心経の最後に「池莉誦、振鐘録」と記載があった。費振鐘氏は池莉女史の友人で、中国では文学評論家・散文家として非常に高名である。池莉自身も写経をしているとのことであるが、手紙の文面から、何事にも真っ直ぐな、凛とした緊張感のある池莉女史の姿が立ち上がってくる。その姿には、『口紅』のヒロイン江暁歌のように、どんなことにも真っ直ぐな姿勢を貫く強さと温かなまなざしが感じられる。

密室銀行（十八）

匠　克仁

〈前号までのあらすじ〉
銀行で密室殺人があった。
「バルタン星人は出演を止めました。
赤坂支店の内装工事の立会いで、竹森和久は土曜日に出勤することになった。
通用口の密室を解く実験をしたいと竹森は考えていたので、絶好の機会であった。
鍵当番でペアを組んでいる穴吹と一緒の予定であったが、穴吹はいつものようにサボった。「ぼくの創造主が二度と出なくていいって」と訳の分からないことを言った。
もっとも邪魔者がいなくて竹森には都合が良かった。
人事異動で、穴吹は転勤が決まっていたが、最後の最後まで仕事をしなかった。
穴吹が転勤したのは、父親の七光りが通用しなくなったからである。

穴吹の父親は日本ジャパン損害保険グループの、はるは以下省略生命保険の社長であったが、不祥事で失脚したのである。
はるは以下省略生命はニッポニアニッポン生命と社名変更した。合併した、ゆうゆう生命が、朱鷺（トキ）の名前であり、またグループ会社の名前にあわせて、変更したのである。
ニッポニアニッポン生命は、絶滅しそうな生命保険会社を延命させるための受け皿会社になった。合併で不祥事が発覚し、穴吹の父親は社長を追われ、ニッポニアニッポン生命の佐渡ヶ島支店に異動になった。
父親の異動に合わせて、息子の穴吹は東西銀行の赤坂支店から八丈島支店に転勤になった。
後任は既に東京都支店から赴任している。後任が必要なほど穴吹は仕事していなかったが、玉突き人事である。
東京都支店は『とうきょうとしてん』でなく『ひがし

きょうとしてん』である。
合併時に京都支店が二つあったので、東城銀行の京都支店が名前を東京都支店にしたのである。
西都銀行の東京支店は東京都心支店となっている。
東京都支店と東京都心支店と似た支店名に東京都特許許可局隣支店がある。東京都特許許可局隣支店開設の際には急遽許可却下されたが、許可却下が却下されたので、許可却下却下は許可で開設された。東京都特許許可局隣支店の隣でバスガス爆発した。東京都特許許可局隣支店の隣で新進シャンソン歌手総出演新春シャンソンショーをした。東京都特許許可局隣支店の隣の柿はよく客喰う柿である。東京都特許許可局隣支店の隣のすももももももよく客喰うももである。柿もすももももも人を喰うなんてイカが人を喰うよりも人を喰った話である。東京都特許許可局には東京都特許許可局許可課許可係がいて、とうきょうととっきょきょきゃきょきゅきょきゃきゃきょきゃきゃりーぱみゅぱみゅという名前で歌手デビューした。とうきょうととっきょきょぎゃぎょぎゅ…痛たたたたた。舌を噛んだ。口の中が血だらけだ。イカーん。音声変換ソフトで口述筆記すると、メチャクチャになってしまった。真面目に十一本打法で本文を書こう。今までの文は毎度恒例の〈前号までのあらすじ〉のカッコ付きの補足である。毎度のことであるが、本文よりも、あらすじの補足だけで締切がきてしまったなあ。」

十四

赤坂支店の内装工事の立会いで、竹森和久は土曜日に出勤することになった。
通用口の密室を解く実験をしたいと竹森は考えていたので、絶好の機会であった。
この後、沢木雅子も他の人には秘密で来ることになっている。竹森が支店の通用口のトリックを思いついたので、一緒に検証してもらおうと頼んだのである。
自分だけの推理では何か見落としがあると思い、雅子の立会いを竹森は頼んだ。
トリックを考えたきっかけは、以前に通用口で、現金輸送の際に庶務行員に言われてハンドルを操作したことである。
もう一つは草津史郎が独身寮でラジコンカーを操作しているのを見たことである。
本当の凶器が実は金属バットでないかと竹森は考えていた。野球部出身でよく寮の裏庭でバットを振っていた草津に対して疑いの目を向けていた。
その草津はアウトドア派で、独身寮にいてもよく裏庭で日光浴したり、バットを振ったり、ラジコンで遊んだりしていた。
草津が素振りをした後にラジコンを使うのを見て、竹森の中でトリックがひらめいたのである。
竹森はラジコンを甥から借りて、実験用に持ってきて

いたのである。
通用口のインターフォンが鳴った。雅子が来たようである。
竹森は通用口のドアのサムターン（つまみ）を回し開錠してドアを開けた。
「その紙袋の中は何なの」
入ってきた雅子は、竹森の紙袋を覗きこんだ。
「ラジコンだよ。これで通用口の密室が解けると思うんだ」
竹森は紙袋からラジコンカーを取り出した。ラジコンカーはF1の車体である。後部に3mくらいの紐が結んでおり、紐の先端にはフラスチック製のクリップがついであった。
「これで中から、つまみを回そうとするの」
通用口の内側のサムターンは縦の状態で開錠、横の状態で施錠の状態になる。縦の状態から時計方向に九十度回すと閉まるのである。
「引っ張るだけでは無理じゃないかしら」
雅子は先回りして、否定的な意見を出した。
縦の状態から、サムターン引っ張っても九十度を回転させるのは難しそうである。サムターンは手でひねるのも少し力が必要である。
サムターン自体も指の幅しかなく、クリップで上手くはさめない。はさめたとしても、ラジコンでクリップはドアに沿った方向に動かさない限り、ひねることはできない。壁側に何か突起物でもあれば、引っかけることができるかもしれないが、そんなものは無い。
雅子が指摘するように、サムターンを動かすのは無理なのは明らかであった。
「サムターンに細工したんじゃないよ。細工したのはハンドルだよ」
そういうと竹森はラジコンを抱え、営業室に移った。
「ハンドルって何よ。車のハンドルのこと…」
雅子も竹森に付いて、営業室に入った。
「いや。このブレーカーのスイッチみたいなものをハンドルって呼ぶんだ」
日常的に使っているが、正式な名称は雅子も知らなかった。竹森もハンドルという名称は今回の事件を調べて知った。
竹森は営業室の入口のモニター近くの黒い棒状のものを指さした。
竹森もハンドルという名称は円形のイメージがあったが、手（ハンド）で扱うのはハンドルである。
ハンドルが上を向いていると通用口の鍵が開いている。下を向いていると、閉まっている。
ハンドルとサムターンと閂（かんぬき）（デッドボルト）とシリンダー錠の鍵穴の状態が全て連動しているのである。
竹森は紙袋からラジコンカーを取り出して、営業室の

入口から3mほど離れた位置に置いた。
そして、ラジコンカーの紐を伸ばすと、先端のクリップで上向いているハンドルを挟みこんだ。
「実験開始だ」
竹森はリモコンで操作してラジコンカーを動かした。
たるんでいた紐が張り詰めたが、ハンドルはびくともしなかった。紐が張ったせいで、ラジコンカーの後部が持ち上がり、空回りしている。
竹森はラジコンカーの上に重石として書類を載せて、もう一度スイッチを押した。今度もハンドルは動かず、クリップが外れた。突進した車が壁にぶつかった。
「引っ張る角度が悪いんじゃないの」
竹森は車体から紐を外して手で引っ張った。一度は水平方向に引いてから、その後に下方向に引かないとハンドルは下に落ちないのである。
竹森は、もう一つのクリップと紐を取り出した。事前に準備していて正解であった。
ハンドルに二つのクリップと紐がついている。一本の紐を雅子に持たせて竹森は指示した。竹森はもう一本の紐を持っている。
「先に水平方向に引っ張って」
雅子が水平に引っ張ったあと、竹森は下方向に引っ張った。
そうすると、ハンドルは下に落ちて、二つのクリップも外れた。通用口の鍵が閉まったのである。
「半分は成功したね。後はこの動きをラジコンでできるか検証だ」
この紐の動きを機械的な操作ができるか、竹森はもともとこのような工作は好きであった。
一本の紐は水平に張って、預金係の棚の上から紐を通した。もう一本の紐はすぐ下の机の下の隙間を通した。
紐の長さを水平方向には短め、次に下方向には長めにしてラジコンカーに結びつけた。
竹森はリモコンのスイッチを操作して、ラジコンカーを動かしたが、どうしても下方向に動かすタイミングがうまくいかない。
三十分後には業者が来るので、竹森は少しあせっていた。十回を超えると、雅子もあきれた様子で見ていた。
紐の長さを調節しながら挑戦したところ、二十回目くらいでハンドルが下に落ちた。
「通用口を見に行こう」
確かめるまでもなかったが、サムターンは水平になっていた。念のため、竹森はノブを回して、閉まっているのを確認した。
「鍵は閉まっているわ」
雅子の言葉を聞いて、竹森はトリックが解けたと確信した。
「これで通用口の密室のトリックは解けたよ。実際にこんなラジコンを使ったかは分からないが、同じような機械的な操作をハンドルにしたんだ。犯人はリモコンでハンドルに細工して密室を作ったんだ」
「そうかしら。犯人が操作したなら、支店の外からでしょう。外に出て操作してよ」
雅子を連れてきて正解だったと竹森は思った。自分だけでは見落としていたかもしれなかった。
竹森は一度、通用口を出て外に出た。しかし、外に出てみると、営業室のハンドルの位置はかなり遠くにあることを改めて感じた。
ハンドルは営業室の一番奥であり、さらにロビーを挟むので、最も近いと思われる場所でも十五メートルくらい離れている。
目の前には頑丈なコンクリートの壁である。銀行は頑丈な建物が多いが、赤坂支店の壁も三十センチある。
竹森は不安だったが、ラジコンのスイッチを入れた。電波が届けば、ラジコンカーが発車している筈である。
営業室に戻って確認すると、車は元の位置のままであった。
「支店の外からではラジコンの電波が届かないようね」
「ラジコンは電波が弱いかもしれないけど、何か別な機械で遠隔操作したに違いないよ。例えば携帯電話を使ったとか」
「携帯の電波もつながらないのよ。本気で遠隔操作で密室を作ったと考えているの」
建物が頑丈なためか携帯の電波も支店の中では届きにくいことを竹森も思い出した。
「遠隔操作でなく、タイマーが何か使ったかもしれない」
竹森は自分のアイディアを諦めきれなかった。
自分としてはハンドルを使ったトリックは斬新なものだと竹森は思っていた。
「時計仕掛けでも犯人が工作したなら、それを回収しないといけないわ。私たちに見つかることなく、仕掛けを回収することは不可能だわ」
雅子の言うことも、もっともだと竹森は思った。
トリックに使ったものの回収は何か方法があると竹森は考えていた。しかし、発見者の雅子から否定された。
三重の密室で七つくらいの謎の解明をしなくてはいけない。その内の一つがやっと解けたかと思っていたので、竹森の落胆は大きかった。
せっかくの密室トリックを解決法も雅子にあっさりと否定されてしまい、ゼロから推理のやり直しである。
「おそらく、こんな幼稚な物理的なトリックでないわ」
幼稚と言われて、竹森も気をよくしなかった。
「物理的でなければ、どんなトリックなんだよ」
竹森の語調が強くなったが、雅子は気にする様子はなかった。
「物理的トリックでなく、心理的トリックを使ったのよ」

空飛ぶ人喰いイカ

匠　克仁

ぼくはドSである。
しかも、ぼくは隠れドMでもある。
ということを、まんじの前号に書いた。気がする。が、気のせいである。かもしれない。
前号に書いたのは…。書いている文の途中で、あれ、何だっけ、言葉がでてこない。んんん。そうだ。忘れる。わすれるという字は、心を亡くすと書く。忙れるのである。あれ、何か日本語が変だ。最近は忘しくて、心を亡くして、日本語を忙れてしまう。健忙症である。
前号で自分の体重と身長だけでエッセイを書いた。ぼくは53kg・159cmであるという事実を色々と形容詞をつけてエピソードをまじえて書いただけである。
ぼくは男性としては、ちょーSサイズなのである。
胸囲はかつて1mあり今でも90cm台なので、見かけと違いMサイズを越えている。
ちなみに股間から生えている煩悩くんはドLである。
ぼくはドSで、ドMで、ドLなのである。
ぼくは、ちくちくりんと呼ばれるのは嫌なので、ちんちくがんと呼んで欲しい。
ちんちくがんという概念を理解するには、大脳生理学上のホムンクルスを知る必要がある。
ホムンクルスというのは、脳機能局在論で、脳の中の小人という意味である。脳神経外科医ペンフィールドが大脳皮質に対応する機能を絵に描いたものである。
絵だけでなくホムンクルスの立体版の人形模型がある。
大脳の対応する広さに比例して作った人形である。脳の面積の広い目・舌・唇・手・指などが大きく、胴体や足などは小さい。
ホムンクルスの立体像は優れた芸術作品だとぼくは思っている。

さて、ちんちくがんに戻ると、『ちん』はちんちん、つまり、ぼくの煩悩くんのことである。
ぼくのホムンクルスを作ると、ちんちんだけになる。
上管にまたがった子供、いや、ロケットまたがった宇宙飛行士みたいなもんだ。
ちんちくがんでなくて、ちんちんちんでもよい。でも、ちんちんちんでは、ちんちんが3本あると、きっと皆が勘違いしてしまう。
と自分で書いていて、非常に具体的にリアルにちんちんが3本ある自分を想像してしまった。
縦に3本バージョンとか横3本とか三角とか、鼻と頭から突き出るのも想像してしまった。
想像するだけで、気持ちが…よくなってしまう。3本もあったら、当然ながら快感が3倍になるではないか。
股間から、キングギドラの3本の首が生えているようである。文学賞をもらったら、バルタン星人の格好に股間にキングギドラの3本の首をつけて表彰式に出よう。
ちんちんちんなんて書いているエッセイを会社の人に読まれたら、ぼくの人事データに、ちんちんが3本あると登録されてしまう。
ちんちん3本なんてことが登録されると困る。ぼくのちんちんは2本しかないだから。
ちんちんとかちんちんちんとかばかり書いていたら、ちんちん電車を想像する。ぼくの想像する、ちんちん電車は特別性で新幹線みたいなボディーで矢尻もある。
ちんちん電車は男性専用車両なのである。
全裸の男子中学生の満員電車である。パチンコのフィーバー状態である。
△□□□1本につき、○○が2個もれなくついてくる。
若くてピチピチした全裸の紅顔の美少年のツルツルの睾○でいっぱいである。
その満員電車に、ぼくは乗って車両を往復するのである。その満員電車も時間が経過するのが早い。
全裸の女子大生の満員電車は一往復する間に三年間が経過した。一往復で女子大生は三歳年を取るのである。この年の差を、ぼくは『一おばさん』じゃなかった『一お姉さん』という単位を発明したのである。
男性の場合は『一お兄さん』という単位を発明した。
『一お姉さん』は三年であったが、『一お兄さん』は六十年なのである。
ぼくが一往復したら、紅顔の美少年のツルツルの睾○は、厚顔の美老人のシワシワの睾○になるのである。
ところで、『睾』は訓読みで、きんたま・たかい・ひろい・おおきい・さわ…などと読む。
ぼくの本名は絶対に秘密なのであるが、ペンネームは本名をベースとしている。
色々とペンネームを考えた。その内一つが『睾見克睾(たかみかつひろ)』である。もう一ひねりで『睾睾睾睾

(たかさわおおひろ)』というペンネームもいいなあ。男性ホルモンたっぷりの名前である。そのうち、寧寧寧寧と太太太の共作を発表しよう。

こんなことを書いていると、なんか自分が六本の小さな芽の生えた巨大な双子ジャガイモになった気がする。

もちろん寧〇が双子ジャガイモで、六本の小さな芽というのが、ぼくの頭と両手両足と煩悩くんである。

この全裸の美少年の男子中学生の男性専用満員電車は、一往復で、おじいさんだらけになって、腐って手足のもげた死体、うじ虫だらけの死体、となって、最後はしゃれこうべと例によってフルコースで変化する。ぼくの妄想癖はサービス精神旺盛である。

こんなアホなことを想像するのは、ぼくだけかなあと思っていた。実は全く同じ考えが、仏教の『九想(くそう)』という修行法である。

九想(九相・白骨観)は、美女への肉欲を抱いたとき、死体となって腐る過程を想像することで、欲望を抑える修行なのである。

九段階にリアルに死を想像するのであるが、腐って、うじ虫だらけになるのと、最後に骸骨になるのは、まさに、ぼくのちんちん電車と同じ発想である。

ぼくはお釈迦様に教わることなく、自ら九想の修行法を会得したのである。

ぼくのエッセイは哲学的・宗教的なものである。

お釈迦様が現在にいたら、ちんちん電車か全裸の女子大生の満員電車の例え話をしたに違いない。

ギリシア神話のオルフェウスが冥界から死んだ妻を連れ戻そうとしたが、途中で振り返ったら、うじ虫だらけの腐った死体だったという話にも通じる。

古事記のイザナギが黄泉の国から死んだ妻を連れ戻そうとしたが、途中で振り返ったら、うじ虫だらけの腐った死体だったという話にも通じる。

ちんちん電車や全裸の女子大生の満員電車の話は、千年後には古事記やギリシア神話と並んでいるだろう。

で、何の話だっけ。忙しくて忘れた。そうだ。ちんちくがんのちんの話だった。ちんだけで終わってしまいそうだった。

次は、ちくの話だが、その前に進化生物学の話を書く。

カモノハシという生物がいる。これは哺乳類なのに卵を産むのである。

哺乳類にカモノハシが分類されていることが不思議である。哺乳類は、卵生(卵を産む)でなく胎生の動物を定義するのだから。

カモノハシには乳首がないのである。哺乳類なのに乳首がないのであるから、けしからんことである。(生物学的に正確には、乳首はないが乳腺はある)

使わないから当たり前といえるかもしれないが、それだと人間のオスに乳首があるのは不思議である。

男性の乳首から母乳ならず父乳(ふにゅう・ちちちち)が出して赤ちゃんを育てる訳ない。

なぜ男性にも乳首があるのだろうか。これは、ぼくが小学生の頃から不思議に思っていた。

胎児の性分化の過程で、同じ細胞が精巣と卵巣に分化するくらいである。そうであれば胎児の性分化の過程で、男性の乳首が消失するというのが生物学的に考えて当然の結論だと思う。

小学生の頃から四十年くらい毎日悩んで考えていて、ある生物学的真実を発見したのである。

男性に乳首が存在するのは、乳首が気持ちいいからである。ぼくは四十年に渡る自ら人体実験をした結果、間違いないと確信している。

ぼくは乳首が性感帯なのである。

というわけで、ちんちくがんの『ちく』は乳首である。『がん』は顔で、つまり目・耳・鼻・口など五感の感覚器官を指す。

ちんちくがんのぼくは、ちんちんと乳首と五感の感覚器官とその他おまけでできているのである。

ぼくのホムンクルスの立体像を作ると、巨大な煩悩くんがあって、乳首があって、顔があって、あとはおまけのように手足がくっついている。

巨大な大理石像をぼくのホムンクルスで作りたいなあ。

何千年後かにはミケランジェロ作ダビデ像と並んで、ぼくのホムンクルスが美術館に飾られるかもしれない。

ふざけた文章を書いている、と思うかもしれない。まんじ追放・日本追放・地球追放になるかもしれない。

ふざけているのでなく、誤解されるのは、ぼくの表現力がないせいである。

『液体のてんとうむし』とか『鉄のペリカン』なんて、見たまま感じたまま刺さったまま体の中から心の底から出てきた比喩表現である。

ぼくは真剣な思いで文章を書いている。

地球上の七十億人の自殺率を0.001%でも下げようとの思いでエッセイを書いているのである。

自殺率を下げる方法は、自殺しようとする人の脳内のベータエンドルフィンを上げることである。

このエッセイを読んでいる人の脳内にベータエンドルフィンをなんとか分泌させようと工夫している。

そのために、ぼくは眉間に皺を寄せて、額に汗をかき、のたうちまわりながら、文章を書いている。切歯扼腕し、刻苦勉励し、抱腹絶倒しながら、心血を注いで、命を削っているのである。

余談であるが、自分の体を傷つけることでも、ベータエンドルフィンが分泌される。

「文章の工夫もまた、作家にとっては生命を的の『さし

ちがへ』である。」

これは、川端康成の『新文章讀本』（第六章）の一節である。

ぼくは川端康成と同じ心境である。自分の生命を犠牲にして文章を工夫して、書いた文章が自分の心臓を突き刺すような気持ちで書いている。

この引用の前章には「…文章はペンで書くものではなく、命の筆先に血をつけて描く…」という表現もある。

ぼくも実際に十本の指先から血をしたたらせながら、パソコンで文章を打っていたから、川端康成の気持ちが分かる。あと一本から、がまん汁をしたたらせながら打っていたのである。

ぼくは人類愛や地球愛から文章を書いている。内村鑑三の言葉を思い出した。

「私がこの地球を愛した証拠を置いて逝きたい。私が同胞を愛した記念碑を置いて逝きたい。」

『後世への最大遺物』という講演の言葉である。

ぼくはこんなエッセイを書いているが、自分が生きている間におもしろいと言ってもらえなくてもいい。自分の死後になって、後世の人でぼくのエッセイを読んで自殺を諦めた人が一人でもいればよいと思って書いている。

死にたくなった人間にいくら励ましの言葉をかけたって、何の効果もない。

「死ぬな」とか「生きろ」とかいくら勇気づけようとして効果がない。ぼく自身が逆の立場の人間だったからよく分かる。

まず受け入れ側に心を開かせて、その開いた状態で生きる勇気を与えるのである。

ぼくのエッセイは人命救助である。

例えば、高層ビルの屋上から今にも飛び降り自殺をしようとする友人がいたとする。失業が原因で自殺しようとしている場面である。その場合にどうするか。

「失業したからって、死ぬことはないだろう。失業して、起業した人はいっぱいいる。九割九分は失敗しているが。それでも生きているんだ。失敗した中には高利貸しに追い込まれて、夜逃げした人もいる。ヤクザに追われて半殺しにされた人もいる。それでも生きているんだ。この世にはもっとつらい生き地獄のような日々をを何年も何十年も耐えて生きている人がいるんだ。失業したくらいで死のうとするな。なに。もっと死にたくなっただと。飛び降りるな。あーあ。逝ってしまった。ん。いつの間にぼくの足首にロープが結んであるぞ。あれ。なんでアイツとロープがつながっているんだ。ぴえええええええ」

それよりは、「冥途の土産にこれを持っていきな」と言って、ぼくのエッセイを渡すのである。相手はぼくのエッセイを読んで腰砕けになるのである。「うっ。卑怯だぜ。飛び降りようとしても足がなえてしまって、できないぜ」

と言って飛び降り自殺をあきらめるのである。

他に、例えば、よくあるケースで、別れ話で彼女が出刃包丁を振り回している場合を考える。彼女が出刃包丁を自分の胸に押し付けて、別れるくらいだったら死ぬとわめいている場合になんとか止めようとする。

「やめろ。出刃包丁を離せ。別に君が嫌いで別れるんじゃないんだ。君とぼくとでは価値観が違うんだ。きっと、君はぼくよりも君のことを好きな素晴らしい男性にめぐりあえるさ。ところで、心臓の位置からずれているよ。心臓はもうちょっと下の方だよ。もっと。そう。そこから、もう少し左。そうそう。そこが心臓。そこを一息に突くと即死するよ。なななんで、なんで出刃包丁を反対に持ち返るんだ。なに。ぼくの心臓の位置を確実に狙うって。ややややめろ。ぴえええええええええええ」というような事態になる。

それよりは、出刃包丁を握った彼女に、まんじを渡してさりげなく『液体のてんとうむし』を読ませるのである。彼女が白らてんとうむしを出して喜んで油断したところで、「本当は君が好きなんだあ」と言って抱きしめてキスをする。彼女の手からスローモーションで出刃包丁が落ちる。渇いた金属音が響く。包丁が七色に光を反射する。BGMに『瞳を閉じて』が流れるのである。

「ぼくが悪いんだ。かっとなったら出刃包丁を振り回すというちょっとしたかわいいしぐさが、ぼくみたいな心のせまい人間に受け入れられないんだ。君みたいな、こなきばばあ…いや、甘えて全身で頼ってくるような子を幸せにする器量がぼくにはないんだ。包丁を振り回すしぐさも素敵だと思ってくれる心の広い男性ときっと出あえるよ」と言って、円満に別れるのである。

これくらい人の命を救うために、ぼくは真剣に文章を書いているのである。

ぼくは通勤電車で執筆することが多いが、夢中になったことが原因で、執筆器具が壊れたことを前に書いた。そのときは煩悩くんが地下鉄のドアに挟まれた。

今度は煩悩くんがエレベータのドアに挟まれたので、負傷したのである。男性読者は自分の身に置き換えて想像してほしい。

しかも、モノの半分以上が突き出たままエレベータが上昇したのである。十階までノンストップで昇った。最近のエレベータは馬力がある。

阿鼻叫喚の地獄図となった。

一階から十階までの天井や床と壁が壊れてしまった。エレベータから突き出たぼくの煩悩くんが、十階までの全ての天井や床をぶち破ったのである。

コンクリートは豆腐のように崩れて、鉄筋は糸コンニャクのように千切れて飛び出している。

十階建てのビルが倒壊寸前になった。

そのせいで、ぼくの煩悩くんも、ごくごくかる～い打ち身になったのである。

大変なことに鉄骨がエレベータを待っている人の前に落ちたのである。さいわい鉄骨は人にあたらなかったが、とおせんぼしている。

ぼくは煩悩くんの口からおしっこを出して、その水流の強烈な勢いで鉄骨を羊かんのように二ヶ所を切り取ったのである。そこから象が鼻で丸太を持ち上げるように、煩悩くんで鉄骨を持ち上げた。崩壊現場で閉じ込められた人々を救出したのである。

この事故の影響で火災も発生したが、煩悩くんのホースで消火活動をした。地上から屋上の火を消したのである。先日も夜空を見上げると月が赤く燃えていたので、煩悩くんを伸ばして消火した。

煩悩くんの打ち身はたいしたことが無かった。この程度のことで、ぼくの煩悩くんはなえたりしない。しかし、場所が場所なだけに念のため治療することにした。

包帯でぐるぐる巻きにして、ギブスで固定して、首から三角巾でぶら下げたのである。

綺麗な看護師さんが包帯をまいてくれたおかげで、ふっくらとふくらんだ状態で仕上がった。

まるで、股間に象牙のペニスケースを身につけているアフリカの裸族のようである。

身長は159cmだが、チン長は160cmを超えている。縦よりも横の方がドLで長い。

ぼくは、巨大な角を持ったサイの顔に手足をくっつけたような不思議な生物になってしまった。

この状態で死んでも、両足と煩悩くんの三点でバランスよく立ったままになるかもしれない。まるで武蔵坊弁慶の立往生である。

死んだら、煩悩くんは死後硬直でますます固くなるだろう。煩悩くんも即時性死後硬直が発生するだろうか。

ぼくの棺桶は立方体かテント型の特注が必要だ。

なんかバランスが悪くて、カックンカックンしている。

まるで鹿脅しのようである。

(ぼくはルビ〈ふりがな〉を極力使わない。鹿はししでしかでないのにしかしかよめないしとかいうひとがいるのでしかたなくしかしかでなくししであるとしかルビをふらない。前号のタイトルは『太太太』であるが、『おおたふとし』というルビは付けなかった。その前も天上天下は『げ』だけルビをふった。豚に『ぶた』とか『とん』のルビはブター…じゃなくタブーで、トンでもない)

さて、ししおどしというのは、日本庭園にある竹製の水が溜まったらこぼすアレである。

ぼくはおしっこするとバランスが崩れてのけぞる。たまに残尿で頭からシャワーを浴びてしまう。

カックンして、煩悩くんを地面に横たえていると、煩悩くんがローラー車に轢かれた。アスファルトを舗装する巨大な鉄のローラーの車である。

ぼくの煩悩くんは、剣先スルメのように、ペッチャンコなった。

ずいぶんと立派な三角形のミミのあるスルメができあがってしまった。

ぼくほど、スルメや、のしイカの気持ちの分かる人間はいないだろう。ぼくも社会や会社の巨大なローラー車にペッチャンコにのされてきたので、去勢されて、思っていることの千分の一も言えないでいる。

ぼくのスルメイカは、タヌキのキンタマ袋の二畳くらいに広がったのである。ちんちんの面積をキンタマ袋の面積で例えるのは、ぼくらしい。

イカが異化して他己してタコになった。タコは蛸でなく凧だ。おおく飛ばすでないかいと、OCTOPUSでないKITE。

そこで嵐のような突風が襲ってきた。

強風であおられて、ぼくは逆さ吊りとなって、空高く舞い上がった。イカタコが空気を包んで上昇した。糸の切れた凧のように舞い上がったのである。

いかさま…じゃなく、さかさまの状態のまま、ぼくはふわりふわりと飛んでいった。

気球に乗っているように逆さ吊りのまま、遊泳したのである。

下から大勢の人が見上げて、指さして叫んでいる。

あれは何だ。UFOか。

いや。イカだ。巨大なイカだ。

イカが空を飛んでいる。UFOのようなイカだ。

イカはUFO(未確認飛行物体)でなくUSO(未確認潜水物体)だろう。空飛ぶなんて、ウソだ。

何か食っているぞ。人だ。人を喰っている。

というような感じでパニック状態である。

巨大なイカが空を飛びながら、人間を食べている。イカもタコも英語でDEVILFISHつまり悪魔の魚なので、人くらい喰ってしまうのである。

『人喰いイカが空を飛んでいる』とテレビ中継で全国に報道された。そのようにしか、下々の下界からは見えなかったのである。

のどかな牧歌的なメルヘンチックな風景である。なんかサルバドール＝ダリの絵に出てきそうだ。

大騒ぎになって航空自衛隊がやってきた。ぼくの大事なスルメイカに向かってミサイルを発射したのである。ミサイルの風圧で、ひらひらかわしたが、さらに高く舞い上がっていった。

上空千メートルのところで突然、上昇気流が止んだのである。ぼくは猛スピードで落下していった。このままぼくの宿敵の地球に叩きつけられそうになった。

ぼくは巨大なスルメイカのミミをつかんで、煩悩くんをパラシュートのようにした。ふわふわと地上に舞い降

……それにしても音声入力ソフトで口述筆記って難しいなあ。……今日は、まんじの締切だから、書きあげて、原稿を送信しよっと。……あれれ、みんな他の車輛に移って、遠巻きにぼくをジロジロ見ているぞ。満員電車だったのに、いつのまにか車内がガラガラだな。大声で叫び過ぎたあ。いつのまにか口内がガラガラだな。地下鉄の中だから音声入力も大声を出さないと認識してくれないもんなあ。…あれれれれ…。ホームにお巡りさんがたくさんいる。…なななんだ。ぼくを捕まえようとしているのか。……こんなところで捕まっていると、まんじの締切に間に合わないではないか……。逮捕されるくらいは大したことないが、締切に間に合わないのは大大問題である。……早く原稿を保存して、メールを送信しよう。……やばい。……お巡りさんが追っかけてくるぞ。……うっ…挟み撃ちだ。……逃げられない。……いたたた……。ねじ伏せられた。……なにっ。猥褻物陳列罪だって…。失礼だなあ。ぼくはただ執筆していただけ。……これは十一本打法なので……一本勃打法もできるんだけど……。ひわいな言葉を大声で叫んだって……。けがをしたので、口述筆記をしていただけ……。…わあ……。手錠なんてしないで。……太すぎて、手錠がはまらないって……。そ、それは手首じゃなくって……ぼくの煩悩くんだってばあ。むぎゅうううううううううう。保存。送信。

りた。

スキーのジャンプのように華麗に着地したぼくは、群衆から拍手喝采を浴びたのである。

なんともアドベンチャーなエッセイになってしまった。

振り返ってみると、小説作法によく引用されるジョセフ・キャンベルの神話構造（旅立・通過儀礼・帰還）になっている。

ぼくがこんなエッセイを書いているのは、皆さんに生きる勇気を与えると同時に、自分でもが生きていく勇気を持つためでもある。

ときどき、なぜ生きるんだろうと思うことがある。ふと死にたくなることがある。

そんなときに空飛ぶ人喰いイカのことなど色々と妄想するのである。ぼくの妄想話を全国一億二千万人のまんじの読者が、読んでいると思うと興奮する。

そうすると死にたくなくなるのである。勇気凛々ルンルンランラン気分である。

空飛ぶ人喰いイカとか全裸の女子大生の満員電車とか妄想は、生きる勇気を与えてくれる希望なのである。

自殺予防キャンペーンのマスコットボーイにぜひ空飛ぶ人喰いイカを使って欲しい。

死にたくなったら、空飛ぶ人喰いイカを思い出そう。

編集後記

平成二十七年の新春を迎え、同人皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

正月早々、編集の立場から皆様の原稿を拝見でき、皆様の執筆に対する熱意と姿勢に感銘を受けております。今年も皆様の一層の御健筆をお祈り申し上げます。

まんじ一三五号の表紙の紙は、発行が二月でもあり、「梅と鶯」の関係から紀州の色上質最厚口「鶯」を使いました。

今年は羊年です。羊という字は漢字で祥・翔・義・美・羨・善など、いずれも良い意味を持つものに使われています。

今号からの表紙の絵はその羊です。田寺怜葦様に書いていただきましたが、田寺様の思いは「和して同ぜず」です。

羊は群れを成して生きる優しい動物です。私たちもいろいろな人々との交流の輪の中に生きていますが、謙虚な中に「己の考えや主張」をしっかりと持ち、安易に他者に同ずることのない、自分なりに満足できる一年を送りたいと思います。

終りに当たって、この一年、お互いに健康で書き続けることができれば、と心から祈念申し上げます

（鍋）

まんじ第135号

平成27年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「和して同ぜず」

田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.136

2015.5.1

まんじ第百三十六号　目次

「まんじ」の歴史……三戸岡道夫…4
彼方のキリスト……新井宏…19
来たれ、市民農業者たち！……古屋富雄…26
～市民農業者塾の開設～
日本の学校を世界一へ……幸山周平…32
『時評家　新明正道』（評伝その一）……山本鎭雄…50
寒い日……横山正義…60
短歌三十五首……曽根竣作…70
短歌行雲流水（四十五）……石黒修身…74
関東管領始末記⑰河越無惨……千坂精一…77
性と化粧の物語（一）……鈴木守…87
古い物・遠い夢「織部」いま（茶道史余滴）……忠内正之…94
（司馬雑感三十七）寛斎と嘉兵衛と歳三……山田嘉久…101
―二人の北海道
漢詩　潮騒録（八十）《漢詩の流れ68》……鯨游海…111
殉教（七）……鍋屋次郎…114
千家尊福伝（七）……村上邦治…127
今に継がれる歌詞を残した新道歌人
明治時代の著述者　渋江保の一生（その一）……山本勉…134
密室銀行（十九）……匠克仁…138
変態式健康法……匠克仁…143
編集後記……編集子…150
表紙絵……田寺怜葦…

「まんじ」の歴史

三戸岡道夫

「まんじ」は今回で一三六号を迎えることになった。「まんじ」の創刊は昭和五十六年であるから、約三十五年の歴史を持つことになる。

しかし「まんじ」には、その前身ともいうべき「作家群」という同人誌があった。

「作家群」は昭和二十七年（一九五二）の創刊で、二十年以上つづいた同人誌である。

私が最初に入ったのは、この「作家群」であった。

私が東京へ出てきて二年目の昭和二十七年に、池袋のある書店でこの「作家群」の創刊号を見つけた。大学二年生のときである。

当時は同人雑誌でも定価をつけて、新刊書店で販売していたのである。定価は五十円であった。私はさっそくそれを買って読み、「作家群」の同人に加入させてもらった。

その「作家群」創刊号は六十六ページで、それに載っているのは次の六編であった。

篆　刻	大和禎人
螢	秋山和哉
天　使	九鬼純正
銭金他人	堀　義久
手帳から	原　卓也
T・S・エリオット研究	平井富雄

その時の同人の数は十一名で、発行者の名前は原卓也となっていたが、実質的な運営の力となっているのは、大和禎人であった。

発行の号数と年次を見ると、次のようになっている。

第一号	昭和二十七年三月
第二号	昭和二十七年九月

第三号	昭和二十八年三月
第四号	昭和二十八年五月
第五号	昭和二十八年十月
第六号	昭和二十九年二月

……（以下省略）…

と、年二回を目標に発行している。

そして私は、第二号に「暮し」という作品と、第三号に「苑の蕾」、第五号に「金」という作品を発表した。

同人の数は、比較的長く続く人と、短期で入れ変わる人と、いろいろであったが、平均して二十名前後であった。

その頃になると「作家群」の初期の頃の人は少くなり、「作家群」は大和禎人さんを中心に活動していた。

雑誌が出来上るとその都度合評会はもちろん行ったが、その他にも毎月一回程度は集って、雑談式の勉強会（？）を開いて、いわば切磋琢磨していた。

私は昭和二十八年四月に大学を卒業すると協和銀行に就職し、仕事が忙しくなってきたので、二、三年たって、なんとなく自然退会のような形で「作家群」を退会してしまった。

大和禎人さんは「作家群」の編集に熱心なだけでなく、小説を書くのも玄人はだしで、「作家群」に発表した作品が、ある程度のボリュームになると、それを一冊の本にまとめ、「大和禎人作品集その一」、「大和禎人作品集その二」と題名をつけて、栄光出版社から出版していた。

私が退会した後の「作家群」がどうなったのか、くわしくは判らなかったが、大和禎人さんが作品集が出来ると贈ってくれるので、大体の見当はついていた。

しかし小説を書く人は、自我が強く、自己主張をする人が多いので、メンバーの入れ変わりは激しく、また作品批評への文学論の相異で人間関係にもひびが入って、「作家群」の運営にも波乱が起り、昭和四十年代の終り頃に「作家群」は廃刊になってしまった。

「作家群」が廃刊になると、大和禎人さんは他の同人誌などに二、三入って、作品を発表していたが、やはり自分中心の、意思の通じ合う同人誌が欲しい、という要求が強くなってきた。

そこで昭和五十五年になった時、大和禎人さんは、「作家群」の当初のメンバーを数人集めて、

「やはり作家群が無いのは淋しいね。小規模のものでもいいから、また何か作らないか」

という話になった。全員賛成であった。

「作家群」が解散になったのは経済的な問題もあったようで、その点について大和禎人さんは、

「今度わたしはタイプライターを買った。だから原稿は私がタイプで打つ。そして印刷だけを外に頼めばいいから、値段は安く出来る。ただ、その代わり、あまり長

い原稿だと、素人の私にはタイプが打ち切れないから、短い小説、いわゆる短編小説集（原稿用紙五～六枚）としてスタートしたい」

ということであった。誰も異論はなかった。

さて、本の名前をどうするかという点について、「作家群」を踏襲するとか、「新作家群」とするとか、いろいろ提案もあったが、やはり新しくスタートするのだから、作家群とは別の名前がいい、候補名としては、いろいろ出たが、最終的、縁起のいい名前がいいというので、吉祥を表わす「まんじ」に決ったのである。

第一号は昭和五十六年三月一日に発行され、メンバーとその作品名は次の九名である。

下町風俗資料館	森本俊正
忘れられぬ「リオ」	神原拓生
やきとりの夢	井上二三男
天明七年	三戸岡道夫
男運	柴田富佐子
「うん」	岸田幸雄
鉄舟の行方	山口健二
母ひで	大和禎人
ハイラル挽歌（一）	金子正義

そして、その編集後記に大和禎人さんは次のように書いている。

掌の作品をあつめて、創刊の運びになった。五、六枚という枚数で何が書けようか、と危む同人もいたが、あえてこの号は提唱のとおり方針を曲げなかった。この枚数の中で磨きあうことは決して無意味ではないと考えている。むしろ多い枚数よりも力量を問われるはずに思われる。

一体、どういうグループなのかと、好事家は目を向けたがるものだが、わたしたちは、わたしたちの思うような雑誌を作り、わたしたちの作品に愛着をかけようとする、多少は腕に覚えのある野武士的な集団であるとだけ称えておきたい。

この号は経費を切りつめるため、ハーフメイドの方式が採用された。つまり下版までの工程を一人の同人が担当し、刊行されたものであることを付記しておきたい。

ハーフメイド方式とは、集った原稿を活字にするまでを同人側（具体的には大和禎人さん）が行い、印刷と製本を外部の印刷業者にしてもらう方式である。

そして発行は三ヵ月に一回、発行するということにした。

しかし「まんじ」第一号の合評会で、全部が短編小説では、力いっぱいの小説が書けない、やはり普通の同人誌の方がいいということで、第二号からは普通の形態の雑誌（現在の形態のもの）になった。したがって原稿の分量も多くなり、大和禎人さんがタイプするのは不可能なので、最初から原稿を印刷業者に渡す従来の一般の方式になり、活字を大和さんがタイプする大和方式は、第一号だけとなった。

すなわち第二号からは普通の方式となり、昭和五十六年六月に発行され、現在の一三六号へと、三十四年間続いているのである。

「まんじ」のスタート以来、大和禎人さんの厳正、端正な編集に従って、年四回（三ヵ月ごと）の発行は着実に実行され、同人の数も、若干の出入りをくり返しながら、少しずつ増えていった。

創刊から七年目の「まんじ26号」（昭和六十三年二月発行）に、私は「カラオケ挽歌」というのを書いた。

するとこれを読んだ栄光出版社の石澤社長から、

「当社ではこれからビジネス小説シリーズの本を発行しようと考えている。この『カラオケ挽歌』は面白いから、長編小説にしてみたらどうか」

と言われ、長編小説に書き直した。

題名は栄光出版社の編集方針によって「降格を命ず」として平成元年七月に出版し、これが私の出版第一号となったのである。

「降格を命ず」は比較的よく売れたので、栄光出版社からはすぐ二冊目の原稿の依頼がきた。もちろん「降格を命ず」につづくビジネスもの（銀行小説）なので、これまでに書きためてあるものを出すわけにはいかず、新しく書かなくてはならない。しかも単行本として出すのであるから、長編小説として書き下さなくてはならない。急に忙しくなってきた。それに「まんじ」の原稿が三ヵ月ごとに追っかけてくる。

「降格を命ず」につづく第二冊目の題名は「支店長の妻たち」とし、「まんじ」の方へはこれを出来た順に分載することで切り抜けた。

すなわち「支店長の妻たち(1)」を、「まんじ三十四号」（平成元年十一月号）にのせ、それから二回目、三回目を引続き「まんじ」に載せたが、その頃には「支店長の妻たち」の原稿は全部出来上ったので、「まんじ」への掲載は三回でストップして、平成二年五月には私の二冊目に当る「支店長の妻たち」が出版された。

こうして、私にとってその後の「まんじ」は、栄光出版社より出版する長編小説を、分割して書いていく場のようになっていった。そして「まんじ」へ全部載らない前に全部出来上って一冊になって出版されるので、「まんじ」への連載は途中でストップという形になっていった。

その後の同人のメンバーは少しずつ増減をくり返していたが、「まんじ五十二号」（平成六年五月号）から、鯨遊海さんが、「漢詩潮哨録（一）」で参加された。

これまでは詩を書く人はいたが、漢詩の分野は珍らしいので、編集の大和禎人さんも大喜びで、大和禎人さんは編輯後記で次のように書いている。

新たに鯨游海をわが陣営に迎えた。漢詩を引っ提げての登壇である。本誌のキャラクターに一異風を盛り、他誌の追随を許さぬ特色となろう。

「まんじ五十四号」（平成六年十一月号）から、鈴木昭三さんが「きもないさん」で、そして伊澤敏久さんが「流転」で登場した。

「まんじ」はその後も順調に発行されていったが、「まんじ五十五号」（平成七年二月号）から、編集長を私が、大和禎人さんから引継いだ。もちろん大和さんは引続き「まんじ」で活躍していくのであるが、元気なうちに編集のノウハウを誰かに引継いでおきたいということであった。

「まんじ六十八号」（平成十年五月）から、瀧澤中さんが、「五千石の大義」という歴史小説で参加された。太閤秀吉の恩を忘れぬ武将の話である。

「まんじ七十一号」（平成十一年二月）から、紙透寛夫さんが、「泰山木」で参加した。

なお、「まんじ七十四号」（平成十一年十一月）から、編集長が私から鯨游海さんに変った。

そして「まんじ七十五号」（平成十二年二月）から、新井宏さんが、「日本近代史の恩人シドッチ」で参加された。その号の編集後記には、

（異色の新人、工学博士の新井宏さんを同人に迎えた。専門の金属鉱業関係は元より、歴史、考古学に詳しく、韓国語も善くするという、多才の方である。爾今、小説にも新風が吹くであろう）

と記されている。

さらに「まんじ七十七号」（平成十二年八月号）から、千坂精一さんが、「体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人々」、

鍋屋次郎さんが、「罠」、

相原精次さんが、「開港・港崎心中」、

の三名が参加された。

「まんじ七十八号」（平成十二年十一月）には、森実与子さんが参加され、この号は十四人の力作が掲載されて、一三八ページという頁数に盛り上った。

さらに「まんじ七十九号」（平成十三年二月）には、島津隆子さんが参加され、更にページ数は増加して一六八ページとなった。

そして「まんじ八十号」（平成十三年五月）には、中泉聖司さんが参加され、「まんじ八十号の記念号」という形で全員が力作を発表したので、二二六ページという厚さの「まんじ」が出来上ったのである。

なお発行に当っては、発行事務や会計は発刊以来、柴田富佐子さんが担当していたが、大変な仕事を十数年以上担当してくれたわけであり、いつまでも柴田さんに御苦労をかけているわけにはいかないということで、鍋屋次郎さんが事務局長として、その後を引受けることになった。

「まんじ八十一号」（平成十三年八月）には、宅見勝弘さんが「サラリーマンとしての鴎外」で参加された。

「まんじ八十三号」（平成十四年二月）には、太田精一さんが「宰相の橋」で参加された。

「まんじ八十四号」（平成十四年五月）には、隆恵（りゅうめぐむ）さんが「吉備津路歴史ロマン」で参加された。

「まんじ八十七号」（平成十五年二月）には、石黒修身さんが短歌「行雲流水」で参加された。これまで「まんじ」には短歌を作る人はいなかったので、「まんじ」の幅が一段と拡ったといえよう。

「まんじ八十九号」（平成十五年八月）には、大澤鷹雪さんが、俳句で参加された。

さて、八十九号の次は九十号である。

九十号から、編集長は鯨游海さんから、太田精一さんへ変った。

八十号のとき、若干、記念号的な感賞で編集したので、九十号はもう少し規模を大きくやろうということになった。同人メンバーも二十名になっているので、そのベスト作品を網羅して、平成十五年十一月に、

「まんじ傑作選」（九十号記念）

として、「まんじの会」の名前で発刊した。

したがって製本も、一般の書籍と同じ形式のハードカバー式にし、ページ数にして四九八ページという厚手の本が出来、栄光出版社から一九〇〇円の値段をうけて発行した。

念のためにその目次を記すと次のようである。

さち　瀧澤　中
きもないさん　鈴木昭三
妖花藤原薬子　島津隆子
シルヴェスターの夜　森実与子
貸しはがし　中泉聖司
白い鳩　千坂精一
聖徳銀行秘書室　鯨　游海

漢詩　銀行雑詠　鯨　游海
俳句　橡若葉　大澤鷹雪
散策中に思う・韓国にて　新井　宏
奴隷王朝　宅見勝弘
継体大王の謎を探る　隆　恵
芭蕉のこと　青木昭成
現代詩　点描より　石黒修身
短歌　行雲流水　紙透寛夫
紙透小太郎の獄中記　鍋屋次郎
あるキリシタンの迫害　相原精次
阿育王伝　宮城克郎
日本犬物語　伊澤敏久
霧の村の新任教師　太田精一
遠い処へ　三戸岡道夫
ソクラクレス

「まんじ九十一号」（平成十六年二月）から、忠内正之さんが「古い物・遠い夢」で、堀内永人さんが「風景論」で参加された。

なお、この九十一号から、うれしいことがあった。それは表紙のデザインが、田寺怜葦さんの絵に決定したことである。

これまで「まんじ」の表紙のデザインに使う絵は、いろいろ工夫し、いろいろな画家に頼み、大変であった。

そんな頃、ある日銀座の画廊でやっている田寺さんの個展を見にいったところ、すばらしい画があった。一口で言えば、丸い日輪を背にした子供のお釈迦様を象徴的に描いた絵といえばよかろうか。

（これを「まんじ」の表紙にしたらいいな）

と思った私は、その旨を田寺さんにお願いすると、オーケーが出たので、九十一号からはこの絵で表紙を飾ることになった。

この絵を田寺さんは、小さいお釈迦様ということで、

（小ぶったさん）

と名づけており、そして、

（仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世にあまねく光明をもたらしてくれる）

と説明をつけている。

「まんじ九十二号」（平成十六年五月）から、吉田忠雄さんが「国近三吾先生の思い出」で参加された。表紙はもちろん九十一号と同じ「小ぶったさん」である。

「まんじ九十四号」（平成十六年十一月）から、次の五名が参加され、ますますメンバーは増えていった。「小ぶったさん」のおかげかもしれない。

森下征二　「茉莉花伝」
中村一彌　「『文明の衝突』から日本文明のアイデンティを考える」

隆　恵　敗北者賛美と勝利者誹謗
山田嘉久　関博斉のこと
松下嘉男　現代詩残暑見舞い

「まんじ九十五号」（平成十七年二月号）から、中山喬央さんが「還暦からの考古学」で参加された。

また、「まんじ九十六号」（平成十七年五月）から、伊治哲さんが「『ジロー』とともに暮らした日々」で、また曽根竣作さんが「短歌・北よりの使者」で参加された。

このように次第にメンバーもふえていったので、「まんじ九十七号」（平成十七年八月）では、作品数も多くなり、また、冊子の厚さも一八二ページという、単行本を超える厚さになった。

また「まんじ九十八号」（平成十七年十一月）では、松下魏三さんが「文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生」で参加された。

平成十八年五月、「まんじ」はついに百号に到達した。

そこで今回も九十号と同じようにハードカバーの単行本で、栄光出版社より出版した。題名は「まんじ一〇〇号記念」とし、非売品とした。執筆者は二十六名で、ページ数は四四七ページの立派なものになった。

そして表紙は記念号なのでカラー印刷とし、田寺怜葦さんの「慈悲」という題名のすばらしい絵で飾らせていただいた。

その内容は次のようであった。

大樹を渡り歩いて戦国を生き抜いた男　千坂精一
断腕太后　森下征二
小町逍遥　島津隆子
いずれか秋にあはで果つべき　相原精次
六十年目の伝言　鈴木昭三
まんじゅう奉公　瀧澤　中
俳句　不屈の闘志　大澤鷹雪
浦上事件　鍋屋次郎
韓国の歌人　石黒修身
毛鳳忠さんと私　吉田忠雄
多率寺にて　新井　宏
まぼろしの女帝　隆　恵
考古学で判る社会の動き　中山喬央
わたしたちは、スタインベルク三姉妹　伊治　哲
「南蛮のみち」をゆく　山田嘉久
現代詩　この町　青木昭成
短歌　湘南湖南　曽根竣作
聖徳銀行秘書室　鯨　遊海
霧の彼方に　太田精一
歯医者さん　森実与子
楽茶碗の怪　忠内正之

都市銀行「爆発物処理班」　宅見勝弘
天城の鬼火異聞　堀内永人
新美先生のこと　松下壽男
赤堀四郎博士の揺籃期　松下魏二
極楽楽園　三戸岡道夫

なお、そのあとがきには次のように記されている。

同人雑誌「まんじ」は今回で百号を迎えることになり、それを記念して本記念号を発行することになった。

まんじは昭和五十六年に創刊され、年四回、規則正しく発行されてきたから、二十五年間継続されているわけである。

まんじは最初、純文芸誌としてスタートしたが、その後、順次ジャンルが拡り、現在は、現代小説、時代小説、伝記、ノンフィクション、詩、漢詩、短歌、俳句、エッセイ、論文など、多方面にわたり、綜合誌の方へむかっている。

なお、「まんじ」にはその源流ともいうべき、「作家群」という文芸同人誌があった。昭和二十七年の創刊であるが、途中で休刊となったため、そのメンバーの有志が昭和五十六年に「まんじ」をスタートさせたのである。

こう考えると「まんじ」はその源流からでは、実に約半世紀にわたる歳月を生き抜いてきたわけであり、まさに、

（持続は力なり）

を実証したのである。

「量より質」という言葉があるが、「質より量」もまた真である。量もそのボリュームがふえると、そのエネルギーは質に転化するのである。これからも「まんじ」は百五十号、二百号を目ざして、時間という量に挑戦しようではないか。

「まんじ」は一〇〇号を超えて、一〇一号（平成十八年八月）が始ったのである。そして一〇一号から編集長が、太田精一さんから中山喬央さんへと変った。

一〇一号については、一つ大きい前進があった。それは表紙のデザインである。

表紙についてはずっと田寺怜葦さんの「小ぶったさん」で飾ってきたが、さらにいい道が開けてきた。それは田寺さんが年賀状を、その年の干支と子ぶったさんを組み合せた絵を描いてデザインしたのである。この年は犬と子ぶったさんである。犬と子ぶったさんが並んで、にっこりほほえんでいる。その表情と雰囲気がとてもいい。

（これは「まんじ」の表紙の絵にいいな）

と私は直観的に思った。そして、これを「まんじ」の表紙に使わせてほしいと頼むと、田寺さんは心よくオーケーしてくれた。

「まんじ一〇一号」の表紙のデザインはこの「犬と子ぶったさん」の可愛いい絵である。

これ以後、田寺さんは、その年の干支と子ぶったさんの組み合せた年賀状を書くようになり、「まんじ」はそれを毎年使わせてもらって、現在に至っている。「まんじ」は年四回出すので、四回同じ「干支と子ぶったさん」が続き、年が変わると、次の干支と子ぶったさんになるのである。これで長い間表紙のデザインで苦労してきた問題が一挙に解決され、毎年正月になると、

「今年はどんな子ぶったさんが来るかな」

と、田寺さんからの年賀状が心待たれるようになったのである。

「まんじ一〇二号」（平成十八年十一月号）には、「掌篇小説」で亜木陽一さんが参加された。

「まんじ一〇三号」（平成十九年二月号）には、平山恵敏さんが「司馬史観の黒田官兵衛に触れて」で、参加された。

「まんじ一〇七号」（平成二十年二月号）には、鈴木守さんが「化粧のルーツを訪ねて」というユニークなテーマで、参加された。

「まんじ一〇八号」は年も平成二十年と変り、干支が「ねずみ」となったので、表紙のデザインも、薪を背負った子ぶったさんが本を開げて読み（薪を背負った二宮金次郎の読書姿と同じ）、その薪の上に、ねずみがちょこんと座っているといった、ユニークな絵であった。

勝山道子さんが「野梅」で参加された。

「まんじ一一〇号」（平成二十年十一月号）は、十回ごとに記念号にしようということで、九十号、百号と同じようにハードカバー四八九ページの単行本とした。

表紙カバーは百号のときと同じように田寺怜葦さんにお願いし、「無尽蔵」という題名の絵で飾ることが出来た。炎のように燃え上る太陽を背に、緑の枝に一羽の鳥が止まる構図で、注書きに、

創造力は一羽の鳥
自由に世界を飛び
ありふれた草むらの中にも
黄金の実を見いだす

とある。

また「まんじ一一〇号」から、「森田萬右衛門物語」で、幸山周平さんが参加した。

「まんじ一一一号」（平成二十一年二月）号は、干支も「牛」年となったので、表紙も、子ぶったさんが牛と並んで本をひろげている可愛いい絵になった。

平成二十二年に入ったある日、外山知さんからある相談を受けた。

「陰翳の美学」というエッセイを纏めたので出版したいが、どうすればいいか、ということである。原稿用紙で千枚ぐらいだという。

外山さんは、私の師範学校時代の後輩で、哲学研究会のメンバーであった。卒業後はずっと学校の教師を勤め、まじめそのものの外山さんはその長い教師生活の中でずっと哲学の研究をつづけ、それを纏めたものであった。原稿用紙千枚というボリュームが示すように、それは巨大な人間哲学、いや宇宙哲学とでもいってもいい難解なもので、たとえ出版しても一冊も売れないであろう。自費出版するしかないにしても、その経済的対価に値するかどうか。それに持ってきた原稿の最初の方をちらと見ても、文章も難解、意味不明のところもあり、相当手直しをしなければならない所がある。それで私は、

「まんじの同人になって、五十枚程度ずつ発表したらどうか」

とすすめたのである。それを四、五年も続けていけば、一応全部が活字になるわけである。活字になったものをどうするかは、その時また考えればいい。

こうして「まんじ一一五号」（平成二十二年二月号）から、外山知さんが「陰翳の美学」で参加したのである。

しかし原稿には相当手入れする必要があるので、事前に私のところへ原稿を送ってもらい、それを私が手入れして外山さんの所へ戻し、それを清書して編集部へ送るという手続が、それから延々と続くことになるのであった。

なお熱心な外山さんは一回も投稿を休むことなく、十四回連載して、「まんじ一二九号」（平成二十五年八月）で完結するのであった。

「まんじ一一七号」（平成二十二年八月）から、「目耕録・その一」（徳冨健次郎著『みみずのたはごと』を読む）で山本鎭雄さんが、短歌「はじめまして」で金澤智佐美さんが参加された。

「まんじ一一八号」（平成二十二年十一月）に、池辺瑞姫さんの「竜馬さんへ」を特別寄稿で掲載した。池瑞さんは小学校四年の女子学生であるが、歴史にくわしく、まんじ同人の教え子である。

平成二十三年に入ると、山本勉さんから、外山知さんの「陰翳の美学」と同じような相談を受けた。

山本さんは中国の現代小説「口紅」というのを翻訳していたが、それが完了した。分量としては原稿用紙千枚程度になるが、これを出版したいが、どうしたらよいかという相談であった。

私の頭には先般の外山知さんの「陰翳の美学」のことがひらめき、そのことを話して、「まんじ一一九号」（平成二十三年二月号）から、「口紅」の連載で山本勉さんが参加した。

「まんじ一一九号」（平成二十三年二月）号は、干支も「うさぎ」となったので、表紙も、子ぶったさんの背後を七匹のうさぎがはねて飛ぶ絵になった。うさぎたちは丸く大きな円を描いて飛んでいるので、笑顔の子ぶったさんがまるで後光を背負っているように安らかな絵で、それを描いた田寺怜葦さんは「豊饒の地は心の中にあり」と注書きしている。

平成二十三年五月には「まんじ一二〇号」の発行となった。「まんじ九〇号」からは、十号毎にハードカバーの特集号単行本スタイルで発行してきたが、今回からは普通の形式でいいではないかということで、毎回の印刷形式とし、表紙デザインだけを「コスモス」という、田寺さんの絵で飾って、ちょっと形を整えることにした。

しかし一二〇号もほとんどのメンバーが力作を書いてくれたので、ページ数としては三一六ページの厚いものが出来、もしこれを前回と同じようにハードカバーの方式でやったら、五〇〇ページ近いものになったわけである。

なお、この一二〇号には、新井宏さんの手になる、これまでにない特別企画がある。それは「まんじ」創刊号以来の、各人別の掲載作品名を一覧表のデーターとしてまとめ、掲載してくれたことである。これによって第一号以来、誰が、どんな作品を、どの号で発表したかが一覧出来るのであり、新井さんのようにデーター処理の名人でなくては出来ないことであった。

念のために次にその回数だけ（第一号から一二〇号まで）を記してみる。

	回数
大和禎人	一〇七
山口健二	三五
柴田富佐子	三一
岸田幸雄	五
金子正義	八三
井上二三男	二三
森本俊正	六
神原拓生	一
三戸岡道夫	一一六
柴田　保	三
山本儀一	八
山根三枝子	二二
八十島元	六
佐々木一郎	十六
有香六月	一一

小久保勝義　二
青木昭成　四二
鯨　游海　六七
伊澤敏久　二五
鈴木昭三　三二
東山高夫　一
太田和貞　四一
瀧澤　中　一八
紙透寛夫　二五
新井　宏　四五
千坂精一　四三
鍋屋次郎　三三
相原精次　一四
森実与子　一五
島津隆子　三一
中泉聖司　九
宅見勝弘　二八
太田精一　三七
隆　恵　八
石黒修身　三三
大澤鷹雪　一三
宮城克郎　一
堀内永人　二八
忠内正之　二九

吉田忠雄　二〇
山田嘉久　二六
松下壽男　二八
森下征二　七
中村一彌　一
中山喬央　二五
曽根俊作　二三
伊治　哲　二二
松下魏三　一九
亜木陽一　一一
平山恵敏　五
鈴木　守　一三
勝山道子　一二
森　清英　一
幸山周平　一
外山　知　五
山本鎭雄　三
金澤智佐美　三
山本　勉　一

「まんじ一二一号」（平成二十二年八月）から、「俳句朧月」で石野茂子さんが、また「アルタ共和国」で漆原直子さんが、参加された。

なお「まんじ一二二号」から、編集長を中山喬央さん、事務局長を鍋屋次郎さんとして、発行体制を強化した。

「まんじ一二三号」（平成二十四年二月）は干支も竜となったので、これまで通り田寺さんの年賀状のデザインを使わせていただいて、「子ぶったさんと竜」で飾った。空をかける竜が大きな玉を抱え、その玉の中で子ぶったさんがほほ笑んでいる図である。これに田寺さんは「暗雲を昇り天珠をとる」と注記している。

本号も二三二ページという盛り上りであった。

「まんじ一二四号」（平成二十四年五月号）から、「草取り」で、横山正義さんが参加された。

「まんじ一二五号」も「まんじ一二六号」も順調に進み、「まんじ一二七号」（平成二十五年二月号）も二三四ページと順調であった。年も巳年となり、表紙の田寺さんの絵も、にこやかなへびの波に乗って、宝船に乗った子ぶったさんが海を進むという、縁起のいいものになった。これに田寺さんは「古きを脱ぎて新生に漕ぎ出す」と記している。

「まんじ一二八号」（平成二十五年五月号）から、「古代出雲国筆頭　熊野大社の盛衰」で、村上邦治さんが参加された。

「まんじ一二九号」（平成二十五年八月号）から、「シルバー諸君の力（農業分野編）」で、古屋富雄さんが参加された。

平成二十五年十一月号で、「まんじ」は一三〇号となった。百三十という、十号毎のポイント号になるので、百二十号と同じように表紙を田寺さんの美しい絵にして、ちょっと特別号らしい雰囲気を出した。

その絵は水辺に美しい女神が、右手に蓮の花を持ち、左手を横顔にあてて、ちょっと首をかしげる神秘的な絵で、これに田寺さんは「私の在る処　世界は在る　心の花の咲く限り　光は消えない」と記している。

この百三十号も全部の会員が出稿し、ページ数も二七三ページと、ハードカバーの本としたら五百ページを越すものとなった。

「まんじ百三十一号」（平成二十六年二月号）から、「つれづれの源氏物語」（第一回問題意識と概観）で、小田紘一郎さんが参加された。小田さんは源氏物語の全部を原文で覚えている凄い人である。これまでにある源氏物語ものと違った、もっと広く、深く、思いもかけぬ綜合的な角度から源氏物語を語ろうという連載が始ったのであり、たのしみである。

また、年の干支も馬に変ったので、表紙も羽のある天馬に乗って駈ける小ぶったさんになり、田寺さんは「夢はなお、高きを目指して天駈ける」と注記している。

「まんじ一三一号」が出てしばらくして、突然の不幸が起きた。編集長の中山喬央さんが急逝されたのである。

そこで「まんじ一三二号」（平成二六年五月号）からは、鍋屋次郎が編集長となった。

「まんじ一三三号」（平成二十六年八月号）から、「シアトルと茶道」という随筆で、松下英樹さんが参加された。

「まんじ一三五号」（平成二七年二月）は年の干支も羊に変ったので、表紙も田寺さんの平成二十七年の年賀状の羊の絵に切かえた。

それは七匹の羊が円形に卍の記号を取囲み、その上方にほほえみを浮かべた子ぶったさんが合掌して立っている姿で、そしてその注記は「和して同ぜず」とある。今年度のまんじの同人一同の活動を祝してくれているかのようである。

「まんじ一三六号」で、三十五年の歴史を迎えるに当り、ちょっとその歴史をふり返ってみた。

（平成二十七年三月二十一日記）

彼方のキリスト

新井宏

一、幼児キリスト像

幼い頃、キリスト教の幼稚園に通っていた。それから、私の誕生日はクリスマス・イブである。ただ、それだけことなのに、キリスト教には郷愁がある。

そのひとつが、星に導かれて、東方の三博士が、ベツレヘムに至り、馬小屋でマリアに抱かれた神の子イエスに拝する話である。

おそらく幼稚園の頃、クリスマス会で聞いた話であろうが、不思議なことに、その時にマリアに抱かれたキリスト像を見たような気がする。しかも、そのキリスト像は、あまり可愛くなかった。変なことを覚えているものである。

あるいは後年の記憶が入りまじっているのかも知れないが、最近になって、ルネッサンス期の聖母子像の絵画をいくつか見ても、いつも同じ印象を持つ。私の基準では、幼児は無条件に可愛くなければならないのに、マリアに抱かれたキリスト像は可愛くないのである。

もちろん、可愛くないというのは言い過ぎで、賢い顔、聡明な顔とでも言えばよいのかも知れないが、幼児なのに大人の顔付きをしている違和感なのである。

キリストを崇める立場からは、単に可愛いキリスト像など描くわけには行かなかったのだと思うが、そんな理由なら、いくらでも「解説」があるはずである。

しかし、どうしたことであろうか、それらしい解説がなかなか見つからない。いや、それどころか、マリアに抱かれたキリストが「可愛くない」などと不遜なことを言っている人もいないようなのである。

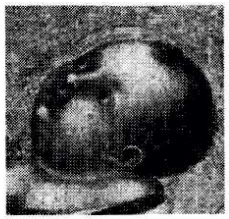
自死直前の芥川龍之介でさえ、遺書代わりに「西方の人」「続西方の人」を著し、愛していたに違いないクリストに感情移入し、「詩人ジャーナリスト」として奔放に描くが、幼児キリスト像については何も触れていない。

そうなると、私の認識が間違っているのか不安になる。

そこで、ルネッサンス期などの有名な聖母子像のキリ

スト像の部分を、インターネットから任意にコピーして五十像ほど集めてみた。

有名な画家としては、十四世紀初のジョット、十五世紀のマザッチョ、フィリップ・リッピ、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン、ボッテチェリ、ラファエロなどを含んでいる。


Lorenzzeti


Giotto


Duccio


Botticelli


Francesca


Massacio


Raffaello


Filippo Lippi


Weyden

その一部分を、ほぼ年代順に並べてみると、おそらく私の見解に同意して頂けるであろう。もちろん、愛らしい天使のようなキリスト像も無いわけではないが、大部分が「可愛らしくない」のである。

そこで、勝手な推測をする。

キリスト教などの一神教は、性善説よりも性悪説に立脚している。幼児のあどけない「可愛らしさ」などを認めていては、性悪説になじまない。しかも、崇める対象は、神々しい叡智を示さなければならない。だからどうしても大人っぽい幼児像となり、無垢の愛らしさから遠ざかる。

そう言えば、聖徳太子の幼児像も、お地蔵さんも「可愛らしい」とは言いがたい。

そこで思い出した、母がいつも言っていた。

「宏が生まれた時に、マメマメしい子だと言われたが、誰も可愛いと言ってくれなかった」と。「おびんずる様」のようだとも言われたらしい。母にとってはかなりのショックだったようである。

ちなみに、インターネットで「おびんずる様」を調べると、原始仏教の神、「十六羅漢の筆頭で、博識で慈悲深く十善を尊重し、説法に優れ、白髪長眉の相があった」と出てくるが、その一方では、酒好きで、神通力を見せびらかしたり、説法では獅子吼のごとく、異論反論を許さなかった、等々とある。

まあ、満更でもないが、赤いエプロンを纏い、黒光りする顔は、やはり怪異で嬉しくない。母がショックを受けたのも無理が無い。

だから、散歩中などで、幼児連れの母親に会うと、「可愛いですね」と声をかけることにしている。もっとも、例外なく本当にみんな可愛いからであるが。

二、聖歌六八七番

母が歌っていた賛美歌らしいのをかすかに覚えている。私が幼稚園の頃のことであるから、母が二十代後半であろうか。曲は良く覚えているが、歌詞はとぎれとぎれで、おそらく次のようなものであった。

まもなく「蒲田」の流れのそばで
楽しく合いましょう「羊飼い」たちと
……
きれいな　きれいな川の……
……
ああ　なつかしや

ただ、耳でなじんでいたたけで、意味など判るはずもなく、「蒲田」とか「羊飼い」などは後の知識で置き換えたものであろう。

その後、わが人生は、キリスト教とは無縁で、その歌が何なのか確かめる機会もなかったが、今はインターネットの世の中。何か判るかも知れないと「まもなくかまたの流れのそばに」と入れて見た。

出てきたのである。その曲と歌詞が。そしてびっくりした。

曲は、なんと替え歌で良く知られている「たぬきの〇〇〇〇」なのである。

たん　たん　たぬきの〇〇〇〇は
風もないのに　ぶーらぶら
それを見ていた　親だぬき
おなかをかかえて　わっはっは

どうして気がつかなかったのであろうか。曲は全く同じではないようだが、確かに良く似ている。私にとって、おそらく人生初めての曲、母が口ずさんでいた賛美歌のメロデーが「たぬきの〇〇〇〇」と同じだったとは何と

も驚き入った。
そして歌詞も次のように判明した。

まもなく彼方(かなた)の流れのそばで
楽しく会いましょう　また友達と
神さまのそばの
きれいな　きれいな川で
みんなで集まる日の
ああ　なつかしや

水晶より透き通る　流れのそばで
主を賛美しましょう　みつかいたちと
神さまのそばの
きれいな　きれいな川で
みんなで集まる日の
ああ　なつかしや

かくして、「蒲田」ではなく「彼方」で、「羊飼いたち」ではなく「御使いたち」であり、歌詞の順番もかなり間違っていたことが判った。
更に、この曲は賛美歌ではなく、聖歌六八七番であることも知った。

しかも、「たぬきの〇〇〇〇」の原曲は、この「聖歌」ではなく、「タバコやの娘」（昭和十二年、作詞：園ひさし、作曲：鈴木静一）として大ヒットした「向こう横町の煙草屋の、可愛い看板娘……」だと言う。
鈴木静一作曲とあるから、聖歌六八七番ではない。曲の一部を借用したとあるが、著作権などに大らかな時代だったのであろうか。それにしても、うろ覚えの「聖歌」と「タバコやの娘」の差がわからない。
私の生まれた年に世に出た「タバコやの娘」は、いまでも、家電量販店ビックカメラや、大阪のカメラのナニワ、アース製薬のアースゴキブリなどのCMソングの替え歌にも使用されている。また、アニメ「ギルガメッシュ」でも歌われていると言う。

母がこの「聖歌」を覚えたのは、おそらく若い頃の奉公先がクリスチャンの家庭だったからであろうかと思う。母の背中で聞いていたような記憶なのであるが、あるいは私がキリスト教の幼稚園に通っていた頃のことかも知れない。

インターネット検索はかくも身近である。旧友の名を入力してみると何か出てくる。昔の恋人でさえも、うまく行けば消息を知ることができる。
長子は父母と一緒に過ごした頃のことは良く覚えているが、父母の幼児期や青春期のことを知らない。末子になると、何か昔話として聞いたようであるが、その点で意外に良く聞いて知っているのは孫の世代である。
わが娘から母のことを聞いて、知ったこともいくつかある。若い頃の奉公先の話も、娘から聞いたのかも知れない。

三、六段の調とグレゴリオ聖歌

「聖歌」といえば、近世箏曲の祖である八橋検校（一六一四～八五年）が作曲した「六段の調」が、グレゴリオ聖歌「クレド一番」に良く似ているという。日本伝統音楽には珍しく「歌詞のない」純楽器的な演奏で、「主題と五つの変奏曲」とでも呼ぶべき形式で構成され、十六世紀スペイン風に呼べば「六つのディフェレンシアス」すなわち「六段」だというのである。
このことに最初に気づいたのは、伝統音楽研究者の田辺尚雄氏らしいが、中世・ルネサンス音楽研究の第一人者、皆川達夫氏がこれを『題名の無い音楽会』で紹介してから、多くの人々に知られるようになった。皆川氏は、我が小山台高校の先輩である。
もちろん、類似性については異論もあるが、八橋検校の活躍した福島県の平市には、バテレンの教会があったと言うので、時代背景としては、あり得たと思う。
隠れキリシタンの伝えた「オラショ」の例もある。元々はラテン語で祈祷文を指すオラシオ（oratio）が、その発音通りに残っていた。
『まんじ』の同人の鍋屋次郎氏も、元治元年（一八六五）、大浦天主堂プティジャン神父の伝える感動的な手紙を、「口のみの伝承二百五十年の奇跡」『史遊会通信』二一八号で紹介している。
親愛なる教区長様、心からお喜び下さい。……昨日十二時半ころ、大人や子どもの男女併せて十数名の一団が、単なる好奇心からとは思われない様子で天主堂の前に立っていました。天主堂の門は閉まっていましたので、私は急いで開けに行きましたが、私が祭壇の方に進むにつれて、それに合わせるようにこの参観者たちも私についてきました。……私が少し祈った後でしたが、四十ないし五十歳位の婦人が私のすぐ傍にきて『ワタシノムネアナタノムネ　ト　オナジ』と、小さな声で囁いたのです。……本当ですか？　しかし、あなたたちは、どこからおいでになりましたか？　と私は尋ねました。私たちは、みな浦上の者でございます。浦上では、殆ど全部の人が、私たちとおなじ心を持っております。それからこの人は、すぐ私に聞きました。『ザンタマリア　ノ　ゴソウ　ハ　ドコ？』、なんとこの人たちは『サンタ・マリア』と言っているのでした。……私はもう、少しも疑いませんでした。私は今、長い間待ち焦がれていたあの日本のキリシタンの子孫を目の前にしているのです。……

『そうだ、本当にサンタ・マリア様だよ！　ご覧よ、ほれ、御子ジェズス様を御腕に抱いていらっしゃる』

二百五十年の時を超えて今、目の前で親しみを込めてサンタ・マリアと御子イエズスの御名を正しく口にしている。

四、『沈黙』と『西方の人』

十五年前に、『まんじ』に参加して、初めて書いたのが「日本近代化の恩人シドッチ」である。

宝永五年（一七〇八）、屋久島の唐ノ浦に、年の頃四十歳、六尺豊かな色白鼻高の異国人が、武士風にさかやきを剃り、羽織袴に二尺四寸余の日本刀を帯びて上陸した。ローマ教皇から派遣されたシチリヤ島パレルモ生れのシドッチである。

シドッチ……その名を知る人は必ずしも多くない。現在の高校日本史の教科書を見ても、約半数がシドッチの名前さえ載せていない。屋久島の観光案内書にも、またシチリヤ島の観光案内書にも、その名を見ない。明らかにキリスト教の殉教者でありながら、ローマ法王庁から聖人として遇されてもいない。

しかし、シドッチが日本の近代化に与えた影響の大きさについては、もっともっと注目しても良いであろう。長い鎖国の状態にあった日本が、中国や朝鮮に比べて、いち早く近代化を達成できたのはなぜか。

それは宣教師シドッチが殉教も怖れず日本に来て、新井白石をして、『西洋紀聞』や『采覧異言』を書かせしめ、それが徳川吉宗の「蕃書の禁の緩和」をもたらし、やがて杉田玄白などの蘭学の隆盛を生み、幕末に至って、大島高任らが独力で高炉を完成する潜在能力をもたらしたのである。そんなことを、『まんじ』のデビュー作で書いた。

ところで、そのシドッチに先立つこと、六十有余年、島原の乱が収束して間もないころ、シドッチと同じくシチリア島パレルモ生まれの宣教師キアラが、師であり高名な神学者であるフェレイラの棄教を信じられずに、日本に潜入してきた。このキアラを主人公としたのが遠藤周作の『沈黙』である。

神の栄光に満ちた殉教を期待して牢につながれたロドリゴ（キアラ）が聞いたのは、拷問され続けている信者のうめき声であった。すでに棄教を誓っているのにロドリゴが棄教しない限り許されないとフェレイラは言う。ロドリゴはひたすら神に祈るが、神は「沈黙」を通すのみ。究極のジレンマを突きつけられたロドリゴは、フェレイラが棄教したのと同じ理由で、ついに踏絵を踏む。

『沈黙』は、戦後日本文学の代表作であるばかりでなく、

キリスト教文学としても高く評価されているという。シドッチを追いかけていた頃、長与善郎の『青銅の基督』と共に『沈黙』を読み、遠藤周作に圧倒された。韓国の国立慶尚大学に居たころ、親しくなった日本語学科の金女史の卒論研究が「沈黙」であったことで、共に語った記憶も懐かしい。

そう言えば、昔、芥川龍之介の『侏儒の言葉・西方の人』を読み、ただただその「才能」に呆れていた。いま再び読み、『続西方の人』が自死の直前の遺書であったことを知った。

芥川龍之介は、明治二十五年（一八九二）年、東京市京橋区入船町八丁目で誕生した。父の新原敏三は、外国人の多く住むその地で、耕牧舎を経営し、牛乳、バター、チーズなどを製造・販売していた。ちなみに耕牧舎は、渋沢栄一が箱根仙石原に乳牛牧場を作ったのが始まりという。

龍之介は出生直後、父四十三歳、母三十三歳で、共に厄年という「大厄」のため、家の筋向いの教会の門前にいったん捨てられ、父の友人に拾われる。しかも生後七ヶ月の時に母が精神の異常をきたし、母の実家の芥川家に引き取られている。だから、この教会についての記憶などないはずなのに、古びた煉瓦の壁や、やさしい歌声、薄暗い部屋のつきあたりに黒い髪の女の大きな額などを覚えているという。

そのことが、龍之介のキリスト教への関心と無関係ではないであろう。幼児体験とはそんなものだと想う。

彼の超短編小説に「じゅりあの・吉助」がある。

浦上村の出身の愚鈍な吉助は、主人の一人娘、兼に懸想したが、かなわぬ恋のため、出奔してキリシタンとなり、舞い戻って、結婚して幸せに暮らしている兼に対して、飼犬よりもさらに忠実に仕えていた。

しかし、挙動に不審なところがあり訴えられ、奉行所の尋問に「えす・きりすと様、さんた・まりあ様に恋をなされ焦れ死に果てさせ給うた」と述べている。

キリストの母サンタ・マリアをキリストの恋人に描くところに、龍之介の生母への想いがあるように思う。

その終句で、龍之介は吉助を「日本の殉教者中、最も私の愛している、神聖な愚人」と言う。

来たれ、市民農業者たち！
～市民農業者塾の開設～

古屋富雄

「自給自足をしたい」、「農ある暮らしをしたい」、「田舎暮らしをしたい」など農業や農村に魅力を感じている人が、若い世代を中心に増えていると感じます。

しかし、「農業をしたいから、農地を借りたい」と、市町村の農業委員会や市役所などを訪ねても、「農家ではないため、それはできません」と、断られることが多いと思います。

基本的には、行政の対応に不備はないと考えます。

平成21年12月15日に改正された農地法では、1、000㎡以下の小規模の農地でも、その下限面積を別段として定め、農家以外の人も、農地を借りることができるようにしています。

この場合、農地の貸し借りだけではなく、所有権の移転も可能になり、その責任は、農業委員会が負うことになります。

従って、行政側では、そのことをリスクとして捉えてしまうようです。

しかし、南足柄市の農業委員会には、誰でもが農業をすることができ、農家になることもできる「新たな農業参入システム」を創り、農業を担う裾野を広げようとしています。

農地の貸し借りについては、権利の移動が伴わない農業経営基盤強化促進法により、その利用権の設定を行うこととしています。

農家になりたい人は、農家資格を得ることのできる耕作面積が10アール（1、000㎡）以上の「南足柄市新規就農基準」（平成20年10月1日施行）、自給自足程度の農業をしたい人は、耕作面積が10アール未満300㎡までの「市民農業者制度」（平成21年9月1日施行）を選択して、申請をします。

これらの新規就農希望者は、農業委員会が定めた就農計画書（農家になるための計画）や営農計画書（農業をするための計画）等を作成し、毎月の月末に開催される農業委員会の総会の席で、新規就農者や市民農業者になるためのプレゼンテーションに臨みます。

そして、地域の農家やＪＡ、議会などから選出された14名の農業委員さんにより、就農計画書や営農計画書などの資料に基づいた質疑応答が履行され、新規就農者や市民農業者の合否がなされます。

その後、農地の借り受けの申請となります。貸し借りの農地バンク情報については、農業委員会事務局にもその用意があります。また、農業委員さんからの情報提供もあり、その中から、希望する農地を探すことは可能です。

現在、南足柄市の「新たな農業参入システム」により、新規就農者14名、市民農業者４名が誕生しています。しかし、市の農業の担い手や理解者になる人数には、ほど遠い数です。そこで、この仕組みを立案、施行した私が先頭になり、地域や行政と連携が図られた市民農業者等の育成を目指すため、南足柄市塚原のＴＯＭＩＯファーム及びユートピア農園を拠点にした「市民農業者塾」を次のとおり、開設しました。

目　的

○担い手がいない耕作放棄地（遊休農地）の解消に取り組み、新しいライフスタイル「農ある暮らし」を目指す市民参加型の農業者塾の開設により、共に支えあう農村コミュニティを創造すること。

心　得

○市民農業者等が借り受ける農地は、原則、耕作放棄地（遊休農地）とし、自らが額に汗してその解消に取り組む。

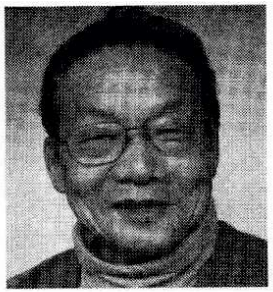
○耕作放棄地の解消を地域への社会的貢献と義務づけ、その「見える化」を図ることにより、地元農家などの信用・信頼を確実なものにする。

年　齢

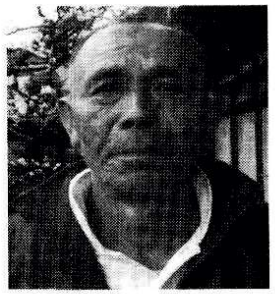
○20歳から65歳程度とし、男女は問わない。

サポート体制

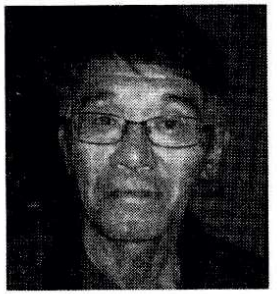
○次の４名のプロフェッショナルな農家が、農地の紹介や農業指導、地域への理解など責任を持って支援する。



元ＪＡ理事　生沼　仁



農業委員会会長　石川　栄



古屋治平農園代表　古屋　治平



ＴＯＭＩＯファーム代表　古屋　富雄

開設日
○平成26年4月1日
代表者
○ＴＯＭＩＯファーム代表　古屋　富雄

この塾の開設と塾生の募集について、2社の新聞に掲載され、次の4名の塾生を受け入れることになりました。用意した約3、000㎡の耕作放棄地を4等分し、平成26年5月早速、作業が開始されました。

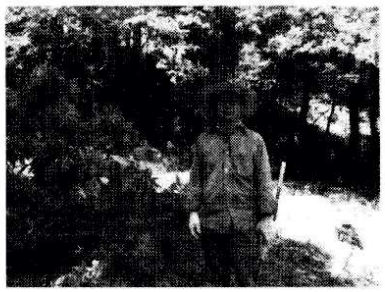
20年間も耕作が放棄された畑は、雑木や蔦、雑草が生い茂る山林・原野に変貌していました。

塾生の心得である※農地は、原則、耕作放棄地（遊休農地）※地域への社会的貢献の「**見える化**」の実践を掲げた取り組みがスタートした瞬間でもあります。

市民農業者塾の４人の塾生が作業を開始　H26年5月17日



川崎市から恩田さん



大磯町から石田さん



小田原市から福原さん

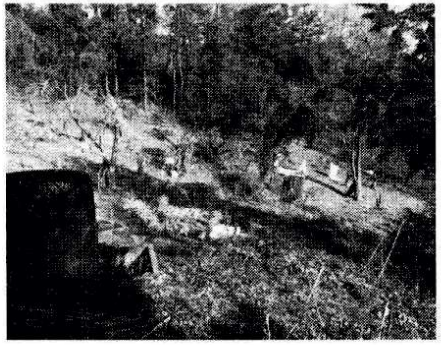


南足柄市から前田さん

そして、８カ月が経過しました。



解消前



解消後

綺麗になった畑には、ニンニクやそら豆、サヤエンドウなどが作付けされ、春の収穫を待ちわびています。



ニンニク



そら豆、サヤエンドウ

また、この塾では**「畑の管理は山菜まかせ」**という自然栽培に近い農法の実践も取り入れおり、山菜の種類や野原での確保に役立てようと、畑の一角に山菜のモデルほ場を設置しています。



モデルほ場には、ミョウガやウド、ワラビ、フキ、タラなど多くの山菜が植栽されています。

平成27年2月、島根県農業会議の依頼により「遊休農地解消実践研修会」に参加することになり、その基調講演と事例発表を塾生の前田さんと一緒にすることになりました。会場は出雲市に近い石見銀山で有名な大田市の「あすてらすホール」で開催されました。

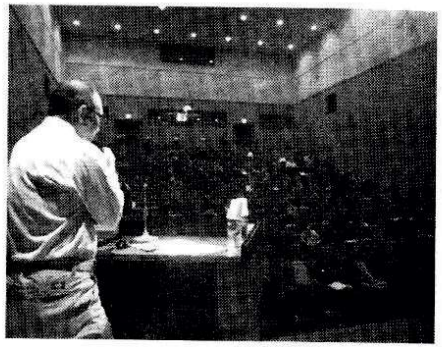
私の演題は「遊休農地を活用した担い手の発掘・育成の取り組み」そして、その事例発表を前田さんが行いました。

塾の取り組みが、島根県の参考になればと思うと同時に島根県の農業振興に役立つ、儲かる農作物の紹介を織り込んだ講演に、多くの方が耳を傾けてくれました。

また、前田さんについては、初めての事例発表で大変緊張したとのことでしたが、塾での経験を自然体で発表できたと感じました。



基調講演



事例発表

近年、大都市への一極集中により、利便性の高い都市での生活や経済優先の市場原理の社会に疑問を持ち始めている人が、頻繁に私のもとに訪れてきます。「自給自足をしたい」、「農ある暮らしをしたい」、「田舎暮らしをしたい」などを希望する市民です。

今、農業は、農家や農業関係者だけで担う時代は終わりかけています。誰でもが農地を借りることが出来る、農業を支える仕組みを国策として行う時代が来ていることを改めて実感した**「来たれ！市民農業者たち」**です。

※参考

耕作放棄地とは？　過去1年以上作物を作付していない農地(農林業センサス)での用語

遊休農地とは？　1年以上耕作されておらず、今後も耕作される見込みのない農地(農地法や経営基盤強化促進法など)の用語であり、耕作放棄地と遊休農地は、同じ意味と解釈してよい。

日本の学校を世界一へ

幸山周平

第一章　忙しい教師たち

また職員室の電話が鳴りました。

「大変です。子供が暴れています」

背広をつかむとドアのほうに飛び出していきました。職員室を飛び出した数名の中の一人が、

「教師には人権がないのか」

うめくようにつぶやいて走っていきます。

昨日、六年生の教室で一人の子がカッターナイフを持ってケンカをしました。それを止めに入った担任の先生が、手のひらを大きく切られ出血しました。隣のクラスの先生が止めに入り、肋骨に膝蹴りを受けながらも取り押さえました。二人の教師はその子の将来を考えて、警察沙汰にはしませんでした。子供には人権があるのですが、教師にはありません。

今日のクラスは、三年生です。教室にたどり着くと、女の担任がオロオロとして、

「出て行ってどこにいるかわかりません」

と答えたので、手分けして探すことになりました。校門の外は国道で、激しい車の往来があります。児童の自宅までは結構な距離があります。私は、陸橋を渡って児童の自宅を目指していました。その時です。職員室から携帯に電話が入りました。幸い校外には出ず校舎裏の側溝で、トカゲを捕まえていたということでした。

おちおち職員室で仕事はしておれません。こういう事件があると職員室はいつも空になります。教頭先生も教務主任も飛び出していき、校長先生が残るのみとなります。

三年生の児童には発達障害があります。ここ十五年激増しているような印象があります。三十年以上前にはなかった光景です。その頃は、一年生でも四十五分間席にきちんと座らせている事は、そんなに難しい事ではありませんでした。学年に知的障害の子が一、二名いる程度で、教室に障害のある子がいないクラスと言うことも普通にありました。当時の子供たちは、学校で先生に叱られると、家でもう一度親に叱られました。

「先生はあの子を贔屓して俺だけしかった」

などと言おうものなら、

「先生がそんなことをするわけは無い。お前の方にもきっと悪いことがあったに違いない」

と叱られたものです。

ところが、現在では

「そんなひどい先生なら親の私が代わりに文句を言ってやる」

と電話をかけてくる始末です。ですから、学校で嫌なことがあると、先生を簡単に売って、憂さ晴らしをする子供が絶えません。

十五年くらい前に、いったい何があったのでしょうか。私の記憶では、クレームを言ってくる親が増えてきました。それとともに、体罰をする教師が急速に減りました。産婦人科の方でも、カンガルーケアと完全母乳が叫ばれ始めた時代でもありました。

(1)発達障害児の増加

今日、発達障害の子はクラスに二～六名ぐらいいます。一名くらいですと、対応は楽ではありませんが、教師とその子の一対一の対応でなんとかできます。しかし、二名以上になると、現場では化学反応と呼んでいるのですが、とても無理なことが起きてきます。障害のある二人が喧嘩したり、つるんだりして、周りに影響を与えはじめるのです。しかし、人権の大事な時代ですので、周りの子にわかるように、その子たちを特別扱いすることはできません。きちんとした理由付けがなければ、危なくてしかたありません。どうしても、指導が生半可で、いつまでたっても良くならないのが普通です。周りの子と担任が、暴言や暴行・離席にひたすら我慢しているか、その子が座っていても、手遊びで授業を受けてないか寝たふりをしている、という教室ばかりです。

なぜ、このような発達障害の子が増えたのか、現場の教師の間では話題になりません。たとえわかっても、あまり役には立たないからです。現実の対応をしなくてはならない教師は、対処法を知りたいと思うばかりです。

ただ、これ以上の困難を教室で受け入れたくはないので、原因となる事柄について明らかにしておこうと思います。

まず、三十年前と現在とでは、構成メンバーの変化があるように思われます。わかりやすく言うと、高学歴の男女が独身を貫き、その人たちの子供が少ない。反面、マイルドヤンキーと言われる人たちが、過去と同じよう

に子供達を学校に送り出している。そのため、構成員としては、三十年前よりマイルドヤンキーの子息が多いということです。模範となる児童の減少と、躾のゆるい子供たちの増加が、教室の規律をゆるいものにしている可能性はあります。少子化の影響の一つです。

次に、医学の進歩があげられます。本来であるならば生まれてくることができなかった超低出生体重児が、助かっています。そのこと自体はすばらしいのですが、この子たちが高い障害の確率を持っていることも否めません。

また、カンガルーケアと完全母乳が障害を引き起こしていると証言する、久保田産婦人科麻酔科医院の久保田史郎院長もいます。

生まれた直後は温かい母親の胎内（約三十八℃）から、突然に十三℃も低い外気（約二十五℃）に触れ、赤ちゃんは低体温症のリスクにさらされている。そもそも、「健康な赤ちゃんは冷たい外気に触れても何のリスクもない」と考えるのが大間違い。平均三十八・二℃で生まれてきた赤ちゃんを、出生直後から「保育器」に入れ、最初の一時間は三十四℃、次の一時間は三十℃と、徐々に外気温に慣らしていくのは、胎内から胎外生活への赤ちゃんの適応をサポートするためには、当然のケアであるとの説明です。

また、完全母乳も、低血糖症による障害を引き起こしていると説明をされる。産後二十四時間以内は、母乳はにじむ程度しか出ていません。完全母乳の赤ちゃんは生後三日間はまさに飢餓状態です。その証拠に、完全母乳の赤ちゃんは栄養不足と脱水のため体重が著しく減少します。体重減少が十%以上の赤ちゃんは、飢餓状態（栄養不足＋脱水）と考えるべきです。糖水・人工ミルクは、赤ちゃんを発達障害から守るワクチンと考えています。赤ちゃんの栄養不足を人工ミルクというワクチンで補うことによって、発達障害児の危険因子である、低血糖・重症黄疸・脱水・脳出血を完全に防ぐ事が出来るからです、とも言われる。十五年前に始まったカンガルーケアと、完全母乳も、障害児増加の一因かもしれないのです。

さらに過去三十年来、日本では赤ちゃんの出生時の体重が低下してきています。「母子保健統計の主なる統計」（母子衛生研究会編）よれば、一九八〇年には出生体重の平均値は男児が三一三〇g、女児が三一四〇gでした。その後、出生時の平均体重は次第に低下し、二〇〇七年では男児が三〇五〇g、女児が二九六〇gとなっています。そして、出生体重が二五〇〇g未満の低出生体重児が増加しています。一九八〇年には五・二%であったのが、二〇〇七年では九・六%に達している低出生体重児の増加の原因として、これまで若い女性のやせ願望の強さ、食生活の貧困、喫煙、妊娠中の母体の体重増加に対する産婦人科医や保健師の体重抑制の行き過ぎた指導など、

が指摘されてきました。

(2)モンスターペアレントの出現

クレイマー、現在ではモンスターペアレントと呼ばれることが多いですが、教師からするとまさに恐怖の存在です。

担任が授業していても電話してきます。母親は、今から勤め先に行くので忙しいので電話口に担任を出せ、といいます。職員室でも母親の剣幕に、担任にとっても解決が早いほうがいいだろうと、電話をつなぎます。繰り返しますが教師には人権がないのです。授業というものは、医者で言えば手術中です。オーケストラで言えば指揮棒を振ってる最中です。子供たちは、今まさに「直角」とは何ぞやと言う事を覚えようとするその時です。電話に呼ばれるのです。

最大の被害者は子供たちです。覚えの悪い子はこの瞬間、直角という概念を見失います。そんな大事な時でも、モンスターペアレントはお構いなしで電話してきます。受けた担任は、気もそぞろになり、まともな授業はできません。これが、心臓の手術中だったら、その患者は助かりません。覚えの悪い子は、直角がうまくわからず授業を終えます。繰り返しますが、教師には人権がないのです。

いったいどのようなクレームが来るのでしょう。

「先生は、うちの子のお茶をA君に飲ましたそうですね。うちの子のお茶はA君に飲ますために作ったのではありません」

「習字道具を隣の子に貸すのを許したそうですね。墨汁液が減ったじゃないですか。」

「先生は、明日国語の教科書がいると連絡をしなかったというのはどういうことですか」（日課表を見ればわかるのですが、毎日国語はあるので大概の子は、いわれなくともわかっている）

「うちの子が先生の大声が怖い、といっている」

毎年このような親に出くわすのが慣例になっています。教師もこんな理不尽な親子には、あまり関わりを持ちたくない、と思うようになります。

そのことが、「某市立中学校生徒の転落死に関わる検証委員会」に書かれています。この事件は、二〇一三年七月十日、某市立X中学校二年生のマンション十一階からの転落、犯罪性はないとされた自死事件です。A生徒とBはよく言い争いをして、Aは虐められていた。Bは、担任の教師に対しても、授業中必要のないことを調子に乗って次々に話し、担任がそれを聞かないと、いじけてしまう。教師も普段からBの対応に苦慮し、言い争いの時は、Bはやっかいになるので、Aにだけ「無視しなさい」と指導して、やりすごそうとしていた。

ある日、CはA生徒に（Bがいつもいっていたように）「キモイ」と言い、争いになった。Cが「うっさい、死ね」と言い、A生徒が「自殺すればいいんですか」と言ったところ、それを聞いていたBが、「Aが死ぬらしいぞー」と大声で言った。帰りの会でもBとCに「死ね。死ね」といわれ、Aが「じゃ、今日死ぬわ。」と言い、本当に死んでしまった。

言うことを聞けないBのような生徒に、教師は常に苦慮しています。体罰はできない。クレームが怖い。すねられ、授業妨害されると困る。そのようなB的存在を叱れないために、Aのようないい子に頼ってしまう。あなたならわかるでしょと。そして、悲劇は生まれる。

この危うさは、日本国中どこの教室にもあります。

(3)教師の懲戒権のなさ

昔の教師は、駄目な子を叱ることも、駄目な親すら、叱ることもできました。しかし、今は、言うことを聞かない子たちを叱るときに、配慮しなければならないことが増えすぎました。気にくわないと思ったら教師を裏切る子供たち、クレームをつける親たち、指導の難しい発達障害の子たち、躾のなってない子たち、家庭で叱られたことも、兄弟げんかをしたこともない子たち。

静かにさせれば、発達障害の子もそれなりに勉強できるのですが、一クラス三十五人もいる中で、プレゼンのできる子だとか、おもしろい授業だとか、行儀が悪くなる授業ばかり行なわなければならないカリキュラムです。それには、せめて二十人にしないと無理でしょう。一クラス五十人の時代もありましたが、その時代には体罰もありました。普通の教師で、体罰と暴力の違いのわからない人はいません。教員社会にも、どこの社会、会社にでもいる一部の変人がいますので、マスコミにやり玉に挙げられてしまうのですが、もう一つ教員の特徴は、文句をあまり言わないと言うことでしょう。そのため、体罰という教員には、子供と戦う武器がなくなり、「殴れるものなら殴ってみろ。体罰だ」と脅す子供もでる世の中になりました。

教員には人権がないのです。ですから、教員で夜の九時頃に退校する教員は普通で、学級経営に困っている若い教員などは、子供を飽きさせない授業作りのために、十一時下校は当たり前で、十二時を過ぎることもあります。ですから、行事や懇談会の前などは、職員室はマスクをした先生たちが咳をあちこちでして、病院の待合室状態になります。

ブラック企業という言葉がありますが、新任教師も最初の端は、「教員はブラック企業だ」と言っているのですが、やがて言わなくなります。するとベテランの教師は、あの子も「魔法の薬」を飲んだかと思うのです。そ

の正体は、子供の喜ぶ顔です。これを味わうと、十二時までも平気で残業をしてしまいます。反抗する子にも「いつかわかってくれる」と思い、世間の教員批判にも我慢してしまいます。日本の教員は、子供の笑顔から元気をもらい、どんな苦労にも我慢できるのです。子供は本当にすばらしいものなのです。

しかしそんなにがんばっていても、クレームの電話はかかってきます。

体罰と、少人数学級を、一体改革しなければならなかったのに、我慢強い日本の教員にすべて頼り、体罰だけをなくしたことが、今日の混乱を招いています。

世界の中でも体罰のある国が結構あることに驚かされます。アメリカでは州によって違っていて、体罰を認めている州は以下の通りだと言うことです。

体罰が認められている、州をあげてみます。

アラスカ、カリフォルニア、コネチカット、ハワイ、イリノイ、アイオワ、メーン、メリーランド、マサチューセッツ、ミシガン、ミネソタ、モンタナ、ネブラスカ、ネバダ、ニューハンプシャー、サウスダコタ、ユタ、バーモント、バージニア、ワシントン、ウエストバージニア、ウィスコンシン等です。二十七州で、アメリカの州の半分の州で、公に学校での体罰は認められているということです。

イギリスでは一九八九年に、公立学校で学生に体罰を禁止する法律が通過しました。二年後、私立学校まで拡大して、一九九八年には校外まで拡大して、親も学生に体罰を加えることができなくなりました。しかし二〇〇一年十一月に四十余りの学校の教師と親たちは共同で最高裁判所に願いを申し出て、体罰を回復することを求めました。

彼らの理由は、体罰を禁止したことは学校の規律を下がらせ、その上体罰をすることは、「聖書」の教えと合うということです。そこで、二〇〇六年四月から、イギリスは「二〇〇六年教育法」を公表して、イギリスの教師は、不まじめな学生を懲戒することができる法的な保障を獲得しました。新法が発効した後に、教師は学校で、体を使って学生のけんかを阻止する権力を獲得して、親の許可がなくても学生に対して、放課後、または週末に、学校に残すことを認めました。

新法が実施した後、地方の教育部門は、具体的な要求を定めました。例えば、鞭あるいはベルトは必ず認可を経なければならなくて、懲罰の記録をつくり、八歳以下の児童に体罰をすることを禁止して、手の平を打つ時、両手は三回を超えてはならなくて、男子学生のお尻を六回越えた叩きはできません。

韓国は、二〇〇二年六月二十六日に、教育人力資源部は「学校生活規定案」を公表して、教師が規律に背く学生に対して体罰をすることができる、と定めました。ま

た同時に体罰を行うに当たっての、具体的で細かな規則を定めました。

中国については、儒教の流れといろいろな文化背景から、体罰は容認されています。

かつてヨーロッパの国々では、「学校へ行くこと」と「むち打たれること」は、同義であるといわれていました。体罰の方法は、杖やむち、平手打ち、など過酷なものが多く、打撲傷や出血を伴うのが普通であり、なかには死に至るものもあったようです。ヨーロッパの教育の歴史において、体罰に反対する声はほとんどなく、ペスタロッチやルソーなどでさえも、体罰を容認していました。体罰の思想的背景として、『旧約聖書』の思想や、カルビニストたちに代表される原罪思想（神の掟に背いた人間は堕落し、悪魔の支配を受けるようになったという思想）があります。この思想の下に、子供の矯正の手段として体罰などが正当化されてきたのであります。また日本でも、一般的には体罰が広く行われていました。このように、体罰とは世界の歴史のなかで、子供を矯正し、しつける、重要で有効な手段として、広く用いられてきた両刃の剣であるといえます。

しかし、フランス、ドイツ、スペイン、ポルトガルなどのヨーロッパ大陸諸国、その植民地であった中南米諸国の学校、アメリカでもニュージャージー州をはじめとする北部の州では、体罰が禁止されています。これらの諸国でも体罰は古くから行われていましたが、十九世紀後半以来の人権思想やヒューマニズム的教育思想の高まりに伴い、しだいに体罰を禁止し、今日に至っています。そのほか、イスラム教の諸国、イスラエルなどでも体罰は禁止されています。

体罰を禁止した国の多くが、少人数学級を行っていることは注目に値します。日本は国の学級編制の基準（一学級の子どもの上限数）が、四十人です。文科省の「教育指標の国際比較」（〇九年）によると、米国の学級編制基準は、小学三年までは二十四人、六年までは二十九人（ケンタッキー州）、ドイツは小・中学校で三十人（ノルトラインウェストファーレン州）、などとなっています。日本は先進国中でも、遅れたクラス人数が続いています。

世界の一学級あたり児童生徒数（二〇〇九年・国公立・初等教育）を見てみます。

OECD各国平均	二十一・四人
オーストリア	十八・八
デンマーク	二十・〇
フィンランド	十九・八
フランス	二十二・六
ドイツ	二十一・七
イタリア	十八・七
日本	二十八・〇（三十か国中二位）
韓国	二十八・六（三十か国中一位）
メキシコ	十九・九
オランダ	二十二・四
スペイン	十九・八
スイス	十九・四
イギリス	二十五・七
アメリカ	二十三・八

体罰のないドイツ・フランスが、二十一人、二十二人で、体罰のある韓国・イギリスが二十八人、二十五人と多いのが目立ちます。

(4)教育改革の選択肢

イギリスが体罰を復活させていることや、アメリカの半分の州が体罰を行っていることは驚きです。

体罰には暴れている子を三秒で正気に戻す力があり、十秒で周りの空気を変える力があります。効率的に授業を進めるには、役に立つものです。また、外交における武力のように、使わずともやるぞと見せかけるだけで、暴れる子を抑止する力もあります。クラスの安心・安全のためには有効です。しかし、人権の大合唱の前には、体罰復活は現在の日本では力が弱いように思われます。

むしろ、教師の言うことを聞かない児童による周りの子の学習権の侵害や、教師の授業中でも電話して授業妨害する、クレーマーの存在が問題です。教師の学習「指導権の侵害」を防ぐ法律、の制定こそ大事です。

①三十五人学級の継続と、イギリスのように体罰の復活
②十八人程度の少人数学級と、体罰の禁止の継続
③三十五人学級で、TTや少人数指導を増やす
④学習指導権の侵害禁止を条例化し、クレーマーや授業妨害の児童を罪に問えるようにする

以上のいずれかの方法でやることが大事と思われます。

第二章　日本の教育の成果

日本の教育は世界に誇る成果を上げています。しかし、それはいつ壊れても仕方ない、教師の犠牲の上に成り立っています。教育こそ日本の資源です。ここに、ヒト・モノ・カネをかけて、イノベーションを興していくことが一番大事です。

(1)犯罪の少なさ

教育の成果の中に、犯罪を起こさない国民作りというものもあると思います。

韓国で作られた「OECD主要国別の犯罪件数」という資料があります。殺人の欄を比較すると、十二カ国中、

一番少ないということからも、日本人が世界の中でいかに道徳的であるかを証明しています。慰安婦問題との絡みで、韓国の「強姦」の欄と日本のそれとを比較すると、日本が十万人あたり一・一件にたいし、韓国は、十三・五件あります。韓国の性犯罪を犯しやすい国民性というものが、透けて見えるように思います。

犯罪を犯さない国民性というのは、家庭教育・学校教育・社会教育・マスコミやネットなどの情報環境・地域社会や地域の仲間などの、なせる技だと思います。学校教育が、このことに寄与していることは、疑いのないところです。

(2)学力世界一

学力の問題を考えてみたいと思います。

ＯＥＣＤが実施する、大人の国際学力テストともいえる成人スキル調査（文科省の命名では国際成人力調査、略称はＰＩＡＡＣ調査）の、最も基本的な平均得点の結果を見てみましょう。二十四か国・地域において、約十五万七千人を対象に実施しているので、一国当たり平均では七八〇〇人程度が対象です。

テストは、読解力と、数的思考力と、ＩＴ活用力、の三点にわたっています。結果は、日本人が世界一の能力をもつことを示す得点でありました。日本人が大いに自信を深めるに足る結果だったといえましょう。

報道（二〇一三年十月九日）では、日本がトップの理由として、文科省の推測や分析が多く引用されています。「義務教育などの成果に加え、企業の人材育成や個人の生涯学習の積み重ねの結果だろう」（東京新聞）、「日本人は新聞や雑誌を読む人が多いことや、買い物の時もレジでおつりを考えて支払う人が多いことなどが影響している」（毎日新聞）などです。

個々人の能力の高さもさることながら、日本語の場合、ローマ字のみの表記の言語と異なって、漢字、カナ（ひらがな、カタカナ）、ローマ字が交じった文章なので、内容を読み取る苦労がそれほど要らず、意味が一目で即座に分かってしまうという、表記上の優位性があるのではないかと感じてもいます。

各国の結果をざっと概観すると、フィンランドが日本に次いで両方とも第二位となっており、また上位に、オランダ、ベルギー、スウェーデン、ノルウェーなど、北欧や、西欧北部の国々が多い点が目立っています。

逆に下位の方には、フランス、スペイン、イタリアといった、ラテン系諸国が陣取っている点が目立っています。米国もどちらかというと、低い方に属すると言えます。

これまでの結果を考察すると、読書や蔵書数で、暖かい南欧が低く、寒い北欧が高いという、一般傾向があります。テストが書き言葉によっている限り、頭のよさというより、書き言葉にどれだけ親しんでいるかが、結果に影響を及ぼしているのでしょう。

この調査の結果は、他にも、若者と中高年の格差が日本は小さい（一方、韓国は極端に大きく、若者だけだと日本とそれほどの差がない）点、また、学歴による階層間格差が、日本は小さい、男女格差は大きい、といった興味深い点があります。

欧米の場合、移民を除くと結果がかなり違うという点は、誰でも気になることです。読解力では日本は相変わらず一位であるが、数的思考力では、移民を除くとスウェーデンに次ぐ第二位という結果であります。移民の影響はこの程度だということが分かります。

対象二十四カ国を、読解力の高い順に掲げると、日本、フィンランド、オランダ、オーストラリア、スウェーデン、ノルウェー、エストニア、ベルギー、ロシア、チェコ、スロバキア、カナダ、韓国、英国、デンマーク、ドイツ、米国、オーストリア、キプロス、ポーランド、アイルランド、フランス、スペイン、イタリアです。（二〇一三年、十月十七日坂村健氏引用）

(3)世界一格差のない日本

成人スキル調査（文科省の命名では国際成人力調査、略称はＰＩＡＡＣ調査）得点分布を、最高点と最低点を、各国毎に一本の縦棒グラフにして、国民の間の知力格差の程度を見てみましょう。

一見して日本は、他国と比較して、全体に、上方に位置しているとともに、最下層とトップ層との間の得点差が、小さいことが分かります。

五十パーセンタイル（中央値）だと、一位の日本は二位のフィンランドを八点上回っているに過ぎないが、最下層だと、二位のチェコを二十三点も上回っています。

トップ層の得点だけで比較すると、日本より高い国はありますが、最下層の得点の高さはこのように図抜けて世界一であり、こうした底上げされた均質性が、得点ランキングで見た日本人の平均得点の高さにむすびついているのです。

なお、両親の学歴の程度による得点差では、米国、ドイツが非常に大きいのに対して、日本の場合は、非常に小さくなっており、社会階級が固定的でなく、流動的だと考えられる点も、日本の格差が小さいことを示すひとつの特徴となっています。

(4)子供の学力比較

ＯＥＣＤでは世界の十五歳児童を対象に学力（学習到達度）に関して、実際にテストを行う調査を3年ごとに行っています。この結果は、自国の学力レベルに関心を持つ各国国民の関心の的になっているので、紹介することとします。

分析対象国は、読解力の高い順に、上海、香港、シンガポール、日本、韓国、フィンランド、アイルランド、台湾、カナダ、ポーランド、エストニア、リヒテンシュタイン、ニュージーランド、オーストラリア、オランダ、ベルギー、スイス、マカオ、ベトナム、ドイツ、フランス、ノルウェー、英国、米国、デンマーク、チェコ、イタリア、オーストリア、ラトビア、ハンガリー、スペイン、ルクセンブルク、ポルトガル、イスラエル、クロアチア、スウェーデン、アイスランド、スロベニア、リトアニア、ギリシャ、トルコ、ロシア、スロバキア、キプロス、セルビア、アラブ首長国連邦、チリ、タイ、コスタリカ、ルーマニア、ブルガリア、メキシコ、モンテネグロ、ウルグアイ、ブラジル、チュニジア、コロンビア、ヨルダン、マレーシア、インドネシア、アルゼンチン、アルバニア、カザフスタン、カタール、ペルーの六十五カ国です。

二〇〇〇年から二〇一二年まで、日本の状況を分野ごとに概観してみます。

二〇〇〇年調査に関しては、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの、すべてで順位が低下し、マスコミでも危機感をもって大きく報道されました。

二〇〇九年調査では、日本の順位が回復し、教育界の努力が実ったともみなせますが、なお、学力格差が解消していない点が指摘されました。また、新たに参加した上海、シンガポールを含め、アジア勢が上位を独占した点に注目が集まりました。

二〇一二年調査では、日本の順位のV字回復が注目され、ゆとり教育の見直しの効果があらわれたとされました。新たに加わったベトナムを含め、アジアの儒教圏諸国の好成績が、相変わらず目立っています。

なお、ＯＥＣＤ加盟三十四カ国中で、日本は、数学が二位、読解力と科学は一位とトップクラスであり、成人テストの結果と整合的でした。

二〇一二年調査の結果は、国際的には、アジアの上昇と北欧（特にフィンランド）の低迷が、対照的となった点が指摘されています。また中国と対比した米国の悲惨な状況で、「一九五七年のソ連のスプートニク打ち上げの時の様なショックによって、新たな動機づけが生じることを期待する者までいる」という（The Economist December 7th 2013, "Finn-ished"）。ベトナムが科学的リテラシーでいきなり八位となるなど、途上国の割にドイツ並みか、それ以上の高い得点を記しているのも注目されます。高学力には、「熱心な親たちも助けになっています。ベトナムの親たちの半分は、子どもの学力向上を見張るために、教師との定期的なコンタクトを持ち続けています」という声もあります。

(5)日本人の潜在能力

ここまで日本人の学力の結果を見ると、どうしてもその潜在能力を明らかにしたくなります。

タイのタンマサート大学が運営するフェイスブックページ「ＡＳＥＡＮ　ＤＮＡ」が、このほど発表した「東南アジア諸国の平均知能指数（ＩＱ）」に関する調査結果によると、世界の平均値八十四・三、東南アジアの平均値九十一・三であるということです。その調査に日本も出てきて、日本百十、韓国百六、米国九十八、中国九十八などとなっています。ちなみに、東南アジア諸国の平均知能指数ランキング上位十か国は以下の通りです。

一位：シンガポール　百三
二位：ベトナム　九十六
三位：マレーシア　九十二
三位：ブルネイ　九十二
五位：タイ　九十一
六位：カンボジア　八十九
六位：インドネシア　八十九
六位：ラオス　八十九
九位：ミャンマー　八十六
九位：フィリピン　八十六

ドイツでも、世界のＩＱについての研究がありました。ドイツの報道によれば、日本人というのは世界でもっともＩＱの高い民族なのだそうです。平均でＩＱ百十五、ＩＱ百三十以上の人が十％もいると言われてます。

ちなみにドイツ、韓国、アメリカでは、ＩＱ百三十以上の人は三％しかいないそうです。なぜ日本人はそんなに賢いのか？どうやら日本人は昔から魚を食べてきて、その魚の中に含まれるＤＨＡが頭を良くしているらしいとのことでした。ＩＱ百三十以上という存在は、高値異常者ともよばれ、フランスでは学級に不適応を起こして自身の能力が発揮できない存在としてしばしば問題になったりします。日本では問題になりませんが…。

ＩＱというのは潜在能力の一つの指標ですので、これをもって日本人は優秀と言うことはいえませんが、学習上はとても有利なのです。

日本が明治以降、学校教育に心血を注いだのは、まさに日本人の長所を生かす点で理にかなっていたのです。しかし、今の教育は、教師の犠牲の上に栄光が作られてきた結果であって、危機に陥っています。潜在力がありながら、ＩＱでも学力でも劣っているアメリカに、情報社会のイノベーションで大きく水をあけられています。

ノーベル賞を見てみましょう。今世紀に入ってからの

日本のノーベル賞受賞者は、米国の五十五人に次ぐ十一人と世界第二位であり、英国の十人を抜き、4位のフランス、ドイツの六人をかなり上回っています。最近の日本人の受賞実績は高いことがうかがえます。

世界を動かすのは、潜在能力だけではないと言うことがよくわかります。やはり、教育制度にメスを入れない限り日本人の能力を最大限に生かすことはできないという結論になります。

第三章　教育改革

(1)少人数教育

オーストリアが十八・八人という少人数学級をしています。それを抜く世界一の十八人程度の少人数学級で「学習指導権の侵害禁止」を条例化すれば、体罰は必要ありません。初等教育六年間で、世界一と言われる潜在能力を最大限引き出し、子供の個性にあったキャリア教育をしていくならば、個人としても幸せな人生が送ることができ、国家としても安定した国作りができます。

(2)三つのコース

ドイツの学制は、初等教育四年間の後、人生のコースを決め、基幹学校五年（中卒）で職人・販売員となります。実科学校六年（高一卒）でマイスター（親方）、ギムナジム大学卒で事務職・専門職になる、という形になっています。

日本の優れた技術力（先端・伝統）を未来に残すために、ドイツのマイスター制度を導入するのはどうかなと思います。

義務教育九年間の後、職業選択をし、大きく三つのコースに分かれます。

①十八歳で三年間の職業訓練を終え（高卒）、職人・販売員となります。

②高校・大学と七年間「技術」を学び、マイスター（親方）となって、交通・物流、飲食・宿泊・小売（対面販売）、医療・介護・保育・農業・漁業・林業・観光等、労働集約型の地方企業で働きます。地域創生の主役の人たちです。

③高校・大学と七年間「総合・教育・芸術・等を含む学び」をして、自動車、電機・機械、医療機器・製薬、情報・ＩＴといった、知識集約型のグローバル企業で働くこととなります。世界で稼ぐことを目的に、利益を日本に還流します。

最近、冨山和彦（株式会社経営共創基盤代表取締役ＣＥＯ）が打ち出した、Ｌ型大学・Ｇ型大学で考えるなら

②はＬ型大学、③はＧ型大学といってもいいでしょう。氏の考えを見てみましょう。

冨山和彦氏が昨年六月に出版した「なぜローカル経済から日本は甦るのか、ＧとＬの経済成長戦略」（ＰＨＰ新書）を参考にしています。

要点だけをまとめると、従来の大企業と中小企業という分類をやめ、Ｇ（グローバル）企業と、Ｌ（ローカル）企業とに分けます。Ｇ企業とは、自動車、電機・機械、医療機器・製薬、情報・ＩＴといった企業であり、ＧＤＰに寄与する比率は三十％程度です。一方、Ｌ企業は交通・物流、飲食・宿泊・小売（対面販売）、医療・介護・保育等で、ＧＤＰ比率が七十％にものぼる。

Ｇ企業はグローバル経済圏で完全競争にさらされ、勝つか負けかの戦いを強いられます。そのため、高度なグローバル人材が必須となります。しかし知識集約型だから、多くの社員を必要としません。一方Ｌ企業は、地域に根を張り、人を相手にするため、労働集約型で人手を必要とします。いま少子化で、多くの地方企業が人手不足に陥っています。

一部のトップ校は世界に通用する高度人材を育成し、それ以外の大学はＬ経済を支える人材育成を担う。大学もＧ人材とＬ人材の両方を追いかけるのではなく、機能分化すべきだというのが、今回の提言の趣旨だと思われます。

産業構造と労働生産性の観点からは、いたって合理的な主張だと思われます。

ただ、格差是正のためにも、②の地域創生のリーダーであるマイスター（国家資格を付与すべきでしょう）と、③の高度なグローバル人材の、賃金格差はないようにして、差別や階級を生まないようにしなくてはならないと思います。

頭脳を使って働くことも、肉体や人間関係を駆使して働くことも、同価値である、という哲学がそこにはなければならないと思います。

(3)Ｌ型経済と地方創生の姿

地方で生活するには、仕事・医療・介護・教育・コンビニ・ＷＩＦＩ・喫茶店・居酒屋などがあれば、都市生活者と遜色のない生活が送れます。週末に繁華街や観光地に行けば事足りるのですから。待機児童、介護難民もいない地方には、「ごっつあん」生活と言う文化があります。それは他所の家に行くと、何かお土産をもらって帰って来るということです。地域の人々は若い人を「助けたい」と思っています。お土産を渡すのは、彼らにとっても喜びであります。都市生活者で実家に帰ると、親が手土産をどっさりと持たして若夫婦を助けようとする、あれです。

地方には多くのメリットがあるのです。しかし地方と都市の優劣をつけるのは、仕事があるか、優れた教育があるか、にかかっています。

Uターンして生活できる仕事があり、都会より好条件の教育が受けられるなら、地方に戻りたいという若者はたくさんいます。まずは地方でできる新たな仕事について考えてみたいと思います。

①農業

世界の食糧危機、および後進国の発展による、原料不足により、第一次産業の農林水産業の工場生産化は、避けられないものと思われます。

一年前に、世界初の培養牛肉でつくったハンバーガーが、英ロンドンで披露され、衝撃を与えました。

砂漠の野菜工場で野菜を生産する。山のいけす工場で魚が生産される、そんな時代が、もうすぐやってこようとしています。

日本の企業も着々と動いています。三井不動産と農業ベンチャーみらいによる新たな植物工場、半導体メーカーが植物工場での野菜づくりをしています。

流通革命を起こそうとしている企業もあります。スーパーとつながったイオン農場、零細農家と東京とつなぐ流通革命を起こそうとしているファームドゥなどです。

土壌改良によって、味も栄養価も収穫量もアップさせ、食料自給率百%を目指す土の「健康診断法」を開発した、立命館大学の久保幹教授もいます。

日本の食材はブランド品として、世界に通用します。

和牛はその最たるものです。和牛遺伝子の海外流出を防ぎ、ブランド牛肉としての「和牛」の海外展開は、やがてフランスワインのような地位を占めるものと期待されます。

②漁業

なんといっても有名なのは近大マグロでしょう。すでに多くの寿司屋で食された人がいます。山間地でもマグロの生産ができる。期待されるのは、水産総合研究センターが完全養殖に成功したうなぎです。また、稀少品種となってきた魚たちの生産であります。砂漠でも魚が生産できます。世界の食糧生産に大きな貢献もできます。

日本人としては美味しい魚を食べたいので、ヤマトグループ鷹松募氏が考えた「魚のブランド化」は、普及してほしいものの一つです。鷹松募氏は、低所得で若い労働力が入ってこない漁業に、「魚に付加価値を付ける」ことによって、収入を上げていったのです。「魚は鮮度が命」その鮮度を保つために、水揚げされた魚を船上で締めるよう指導し、専用のタグを付け、「船上活け〆」としてブランド化したのです。「船上活け〆」の鮮魚は3割ほど高値で取引され、漁師の生活を安定させています。

③林業

カーボンナノファイバーの次は、セルロースナノファイバーと言われています。森林資源に恵まれた日本は、車から血管まで作ることができるというこのセルロースナノファイバーを生産して、林業を先端産業に変えていく方法があります。自動車・家電品・建材・IT製品の部材・包装容器などを、このセルロースから作ることができます。

また、日本の地域再生のモデルとして、「百年の森林構想」岡山県西粟倉村の取り組みは、評価されています。森林を育て、木材製品を作って販売しても、やっていけるという成功例です。

④商業と伝統工芸品

和食とともに日本酒が世界から注目を浴びています。山口・岩国市の山里にある旭酒造が作った純米大吟醸酒「獺祭」ですが、倒産寸前の地方の小さな酒蔵が、起死回生をかけて作りました。それが飛ぶように売れています。

日本の地方にはこのような伝統工芸品とも言えるような名品がたくさんあります。それを、どのように売っていくかによって、未来は変わってきます。フランスのボルドーのように、そこで飲み買うことに意味があるとブランド化されると、観光にも商業にも大きく反映してきます。

マレーシアなどのイスラム国を、バレル認証を得た食材で招き入れると言う事は、これから大事なことでしょう。世界で観光旅行にお金をたくさん落とすと言われるドイツやアメリカが、観光客としてもっと増えるように、政策を考える必要もあるでしょう。

ただ心配なのは、地方の伝統産業に後継者がいないことです。マイスター制度は、そのような伝統技術を高校大学で七年間教え、後継者につなげるものでもあります。日本の失ってはならないもの作りの技術は、京都などの伝統の町にばかりあるのでなく、町工場にもあります。NASAのロケットの部品に使われている、町工場の製品もあります。技術を残すだけでなく、販売ルートも確立していかなければなりません。

平成建設という、旧帝大の新卒者が続々と入ってくる会社があります。大工の減少と伝統的な木工技術の衰退に直面し、このままでは日本の木造技術が衰退してしまうと、建築に関わる誰もが思いながらも、時間とコストのかかる職人の育成は先送りされ続けてきました。その会社では大規模な職人育成を行っています。現在では二百人を超える職人集団を形成するに至っています。こういったことをL型大学で行いたいものです。

中川政七商店は、奈良で三百年続く麻織物「奈良晒」のメーカーですが、今や全国に三十三店舗を持ち、急成長している企業です。実は自社商品を製造・販売するだけでなく、全国の伝統工芸品を自社の店舗で売り、瀕死

のものづくり企業を再生させています。
このような伝統技術と商業のコラボレーションを、うまく地方で作っていく必要があります。

⑤医療

医療観光と言う分野があります。地方の観光地に病院を建てたものです。日本の医療保険制度は、海外に輸出してもいいようなシステムです。介護についてもそれが言えるでしょう。都会では介護施設が足りなくなります。都会から地方での人口移転を図りたいものです。

地方から海外への挑戦もあるでしょう。

セコム（株）は、同社を運営母体とするインド初の日本企業と現地企業が共同運営する、総合病院「サクラ・ワールド・ホスピタル」の開院をしました。

攻めの医療です。

⑥エネルギー

地方に眠るエネルギー資源の開発、それは地域の活性化に、大きな力となります。しかも、エネルギーの安全保障の観点からも、ぜひとも進めたいものです。

メタンハイドレートの採掘、

廃油から水素を作り出す、

オーランチオキトリウムから油を作る、

紙ゴミから作られたバイオエタノール、

植物由来のゴミから石炭に代わりうる固形燃料「バイオコークス」を作り出すなど

アイディアは豊富にあります。地方での自立したエネルギーの開発は、地方の自立にもなり、ひいては国のエネルギー政策の根幹となるものもあるに違いないと、思います。

⑦教育

地方創生のいいアイディアが報道には出てきませんが、地方の望むものは、雇用と教育です。高度成長の頃、各地の海を埋め立てて工場を建てたように、農林水産業を工場化して、若者を呼び寄せる。

そして、地方は地方創生のために、都市に先駆け世界一の少人数学級、すなわち十八人を目指すのです。

現在の学校は、幾つかの深刻な問題をかかえています。「言った者勝ちの人権」が闊歩する「安心・安全のない教室」であります。

また、学校教育と職業が連結した教育がされていないので、ニートや引きこもりといった就業の悩みがあります。

前者の解決策として、学校に不適応を起こす児童、発達障害などの問題に対応するため、教育指導権の侵害の禁止や、体罰の復活を実施します。地方は空き教室が多いので、少人数学級をして、英語やＩＴも先端の人材を入れれば、子育てを地方でしたいという若夫婦が増えるでしょう。できれば、外国から留学してくるような学校にしたいものです。

後者の解決策として、学校制度を三つのコースに分け、L型大学、G型大学、の創出をするのです。

地域創生のためにも、疲弊にあえぐ教員のためにも、一番大事なのは、明日の日本を背負って立つ子供たちのために、教育改革は大事なのです。

ある家具量販店の店員から声をかけられました。

「先生だよね。おれ、小坂だよ」

振り返ると、りっぱな体格の小綺麗な若者が立っていました。顔を見てすぐ思い出しました。小学生時代は、突然奇声を発したり、わざと指導に従わなかったりした、学年でも目立つ存在でした。発達障害があるので、今後どうなっていくのか、と心配をした子供でした。

「立派になったね。社員かね」

と尋ねると、バイト、ニートなんでと答えてきました。境遇には同情しましたが、立派な若者になっていることと、声をかけてくれた嬉しさで、頬を渡る寒風も心地よく感じました。教師をやってて良かった…

戦後の焼け跡の傷も十分癒えぬ十四年後に、東京タワーが作られました。当時の日本人は世界一のタワーを目指しました。それが、今日の日本の原動力です。今また、国難に接するとき、世界一の学校を目指すのは意味のあることだと思います。

『時評家　新明正道』（評伝その一）

山本鎭雄

はじめに

新明正道博士（一八九八～一九八四年、以下、新明と略記する）は天性の文筆家である。彼の八六年間の生涯において、七〇冊の著書・編著・訳書を刊行し、学術論文だけでも二〇〇編を超え、さらに雑誌・新聞などに発表した評論・随筆などは優に二五〇編を超えている。新明の喜寿を祝う事業の一環として著作集の刊行が企画され、没後九年にして、『新明正道著作集』全一〇巻（一九七六～九三年、誠信書房）が完結した。著作集は「理論社会学」（三巻）、「社会学史」（一巻）のほか、「知識社会学」、「政治社会学」、「民族社会学」、「群集社会学」、「地域社会学」（各一巻）という分科社会学によって構成されている。

見田宗介他（ほか）が編集した『社会学文献事典』（一九九八年）によれば、一人あるいは数名が編集を担当し、多くの社会学者が分担執筆する、いわゆる『講座』本や『シリーズ』本は数多く出版されている。ところが、日本の専門社会学者個人の『著作集』の出版について言えば、『有賀喜左衛門著作集』、『鈴木榮太郎著作集』、『戸田貞三著作集』、そして『新明正道著作集』に過ぎない。

このように、新明は日本を代表する社会学者として「理論社会学」を中心に優れた研究業績を上げた。ところが、膨大な社会学の業績のなかで、有賀喜左衛門や戸田貞三と比較して、「農村社会学」や「家族社会学」に関する研究は皆無ではないが、極めて乏しい。戦後、社会学理論の研究にたいして、家族、地域、産業などの個別の領域において社会調査を中心に「経験社会学」の研究が注目された。

だが、新明は社会調査を率先して企画し、社会学専攻の若手の研究者や大学院生にその機会を提供したが、「経験社会学」に関連して発表した業績は意外に乏しい。門下生は、新明が社会の総合的認識を目指し、「行為関連」の立場に立ち、体系化した「綜合社会学」の構想を理解し、都市や農村において社会調査を実施し、「経験社会学」としてそれぞれ貴重な研究成果を上げた。

このように新明は日本の社会学界では社会学の貴重で、かつ膨大な研究業績を上げた研究者であるとともに、熱心に後進を育成した教育者である。それにとどまらず、第四高等学校（旧制、金沢）では「文学青年」として同人誌を発行し、さらに東京帝國大学では大正デモクラシーの高揚期に初期新人会のメンバーとして「新人会機関誌」を編集し、論考・随筆・諷刺などを掲載した。大学卒業後、関西学院文学部教授に就任し、新人会とその周辺の「研究派」のOBとともに『社会思想』の同人として主として政治評論を発表し、さらに長谷川如是閑・大山郁夫らが刊行した雑誌『我等』に政治評論や思想・文化評論を盛んに発表した。

東北帝國大学法文学部に就任後、激動のヴァイマール・ドイツの崩壊期にベルリンに留学し、月刊雑誌『経済往来』編集部から依頼され、時局評論「欧州通信」を一年間に十二編を寄稿し、遠い日本の読者に激動するヨーロッパの政治情勢をレポートした。帰国後、三編を加筆して『欧洲の危機』を出版し、ヒトラーが独裁政権を樹立したドイツ、さらに激動するヨーロッパに通じた評論家として健筆を揮った。

これまで新明の綜合社会学を中心に大いに論じられてきたが、新明の評論活動についてはわずかに論じられたに過ぎない。そこで新明の政治評論や思想・文化評論を中心に論述したい。もっとも、社会学者としての新明と評論家としての新明、つまり二人の新明が存在するのではなく、両者を相互に関連づけて考察し、大正・昭和期に生きた時評家・社会学者の評伝を論述することになる。

北川隆吉は新明正道論を分析・評価するための試論として、「三層の構造」を提起した。第一層としての「基層」は、その個人の社会的経済的な「生活の側面」であって、個人の「生涯」と「経歴」がそれに該当する。第二層は基層と上層の「媒介層」であって、社会的文化的側面としての「思想」あるいは「生き方」である。最後に第三層としての「上層」は、学説、思想体系といった「論理の体系」ないし「学問体系＝理論」である。北川はこれら「三層の構造」による社会学者の内往的・総体的な検討を要請した（「新明正道論への『助走』―分析と評価のための試論―」、『新明社会学研究』第六号、一九九六年）。

そこで、まず青少年期の新明の「生涯」と「経歴」（基層）、「思想」と「生き方」（媒介層）を検討し、次い

で盛年期以降、社会学者としての「論理の体系」と「学問の体系」（上層）に触れたい。とりわけ彼の「文学青年の思ひ出」（『新潮』一九二九年三月号）は、新明が文学青年として成長し、文学的遍歴を回想した貴重なエッセーである。存命中、新明のご長女の家永美夜子さんからご尊父の日記、未定稿の自叙伝、書簡、創作など未公開の資料を提供して頂いた。その一部を新明社会学研究会が刊行した『新明社会学研究』（代表、田野崎昭夫。創刊、一九九二年。終刊一五号、二〇一二年）に掲載した。さらに本研究誌に掲載された新明正道研究の論考、随想その他を参照にして記述したい。

第一章　砂丘と合歓の花と(1)

一　転校に次ぐ転校

一八九八（明治三一）年二月二四日、新明正道はいわゆる「平民」出身の輿三吉（金沢県に隣接する富山県不破郡岩出身、のちに中庸と改名）を父とし、かじ（旧姓、金井）を母として、日清講和条約（下関条約）で割譲された台湾の台北市に生まれた（原籍、金沢市穴水町二番町四番地）。その当時、台湾全島の「領有」のために近衛師団や援軍部隊が派遣されるとともに、文官も派遣されたが、台湾民衆の頑強な抵抗に遭遇した。新明の父は台湾総督府の役人として、一時は台湾海峡側中部の彰化県弁務署に勤務したという。のちに、新明は台湾での生活の記憶は全くないと家族に語っている。むしろ、誕生して三歳まで、のちに新明は父母、とくに実母からその時期のことを聞いていたであろう。しかし、家族には「その記憶が全くない」と言って、自ら回想や話題にすることを避けたかったのであろうか。

ところが、新明は三歳頃から、新潟市近郊の紫雲寺出身の母とともに、新潟市に転居した。一九〇四（明治三七）年四月、新明は新潟師範学校附属小学校に入学した。新明は、母とともに新潟での暮らしについて、のちに家族にこの時期が「いちばん幸福だった頃」と語っている。その後、尋常小学校一年生の夏、石川県金沢市で母とともに父の姉の吉野家の別宅に住み、金沢市馬場小学校に通学した。三年生のとき再び転居し、同市長町小学校に転校した。新明は、このように小学生の前半と後半、さらに中学生の前半、第四高等学校（旧制）のとき、金沢で過ごした。新明にとって金沢がなによりも「郷里」そのものであろう。



新明正道（新潟師範学校付属小学校入学）
出典『新明社会学研究』

新明は転校に次ぐ転校を繰り返したため、必ずしも遊び仲間に恵まれなかったのであろうか。のちに、金沢市出身の新明は、「ふるさとの思い出」として少年少女向けの編著に「いつも遊び場所は河原なので、私の思い出は浅野川と犀川につながっている。わたしはどちらかといえばひとりで遊んだ場合が多い。犀川の鉄橋の下あたりへ夏などよくいなごやバッタをとりに行った。その記憶が今でも鮮やかに残っている」と、家族の事情と相次ぐ転校によって一人遊びを回想している(2)。

小学校三年生の後半、新明は「植民地の役人」の父とともに今度は満州（中国東北部）に転居し、最初は大連小学校、ついで撫順小学校で四年生を修了し、さらに遼陽小学校に転校した。二〇年後の一九三六（昭和一一）年夏、新明は今中次麿、阿部勇らとともに満鉄社員会が企画した夏期大学講演会の講師として満州各地を巡回した。『夏期大学講演集』（満鉄社員会、昭和一一年版）によると、新明の講演のタイトルは「種族と社会」である。講演の合い間に、三か月ほど在籍した遼陽小学校を訪れ、「小学校は校庭だけ昔のままで、元の校舎のところは道に成っていて、反対側に煉瓦の幾棟かの校舎が出来ている。この庭を駆け回った時のことをしばらく考えていると、如何いうわけか、目頭が熱くなって来る気がする。・・・樹陰に読本をもってきて、美夜子位の子供が二人いて、青い着物は夏の光線の下で鮮やかであり、一脈の涼味を有っている」（同年七月一二日）と回想している。さらに大連の旧居を訪れ、「元住んだ児玉町辺りを歩く。昔の煉瓦造りの代わりに、灰色の叩きの壁の家が建てられている」（同年七月一六日）と記している(3)。

一九〇八（明治四一）年九月、新明は満州から金沢に転居し、五年生の二学期に再び金沢市長町小学校に転校した。言うまでもなく、「算数」は数量や図形に関する基礎的な概念や原理を系統的に学習する教科である。新明は転校に次ぐ転校を繰り返したため、「算数」の授業には理解に苦しんだであろう。ところが、放課後、担任の教師から算数の特訓を受け、算数を系統的に理解出来るようになり、同校を優秀な成績で卒業した。現在、新明の五年次の通知書が保存されているが、相次ぐ転校にもかかわらず、学業成績は優秀で、とくに「国語」、「図画」、「日本史」、「地理」の科目を得意とした。のちに、「作文」の時間は大いに解放感を覚えたと回顧している(4)。

父は、学力優秀な正道を将来は大学法科―現在の大学法学部―を卒業させ、中等・高等官吏になることを期待した。父は正道に早期英才教育を試み、五年生の時に乏しい家計から雑誌『中学世界』を定期的に購読させた。

当時の新明には「恐ろしく文学的雑誌であった。・・・それだけ難解であった」が、それが契機となり、熱心に自然主義の小説を読み、さらに徳冨蘆花の『自然と人生』や金沢出身の徳田秋声などの短編小説を乱読した。

のちに、新明は金沢の小学校の五、六年生の頃を「文学青年の小児病」の始まりと回顧している。新明は五年生の時に雑誌『(日本)少年』正月号に掲載された子供らしい俳句「元旦の校門に照る朝日哉」で銀牌を得た。その後も俳句を盛んに投稿したが、まったく採用されなかった。それでも「文学的な遊戯」は継続した。六年生の時には三、四人の学友と手書きの回覧雑誌『月桂冠』を発行した。中学校への受験勉強に没頭するようになって、三号雑誌で自然に消滅した。一九一〇(明治四三)年三月、新明は金沢長町小学校を卒業するまで、新潟、金沢、満州各地を転居し、小学校は六回も転校したが、成績優秀な新明は金沢第一中学校(現、石川県立金沢泉ヶ丘高校)に入学した。

二　京城中学校へ転校

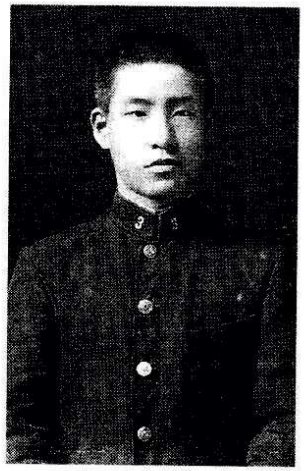
新明は中学生の時も文学への憧憬は続き、俳句や短歌を作り、意識的に美辞麗句をもって文章を装飾した。「体操」の授業は苦手だったが、「作文」、「国語」の授業は愉快に過ごした。一年上級生の川原次吉郎(東京帝大法科大学で新明の一年次の下級生として再会する。のちに、中央大学教授)に誘われ、ノートに手書きの回覧雑誌『翠濤』―誌名は川原によって金沢兼六園の翠滝と松濤坂という地名から命名された―を回覧したが、それも長続きはしなかった。

一九一〇(明治四三)年八月、韓国併合に関する日韓条約が調印された(韓国を朝鮮、漢城を京城〈ソウル〉と改称)。その直後、日本政府は朝鮮総督府を開設し、朝鮮統治のため日本人官吏・雇員が大量に増員され、そのうちとくに警察官も増員された。一九一一(明治四五)年九月、新明は「植民地の役人」の父に同行し、三年生の二学期に金沢一中から朝鮮総督府京城中学校(日朝修好条規に基づき朝鮮各地に居留民会が設立され、当初、京城に居留民立として設立された)に転校し、一九一五(大正四)年三月に同校を卒業した。

ところが、京城中学校の三年間、新明は「仲間と喧嘩したり何かして極めて不愉快な印象ばかり受けた」、「快々として楽しまざる三年の日々を送迎した」と回顧している。植民地の中学校では、内地からの転校生は中途退学か、成績不良という何か特殊な事情があって、転校したと見なされていた。学寮生活の新明はロシアの小説家アンドレーエフの『七死刑囚物語』(一九〇八年)を読み、自ら監獄の囚人になった気持ちで、囚人の生活を題材にして短歌五首をノートに書き付けた。それを寮生に盗み見され、新明があたかも犯罪者として監獄に収

容されたことがあるかのように誤解され、盛んに陰口を叩かれた。新明は転校生にたいする愚劣な偏見に憤激するとともに、文学にたいする無理解にも呆れ、心の底から憤慨した。

それにもかかわらず、新明は京城中学校でも成績は優秀であった。一学年下級で、寄宿舎に入舎し、同室となった青木均一(のちに、東京電力社長)は、「新明君はおどろくべき秀才で、三年生ですでに漢詩をもじっていた。英語はうまいし、文章もすぐれていた。新明君の机の上には蘆花の『みみずのたはこと』だとか、夏目漱石の小説などが飾ってあった。私は新明君を通じて、初めて文学というものに接した。高山樗牛の文章に魅せられたのもそのころだった」と回想している(5)。のちに、新明は青木の回想に触発され、青木と一緒に高山樗牛の『わが袖の記』の一節を朗読したり、漢詩を作って先生からほめられたと回顧している。



新明正道(京城中学校)
出典『新明社会学研究』

正義感の強い新明が「不愉快な印象ばかりを受けた」というのは、寄宿舎では最上級生の「不良」グループによる肉体的・精神的苦痛を与える「いじめ」の横行と無関係ではない。青木は、「不良」グループから「制裁」の対象者としてマークされたが、「それでも新明君と仲がいいので遠慮したものか、比較的安全に過ごすことができた」と回想している。試合巧者の青木は、四年生で京城中学校の代表として朝鮮全道剣道大会に出場して優勝し、初代朝鮮総監の寺内正毅元帥から信国の銘刀を授与された。そのことで、青木は五年生の「不良」グループから妬まれ、仲の良い五年生の友人が「不良」グループにそそのかされ、寄宿舎の風呂場におびき出されて、いきなり殴られた。青木はそのことに屈辱感を味わい、深夜、信国の銘刀の白鞘を払って「不良」グループを叩き斬ってやろうと考えたが、今は止めようと自重したと回想している。

さらに、寄宿舎では上級生が可憐な下級生を可愛がる、いわゆる「美少年狩り」が横行した。新明と同室の青木均一が「寄宿舎のなかで、上級生が下級生のふとんの中に忍び込んだ。私は大いに怒って舎監に訴えたために、たしかその男は停学(処分)になった」と回想している。潔癖な新明もまた寄宿舎の室長として「美少年関係」が跋扈しているのにたいして反対し、不良グループの一人と「掴み合い」となったが、舎監の調整で一先ず結着し

た。さらに、新明は他の七室長から不当な言いがかりをつけられて衝突し、弾劾されたこともある。

旧制中学校では、淡い一過性の同性愛が横行したことは、それほど珍しいことではない。新明と第四高等学校と東京帝大で同級の山崎一雄は、広島高等師範附属中学校の五年生の時、ある一年生に「恋心が湧いて来るのをどうすることもできなかった」という淡いプラトニックラブから、「手紙の往復もあったが、しかし、其後、彼は好い反応を示さず、其の侭お互いに冷淡になってしまった」と回想している(6)。だが、京城中学校の上級生による「美少年狩り」は余りにも異常であった。

三　孤立と生涯の交友

朝鮮総督府統治下、質朴剛健を校風とする京城中学校では、このように、上級生による「美少年狩り」とともに、上級生の「不良」グループによる肉体的・精神的な「いじめ」も横行した。新明は家庭の事情もあって退寮は許されない。青木もまた父の反対にあって退寮できなかった、放課後、新明は青木や数名の仲間とともに学校の裏手にあるのどかな松山を散策したり、図画工作室から画架を借り出し、郊外の田園風景を写生して過ごし、寂しさを紛らわした。新明と青木の交友は生涯続き、三〇数年後、新明の経済的に困難な時期、新明は青木が社長の品川白煉瓦株式会社から海外事情調査を委嘱されている。

朝鮮の中学校では教員はサーベルを下げて授業を行い、身体的鍛錬とともに精神力の養成を校風としていた。京城中学校ではしばしば零下二〇度程度の真冬の夜中の一二時に校庭に集合し、隊列を組み、長距離を歩行した。そのため、大量の落伍者が出た。他に柔剣道も奨励され、寒稽古は零下一三度以下の朝五時から始まり、寒中三〇日間も続けられ、技術の修得よりも厳寒を克服する精神力の鍛錬に力点がおかれた。新明は四、五年生の三月、二度にわたり「柔道寒稽古皆勤」で表彰され、卒業直前には「柔道修業に勉励し、三級に進む」と認定された。

一九一五（大正四）年三月、新明は京城中学校を五番の成績で卒業した。第一高等学校（旧制、東京）に推薦で入学することも出来たが、郷里の金沢の第四高等学校に進学することにした。中学校の卒業式の終了直後、京城（ソウル）の南大門から京釜鉄道の汽車に乗り、線路の最高地点の秋風嶺では霰が激しく車窓を叩いた。新明はしばらく釜山港の旅館に逗留した。連絡船に乗り、下関から山陰本線に乗り、車窓から北陸の山間部の残雪を見て、郷里の金沢に到着した。新明は、三年間の京城中学校の不愉快な学校生活から解放され、七月の高等学校の受験に備え、九月には金沢の第四高等学校（以下、旧制四高と略記する）第一部甲類（英法科）に三番の成績で入学した。彼は旧制四高では寄病舎に入寮せず、穴水

町の叔父の家から通学し、三年（みとせ）の青を謳歌した。

ただ、新明は旧制高校生に独特の天下を睥睨し、弊衣破帽、放歌高吟、朴歯の下駄に象徴されるバンカラな青春時代を送ったのではない。旧制四高は世俗から超越し、泰然自若として自己の進むべき道を模索する「超然主義」をモットーとしていた。同級の山崎一雄らとともに文学、思想、宗教を論じ、熱心に金沢のカナダ・メソジスト派の白銀教会に通う青春時代を送った。この教会の日曜礼拝で出会った令嬢が、のちの新明綾夫人である。

（注）

一　本章を「砂丘と合歓の花と」と題した。それは新明自身が少年時代を回想した未定稿のタイトルに拠った。少年時代の母の思い出が主題である。

二　室生犀星編『ふるさとを訪ねて〔Ⅲ〕石川』（泰光堂、一九五九年）。

三　新明正道「満州旅行記」（『新明社会学研究』第五号、新明社会学研究会、一九九五年）。

四　新明正道「文学青年の思ひ出」（『新潮』一九二九年三月号）。山本鎮雄編『新明正道時評集』（日本経済評論社、二〇〇七年）に収録。

五　青木均一『私の履歴書』（経済人四、日本経済新聞社、一九八〇年）。

六　山崎一雄「回想録」（一九三三年七月執筆）、「東京帝大新人会ノート」第八号、（慶應義塾大学法学部政治学科・中村勝範研究室、一九八六年）

資料発見の旅（はじめに）

私が新明正道研究でとくに心がけたのは、「資料発見の旅」である。神戸の甲南女子大学図書館の「新明文庫」、日本学士院会館内の会員関係新収図書室、仙台の東北大学附属図書館や東北大学史料館、さらに宮城県立図書館ではマイクロフィルムのリーダーで地元の『河北新報』を閲覧し、長野県飯田市や上田の公立図書館では郷土資料として土田杏村が指導した「自由大学」の関係資料を収集した。さらに金沢の石川県立図書館を訪れ、旧制四高時代の関係資料を収集した。

すでに触れたように、未発表の草稿など貴重な資料の提供、さらに快くインタビューなどに応じて頂いたのは、新明博士のご長女の故家永美夜子さんである。ここに心から謝意を申しあげる。

また金沢、神戸、仙台など、新明博士が在学・在勤・居在した現地を訪れ、現場感覚を得ることが出来た。おそらくそれぞれの景観は一変していたであろう。「此所（ここ）だと」明確に確認出来なかった場所もあったが、私には「読書百遍意自ずから通ず」というよりも、「百聞は一見に如（し）かず」ということが肝要であると自覚した。

が、それでも現場感覚を得ることが出来た。そこで『ドイツ留学日記』の編集に大いに役に立った。というのは、第二次世界大戦末期にベルリンは大空襲によって、徹底的に破壊されたが、戦後、記念すべき歴史的建造物や街路の一部（ベルリンの壁とその周辺を除き）は復元され、往時のベルリンの面影をうかがうことが出来たからである。

新明博士は金沢の尋常小学校で数年を過ごし、その後、石川県立金沢第一中学校に入学し、京城中学校に転校したが、再び金沢に戻って旧制四高に入学した。次章で詳述するが、四校在学中、新明博士は同人誌『砂丘』、短歌会「白雨社」を結成した文学青年であり、宗教青年として金沢の白銀教会で洗礼を受け、同教会青年会のリーダーとして熱心に活動した。彼の全生涯を考えると、金沢は心のふるさとであり、とくに三年（みとせ）の四高時代に人格の形成と、その後の真摯な生涯の方向性を決める重要な意味を持ったと言えよう。

以下では、石川県立図書館で発見した第四高等学校の『北辰会雑誌』第八一号（一九一七（大正六）年一二月）に触れたい。新明の「逗留」と題する短編小説は、同年一月に擱筆と記されているように、京城中学校卒業直後に金沢へ帰郷する途中の「釜山（港）」の見聞と体験をもとに、構想を温め、かなり背伸びして創作されたのであろう。一年三回発行の『北辰会雑誌』八一号前後の目次

新明博士の没後、私は西ベルリン（当時）に遊学した。持参した新明博士の遺著『ワイマール・ドイツの回想』を携帯し、壁で分割された東・西ベルリンを散策しながらヴァイマール・ドイツの崩壊期の首都ベルリンに思いを馳せた。また新明博士がドイツ留学中に発表した新明著「方法としての社会学―社会学化の理論の構成―」（一九二九年三月）の独訳論文（「社会学の原理としての集団」に改題、カール・ドゥンクマン編『応用社会学雑誌』、一九三一年）をベルリン国立図書館で発見した。その時の驚嘆は今でも鮮やかに記憶している。

帰国後、原文と独訳論文のテキスト・クリテイクを試み、編者のドゥンクマンによって独訳論文が論文名を含めて、勝手に手が加えられ、社会学で基本的な概念「集団」は故意にまったく異なって解釈されていた。そこで、私は「社会学（者）の社会学」Sociology of Sociologistという視点からヴァイマール末期のドイツ社会学界の動向の一端を考察した。それが契機となり、本格的に新明社会学研究を開始し、文部省（当時）から科学研究費の補助金の交付を受けた。（三年間継続）

その後、個人研究年誌『新明社会学研究』（代表・中央大学田野崎昭夫教授）を創刊し、また新明著『ドイツ留学日記』（一九九七年、浄書・校閲、家永美夜子）を編集・出版した。ドイツに遊学して散策したのは「ベルリンの壁」崩壊直前の冷戦下の東・西ベルリンであった

や編集後記などを見ると、必ずしも投稿の時期と掲載の時期は一定せず、編集部の恣意か、担当教員の検閲か、雑誌の編集と掲載には時期的に一貫性はないと思われた。

新明の旧制四高の後輩に当たる中野重治は『北辰会雑誌』第九六号の雑誌部（編集委員）に所属し、その表紙にマイヨールの彫刻の裸像写真を掲載したところ、担当教授によってその写真は無残に削除され、表紙は雑誌名と刊行年月だけが記されて刊行された（中野重治の転向時代の自伝的小説『歌のわかれ』、一九三九年）。

「逗留」の主人公の正雄は、朝鮮の植民地で初めて職に就き、三年間の「寒暑の酷いところで無味な官吏生活」を送った。彼は久しぶりに故郷に帰省するため、「心を南の桜さく島々に馳せて気持ちよくこの港まで南下してきた」（創作ではあるが、新明の京城中学校の生活とその帰路が連想される）。「××（ママ）南道」（伏せ字）の税吏に嫁した七つ年下の姪の満子もまた帰省を切望していたので、二人は「植民地の門戸の港で落ち合って、一緒に帰郷することにした」。この「港」は、言うまでもなく、釜山港である。

ところが、満子は強風のため島伝いの連絡船は出航できず、到着が遅れた。その間、正雄は「連絡航路の定期船」と日本への「連絡船」が頻繁に出入りする釜山港の付近の旅館にしばらく「逗留」し、すでに京城中学校を

退職した恩師の閑居を訪ね、歓談した。三年間、在籍した京城中学校時の「不愉快な印象」から解放された心情と、複雑な地形の釜山、港湾や丘陵の景観を眺望した。なぜ、『北辰会雑誌』に掲載が遅らされ、さらに伏せ字が散見されるのであろうか。だが、新明は旧制四高時代を「文学青年」として、学内では少数の進歩派に属し、仲間とともに短編小説の創作や短歌の吟詠、さらに地元の新聞社に投稿して大いに健筆を揮った。

擱筆二〇一五年二月二〇日

寒い日

横山正義

まえがき

＊鳥葬について

二十六年十二月十九日静岡文化芸術大学二本松康宏准教授の講義を聴講いたしました。講題は日本の伝説・『六道珍皇寺の小野篁（京都・六波羅）』です。

小野　篁延暦二十一～仁寿二（八〇二～八五二）は昼、この世の朝廷に使え、夜は冥府に使えていた。

そして冥府とこの世を繋ぐ、六道珍皇寺には井戸がありました。

六道珍皇寺は鳥辺野・船岡にあり、鳥辺野は鳥葬が行われていた場所だというのです。

『古寺名刹大辞典』によれば

大椿山六道珍皇寺。京都市東山区小松町五〇五

小野篁は一説には開基とも、当寺の壇越となり堂塔伽藍を造営したとも言われました。また篁には常に六道に往来せる、霊威があって寺に閻魔堂を建て、孟蘭盆会を修したと伝えられています。

今に至るまで、お盆の精霊迎えの行事がさかんである。

一説には平安遷都のさい、庶民の葬所と定め、引導読経ののち、鳥辺野に送ったので六道という地名がついた。

＊当所（静岡県菊川市平尾）と京都の関係

『内田家文書について』山口県文書館研究紀要第一号（昭和三十七年、一九六二）国守　進によれば、遠江国内田庄下郷においても、同庄が円城寺領であったことから、同寺雑掌忠秀と内田致親代忠能との間に年貢・加徴米をめぐって紛争が起こり、双方間に下地中分を行っていること、とある。

内田の円城寺領はどこであったのか。徳治二年（一三〇七）遠江守護大仏宣時の裁許状によれば平尾村地頭成

仏とあるので、平尾村（菊川市下内田）でしょう。

円城寺領はかって、青蓮院の荘園ではなかったかと、推測いたします。

青蓮院の座主は後鳥羽上皇の息、朝仁親王（入道道覚親王）であり、承久の乱において、内田氏は鎌倉幕府、尼将軍の下、後鳥羽上皇と戦い勝利し、勝者・北条義時により、青蓮院荘園は北条氏の信仰する円城寺に移されたのでしょう。

一、寒い日

昭和二十四年の大寒、風も無く、震撼とした日、私は小学校四年生で学校から帰宅しました。

するとチャキ、チャキ、チャキと冷たい乾いた金属音が聞こえます。

それは奥の部屋からでした。

伯父が病床にある部屋からです。

部屋を視いてみると、床屋さんが散髪していました。

床屋さんが出張サービスしていたのです。

それは叔父が床屋さんご夫婦と演劇仲間であったからです。

それから一ヶ月ほどして、伯父はこの世をあとにしました。

この光景は私の脳裏に焼きついています。

当時、稲作地帯の農家は自転車、リアカーなど金属性のものは全て、戦争のために、国に供出して無いのです。

床屋さんに行くのに遠くにいけないので、徒歩で村の一軒の床屋に行くしかありませんでした。

子供が床屋に行くと、大人優先で五時間ぐらい待たされるのが常で、多忙を極めていました頃です。

現在、床屋さんは後代になりました。

私には、当時の先代の心意気を思うと、車で遠くのどこかの床屋さんにも行ける時代になりましたが、他の床屋さんに行くのが、なにかうしろめたく村の床屋さんに行きます。

後代の床屋さんはお話が大好きで、政治経済の話をよくされます。

趣味は祭りの横笛とか尺八で、祭り好きの人達から依頼され、皆さんに指導をされています。

私が年上なので、地元の昔の話を尋ねられます。

そのひとつ、「お墓を何故、鳩山」というのかというのです。

私の住む集落では、墓地を鳩山・船山と呼んでいます。

古老によれば火葬以前、昔はそこで鳥葬が行われていたのではないか、というのです。

場所は三町歩ほどの段丘から東南に百メートルほど、田の中に船のように出て、船先のようになっている山です。

頂上は三十坪ほど、平らです。高さは田の高さから二十メートルほど断崖絶壁です。

そこに竹、四方に竹を立て、入り口に二本、計六本ないし大きくするときは七本で、縄を張り、結界を作り、死者を納めます。

隠亡役、蕃太郎、土人等が頭蓋骨を破壊し脳みそを鳥が食べ易く処理し、死体を放置します。

清めの塩、死者の食物の米、水などを奉納し、放置すると、人肉食のカラス、雑食の鳩などが飛来し、むさぼったというのです。

その名残か、現在でも集落から死者が出ると、カラスが群がって鳴きたてます。それは餌をむさぼり食らうような、けたたましい鳴き方です。

死者の魂はカラス、鳩となり、天空に運ばれ、カラスは神の使いとなり、神格され、鳩は粟田信麿創建の八幡宮の神使として神聖化します。

からすは八咫烏（やたがらす）、またゆかりの熊野神社の牛王宝印という護符として、象徴されています。

特に三本足のカラスが祥瑞とされ、日本サッカー協会の旗です。

死者の魂はカラス、鳩等となり、どこに行くのか、それは補陀洛浄土です。集落のある段丘を人は補陀洛浄土といっています。

古来、死体を焼却するには多量の燃料（薪）を必要とするが、鳥葬では必要がないので合理的でもあり、自然の摂理、食物連鎖でもあるのです。

鳩山・船山から真北の山に平尾八幡宮があり、南に菊川が遠州灘に流れ込むのが鳥瞰できます。

紀伊半島の補陀洛浄土、那智大社、青岸渡寺に向かい、そして船でインドの補陀洛山に向かうのです。

最近まで、各家の葬儀で、竹六本ないし七本で、結界を作る風習がありましたが、最近、葬儀場で葬儀を行うようになり、寺院のご意向で中止されています。

葬儀の終了後、喪主によっては鳩の放鳥などが行われます。

鳩山から西は渓谷があり、台地になります。渓谷は明治時代、田の貯水池となりましたが、渓谷の向かい段に、古い墓石が放置されています。

渓谷を越えると鳩山・船山の五十メートルほどの彼岸には観音堂跡地があります。

そこに古井戸があります。

その前に卵塔の法名浄誉良信（一条良信）の墓があり、当地では俗名粟田信麿と称しました。

粟田信麿は井戸を通して、夜は死者の世界冥界と、昼は今生の世界とを往来し、死者の伝言を伝える霊力があると、言われていましたので、観音堂は沢山の信者が参拝したと伝えられています。

観音堂の本寺、大蔵寺には十一面観音が奉られています。

現在は役員の皆様のご意見により廃堂になり、私が墓石を京都ゆかりの大谷家の墓地、経塚に移設いたしました。

粟田氏は藤原系の和邇（わに）一族で小野氏、柿本氏などと同族でシャーマン（神霊、精霊の伝言者）であったと伝えられています。

井戸より百メートルほど北に一族由来の史跡、大明宮史跡（粟田真人が則天武后に招かれたという宮殿）、唐国長安史跡（興慶宮史跡、皇城史跡など粟田真人が訪れた唐）、渤海史跡（渤海大使小野田守）、仏陀国史跡（新羅大使小野毛人）などがあったとの伝承があります。

当地の領主・青蓮院の所在地ゆかりの粟田から、粟田信麿と称したが、藤原（一条）長成大蔵卿の孫で一条長信の子、良信で常盤御前の先妻の子孫です。

祖父が大蔵卿であったので、良信も大蔵卿と呼ばれていました。

良信建立の寺は大蔵寺と呼ばれています。

死者の世界では、この世とは逆だというのです。右が左で上が下だというのです。

裕福な人は冥界では貧乏なのです。

この世で名誉、金、地位、権力等がある人はあの世ではまったく逆で貧者だというのです。

この世で甘えん坊、ひとが自分の都合のいいようにやってくれると思い、何でも人頼みで、うまくいかなければ親の所為、人の所為にする人が、冥界では困難にもめげず、努力奮闘するというのです。

現在でも死者の装束を反対にします。

白装束にし、北枕とします。

逆さ着物、逆さ屏風、かたびらは左前に、手甲、足の脚絆を逆にします。

六文銭をもたせますが、これは冥界では大金なのです。

二、鎌倉での良信（粟田信麿）の活躍

承久三年になると、内田の荘園領主、青蓮院座主朝仁親王（入道道覚親王）の厳父後鳥羽上皇が鎌倉幕府を討つという情報が内田にもたらされ、粟田信麿（良信）は鎌倉幕府に付くという。地頭とのトラブルを避け、青蓮院前座主、慈円と相談し、慈円の弟子、忠快の弟子となり、鎌倉幕府ご祈祷僧に転身いたしました。

忠快は平家の太政大臣平清盛の舎弟・門脇宰相教盛卿の子息でした。

忠快を祖師とする、天台密教の一派を小川流と称します。

良信は勝長寿院本坊に住む。
『勝長寿院は鎌倉市雪ノ下にあった寺院。別称大御堂南御堂。一一八四年寿永三年、源頼朝が父義朝の冥福を祈るため創建、翌年十月落慶』

承久元年（一二一九）征夷大将軍源実朝は公暁に暗殺される。
九条道家の子孫、三虎（藤原頼経）鎌倉下向。良信は藤原氏として付き人でもありました。
北条政子が尼将軍となる。

＊世上無為の祈祷。
大蔵卿法橋良信　　承久三年五月二十七日（一二二一）
如意寺法印圓意・辨法印定豪・信濃法橋道禅等と伴に奉仕する。

承久三年（一二二一）五月晦日
相州（時房）遠江国橋本駅に着く。夜にはいりて勇士十四余輩、ひそかに相州の大軍に相交はり、先陣に進出す。これを怪しみて、内田四郎をして尋問せしむるのところ、仙洞に候ずるの下総前司盛綱が近親筑井太郎高重上洛せしむと云々。よってこれを誅伏すと云々。

＊大蔵卿僧都良信、勝長寿院別当職に補す。
別当大蔵卿僧都良信　　元仁元年八月八日（一二二四）

＊攘災の方法問わる。
大蔵卿法印良信　　嘉禄元年五月一日（一二二五）
当時、世上病死する者数千に及ぶ、なんとかならないかと辨僧正、駿河前司義村、隠岐入道行西、陰陽権助国通等ともに問われる。
北条政子没。保元二年～嘉禄元年（一一五七～一二二五）

＊政子一周忌一切経供養導師
別当大蔵卿僧都良信　　嘉禄二年七月十一日（一二二六）

＊武州時仏堂涅槃会読舎利講式
別当大蔵卿僧都良信　　安貞元年二月十五日（一二二八）
北条泰時、持仏堂において涅槃会が行われ、五十二種の捧げ物・供具等これをそなえらる。信濃法眼道禅涅槃講式を読み、大蔵卿法印良信舎利講式を読み、大進僧都寛喜遺跡講式を読む。

＊護持僧結番
別当大蔵卿僧都良信　安貞元年十二月十三日（一二二八）
中旬大蔵卿法印良信

＊実朝十三回忌塔供養
別当大蔵卿法印良信　寛喜二年十二月二十五日（一二三〇）
勝長寿院の新造御塔供養なり。己の尅、将軍家御出。御台所御同車。
藤原頼経、相州、武州以下の数輩供奉する。午の一点、供養の儀あり。
これ故源実朝右大臣十三年のご追善供養なり。

＊三重塔修正導師
別当大蔵卿法印良信　　寛喜三年二月九日（一二三一）
勝長寿院内の新造御塔において、始めて修正行われる。

＊天変のお祈り
別当大蔵卿法印良信　　寛喜三年四月十一日（一二三一）
天変お祈りとして御修法これを始行する。
一字金法は郷法印良信、不動は信濃法印、降三世は大進法印、軍荼利は丹後僧都、大威徳は辛相法印、金剛夜叉は若宮別当。

＊祈雨
大蔵卿法印良信　　天福元年六月二十五日（一二三三）
晴れる、炎天下すでに三旬に及び、州民皆西収の儲け失う。

＊政子月忌導師
大蔵卿法印良信　　天福元年七月十一日（一二三三）
政子家御月忌の御仏事。導師は良信法印なり。御台所御弔問のために南御堂に入御す。武州また詣でたもう。

＊於本一坊切経呪願師
別当大蔵卿法印良信　　嘉禎元年二月十八日（一二三五）
曇る弁僧正定豪、本坊において一切経を供養する。導師は興福寺東南院の法印公宴。呪願は大蔵卿法印良信なり。将軍家後血縁のために出御。御輿。武藤左近将監御剣を役す。相州（北条時房）・武州（北条泰時）以下供奉す。

＊千躰薬師開眼供養
別当大蔵卿法印良信　　嘉禎元年十二月三十日（一二三五）
仏師康定、去夜造畢してたてまつる尊形は、これ千躰の薬師、禄存星・羅計二星等なり。よって今日早旦、郷法印良信の本坊にわたしたてまつる。すなわち導師として開眼供養の儀を展開する。

＊薬師護摩
大蔵卿法印良信　　延応元年五月五日（一二三九）
大蔵卿法印良信甲斐守沙汰す。

＊天変ご祈祷北斗護摩
大蔵卿法印良信　延応元年八月十一日（一二三九）
天変のご祈祷行われる。北斗護摩は大蔵卿法印良信。

＊勝長壽院別当法印良信の本坊消失する。放火という。
別当法印良信　延応二年五月二日（一二三九）

＊天変ご祈祷護摩
良信法印　仁治元年一月八日（一二四〇）
彗星歳星に近ずく。相去ること三尺余の所。今日、天変のお祈りの護摩を始行せらる。
薬師　承快法印　織盛光　宰相僧正
八字文殊　良信法印　尊星王　尊禅法印

＊祈雨法（験なし）
良信法印　仁治元年六月九日（一二四〇）
良信法印祈雨の法を奉仕すれども、いまだ験なし。よって今日永福寺別当荘厳房僧都に改めおおせらる。

＊深沢八丈余阿弥陀仏供養導師
良信法印　寛元元年六月十六日（一二四三）
小雨雷電する。深沢村に一宇の精舎を建立し、八丈余の阿弥陀仏の像を案じ、今日供養をする。導師は郷僧正良信。讃衆十人。勧進聖人浄光房。この六年の間都鄙を勧進する。尊卑奉加せずということなし。

＊盂蘭盆会
卿僧正良信　寛元元年七月十五日（一二四三）
御持仏堂（久遠寿量院）において盂蘭盆会あり。導師郷僧正良信。将軍家出御と云々。

＊天変お祈等これを修せられる。
大蔵卿僧正　寛元二年一月八日（一二四四）
薬師　大蔵卿僧正　北斗　常住院僧正
八字文殊　卿僧正　尊星王　信濃法印
金剛童子　如意寺法印円意　愛染王　大夫法印賢長
金輪　大弐法印
以上護摩
外典　天地災変祭　泰貞朝臣　属星祭　晴賢朝臣

＊十壇災摩天供の一
大蔵卿蔵正　寛元二年五月二十九日（一二四四）
若君御前のお祈りとして、十壇の炎魔天供をおこなわれる。
一壇　大蔵卿蔵正　一壇　宮内卿法印
一壇　大弐法印　一壇　宰相法印縁快
一壇　三位法印頼兼一壇　播磨僧都厳懐

一壇　弁僧都審範　一壇　宮内卿僧都
一壇　大納言僧都　一壇　三位僧都

＊頼経百部摺写法華経板供養導師
大蔵卿僧正良信　寛元二年六月三日（一二四四）

＊祈雨十壇水供
権僧正良信　寛元二年六月四日（一二四四）
前大納言家（頼経）の御願として、後鳥羽院ご追善の御為に、日ごろ法華経百部を習写せられる。この片木はかの震筆を得られところなり。大蔵卿僧正良信。導師たり。また祈雨のために十壇の水天供を始行せらる。

＊法華五種妙行導師
卿僧法良信　寛元三年六月三日（一二四五）
天晴れる。右筆の輩を召し集められ、久遠壽量院において一日中に五部大乗経を書写せらる。すなわち供養の儀あり。七僧法会なり。三位法印頼兼導師なり。同日法花五種の妙行を修せらる。導師は卿僧正良信なり。これ後鳥羽院の追福なり。

＊冥道供を修す
別当僧正良信　寛元三年八月二十一日（一二四五）
天晴れる。勝長壽院別当僧正良信冥道供を修す。おなじくご祈祷なり。

＊信濃国善光寺供養導師
大蔵卿法印良信　寛元四年二月十四日（一二四六）
信濃国善光寺の供養なり。大蔵卿法印良信導師たり。名越えの北条朝時入道生西が賢息等、遺言を受くるによって、大壇越としてこの大会をなすという。勧進上人は親基という。

＊経時の戒師となる
大蔵卿法印良信　寛元四年四月十九日（一二四六）
天降る。北条経時ご不例の事、危急の上、執権すでに譲補の儀に及ぶの間、今日落飾せられをはんぬ。法名安楽。大蔵卿法印良信戒師たり。

＊祈雨
大蔵卿法印良信　寛元四年七月六日（一二四六）
祈雨を勝長寿院に仰せつけらる

三、その後の良信

良信は晩年、忠快の教学・小川流を近江の国妙法寺を中心に伝えたのでした。

妙法寺は近江・若狭・越前寺院神社大辞典によれば「平安時代前期、滋賀郡の比良山地で隆盛した南都系の古代山岳寺院。

比良山地には比良三千坊・比良七百坊といわれるように、南都系あるいわ天台系の山岳寺院が数多く建立され、一大霊場の観を呈した。

比良山地の山々に今日でも堂満岳・蓬莱山・権現山・霊仙山などの名が見えるのはその名残といわれる。『続日本後紀』承和九年（八四二）一二月一七日 条勅に年分度試制の教場として妙法寺と最勝寺の名が見える。

『三代実録』貞観九年（八六七）六月二十一日条には妙法寺と最勝寺が滋賀県滋賀郡比良山に所在し、律師静安が建立、その弟子賢真が唐から帰国し、両寺を官寺とすることを申請しゆるされたことがみえる。

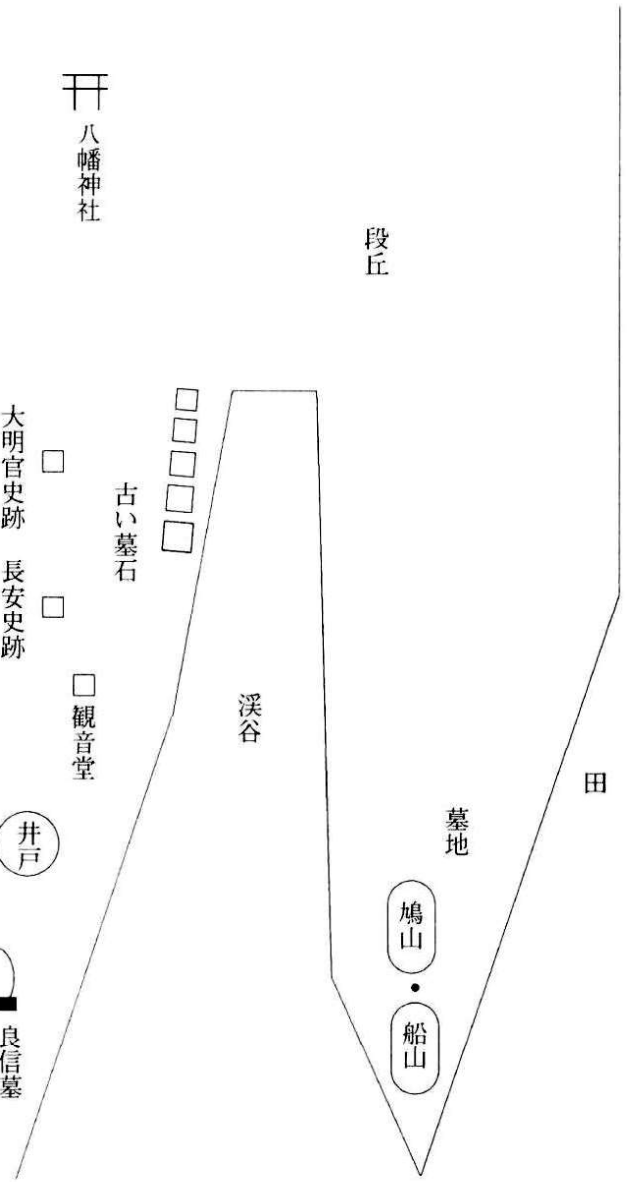
妙法寺・最勝寺の故地は長く不明であったが、現在の滋賀県志賀町栗原の西方山中に西正寺野という字名が見え、谷を挟んだ北側の大教寺野では寺院の存在を示す基壇や礎石が・銅製品・鉄釘などと、平安時代前期の土器が出土し注目されている。

『輿地志略』は大鏡寺が妙法寺内にあったとする伝えを記し、西法寺・最勝寺がこの付近にあった可能性が指摘されている。」

参考文献

『鎌倉歴史大辞典』　川副武胤、寛達人　有燐堂
『吾妻鏡』
『日本の神仏の辞典』　鈴木一行　大修館書店
『日本民族大辞典』　林英男　吉川弘文間
『日本史大辞典第二巻』　下中弘　平凡社
『世界大百科事典』　下中直人　平凡社
『世界の葬送』　塩谷茂代　イカロス出版
『日本伝統文化・珍皇寺の小野篁』講義　二本松康宏　静岡文化芸術大
『近江・若狭・越前寺院神社大辞典』下中弘　平凡社
『阿娑縛抄』　真鍋俊照（名著通信第十七号、東京、昭和五十三年）
『古寺名刹大辞典』　金岡英友　東京堂出版
『死と葬送』　林英男　吉川弘文館

図一



短歌　三十五首

曽根竣作

敵意

チェホフの短編ひとつ読み了りふっと息つく夜のとばりに

北冥の鯤（こん）のわたりか吃水ふかく秋刀魚の漁（れふ）のいま帰港せり

冬の日の照り返しをわが背に受けていづこともなくシタールの音

和菓子屋の新装成りて花すすき一壺（いっこ）にゆるる冬のはじめの

冬空に穂芒ぼうと暮れ早く対岸といふ距離のさびしさ

晩学の日をつづけつつ珈琲を片手にする逃げ水のやうに

蜘蛛の糸わが額にからみ光りつつ入日にたゆたふ雨後の一時（いっとき）

香水の敵意あらはにすれちがひ地下街を往くサングラスの人

北風のすさぶ海上雑兵のごときふゆなみ立ち上りくる

霧の夜を長き列車の過ぎゆきて雪しらじらと乗せて貨車あり

冬の陣立て

無人駅の花壇に萩のみだれ咲き海よりの風に手招きをする

霧こめて模湖とかすめる埠頭なり巨船しづかに錨を上ぐる

しもつきのしづもりし杜（もり）の奥処（おくが）より木菟（つく）の呼ぶ声闇を点拠す

鬱の字は二十九画よかんたんに書けぬが意外とすぐウツが来る

陶淵明みたいな男やって来て草雲雀(くさひばり)吹く冬のはざまに

アメリカの核の傘なるなかにゐて「九条守れ」はいい気なもんだ

黄金のしじま破りて百舌鳴けり公園の朝そら碧(あを)くして

足許をすくひてしまらく落葉まふ風葬のごと冬の陣立て

インバネス引掛け歩く東京駅の人混みの中に〝太宰〟を見たり

堂々と自国の国旗をかかげたる密漁(みつれふ)のふね百を超えたり

従心

中央の政府は何をしてゐるのか珊瑚の密漁絶えず続けり

敵国はどこかも知らぬ若き人ら既に負けてより七十年経(へ)つ

今も思ふ東京裁判誰がためぞ勝者は常に壇上にあり

十二月八日は忘れず殺戮の始まりと言う歴史のページ

封人(ほうじん)の家の茅葺(かやぶき)き夕づきて雁(かり)の数羽が啼きて渡りつ

七十を従心と言ひ孔子没す八十となれば何と言はんか

金婚をはるかに超えて黙(もだ)したる夫婦が今日も米粉(ビーふん)食べをり

窓々に明かり灯して夫々の残業つづくビルの連なり

コンビニの灯り一きは華やぎて極月の掌より時間(とき)は落ちゆく

青に変る殺那ブーツが白黒のコンビがずんと往くスクランブル

亭々と冬空(そら)にそびゆる楡の木の淋しさは言わず落葉をひろふ

短歌

行雲流水（四十五）

石黒修身

近詠二十首

世相・時局

霏々として雪舞う未明人質の解放なしとの報せ寒々

日を経ずに今日の暁（あかとき）「後藤さん」殺害の報虚しく届く

対処する術なきをもて「イスラム」をアポリアとするは文明の恥

永年の反目を経て米と玖瑪（キューバ）和解の道を探るとの報

曽遊のカリブ海では米船は玖瑪には寄らず島影遠く

反骨のカストロ率いる玖瑪では特異の文化とスポーツ盛ゆ

「カストロ」かはた「ゲバラ」かと若者の血を騒がせし謎多き国

身辺・日常

謂れなき怒りが湧きて節分の豆撒きをする「鬼は外（そと）」

悍（おぞま）しき少年犯罪目を覆うあまりに身近かな普通の子らの

新幹線通れば行かん金沢に鮮しき金沢あるやも知れず

彼の人は大正ロマン吾はまた昭和レトロと歌会は懐古に

「カーリング」札幌の乙女ら凛として氷上に競うインターナショナル

札幌のシャンツエで翔べる若きらを遠景で見る幻のごと

季節・花

八幡宮歴史と共に八世紀「段葛」いま改修の緒につけり

「段葛」改修に沿う植替えで桜は来る春花を咲かすか

八幡宮石段昇り振り向けば落暉は足下の参道照らす

メディアでの梅の便りに誘われて「三渓園」訪う「雨水」晴れの日

早咲きの梅はまばらの園内に「緑萼梅」が異彩を放つ

「緑萼梅」上海渡来の珍種にて萼の緑が異色と聞けり

限りなく広々とした園内に「春の七草」ひっそりと生う

関東管領始末記⑰

河越無惨

千坂精一

一

扇谷上杉朝定は築城以来七代つづいた本拠の河越城を捨てて松山城に退いてしまったことで嫡流家の関東管領山内上杉憲政に対して面目が立たず切歯扼腕していた。

武蔵、相模守護の扇谷家は、相模は小田原、岡崎、武蔵は江戸、河越、岩槻の各城をそれぞれ防衛の拠点にしていたのだが、西から侵略してきた新興勢力の伊勢新九郎長氏（早雲庵宗瑞）に駆逐されて相模は小田原、岡崎城をともに陥とされ、武蔵は北條を名告りにした早雲の嫡男氏綱に江戸、岩槻城を陥とされてしまった。

岩槻城のほうは六年後に城将太田資頼が奪回していて、いまは嫡男資時があとを継いで死守しているが、江戸と河越の両城を喪ってしまったいまとなってはもはや機能を果たすことができず、孤立してしまっていた。

岩槻と松山では連繋が難しく、両城の中間に位置する河越城はなんとしても奪還しなくてはならなかった。

いっぽう山内憲政にとっても、扇谷朝定が氏康に河越城を奪取されてしまったことは痛恨の極みであった。

山内憲政は上野守護で平井城を居城にしていた。

平井城は上野國緑野郡平井にあった。現在の藤岡市西平井であるから武蔵國（埼玉県）と境を接している。

北條氏康が相模國に次いで武蔵國を席捲すれば、つぎには上野國をも狙ってくるにちがいなかった。

憲政もまた河越城を奪還することは急務であったのだ。

ここで両家の思惑は一致し氏康は共同の敵になった。

そこで憲政は、常陸國一の宮の武神鹿島神宮（茨城県鹿島市）に『北條氏康打倒の願文』を奉納すると、扇谷朝定に河越城奪還についての協議を呼び掛けた。

憲政と朝定が両家重臣たちの知恵を持ち寄ってあれこれ検討したうえの結論は、

「古河の公方晴氏を抱き込んで北條氏康を追討する」

大義名分を立てることであった。

憲政が晴氏を奉戴する説得策を練っているところへ、とつぜん駿河守護今川義元からの使者がやってきた。

使者は義元からの書状を持参していて、それには、

「上杉と今川で協力して北條氏康を斃す」

具体策が書かれていた。

今川氏は足利将軍家の連枝で、駿河國と遠江國（いずれも静岡県）の守護であったが、義元の祖父義忠が小笠の塩買坂（菊川市）で一揆の夜襲を受けて非業の死を遂げたことから起こった継嗣問題が縺れて家中を二分する御家騒動に発展したとき、偶々駿府館にいた客将伊勢新九郎長氏が双方を抑えて治めたことからその功績を高く買われて、当主になった義忠の嫡男氏親から、

「愛鷹山麓富士郡の下方にある依田、橋原、柳原、吉原の各荘など十二郡と、興國寺城（沼津市根小屋）」

を与えられた。

その後、早雲宗瑞と号した新九郎が堀越公方の伊豆を乗っ取って独立したとき、今川領だった富士川の東地区をいつか曖昧のまま早雲領にされてしまっていた。

守護になった義元は、駿河一國を回復したいと希って北條氏康を富士、駿東地方から追い出そうと謀った。

そこで現在氏康に攻め立てられて苦戦している上杉憲政に同盟を求めて、挟撃策を提案してきたのであった。

義元はすでに武田信虎の女を娶っているので晴信（信玄）は義弟にあたり、武田とは固い絆で結ばれていた。

憲政とても、氏康が義元の侵攻に呼応して駿河へ向かえば河越城の防備が疎かになるその間隙を衝いて大軍を擁して攻めかかれば、容易に奪還できると踏んだ。

憲政は、この願ってもない

（好機到来）

に有頂天になって義元の策に乗り、使者に

（快諾）

の返書を与えて駿河へ帰した。

憲政はすぐさま松山城の扇谷朝定に使者を送って事の次第を詳細に伝えさせると、さっそくの出陣を促した。

義元は上杉と同盟成るとさっそく軍を催して駿府城（静岡市）を出陣し善得寺城（富士市今泉）に布陣した。

そして北條方の長久保城（駿東郡長泉町）を囲んだ。

このとき武田晴信も義元支援のため本栖湖から南下して駿河國に入り、大石寺（富士宮市上條）に布陣した。

急報を受けた氏康はいそぎ援軍を送ったが黄瀬川の今井狐橋のところで今川軍に阻止されてしまい、二進も三進もいかず睨み合いのまま膠着状態に陥ってしまった。

二

（今川軍動く）

の報に憲政はすぐさま古河の足利晴氏に使者を送り、

「このたび今川義元殿と連合して北條攻めをいたしますので是非ともご出馬を賜りたく、ともに起って氏康をご成敗下されば鎌倉へお迎えしてお仕えいたしまする」

旨を書状で伝えたのだが晴氏は、鎌倉公方だった曽祖父成氏が永享年間に管領の上杉に逐われて古河へ逼塞させられたことに拘って憲政を信用せず、

「予にとって上杉が旧臣なら、北條もまた義理の筋に当たるゆえ、いずれへの加担もならぬ」

そう固執して撥ね返されてしまった。

晴氏はまえにも述べたが北條氏綱の女を娶っていたから、氏康とは義兄弟の間柄であった。

氏綱は、ほかにも足利将軍家分流の名門で武藏國荏原郡世田谷城（世田谷区豪徳寺）主の吉良頼康や、扇谷上杉家の重臣で江戸城将でありながら謀叛を起こして当時の当主朝興を河越城へ放逐した太田資高にも女を嫁がせて一族に抱き込んでいた。

晴氏奉戴が成らずに腐心していた憲政だったが、上杉が今川と同盟したとの噂をききつけた国人衆が、

「今川との連携でなら北條を斃せる」

ものと確信して恩賞目当てに続々と集まってきた。

憲政は義元が氏康を駿河に引き付けているあいだに河越城を奪還しようと目論んでいたので焦り、晴氏とのことは同時進行することにして、ともかく大軍を率いて平井城を出陣すると、途中松山城で朝定の扇谷軍と合流して膨れ上がった六万五千の軍勢で河越に到着した。

憲政は小田原との連絡を遮断するには河越城を遠巻きにするのがよいと考えて、JR川越駅から南へ一里ほど行って関越自動車道を潜る少し手前の砂久保（川越市砂久保）に山内軍の本陣をおくと、西へ一里行った東武東上線霞ヶ関駅北側の日枝神社と河越館跡史跡公園（県史跡）がある上戸（川越市上戸）に朝定の扇谷軍を、さらに北へ一里ほど行った入間川と荒川に挟まれた表（比企郡川島町表）に扇谷方岩槻城将の太田資正軍を配置した。

上杉軍に河越城を包囲されたという報らせを受けた氏康は、このうえ上杉方に古河公方晴氏を取り込まれては不利と考えて使者を立てると『言上書』を届けさせた。

「管領が当家を滅ぼそうと企ててたち上がり公方様にもご出陣を願っているとのことですが、公方様が当家をご成敗なされる理由はございませぬ。此度の合戦でわれらが勝とうと上杉が勝とうともいずれも公方様のお指図を受けている臣下でござりまする。いっぽうへの肩入れは筋が通りませぬ。公方様は管領がどのような甘言を弄そうとも決してご出馬なされてはなりませぬ」

氏康の書状を読んだ晴氏は、さきに憲政からの誘いを

断ったように、こんどの騒動ではどちらへ加担するつもりもなかったので、そのことをしかと使者に伝えた。

憲政は布陣をおえると古河への再度の使者を厳選した。なんとしても晴氏を籠絡しなければならなかった。

ふたたび拒絶されればもはや取り付く島がなくなってしまうので、叡智を傾注して当たらねばならなかった。

憲政は慎重に厳選した結果、扇谷朝定が身を寄せている松山城将の難波田弾正忠行を選んだ。難波田は弁舌爽やかで智略にも長けた部将だと朝定が太鼓判を捺した。

憲政は難波田弾正に因果を含めて綿密な打ち合わせをすませると、小野因幡守を副えて古河へ送り出した。

この説得に失敗すれば生きて帰らぬ悲壮な決意を固めた弾正は、背水に立つ思いで晴氏との拝謁に臨んだ。

「このたび漏れ承るところによりますれば、公方様には氏康の申し入れをお聴き届けになり管領へのお力添えを猶予なされたとうかがいましたが、まことなれば恐れながらお心得ちがいにござりまする。抑々公方家と管領家とは遠く尊氏将軍のときよりこのかた代々君臣としての関係を保ち、主君に忠節を尽くし臣下に恩恵を与える交わりは水と魚の如く終に中絶することがござりませんでした。しかし、残念ながら長春院殿（四代公方持氏）の御代に公方様と管領のあいだが思わしくなくなり関東の乱れとなりました。以来今日まで延々と乱れがつづいているこの関東をいったいどなたが平穏無事にまとめられるのでありましょうか。このたび偶々君臣が合体して管領が関東を平定し公方様のご治世をお迎えするためにすでに兵を挙げたのでござりまするから、その管領にご加勢なされてご出馬なされるのが当然でござりましょう」

そう延べて諄々と道理を説いた。

だが、晴氏は、

「そのほうの申し状はもっともじゃが、しかし、氏康とは義理の縁に繋がるゆえ軽々には起てぬのじゃ」

そう言ってなおも氏康との姻戚関係を楯にすると、

「氏康とは、義理の縁に繋がるゆえにのう」

なんどもなんども低声で繰り返した。

その晴氏の喘ぎにも似た呟きを聴いた弾正は、

（公方様は迷っておられる）

そう感じ取ると、ここはいっきに畳み込んで籠絡しようと焦り、昂奮してますます饒舌になっていき、

「公方様が氏康を縁者であるため不憫にお思いになられるのはごもっともでござりまするが、北條が早雲から氏康にいたる三代で掠め奪った伊豆、相模、武蔵の国々はいずれもみな公方様のご領国でござりまする。このようにつぎつぎと押領してみずからの威勢が増すままにこのたび管領と事を構えましたのは、虎の威を借る狐の如く公方様のご威光を笠に着て山内、扇谷の両上杉を屠らんとする意図に相違ござりませぬ。いま公方様のご威光で管領家を滅ぼすことができれば氏康はつぎには公方様に弓矢を向けて関東を手中に収めんと企てていることは明白でござりまする。公方様が縁者に拘って逡巡なされたばかりに取り返しのつかぬことになりましては一大事にござりまする。ここは篤とご思案のうえご分別を変えられてただちに管領にご加勢なされて氏康をご成敗なされるのがご賢明と思われまする」

そう熱っぽく説いた。

晴氏にしても、たとえ義兄弟の間柄とはいえ、ちかごろの氏康の言動については難波田弾正が言うように懸念がないわけではなかった。その微かな不信感が難波田の話を聴いているうちにみるみる膨らんでいった。

氏康が上杉を蹙した場合、そのあと果たして管領の地位に甘んじて臣従するかどうかは難波田の言うとおり確かに疑わしかった。

（利根川の向こうの争乱ではあったが、対岸の火事とみて高みの見物をきめこむわけにはいかぬかも知れない）

晴氏のこころは、しだいに足利家重代の旧臣上杉と氏康とを比較して、上杉支持に傾いていった。

「弾正。そのほうの忠義のこころ予は羨ましく思うぞ。思いみれば上杉とはこれまで代々君臣水魚の交わりをつづけてまいった。絶とうとて切れるものでないことはよく承知いたしておる。あいわかった。予は迷わず氏康との縁を絶って憲政に加担いたすことにいたそう」

弾正は一瞬わが耳を疑って思わず晴氏を仰ぎ見た。こんなにはやく籠絡できるとは思いも寄らなかったのだ。

「それでは上杉にご助勢下さりまするか。さっそくのご賢明なるご決断恐れ入りましてござりまする」

そう確と念を押しておいて深々と頭を垂れると、大役を果たした安堵で全身からいちどに力が抜けていった。

そして晴氏は、弾正の督促に応じて十月二十七日に二万の軍勢を率いて河越へ参陣することを約してくれた。

憲政は河越へ到着した晴氏を丁重に迎えると、古河公方軍を東方一里の入間川に近い現在川越運動公園がある下老袋（川越市下老袋）に配置して四方を固め、河越城から一里離して十重二十重に囲み長期戦に入った。

三

このとき氏康から河越城を預っていたのは北條綱成であった。北條を名告っているが北條の一族ではない。

じつは今川氏親の属将で遠江國高天神城（掛川市下土方）主だった福島上総介正成の嫡男であった。

高天神城は菊川の西方小笠山塊の東南に位置していて、

「高天神城を制する者は遠江國を制する」

といわれた重要拠点にある難攻不落の堅城であった。

だから今川の歴代当主はもっとも信頼のおける譜代重臣のなかから猛将の誉れ高い者を選んで城将に据えた。

福島正成は父基正と二代つづいて城将をつとめた。

その正成が主君氏親に武田信虎攻めを命ぜられた。

正成は永正十七年（一五二〇）十一月二十三日に軍勢を率いて甲斐國へ攻め入ったが、島上條（甲斐市）で武田軍に敗れていったん退き、高天神城へ引き揚げた。

正成は氏親に駿府館へ呼びつけられると敗戦を詰られ、なにがなんでも武田信虎を斃せと厳しく命ぜられた。

面目丸潰れの正成は名誉挽回を図って衆を頼むことにし、氏親にその動員を許されて翌大永元年十月に一万五千の大軍を率いて富士川筋を北上、甲斐國へ侵入した。

正成の軍勢は西部から躑躅ヶ崎（甲府市古府中町）を目指して進軍し、荒川を挟んで西方約二里の龍地台（甲斐市龍地）に布陣すると威容を誇示して威嚇した。

このとき武田信虎は身重の夫人を裏山の要害城へ避難させたが、険しい山が登れず中腹の積翠寺に入った。

十月十六日、一千余の武田騎馬隊が荒川下流の飯田河原（甲府市飯田）に陣を布いて迎え撃つ態勢に出た。

正成は包囲しようとして鶴翼の陣形で押し出した。

武田騎馬隊は中央突破すると後方から襲ってきたので、今川軍は浮き足立ち伏兵に崩されて龍地台に退いた。

双方睨み合いがつづいた十一月三日に信虎の嫡男が誕生し太郎と命名された。のちの晴信（信玄）である。

この嫡男の誕生で寡兵の武田軍は大いに勢いづいた。

十一月二十三日、正成は躑躅ヶ崎館を挟撃しようと計り二隊に分けて進軍させたところを信虎に正成の本隊を攻撃され、武田の部将萩原常陸介の策に嵌められて荒川上流の上條河原へ追い詰められ、終日激戦がつづいた。

その夜更けに背後へ回った武田の別働隊に急襲されて、正成は不覚にも原能登守に討ち取られてしまった。

のちに大軍で西上した今川義元が、途中尾張で少数の織田軍に急襲されて討ち取られたのもこれと似ている。

義元も正成も衆を恃んでの油断からであろう。

いかに、

〈衆寡敵せず〉

とはいっても、

〈油断は大敵〉

で、驕り昂っていたのでは数の強みが発揮されない。

このとき福島正成には七歳と一歳の男児がいた。

父の敗死で高天神城にはいられなくなり、傅役に伴われて隣国小田原城の北條氏綱を頼り庇護された。

嫡男は成人して福島左衛門を名告ったが、天性武道への志が深く、毎月十五日には潔斎して武神八幡大菩薩の社へ詣で、武人の鑑たらんことを祈願しつづけた。

亡父正成の血を享けて屈強な若者に成人した左衛門は、部将の器に恵まれて合戦のときにはいつも朽葉色に染めた四角い練絹の旗の四隅に〈八幡〉と墨書した指物を掲げて戦場に臨み、軍団の先頭に立って、

「勝ったぞ、勝ったぞ」

そう大声で諸卒に呼び掛けて励ましつづけたので、兵

士たちはこの旗を〈地黄八幡〉と称んで畏敬した。

左衛門は戦場で勇猛果敢に活躍したので、その数々の戦功を認めた氏綱から女婿に選ばれて北條の姓を賜り、氏綱の一字を与えられて北條左衛門大夫綱成となった。

そして玉縄城（鎌倉市城廻）を与えられて城主に据えられたが、その後扇谷上杉を攻めて武藏國の拠点にしていた河越城を陥としたことにより城将に抜擢された。

綱成に北條姓が与えられたということは氏綱の養子になったわけで、氏康とは義兄弟の間柄になったのだ。

ついでながら、綱成といっしょに小田原へきたときはまだ嬰児だった弟のその後についても触れておこう。

美少年に育って氏康の寵童になっていたが、成人して福島辨千代を名告ってからは小姓をつとめている。

それはさておき――。

古河公方晴氏、山内憲政、扇谷朝定の連合軍八万五千に遠巻きされた河越城を、綱成は例によって〈地黄八幡〉の幟旗を立てて結束した三千の守兵で籠城していた。

四

いっぽう長久保城の救援に向かった北條軍のほうは黄瀬川の今井狐橋で今川軍に阻止されたまま突破できず、両軍対峙して睨み合いがつづいていたのだが、ここへきて憲政の知らないところでこんなことがおこっていた。

膠着状態から動きをみせたのは武田軍であった。

このころ武田晴信は、北信濃侵攻を謀って葛尾城（埴科郡坂城町）主の村上義清と佐久地方で攻防戦がはじまっていたので、今川への加勢兵力を撤収する必要に迫られたことから、晴信は今川と北條との講和を計った。

義元は和睦に消極的だったが、氏康のほうはこのまま駿河と武藏に固執して戦力を二分したままでは、

〈二兎を追う者は一兎をも得ず〉

の譬えにもあるように、

〈虻蜂取らず〉

になってしまっては元も子もなくなると考えた。

富士川以東の駿河国は元々祖父早雲が今川の一部将だったころ預った領土であるから返還に未練はなかった。

氏康は駿河領を今川家に戻すことを提案した武田晴信の講和条件に応ずることにして承諾の使者を送った。

駿河一国が今川領になるなら義元に異存はなかった。

このことが、のちに武田晴信、今川義元、北條氏康の三者による甲駿相三国同盟に発展していくことになる。

義元と和睦したものの氏康には一抹の不安があった。

氏康が河越城救援に向かったあとの手薄になったところを義元に狙われはしないかという危惧である。

そこで氏康は念のため箱根峠に五百と三浦に三百の兵を配置しておいて、河越へ向かう準備にとりかかった。

だが、河越城を囲んでいる八万五千の軍勢に匹敵する

だけの人数などとても揃えることはできなかった。
愚図愚図していては河越城の兵粮が乏しくなり、援軍もこないと判断した綱成が業を煮やして討って出られては玉砕の憂き目になることが心配だったが、さりとて、綱成に救援を知らせる手段はなく苛立っていた。
氏康の心中を察した綱成の弟の福島辨千代が、
「それがしが河越城の兄へ伝令にまいりましょう」
そう申し出た。
「したが辨千代、単騎で雲霞の如き大軍の囲みを潜り抜けて首尾よく城へ入ることなどとても叶うまい」
「座して待つより行動を起こさねば叶うか否かはわかりませぬ。手を拱いているよりは上策と心得まする」
「じゃが辨千代。万に一つも成功は期し難いぞよ」
「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、と申しまする」
「うむ。そこまで覚悟いたすとは辨千代殊勝であるぞ」
氏康は、辨千代の覚悟に眼を潤ませて誉め称えた。
この辨千代の雄健な思いが天に通じたのか、包囲軍は城まで一里も間隔をおいて遠巻きにしているので、城に近づく者があっても見咎められることはなかった。
大手門まで馬を進めてきた辨千代を物見の城兵が上杉方と見誤って銃口を向けたが、その場にいた足軽隊長の本村半藏が偶々面識があったので無事に城内に入れた。
そのころ氏康は、八千を率いて小田原を発向した。
山内憲政の本陣砂久保まで一里と迫った西武新宿線新狭山駅近くの三ツ木原（狭山市）に布陣した氏康は、さっそく上杉方の陣形を探索させてみて、河越城から一里離れたあたりをぐるりと取巻いてはいるその大軍にあらためて舌を巻いた。
「油断させねばとてもこの陣形は崩せない」
氏康はまず使者を送って哀願する計略に出て、古河公方へは諏訪左馬助を選んで泣きつかせた。
古河陣営へ出向き、晴氏に拝謁した諏訪左馬助は、
「河越城はすでに兵粮も乏しく、将兵たちは力つきて戦意を喪っておりまする。公方様のお慈悲をもちまして城兵たちの生命をお助けいただきご退陣下されば、即刻城を明け渡し氏康末長くお膝元にお仕えして忠節を尽くすことをお約束いたしまする」
膝を屈し平身低頭して涙ながらに訴えたのだが、晴氏は取り合わず、追い返された諏訪の報告によると、
「そのような泣き言など聴き入れずとも、城はこの手で捻り潰してみせるわ」
そう豪語して憚らなかったという。
（これで公方軍はわれらを軽んじて侮るに違いない）
氏康は笑みを浮かべた。
いっぽう山内上杉のほうには直接憲政にではなく、部将小田政治の代官菅谷隠岐守を選んで相応の使者を送り、
「救援軍を率いてきたもののこれだけの大軍に包囲されていてはもはや為す術がない。そこで貴殿にすべてをお任せいたすゆえ綱成はじめ籠城の将兵たちを助けて下され。お聴き届け下さればかならず河越城を貴殿に明け渡し管領殿と和睦して小田原へ引き返すことにいたす」
そう訴えさせた。
菅谷は即答しなかったが、憲政に報告したあとで部将たちにも披露するであろうから侮るに違いなかった。

五

山内憲政は案の定氏康の謀略に乗ってしまった。
河越城は攻めずとも兵粮の尽きるのを待っていれば勝手に陥ちるだろうからこのまま囲んでいればいいとして、新手の氏康軍のほうを潰してしまおうと思い立った。
「三ツ木原の北條軍をいっきに追い払え」
憲政の居丈高な命を受けた部将たちは、数を恃みに鼻唄交じりでいっきに氏康討伐に押し出していった。
だが、三ツ木原の北條軍はすでに退いたあとだった。
気抜けした山内軍が砂久保へ引揚げてくると、また北條軍が三ツ木原へ出てきたという報らせがやってきた。
山内軍が押すと北條軍が退き、山内軍が退くと北條軍が出てくることの繰り返しが飽くことなくつづいた。
山内軍は氏康の陽動作戦に嵌まってしまったのだ。
業を煮やした憲政は、
「氏康はわれらに恐れをなし、尻尾を巻いて遁げおるのじゃ。なんたる臆病者よ。聞くと見るとは大違いじゃ。この有様では相手にするのも莫迦らしい。捨ておけ」
そう痛罵を浴びせて嘲弄した。
この憲政の思いは氏康の術中に嵌まったことである。
憲政は八万五千の大軍が自慢で誇示してはいたが、しかしその内部事情は烏合の衆なので長陣になると混成軍の弱点を曝け出して結束が弛んでしまう心配があった。
だから憲政は、氏康に弄ばれているうちに決着をつけてしまおうと思うようになっていって、晴氏と朝定に同時攻撃をかけて殲滅してしまおうと誘いかけたのだが、
「北條軍は予の威光を恐れて攻め倦んでおるのじゃ」
晴氏は氏康を見縊っていて憲政の進言を受け容れず、
「うち捨てておけば氏康も敵わぬことを恥じて小田原へ退散するであろう。慌てて城攻めをすることもないわ」
そう言うと莞爾と嗤った。
憲政はやむを得ず、
「されば城兵が飢えに苦しみ自暴自棄になって討って出ましたならば公方様の軍勢で全滅させていただくことにお願いを致して、わが軍勢は総力を挙げて氏康の救援軍を追い落とし小田原まで攻め込むことにいたしまする」
そう決断して、砂久保の本陣に戻り部将たちに告げたが、彼等は憲政の戦法を積極的に支持する者がなく、
「それほど急がずとも三ツ木原は構わず放っておかれれ

ばそのうちに諦めて退散いたすでござろう。城のほうもこのまま囲んでさえいれば軈て城兵は飢えて枯れ木の倒れる如く死滅してしまいまする。ここの決着をつけてから悠くり小田原を攻めればよいではござりませぬか」

氏康の動きにまったく気を許し、暢んびり構えて戦意を喪失し、すっかり緊張が緩んでしまったのだ。

これらの動向は探索した笠原越前守らによって逐一報告を受けていたので氏康は敵情を確実に把握していた。だから氏康に勝利する機会を握られてしまった。

そして、ついに氏康に乾坤一擲の勝負をかけられた。

その日、天文十五年（一五四六）四月二十日、氏康は砂久保に在陣する山内の大軍を攻撃するには夜間急襲の攪乱戦法よりほかに勝ち目はないと考えたに違いない。

武具をはずして寛ぎ、酒を飲んで緊張を弛め、すっかり戦意喪失して前後不覚に寝入っているところを襲おうというのは、のちの赤穂浪士の吉良邸夜討ち事件もそうだったから、いつの世も奇襲戦法はおなじ方法なのだ。

氏康が八千の軍勢を率いて三ツ木原から砂久保の山内陣営に近づいたのは子の刻（午前零時）近くであった。

北條軍の関の声で深い眠りを破られた山内軍は慌てふためき、暗闇のなかで上を下への大騒ぎになった。

丸腰のまま逃げ出す者や、出遭い頭に斬りかかって同士討ちをする者などで修羅場と化し、大混乱になった。

態勢を立て直すことができぬまま倉賀野三河守、本庄藤三郎、難波田隼人正、本間近江守、小野因幡守など名ある部将たち三十四人は憲政を無事に落とそうと懸命になって踏み留まり踏み留まりして防戦したが、守勢の脆さで防ぎ切れず一人斃れ二人斃れしてしだいに数が減り、終いには僅か十人余りに護られただけで憲政は辛うじて河越を脱出すると上野國平井城へ落ちていった。

北條綱成は〈地黄八幡〉の幟旗を掲げて討って出ると、

「勝ったぞ、勝ったぞ」

と叫んで城兵を励まし下老袋の公方軍を攻め立てたので、足利晴氏は一戦も交えずに古河へ敗走していった。

とって返した綱成軍は氏康軍と合流して松山口へ敗走する扇谷軍を北方の新河岸川へ追い詰め乱戦となった。

この戦いで扇谷朝定が討ち死にし、松山城将難波田弾正は東明寺（川越市志多町）の古井戸に落ちて死んだ。

河越城奪還ならず扇谷上杉は滅亡し、山内憲政も平井城に逼塞したので重臣の瀧山城（八王子市丹木町）主大石源左衛門定久、鉢形城主藤田左衛門佐邦房は氏康の軍門に降り、武藏國もついに北條の手に帰してしまった。

（つづく）

性と化粧の物語（一）

鈴木守

はじめに

『性と化粧』については、本誌一二一号から一三一号にかけて、『性と化粧の実態』、『歴史的にみた性と化粧』、『性本能と生殖』、『性行為に直結する化粧』、『陰部の保健衛生』、『性と毛の化粧』、『嗅覚刺激により性的興奮を誘導する化粧』、『視覚刺激を媒体として性に関与する化粧』、並びに『性に関わる身嗜みの化粧』について紹介して来ました。

しかし、性に関わる化粧の話題は、広い範囲に断片的に散在し、しかも、歴史的、時代的な流れを汲みとることができません。そのため、『性と化粧』の全体像を浮き彫りにする意図が潰えてしまいました。従って、已むなく、二・三のテーマに焦点を絞って、『性と化粧』について物語ることにしましょう。

第一話　性と毛の化粧（一）

手始めに『性と毛の化粧』を取り上げることにします。毛の発育はホルモンの支配を受けていることは衆知のことですが、予備知識として、ホルモンと毛の関係を紹介することから始めます。

第一節　ホルモンと毛

ホルモンは、ビタミンと同様に身体の代謝作用を調整する重要な生理活性物質であって、内分泌器官から分泌されています。ホルモンとビタミンとの違いは、ビタミンは自己の体内で合成できないため、外部から栄養として摂取する必要がありますが、ホルモンは内分泌器官で

合成されるので、外部から摂取する必要がありません。

ホルモンと云えば、〝精力がつく〟と云う意味合いで、焼き鳥を思い出す方もいらっしゃると思いますが、この名の由来は、ギリシャ語で〝ホルマオ〟、即ち〝興奮する〟の意であると聞いております。従って、ホルモン発見の緒として〝興奮した状態〟を連想してしまいます。

一．内分泌腺とホルモン

ホルモンを合成し内分泌する器官、即ち内分泌腺には、脳下垂体、松果腺、甲状腺、上皮小体（副甲状腺）、胸腺、副腎皮質、副腎髄質、膵臓、卵巣、並びに睾丸（精巣）があります。これらの内分泌器官で合成されるホルモン名は、脳下垂体ホルモン、副腎皮質ホルモンのように、内分泌器官名にホルモンを連結した名で呼ばれていますが、知名度の高いホルモンとしては、アンドロゲン、エストロゲン、チロキシン、インシュリン、アドレナリン、コルチゾンを挙げることができます。

では、毛の発育に関係するホルモンと云えば、先ずは性ホルモンと云うことになります。性ホルモンほど密接ではありませんが、甲状腺ホルモンも毛の発育に関連していますし、脳下垂体ホルモンのうち、性腺刺激ホルモンは性ホルモンを介して毛と関係します。しかし、直接の関係ではありませんので、説明を省略し、毛の発育をもたらすホルモンの作用について触れることにします。

① 男性ホルモンは、角質層や毛包、皮脂腺を発育させますので、このホルモンが分泌される思春期になりますと、角質層が厚くなり、毛孔が目立ち、脂性の皮膚に傾いてきます。男子の皮膚は女子に比べて肌理が粗く、肌質は脂性の傾向にあります。また、体内に摂取した蛋白質を体成分に同化します。殊に筋肉蛋白に同化する作用が強力なため、男子は女子より筋肉質になります。

男性ホルモンには、睾丸で合成分泌されるテストステロンの他に、副腎皮質由来のアンドロステロンがあります。この両ホルモンの作用部位は異なっており、テストステロンは主として、ひげ、胸毛、手足の毛の発育を司っているのに対し、アンドロステロンは陰毛と腋毛の成長に関わっています。睾丸のない女性も副腎皮質から男性ホルモンを分泌していますので、陰毛と腋毛の成長が認められるのです。

② 女性ホルモンには、作用様式の異なる卵胞ホルモンと黄体ホルモンがあります。前者は発情ホルモン、後者は妊娠ホルモンの別名があります。この別名から両者の役割は、前者が「セックス可能な状態」、後者が「妊娠可能な状態」を準備することにあると類推されます。

皮膚に対する卵胞ホルモンの作用は、男性ホルモンの作用と拮抗しています。例えば、男性ホルモンが頭髪成長を阻害するのに対して卵胞ホルモンは促進的に働き、男性ホルモンがひげ、胸毛、手足の毛の成長を促すのに対して、卵胞ホルモンはそれらの硬毛の発育を阻害します。また、卵胞ホルモンは、前述した男性ホルモンの角質層、皮脂腺、毛孔等に対する作用とは逆方向に働きます。

その他、卵胞ホルモンの目に付く作用として、乳頭や乳輪、陰部等に色素沈着を起こさせますし、局所の血液循環を盛んにするため、凍瘡の治療等に用いられますが、皮膚吸収され易いので、大量に長期、且、広範囲に用いる時は医師の指示に従うことが大切です。

女性ホルモンは主として卵巣で合成され、内分泌していますが、副腎皮質や胎盤でも分泌しています。体内に存在する公知の卵胞ホルモンには、エストロン、エストラジオール、エストリオールがあります。黄体ホルモンの代表はプロゲステロンです。

③ 甲状腺ホルモンとホルモンが関与していない毛について触れます。甲状腺ホルモンはチロキシンです。この機能を推測させる疾患に甲状腺機能低下症があります。この疾患に罹ると、陰毛脱落のほかに、頭髪、殊に側頭部の毛が光沢を失い、脱毛し易くなります。また眉毛の外側3分の1に脱毛を生じます。眉毛の内側3分の2の毛と睫毛はホルモン支配を受けていません。このことが新生児における眉毛、睫毛の存在理由になっているのではないでしょうか。

二．毛の発育とホルモン

この項では、毛の成長過程をホルモンとの関係で辿ることにします。

① 胎児から少年の時代：性別に関係なく、新生児として生を受けた時には、既に頭髪、眉毛、睫毛が生えています。胎児の時は母体から、乳児は母乳から卵胞ホルモンを摂取していることに基づきます。

幼少年期の頃のホルモン分泌に触れた書を目にしたことはありませんので、確かなことは云えませんが、この年代では未だ性腺機能が未発達にも関わらず、男女とも頭毛、眉毛、睫毛が認められます。睫毛は別として、副腎皮質由来の卵胞ホルモン、或いはチロキシンの影響によって頭毛と眉毛が発達したのではないでしょうか？

② 思春期から青年期にかけて：思春期には二次性徴として、男性は声変わりし、ニキビが華やかになります。女性は胸が膨らみ始め、初潮を体験します。皮膚には男女とも、副腎皮質起源の男性ホルモン・アンドロス

テロンの影響下で腋毛と陰毛が発達し、男性の顔面にはひげが生え、胸部と手足に硬毛が発育します。この作用は女性には見られませんので、睾丸由来の男性ホルモン・テストステロンの効用であることは確実です。

女性の陰毛は下腹部から股間にかけて偏平な逆三角形に生えています。男性の場合は臍から陰部にかけて菱形に生えている人が多いように窺えます。従って、男性の陰毛は菱形の下半分の三角形はアンドステロンの影響を受け、上半分の三角形のエリアはテストステロンの支配によって発毛していると考えられます。

③　壮年期から老年期に向けて：　男性の場合は、俗に禿頭と云われる男性型脱毛症が生じます。この疾患は遺伝素因のある男性の場合、20～30歳代から始まる壮年性脱毛症が発症します。50歳以上の場合は老人性脱毛症と呼んでいます。

男性型脱毛症は男性ホルモンが毛包に作用して毛周期を短縮し、頭毛が軟毛に変化することに基づく疾患です。それに引き換え、卵胞ホルモンは頭髪の成長を促しますので、女性の禿頭をみることは殆どありません。

女性では妊娠すると多毛になる傾向が認められ、更年期になりますと、卵巣機能が停止します。一方、男性ホルモンの分泌は急激に低下しませんので、ホルモン・バランスが乱れて頭部にフケが増え、ひげや手足の毛の発育がみられるようになります。

④　女子陰部無毛症の悲劇：　男性では頭の天辺（てっぺん）が無毛になりますが、女性では希に体幹底部の股間が無毛の方もおります。一般的には〝かわらけ〟とか〝パイパン〟と云われている女子陰部無毛症です。この疾患は思春期以降に発見され、治療には男性ホルモン含有軟膏を用います。この治療法から推察しすと、副腎皮質機能不全が疑われます。

皮膚科学会の商品展示会場で義髪専門の会社の方と知り合いました。義髪は頭髪用だけかと思っていましたが、陰部用義髪も扱っており、その説明を受けました。彼が云うには「お客様の中には、思春期になって友達には生えて来たのに、自分には生えてこない。それを気付いた時の衝撃は言葉では言い尽くせません。自殺を考えた方もおります」とのことでした。〝パイパン〟などと侮蔑用語で表現していましたが、「有るべき所に無い者の深刻な悩み」を思い知らされました。

第二節　ＶＩＯ脱毛

第一節末尾に、陰毛が欠如している女子陰部無毛症を紹介しました。ＶＩＯ脱毛と云うのは、手っ取り早く云えば、〝人為的に陰部無毛症と同じ状態〟を作る化粧法と

云えるのではないでしょうか。

一．ＶＩＯ脱毛とは

美容や服飾の世界では、顔面の皮脂の寡多をＶゾーンとＴゾーンに区分したり、裾広がりのコスチュームをＡライン、ずんどう型スタイルをＨラインと呼んでいます。斯様に体型とか身体の部位をアルファベットの文字で表現することが屡々行われています。ＶＩＯもその口で、Ｖは下腹部、Ｉは性器周辺、Ｏは肛門周囲の形状を示しています。

昭和四〇年代前半のことだったと記憶していますが、行きつけのクラブに外国人のママがおりました。そのママが「アンダーヘアを手入れするって、最高のオシャレだと思うんだけど…」と云っていました。未だその当時は、腋毛（わきげ）の脱毛が定着して間もない頃のことでしたので、ＶＩＯ脱毛の言葉がない時代のことです。その後、陰部脱毛は徐々に、しかも静かに広がり、現在では大手のビューティ・クリニックでも、ＶＩＯ脱毛コースを設けるようになったと聞いております。

その実態の一面を紹介しますと、偶々、美容院で目にした宝島社の女性誌『ステディ』に、三〇歳前後の女性一〇〇〇人を対象にしたアンケート結果が掲載されていました。それによりますと、なんと五五〇人、過半数の人がアンダー・ヘアに手入れしていました。内訳けをみますと、五五〇人のうち、四九五人がＶを処理し、ＩとＯを処理している人は夫々二七五人と記載されていました。この美容院は男性の散髪も行っていることを念の為に付け加えておきます。

最近、新聞にアーティストのろくでなし子さんが自分の性器の３Ｄプリンター用データを作り、ダウンロードさせたとして、猥褻物頒付の疑いで逮捕されたと掲載されていました。これも御時世と云うべきでしょうか。

二．ＶＩＯ脱毛の成り立ち

脱毛の歴史については、後日、取り扱うつもりでいますが、戦後、ＶＩＯ脱毛成立の過程を振り返りますと、一九六〇年代に洋装が普及し女性の社会進出が盛んになりますと、腋毛を除くことが始まり、更に脱毛の範囲が全身へ広がり、身嗜みとして脱毛が定着しましたが、脱毛先進国・米国から脱毛風習が輸入され、日本でも広範囲の毛を処理でき、それに加えて、従来より価格が安く痛みも少ない光脱毛法が利用されるようになりました。

この方法を採用するエステティック・サロンが増え、一九〇九年にＶとＯをまとめて処理できるコースが開発され、大手エステティック・グループも、ＶＩＯ脱毛に力を入れ始めたため、ＶＩＯ脱毛の利用が伸び続けてい

ると云われています。

三．ＶＩＯを脱毛する理由

ＶＩＯ脱毛は二〇歳代から四〇歳代の方の利用が多いそうです。彼女たちが陰部を脱毛する理由、若しくは動機をチェックしますと、前出のママのように①オシャレの極致を初め、②水着や下着のファッションを安心して楽しみたい等の実用的な理由、③毛深い体質だと思い込んで脱毛を始めた、④彼が毛を処理していないと不衛生だと感じているので、彼の目を意識する女性、⑤ＶＩＯ脱毛を友達と比較したり、気軽に話題にしたりできないので、毛がない方がすっきりして気楽になることに願いを籠めて脱毛する等の意見が寄せられているそうです。

女性の評論家や雑誌記者は、「ＶＩＯ脱毛をする女性たちは『身体に気を使っている、ちゃんとした自分』を同性にアッピールしたくて脱毛しているのでは」と勘ぐったり、腋窩の脱毛は珍しくないが「普段見えないＶＩＯまで磨いていれば、女子力の高さが証明できる」と分かったような分からないような意見を尤もらしく述べていますが、本人もＶＩＯ脱毛信奉者だろうと私は睨んでいます。

美容心理の研究者は、「ＶＩＯ脱毛は自己管理を隅々まで徹底すべしと云う風潮の表れ」ではなかろうか。「外見を変えたいと思う人にとって、自分の体を管理できる余地が広がることは救いだが、『脱毛しないのは身嗜みがなっていない』と云う思想が広がり、自分の目で見えない肛門の毛まで管理して当たり前と云う美意識が固定されているような社会は息苦しく感じる」と宣っています。

四．陰部無毛症の方へ

年頃の女性が、生えるべき所に生えてこないことを知った時の驚きと悲しみは察するに余りあります。陰部無毛症の方々へ云うべき言葉もありませんでしたが、ＶＩＯ脱毛の実態を知って、せめてもの慰みの言葉を申し上げます。

世の中の二〇歳から四〇歳の半数以上の女性がＶＩＯ脱毛をしております。脱毛の動機は様々ですが、現代女性は陰部脱毛に美的感覚を覚え、身嗜みと心得る人たちが増えています。時代は変わっています。陰部脱毛症の方々も〝生えるべき所に生えてこない〟と云う認識を脱却して、ＶＩＯ脱毛の人たちと同じように、〝有るべき所にない状態を天から与えられた麗質だ〟と胸を張ったら如何でしょうか。年寄りの冷や水ですが、一言、アドバイスさせて頂きます。

引用文献

伊崎正勝、臨床皮膚科学、南山堂、一九七二
簇野倫監、標準皮膚科学、医学書院、一九八三
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
鈴木守、コスメトロジーの実践、幸書房、一九九四
石橋明、理容・美容保健、第2編、日本理容美容教育センター、二〇〇〇
高重治香、朝日新聞、二〇一四／九／五朝刊

（次号に続く）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇－〇－六四五九二

加入者名　まんじ

古い物・遠い夢

忠内正之

写真印刷協賛で、昨年十二月三十日より今年一月十九日迄没後４００年古田織部展が銀座松屋８階イベントスクエアで「織部とは何者か？」というテーマで大々的に開催されたのである。

やはり捨てる神ばかりではない、拾う神もあるのだと嬉しかった。早速初日に訪ねた。さすがに不用心なデパートが会場であるだけに、国宝・重文クラス品の展示は無いものの近年希な充実した展示で充分堪能できる内容であった。

第一章が「織部の時代」で、古田織部を生みだした安土桃山時代の背景がよく理解できる当時の美術工芸品が並べられた。

第二章が「織部の茶の湯」で、利休以後天下一茶の湯名人となった織部がいかなる創意と工夫を発揮して、武家茶道の規範と、斬新な茶道具の創出に関与したのか、

「織部」いま（茶道史余滴）

「閑話」中途でむだばなしを少しさせていただく

古田織部（一五四四―一六一五）が、今年没後四百年を迎えるということは、すでに述べている。細々ながら続いたといわれる織部流や親戚筋である薮内流などでは夫々織部公への追悼の法要がなされたと思われるが、未だその情報は聞こえて来ない。一番弟子であった遠洲流にもたずねたが全く追悼会の気配がない。

徳川幕府に謀反したため、織部への配慮を憚った時代ならとも角今の時代、茶の湯名人の織部の四百年忌を考えない、現代茶人、各家元の思慮の浅薄さを今更のように知って歯噛みしていたところである。

ところが、ＮＨＫ主催、上田流和風堂特別協力、日本ゆかりの茶道具が並べられた。

第三章では「織部の茶道具」で、織部が開発し、時代のファッションとなったひょうげたる世界が、各地の茶碗・水指・花生の優品や、会席道具の名品によって展示され、その影響の大きさがよく解った。

織部は謀反の罪で抹殺され、表立っては流派は消えたものの、織部の残した茶風の偉大さと影響力を再確認したのであった。

尚、この展示の催しは、広島や滋賀でも開かれるとのことである。

さき頃、思いたった私は京都にある織部一族の墓参りを昨年秋に計画したのであるが、菩提寺である、京都堀川の興聖寺に問い合せたところ「寺は一切公開していない」と宣告されてしまった。没後四百年なので是非にと懇願したのであるが、ニベもなく断られてしまった。

されば、この展示会で得た感激をもとに、非力ながら本来のテーマにとり掛りたい。

(四) 千利休の茶から脱皮する

文禄元年三月、豊臣秀吉は朝鮮に出兵した。文禄・慶長の役の始まりであった。

古田織部も肥前（佐賀県）名護屋にむけて出発、織部は後備衆の部隊として名護屋城・東二の丸に在陣した。

この間、四月十二日、一番隊、小西行長、宗義智の諸将ならびに兵船は、朝鮮の釜山浦に入港、六月、平壌を攻略する。八月、平壌において明使沈惟敬と小西行長が休戦を交渉する。

戦争は秀吉の思うがままには進まなかった。その頃、秀吉の生母、大政所が五月二十九日に逝去したため秀吉は一時名護屋城をたって大坂城に還ったが、再び名護屋城に戻り、大坂城にあった、「黄金の茶室」を名護屋城に運び茶会を催したという。

古田織部が豊臣秀吉から、それまで千利休による侘び茶、商人風のものから武家風へと茶道の改革を指示されたといわれるのは、この肥前・名古屋城在住のころと推定される。

それが後の式正織部流の茶道として結実する。織部は文禄元年（一五九二）の三月から翌文禄二年（一五九三）八月にいたる十八ヵ月間東二の丸にいた。

この間に、唐津のやきものと密接な関係をもったことが考えられる。

唐津焼は、今の佐賀県全域と長崎県の一部にまたがる地区、即ち昔の肥前国でつくられた焼物の総称である。

豊臣秀吉の文禄・慶長の朝鮮役前後から今日に至るまで、その窯総数は三百以上にも達し、非常に隆盛を極めた。

余談だが唐津港から製品が各地に発送されたので唐津焼と呼ばれた。関西方面では陶磁器全般を指して唐津物と言い、名古屋以東の地では瀬戸物と言い、瀬戸とともに日本陶磁器の代名詞となっている。

その頃、東松浦地方の領主は松浦党の波多三河守親であった。親は文禄の役に従軍して朝鮮に渡り文禄三年一月に帰国したが、肥前名護屋に陣取りして総指揮を取っていた秀吉の政略により所領を没収された。

波多氏の旧領は寺沢志摩守広高に与えられた。その広高は、奇しくも古田織部と同郷の美濃出身で利休門下の茶人であった。

文禄の役にともに名護屋城で後備役にまわった両者の交遊は密接であったと思われる。広高は経済にも明るい武将で、唐津焼の振興に意を用いて保護育成した。織部がこれを指導応援して、寺沢領内でできたやきものを茶会に使ったので、唐津焼として天下に名を知られるに至ったものと思われる。

また、絵唐津と志野（美濃焼）に見られる共通点も指摘されており相互交流があったものと考えられる。

唐津焼が飛躍するのは、文禄そして慶長の両役によって朝鮮よりの陶工の渡来による効果が大きく、慶長以前のものを古唐津と呼び珍重されている。

それには絵を描いた絵唐津、藁灰釉をかけた斑唐津、灰釉をかけた青唐津、鉄釉をかけた黒唐津、さらに黒唐津釉や藁灰釉をまぜてかけた朝鮮唐津等、一貫して流れる男性的な豪快さは、古田織部が創成しようとした千利休後の茶道改革のイメージと合致したのであろうと納得させられる。

文禄二年三月、平壌にあった小西行長の軍は、明の将、李如松に襲われ敗退。一方小早川の軍は、明軍を碧蹄館の戦いで破る。

かくて明は再び和議を申込み、五月十五日、明の使者が名護屋にきた。六月二十八日秀吉はこれに対し講話七条件を交付した。

なお、この間、利休七哲の一人で大名茶人であった牧村兵部が朝鮮で没している。四十九歳であった。さらに、天下の三宗匠の最後の一人であった今井宗久が八月五日没した。七十四歳であった。

また、豊臣秀吉は原田喜右衛門（安土桃山時代の貿易商）をして、フイリツピンのマニラに赴かしめ、ともなってきた使節と謁見をしている。その際「呂宋の壺」を献上させている。

八月三日、秀吉に待望の秀頼が誕生したとの報せに秀吉は大阪城に戻ることとなり、古田織部も同行した。

文禄三年二月のおわり古田織部は豊臣秀吉の吉野の花見に随行、さらに三月には高野登山にもお伴して、秀吉の御茶頭としての地位を高めていった。

秋、秀吉は隠居所として伏見城を完成させこれに移っている。織部は伏見に上屋敷としての伏見屋敷、さらに木幡に下屋敷を設けている。

古田織部の愛弟子で、後に織部の死後、後継者となった小堀遠州は六地蔵に屋敷を構えており、隣り合わせに住んでいたといわれ、織部の木幡の家は死後、藤堂高虎が接収している。

六月二十五日、伏見の徳川家康の屋敷へ古田織部、浅野長政、舟越景直（伊予守の父）が茶会に招かれている。

七月、堺の商人納屋助左衛門がフイリツピンのルソン島から帰り舶来品のボイオニ壺を秀吉に献上している。

九月、日本、明の両軍が巨済島で交戦している。

織部流の確立

文禄四年（一五九五）豊臣秀吉は関白、秀次を高野山に追放して自害させる。秀次は二十八歳であった。同時に秀次一族、三十余名を殺している。その中に利休七哲のひとり瀬田掃部が事件に連座して、処刑されている。

同年また利休七哲の一人であった蒲生氏郷が四十歳で没した。氏郷は教養ある文化人でもあり、松阪や会津若松の街づくりにも手腕を発揮した。氏郷を失ったことで秀吉政権では一五六〇年代生まれの世代に穴があき、政権弱体化の一因ともなったという。

慶長元年（一五九六）織部五十三歳

織部は三月八・九日、木幡の自邸にて茶会を催した。この前後から織部の後継者として大成する小堀作介（遠州）十八歳が入門した。

九月、明の正使が豊臣秀吉に国書を提出したが、表文に無礼があるとして、秀吉は再征を決議した。

一方、長崎では二十六聖人が捕縛されている。

さて、千利休の侘び茶「草庵の茶」に改善を加えて、いわゆる織部の茶風が確立してゆくのはいつ頃であろうか。おおよそ、この年次前後と思われる。では「式正織部流」について考えてみよう。

式正織部流

織部流の茶法は、織部の義弟にあたる古田平次・重続（織部の妻の実家・中川家の家老）が相伝し、代々古田家の秘伝とされて、その家以外には全く出ることはなかった。これは罪一族に及ぶところを赦された家柄として世を憚り、子々孫々に堅く秘伝とされたものであった。

明治維新（一八六八年）によって古田家第十四代、織

部流第十四世古田重名宗関は、豊後から東京に移って織部流茶道の普及と復興につとめた。そして明治三十一年（一八九八）茶道温和会をおこした。維新後流派は復活するが出遅れたため知名度は低くマイナーな存在となっている。しかし茶風と理論はしっかり伝えられている。

織部流の茶道では、侘び茶法の「草庵の茶」と、式正茶法といわれる「書院および広間の茶」の両伝がある。侘び式いわゆる侘び茶法は千利休から学びうけた相伝の点前であり、所作そのものは、多少の違いがあるというものの、それ自身は千利休流と同じである。

しかし乍ら古田織部が織部流として天下を風靡した桃山時代の茶は、みずからが新しく創案した「式正茶法」である。

式正とはなにか、古くは色装とも書き、略儀にたいして正式な儀礼であるという。その様なものが誕生してくるのには、それなりの時代要請や背景があったのである。

織田信長が倒れて、豊臣秀吉が天下の権を握ると、天正十一年（一五八三）には諸候に命じて大坂城の造営に着手、その豪壮雄大さを天下に示し、天正十三年（一五八五）には、聚落第を造営し、また一方では方広寺に大仏を造営し、東寺、園城寺、大徳寺などの造営をおこさしめた。

これらは秀吉の政治的権力を誇示するばかりでなく、その壮大な建築に加うるに、建物の壁や襖には、多く金地に雄大な構図をもって障壁画を画かしめ、それは豪華絢爛たるものであった。

永年にわたる天下の戦乱をおさえて、華麗な桃山文化を平和とともに招来した豊太閤は人びとにとって救世主と写ったに相違ない。そうした世相の中で「侘び」「草庵の茶」をあみだし、その主張をかたくなに守り続けた千利休は、結局避けがたい運命に殉じたともいえよう。

かくて、古田織部による「式正茶法」という武門の茶の創案が余儀なく必要視されてきた。

織部が果した茶道の改革は桃山時代の産物であり、秀吉の側近としての条件のもとでなされたもので、正しい儀式という意味にとどまらず、書院および広間で、おこなう、大名、武家の茶ということで、織部独自の書院および広間の飾りをあみだし、式正茶法としたのである。

織部は「茶の道は時の移るによりて改むることなり」と断言したという。

太閤時代には「太閤点前」とよばれ、別名を乱れ点前とよばれる点前を秀吉は自ら茶を点てふるまったといわれる。

また珠光飾りという点前があり、やはり珠光に関するものであり、後に徳川二代将軍・秀忠に茶道を師範するころには「葵盆」の扱いというものを工夫している

二つの例をあげたが、これら織部の工夫は平点前から真台子にいたる百段以上にわたる点前があるという。

筆者は理解度が低いので、資料による受け売りを願って説明したい。

古田家に伝わる茶書「古織喫茶録第二」のなかに「式正のかざりは、台子根本なれば、其義を守り、品をえらび、事を分け、草庵の喫茶にうつして古織一流となる也」と述べられていて、織部流式正茶法は台子式を根本として、その義をまもり、これに深い草庵の茶の精神をもつことである。

他の侘び茶式とくらべて第一に違うのはすべての茶道具を畳にじかに扱わず、すべて台というものに置いて扱う。

第二には濃茶、薄茶ともに一切呑み廻しということなく、すべて各服点である。とくにこの二点は侘び式とまったく趣を異にする書院茶たる所以である。

諸点前の考案、工夫の他にも織部の作意は数々の逸話として伝えられている。

例えば、露路に花ある樹を植えたり、鳥を鳴かせ、別室より琴の音を聞かせたり、茶室にほどよき明るさを取り入れたり、茶室に対する工夫、露地に関する造作、また茶に関する諸道具から料理にいたるまで、織部はヨーロッパ文明をいち早く吸収して、そこに自らの美意識を加え、豪華絢爛と咲き誇る桃山文化にふさわしい、式正・織部流の茶法を創成することに成功したのである。

秀吉の死と織部の隠居

慶長二年（一五九七）一月、豊臣秀吉は朝鮮への再征を命じる。慶長の役である。

七月、日本の水軍、朝鮮の水軍と交戦。

十二月、加藤清正など、蔚山で籠城する。

さきに亡くなった千利休の参禅の師であった大徳寺第一一七世・古渓宗陳禅師が六十六歳で入寂している。

長崎では、さきに捕えられたフランシスコ派キリスト宣教師および教徒、二十六名が磔殺されている。

慶長三年（一五九八）織部五十五歳

一月、毛利秀元等、蔚山城を救援して、明軍を追撃する。

この間、秀吉は病にかかり、七月、五大老、五奉行を定めて秀頼に対して忠誠を誓わせた。しかし秀吉の病はあつく八月十八日、六十三歳で没した。

〝つゆとおち、つゆときへにしわがみかな　なにはのことも　ゆめのまたゆめ〟と詠まれたのが辞世の和歌といわれる。〝つゆときへにし　なみだかな〟と述べる書もある。

秀頼はまだ六歳であった。秀吉が没すると、早くも石田三成は大老筆頭の徳川家康の討伐を企てたという。

また、徳川家康と前田利家は朝鮮からの撤兵を命じた。

朝鮮から、さきの文禄、いまの慶長の両役によってわが国に渡来してきた陶工の多くが帰化して、各地で製陶をはじめたのもこの頃である。

豊臣秀吉が八月十六日に病没すると、織部の実父・重定は、いたく秀吉の死をかなしみ、生前にうけた恩義を感謝して、老い腹を切って八月十九日秀吉に殉死した。

重定は秀吉に同朋衆として永年にわたり仕えていたのである。

秀吉につづいて実父・重定の死に直面して織部の傷心は計り知れないほど深いものだったと思われる。

織部はこれを契機に隠居することを決めた。そして織部正から織部助を名乗ることにすると共に、家禄三万五千石は長男の重嗣にゆずり、自らは重定の遺領三千石を相続し、宇治木幡の茶室「望覚庵」で茶湯三昧の生活に入ったのである。

続く

(司馬雑感　三十七)

寛斎と嘉兵衛と歳三
——三人の北海道

山田嘉久

昨年の夏は、偶然にも二度、北海道を訪ねる機会に恵まれた。

最初は親子三代の家族旅行で道南（函館、札幌、小樽）を巡った。そして二回目は司馬遼太郎同好会で陸別などの道央から「オホーツク街道」を回る旅だった。

尤も、「オホーツク街道」と名付けた街道は存在しない。網走から稚内に至るオホーツク沿岸の道を司馬遼太郎が勝手につけた街道である。この街道には八世紀頃（平安時代）から北方民族オホーツク人が定住していた。それが十三世紀（鎌倉時代）に忽然と消えるのである。この謎の民族とその文化を追ったのが「街道をゆく」（オホーツク街道）であり、さらに云えばその研究のために、わざわざ東京から僻地網走に居を移した一人の考古学好きの〈一介の理髪職人〉米村喜男衛の物語である。

米村こそ、司馬が好んで描く「漢」の一人であろうが、残念ながら考古学に極めて疎い私にとっては、それよりも北海道に関係の深い三人の「漢」に興味を持った。

三人とは「胡蝶の夢」の関寛斎、「菜の花の沖」の高田屋嘉兵衛、そして「燃えよ剣」の土方歳三である。

一　関寛斎と陸別

私にとって長年の念願だった北海道陸別町（旧斗満）を昨夏、初めて訪ねることができた。この地は司馬遼太郎の長篇「胡蝶の夢」の主人公の一人関寛斎の拓いた町である。

北海道でも知らない人がいるという人口三千人弱のちっぽけな町に、私が関心を持ったのは十年前に遡る。

平成十六年暮、銚子市で開催された「関寛斎シンポジュ—ム」に私は泊まりがけで参加した。当日は寛斎ゆかりの地—東金、佐倉、銚子、長崎、徳島、そして陸別—から百名近くが集まった。特に陸別からは町長以下十数名が大挙して空路来銚した。

会は金沢陸別町長の基調講演から始まったが、その後の質疑の時間に「七十歳を過ぎた寛斎がなぜ、北海道でも僻地の陸別の地に移ったのか」の私の質問に対して町長の答えは「明治に入って、名称も蝦夷地から北海道へと変わり、屯田制度などの開拓が始まったが、それは主に北海道西南部が中心であり、残ったのは条件の悪い陸別など北東部だった」の内容だったと思う。

ともかくそれを機に、同町長との文通が始まった。

同町長からはその都度、「是非、陸別にいらっしゃい」の誘いがあったが、なにしろ北海道のド真ん中に位置する日本一の酷寒の地を訪ねるのには相当な勇気が必要だった。そのうち当時はまだ通っていた第三セクター「ふるさと銀河線」も廃線となってしまい、遂に行くチャンスを失ってしまった。

それが今回、このツアーで実現したわけである。

なお、町長からの便りは、いつも同町の観光絵葉書が使われていた。

この絵葉書はユニークなもので、司馬遼太郎の似顔絵と司馬の名文が載っていた。

「陸別はすばらしい都邑と田園です。寛斎の志の存するところ、ひとびとが不退の心で拓いたところ、一木一草に、聖書的な伝説の滲みついたところです。森に、川に、畑に、それらのすべてが息づいています」

司馬に書いてもらった「陸別町史」の序文の一節らしかった。

1　関寛斎資料館

陸別での日玉はやはり二十年前に開館した「関寛斎資料館」だった。予想に反して、一寒村には全く似つかわしくない立派な資料館で、説明に当たった学芸員も一流の資料館でも充分に通用する優秀な人だった。

ここで寛斎の生涯、特に北海道での活躍を改めて知って、その凄まじさを再認識した。

寛斎が今までの徳島での平穏な医師生活をなげうち、愛妻あいを連れだって北海道開拓に向かったのは明治三十五年四月だった。彼は既に七十二才に達していた。

当初、札幌の次男又一宅に一家を構えたが、同年八月、ここに妻と五男の五郎を残して三男の余作と共に陸前に向かった。

しかし此処で待っていたのは、想像を上回る過酷な自然との闘いだった。

山菜や川魚を食糧に開墾を続けたが、やっと出来た農作物も殆どネズミや野兎に食い荒らされてしまった。二年目には大雪で馬四十頭を失った。

そして何よりも彼を落胆させたのは、妻あいが陸別を見ることなく死去したことだった。それに加えて又一も日露戦争で召集され、関農場も崩壊の危機にさらされたが、寛斎の意思は固く、種馬二頭で再スタートした。

この頃、彼は豊頃の二宮尊親（尊徳の孫）を訪ねている。自作農育成の実践を視察した寛斎は自分の方針に自信をつけた。その後も二回ほど二宮農場を訪問しているが、それをヒントに明治三十八年には「積善社」を設立して開拓計画は順調に進んだ。貸付許可面積は最大で七、二〇四ヘクタール（約六百万坪）に及んだ。

明治四十四年には「小作契約」を定め、資力のない入地者でも自作農業の育成を図った。これは興復社（二宮農場）のような選ばれた者だけでなく、更生免役囚なども含まれた彼の考え方だった。

八十歳を超えた寛斎は、変わることなく厳寒の斗満川で水浴し自らを鍛え。徳島同様に無料診療を続けながら、自作農育成に奔走していた。

しかし札幌農学校の卒論に「十勝国牧場設計」を提出、近代的農業経営を目標とする又一とは次第に意見が合わなくなって行く。

その頃、寛斎に大きな喜びをもたらしたのは徳富蘆花との交流だった。

蘆花もその訪問記を代表作「みみずのたわごと」に書いている。

「明治四十一年四月二日の昼過ぎ、妙な爺さんが訪ねてきた」で始まる「関寛翁」の文章は屈指の名文であろう。

大正元年（一九一二）十月十五日、寛斎は武士道にも似た形で八十二歳の自らを決したのである。そのことを蘆花は「形において乃木翁に似て、思想においてトルストイ翁に似ている」と書いた。

司馬も長篇「胡蝶の夢」を書くに当たっては、この「みみずのたわごと」を大分、参考にしている。

寛斎の墓にも詣でた。

資料館の近くに高さ五十メートルほどの小山があり、此処に愛妻とともに眠っている。寛斎が死ぬと、その遺言通り、死体にふだん着を着せて、数人の者がかついて、寛斎が最初に鍬をおろした丘（後に青龍山と名付けられた）にのぼり、その亡妻の横に塚穴を掘って埋められた。

彼の死後、その名も関神社として毎年十月十五日の命日には町民が集い、寛斎の遺徳を忍んでいると云う。

また、この辺り一帯は関公園の名で町民憩いの場として親しまれている。

陸別の人にとって寛斎の名は西郷隆盛や福沢諭吉の名に等しいとも司馬は書いている。

2　それまでの寛斎―東金から斗満へ

寛斎は文政十三年（一八三〇）、上総国山辺郡中村（現千葉県東金市）の農家の長男として誕生した。

嘉永元年（一八四八）、佐倉順天堂に入門、佐藤泰然の門下生となった。同級生に後に泰然の養嗣子となった山口舜海（後の佐藤尚中、東京順天堂の設立者）がいる。

やがて頭角を現した寛斎は当時の経験を纏めた「順天堂経験」は現在でも第一級の貴重な医学資料とされている。

嘉永五年（一八五二）、順天堂を卒業した寛斎は銚子で開業するが、この地でヤマサ醤油の七代目浜口梧陵と出会い、後の運命に大きく関わることになる。

当時、江戸ではコレラが大流行していたので、梧陵は寛斎に長崎留学を強く薦めた。しかし寛斎は既に結婚して三人の子供もいたので、最初は躊躇したが、梧陵は寛斎の交通費、留学費だけでなく妻子の生活費までの負担を約束したので、寛斎はようやく長崎でポンペの教えを決意した。三十歳。

なお、この時、彼と同じ長崎入りをしたのが、司馬の長篇「胡蝶の夢」の同じ主人公となる松本良順と司馬凌海である。

長崎での留学を終え、銚子で再開業した寛斎であったが、すぐに阿波蜂須賀家典医（二十五人扶持）の口がかかる。

慶応四年（一八六八）、戊辰戦争が始まると藩主蜂須賀茂韶（もちあき）は譜代大名であるにかかわらず、いち早く新政府軍に参入したので、寛斎も隊付の軍医として従軍、総督府からは神田三崎町の講武所に野戦病院を開設するよう要請される。これは官軍事務判事であった大村益次郎が寛斎の医者としての経歴、実力を買ったためと云われる。

上野戦争での寛斎の働きは目覚ましく、居合わせた西郷隆盛から感謝激賞されている。続いての奥羽越列藩同盟討伐戦では奥羽出張病院頭取を命ぜられた。この時の幕府軍の医療責任者はかっての同僚松本良順だった。

戊辰戦争が終わり、東京に凱旋した寛斎だったが、なぜか大村益次郎に辞表を提出してしまう。そればかりか逮捕された松本良順の助命運動までしているのである。矛盾と混乱の維新政府での宮仕えを望んでいなかったためだろう。

新政府では寛斎は当然、軍医総監の地位が約束されていた筈だが、彼はすべての官位を捨て、徳島に帰り一町医者となるのである。

皮肉にも、彼に替わって軍医総監となったのは、助命された良順だった。

徳島での寛斎はかねての素願である貧者に無料施療を続けたので、その付近の小路は寛斎の徳をしのんで「関の小路」と愛称された。

明治三十四年に金婚式を祝った翌年の明治三十五年に北海道開拓に大いなる意義を見出した彼は妻あいと四十年近い歳月を送った徳島を後にするのである。

この時、詠んだ歌が「世の中を渡り比べて今ぞ知る阿波の鳴門は波風ぞなき」

寛斎の人生の中で、徳島での日々は最も安定していたときだったのだろうか。

二　嘉兵衛と箱館

私の今回の北海道旅行で、まず訪れたのは函館の朝市だった。

数多くの小さな食料店がびっしり店を並べているなかに「高田屋」という看板が目についた。もしや嘉兵衛関係の店ではないかと、店先の中年の男に声をかけた。するとその人は、よくぞ聞いてくれたというような顔をして、私を横道に停めてある小型トラックまで案内してくれた。そのトラックには「高田屋嘉兵衛商店」と書かれていた。

帰宅後、偶然見たＮＨＫ（Ｅテレ）「知恵泉」（高田屋嘉兵衛）でこの人が嘉兵衛七代目子孫として出演していた。

もしも今、江戸時代の人間がここに現れてきたと仮想するならば、まず第一に会いたいのは高田屋嘉兵衛である。といったのは司馬遼太郎である。

司馬は嘉兵衛を近世史上再認識すべき人物と見なして「菜の花の沖」という作品に仕上げた。彼は戦国時代や幕末維新、明治時代の人物を主人公とした長篇を数多く書いたが、江戸時代の人物を描いた長篇は本作品のみである。

また嘉兵衛の故郷である淡路島洲本市での講演で、こうも言っている。

「英知と良心と勇気を尺度とするならば一番偉かったのは高田屋嘉兵衛だと私は思っています。今でも世界のどんな舞台でも通用できる人ですし、世界史的に見ても偉い人でした。」

1　北の豪商

蝦夷地進出の意思を固めた嘉兵衛はまず箱館を拠点として定めた。

そして西廻航路を往来しながら各地物産の交流をする「北前船」の事業を展開していった。（函館の嘉兵衛資料館にも北前船の模型が展示してあった。）

幕府の蝦夷地直轄政策と相まって拡大の一途を辿り、嘉兵衛は「北の豪商」としての基礎を確立していく。ニシンなどの北海の産物は主に綿花や菜種の肥料として使われたのである。

かくて当時人口三千人ほどの寒村であった箱館は、嘉兵衛によって街としての発展の基礎が作られていった。湾内の埋め立て、堀割など港としての整備、道路改修、造船所などを作るなど嘉兵衛の功績は大きく、「箱館の開祖」とも云われた。

（なお、箱館は明治二年に函館となった）

寛政十年（一七九八）には幕府の近藤重蔵の要請を受けた嘉兵衛は国後島から択捉島への航路を拓き、未開の択捉島に多くの漁場を開拓した。

そして重蔵らと共に択捉島に「大日本恵土呂府」の標柱を建立した。

享和元年（一八〇一）には苗字帯刀を許され、文化三年（一八〇三）には蝦夷地産物売捌方にも任命されている。

2　ゴローニン事件

このようにようやく嘉兵衛に人生が上向きかけたと思われた矢先、降って湧いた災難が嘉兵衛を襲う。

この前後、極東への進出を目論むロシアの軍艦が蝦夷地周辺に出没していたが、国後島で測量中であったディアナ号艦長ゴローニン（一七七六―一八三一）を幕吏が捕縛し松前に幽閉するという事件が起こった。

同艦副長リコルドはゴローニンと漂流日本人数名との交換を幕府に打診したが、拒否されたため操業中の嘉兵衛らを拉致した。

嘉平衛はカムチャッカでの幽閉生活の間、ロシア語を学び、ロシア人の非を訴えるが、次第にロシア人の行動の中に信義を見出すと、ゴローニンを助ける立場に変わる。このことについてリコルドは

「嘉兵衛は、どういう状況下でも言葉にうそがなく、快活で度胸が大きく聡明な人物」（日本幽囚記）

と書き残しているという。

幽閉生活を解かれた嘉兵衛は、リコルドによって国後島へ送り届けられた。

以後、嘉兵衛はゴローニンの釈放と日露関係の修復に尽力。遂にゴローニンの釈放を実現させた。この頃には嘉兵衛とリコルドの間には固い友情が芽生えていた。ゴローニンを乗船させ、箱館湾を後にするディアナ号の艦上にはリコルド以下艦員全員が整列し「ウラヤ、タイショウ」の声が響いた。

3　高田屋嘉兵衛資料館と銅像

資料館は昭和六十一年開設されたという。それまで海産物倉庫として使われていた建物を転用した。

司馬が「菜の花の沖」を書き終えたのが昭和五十七年だから、それ以降、嘉兵衛の名声が全国的になったのを機に開設されたのであろう。

一号館と二号館に分かれ一号館は明治三十六年築造。北前船の重石として使用した越前石を利用した石造りである。二号館は大正十二年築造で鉄筋コンクリート造り。

二号館には日本最古のストーブの復元品が展示されていた。安政三年（一八五六）に五稜郭を設計した武田綾三郎（後述）が箱館入港中のイギリス船にあったストーブを参考にして見よう見まねで完成させたとの案内板があった。

函館山麓にある「高田屋嘉兵衛の像」は昭和三十三年開港百年を記念して、函館市が建立したもの。嘉兵衛がロシアとの交渉に臨むときの、松前奉行の書簡を手にした正装の姿となっている。

この銅像について司馬は「街道をゆく」（北海道の諸道）でも触れている。

司馬は日本の銅像についてはかなり批判的である。その最たるものが中津市内のビルの屋上に着流しの福沢諭吉の銅像を見たとき

〈観音さまであれ、歴史上の人物であれ、置くべき空間を考えず、いわば所かまわずに立てるというのが、日本の銅像らしい〉（中津、宇佐のみち）と皮肉っている。

嘉兵衛の銅像について悪口を書いていないのは、やはり嘉兵衛像が函館の風景とマッチしているためだろう。

4　函館ハリスト正教会

函館の坂道にある函館ハリスト正教会も覗いてみた。

勿論、これを建てたのは東京駿河台のニコライ堂を建てたニコライ（一八三六―一九一二）だが、ロシアは安政五年、箱館に領事館を置いた。幕府が各国との通商条約を結んだからであるが、嘉兵衛がカムチャッカへ連れ去られてから四十六年後のことである。

ニコライは二代目領事館付き司祭として日本にやってきたが、そのとき彼は尊敬する嘉平衛の写真を持ってきたとは驚きだった。

〈それほどにこの若い神父は嘉兵衛というすでに歴史上の存在になった人物が好きであった〉

坂の上から見下ろす函館の街が素晴らしかった。

5　それまでの嘉兵衛―淡路島から北海道へ

淡路島の貧農の子に生まれた高田屋嘉兵衛（一七九六―一八二七）は幼名を菊弥といったためキッキャと呼ばれていた。キッキャは十一歳で自ら家を出た。間もなく義叔父の和田屋喜十郎の家に住み込む。淡路―大阪間の航海を体験したのは十八歳の時、兵庫に赴いて本格的な航海を学ぶのは二十才の時である。

兵庫に出た嘉兵衛はまず水主の仲間に潜り込んだ。やがて抜躍を受けて雇われ船頭となり、さらに郷里の弟たちに助けられて自分の船を持つ身上となって、屋号を高田屋と名乗るに至る。

一七九六年、二十八歳で当時としては最も大きい「辰悦丸」（千五百石積み）を新造。

その頃、江戸幕府は択捉島との航路開拓を目指しており、船頭を探していた。これを伝え聞いた嘉平衛はこれに応募して、幕府の御用船頭に登用された。

この頃から箱館を拠点とした嘉兵衛の活躍が始まる。

三　五稜郭と土方歳三

1　司馬の好きな「漢の美学」

幕末の三人の蘭方医を描いた「胡蝶の夢」の主人公は江戸幕府最後の奥医師松本良順であり、関寛斎は最初は脇役にすぎない。それが司馬の関心は良順から佐渡出身の語学の天才司馬凌海（島倉伊之助）に移って行く。同

じ頃、書かれた「佐渡のみち」は伊之助の生家を訪ねる「街道をゆく」になっている。

しかし明治に入って寛斎がすべての官位を捨て、北海道開拓に乗り出す頃になると、司馬は猛烈に寛斎に傾倒してゆく。

寛斎に司馬の好きな「漢（おとこ）の美学」を見出したからである。

「街道をゆく」でも「阿波のみち」「北海道の諸道」と寛斎は頻繁に登場している。

寛斎に限らず、嘉兵衛も歳三も「漢の美学」の実践者だから、彼らの負の部分ついては司馬が触れたがらない。

寛斎についていえば彼の自殺の原因ともなった家族内でのいざこざ（裁判にも持ちこまれた）については、司馬はあまり書いていない。

また嘉兵衛については、例えば昭和四十年代にベストセラーであった「日本の歴史」（中央公論社刊）では歴史家の北島正元は

「かれ（嘉平衛）はいつも二人の妾をつれて航海したといわれる精力的な男でありー」と書いている。そのため妻は精神異常をきたし離婚に至っているのは周知の事実だが、しかしこのようなことは「菜の花の沖」で司馬は一切触れていない。

「漢の美学」を書くことを信条とした司馬は主人公の負の部分については極力書くことを避けた。

その代表的なものが「燃えよ剣」の土方歳三であろう。

「池田屋の変」の発端となった長州藩士古高俊太郎への凄惨なリンチは土方の仕業であることは明白な史実であるにも拘わらず、司馬は殆ど触れていない。

2　五稜郭の戦い

土方の最期の戦場となった五稜郭は八月に訪れた。

まず五稜郭築城百年を記念して建てられたという五稜郭タワーの展望フロアーから五稜郭を象徴する星型の全景を見下しながら、予備知識を得た。

五稜郭は安政元年（一八五四）の日米和親条約により開港した箱館の北方警備強化のために造られたもので三〇万両という多額の工費を要した。

設計者は蘭学者の武田斐三郎。彼は箱館港に入港していたフランス軍艦の士官から紹介された情報を参考にして、ヨーロッパの「城郭都市」をモデルに土塁で守られた奉行所庁舎を作った。

この土塁は、銃や大砲などを使用した戦闘に対処するための「稜堡」と呼ばれる五つの突角を持ち、星型の水掘で囲まれていたので、通称「五稜郭」と呼ばれるようになった。

その奉行所庁舎は公園内に復元されていた。

歴代の箱館奉行には村垣範正や竹内安徳など「目付」や「外国奉行」「勘定奉行」など幕府の要職を務めた開明的な人物が任命されている。村垣はその後、修好条約

批准書交換の使節としてアメリカへ派遣された。

しかしこのように堅牢につくられた筈の五稜郭も実戦には弱かった。

そのため五稜郭には「コケおどし」とか「役立たず」などの悪評が常に付きまとっている。ひいては設計者の武田まで「山師」とまで呼ばれることがある。

司馬も随筆「五稜郭百年」で、実際は西洋式でも日本式でもなく一種のハッタリ設計だったと厳しく批判している。

五稜郭の脆弱さを知っていたのか、陸軍奉行並の土方をはじめ、フランスの新戦術を学んだ陸軍奉行大鳥圭介もフランス人顧問も誰も五稜郭での籠城戦は考えなかった。従って五稜郭での攻防戦は全くない。

歳三は常に城外に打って出た。

「二股口の戦い」では押し寄せる圧倒的な新政府軍を二度にわたって食い止めた。司馬の「燃えよ剣」では二股を日露戦争における二〇三高地に相当していると書いているのは面白い。

更に歳三を旅順のロシア陸軍のコンドラチェンコ少将に酷似しているという。

ともに育ちが悪い。学問がないが、最も戦好きでしかも巧者であり、将士の信望を一身に集めていた。

〈旅順要塞のつよさはベトコンの強さではなく、コンドラチェンコの強さであると云われた〉（坂の上の雲）

果たしてコンドラチェンコ少将の戦死後、ロ軍の士気が一挙に衰えた。

歳三が戦死したのは「一本木関門」である。

歳三は新政府軍が占領した箱館を奪還し弁天岬台場に孤立した味方を救うため一隊を率いて五稜郭を出撃。途中「一本木関門」を越えて箱館へと進んだが、馬上で戦闘の指揮を執っている時に銃弾を受けて戦死した。享年三十五歳。

なお五稜郭歴史回廊に描かれた歳三の最期の姿は有名な黒いコート姿ではなく、新撰組時代に愛用していた背中に虎を描いた陣羽織姿となっていた。

最期の地には「土方歳三最期の地碑」が建っていた。東京都港区にある沖田総司の墓と同様、若い女性の訪問が多いと云う。

「シノピリカいずこから見ても蝦夷の月」

柄になく俳句を趣味とした歳三が戦死の前日、詠んだ句という。なおシノピリカとは歳三が唯一覚えたアイヌ語で「ひどく佳い」の意らしい。

3　それまでの歳三―日野から北海道へ

歳三は天保六年（一八三五）武蔵野国多摩郡石田村（現日野市石田）の農家に生まれた。少年期の歳三は地元では「バラガキ」（乱暴者の意）と呼ばれた。

その後、実家秘伝の「石田散薬」を行商しつつ、天然理心流を学び、近藤勇と出会う。

文久三年（一八六三）、近藤らとともに将軍家茂警護のための浪士組に応募し京都に赴く。その尊王攘夷を主張する浪士組（清川八郎ら）から分かれ、芹沢鴨を総師とする「新撰組」が誕生。

その後、芹沢らを自らの手で暗殺、権力を握った近藤が局長、歳三が副長の地位に就いたが、実際の指揮命令は副長の歳三から発したとされる。

新撰組が雷名をあげたのは、元治元年（一八六四）の池田屋ノ変だが、それを機に京都を舞台とした倒幕派と幕府側との革命戦争が続く。

慶応三年（一八六七）、将軍慶喜は大政奉還、同年十二月には王政復古の大号令が発せられるに至り幕府は事実上崩壊した。慶喜は大坂城で謹慎、幕府軍も京都を去ったが、新撰組のみは伏見奉行所に留まった。この伏見で近藤は狙撃され、以後の新撰組は歳三が指揮を執ることになった。

鳥羽伏見の戦いが起こったのが明治元年一月三日。これ以降、幕府軍の敗北が続くが、逆に歳三の運命はいよいよ輝きを増してゆく。

敗走してゆく幕府軍の中で最後まで降伏せず〈最後のたった一人の幕士として残り、最後まで戦う〉（燃えよ剣）のである。

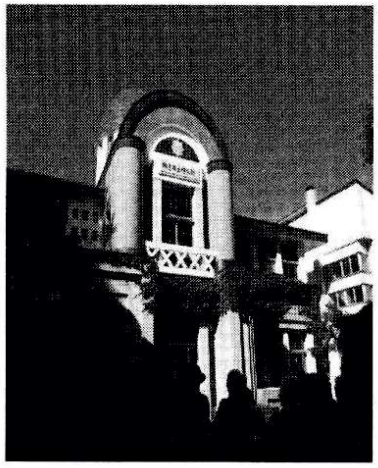
大阪から撤退した後、甲州勝沼の戦いで敗戦。その後、流山で再起を図ったが、新政府軍に包囲された近藤が投降。歳三は新撰組を山口二郎（斉藤一）に託して会津に向かわせる一方、自らは数名の隊士のみを連れ大島圭介らが率いる旧幕府軍と合流した。宇都宮城の戦いで勝利したものの足を負傷して会津に護送され三ヶ月の療養生活を送る。

全快して会津の防戦に尽力するが、敗戦により仙台に向かう。此処で榎本武揚率いる旧幕府海軍と合流、蝦夷地に渡った。

その最後の戦いが北海道の五稜郭であった。

〈歳三は馬腹を蹴ってその頭上を跳躍した。が、馬が再び地上に足をつけたとき、鞍の上の歳三の体はすさまじい音をたてて地にころがっていた。（中略）歳三は死んだ。〉

「燃えよ剣」のなかの一文である。



関寛斎記念館（陸別町）

漢詩

潮騒錄（八十）

鯨游海

地中海贊歌5伊太利亞・那波里

平成二六年四月

那浦里娘何樂天
豈唯陽性氣遺傳
況更邦貝無言戒
難測人生一寸先

押韻・天 傳 先

〈地中海贊歌5伊太利亜・那波里〉

那浦里っ娘は　何ぞ楽天なる
豈に唯に　陽性の気の遺伝のみならんや
況や更た邦貝の無言の戒に　於いてをや
「人生一寸先は　測り難し」との

〔注　解〕

「那浦里」の浦は詩的宛字。本来は波と書く。

那波里の郊外に彼の邦貝の遺蹟が在る。AD一世紀のベスビオ火山の噴火により一瞬にして降灰の中に埋没してしまった。十八世紀に至り遺跡が発見され世界を驚かせた。以来復元工事中。勿論世界遺産の魁である。

豈唯A況B＝あに唯にAのみならんや況Bも＝どうしてAだけと限ろうか況や更Bも＝豈を用いた反語の累加形。

楽天的なのは陽気な性質だけではなく、邦貝の遺跡の「鎖に繋がれた奴隷や家畜のミイラの姿」から訓えられた「人生一寸先は闇」の自戒から来る習性なのだ。

〔口語訳〕

那波里っ娘は何故こうも陽気で楽天的なのだろうか。

それは唯だ単に陽気な性質の遺伝にだけあるのではなく、更に加えて邦貝の遺跡が示す無言の訓戒にこそあるのだろう。即ち、

「人生一寸先は闇」という。

☆明眸のメゾソプラノの那波里娘
歌ふが如く我に問ひかく

地中海贊歌6伊太利亞・獅子利島墨西拿
平成二六年四月

古代帆船幾往還
遙望羅馬海玄關
又逢南歐好風景
路傍彈吟恍惚顏

押韻・還關顏

〈地中海贊歌6伊太利亜・獅子利島墨西拿〉

古代帆船　幾往還
遥かに羅馬を望む　海の玄関
また逢ふ南欧の　好風景
路傍の弾吟　恍惚の顔

〔注　解〕

イタリア半島南西の海がティレニア海。半島の長靴の先端と海峡を隔てて三角形の獅子利島が在り、その港湾都市を墨西拿という。「古代の街」という意味で、戦略上重要な位置に在り、城壁を巡らした要塞（砦）の港であった。地中海の十字路で、羅馬への玄関でもあった。

転句＝杜甫の詩・江南逢李亀年「…正是江南好風景　落花時節又逢君」より一部引用。恍惚＝うっとりする様。

南欧特にイタリアは音楽の先進国。

☆朗々と路傍に響くテノールは
聖ルチアを終へて恍惚

地中海贊歌7突尼西亞・突尼斯
平成二六年四月

岸頭迎客駱駝群
貢獻古來交易勤
縱暑風乾寧爽快
未知大陸見且聞

押韻・群勤聞

〈地中海贊歌7突尼西亜・突尼斯〉

岸頭に客を迎ふ　駱駝の群は
貢献す古来　交易の勤に
縦い暑くとも風乾きたれば　寧ろ爽快
未知の大陸　見且つ聞かん

〔注　解〕

阿弗利加の最北端中央部の小国突尼西亜。東は埃及や利比亞、西は亞爾西里亞や摩勒克等の大国に囲まれている。巨大な船が埠頭に接岸する。海の深いことが判る。

驚いたことに駱駝の群が船のタラップの前に整列し私たちを出迎えてくれている。この瞬間、ここが元仏蘭西の植民地で未知の阿弗利加であることを痛感した。

突尼西亞とは昔の加爾多克。商売に長け地中海貿易の覇者となったものの忽ち亡んだ。不徳の故と史家は言う。

☆遥々と来つるものかなこの大地
三歩歩みて確と踏みしむ

《漢詩の流れ68》飛鳥時代。大友皇子、大津皇子。

大友皇子（六四八～六七二）。天智天皇の子。叔父である大海皇子と政権を争い（壬申の乱）敗走、二四歳で薨去した悲劇の王子。

侍　宴　（宴に侍す）

皇明光日月　皇明日月と光き、
帝德載天地　帝徳天地に載す。
三才竝泰昌　三才並びに泰昌、
萬國表臣義　万国臣義を表す。

わが国最初の漢詩集「懐風藻」の巻頭の一首。

三才＝天地人の万物。日本国全てのものが各々その所を得て隆昌に発展し、海外の万国も臣順し来っている。

荘重、典雅ではあるが類型的で平仄、押韻も未知。

大津皇子。天武天皇の子で謀反の罪で死を賜わった辞世の詩。

臨　終　（りんじゅう）

金烏臨西舍　金烏西舎に臨み、
鼓聲催短命　鼓声短命を催す。
泉路無賓主　泉路賓主無く、
此夕誰家向　この夕誰が家にか向かはむ。

金烏＝太陽。鼓聲＝時刻を告げる太鼓の音。

（訳）日は西に傾むき、夕刻を告げる太鼓の音は短かい命を更にせかせる如く聞こえる。死出の旅路には客も主もなく全くの自分独りだけ。この夕刻一体どこに向かうのか。

殉教（七）

鍋屋次郎

慶長十八年（一六一四）十一月二十一日はグレゴリオ暦の十二月二十四日で、教会ではクリスマス前夜のミサがあった。

家康が発したキリシタン禁教令により、九州有馬や各地でのキリシタン弾圧の激しさが伝わってくる。正規な情報ではないが、全国に薬の行商に歩いている越中の薬売りが、各地で見たこと、聞いたことを加賀でも話している。

いつ、この加賀に弾圧の嵐が吹くだろうか、と思いながら右近は教会の三階から町並みを眺めていた。お城を除いて三階建は教会だけなので、どこの家の屋根も雪に覆われた一面の雪景色がよく見える。

教会の北方向には二年前に客将の禄高に応じて作られた屋敷が並び、右近邸、内藤如安邸や豪姫（備前様とも言われている）などの屋敷の屋根も見える。

雪は止んでいるが黒雲が空一面を覆い、今にも再び降りだしそうな気配だ。

教会での明日のクリスマスのミサと祝会をどうするか。キリシタン弾圧の手がいつ来るかわからない状況から、お城への遠慮から自粛して、規模も人員も最小限の状況でミサだけにするか、どうするか、教会内部でもいろいろと議論されたが、右近が

「お城には一切報告もしない、許可も取らない。教会内部の宗教行事として、多くの信徒にも呼びかけて盛大とはいかないまでも楽しいクリスマスにしよう。おそらくこれが最後になるだろう」

の発言で、ミサも通常通り、クリスマス祝会の寸劇も例年通り行うこととし、城方には一切報告せず、前田家でただ一人のキリシタンの豪姫にも伝えることなく行うこととしていた。

教会の一階には明日のミサと聖体拝領の準備が整えられ、二階には、木と藁で作られたノアの方舟、いろいろな動物一つがいの名前を書いた多数の布きれ、劇の背景の洪水の絵などが置かれている。

グレゴリオ暦十二月二十五日のクリスマスの朝は早くから一般信徒が集まり、ミサも聖体拝領も滞りなく行われ、午後からの祝会の寸劇は右近の孫五人、ルチア、宇喜多休閑の三人の息子たちが練習どおりに行い、やがてノアが放った一羽の小鳩がオリーブの葉を加えて方舟に戻ってきたところで迫真の演技は終わった。右近が驚いたのは老人ノアに扮していたのは、横山康玄であった。加賀藩重鎮ともいうべき家老横山長知の嫡男でルチアの夫である。劇が終わってルチアとともに右近のところに挨拶に来た康玄を見た右近は、高山家へのキリシタン糾弾のときルチアと康玄をどうするかを考えていた。右近の胸中は、康玄は家老の嫡男であり、高山家への糾弾の影響を横山家には一切かけてはならない、の思いで一杯であった。

翌日朝早く、豪姫の侍女が高山家にやってきて

「豪姫様が右近様にお目にかかりたい。お越し願えないかと仰せです」

とのことで、右近は早速着替えて三軒先の豪姫の屋敷に出かけた。

外は昨夜遅くから今朝明け方まで降った雪が積もり、豪姫屋敷は門前の道、門から玄関までの庭は除雪しなければ歩くことも困難な状態になっている。

右近はすぐに引き返し、このところ右近屋敷と教会への探索調査に備えて、文書等の焼却のため右近知行地の末吉城から呼び返していた篠田伊織と下男三人に豪姫屋敷の雪掻きを命じ、それから改めて豪姫を訪ねた。

部屋に通されると、部屋は火鉢の炭火が赤々と燃えて温かく、やがて姿を現した豪姫は、茶菓の用意をしている侍女に、連絡するまでこの部屋に入らないように指示した後

「高山様、早速の雪掻きのお手伝い、有難うございます。またあなた様を早くからお呼びして申し訳なく思っております」

「今日はこれといった予定はなく、むしろ豪姫様にお目にかかることができ、大変うれしく思います。また、こちら様は男手がございませんので、お手伝いは当然のことですので、お礼を言われると逆に恐縮します」

お互いの挨拶が終わって、豪姫は膝前の畳に濃紺の布を広げ、持ってきた包みをおもむろに開き、包みの中の

ものを取出し、その布の上に一つずつ丁寧に並べ始めた。右近が見ると、それは豪姫愛用のロザリオであり、十字架であり、キリシタン関係の数冊の書籍であった。そのうちの一冊の本の表紙を見て驚いた。イエズス会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラが「霊操」について記載した難解の本である。右近はラテン語版を読んだことはあるが、なかなか理解できる本ではない。長崎で印刷された日本語版は右近の手には入らなかった本で、豪姫様がこれをお読みになっていたことに内心驚いていた。豪姫が並べた品を見つめている右近に

「実は長岡の兄から手紙が来て、私の持っているキリシタン関係品をすべて高山様に預けるように、と言ってまいりました。今回のキリシタン禁教令で、前田家の内部から発覚することがあってはならないことからの指示と思います。高山様、よろしくお願いします」

といった後、並べられた品を一つ一つ手に取り

「このロザリオも、十字架も、この本も、本当は手放したくないものです。信仰上の思い出の品々ばかりです」

右近には慰める言葉が出てこない。やがて

「何もなくても、デウス様は我々に祈ることを残されています。大殿のご健康と、信徒一人一人がこの荒波の中で、信仰を持って生きてゆくことができますように、デウス様に祈りましょう」

右近が豪姫を見ると目をぬぐっていた。右近が続けて

「かしこまりました。私も大殿には何か月もお目にかかっていませんので、ご挨拶かたがたできるだけ早くお届けしてまいります。」

「私も数えると、もう一年くらい兄には会っていません。手紙が来るということは、お元気にされていることとは思いますが、お目にかかった折にはよしなにお伝えください」

「ところでこの本ですが」

と言いながらイグナチオ・デ・ロヨラ著の「霊操」(注①)の本を手にして

「豪姫さま、勝手なことを申し上げることをお許しください。この本を私に貸していただきたいのですが。ラテン語版は持っていますが難解の箇所が多く、長崎で印刷された日本語版は探したのですが手に入らなくて、日本語版で勉強しなおしたいのです」

「私はもう持っていることが許されないのですから、右近様、あなたに差し上げます」

の言葉に、右近は嬉しくて

「ありがとうございます」

と、何度もお礼を言った。

(注①) 霊操とは、キリストの言葉、例えば「私は道である。私を通らなければ、誰も御父のもとに行くことはできない」(新約聖書ヨハネ十四の六)の言葉を瞑想することで、その言葉の真の意味を己のものにしてゆく方法であり、日本の禅に通じている。岩波文庫「霊操」イグナチオ・デ・ロヨラ著、門脇佳吉訳参照。

玄関を出ると、豪姫の屋敷内では、篠原伊織の指示で男たちがせっせと雪掻きをしていた。右近は門前の道路の雪も綺麗にするように指示をして、伊織に

「ここが終わったら私のところに来るように」

と一言言って自宅に戻った。

妻のジュスタに

「今から豪姫様の使いで、長岡城の大殿のところに行ってくる。馬で行くから今日中に帰ってこられるだろう。篠田伊織を供に連れてゆく」

と言って、さっさと馬の準備に取り掛かった。

豪姫屋敷の雪掻きから戻ってきた篠田伊織を伴って、高岡めがけて疾走した。一刻たったころ、街道から高岡城方向に入ってゆく道に出た。道幅はあまり広くなく積雪で馬が走れない。高岡城を築城した右近はこの辺の道は熟知しているので、馬を下りて轡をとって雪の少ないところまで出て、また馬に乗り城を目指した。

高岡城の門衛は顔なじみで、すぐ利長の居室に通された。

右近は利長を見て、顔のやつれと、肩から体全体が小さくなったような印象を受けた。

「右近、久しく会わなかったな。でも半年くらいか。息災で何より」

その声を聞いた右近は、眼前のやつれた姿とは異なり、声には力強さが感じられたのでほっとして

「大殿こそお元気でおられますことをお喜び申し上げます。実は今朝、豪姫様より大殿様に届けてほしいと言われました品をお届けにまいりました」

「なに、今朝預かってもう来たのか。いかにも右近らしいのう」

「江戸の雲行き次第では明日をもしれぬ我が身でございますので」

「それはそうだが。もうじき正月だ。心配していることは年を越してからだろう。どれ、豪から預かってきたものを見せてもらおう」

右近が利長の前に広げたロザリオや十字架を手に取って

「このロザリオはギヤマンだ。この十字架は金で作られ、その上のゼス・キリストは銀かな。豪のしっかり握りしめた跡らしい曇りがある。この本は何かな」

「はい。イエズス会創立者が書いた霊操についての指導書です。豪姫様はこのような難解な書物もお読みになっておられたのですね。あちこちに何度もめくられた跡が

あります。私は日本語版を読んだことがなかったので、豪姫さまに貸していただきたい、とお願いしましたところ、差し上げます、と言われて厚かましくも頂戴いたしました。よろしいでしょうか」

「よろしいも何もない。右近が読んでくれるなら、豪もこの本も喜ぶのではないか」

と言って右近に本を渡してから

「そうか、このようなものが万一前田家から出たら、誰も抗弁できないだろう。余はそれを心配して豪に手紙を送ったのだ」

一息ついて

「江戸のキリシタン取締りについての情報は何か入っているか」

「全国各地での信徒摘発と、ここまでやるのかと思われる拷問の情報しか入っていません」

「そうか、正月早々には幕閣の実力者大久保忠隣（ただちか）が、キリシタン取締のため京に上り、京都所司代を直接督励することになる」

「上方は一層厳しくなりますね」

「正月明けに何か起こると考えておいたほうがよいだろう。ところで、そちの茶を所望したい。茶室で点ててくれないか」

「喜んで点てさせていただきます」

右近が茶室に入ると、炉には炭火が燃え、釜、茶碗、棗、茶入れ、茶杓、柄杓など水屋で用意するものはすべて用意されている。右近が点前をする場所に座って利長の姿がどこかと見渡していると、躙り口が外から静かに開けられ、利長が入ってきた。

茶室は利休好みの黒を多く取り入れ、壁にはめられた障子を通して入ってくる外の明るさだけのうす暗い三畳の中に、床の間を設け、炉を掘っているので、亭主と客との距離は短く、亭主・客ともに相手のことを思いやりながらの会話が落ち着いてできる。

利長は作法通り亭主役の右近に静かに挨拶し、右近の点前を食い入るように見つめている。右近が茶碗、棗、茶杓と順次清めていく所作を、いつもながらその丁寧さは他の茶人の及ぶところではないと思っていた。

点前での柄杓の扱いが流れるような所作で、やがて点てられた黒楽茶碗が利長の前におかれた。利長が作法通り服し終えて

「お見事なお点前、利長、感じ入りました。いつもと同じ茶を使っていますが、茶の味が一層味わい深く感じました。有難うございました。どうぞおしまいください」

の挨拶で、右近は使った道具類をしまうために改めて清めはじめた。それを見終わって

「右近殿、貴殿はどうしてそんなに丁寧に諸道具を清めるのか」

「はい、今は亡き蒲生氏郷殿からも　清めすぎ　と言わ

れたこともあります。利休師からお茶の点前は禅の言葉の一期一会の心で客をもてなすものと教えられ、ただ、それを実行しているだけです」

「右近殿と今日会って、茶会ができたことはよかった。金沢でいろいろなことがあると思うが、豪のことも引き続きよろしく頼みます」

この利長の言葉で高岡城を辞し、金沢に向かった。帰りの途次、右近は

「今日の茶席は、大殿が右近とは今日が最後の思いを持って設けられた茶席」

であることを強く感じ、感謝の気持ちを新たにし、自分自身、加賀での最後の日を迎える準備を整えなければならない思いを強く感じていた。

明日は大晦日、城からは正月恒例の殿様への賀詞言上日程の触れがまだ来ていない。右近のところだけ通知がないのか心配になり、横山康玄がルチアとともに年末の挨拶に来たので、念のため聞くと、父もまだ聞いてなくイライラしているとの返事で、右近は安心した。

年が代わって慶長十九年（一六一五）一月一日、朝早くから一家そろって教会での新年ミサに行き、内藤如安、息子の内藤好次、宇喜多休閑、横山康玄・同ルチアなどと顔を合わせ、教会内で新年を祝った。内藤如安も宇喜多休閑も口では語らなかったが、明日捕えられてもいいように身辺整理をしていた。

帰りに神父と修道士に、イエズス会の神父・修道士名簿、教会内の信徒名簿、信徒ではないが教会に来ている人たちの名簿の焼却が済んでいるかを確認した。

翌日、正月二日は、右近屋敷で加賀の茶友を招いて、近年恒例になっている新年茶会（初釜）が行われた。右近は従来の茶室を改造し、二畳に、点前をする半畳をつなげ、畳半畳をさらに横半分にした大きさの床の間を躙り口正面に右向きに設け、床の間奥の壁を丸くくりぬき障子をはめ、障子の中央で交差する縦横の桟が、いつでも十字架に見立てることができるようにしており、部屋の明かりは障子を通して入ってくる外の明かりだけで、常に薄暗かった。床の間の掛け軸と竹の花入れに活けられた一輪の花以外は何も装飾はなかった。内壁の色も黒っぽく、師の利休好みの色調になっている。

右近は自身の茶名を「南坊（みなみのぼう）」と称し、茶室は一昨年改造と同時に「皆如庵（かいじょあん）」と名付けていた。命名の由来は、デウスのもとにキリシタンは上も下もなく、みな同じという意味である。

今日は、越前府中から前田利家に従って金沢に移り住んだ町人で、利家が金沢城に秀吉を迎えたとき御茶堂を務め、のちに右近の姪を妻に迎えている片岡係兵衛、丹

後の出身で京呉服を商う丹後屋のご隠居の丹後屋清三、京をはじめ全国の銘茶を商っている角屋金兵衛の三人が定刻までに集まり、点心は妻のジュスタとルチアが、出入りの魚屋から届けられた魚と野菜で用意している。

濃茶点前が終わり、茶室を出て客間での点心の振る舞いになったとき、右近が

「丹後屋さん、最近京へは行かれましたか」

「いやー、この雪では老人は出かけられません。暮のうち、京から正月用の着物の売り込みに来た人たちの話題は、京都所司代がキリシタンにどのような態度で出てくるか、がもっぱらの話題でした。高山様何か情報は入っていますか」

「私自身が、いつどのようにお裁きを受けるかというときですので、情報は全く入ってきません」

その後の話題は、茶席だけあって角屋金兵衛の扱うお茶の話に花が咲いていた。

右近は年賀挨拶登城の指示が来るまで出かけることもならず、教会関係や神父関係の文書が残っていないかを調べたり、追放の沙汰があった場合、横山家に嫁いでいるルチア、五人の孫のうち、八歳から十四歳までの孫四人は連れて行けるか、行けなかったら弟の高山太郎右衛門に預けるか考えていた。ルチアは横山家から離縁して一緒に連れてゆくしかないと心中決めていた。妻のジュスタもルチアの話をする都度、ルチアの身の上が可哀そうと涙していたが、心のうちではそれしかないと覚悟していた。

正月十日、知行三百石以上の士分は、今年も恒例のとおり全員登城して藩主利光に年賀の挨拶をすることとなった。右近も正装して登城し挨拶したが、まだ二十歳の藩主利光は「大義」の一言発しただけであった。帰りに廊下ですれ違う人たちが、右近に挨拶はするが何かよそよそしい態度であることを感じた。

その日の昼過ぎ、家老の横山山城守長知が供を連れず一人で右近屋敷に飛び込むようにやってきた。

座敷に上がりこむと同時に右近の前に座り込み

「今暁、高岡の大殿から早馬が到着、幕府の伴天連追放令が殿のところに届けられた。徳川秀忠の印が押されている。これは手早く筆写させたものだ」

と言って右近に渡した。右近は何度も読み返していたが

「これほど激しい文章になっているとは驚いた。我々を京都所司代に身柄を預けるだけでなく、宗教を根こそぎ亡きものにすると言っている。これについて私のところへの殿の正使はいつ来るのか」

と横山家老に聞いたが

「まだ決まっていない。二～三日中だろう」

としか答えはなかった。

横山家老は硬い表情で

「ところで追放は一家眷属と書いてあるが、ルチアはすでに横山家の嫁である。今は高山家の一家眷属ではない。康玄も終生共にする、と言っている」

「ルチアが高山家の娘で、熱心なキリシタンであることは皆が知っている事実だ」

「問われたらキリシタン信仰は捨てた、といえばよい」

「嘘の言える娘ではない。正直に語ってしまうだろう。それによって名門である横山家に大きな迷惑がかかるし、嫡男の康玄殿までもキリシタンとして追及されることとなることは間違いないと思うが」

この右近の言葉を聞いて、横山家老は腕組みしたまま宙を見つめていた。右近が

「康玄殿とルチアの二人で話し合わせたらいかがか。今直ぐにでも」

と言ったので、横山家老は高山家を飛び出していった。

右近は妻ジュスタを呼び

「いよいよ追放の沙汰が、江戸よりお城に届いた。いま横山家老が伝えに来てくれた。これが江戸からの指示書の写しだ」と言ってジュスタに渡した。ジュスタは目を通した後

「私はどんなことがあってもどこまでも貴方についてゆきます。孫たちはどのようにしますか、それとルチアは当然一緒に行くというでしょう」

「私たちと孫が離れ離れになるのが最も恐ろしい。役人から何度も何度も爺も婆も信仰を捨てた。お前たちも信仰は捨てるのだ、と言われることが恐ろしい」

そこまで言ってため息をついた右近は、続けて

「一家眷属とは直系の孫は含まれると思う。が、できれば弟の高山太郎右衛門に預けたい。ルチアは横山家老がキリシタンを捨てたといわせて、康玄と一緒にいさせたい、というので、ルチアは、信仰のことについては嘘がつける娘ではないことは右近がよく知っている。まずは夫婦二人で話し合わせてくれ、と言って帰した」

夕方になると、右近追放のニュースは町中に広がり、初釜に来た人たちや、教会内部で親しくしていた人たちが、心配して駆けつけてきた。

右近夫妻は

「予てから覚悟していたことが現実になっただけの話です。大丈夫ですからご安心ください」

来訪者には誰にでもそのように話していた。

翌朝、横山康玄とルチアが右近のところにやってきた。

康玄は横山家嫡男としての難しい立場からの疲れが表情に出ていたが、ルチアは予てから覚悟をしていたことから普段と変わりなかった。

康玄が

「今朝まで話し合っていましたが、私は一時的な嘘も方便、時が経てば人々は忘れてくれる。契り合った夫婦はどこまでも一緒にいるべきだ、と言ったのですが、ルチアは、信仰上の嘘はつくことができません。私が横山家にいることは、横山家に大変迷惑がかかることははっきりしています、ということで朝までに二人の合意はできませんでした。それでこれから父と母に私の考えを言いに戻ります。結論はルチアがそこまで覚悟しているならば、子供は横山家で引き取って、ルチアを高山家に戻します。それでよろしいでしょうか」

と、疲れた表情の目に涙を浮かべている。右近は

「康玄さん、よく理解してくれました。感謝します」

と言って、ルチアに

「康玄さんにきちんとお礼を言いなさい。それと横山家に戻ったら、この結論を康玄さんからご両親に伝えてもらって、自分の主張を通したことをお詫びしなさい」

ルチアの嗚咽の声を聞いたジュスタがやってきて

「康玄さん、本当に申し訳ありません。ルチアの意見に納得していただいて有難うございます」

康玄に謝罪して、泣き崩れているルチアの肩を抱きしめた。

それから一刻後に、横山家老、康玄、ルチア、生後三か月の孫が高山家にやってきた。横山家老が

「今、康玄とルチアから話を聞きました。別れるのは止むを得ないと思います。ルチアの荷物は午後にでもこちらに運ばせます。孫は横山家で育てます。恐らくお目にかかるのはこれが最後と思いますので、お二人で孫を抱いてやってください」

の言葉に、ルチアは抱いていた子どもを右近の腕の中に渡した。やがて右近から孫を受け取ったジュスタは、抱きながら涙が止まらず、しばらくしてルチアの腕の中に渡した。

二日後の巳の刻、藩主名代の使者が、格式通りの駕籠・行列を整えて右近屋敷にやってきた。正使は家老横山山城守長知、副使が今枝出羽守継春であった。

横山山城守長知は副使を従えて上座に立ち、下座で平伏している右近に

「上意」

と一言発し、幕命を読みだした。その内容は、高山右近を妻子眷属ともども京都所司代板倉勝重に身柄を委ねよとの命令であった。右近は

「かしこまりました。いつなりともご指定の刻に、ご指定の場所に出頭します」

と答えた。

正使・副使は右近の返事を聞いて戻っていった。

その夜、横山家老は一人で高山家にやってきて

「何かわからないことはないか、困ったことでもあれば言ってくれ。集合は明後日の五つ半、石川門。出立は揃い次第となった」

と親切な言葉と集合の知らせがあり、右近は

「ここに六十枚の小判があります。これはいただいている知行の余りですので、殿にお返ししてほしい。それと一家眷属とはどこまでを言うのか。自分は直系の孫、兄弟は入ると思うが」

「夫婦、子供、孫はその範囲に入るが、貴殿の弟高山太郎右衛門は入らない解釈となった。だから処分できないものを預けるとか、出立した後の一切のことをお願いしたらよかろう。ただ、年端も行かない孫は気の毒だと思う」

「拙者以外、何人が京都所司代に預けられるのか」

「貴殿一家八名と内藤飛騨守殿と内藤好次殿の一家十名で、宇喜多休閑殿は敦賀送りとなっている」

「豪姫様と康玄殿には何か御沙汰があったのか」

「いや、何もなかった」

と自分の息子に何の音沙汰がなかったことが答えにくく、苦しそうな短な返事だった。

「侍でも下級武士、例えば弟の高山太郎右衛門や一般信徒はいかなる処置が下されるのだろうか」

「まだそこまでは江戸から達しが来ていないのでわからない。城内の空気はこれで終わりにしたい、という思いはある」

「ところでお願いが一つある。というのは、拙者の家来を横山家で引き取っていただけないだろうか。一人一人に添書を持たせて後日お伺いさせるが」

「高山殿が使っていた人であれば喜んで当家で迎え入れよう」

「有難い」

右近は鄭重に礼を言った。

横山山城守が帰った後、右近はジュスタ、ルチア、孫五人を集めて明後日からのこと、急なことで雪の中を歩き続ける苦しい旅となることなどを話したが、十太郎は大人として理解したが、それ以下の四人はどうなるのか不安な表情をしている。ジュスタとルチアが子どもたちに、どこまでも一緒だから、おじじ様、おばば様の言いつけどおり一緒に行きましょう、と話して、それからそれぞれが明後日の出立準備にかかった。ジュスタとルチアはすでに準備はできていて、幼い孫たちの準備を始めた。

そこへ内藤如安が明後日の出立時間と服装、持ち物の打ち合わせにやってきた。

衣類の着替え、股引、足袋、藁編みかんじきその他防寒と雪道対策などの最小限もののみとした。

出立の日、従者二名を伴った右近一家が全員白装束で石川門につくと、京都所司代までの引率責任者補佐青木雅種がすでに来ていて、一人ずつ人別鑑定を行った。石川門は城の後ろ側で搦め手門ともいわれ、常日頃は閑散としているが、右近たちの出立を一目見ようとする人々が、門前を遠巻きに囲んでいた。右近の初釜に来た人たちや、教会につながる人の顔もいた。

青木雅種の集まれの号令で、京都所司代までの引率責任者今枝出羽守継春が壇上から

「余が今枝出羽守継春である。その方たちを京都所司代まで連れてゆく。道は雪道であり、迷惑をかけないように心して歩け」

と訓示すると、青木雅種が先頭に立って歩き始めた。それに続く警護の武士二十人が白装束の罪人を取り囲んで歩き始めた。そこに身分あるものが乗る一丁の駕籠が来て、今枝出羽守が右近のところに

「高山殿、どうかこの駕籠にお乗りいただきたい」

と言った。

驚いた右近は

「身どもは天下の罪人、駕籠に乗るわけにはいかない」

と辞退したが、今枝出羽守は

「加賀藩内で身分ある高山殿を、罪人として歩かせるわけにはいかない。領内だけでもお乗りいただきたい」

ここませ言われると右近も頑なに断るわけにもゆかず

「では、拝借仕る」

と言って駕籠の人になった。

駕籠のすだれを少し上げて外を見ると、見送りに来た人たちの中に会釈する姿が何人かいた。驚いたのは、その群衆の後ろに城内警護の侍が数十名いたことである。右近たちが乱を起こすとでも思ったのであろうか。右近には城方のやり方が理解できなかった。

駕籠から眺めていると、十太郎以外の孫は馬に乗せられ、十太郎と大人は全員歩いている。

右近は見送りの人たちの姿が見えなくなったときに、駕籠から出て、今枝出羽守に

「見送りの人たちの姿も見えなくなったので、自分も歩かせてほしい」

と申し出て、今枝出羽守も折れて、右近は先頭に立って歩きだした。

一行は金沢を出て西に進み、加賀藩内は海岸沿いに松任、小松、大聖寺と進み、二日目の夕刻、今庄の加賀・越前両国国境の関所で松平家の役人から人物改めを受けたのち、関所の近くにある小屋に案内された。小屋の中

の部屋には雨漏りの水が凍ったのだろう、天井からツララが下がっていて、とても暖をとれるような状況ではない。藁布団の中に身を固くして朝の来るのを待っていた。

一間以上もあると思われる積雪の上で、栃ノ木峠に向かう右近一行と、木の芽峠から敦賀へ向かう宇喜多休閑一行は別れた。右近一行は輪かんじきを履き、雪も降り出したので役人は丸合羽、右近たちは蓑笠に身を固め歩き出したが、あまり進まないうちに夕刻となり、視界も悪く、今枝出羽守は斜面に雪洞を掘り、その中で体を休めるように指示した。

金沢を出て丸三日を経過し、この間雪道を助け合いながら歩いたり、役人と虜囚達が協力して雪洞を掘ったりしたので、相互間の冷たい壁は少しずつとれ、夜は今庄の宿で用意した握り飯を温め、雪を溶かして沸かした湯を分け合いながら、一同体を温めて眠りについた。

翌朝、役人たちが出発準備をしている間、虜囚達は雪洞の中に膝まずき、右近の祈りの言葉に続き「主の祈り」を祈りだした。「天にましますわれらの父よ。願わくは御名を崇めさせ給え。御国をきたらせ給え。御心の天になるごとく、地にもなさせ給え。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。われらに罪を犯すものをわれらが許すごとく、われらの罪をも許したまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり。アーメン」(注②)

同じ雪洞にいた役人たちは珍しそうにそれを眺めていたが、誰も止めようとはしなかった。

祈祷に引き続き、右近が立ち上がって今枝出羽守のところに行き

「私たち家族に、これからの困難を乗り越える注意事項を伝えたいので、短時間お許しいただきたい」

と言って了解を取り

「内藤家・高山家の皆さん、これからも京までの数日間は、積雪の多い道で、歩くことに難渋すると思う。お互いに助け合って、一人の落伍者も出すことなく目的地まで行きたいと思う。それにつけても足を大事にすることだ。それから風邪を引かないように、休息の時にはできるだけ温かくして休息するように」

「それから十太郎、弟と妹を連れてこれへ」

と言って孫一同を右近のそばに招き

「京へ着くと、爺(じじ)、婆(ばば)とは別々の部屋に一人で入れられるかもわからない。それは牢獄かもわからない。爺・婆はデウス様への信仰はどんなことがあっても守り続ける。ルチアも同じだ。だから、幼いお前たちが一人でいる牢獄に京のお役人が来て、爺・婆もデウスへの信仰は

やめたから、お前たちもやめて楽しい日々を過ごすように、と言ってきても、決して信用してはいけない。もしもお役人が殺すと言ってきても、怖くはない。デウス様がパライソ（注③）で待っていてくださるから。これだけは爺のただ一つの願いとして覚えていてほしい」

と、右近が最も心配していることを孫たちに話した。

十太郎が

「爺様、お話はよくわかりました。私からも弟妹に話しますのでご安心を」

と答えて右近の話は終わった。

（注②）イエス・キリストが弟子たちに「祈るときはこう祈りなさい」と言って定められた祈りで「主の祈り」とも言われている。新約聖書（共同訳マタイ六・五―十三）引用

（注③）パライソ→天国

雪は昨夜から降り続いている。昨日までの積雪の上に、さらに降ってきた雪が積もっている。しかしここに留まっているわけにはいかない。青木雅種の

「出発！」

の号令で、栃ノ木峠を目指して、警備の役人・虜囚のすべてが出発した。幼い孫二人は右近の従者二人におぶさり、ジュスタとルチアは輪かんじきを履いている。

続く

千家尊福伝（七）

今に継がれる歌詞を残した神道歌人

村上邦治

はじめに

江戸末期より、出雲大社を中心とする出雲歌壇が、全国的に知られるようになった。その始まりは、第七六代出雲国造千家俊秀の弟俊信が、国学の祖ともいうべき本居宣長に、入門してからのことである。俊信は、宣長から国学だけでなく、和歌についても教えを受け、出雲に宣長歌学を持ち込んだ。七八代尊孫、七九代尊澄も、和歌に秀でており、出雲大社社人や、山陰及び中国地方から多くの歌人を集め、一派を形成するまでになった。

尊福は早くから、国学の研鑽とともに、和歌に親しみ、多くの和歌を作った。維新以降、一〇歳台の若さながら、神道指導者として頭角を現したが、歌人の間でも、注目されていた。

一　出雲国学の祖千家俊信

俊信（一七六四～一八三一）は、『出雲風土記』、『出雲国造神賀詞』を考証する上で、国学の習得が不可欠との思いから、享和元年（一八〇一）、多くの門人を集めていた本居宣長へ入門した。当時出雲大社は、垂加神道を信奉しており、未だスサノウ命を祭神と信ずる者も多くいた。ところが、宣長の下で国学を学んだ俊信により、大国主神を祭神とし、この神こそ国の主である、とする国学思想が持ち込まれたのである。

さらに俊信は、宣長から、歌学の指導を受けた。これが出雲歌壇の始まりとなった。宣長は、「人の情は詞とともに風雅の世界に醇化せられ、この風雅の世界におい

てこそ、物ごとや人の心は蔽われることなく、表明される」とした。伊勢物語や源氏物語を評価し、和歌については、「万葉集、古今集より、新古今集によるべき」とした。戦前、日本人が最も口ずさみ、軍国主義者に悪用された、宣長が還暦時（一七九〇）に詠んだ

しき嶋の　やまとごゝろを　人とはゞ
　朝日にゝほふ　山ざくら花

が、典型であろう。

宣長を尊敬していた俊信は、忠実に宣長の歌学をまもり、「情緒の象徴性をよしとし、新古今にみる優美さと余情の静寂さ」を重視、これが出雲派の基流となった。

俊信は

八雲たつ　出雲の山の　朝かすみ
　たな引そへて　はるは来にけり

と、新古今の世界を詠んだ和歌を残している。

出雲歌壇の最盛期は、尊孫・尊澄・尊福のときである。門人は二〇〇名を超え、駿河、阿波など全国から集い、歌集や連歌集の出版、歌会、講義など、活発な活動を行っていた。

二　歌人尊福

俊信から続く歌壇の伝統は、祖父尊孫、父尊澄を経て、尊福に引き継がれた。早くから国学を習得、出雲教学を確立させ、二八歳で、大社大宮司に任命され、第八〇代出雲国造を襲名した。さらに大教上、神道西部管長と、教導職の最高位に就いた。一方、歌学についても、俊信からの伝統を受け継ぐと共に、自らの才能を開花させた。神と魂を詠った、父尊澄の和歌と比較すると、尊福が、教学も歌も、父より一段と深化させたことが分かる。

尊澄

善あしは　さやかに神の　しらせれば
　魂となる　後ぞかしこき

尊福は、今でも信徒がよく愛誦する

身のかきり　君に誠を　つくさなむ
　魂は出雲の　神にまかせて

これは、「大国主神が幽冥界を主宰し、現世は、天照大神の子孫である天皇にお任せする」とした、出雲教学の根本を、詠ったものである。祭神論争で、大国主神幽冥界主宰論を強固に唱えた尊福は、和歌においても、多く残している。

幽冥の　神の恵し　なかりせは
　霊のゆくへは　やすくあらめや

新古今集を重視した宣長の教えを、俊信以来出雲歌壇は継承したが、この分野の傑作とされるのが、明治一八年宮中御歌会の、勅題「雪中早梅」という御題に対し

冬こもる　まとのしら雪　しらぬまに

さきそめぬらし　梅か香のする

と詠い、この年の御歌会に、多くの中から選ばれている。

尊福は、維新当初は、大教上神道西部管長として、また、明治一〇年代は、出雲大社教会やその後身神道大社教の布教活動により、全国を巡教した。先々で求めに応じ、多くの歌を詠んだ。

兵庫　高砂にて

相生の　まつの下かけ　たちならし
　獨（ひとり）は千代を　しめしとそ思う

など、その地の思いを詠いこみ、それを揮毫し、皆に披露した。これも尊福の巡教人気を、大いに高めた。今日でも、各地に尊福の揮毫した和歌が、多く残されている

篤信家からの寄付に対しては、感謝の思いを和歌であらわし、それを揮毫して、その恩にむくいた。

明治三四年、東京分祀境内の敷石一切の寄付に対し

大前に　しきつらねたる　敷石の
　あつき心は　神やめつらん

尊福の多くの歌は、歌人としての地位を不動のものにした。明治三一年には、投票により、明治三六歌仙を選ぶ催しがあり、皇族山階宮、宮中の柳原愛子（大正天皇生母）、下田歌子（女官・歌人）、税所敦子（女官）等と共に、神道や和歌の同僚であった、本居豊穎、小中村清矩と一緒に選ばれている。又、大日本歌道奨励会（会長鍋島侯爵）の主要会員で、指導的立場であった。その他にも、雑誌などで、代表的な歌人を選ぶ特集などには、神道界では、最初に尊福が挙げられ、明治の歌人として、揺るぎない名声を得ていたのである。

三　唱歌のはじまり

維新まで我国には、伝統邦楽としては、祝い唄や民謡、詩吟などがあり、楽器には、琴、三味線、笛、尺八などあったが、西洋音楽は、僅かにキリスト教徒による讃美歌があった程度である。しかし、幕府の禁教政策により、洋楽とは長らく無縁となった。

早くから学校教育を重視し、義務化した政府は、洋楽を取り入れた唱歌科を設けた。唱歌の斉唱がもつ教育効果に着目したのは、西欧留学経験者達であった。欧米諸国で開催される国家的式典や、集会、さらに教会儀式など、参加者の意識を高揚させ、団結を図る、その大きな効果に驚いたのである。初代文相森有礼は、自身も欧米留学者であり、唱歌の導入を進めたのである。

文部省は、明治一四年、初の音楽教科書である『小学唱歌集初編』や、『明治唱歌集』を作成した。しかし、洋楽を指導する教育者は皆無に近く、また斉唱に必要なピアノや、アコーディオンなどの楽器は、国内には少なかったので、なかなか広まらなかった。普及に弾みがつ

くのは、明治二〇年、山葉寅楠（現ヤマハ創業者）と河合喜三郎（現河合楽器創業者）が、高価なピアノに代わる、国産のオルガン製造を、開始してからのことである。

近代化を急ぐ政府は、文明開化や殖産興業など、欧米化政策を取り入れたが。それと並行して、我が国独自の宗教や歴史の教化に力を入れた。明治六年「年中祭日の休暇日」を定め、日本人としての意識の徹底を図ることとした。この布告による祭日は、元始祭（一月三日）、新年宴会（一月五日）、孝明天皇祭（一月三〇日）、紀元節（二月一一日）、神武天皇祭（四月三日）、神嘗祭（九月一七日）、天長節（一一月三日）、新嘗祭（一一月二三日）の八日であった。明治一一年に、春季皇霊祭（春分）、秋季皇霊祭（秋分）が追加され、一〇日となった。

当初、祝祭日に学校で儀式が行われることはなかったが、明治二三年教育勅語が発せられ、翌年、祝日大祭日の儀式のやり方を定めた「小学校祝祭日儀式規定」が制定され、祝祭日に学校で儀式が始まった。御影に敬礼、教育勅語奉読、校長訓話の後に、祝祭日に相応しい唱歌を、合唱することにしたのである。一月一日は、慣例上の祝日とされ、同様な儀式が制定された。

ところが、当時これらの儀式で合唱する、肝心の唱歌は、準備されていなかった。その為、取り敢えず、小学唱歌の中から各々独自に選曲し、合唱したのである。式場毎に異なる唱歌、という事態に、文部省は明治二三年、「祝日大祭日歌詞並びに楽譜審査委員会」を設け、儀式に相応しい、歌詞と楽譜の作成を急いだ。作詞者には、勝　安房、高崎正風等、当時の学徳の高いと認められた人々に依頼した。尊福も歌人として既に認められており、依頼された一人である。

作曲は、来日したイギリス、ドイツ、フランスの音楽家から、洋楽を学んだ宮内庁雅楽課の若手音楽家達であった。

委員会では、先ず作詞を慎重に審議し、決定した。その後数人に作曲を依頼し、その中から、最も適当な曲を選定したのである。同じ祝日でも、紀元節は早く決まったが、四方節は遅れており、焦った文部省は、何時も苦も無く和歌を作る、尊福に依頼した。尊福は、明治二五年（一八九二）一二月より翌年五月まで、文部省普通学務局長をしており、就任前に作詞を依頼され、決定していた。そして公布は、辞任後の同二六年（一八九三）八月、「小学校祝日大祭日歌詞並楽譜」として、発表されたのである。

四　四方節の作詞

尊福は、四方節（一月一日）に歌われる唱歌として、次のような作詞をした。

一月一日（いちげついちじつ）

一　年の初めの　例とて
　終なき世の　めでたさを、
　松竹立てて　門ごとに
　祝う今日こそ　楽しけれ。

二　初日のひかり　明らけく
　治る御世の　今朝のそら、
　君がみかげに　比（たぐ）えつつ
　仰ぎ見るこそ　尊とけれ

年初元旦の、明るく希望に満ちた正月風景と、国と皇室の安寧を願う内容で、小学生にも分かりやすい、簡潔な詞となっている。作曲は、宮内庁雅楽課の作曲家上真行（うえまさら）であった。

ところが、大正二年、二番の前半部分「明らけく、治る御世の」は、明治の御世を寿きたるものとされた。その為、大正と改元されたことから、このままでは相応しくないとして、文部省は次のように改作した。

二　初日のひかり　さし出でて、
　四方に輝く　今朝の空

この改作された歌が、今日に至るまで、歌われている。

因みに、題名が「お正月」と間違われることがあるが、この歌は、幼稚園唱歌として幼児向けに作られ、東くめ作詞滝廉太郎作曲の「もういくつ寝るとお正月・・・」である。

五　詩人　千家元麿

尊福の歌人としての才能は、庶子元麿に受け継がれたと思われる。元麿は、尊福と日本画家小川梅崖（本名豊子）の間に明治二一年、東京麹町で生まれた。当時出雲には、伏原子爵（公家清原家の一家・名家）出の正妻俊子がおり、一男二女をもうけていた。豊子との最初の子が元麿で、その後四男五女が誕生し、成人している。その中で、元麿ただ一人、尊福の籍には入れられず、尊福の弟、尊賀の庶子として入籍された。まだ、豊子との間は、出雲では内密であったのか、あるいは、正妻との間に一〇年にしてやっと、長男松麿が誕生して間もなかった、等々を配慮したことによるものと思われる。

元麿は、尊福が埼玉、静岡の知事を務めたため、父と一緒に、浦和と静岡の官邸で幼年期を過ごした。一五歳の時、家出事件を起こし、その後、短歌、俳句、詩、小説、画などを発表、白樺派の武者小路実篤、長与善郎、岸田劉生、高村光太郎らと交友し、新しい感覚の詩を作っていった。

大正七年一月、父尊福が七四歳でなくなったその年、第一詩集『自分を見た』を刊行し、詩人としての地位を

確立した。因みに、装幀は劉生、序文は実篤である。

元麿は父とは異なり、一庶民としての目線から、日常の母と子の、ごくありふれた家庭生活を描いたものが多い。彼が評価されたのは、我国で初めて、詩作に、口語表現をもちいた事である。萩原朔太郎と共に、口語自由詩の開拓者とされる。例えば、第一集の最初に掲載されている、「わが児は歩む」の頭初部分

わが児は歩む
大地の上に下ろされて
翅(はね)を切られた鳥のやうに
危く走り逃げて行く
道の向うには
地球を包んだ空が蒼々(あをあを)として、
底知らず蒼々として、日はその上に大波を蹴ちらしてゐる
風は地の底から涼しく吹いて来る
白分は子供を追つてゆく。
道は上り下り、人は無関係に現はれ又消える
明るく、或は暗く
景色は変る。

この詩のように、華族である父尊福とは、まるで異なる一般庶民の世界であった。幼児期から父の下で育ったとはいえ、出雲の生活や、異母の兄姉たちに馴染めず、また籍も入れて貰えない、屈折した感情が、元麿の詩作の原点であろう。偉大な父持ったからこそ、下層の庶民を暖かく見つめる詩作が、可能であったのではなかろうか。詩集としては一〇冊を出し、口語詩作の開拓者として、文学史に名を残したのである。

しかし晩年は、精神を病み、また、戦争の影響を受け、暗い情景のものが多くなった。戦後の貧しい生活の中、昭和二三年六一歳で永眠した。明治時代の歌人を代表する神道家の父とは、正反対の一市井の詩人として生涯を過ごしたが、決して、尊福を尊敬していなかったのではない。否、一時も父を忘れることは、できなかったことであろう。その証拠に、父が亡くなった年、処女作自序の最後に、

「自分はこの初めての詩集を亡き父上に捧げる」

と、結んでいるのだから。

おわりに

明治二四年（一八九一）一〇月、濃尾大地震が発生した。尊福の歌詞は、替え歌にされて、子供たちの間で盛んに歌われた。

豆腐の初めは　豆であり
尾張名古屋の　大地震
松竹でんぐり返って大騒ぎ（ひっくり返して　大騒ぎ）

後の始末は　誰がする（芋を食うこそ　たのしけれ）

このような替え歌が、各地で幾つもつくられ、広まったのである。それだけ、多くの日本人に親しまれた歌であった。

戦前は、「三大節」（紀元節、天長節、一月一日）が学校儀式として、重要な儀式とされ、そこで斉唱された。戦後これらは廃止され、次第に忘れ去られた。しかし尊福の作詞した「一月一日」だけは、今日も口ずさむ人が多い。他の儀式唱歌と異なり、分かりやすく、普遍性のある詞であったからであろう。

平成二七年正月、テレビから、ゲームソフトのコマーシャルが、上の作曲からは程遠いい、テンポの速い軽やかに編曲された、「一月一日」の歌がながれていた。曲は違ったが、歌詞は、尊福の作詞した、そのままの詞、であった。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

明治時代の著述者　渋江保の一生（その二）

山本勉

一　はじめに

渋江保は、その生涯において多くの著作翻訳を手がけているが、その存在を知る人は決して多くない。これまで渋江保に関しての研究もほとんど行われておらず、渋江保の存在を知ることができるのは、森鷗外の著書『渋江抽斎』である。この本は渋江抽斎の伝記であり、抽斎の子供たちの行く末を記したものである。この『渋江抽斎』に登場するのが渋江抽斎の七男として生まれた渋江保である。森鷗外が『渋江抽斎』を執筆するに当たり、渋江保が資料を提供したが、渋江の存在なくしては、史伝『渋江抽斎』は完成をみなかっただろうとまで言われている。

実は、私も渋江保と言う人物については、つい数年前までその存在を知らなかった。四年前に縁あって佛教大学大学院の通信教育課程で学んだ折に、渋江保のその数奇な運命に触れ興味を覚えた。渋江保についてはその一生が未だ明らかにされておらず、渋江に関する資料も数少ないが、この度『明治時代の著述者　渋江保の一生』と題して同人誌『まんじ』に拙文を掲載し、幼少期よりその晩年までの足取りを追って行きたい。

二　渋江保の略歴

渋江保は、明治・大正時代の著述家、小説家、翻訳家、心霊研究家である。渋江保は、一八五七年（安政四年）七月二十六日、渋江抽斎の七男として江戸に生まれ、名を成善と称した。幼年時代を江戸で過ごし、一八六八年（明治元年）、本国の弘前へ移る。渋江保の父、抽斎は医者であったが、保は漢学者の道を歩みはじめる。

父、抽斎没後の一八七一年（明治四年）、保は、母を

弘前に残して、単身東京に赴いた。保は、一八七五年（明治八年）、師範学校を卒業後、浜松に赴き師範学校の教頭の職に就くことになる。一八八〇年（明治十三年）には慶應義塾を卒業し、愛知中学校長として赴任している。一八八三年（明治十五年）、愛知県庁に辞表を提出し、再び東京に戻り慶應義塾の教師となる。その後、京浜毎日新聞記者編輯員となり浜松に赴くが、体調不良を理由に一八八五年（明治十八年）、遠州周智郡犬居村（現在の浜松市天竜区春野町犬居）へ退隠している。一八八六年（明治十九年）、保は静岡に移り住み、私立静岡英学校の教頭として赴任し、その傍ら、東海暁鐘新報の主筆となる。一八八八年（明治二十一年）には、静岡市鷹匠町二丁目に私立渋江塾を設けるが、一八八九年（明治二十二年）、東京博文館の求めに応じて、履歴書・写真・文稿を寄示し、一八九〇年（明治二十三年）、静岡から上京し、博文館のために著作翻訳業に専念することとなった。以上が、著作翻訳業に従事するに至る渋江保の経歴である。

渋江保は、その生涯において、多くの著作翻訳を手がけているが、特に、当時の書肆、博文館から数多くの書籍を立て続けに執筆している。森鷗外は、その著書『渋江抽斎』（その一一二）三一〇頁の中で次のように語っている。「しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻訳で、その刊行する所の書が、通計約百五十部の多きに至つてゐる。其書は随時世人を啓発した功はあるにしても、概皆時尚を追ふ書估の誅求に応じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。そして保さんは自らこれを知つてゐる。」(1)

渋江保は、森鷗外が『渋江抽斎』を執筆する際には、資料を提供して助力を惜しまなかったと言う。

渋江は、一八九〇年（明治二十三年）博文館より、通俗教育全書シリーズを皮切りに、様々な著書を執筆していくが、一九〇一年（明治三十四年）出版の『出世の栞続』が博文館での最後の仕事となった。その後、大学館より冒険小説や催眠術書を出版している。また、大正時代に入り、明治から昭和初期の漢詩人である上村売剣（一八六六～一九四六）が渋江保の為に創設した三才社や神誠館より、易学関係の書籍を出版し、一九三〇年（昭和五年）四月七日に逝去している。

渋江は、多彩な才能を持った人物である。内田魯庵は『文学者となる法』の「第五　著述における心得并に出板者待遇法　幸福先生の操觚事業・外山先生・著述家たらんとする者は幸福先生を学ぶべし」で、渋江保を次のように評している。「大著述家幸福先生の操觚事業を見よ。先生は、『体操法』を著せり、先生は、『哲学大意』

を著せり、『算術五千題』、『代数一千題』、『幾何一千題』、『初等三角術』、『普通教育学』、『通俗教育演説』、『小倫理書』、『小心理書』、『小論理書』、『小地質学』、『小天文学』、『社会学』、『手工学』、『英国文学史』、『獨佛文学史』、『希臘羅馬文学史』、『婦女亀鑑』、『福之神』、『処世活法』、『幸福要訣』、『神童』、『万国発明家列伝』、『西洋怪奇談』、『國民錦嚢』・・・（ア、草臥た）・・・何ぞ夫れ諸般の科学に精通する爰に到れるぞ。人はゲーテが科学に深くミルトンが政治宗教に篤きを驚く。然れども幸福先生が宏博なる大々智識を以て比ぶれば是等皆云ふに足らず。（幸福先生の操觚事業）」、「外山先生はエラキ人なり。幸福先生も亦是エラキ人なり。一のエラキ人は博士となって一のエラキ人は博士となるを得ず。運不運は是非なければ、幸福先生敢て嘆息するを休めよ。社会は先生の大恩を決して忘れざるなり。先生自ら先生の徳あり、敢て苦情を訴ふる勿れ（外山先生）」、「著述家たらんとする者よ。宜しく幸福先生を学ぶべし。昨日は審美学を説き今日は料理法を談じ明日は海軍術を講じ、其間芋屋の引札を書き伝授屋（斯るもの有りや否や）の広告を草し、猶ほ閑あらば女義太夫の口上を認めお開帳の縁記を立案するも著述家としての一興にあらずや。京童は云ふ。幸福先生の著述一ヶ月凡そ五百頁に上ると。豈是れ区役所門前の代書人よりエラキと云はざるべけんや。（著述家たらんとする者は幸福先生を学ぶべし）」(2) とある。

この渋江保を揶揄したような内田魯庵の文章は、明治期、出版王国へと駆け上がって行った博文館に、まるで機械の歯車のように使われて来た渋江保の小評伝とも言える。

稲田雅洋は、渋江保伝の（上）と（中の一）を『境　創刊号』・『境　第二号』に執筆している。稲田雅洋は、渋江保伝の中で渋江保の生涯について触れているが、その生涯についての詳述は未完となっている。国立国会図書館において確認をとってみたが、『境　創刊号』・『境　第二号』以外に渋江保伝の続きは見あたらなかった。実際に、稲田雅洋本人に確認をとったところ、渋江保伝は未完であるとのことだった。今回、稲田雅洋の渋江保伝に掲載された渋江保の生涯区分に加筆改稿を行い表1にまとめた。次号よりこの時代区分に従って渋江保の一生を綴ってみたい。

注記

（一）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三一〇頁

（二）内田魯庵『文学者となる法』（右文社　一九八四年四月十五日）一五九頁～一六一頁

参考文献（著者名　五十音順）

（一）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）

（二）稲田雅洋『境　第二号』（佐々木啓之　一九八四年十二月二十日）

（三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）

明治時代の著述者　渋江保の一生

渋江保年表（表1）

区分	時　代	滞在期間	滞　在　地
1期	幼少時代	1857年7月～1868年4月	江戸
2期	弘前時代	1868年4月～1871年3月	青森県弘前市
3期	第一次修学時代	1871年3月～1875年1月	東京
4期	浜松時代	1875年2月～1879年10月	静岡県浜松市
5期	第二次修学時代	1879年10月～1881年7月	東京
6期	宝飯中学校時代	1881年8月～1882年12月	愛知県豊川市（旧宝飯郡国府町）
7期	東京横浜毎日新聞時代	1883年1月～1885年12月	東京
8期	静岡時代	1885年12月～1890年3月	静岡県浜松市（旧周智郡春野町）静岡市
9期	博文館時代	1890年3月～1901年	東京
10期	大学館時代～晩年	1903年～1930年4月	東京

密室銀行（十九）

匠　克仁

〈前号までのうらすじ…じゃない、あらすじ〉

銀行で密室殺人。

「この〈前号までのあらすじ〉って意味がなさそうだと十九回目にして、はじめて気付いた。前号までのあらすじの括弧の注に時間をかけていて、ほんすじが進まない。

今回は、まんじ一三三号のように登場人物紹介を書こうと思った。登場人物の一人に『犯人』と無意識に書いてしまったので、止めることにした。ヤバイヤバイ。

この推理小説のトリックは、密室だけでなく、犯人当てでもある。そうだ、意外な犯人を考えた。今から犯人を替えよう。実は、ぼく、つまり、作者が犯人なのである。作者が犯人というトリックは意外だろう。それより犯人はこれを読んでいる読者、つまり、あなたが犯人というのはどうだろう。さーて、誰を犯人にしようかな。

人物表にダーツを投げて決めよう。ダーツがバルタン星人に当たるかもしれない。いや、人物表の読者に当たるかもしれない。読者がページをめくったら、いきなりダーツの矢が飛んでくるのである。

ちなみに、ぼくはアインシュタインの相対性理論の原理を使って、ワームホールを自在に作ることができるのである。ワームホールというのは、ホワイトホール（ブラックホールの反対）出口で、ドラエモンのポケットみたいに何でも出てくるのである。

ダーツの矢を放つくらい簡単なもので、読者に催眠術をかけることもできるのである。そして、催眠術をかけた読者に作中の人物を殺害させることもできるのである。

ちなみに、うらすじというのは、正式な医学用語で陰茎小体という。煩悩くんの口の下にある筋状の組織で、実は性感帯で……イカーーん。こんなことを書いていると変態と思われる。うらすじを書くだけで、締切が来た。」

十五

通用口の密室のトリックを解明したと竹森は思ったのに、あっさりと雅子に否定された。

通用口の密室はあきらめて、竹森は先に金庫室のトリックの解明に取りかかることにした。耐火扉の鍵の謎について考えをまとめていた。

トリックの実験をした次の土曜日に、竹森は雅子とレストランに一緒に行った。

「耐火扉の密室トリックを自分なりに考えたのだけど、アドバイスをほしいんだ」

密室トリックについて雅子の助言が必要と竹森は考えていた。

「またラジコンのような小細工を使うの」

いつものように雅子は手厳しい。

「今度は、機械じかけでないよ。前回の実験で君が言ったように心理的な方法がないかと思ったんだ。耐火扉の仕組みと発見当時の状況を考えると、心理トリックとまで言えないけど、簡単に鍵を閉める方法があることに気付いたんだ。その可能性についてチェックしてほしい」

「わかったわ」

「金庫室、特に耐火扉はあまりに頑丈で、とても出入りできそうにない。古典的な推理小説でも、これほど強固な密室はないよ。推理小説作家だったら、きっと自画自賛しているだろう」

「そうね。私もミステリは読むけど、金庫室の密室って読んだことがないわ」

地下にある金庫室は厚いコンクリートの壁に囲まれていて、唯一の出入り口が数十センチの厚みのある金属扉である。

「しかし、その金庫室でしか使えないトリックがあるんじゃないかと考えたんだ。金庫室に特別なことって何があると思う」

竹森は雅子に質問した。

「金庫室は中に人がいるときに、閉めることはないわ。普通なら」

「普通だったらね。ぼくも二度とあんな異常な体験をしたくないよ」

「内側からは鍵穴も何もないわね。中からは閉めることすら難しいわ」

「犯人はぼくに疑いの目を向けようとしたのかもしれないけど。実際には、ぼくは外からシリンダー錠をかけることができないので、犯行が不可能になった。逆密室だね」

「逆密室。何よそれ」

「ぼくの考えたアイデアだよ。被害者と同じ密室にいたために、アリバイが成立したということ。例えば…」

竹森は逆密室の例を出した。

密室の中に二人いて、一人が銃殺される。窓ガラスに銃口が残っていて、拳銃が密室の外で発見される。密室の中の一人は犯行不可能である。密室内にいたのが犯人あれば逆密室トリックである。

「ぼくの場合は、犯行後、犯人が密室の外で鍵を閉めた訳だから、密室の中にいるぼくは犯人がいる筈の場所の不在証明つまりアリバイが成立するわけだ」

竹森は得意そうに説明したが、雅子は冷静である。

「それで、警察はあなたの容疑を解いたわけなの」

「いや。警察も逆密室トリックを考えている。ぼくが鉄のストッパーを固定してたんだと」

「実際にシリンダー錠もダイアル錠も閉まっていたわ」

「警察もそれは共犯者を想定しているんだろう」

「共犯者がいるんじゃあ。共犯者に鍵を掛けさせれば、済む話でしょう」

「共犯者がトリックを仕掛ける前に工作が必要だろう。ぼくでも逆密室トリックができるので、容疑は晴れないという理屈だ」

「あなたの共犯者ということになると、共犯者として一番あやしいのは、私ね」

この雅子の言葉が竹森の頭にずっと残ることになった。

(ぼくの共犯者…)

単なる好意の表現でなく、事件と関係する意味深い発言であった。

「いずれにせよ、本当の密室トリックを解かないと、あなたの容疑は晴れないわけね」

「そうだ。それでトリックといえないけど、理屈で考えると、簡単なことに気付いたんだ」

「簡単って」

「耐火扉は他の一般的な扉と違う特徴がある。特徴の一つは、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠との組合せで閉まることだよ」

「ダイアル錠とシリンダー錠のどちらかが一方が施錠していれば、耐火扉は開かない。つまり、一方が開いていても耐火扉は閉じた状態ってことね」

「シリンダー錠は鍵が必要であるが、ダイアル錠は外からダイアルを少し回すだけで施錠される」

「ダイアル錠さえ施錠されていたら、シリンダー錠は施錠されていなくても、耐火扉は開けることはできないわ」

「そこに心理的なトリックを仕掛ける余地があるんじゃないかと思ったんだ」

そう言うと、竹森はシリンダー錠の図を書いて続けた。

「特徴のもう一つは、シリンダー錠の鍵穴の位置だ。耐火扉のシリンダー錠の鍵は、三六〇度時計回りに回転させて開けるタイプだよ」

「そういえば、シリンダー錠は格子扉も通用口も三つとも鍵穴の向きが違っているわね」

格子扉の鍵は六十度ひねって、また元の位置に戻す往

復タイプである。

通用口の鍵は上半分の一八〇度回す。三時の位置で施錠、九時の位置で開錠となっている。

「鍵穴は開いていても、閉まっていても、常に上を向いている。鍵穴の位置からでは、外見で開いているか閉まっているかの区別がつかない」

そう竹森が説明すると、雅子がすぐに反論する。

「でも実際にはシリンダー錠は閉まっていたわ」

「その通り。しかし、犯行時から発見時までの、いつのタイミングで閉められたかは、分からないということだ。耐火扉の鍵の一つは格子扉と通用口の鍵と束になって死体の手に握られていた。もう一つは副支店長の鍵である。どちらの鍵を使ったと思う」

「犯人が密室を作った後に、三つの鍵を死体の手に握らせることができるトリックがあれば、死体の鍵を使ったのでしょうけど」

「たしかに、そんなトリックがあれば、一つ一つの密室の謎を考えなくてもよい。シリンダー錠が三本束になっているのが、推理する上で、心理的な障害になっているんだよ」

「犯人が使った鍵は、格子扉と耐火扉と通用口では違うということね」

「そう思う。実際に、耐火扉については、密室の外の鍵を使うと単純な答えがでてくる。死体の鍵を使って耐火扉を閉めるトリックは、正直いって解けない。しかし、副支店長の鍵を使うのであれば、鍵を閉める方法はいくつか考えられる。一つ一つ可能性をつぶしていこう。先ず考えられるのは、副支店長が犯人の場合だ」

「副支店長には犯行時刻にアリバイがあったのよ。支店に来る前にキオスクで釣銭をめぐりトラブルになっていたの。ちょうど犯行時間よ」

雅子の指摘であったが、そのことは竹森も織り込み済みであった。

「もちろん。知っているよ。副支店長らしい、もめ事だな。それもアリバイ工作かもしれないけど。副支店長が実行犯という可能性はないだろう。しかし、実行犯でなくても、共犯者かもしれない。実行犯はダイアル錠だけ施錠して、現場を立ち去った。後で副支店長が赤坂支店に入ると、シリンダー錠を閉めたんだ」

耐火扉のシリンダー錠の鍵を持っている副支店長が、何らかの関与をしていると竹森は推理していた。

「この密室のトリックはシリンダー錠をかけたタイミングにある。君たちも耐火扉を見て、外見からシリンダー錠が開いているか閉まっているか分からないのだから。発見時に耐火扉のシリンダー錠が実際には閉まっていなかったのに、副支店長は開けたふりをしただけという仮定はどうだろう」

「副支店長が鍵を回転させたのは、私も見ていたわ。私

だけでなく、係長も草津さんも見ていたから、ごまかすことはできないわ」

三人も証人がいるので、副支店長がシリンダー錠の鍵を開けたのは間違いないようであった。

「たしかに金庫室を開けた時にはシリンダー錠は閉まっていたのだろう。開けたふりという可能性はないね。次の可能性だけど、副支店長は出勤してから、皆で金庫室に行く前に、一人で行って施錠したことだ。もっとも副支店長が格子扉と通用口を閉めることができないので、全体で密室であることに変わりないけど」

「それは、耐火扉と格子扉と通用口の鍵を持っている三人が共犯だったら、密室を開けるのは可能ということでしょう。三人が共犯だなんてありえないと言ってたじゃないの」

「他の鍵は今は考えないとして、耐火扉は副支店長が鍵を閉める以外には考えられないよ」

竹森が断言したが、雅子は冷ややかな態度である。

「実は、副支店長が到着する前に。草津さんがダイアル錠を開けたのよ。それでも耐火扉は開かなかったのよ」

「何だって。それは初めて聞いたけど」

「係長が金庫室を開けようと言う前に、草津さんが金庫室の中にいるんじゃないかと疑っていたのよ。鍵を持って中に居るなら、シリンダー錠は開いているんじゃないか。そう思って、ダイアル錠を開けたらしいの」

「草津は役職者でないので、ダイアル錠を開ける番号は知らない筈だろう」

「役付が開けるのを覗き見して覚えていたそうよ」

「たしかにダイアル錠は、ぼくだって知ろうと思えばできた。実際にしていないけど」

「草津さんがダイアル錠を開けたところに、ちょうど私が降りて気付いたの。だから二人で開かないのを確認したのよ」

「皆で開けるとき、ダイアル錠は閉まっていたんだろう」

「勝手にダイアル錠を開けたことを責められると思い、草津さんがダイアル錠を回して、また閉め直したの。警察には草津さんも私も言っていたけど。役付きでないのにダイアル錠の開け方を知っていたなんて、問題になるから支店では公表しなかったの」

草津がダイアル錠を開けたというのは、ますます密室を困難にしている。ダイアル錠を開けたとき、シリンダー錠の鍵の内、一本が死体の手に握られ、一本が支店の外つまり副支店長のもとにあったことになる。

この事実は竹森にとってショックであった。

「そうすると、やっぱり耐火扉の密室も解けないな」

推理を試みても、耐火扉のトリックも密室が堅固であることを確認しただけであった。

「残念でした」

密室が解けないのを雅子は楽しんでいる様子だった。

変態式健康法

匠　克仁

変態した。ぼくは変態した。

変態するのは、ぼくだけではない。読んでいるあなたも変態するのである。

変態するのは人類普遍の原理である。あなた以外の人も変態する。日本の他のアジア人、欧米人、アフリカ人も変態する。男性であるか女性であるかの性別に関係なく変態する。

変態と書いているが、今までは名詞で使っていない。変態するという動詞である。異常な性行動をするという変態行動をするのでない。

変態というと、異常性欲者のように勘違いされる。Hは変態のローマ字の頭文字からスケベな人である。

変態について一般人は誤解している。特殊な趣味の人を変態と言っているが、それはごく一部の意味である。

変態というのは、生物学用語の日本語訳でもある。

変態の原語は、ｍｅｔａｍｏｒｐｈｏｓｅである。

変態はメタモルフォーゼというカナ書きとしても使う。

変態は動物が幼生から成体で形態を変えることである。

変態の代表的な例は、おたまじゃくし→蛙である。2回変態するのは、いもむし→さなぎ→蝶である。

変態の生物学的な正しい概念は、普通人が考えるような変態よりも意味が広い。蝶や蝉等だけでなく、バッタも変態するのである。一般的に、バッタは幼虫が無いから変態しないはずと思われる。バッタは一定数を超えると変態する。狂暴化し、体色も緑から黒に変化するなども変態なのである。

変態は植物学でも使われる。ぼくは花そのものを見ても変態的に感じる。花は学名でlabia（＝陰唇）である。

変態が逆立して女性器を露出している姿を想像するのが変態のぼくなのかもしれない。花が満開になっていると変態露出狂女性が大集団で性器を見せていると思う。

変態的に咲き乱れる花に満腔春意を感じる。満腔なんて変態言葉だなあ。満腔いや満腔の書き間違いだ。満腔も変態的語感だなあ。マンコーである。なお、植物学で

の変態というのは、奇形花のことである。
変態の例に貫生（つきぬき・かんせい）がある。花弁の変態で、花の中心から茎が出て、別の花が咲く。『植物の変態』というゲーテの著作にもある。貫生は、いかにも変態行為というか性行為というエロチックな連想をする変態なのである。生（なま）で貫（つらぬ）くだなんて変態っぽい。
変態は植物の根茎葉が本来の働きと違う形態でもある。
変態としては、気根・地下茎・補虫葉がある。
変態の地下茎の例に、ジャガイモがある。ジャガイモは変態だったのである。ぼくは、六つの小さな芽が生えた変態な双子ジャガイモになった気がした。ジャガイモに変態するという夢を見るとか想像をすることそのものが変態かもしれない。地下茎と陰茎小体は似てると思うが変態だろうか。
変態は動物学・植物学以外の学問でも使われる。
変態＝同じ化学組成で物理的性質の異なる物質の状態
変態は化学用語でもある。同じ元素でできた物質の事を変態という学術用語で呼ぶ。同素体とは、単体の場合の変態である。同素体は、化学の授業で習った気がするが変態の一種と知らなかった。同原子の酸素とオゾンとは変態同士である。炭素からできるダイヤモンドは黒鉛の変態なのである。それにしても、今までダイヤモンドが変態だなんて知らなかった。書店の検索機を使うのだが変態で検索していた。化学関係の専門分野で、金属の相変態などヒットした。検索結果を消し忘れていてしまい変態だらけの画面のままで、ピキンと次の客が凍った。
変態で検索するのは書店だけでない。自分のパソコンも変態とヤフーの検索欄にオートフィルされてしまう。
変態というと、カフカ『変身』を連想する。人が甲虫に変態すると、ぼくは言うのでない。と書いていて甲虫に変態した自分をリアルに想像してしまった。
変態することを人間にあてはめるのは強引だが、人間も変態、つまり、メタモルフォーゼする。人間が死ぬまで変態しないという考え方自体がおかしい。その考え方が変態的で、おかしなものとぼくは思う。
変態式健康法という題名であるが、世の中の健康法には変態的なものがある。例えば、飲尿療法などというのは変態というかSMというか、受け付けられない。もっと変態的なのは食●療法である。ここで書いた食●療法は変態プレイでない。健康人の腸内細菌を経口で投与する変態でない最新医学の治療法である。
変態は亦久能心と書く。またひさしくよくこころする。
変態は、また長くよく心しておくのである。いつも心に変態を、である。
変態度しない様、何度も長い間よく気を付ける。
変態度というのは、変な態度というぼくの造語であって変態の度数でない。

変態とばかり書いていたら、Hの文字を入力しただけで変態と勝手に変換するように、ぼくのパソコンと携帯が変態した。前号でもHERO物語と入力しようとしたら変態エロ話と変換したのだ。はひふへほ推敲法は変態あ変態い変態う変態え変態お推敲変態おうになった。
変態の変と恋とをよく書き間違える。恋人はいつも変人変態である。
変態願望は子どもならあるだろう。ぼくも小さいころは変態仮面ライダーごっこをしていた。
変態（ヘンーーータイ！）トーーーーーーーー！と変身を変態に読み替えて遊んでいた。
変態式健康法を執筆し、推敲するにあたって、ぼくは大変態度を真面目にしている。服装にもこだわる。それが変態式執筆法である。基本は下半身裸である。いかにも変態っぽい。パンティーなら履いてよいが、煩悩くんが変態チックにはみ出ている。胸にはブラジャーを付ける変態ルックである。頭にはブルマをかぶるのである。
変態式健康法を書くために必要な執筆態勢なのである。大変態勢が整って書いている姿が想像できただろうか。
変態な文章を書いた。穴があったら入れたい、これでは変態だ。穴があったら入りたい心境である。ここまで大変態（わざ）とらしい文章を書いた。ぼくの性格で、大変態々（わざわざ）誤解されてしまう様な表現をする。大変態力…じゃない、能力の少なさを感じるのである。大変態…じゃない熊の冬眠の様に現実逃避したくなった。
変態で始まる文章はもう自粛する。このままではずっと変態が二文字目に来る文章しか書けない。仕事をしても変態と報告書に書いてしまった。就職活動をしているが変態の文字が履歴書にたくさん出てくる。
変態間違え、じゃない、変換間違えに気が付かないまま変態と書いて郵送していた。履歴書を見直すと、所々で変態と変換されていた。最初から、ぼくの姓名の名が勝変態イロとなっていたのである。採用の担当者は随分と変態な名前と思っただろう。過去の勤務先を見直すと、朝変態いい銀行になっていた。何気なく書いてるが、朝の変態がいいという伏線である。この履歴書ではブラック変態企業しか就職できないかもしれない。
変態文は本当に終了する。
変態原稿を書いている場合ではないのである。

＊

現在のぼくは危機的な状況である。
前号では警察官に追われる中、危機一髪のところで締切に間に合った。
今回は危機一髪で回避するどころか、危機一発で大爆発である。いま僕は地雷の上に載っているようなものだ。
原稿の締切日は、ぼくの失業日である。九回目の失業である。九回も首を斬られると、生きているのが不思議である。

とはいえ九回も首になっていると、なんかキングギドラの首を何度切っても生え変わるように慣れたものだ。

今回は次の就職がまーったく決まっていないのである。就職活動も十回目となると、厳しい。

人生崖っぷちどころでない。人生の断崖絶壁から既に落ちている真っ最中である。

泥棒を見て縄をなうドロナワのように、崖から落ちてパラシュートをなう、ガケパラの状態である。

このままでは、ぼくのライバルの地球と一対一の肉弾戦が繰り広げられるところだ。

ところがどっこい。ぼくには空飛ぶ人喰いイカという立派なパラシュートがある。

ぼくは空飛ぶ人喰いイカのおかげで死なないのである。

空飛ぶ人喰いイカの魔力で、自殺をくい止めることができる。

＊

またまたまたから煩悩くんがキーボードを打っている。

たまたまたまの間から飛び出した煩悩くんである。

たまりにたまっていたようで、打ち止まない。

煩悩くん、別名、空飛ぶ人喰いイカは、主人のぼくが落ち込んでいても相変わらず元気である。

煩悩くんがイカタコいやイタコのように発射し続けた。

息子の煩悩くんが反抗期で、ぼくの気持ちに関係なく、こんな文章を書く。

ぼくはかつて煩悩くんをよくなでなでしていた。その後、言うことを聞かないので、折檻して、しごいていた。

しごきすぎたら、煩悩くんが反抗したのである。

金融工学で「尻尾が犬を振り回す」という表現があるが、煩悩くんがぼくを振り回している。

＊

過去一二四号までは、ぼくは注意したことがある。

ぼくは二行の間に同じ言葉を使わないようにした。

それは三島由紀夫の影響を受けたからである。「私はまた、二、三行ごとに同じ言葉が出て来ないように注意します。」三島由紀夫『文章讀本』（第八章）の一節である。

ぼくは三島由紀夫と同じ心境である。タタタ文を書かないのも三島由紀夫の文体の影響である。

ぼくが三島由紀夫の『文章讀本』を読んだのは、受験前の高校三年生のときである。そのときはなるほどと思ったが、三十年前なのに未だ気にしている。

今まで隣の行の同じ位置に同じ文字が並ぶのを避けて書いた。隣の行の同じ位置に同じ文字が並ぶのは生理的に嫌だ。隣の行の同じ位置に同じ文字が並ばないよう書くので、隣の行の同じ位置に同じ文字が並んだ事がないはずだ。隣の行の同じ位置に同じ文字が並ぶ前に表現を替える。隣の行の同じ位置に同じ文字が並ぶのは、スロットマシーンで絵文字が並ぶ様なイメージである。スロットマシーンで絵文字が並ぶのはうれしいかもしれない

が、エッセイ中に文字が並ぶのはうれしくない。

同じ文字が並ばないように工夫するのは、主語、人名もである。〇〇は…で始まる文章が続くのは避けている。

そのため、ぼくの文章はかなり主語の位置が異常である。例えば「…をして、〇〇は…した。」というような表現を平気で書く。一文だけ読むと悪文である。

しかし、前後の文章も同じ主語で始まるのは、嫌なのである。善悪でなく好き嫌いの問題で、同じ主語から始まる文章を続けたくないだけである。

＊

変態式健康法に戻ろう。

ぼくはSである。ぼくはMでもある。しかも、ぼくの下半分はLLである。あ、Aを入れるのを忘れた。ぼくはSMALLである。

つまり、ぼくはちびなのである。いや、ちびでなく、ちんちんちん、いやいや、ちんちくがんと呼んでほしい。

ぼくは以前に体重と身長だけでエッセイを書いたが、25年間ずっと53kgを維持している。

変態式健康法の基本は、体重管理なのである。ぼくは、大変態重…じゃない、体重を気にする。またまたまた変態な文章になった。

ちまたでいうレコーディングダイエット法でないが、体重を毎日記録していることを書いた。

レコーディングダイエットは因果関係がおかしい。世の中のダイエット本は因果関係が証明されていないだけでなく、論理的におかしいものが多い。

体重を測るという原因が、痩せるという結果になるというのは、論理的に成立する訳がない。

因果関係というのは、AならばBという関係である。

ところが、AとBに共通の原因Xが存在する場合がある。つまり、XならばA、XならばBという関係があって、時間的にAがBに先行するために、AならばBと因果関係があると誤認することがある。

このAとBの関係は因果関係でなく、『近親相姦』と呼ぶ。ぼくって物知りだなあ。でも、ちょっと違うような。

近親相姦でなく、『疑似相関』だった。近親相姦だったら変態である。さき程の疑似相関における要素Xが、『潜伏変態』なのである。また違うような気がする。これだと変態がどこかに潜伏していることになる。これは、潜伏変態でなく、『潜伏変数』である。別の名称では、『行楽変態』という。行楽なんていうと行楽地によく出没する変態みたいである。正しくは『交絡変数』という。また変態始まりの文章になってしまった。さすがに、これで変態と書くのは打ち止めである。

レコーディングダイエットに戻ると、記録するがA、体重が減るがBで、AならばBという論理である。

どう考えても、記録することと体重が減るという二つの現象A・Bの前に、健康診断で指摘されたとか、好き

な人ができたとか、運動を始めたとか別の原因Xがあるだろう。そもそも痩せたいと思ったことがXで、記録する行為Aと体重が減少する現象Bの同時に原因になっている筈である。痩せようとの思いが潜伏変数である。

そういう論理的なことを無視したダイエット法があふれている。疑似相関・潜伏変数という概念を知っているだけで世の中の欺瞞や嘘を見抜くことができる。

世の中にはダイエット法だけでなく、地球温暖化など因果関係のないものをあたかも因果関係があるかのように論理のすり替えをしているものが多い。近親相姦や潜伏変態だらけ、いや疑似相関や潜伏変数だらけである。

＊

体重コントロールは食欲コントロールである。

お腹がすいたら、脳の錯覚とか、気のせいと考えるようにしている。ぼくの場合はどんなにお腹が空いていても、水さえ飲めば空腹感がなくなる。

ダイエット中に食欲が抑えられなければ、餓死寸前の難民の子どもの写真を見れば、とても食べる気は起きないだろう。それでも食欲が抑えられない人のために特別に変態ダイエット法をぼくはお勧めする。

変態系アダルトビデオを見れば、食欲が失せた…じゃない、失せるだろう。過去形を使うところでない。ぼくが変態ダイエット法を実践したのでない。ぼくは真面目で変態ＡＶなんて生まれてから一度も見たことが無い。

＊

変態することを人間の場合にぼくが使っているのは、次の意味である。

人間は解糖系生命体からミトコンドリア生命体に変わる。

解糖系生命体は、糖を分解してエネルギーを作る。

ミトコンドリア生命体は、酸素を使ってエネルギーを作る。ミトコンドリアとは細胞の中にあるエネルギーを生み出す小さい袋である。

もともと人間のエネルギー生成するシステムは①解糖系と②ミトコンドリア系との二つから成り立っている。

生れたばかりは解糖系がほぼ１００％であり、老衰で死ぬ直前はミトコンドリア系がほぼ１００％である。

人間を車に例えると、ガソリンと電気のハイブリッド車である。生れたときはガソリン１００％であるが、最後は電動１００％になるイメージである。

年齢とともに比重が変わるのであるが、Ｓ字カーブを描いて、四十代で大きく変化する。

エネルギー生成システムにおいて解糖系が多いものを解糖系生命体、ミトコンドリア系が多いものをミトコンドリア生命体と表現する。厳密には割合なので二つの生命体が同居しているのだが、便宜上、そのように呼んだ方が理解しやすい。

四十代で、解糖系生命体からミトコンドリア生命体に

切り替わる。

変態した、という冒頭の一文を正確に表現すると、次のようになる。

ぼくは四十代になって、解糖系生命体からミトコンドリア生命体に変わった。

ぼくは四十代になって、エネルギー生成システムが解糖系よりもミトコンドリア系の方が多くなった。

人間の体は解糖系からミトコンドリア系に変態するから、その状態に応じた食生活をすることである。

同じ食事をしていれば、中年になると太るのは当然である。四十代からは解糖系のエネルギー源である御飯やパンなどの糖質を控える方が良い。

＊

変態式健康法は食事だけでない。

健康法の三本柱は①走る②笑う③日光を浴びるである。

1．運動が健康に良いことは、周知の事実である。その中でも有酸素運動であるランニングが優れている。

2．笑うことは、ナチュラルキラー細胞を増やし、体の中の異物を排除してくれる。

3．日光を適度に浴びると、セロトニンの分泌を増やし、精神的な安定につながる。時間は短くても、浴びる面積はなるべく多い方が良い。

ということは、この三つを組み合わせると、理想の健康法になる。つまり、変態式健康法は次の通りである。

全裸で日光を浴びながら、大笑いしながら、走り回る。ん？どこか間違っているだろうか。世の中にあふれる健康法と比べて、極めて論理的である。

ぼくのエッセイを読んだ人に特別スペシャルボーナスプレゼントで変態式健康法を無意識に実践する催眠術をかけよう。あなたの潜在意識に変態式健康法を植え付けているのである。

明日の朝、あなたが目覚めたときには既に、変態式健康法を実践し終わった後である。

あなたが目覚めたときは全裸である。すっぽんぽんである。男性なら股間のすっぽんもす～っぽんである。

変態と周りの人から叫ばれているかもしれない。

全裸で日光を浴びながら、大笑いしながら、走り回る。
全裸で日光を浴びながら、大笑いしながら、走り回る。
全裸で日光を浴びながら、大笑いしながら、走り回る。
全裸で日光、大笑い、走る。全裸で日光、大笑い、走る。
全裸で日光、大笑い、走る。全裸で日光、大笑い、走る。
全裸大笑い走る。全裸大笑い走る。全裸大笑い走る。
全裸大笑い走る。全裸大笑い走る。全裸大笑い走る。
裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。
裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。裸笑走。
裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑
笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走裸笑走
笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑笑

編集後記

今月は三戸岡道夫氏が「まんじ」の歴史を寄稿されました。私などは「まんじ」になってから参加させていただいたので、詳しい歴史は知らないまま同人にさせていただいています。「まんじ」の毎号の発行ナンバーから感覚的に凄い歴史があるなーとは思っていましたが、今までの歴史の重みを考えると、その時々を同人皆様と楽しみながら、後世に残しうる「まんじ」を作っていかなければ、と思ったのは私一人だけではないと思います。

「つれづれの源氏物語」を、昨年二月から五回にわたり極めて精力的に執筆された小田紘一郎氏が四月三日、急逝されました。氏のご冥福を心から祈ります。氏は透析治療を数年前から受けており、日常的に体調が十分でない状態の中であれだけの内容と、氏独特の思想を入れてお書きになったことに、深甚の謝意を表したいと思います。四月六日の告別式には、「まんじ」としてお別れに参加してきました。

我が家の次郎柿の枝が、淡い緑の可愛い葉を沢山つけていますが、一三六号がお手元に届くころには、濃い緑になっていると思います。今回の表紙の色はその新芽の精にあやかって「もえぎ」にしました。皆様とともに日々健康に過ごすことを祈念します。

（鍋）

まんじ第136号

平成27年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「和して同ぜず」

田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.137

2015.8.1

まんじ第百三十七号　目次

『日本はない』か『ある』か……新井　宏…4
ロボット雑考……三戸岡道夫…12
今、再びフォークソングのブームを……古屋富雄…25
～「過疎」をテーマにした2曲をリリース～
祝い舞……横山正義…31
東北部太平洋沿岸の遺跡と……漆原直子…41
原発被災地の視察
短　歌　行雲流水（四十六）……石黒修身…45
若山牧水　寸評……石黒修身…50
―沼津千本松原、富士山、旅と紀行、そして酒―
古い物・遠い夢「織部」いま（茶道史余滴）……忠内正之…54
生　還（一）……太田精一…66
（司馬雑感三十八）千葉一族と山内千代……山田嘉久…73

関東管領始末記⑱　管領憲政関東落ち……千坂精一…80
漢　詩　潮騒錄（八十一）《漢詩の流れ69》……鯨游海…92
漢　詩　汲深録（一）……松井秀人…96
性と化粧の物語（二）……鈴木守…98
『時評家　新明正道』（評伝その二）……山本鎭雄…107
千家尊福伝（八）……村上邦治…118
男爵より上位を求めた神職華族
殉　教（八）……鍋屋次郎…127
明治時代の著述者　渋江保の一生（その二）……山本勉…139
密室銀行（二十）……匠克仁…142
まんじ中毒……匠克仁…146
編集後記……編集子…162
表紙　絵……田寺怜葦

『日本はない』か『ある』か

新井宏

今から二十年ほど前、韓国で『日本はない』（一九九三年）と『日本はある』（一九九四年）というヘンテコな題名のベストセラーがでた。

『日本はない』の著者、田麗玉は一九五九年生まれ、梨花女子大の大学院を経て、一九八一年にKBS（韓国放送公社）に入社、九一年から九三年までの日本特派員の経験を基にして書いたのが『日本はない』である。韓国の若者の間で爆発的な人気を集め、たちまち七十万部（総計百万部）を超えるベストセラーになった。題名の『日本はない』は「もはや日本から学ぶものなど何もない」の省略形である。

英字紙のコリアヘラルドが社説に取り上げたほどであるが、「傲慢で独断的な書名が示すように、著者は日本的なるもののほとんど全てを否定することに集中し、日本人の強さや優越性を無視している。青臭い日本嫌いが、日本から学ぶものは何もなく、韓国は日本のようになってはならないと主張しているのである」と批判的に要約している。

一方の『日本はある』の著者、徐賢燮は一九四四年生まれ、七〇年代半ばからの駐日大使館時代に明治大学院に学び博士号を習得した知日派外交官で、題名はもちろん『日本はない』を裏返しにして「日本から学ぶことがたくさんある」ことを意味している。

日本たたきが超ベストセラーになっている中で、それに歯止めをかけようとする内容は、当然激しい批判の対象となるかも知れず、数年後に「特命全権大使」のポストが約束されている職業外交官にとっては覚悟を要することであった。しかし明治大で国際法と近代日本史を専攻した徐賢燮にとっては、感情的かつ短絡的で浅薄な日本論にはとても我慢が出来なかった。家族の反対を振り切って出版したのが『日本はある』である。三十万部のベストセラーになった。

一九九〇年五月、天皇陛下が盧泰愚大統領を迎え、宮中晩餐会で朝鮮通信使に触れ、歓迎の辞を述べられた時、盧泰愚大統領は答礼の言葉を「……二百七十年前、朝鮮との外交を担当した雨森芳洲は、誠意と信義の交際を信条とした」と結んだ。その頃、専門家以外に雨森芳洲を知る者は少ない時代で、日本側の関係者を驚かせ、その後の雨森芳洲ブームをもたらしたスピーチであった。

その盧泰愚大統領の草稿を書いたのが、徐賢燮なのである。日本史について、かなり自負している私でも徐賢燮の書を読むと改めて学ぶものが多くある。『日本はある』には、明治維新前後の日韓を比較した題材が豊富に出てくるが、それは韓国という異文化から視た斬新な「明治維新論」なのである。

実は、私にとって『日本がある』は韓国語の教材であった。韓国語を学ぼうと思って相模原図書館で見付けた本であるが、話題の多くが日本史から採られていて、単語さえ分かれば読めそうである。言語というのは、良く知っていることは良く通じる。

当初は、毎朝出勤前に辞書を引きながら半ページほどしか読めず、全訳をメモする有様であったが、その内に、表音文字のハングルから漢字が類推できるようになった。漢字化した韓国語なら、初心者でもかなり読める。途中からは、全訳をパソコンに入れ始めた。

一年ほど経ってみると、三分の二ほど翻訳が終わっている。内容が実に面白い。日本語で出版したら良いのではないか。韓国の出版社に韓国語で連絡をとってみた。

なかなか返事がなかったように思う。特に期待していたことでもないので忘れかけていたところに、パプアニューギニアの大使館から連絡がはいる。大使の徐賢燮からであった。その時はじめて『日本はある』が『日本の底力』として既に光文社から出版されていたことを知った。

その時のことを徐賢燮は『日韓曇りのち晴れ』（草書房）の中で、次のように描いている。

中見出しに「日本の読者は恐ろしい」とある。

パプアニューギニアの韓国大使館で勤務していたある日のこと、新井宏氏という工学博士から一通の手紙が舞い込んだ。私の全く見知らぬ方だった。昭和十二年生まれの新井宏氏は韓国語を独学し、韓国語の書物を読むのに不自由はないそうだ。ソウルで見付けた私の『日本はある』を読んで、三分の二ほど日本語に訳し、そのコピーを送ってくれたのである。翻訳が終われば出版したいのであらかじめ私の許可を求めたい、という驚嘆すべき内容であった。日本人の旺盛な知的好奇心には、常々敬意を表するものだが、これは大きな驚きであった。

残念ながら、翻訳本はすでに光文社から出版された後であり、その旨をすぐ返信したが、その時の喜びの余韻

は長く残った。福岡赴任後、何回か電話では話したが、まだ一度もお会いしたことがない。……(この文章の後に、更に二人の日本人から同様に『日本はある』を翻訳したとの連絡が入ったとの紹介が続く)……。

『日本はある』は韓国で三十万部以上売れた本だが、日本人のように徹底的に読み込んでくれた読者は、一人もいないと断言できる。私の妻や大学在学中の息子や娘も精読どころか通読さえしなかったくらいだから、新井氏をはじめ日本人の読者には、著者である私自身、恥ずかしくなる思いだ。

徐賢燮は、その後、福岡総領事、横浜総領事を経て、駐バチカン法王庁大使となり、退任後は、九州大、長崎県立大の教授として長らく日韓親善に務めていたが昨年帰韓した。キリスト教徒の多い韓国では、法王庁大使は格の高いポジションと聞くが、あるいは、敬して遠ざけられたのかも知れない。

ところで、私は結局徐賢燮に会う機会を逸した。その代わりに妻が横浜総領事館で総領事の徐賢燮に会っている。それは、私が韓国国立慶尚大学に赴任してまもなくのことであった。

私を招聘してくれた許甫寧教授が、何か就業条件のことで、急いで申請書類を作る必要が生じ、韓国の横浜総領事館で許可を得てほしいとのことであった。丁度その時、徐賢燮は横浜総領事に赴任したばかりであった。早速その場で電話して便宜を図ってもらい、妻に取りに行ってもらったのである。それを見ていた許教授や学生達は、「新井先生は顔が広い」と、びっくりしていたが、ちなみに韓国ではそんな時「足が広い」という。

さて、主題の『日本はない』と『日本はある』に戻る。『日本はない』の方を読んだのは、徐賢燮からの連絡を受けた後である。既に翻訳されて『悲しい日本人』(たま出版)として出ていたが、勉強のため韓国語で読み始めた。しかし『日本はある』のような読後の充実感がなく、結局、途中からは翻訳本で通読した。

冒頭から、地下鉄の乗客を観察していて「なんて日本女性はブスなんだろう」と強烈である。たしかに一面的な見方というのは面白い。日本人の私でさえ、「そうだ、そうだ」と言いたくなる描写が多くあるが、全体的には、挑発的でありながら、どこか類型的で浅薄な借り物の印象が否めなかったのである。そんな中で、田麗玉がムキになって怒っていた話を覚えている。

彼女が下宿探しで差別を受けた時に、やっと高級住宅地の自由が丘に部屋を契約した時のことである。保証書と引き替えに鍵を引き渡してもらう約束であったが、彼女の保証人が韓国に旅行に出てしまい、提出が遅れてしまったのである。そのため、女性の仲介担当者は、鍵を

渡さなかったが、そこには、保証人が韓国に急に出かけたことに不審を抱いたこともあった。

その時の田麗玉は、激高して高圧的に「あんたのような非人間的な考え方をする人間はいないわ。日本という国はこの程度なの?……あんたの国はアジアで最低の国、アジアの後進国よ」と罵詈雑言を浴びせ、上司を呼べ、家主に電話しろと、日本人に勝ち誇った様子をトクトクと述べているのである。だから「韓国人は」と言われるのも無理はない。

その後、田麗玉は『日本はない』を手土産として帰国、作家生活に入ったが、二〇〇四年には国会議員に当選し、当時野党であった保守党ハンナラ党の広報責任者となる。私が韓国に通っていた頃、しばしばハンナラ党のスポークスウーマンとしてテレビで見かけた。

ところが次々にトラブルを起こすのである。

まず、次期大統領は大学出を選ばなければならないと主張する。もちろん、当時の大統領盧武鉉が高卒で、素っ頓狂な行動が多く、世界に通じない独自の主張をするのを批判してのことである。

次には、前大統領の金大中を対北朝鮮との交渉過程のことで痴呆症老人と決めつける。それでも、党の最高委員の一人に選出された。次期大統領選挙が迫っていて、保守系が有利なことは判っていたが、保守党内部は李明博で一本化されていなかった。今の大統領朴槿恵が大きな勢力を維持していたからである。

そこに田麗玉の盗作問題が提起される。『日本はない』の内容の多くが、彼女の先輩の仕日ルポ作家の柳在順から聞いた内容を剽窃したものだというオーマイニュースの報道である。

そもそもおかしな展開であった。柳在順から聞いた内容を盗用したのであれば、柳在順が訴え出たと思うのが常識である。ところが、逆に田麗玉がオーマイニュースと柳在順を名誉毀損で訴えたのである。オーマイニュースは、大統領選で盧武鉉当選のうねりを作った市民団体的な媒体である。田麗玉の属するハンナラ党の宿敵ではあった。

しかし、五億ウォンの損害賠償訴訟は、一審も二審も田麗玉が敗訴する。事実関係は明瞭であった。二審のソウル高裁は「田議員は在日作家柳氏と親しく過ごしている時、柳氏が日本に関する本を出版する予定という事情を知りながら柳氏から伝え聞いた取材内容、素材およびIDなどを無断で使い、これを引用して本の一部を書いたと見られる」と明らかにしたのである。

当時、訴えられた柳在順は『日本人あなたは誰ですか』という本の出版を準備していた。しかし、「私が自分の足で歩き、取材した内容と資料の半分以上が、そっくりそのままその本につかわれていたのだ。その本の著者が取

材していないのはもちろんである」と『下品な日本人』（韓国語原題は『あくびの日本人』）の「あとがき」に述べている。

通常なら、これでおしまいである。ところが田麗玉は大法院（最高裁）まで上告するのである。事実関係を巡る判断が覆るはずがない。二〇一二年に敗訴確定。折からの国会議員選でも公認が得られず、新党「国民の考え」から立候補したが落選してしまった。その背景には、盗作事件の他に、朴槿恵大統領が党内の反朴派、田麗玉を嫌っていたこともある。

他にも、二〇〇九年に、韓国の国会廊下で左派系の七十代の女性から暴行を受け、全治八週間の「重傷」を負ったと主張する事件があった。ところが、たまたま国会見学に来ていた高校生が携帯で撮影した映像からは、とても田麗玉の言い分が受け容れられる状況ではなかった。

盧武鉉のように、素っ頓狂でバランス感覚の欠如した人物を大統領にする韓国である。最近も大韓航空のオーナー会長の娘で副社長の趙顕娥が「ナッツ回航事件」を起こし世界に恥をさらした。だから田麗玉のような報道人が政治家になっても不思議ではない。

日本にだって似た事例がない訳ではないが、日本に対するコンプレックスと結合すると、「日本たたき」として勢いを持つ。それが韓国のポピュリズムだ。

例えば、歴代の大統領は常に就任当初は、かならず未来志向の対日関係を標榜する。それは当然である。国政運営において、慰安婦問題や竹島問題ばかり振りかざしていては、成果が上がらないのは分かりきっているからである。

金泳三大統領は、「河野談話」の作成に関与した結果、その最終案を評価し、韓国政府として了承したが、そのことは「非公開」とされた。公開されていれば、国際間の約束に準じることになり、問題を再燃させることができなかったはずである。

金大中大統領は、慰安婦問題について一度謝れば二度と問題にしないと約束して、日本側から一九九八年の日韓共同宣言において「痛切な反省と心からのおわび」という言葉を得た。金大中は約束を守った。

その後を継いだ盧武鉉も、就任当初の二〇〇三年、小泉首相との間で「北東アジアの平和と繁栄の時代における協力」に関する共同声明を発表し、二国間の歴史問題を外交問題として提起しないと公言した。

ところが、支持率低下に伴って豹変するのである。国際的な遡及立法禁止など無視して、植民地時代の「親日派」を処罰する法律を制定し、日韓基本条約で経済協力と引き替えに対日請求権を一切放棄したはずなのに、戦時徴用者や従軍慰安婦関係の訴訟を許し、拳を振り上げ

るのである。

しかし次期の李明博は経済人であった。就任以前から「謝罪や反省は求めない」と言っていた。しかし、レームダックの任期末が近づくと焦りだす。折からの日本の民主党政権を揺さぶり、二〇一二年三月には佐々江外務次官による「佐々江案」を引き出した。それは

1 日本の首相が公式謝罪をし
2 慰安婦被害者に人道主義名目の賠償をし
3 駐韓日本大使が慰安婦被害者を訪問して首相の謝罪文を読み、賠償金を渡す

という内容であった。

自民党内閣では想像もできないほどの譲歩であったが、韓国側が更に「人道主義名目の賠償」を「謝罪金」とするように要求したので、今度は野田首相が突っぱねた。

完勝目前と思っていた李明博にとっては、国内向けとは言え、もはや「竹島上陸」と「天皇の謝罪」に進むしかなかった。そして、そのことが日本の嫌韓世論をいっきに高め、安倍政権を再現させた。韓国が要求すればするほど、逆方向の効果を生むのである。フランスの心理学者、エミール・クーエの言う「努力逆転の法則」である。

このように歴代大統領は就任当初は「未来志向」で反日を棚上げしていたのに、当初から反日姿勢を採ったのが朴槿恵大統領である。朴正熙を父に持つ朴槿恵は、対日問題で融和的な姿勢を採ると自らが攻撃にさらされる立場にあった。李明博より後退することなどできない。

だから最初から旗幟鮮明にして「加害者と被害者という歴史的立場は、千年の歴史が流れても変わることはない」と演説し、外国をまわっては「告げ口外交」をして、中国に近づくのである。人気取りの発言は、まもなくブーメランとして足を引っ張る。任期半ば前に、もうその徴候が明らかになっている。

今や朴槿恵は四面楚歌である。経済はガタ落ち、公約は何も進展せず、セウォル号事件では味噌をつけ、側近中心の人事が厳しい批判にさらされ、首相人選も六人目と難航している。政治家として致命的なのは、君臨してばかりいて、コミュニケーションの能力に決定的に欠けることだと韓国のマスコミが一斉に言い始めた。

国会も、与党とは言え反朴槿恵派に抑えられてしまい、人ごとのように「増税なき福祉」などと理想ばかり述べていることに、批判がではじめた。

特に、日本を無視し中国に近づき過ぎた中で、米国のいらだちは尋常ではない。その上、和解などできるはずがないと高を括っていた日中が急接近している。

「外交上の孤児になった」、「日本の謝罪が韓国に何の利益になるのか」、「韓国の外交的孤立は予告された惨事」、「外交を国内政治として取扱った過ち」、「慰安婦問題が解

決しなければ何もしないのか」、「日本の反韓感情は韓国人の想像を超える」、「日本と米国はもう韓国を捨てた」、「悪魔とダンスをするのが外交」、「反日ポピュリズムが招いた自縄自縛」、「正しい発言をするほどこじれる」、などの発言が一気に噴出している。判っていたのであればなぜもっと早く言い出さなかったのか。

トップの「正しい発言」とは「幼稚な正論」に通じる。これが韓国の後進国部分に共振して政治のポピュリズムを動かし、政治や外交を硬直化させる。先進国化を急激に遂げた韓国は、未だ基層に多くの後進国部分を抱えているのである。

朝鮮末外交史の権威、ソウル大名誉教授金容九は「韓国は未だ中世を脱していない」という。中世的な社会から近代化の過程を経ずにいきなり現代に突入した韓国は、一方では北朝鮮のような古代的・中世的な専制独裁国家「金王朝」を許容し、他方では「恨」と称する中世のメンタリティを強く残し、これが「反日」、「遡及立法」、「国際法無視」、「労組の横暴」、「セウォル号紛争」など生んでいる。

朴槿恵大統領の支持率が六十歳以上で七十七%、二十代では十一%というのも後進部分と先進部分の分裂なのである。

結局、朴槿恵大統領の「慰安婦問題への執着」は、米国をいらだたせ、日本に「反韓感情」を蔓延させた。米国に言いつけて、日本にお灸をすえ、謝罪を勝ち得ようとする作戦は既に崩壊した。

「竹島問題」など、実効支配をしている韓国が騒げば騒ぐほど、日本はほくそ笑む。「竹島問題」をタダで国際社会に広報してくれるからである。

最後のひとりまで遺体を捜索するという「幼稚な正論」のため、誰もが望んでいないのに、二百億円も掛けて、「セウォル号」引き上げざるを得なくなった。そもそも、盧武鉉の「新行政首都」という甘言に始まった世宗市造成は、ハンナラ党が「非効率的で施行困難」と結論付けたのに、朴槿恵が、地域エゴのため野党に同調してこれを覆して進め、今その悪影響に悩んでいる。

そしてついに、日本による強制徴用被害者遺族が、韓国政府を相手にして、「韓日請求権協定に基づき、無償で支援された三億ドル（当時の韓国の国家予算が三・五億ドル）を遺族に返還せよ」と求める声明文を発表した。裁判も起こしている。

韓国政府は、被害者が直接日本に請求するように盛んに誘導しているが、日本が受け容れるはずがない。第一、請求権協定で、朴正熙政権が補償金を受け取り、被害者たちに対し政府レベルで個別に支給するとしたのであるから、韓国政府が対応するのが当然なのである。

しかも、この三億ドルを全て経済発展のために使い、

現代韓国を築いたのであるから、成果配分を付けて補償してもおかしくないのに、韓国政府は既に時効が成立していると拒否している。朴槿恵としては、強制徴用被害問題の矛先が、父親の朴正熙に向かうのを怖れ、反日の影に隠れていたいのである。

一年前、本誌に「均衡者外交・あるいはポーランドと韓国」と題して、歴史に学ばない韓国外交の危うさを書いた。その中で「中国は豹変する」と言う言葉を何度も使った。造船、鉄鋼、石油化学、電化製品、電子などの量産型産業は、韓国に消費の基盤がなく、輸出しなければ成り立たない産業ばかりである。しかも中国が追い上げるのに最も適している分野である。

中国は韓国にとって最上の顧客ではあっても、すぐに競争相手に替わり、一気に市場を失う。その悲惨なゲームが中国の不況と共に既に始まったのである。中国に近づき過ぎて、その影響下に埋没すれば、中国の一つの省に成り下がってしまう。いったん先進国化した韓国にとってそれが耐えがたいのは自明である。いまは、米国や日本の側に立って、ヨーロッパと同じように中国市場と接するのが歴史の常道なのである。

経済危機に陥った韓国は、これからも日本から学ぶことばかりである。『日本はない』などと自惚れ、アジアの均衡者外交を掲げて、中国に接近し、日本や米国をけん制しても、そこにはポーランドと同じ運命が待っている。

ポーランドはまったく相容れないドイツとソ連の間にあって均衡者外交政策を採り、ドイツに近づいたり、ソ連に近づいたりしたが、宿敵同士のドイツとソ連が突然手を握りポーランドを分割してしまった。それに比較すれば日本と中国が韓国の頭越しに手を握るのなんか当たり前のことである。

徐賢燮は最近の日韓問題についてのインタービューで次のように述べている。

「メディアの責任も大きいでしょう。自国が絡む紛争については冷静さを呼びかけるのが役割のはずのメディアがプレーヤーになっています。日本も余裕がなくなりつつありますが、韓国メディアにはもっと多様さや余裕を認める度量がほしい。たとえば独島（竹島）の領有権について、日本では国立大学の教授でも、政府の主張を堂々と批判する人がいましたね。でも韓国で政府批判をしたら大変なことになる」

やはり韓国にとって『日本はある』のである。

（追記）原稿提出したのが、五月三十日。丁度その日、韓国ではＭＥＲＳ感染の大事件が発覚した。

ロボット雑考

三戸岡道夫

一、ロボットに対する日本政府の方針

ロボットのイメージは最近いろいろな方面にひろがっているが、科学的に正確に言えば、

「プログラムされた方法で感知し、行動する能力を持つ機械」

のことである。

日本のロボットは最近までは世界一であった。特許庁の調査によると、二〇〇七年（平成十九年）の日本のロボット関連の特許出願件数は一七一九件で、世界第一であった。欧州は一〇九四件、アメリカは五三五件、中国は四九九件、韓国は四一六件と、大きく水をあけていた。日本がロボット王国と呼ばれてきた理由はここにある。

しかし最近は他国もロボット関連の特許出願がふえており、二〇一一年（平成二十三年）時点では、暫定値で、中国は一三二〇件と二〇〇七年の三倍弱に伸び、日本の一五八三件に迫っている。韓国も八五七件と倍増し、海外勢の追い上げが激しくなっている。

それはロボットが、インターネットにつづく「次の産業革命」の主役であり、今後ロボットは、産業用だけでなく、サービス業、介護、防犯、農業、災害用と、多方面で著しい成長が見込まれるからである。

このような方向づけの中で、政府も、安倍首相はロボットを成長戦略の支柱とすると公約した。

そのため政府は平成二十七年七月二十三日に、閣僚や企業経営者による、

（ロボット革命実現会議）

を首相官邸で開いた。そして規制緩和により、医療・介護や、農業などの現場で、ロボット活用を促すことを柱とする「ロボット新戦略」を策定した。そして目標をロボット市場を五年後の二〇二〇年（平成三十二年）に、現在の約四倍の二兆四千億円に引き上げる目標を提示し、日本を最先端技術のショーケースにする姿勢を打ち出した。

ロボットの活用は政府の成長戦略の一環であり、政府がロボットだけを対象に長期戦略を策定したのは、これが初めてである。安倍首相は、

「官民一体で取り組んでいく必要がある。今年はロボット革命元年だ」

と強調した。

新戦略では、医療、介護現場で、介助者の負担軽減などに用いるロボットの、承認審査の短期化などの規制緩和や、関連法制の整備の必要性を指摘した。また民間企業の研究開発を、国が後押しする役割も示した。

ロボットの導入は、製造業にくらべて小売業や飲食業などの、非製造業で遅れている。新戦略では、非製造業で五年後の市場規模を、現状の二十倍となる、一兆二千億円とする見通しを盛り込んだ。建設業などで深刻な人手不足を緩和し、生産性を向上させようという狙いもある。

このような政府のロボット産業の新成長戦略の中で、経済産業省は、国内ロボット市場が、平成四十七年には平成二十七年に比して、六倍の九兆になると予測している。

ロボット分野では、アメリカ・グーグルなどが、ロボットベンチャーを相次いで買収する動きが加速しており、今後、海外メーカーとの競争激化が予想される。日本メーカーは産業用では先行しているが、家庭用でもどんな機能やサービスが提供できるかが、普及のカギとなるであろう。

そして規制緩和で、産業の生産効率を引き上げるほか、官民で一千億を投じて、関連産業の市場規模を四倍の二兆四千億に拡大するのである。

日本の全企業の九割を占める中小企業、全従業員の七割超のサービス業を、どのように底上げするかが課題である。政府の支援で、中小五百以上にロボット導入へのコンサルティングを実施し、安価なロボット開発も後押しする。接客や旅館の裏方などにも、ロボットを導入する。

このように政府は成長戦略として、ロボットの開発や活用を促進方針であるが、そのための規制緩和やルール作りにも乗り出している。

トンネルや橋梁、製油所など、インフラの保守点検で、目視の義務付けを緩和したり、無人飛行機（ドローン）

の使用を認める、高度や安全管理を法律で定めたりする。

日本は工場の生産ラインでの自動化などでは先行して、「ロボット大国」などと呼ばれていた。しかし最近では欧米では、商業用の輸送やサービスに、ドローンや自動運転車を活用する動きが拡っており、国際的な開発競争が激しくなっている。

政府のロボット革命実現会議では、

「ロボットの普及活用を進めるため、規制、制度改革や、ルール作りが不可欠」

と報告書で提言している。

国や自治体が定めるインフラ点検のマニュアルでは、金属のひずみなどを装置で監視していても、最後は目視による確認を求める場合が多い。しかしこれなどもロボットによる無人化で、作業の効率化と、作業員の安全が確保できる。

遠隔操作での、飛行機や車の運用ルールの法定化も検討する。ドローンの商業利用は、航空法では想定されていない。航空機の飛行に影響を与えない高度一五〇メートル未満であれば、規制対象外と解釈され、企業はその範囲内で運用してきた。しかし今後は、工場内や監視サービスといった、地域や用途により、高度などの柔軟な運用や、具体的な安全管理策を詰めることとなろう。

このように政府の新成長戦略にも、「新たな産業革命」としてロボット産業が組みこまれており、ロボット産業の発展が期待される。

すでに自動車や電気機器などでは導入が進んでいるが、それ以外の製造分野や、非製造分野、そして福祉や家庭用などのサービス分野でも、普及の可能性は高く、すでに一部ではその活動が始っている。

たとえばコンビニエンスストアでは、弁当製造の段階から店舗で販売するまでの、サプライチェーンで、膨大な人手がかかっており、生産性が上がらずに、人手不足が問題になっている。こうした分野では、ロボットの導入の効果が大きいのである。

また現在、製造工場の方でも、まだメリットの大きい部分が沢山ある。従来は人とロボットの作業区域を厳密に分ける必要があったので、そのため工場の敷地を広く確保したり、センサー類を多用しなくてはならなかった。そのコストが設備全体の三～四割を占めていた。ところが人とロボットが一緒に作業できるようになれば、工場スペースが有効に活用でき、設備コストも減少させることができる。

以上のような政府の方針に従って、行政面でもいろいろな動きが出始めている。

介護ロボットを使いやすくするために、介護保険の対象となる機器を選ぶ手続を、三年に一度から、前倒しする方針である。また介護士の腰痛を防ぐため、ロボットをふやす。医療ロボットは百件以上の実用化を支援し、審査件数もこれまでより一・五倍に拡大する。

農業や漁業でも、果樹採取や除草など、十二の分野以上で、ロボットを導入する。

また道路や橋などの老朽化の点検、補修では、全体の二十パーセントでロボットを導入する。また災害現場などで、人間が入りにくい場所でのロボットの活用も重視し、また飛行ロボットなども使用するようにする。

米国では民間が作ったロボットを、軍事や災害などで実際使い込んで、次の開発に生かすというサイクルが動いている。

日本では自動車など成長産業を除いて、こうしたサイクルは動いていないが、将来の可能性の方向であろう。

このような政府の方針もあり、パナソニックや、東芝、シャープなどでは、次のようなロボット商品化に取組んでいる。

○スーツ型ロボット
○ジェスチャーが十分できる程度に動きが速い指をもつ人型ロボット
○異なる複数の言語を話す清掃用ロボット

二、人工知能について

人間でいえば頭脳に当り、ロボットでも頭脳に当る部分が、人工知能（ＡＩ）である。

すなわち人工知能とは、人間と同じ程度の知性を持ち、人間のように学習したり、推論したり、問題を解決したり、目標を達成したりすることが出来る、いわば人間と同じような知的能力を持った、コンピュータープログラムのことである。

膨大な量のデジタル情報を読み込んで、最適な答えを導いたり、選択肢を絞り込んだりして、様々な問題を解決する。近年では、コンピューターが自ら学習して判断力を磨く「機械学習」の技術が注目を集めている。

人工知能分野で先行してきたのはＩＢＭであるが、最近では米グーグルなども力を入れている。

人工知能はイギリスの数学者、アラン・チューリング（一九一二～一九五四）が先駆者といわれており、一九五〇年代から研究が続いている。

「人工知能」の名前は、アメリカ・マサチューセッツ工科大学のマービン・ミンスキー名誉教授が、一九五六年（昭和三十一年）にアメリカで開かれたダートマス会議で、初めて「人工知能」（ＡＩ）(Artificial Intelligence)の呼称が使われた。コンピューターが誕生したのを契機

に、人間と同じような知的活動をする機械が、将来可能になるかもしれないと、その時から云われたのである。それから研究が活発になった。

そして一九九七年（平成九年）に、ＩＢＭのスーパーコンピューター「ディープブルー」が、当時のチェスの世界チャンピオンと対戦して、勝利したことで、脚光を浴びた。

その人工知能で、いま数十年に一度といわれる技術革新が起きている。それは人間が教えなくても、

（コンピューター自身が、自分で学習して賢くなる、深層学習（ディープラーニング）と呼ばれる技術が発達してきた）

からである。

コンピューター自身が、人間に近い情報処理をするわけであり、従ってこれを「人工頭脳」と呼ぶ研究者もおり、グーグルなどアメリカのＩＴ大手会社は技術開発を強化している。

人工知能の適用範囲は、音声認識や画像認識、自然言語解析など、幅広い。たとえば、米アップルのスマートフォン（スマホ）向けサービス「Ｓｉｒｉ」（シリ）には、音声認識技術が使われている。また米グーグルが開発中の自動運転車でも、走行中の周囲の状況を正しく認識したり、適切な運転操作をしたりするのに、人工知能は欠かせないのである。

日本では一九八〇年（昭和五十五年）代で、通産省主導の「第五世代コンピューター・プロジェクト」が、人の会話を理解する機械の実現を目指した。

主語、述語や、関係代名刺など、文法をコンピューターに論理的に理解させるようにすれば可能であると考えたが、うまくいかなかった。コンピューターが賢くなるには、

（論理でなく、経験である）

ということが、その後の研究でわかってきたのである。どんどん高速化するコンピューターに、時々刻々と増えつづける世界に関する電子データーを学ばせ続ければ、いずれ「世界」を理解し、「常識」を備えた人工知能が現われるのである。すなわち

「量が質に転化する可能性がある」

のである。勿論それにはいくつものブレークス（技術突破）が必要ではあるが。

この深層学習によって、人工知能はさらに人間の頭脳に近づくことが出来るようになったのである。

そのきっかけとなったのは、グーグルと、アメリカ・スタンフォード大学のある研究成果であった。それは動画投稿サイトから無作為に選んだ大量の静止画像を、人工知能に読みこませて学習させたところ、事前に何も教

えていないのに、人工知能は、

「これはネコ」

「これは人間の顔」

と認識したのである。ちょうど人間の赤ん坊が、目から入った情報によっていろいろ覚えていくのと同じように、人工知能も、ネコや人間の顔がどのようなものであるかを、大量の情報の中から自然に覚えていったのである。

これまでの人工知能は、学習機能はあったが、判断基準や知識を学ぶ手がかりは、人間が教える必要があった。しかしこれが非常に困難なのである。これが深層学習によって、コンピューターが自動的に学習するようになったので、この困難が解決されたのである。

人間の脳は、情報をやりとりする神経細胞（ニューロン）が種類ごとに集まり、多層構造になっている。この構造をコンピューターで再現しようという発想が、深層学習なのである。

深層学習は様々な分野に応用できる。より正確で自然な翻訳ソフトや、不審者のわずかな動きを見逃さない防犯システム、自動車の安全走行装置、周囲の環境に応じ判断して動くロボットなどである。

しかし普及への課題はいくつかある。たとえばそれを学習するのに、膨大な計算能力と、時間が必要である。グーグルとスタンフォード大学は、ネコを認識させるのに、千台のパソコンを使って、三日間かかった。

現在、人間の脳の情報処理は複雑で、ほとんど解明されておらず、完全に模擬するのは不可能であろう。しかし人工知能が、人間の脳に近づくのは間違いないであろう。その時、人間は人工知能にどう対処するのであろうか。これはコンピューター社会に入った人間の、今後の大きな課題である。

最近は人工知能の進歩が著しい。一部の未来学者は、

（今世紀半ばには、自意識を持ち、人間並みの認知能力を持った人工知能が生れる）

と予測する。コンピューターやロボットは、どこまで賢くなるのであろうか。

大量のデーターを統計的に分析し、特定のパターンや規則性を見つけ、答えを確率的に推測する、それが現在の人工知能の基礎をなすのである。

電子商取引やメールなどの膨大なデーターを使って、コンピューターに学習させ、人間の行動や市場の動きなどを、精度よく予測することが可能になったのである。

また、人の脳をまねた回路技術「ニューラルネット」の分野で、より複雑な学習、推論が出来る「デープラーニング（深い学習）」と呼ばれる手法が編み出され、人工知能に応用されつつある。

少し前までは、将棋はチェスよりルールが複雑なので、コンピューターが勝つのは難しいと言われていた。しかし現在では、人工知能が将棋のプロ棋士を負かすことが出来るようになった。また打つ手の選択が、チェスや将棋よりも桁違いに多い囲碁でも、あと十年ぐらいで人工知能が囲碁のプロのトップレベルと同じレベルに達すると言われている。

また最近では企業で、社内に蓄積された厖大な報告書や電子メールなどのデーターの中から、必要なデーターを選出する作業に、人工知能を使っているが、

「人の手で五十時間かかった作業が、人工知能では一分で出来る」

という。

将棋もデーター探しも、基盤となる技術は「機械学習」である。多くの過去の棋譜や、ベテランの社員のデーター選別のやり方を学び、勝利につながる一手や、会社経営の重要なデーターを見つけるのである。

そうした学習で、人工知能はコツや勘に似たものを会得するのである。そして、いったん会得すれば、その後の作業は速いのである。

技術研究者の間に、「二〇四五年問題」という問題意識がある。技術進歩の結果、三十年後には、過去からの延長線上にない、まったく新しい技術の変革が実現するという、問題意識である。

現状の技術では、人間の知性に迫るには限界があるが、（計算能力が向上し、量が質に転化する時が来るかもしれない）

と人工知能学会では言われているのである。

現在の人工知能が基盤にしているのは、一九九〇年代に開発された「機械学習」の技術である。この技術が二〇〇〇年代に入って、猛烈に精度が上ったのである。それには二つの要因がある。

第一の要因は、多数のプロセッサー（演算装置）に仕事を割りふって、同時並行に高速処理する「並列コンピューティング」の技術が進み、大量のデーターを扱うのが容易になったことである。第二の要因は、電子メールや、全地球測位システム（GPS）、オンラインショッピングなどの普及で、コンピューターが読めるデーターが、日々大量に生み出されるようになったことである。

以上の二つが相まって、機械学習の技術が飛躍的に向上し、現実的なサービスとして産業化したからである。

機械学習とは、たくさんのデーターを統計的に処理して、答えを当てる技術である。コンピューターがウェブページの閲覧記録から、利用者の属性を推測したり、文章の特徴から迷惑メールを割り出したりするのも同じである。従って統計処理であるから、データーが多いほど、精度が高まるのである。

IBMの人工知能「ワトソン」が、テレビの人気クイズで優勝したり、日本の将棋ソフトがプロの棋士を負かすようになったのも、それはウィキペディアなど、ウェブ上の知識や、棋譜を読みこませて、学習させた結果なのである。

このように人工知能はクイズや将棋に強くなったのであるから、人間の感情も理解できるようになったのであろうか。

それには沢山の人間の顔の写真をコンピューターに読み込ませ、それぞれが喜んでいるのか、悲しんでいるのかを教えていけば、人間の喜怒哀楽を表情から推定できるのである。これに声の調子からの推定を組み合わせれば、どんな気持であるか、高い精度で判断することが出来る。

いま国立情報研究所が中心になって、東京大学の入試の合格を目ざして、人工知能「東ロボくん」を開発している。しかし穴埋め問題や分類問題では、比較的よい成績を残すことができるが、文章の意味を理解して答えたりするのは、まだ数学が精いっぱいである。現代社会や倫理などへは、まだ手が出せない。

この「東ロボくん」が大手予備校の大学入試センターの模擬試験に挑戦し、その結果が国立情報研究所から発表された。それによると、目標の東大合格ラインには遠く及ばないが、国公立大を含む四七〇校以上で、合格率八〇パーセント以上の「A判定」を獲得したということであった。研究チームは、

「すべての科目で偏着値五〇に達しつつあり、普通の高校生なみになったと感じている」

と評価している。

研究チームは、センター模試で、英語や国語、数学など、五教科を受験させた。問題を入力し、選択肢から解答を選ばせた。その結果、文系七科目では九〇〇点満点のうち、三八六点。偏差値は四七で、国公立大四校、私立大四七二校で、Aと判定された。

コンピューターは機械学習であり、機械学習は統計的な手法であるから、過去のデーターには悪い状況が生じたときは、間違いを犯しやすい。

したがって現在の人工知能技術に、人命にかかわる事柄を完全に委ねるべきではない。株式売買などへの応用も、リスクが大きい。

現状では人工知能を何に応用するかは企業に任されており、社会的に合意されたガイドラインはない。しかし今後人工知能はどんなことに応用され、どのようなリスクを社会が許容するのか、これからルール作りが必要になるであろう。

話すロボット「オリヒメ」を開発したのは、東京都武蔵野市にあるベンチャー、オリイ研究所である。

声が出ない人や、人工呼吸器などを付けているので会話が出来ない人に代って会話をする、分身ロボットである。

オリヒメに内蔵されているカメラが、周囲の状況をパソコンやスマートフォンの画面に映し出す。その状態（視線の動き）を文字に換える特殊なソフトを使い、オリヒメに自分の意思を語らせるのである。声が出せない人にむかって、

「これから何がしたいですか」

と問うと、その人はオリヒメを通じて、

「旅行に行きたい」

などと答える。要するにオリヒメは、その人の分身ロボットなのである。

二〇五〇年には、六十五歳以上の人間が、全人口の四割に迫る見通しである。そしてその頃には、人工知能が人間の脳を超えるとみられている。ひたすら進化するロボットと、人間との関係はどうなっていくであろうか。その中で重要なものの一つが、この分身ロボットである。

老化した人間は、自分に代わって話すだけでなく、買い物をしたり、掃除をしたり、旅行にも行ったりすることを、分身ロボットにやってもらうのである。二〇五〇年までには、誰もが、自らの意思を託したロボットが、世界を飛びまわるのが当然、という世になるかもしれないのである。

この分身ロボットは話すだけでなく、人間の行動も代って行う分身ロボット、にも拡っていくのである。

東京千代田区にあるベンチャー企業「H2L」では、コンピューターを使って生身の人間の手を自在に操る技術「脳からの信号を模した電気刺激」で、人間の手の筋肉を動かすのである。

また、けがや病気で手足が不自由でも、物を持つことが出来るし、また歩けるのである。また触覚も再現できる。いわば、

（人生の可能性を広げる技術）

なのであって、人間ロボットは、

「人間をロボット化する」

ということである。

また、頭の中でそう思うだけで、家のドアを開けたり、テレビをつけたりする―その超能力のような技術を開発しているのは、積水ハウス、NTT、島津製作所、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）、慶応大学の五ヵ所である。

腕や指をわずかに動かすときに生じる脳の血流の変化を、電気信号に変えて読み取るこの技術は、

（ブレイン・マシン・インターフェーズ）

と呼ばれ、高令者や身体が不自由な人の活動領域を拡

げるのが目的である。

海外でも、脳に埋めこんだ小さなコンピューターで、脳の活動を読み取り、ロボットを動かす技術開発が進んでいる。

両手を動かせない障害者でも、介護に頼らず、自らの意思でロボットを動かして、食事も出来るようになる。すでにアメリカIBMでは、人間の脳の情報伝達をまねた半導体を開発した。人間が命令しなくても、自ら学ぶロボットの実現が近づいている。

したがって飛躍的に進化するロボットは、人間の生活を脅かす時代がくるという、悲観論もある。

しかしアメリカでは、今後二十年間で、総雇用の五十パーセントの仕事が、ロボットが人間に代わるとも言われている。しかし新技術を人間の幸福のために使うという理念を根底に据えれば、未来は違った姿を見せ、そこに創意工夫を絞り出せる企業が、時代を先取り出来るのである。

人工知能を使ったロボットが経営する喫茶店を想定してみると、次のようになる。

客が店に入ると、人型ロボットが、

「いらっしゃいませ。席にご案内いたします」

と客を席に連れていき、

「何にいたしましょうか」

と注文を聞く。注文を受けると、別のロボットに無線でその注文を伝える。注文を受けたロボットが飲み物を冷蔵庫から取り出してコップに注ぎ、それを客の席へ届ける。飲み物を受取った客が、ロボットへ、

「司馬遼太郎の代表作は何？」

と聞くと、ロボットは、

「坂の上の雲」

などと答えるのである。

人工知能を持った数人のロボットが、協力して喫茶店を営業している風景は、今後このようになっていくのではあるまいか。司馬遼太郎の代表作がわかったのは、インターネット上の百科事典ウィキペディアから、知識を得たからである。人工知能を持ったロボットだから、出来るのである。

ITとロボットを結びつけた人工知能の研究はますます進んでいくであろう。人間の赤ん坊は、目に入った周囲の情報を吸収して、物を覚えていく。人工知能は深層学習が組み込まれているので、人間が教えなくても、自分で覚えていくのである。米グーグルと、スタンフォード大学は、無作為に選んだ大量の静止画像を人工知能に読みこませたところ、事前に何の情報も与えていないのに、「猫」の絵だと認識したのである。

このように人工知能の進歩は著しいが、ソフトバンク

り的確な判断が出来る可能性が高くなるというのである。

人工知能は現在の技術の段階では、まだ人間に及ばない面が多いが、しかし計算能力も、人間の脳神経回路を模擬したニューロコンピューティング技術も、順調に進歩しており、新たな道を開けてくる可能性は大きい。

アメリカでは情報技術（ＩＴ）の大手企業が、人工知能（ＡＩ）を活用した事業分野に、力を入れはじめている。人工知能はＩＴ製品の競争力の強化に、不可欠な分野であるからである。

ＩＢＭでは「ワトソン」と名づけた、人工知能型コンピューターの開発を始めた。

「ワトソン」は書籍百万冊のデーター量を、わずか数秒で分析して、答えを出すことが出来る。膨大な情報の中から、顧客企業の経営判断の前提となる有益な情報を、このように瞬時に抽出することが出来るのである。人間には出来ないことである。

そのＩＢＭに対抗して研究を進めているのが、アメリカのグーグルである。グーグルが特に力を入れているのが、量子力学の原理を応用した、量子コンピューターの独自開発である。スーパーコンピューターでも不可能な高速計算を実現する「夢のマシン」といわれる量子コンピューターは、人工知能の性能の飛躍的向上につながる

が売り出す人型ロボット「ペッパー」は、人の感情を理解するという。

「ペッパー」は世界最初の感情認識ロボットと呼ばれているが、しかしまだスタートしたばかりで、

「人の気持がわかり、その空気が読める」

のが目標であり、その目標を目ざしてスタートしたばかりである。実現に必要なことは、感情認識機能を備えていることと、市場にたくさん展開することである。

人間同士でも、相手の気持を完全に理解することは、難かしい。子供も成長するにしたがい、いろいろなことを経験することによって、感情の読み方が次第に精密になっていく。ペッパーもそれと同じで、データーを蓄積し、学習をすることによって、その感情精度を高めていくのである。

ソフトバンクはこの「ペッパー」を使って、銀行の個人むけ営業の助言や、製薬会社の新薬開発の支援など、幅広い用途で、業務効率を高めるサービスを、平成二十七年から開始する。

ペッパーは人の言葉や文章を理解し、文献や過去のデーターを基に、利用者の希望にあった最適な答えを提案できるのが、特徴である。銀行の場合には、個人顧客の金融資産の状況や、相場や金利など、過去の膨大なデーターを勘案して、推奨する金融商品を提案するのである。限られた情報を基にした営業担当者（人間）よりも、よろく応用されていくであろう。

コンピューティングの未来は、ＡＩ（人工知能）がどこまで進化するかにかかっていると、グーグルはその拡大路線をひた走っている。ネット検索からスマートフォン（スマホ）、自動運転車まで、斬新な発想と果敢なＭ＆Ａ（合併・買収）で、新たな領域に挑み続けるグーグルは、もはや一口で、こういう会社だと表現できない企業になっている。

平成二十五年の売上高は、上場した平成十六年の十九倍になり、時価総額で四十兆円と、世界第三位に膨らんだ。

人工知能が目ざすのは、聞く前に答えてくれる「夢の検索サービスの実現」である。

平成二十四年にグーグルは、スタンフォード大学（アメリカ）と、人間の脳を模したコンピューターに、無作為に選んだ一千万枚の画像を三日間読みこませたところ、自力で「ネコ」（猫）を識別するようになったと発表し、世界を驚かせた。自ら学んで問題を解決するＡＩ（人工知能）が実現すれば、一段と夢の検索頭脳ロボットは発展する。

それは「グーグルナウ」である。スマホの位置情報やカレンダーなど、様々なデーターを基に、人に会う約束があれば、混雑情報から目的地までの最適ルートや、出発時刻、利用者が必要とする情報を、事前に逐一教えてと期待されている。

そのグーグルは、人間以上の高得点が出せる人工知能を開発した。

やり方を教わらなくても、自分で学習する人工知能に道を開く研究成果で、将来は、人間にしか出来ないと思われていた複雑な仕事を、こなせるようになる可能性もある。

開発したのは、人間の脳の神経回路をまねた学習機能を持つ、人工知能「ＤＱＮ」である。スペースインベーダーや、ブロック崩しなどの、四十九種類のゲームを人工知能に与えた。するとゲームの事前知識を教えなくても、人間のようにくり返し遊ぶことで、やり方を学び、高得点を取る秘訣を編み出すのである。

ブロック崩しを約百回遊ばせた段階では、人工知能は飛んでくるボールをうまく打ち返せないで苦戦をしていたが、四百回遊ぶと、取りこぼしはほぼなくなった。そして六百回を越えると、高得点を出せるようになった。

人工知能が取り入れたのは、コンピューターが学習によって判断基準を作り出し、自ら賢くなる「深層学習」（ディープラーニング）という、最先端の研究分野なのである。

人間が教えなくても、大量のデーターから精度を高めることが出来、人間を上廻る能力の獲得も可能である。今後、ロボットや自動運転車などの、次世代技術に幅ひ

くれるのである。

いわば心を読むスマホである。AIを駆使し、人の行動の先を読む機器があふれる時代が、間近に迫っていると言えよう。

未来予測学者レイ・カーツワイルは平成十七年に、コンピューターが人間並みの知性を持つ世界「シンギュラリティ」が、二〇四五年（平成五十七年）に現れると予言した。

日本でも産業技術総合研究所は平成二十七年五月に、最先端の人工知能を研究する「人工知能研究センター」を設立した。

人間の脳のように自ら知識を生む「脳型」と、大量のデーターから知識を探る「データ・知識融合型」の、人工知能を軸に、研究する。

東京都内とつくば市に拠点を設け、約八十名体制で活動を始めた。

最近では世界的に、自動運転手やロボットなどに導入するため、人工知能の開発競争が激しくなっている。

応用先は、滑らかに動く産業用ロボットや、自動運転車の性能向上、医療診断、高度な知識が必要なインフラ管理や金融分野の業務など、様々な分野が想定される。

（つづく）

今、再びフォークソングのブームを
～「過疎」をテーマにした2曲をリリース～

古屋富雄

急速に進む地方の過疎化や限界集落、消滅集落は、我が国が解決すべき永遠のテーマになっています。

そこで、その一助になればとの思いで、私が40年ほど前に作詞・作曲したフォークソング調の「過疎」と「遠い思い出」をリメーク・リリースしました。

「過疎」については、ずばり「過疎」そのものであり、農村の寂れゆく姿を草や木に覆われて狭くなっていく道に、村に残された少年の悲しさ、そして、再び戻って来て欲しいと願う心情をしたためています。

「遠い思い出」は、幼い日に遠い町へ行ってしまった少女との淡い別れを題材に作成しました。これらの歌には、戦後の高度経済成長期がその背景にあり、心の豊かさより、お金や物への豊かさを求めた時代でもありました。

歌唱は、日産スカイラインのCMソング「ケンとメリー～愛と風のように～」をヒットさせたデュエットグループBUZZの東郷昌和氏に、また、ギターの演奏は、荒井由実氏（現在、松任谷由実氏）のバックバンドとして活動されている平野融（とおる）氏に引き受けていただく予定です。

限界集落とは、社会学者の大野明氏（高知大学教授）が1990年頃に提唱したとされています。過疎化や高齢化などが進む中、経済的、社会的な共同生活が、その集落単位ではできなくなる恐れがある集落を指しています。

また、2006年の総務省の調査によると、過疎地域などの62、271集落のうち、10年以内に消滅する可能性のある集落が422、10年以降に消滅する可能性のある集落は、2、219と予測されています。

急速な地方（農山漁村）の衰退が進む現実が存在します。

このような状況を踏まえ、安倍晋三首相は、地方の人口減少や地方経済などの課題に国を挙げて取り組むため、2014年9月3日に行った、内閣改造で「地方創生」の担当大臣に石破茂衆議院議員を任命しています。

そして、首相みずから本部長とする「まち、ひと、しごと創生本部」を立上げるなど、本腰を入れて取り組んでいます。

さらにそれを加速するためには、地方創生省のみの対応ではなく、第一次産業である農林水産業を主管する農林水産省や過疎対策室を有する総務省などが横断的に取り組み、一元化する必要があると考えます。

そして、ハード・ソフト面での多様な支援事業を起こし、その解決を見出すことが肝要です。

その一つの手法として、限界集落や消滅集落の現況を歌った「過疎」と「遠い思い出」の活用を提案します。

具体的には、国や県、市町村が行う過疎に関わるイベントや講演会などでのキャンペーンソング。また、テレビ・ラジオなどの番組の挿入歌やBGM。ネットやアニメーションなど全てのメディア媒体の活用を期待します。

また、この2曲は、フォークソング調に仕上げているため、50代から70代の人たちからの熱い支援が得られるのではないかと考えています。

それは、50代から70代の人たちが好む歌の一つにフォークソングがあるからです。

1960年代に大学生を中心にしたカレッジフォークソングがその先駆けになっていると思われます。

その第一人者の一人に「星に祈りを」や「あなたのすべてを」などを作詞・作曲したシンガー・ソングライターでもある佐々木勉氏がいます。彼は、その後1966年にザ・サベージに「いつまでもいつまでも」を提供し、90万枚のヒット曲を世に送り出しています。

時は前後しますが、1965年には、浜口庫之助氏(マイク真木氏歌唱)による「バラが咲いた」が大ヒットし、日本におけるフォークソングが市民権を得たターニングポイントになったようです。また、ザ・ブロードサイド・フォーの「若者たち」や荒木一郎氏の「空に星があるように」は、テレビ番組の主題歌やラジオの深夜放送で多くの若者の心を捉えた一曲と言えるでしょう。

時を同じくして、加山雄三氏の「君といつまでも」や、ザ・ワイルドワンズの「想い出の渚」などフォーク調の曲にエレキギターを取り入れた作品が次々と発表され大ヒットを連発しました。

一方、フォークソングとは、一線を画したザ・スパイダースやブルーコメツ、ザ・タイガース、ザ・テンプターズなどのグループサウンズ(GS)が、全盛期を迎えたのもこの時代でした。

また、ボブ・ディランやジョーン・バエズなどの海外のミュージシャンの影響を受けた和製フォークソングが1960年代に誕生しています。

そして、歌を反戦や社会問題などのメッセージソングとして表現したミージシャンが岡林信康氏や高石ともや氏、西岡たかし氏などであります。グループでは、ザ・フォーク・クルセダーズの「イムジン河」が最も強烈なメッセージソングとして物議を醸しだした一曲だと思います。

女性では、「この広い野原いっぱい」でデビューをした、森山良子氏が和製ジョーン・バエズとして、人気を博しました。

1960年代後半から70年代にかけては、岡林信康氏と双璧の「フォークの神様」と言われた吉田拓郎氏が多くの若者の心を捉え、ヒット曲を連発させました。異色なフォークシンガーとして泉谷しげる氏も良い味を出していました。

さらに、1970年代から80年代には、井上陽水氏や小椋佳氏、松任谷由実氏、アリスなどがフォークソングをルーツにしたニューミュージックを次々にヒットさせ、多くの人々の心を魅了しました。

そのような中、「神田川」や「赤ちょうちん」、「なごり雪」などの作品を生み出した、南こうせつとかぐや姫のフォークグループとしての存在感は今なお、脳裏に焼き付いて離れません。

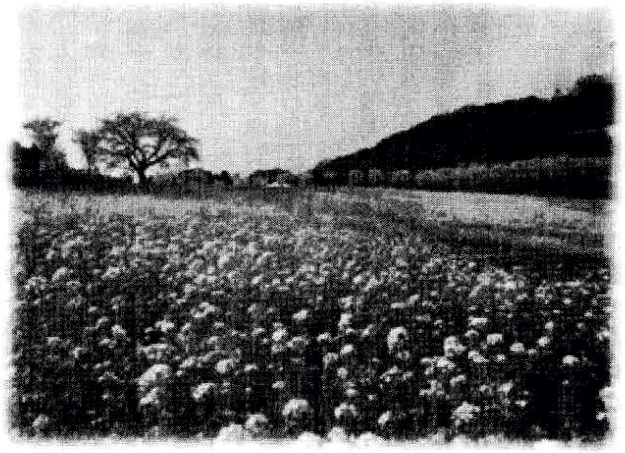
これら、1960年代から80年代の歌の共通する点は、分かりやすい歌詞と覚えやすい曲にあります。そして、50代から70代、いわゆるレコード世代は、今、このような歌を待ちわびています。

同時に、気に入ったCDが出れば、必ず購入する世代であり、CDが売れるマーケットが確実に存在するということです。

歌の使命は、人それぞれの人生に重なるものであり、安らぎを与えてくれる心の故郷ではないでしょうか。**分かりやすい歌詞と覚えやすい曲、それが歌の原点なのです。**

東郷昌和氏の伸びやかで甘い歌声に乗せて、今、再びフォークソングのブームに火をつけたいと考えています。

そして、我が国が解決すべき永遠のテーマ「過疎」を国民全体で共有するテーマとすべきではないでしょうか。



美しい農村のイメージ　春めき（桜）と菜の花畑

過疎

この道はだんだん狭くなる
町へ行くバスはもう来ない
ねんねの子守歌を歌ってくれた人も
今は　もういないんだ

取り残された悲しさは
空の青さに似ているよ
青い　青い空に吸い込まれそうで
俺は一人じゃ　怖いんだ

帰ってきてくれよこの村に
今年もツバメがやってくる

何(なん)にも変わらないのに人の心だけが
町へ　町へ流れてく

この道はだんだん狭くなる
あの娘もあいつも　もういない



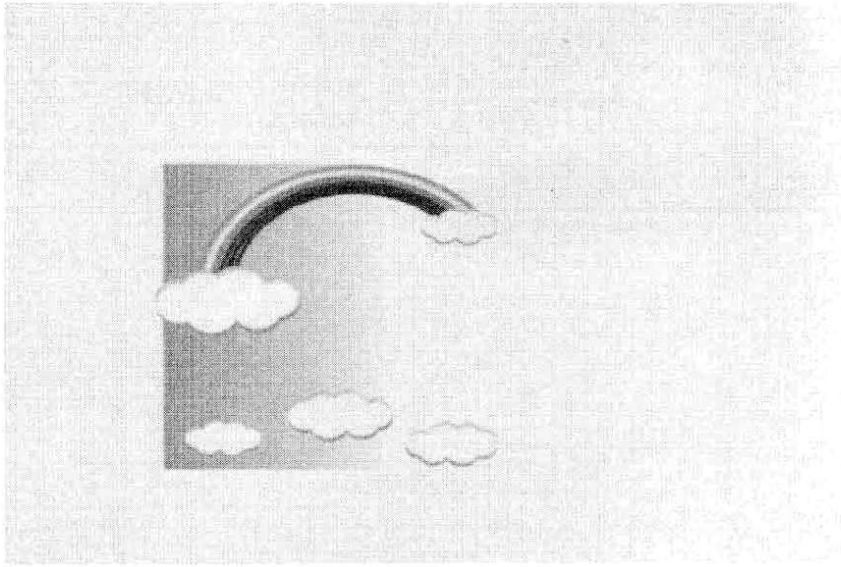
遠い思い出

君と二人で遊んだ頃は
遠い　遠い思い出だけど
虹のように　清らかなまま
僕の心に　今も眠る

いつだか君とけんかして
口もきかずに別れたけれど
明日になると　もう仲直り
そんな可愛い　二人だった

ある日君は僕を見つめて
遠い　遠い町へ行くのと
一言言って　思わず僕の
僕の胸に　泣きついた

それから間もなく君との別れ
その日　僕は一輪の花を
離れてゆく　君に捧げ
笑顔を見せて　またねと言った



祝い舞

横山正義

まえがき

『ミツバチはなぜ大量死したか』ローワン・ジェイコブセ著
中里京子訳
発行所　文芸春秋

誌によれば、西暦二千七年春までに、北半球から四分の一のミツバチが消えた。

巣箱という巣箱を開けても働き蜂はいない。残されたのは女王蜂と、そして大量の蜂蜜。その謎の集団死は、やがて果実の受粉を移動養蜂にたよる農業に大打撃を与えていく。原因はなにか？

携帯電話の電磁波？謎のウィルス？農薬？地球温暖化？寄生虫？

『ロサンゼルス・タイムス』誌は、典型的な記事を掲載し、それには研究者たちは、放棄された巣をしらみつぶしに調べ、何千匹のミツバチを解剖し、ウィルス、細菌、殺虫剤、ダニを徹底的に調べたが、いままでのところ、全くお手上げの状態だ」とある。

西暦二千十五年五月二十日。日経ニュースによれば、オバマ大統領のコメントとして、「ミツバチの減少は殺虫剤によるのではないか、被害額は日本円にすると、一兆八千万になる。」と報じられた。

現在、国産ハチミツの市場は、時価で価格が定まりません。れんげ、アカシア、みかん、栃、菩提樹などがありますが、非常に高価です。現在、れんげなども冬に作付けをしなくなったので、蜜源がないのも一因です。日本の消費蜂蜜は外国産、特に中国産が中心です。

中国産では天山山脈蜂蜜のように、高山植物の蜂蜜は高価で品質の良いものもありますが、南方に行くと、亜熱帯になり、花の種類が多く、蜂蜜が混合するので、悪臭で褐色になり、商品価値を下げます。

日本の蜂蜜のすばらしいところは、季節の温度変化に応じて、花の開花時期がことなるので、花の純粋な蜂蜜が収穫できることにあります。

『クロガネモチ』という樹木がありますが、蜂蜜に芳香があり、透明で薄緑の液体で、私は日本人にあっているように思います。流蜜が多く五月後半から六月前半に採蜜でき、そして強勢の女王蜂が育ち、働き蜂が多数に増えます。

砂糖水の餌では、弱女王蜂で、栄養分の不足からミツバチの増勢、繁殖は望めません。

現状、『クロガネモチ』は樹木が大木になるので屋敷木としては適せず、農家では伐採してしまうし、なぜか公園などにも植えられていません。

『クロガネモチ』が植林できれば、養蜂の活性化と、「いちご」など受粉を要する果実の変形化、ハチミツの価格の高騰など解決するのではないだろうか。

ミツバチの減少の原因を追及することも、もちろん大切ですが、強勢にしてハチの数を増やすことも大切と思います。

一、祝い舞

私は国民学校一年生に入学したのは、昭和十九年の四月でした。

戦火は拡大して、身の回りにも忍びよっていました。近くでは大井川の東海道橋に爆弾が投下され、町内会の戦闘訓練も頻繁でした。

母に連れられて、学校に行き、もちろん防空頭巾を持ってです。

裏通りを歩いていると、町家の十坪ぐらいの庭に、玄関と塀の隙間から、一箱のミツバチの箱が置いてあるのが見え、暖かい日差しに巣からミツバチが飛び交っていました。

そこに戦火を離れた自然の春があり、母は思わず、「あんなミツバチでも飼う生活をしてみたいね。」と、つぶやきました。

三十年の時は流れて。

昭和四十九年二月。

祖父が掛川市立病院（静岡県）にて眼の手術を受けることになり、母は一生懸命看病しました。

隣の病床で治療されていたのが、養蜂家の加納留吉氏でした。

母の祖父への看病ぶりを見て、加納氏は「あなたなら養蜂ができる」、養蜂を伝授しようというのです。

（養蜂家　加納留吉氏。氏は若い頃、養蜂家に弟子入りし養蜂を学び、戦時中は日本軍軍属となり、大陸各地で養蜂の指導をされたという。）

加納氏は、「始めるのに、人からミツバチを譲り受けて始めると、緊張感がない、購入してください」。

そう云われ母は岐阜の養蜂専門店より、一箱、西洋ミツバチを二万六千円で購入しました。

冷たい風が遠州には長く吹く、小笠山から吹き降ろす風も遠州灘の荒波を吹き寄せる、風も冷たく厳しい。立春とともに除々に寒さから開放されて、三寒四温の気象も次第に定着する。

ミツバチの活動は立春の日に、最初の砂糖液（糖度七十五パーセント）を奨励蜜として、与えることから始まります。

奨励蜜をもらったミツバチは、寒い中でも少しずつ活動を開始します。

摂氏七度を過ぎると、巣箱の中でミツバチの集合した球状の玉がほぐれて、巣全体に散って広がり、今年の活動が始まります。

二月になると、梅が咲き、三月末には桜が咲きます。

四月、晴天の青空にミツバチは巣から出て、一箱、およそ五万匹が十米ほどの高さに、直径一米ほどの輪で、春が来た喜びを表し乱舞して、百花繚乱の位置を確認いたします。まさに春の祝い舞なのです。

ミツバチを飼育してみると、その生き方とか活動の面で感動し、もっと深く知りたいと思うことが多い。

母が養蜂家加納留吉氏より指導を基に、当時、記した記録を参考にして次ぎの文章を書きました。

二、春のミツバチ

二月、三月、四月のミツバチは、増勢と採蜜の重要な準備の季節である。この季節に、ミツバチは良く働く勢力の強い蜂を育てるための大切な準備をし、活動を開始する時である。

ミツバチの活動とは、野に山に田に畠に飛んで花をさがし訪ねて、蜜を集めることが最も重要な活動である。すなわち訪花と集蜜である。

二月、梅の花が咲き始めると、梅の木の下は、その香りとともにやかましいほどのミツバチの羽音で賑わう。

開花一番の梅花に続いて、次々と咲き競う花々は、ミツバチにとっては最高の楽園であり、仲間を増やす大切な食料の供給源である。

ミツバチの住居（巣箱）を基点として、周囲二キロメートルまでが収蜜の場、活動の場であり、即ち半径二キロメートルの円内である。

この広範囲内の細かく実のなる花を好んで訪花する。

梅に続いて、桃・桜・菜の花・レンゲと、春の花は咲き競う。

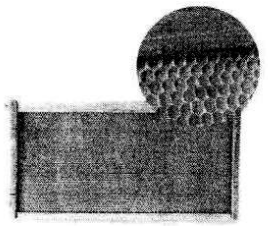
これらの花はミツバチの好む流蜜の多い花である。

一方巣箱内は五枚だった巣脾（すひ）が、一枚二枚と増えて、

箱いっぱい十枚まで増える。一枚の巣脾も立春の時は空巣脾だったのに、四月の終わり頃までには卵が全面に生みつけられて、有蓋蜂児（巣脾に女王が卵を産みつけ蓋がされた状態）で満たされて一段の箱だけでは不足するので、継ぎ箱をして二段とし巣脾の数も十五枚以上となる。

春の終わりごろの増勢の状態が、今年の採蜜量を約束づけるものである。

図①巣脾



三、夏のミツバチ

五月、六月、七月は、一年の中でミツバチには実りの季節である。

蜜の採蜜でも、その他の生産物（プロポリス、花粉、ロイアルゼリー）でも、蜜そのものも、最高に産み出され収穫の時といえる。

①ミツバチ群の構成

女王蜂―一匹で、色は赤みがかかって、多数の働き蜂より体は大きい。

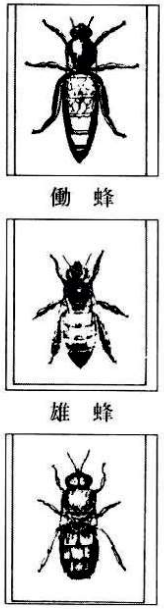
働き蜂―数万匹もいて、ミツバチの生産はすべてこの蜂の働きによる。

多いほど良い群で、すべて雌である。

雄　蜂―一群のなかに五百匹前後いて、新女王との交尾要員として生み出される。

女王蜂

図②



女王蜂は何万引きもいる蜂のなかで、たった一匹だけで、巣脾面で容易に見分けられる。体が大きく、色が他のものより赤みがかっている為である。

群の良否は女王蜂によって決まる。

すなわち春から夏にかけては、一日に卵を二千から三千個を産み続ける。

毎日卵を産み続けるすごい能力をもっている。

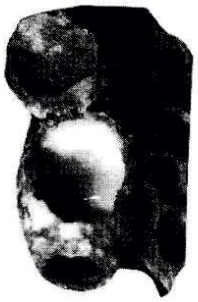
それも処女王蜂から女王蜂になるのは、たった一回の交尾により、四年ないし七年も卵を産み続けるのである。

巣箱内蜂の中心的存在で非常に愛され尊敬されている。

何かの事故で女王蜂が死んだ時など、巣門外に出し、そのまわりを沢山の働き蜂がとりまいて、いつまでも離れないのを見かける。

又女王蜂を失った群は、代わりの女王蜂の造成をするのだが、卵の日令（年齢に対する言葉）の関係で、王台とは女王蜂の住処で、造成ができない場合、働き蜂が産卵を始める。

図③　王台（女王になるミツバチだけが食できるロイアルゼリー）



この卵から生まれた蜂は、雄でもなし、雌でもない、無能力の蜂であるため、群は勢力が弱まり大切な巣脾を駄目にして絶滅してしまう。

女王蜂を失うことにより、大家族の蜂群も滅亡してしまうのである。

女王蜂が老齢化して産卵がすくなくなると、働き蜂たちが不満足に思うようになり、王台を作り始める。これにより次の女王蜂を造成するのである。

王台は他の房、働き蜂の房とはずっと大きく、親指大の房の中にある。特殊な食物・ロイアルゼリーを含有し、成長する女王蜂の宝である。

女王蜂は産まれたときは他の働き蜂と同じぐらいで、色だけ違うので見分けられる。産まれるとすぐピーピーと鳴きながら箱の中、巣脾面を歩きまわる。羽音とは違うこの泣き声は独特なもので、産まれた直後に新女王が出す声である。箱のふたを開けたときこの声を聞くと、新女王蜂の誕生を知る。

女王蜂の歩くまわりに嬉しそうな働き蜂が、まるく輪を作って、女王蜂にさわったり、口をつけたりしている。

女王蜂はそれら一匹、一匹に口でさわって挨拶してまわる様子に、団結のすばらしさを強く感じる。

数万匹の働き蜂に祝福されて誕生した女王蜂は、一週間たつと結婚のために外に飛び出し、高く遠くすごい速さで飛ぶ。

その後に雄蜂たち群れが続いて、これもすごい勢いで女王の後を追い、最強の雄蜂が一匹だけ花婿の座につき

交尾する。
女王蜂のみ威勢良く帰巣する。これから女王蜂の体は急に大きくなり、赤みがかかった黄金色のすばらしい蜂になり、次の日からはもう産卵を始める。
この結婚旅行のあと、女王蜂は決して巣箱外に出ることはない。

分蜂とは新女王の生まれる王台に蓋がされ、いよいよ新女王の生まれるときが近づくと、旧王は母子での殺し合いを避けるため、群の半数を引き連れて巣箱から飛び出して別の巣を作る。旧王は蜜を腹いっぱいつめた、働き蜂たちと木の枝に集結する。第一終結所に大きな塊となってぶら下がり、数時間で次の遠い所まで飛んで第二終結所に行く。ここで自分の巣作りして、旧王を大切に守って新しい生活をする。これが分蜂である。

分蜂は必ず女王を連れているが、この女王が亡くなったりすると、蜂はばらばらになり、元の巣へすぐ帰っても、数日で亡びてしまう。

ミツバチは一匹の女王蜂を、数万匹の働き蜂が守って、生活しているのである。

働蜂

働き蜂は卵を産みつけられてから二十一日で産まれる。
はじめ二十日間は箱の中で内蜂として、その後は外にとび出して外蜂として活動する。

春から夏の終わり頃までのミツバチは激しい労働をするので、一ヶ月ぐらいの生命である。しかし九月以降の蜂は花のない時の活動のため、六ヶ月ぐらいは生き続け、次の春まで幼虫を育てる、保母蜂として大切な役割を果たす。

働き蜂は生まれてすぐ、箱内の掃除死蜂の運び出しを三日間、次の日から十五日目ごろまで幼虫に餌を与えその世話をする。十五日目から二十日ころまで巣づくりをしたり、練習飛行をして、巣箱の位置を確認したり、花のある方向をおぼえたり、巣門の前で番兵の役をしたりして、次の日から外蜂として訪花して、蜜や花粉を集める仕事に励む。

雄蜂

働き蜂より少々体が大きくて、太り、ずんぐりして、刺し針がないので尻は丸い。花から蜜を集める能力はなく、無用の長物といった存在である。五月の末ごろ女王の交代のとき、生まれた新女王の交尾要員として、一ヶ月前から雄蜂だけの房の中へ産卵される。二十四日で成虫となり、蜂群の一員として生活している。

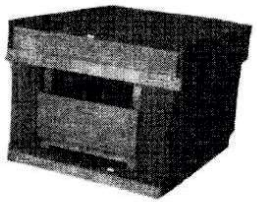
新女王がうまれ、一週間たつと、晴れた空を高く遠くものすごい勢いで飛ぶ。その跡に続いて多くの雄蜂が飛ぶのであるが、女王と同じように飛べるのはたった一匹だけ、勢力の強いたくましい雄蜂が女王の結婚相手になる。
選ばれた雄蜂は交尾と同時に死んでしまう。選ばれなかった雄蜂たちは途中ではぐれる蜂もあり、また女王について帰巣して生活している蜂もある。
なお六角の室が定まっているので、このあとも旧王が生んでいった卵から雄蜂が生まれる。
五月から八月の終わりごろまで、これらの雄蜂は女王蜂や働き蜂と生活しているが、働き蜂の運んできた蜜や花粉を食べるので、ひどい邪魔扱いされ、八月末ごろまでに追い出されて死んでしまう。
新女王蜂はその年は雄蜂の卵を産むことは無い。
五月から八月まで五百匹ぐらいは交じって生活しているが、花蜜の豊富な六月までは普通にあつかっているが、蜜が得にくくなると雄蜂を追い出しがはじまり、八月末までにはほとんどいなくなる。
群を構成している三種類の蜂、女王蜂、働き蜂、雄蜂がそれぞれの役目を確実に果たし、強い結びつきで協力しあって活動し生活している。夏の暑いときでも分担された仕事を忠実に励んでいる。

②巣門舞をする。

これはちょうど日令二十の時、先輩の指導で門の前に飛び出し、巣箱に向かって飛ぶことで、十メートルぐらいの高さまでとび約二十分行う。
毎日午前一回と二回行われ壮観なものである。訪花のための練習飛行と箱の位置を確認するのである。

図④

巣箱



間口（38.5cm）
奥行（48cm）
深さ（25.3cm）



巣門の全開

③巣づくり

日令十五になると、巣作りをする。葡萄の房のように箱の天井からぶら下がり、一昼夜いると腹の節のところから、蝋片がにじみ出て、鱗のようになる。これを噛み砕いて蜜を混ぜ合わせ蜜蝋を作り、是で美しい六角形の整然とした白い巣を作る。

④訪花集蜜と集花粉

花の蜜を集めて箱に運び込み、内蜂に渡すと次の集蜜をする。また花の花粉を集める。蜜は口で吸って蜜袋に貯えて、花粉はあしの花粉バスケットに入れて巣に帰る。

何回も出入りしても自分の箱を間違えることなく、必ず帰巣して他の群に迷いこむことは決してない。巣門舞いの体験が自らの位置を確認し、守っているのである。

朝は夜明けとともに外に飛び出し、一匹で四十ミリグラムの蜜を集めるために、千個もの花を訪れる。

花蜜の濃度は三十パーセント、一日中集めた蜜は水分が多いので巣内の蜂が羽で扇ぎ、水分をとばし七十五パーセントぐらいにして巣内に貯える。

濃度の低い蜜は、夏の三日ぐらいで腐敗するので、夜間水分をとばすことも一生懸命で一晩中休みなしに働いている。

夜明けに三十分ぐらい、群全体が静かになる。すなわち活動が休まる時間である。一日の中でこの三十分が、ミツバチ全員で休憩している時間である。

⑤箱内の温度を調整する。

ミツバチの箱の中では、夏は冷房、冬は暖房が完備して夏冬、一年中蜂温は三十五・五度である。

この蜂温を保つため、気温が高くなると水を運んで巣内で蒸発させ、羽を扇風機代わりにして冷房する。

冬になって気温が下がってくると、蜂が集合して、球を作って冷たい空気に触れる面積を小さくして、寒さを防ぐ時、お互いの体をこすり合わせるようにして、摩擦熱を出し暖かにするので、この地方の気候では凍死することは無い。

ミツバチが苦心して集めた蜜や花粉や、また製造したローヤルゼリーや蜜蝋を、横取りして利益を得ようとするより、蜂の真剣な生き様をみていると、自分の生活もかくありたいと思うことがあります。

夏は女王と働き蜂、雄蜂と、三種類の蜂が協力して、活動をする季節である。

四、秋のミツバチ

八・九・十月のミツバチは、夏の活動に続いて、花のない食物の少ない季節をいかに過ごすかという大変な時である。七月下旬から急には花が少なくなり、食料不足となるのでまず雄蜂の追い出しにかかる。

働くことなく食べる雄蜂は得にくい食物を与えることはできない、ということから雄蜂追い出して飢え死にさせる。

春から夏の始めにかけて集めた蜜は人間に横取りされ、畠には花はない蜂にとっては大変な時といえる。夏

の食料不足を補うことになる。

①給餌

砂糖蜜を与える。上白糖一・五キログラムを一リットルの水に溶かして七月下旬から十月上旬まで十五回、一群に対して二十三キログラムの給餌をする。

②害虫からまもる。

七月下旬になると、それまで花蜜を食していたスズメバチが、肉食に変わりミツバチをえさとするようになる。毎日のようにスズメバチに襲われ多くの死蜂が出る。一匹で来るときは反対にミツバチに刺殺されることもあるが、大体五・六匹でやってくる。

早く見つけて、防除するが、時々、多くの蜂を殺される。八月下旬から十一月にかけてはほとんどまいにち大襲撃を受けて痛では大変である。百群を飼育する養蜂家が、スズメバチに荒らされて全滅したこともある。飼育者の目の届かないところで飼っている場合はそんなことも時々起こる被害である。

秋の蜂の管理は給餌とスズメバチの防御で、飼育者が大変な時期である。

五、冬のミツバチ

十一月、十二月、一月の蜂は、外の活動はなく、巣内での保温の活動と、春になって勢力のある蜂を保育することが大きな活動である。

秋まで十五枚ないし二十枚入っていた巣脾を、五枚ないし七枚に縮小して、寒さから守る準備をする。蜂場を藁で囲い、巣門を十センチぐらいから二センチメートルぐらいに狭くし放温を減らす。

蜂達がほんとうに冬眠するのは一月末の一週間ぐらいである。このときに完全に冬眠させると、春になって勢力の強い群になる。この一週間が蜂にとってほんとうに休眠できるときである。

暖冬の場合はこの冬眠が不十分になるので蜂にとっては迷惑である。

冬、蜜が不足すると群が全滅する。一匹一匹が生きているのでなく、群全体がひとつの生命体なので、えさ不足の時でも、最後の蜜を全員で分け合って食べ死ぬのは全員一緒である。

したがって秋の給餌は十分にしなければならない。

寒いとき餌不足に気づいて、給餌しても寒さのため、砂糖液が固まり、蜂が吸へない。保温のため体を寄せ合っているので、給餌器までたどり着くことは蜂にとって大変な重行動となる。したがって十月までの給餌は十分にしておく必要がある。

春、夏、秋、冬で転地をしなければ、当所では五月二

十日頃から六月十五日頃まで、『クロガネモチ』の開花時期だけ採蜜ができます。年平均一箱から約二〇キログラムの収穫があります。花が咲いていても、花の数が少なければ採蜜はできません。

今ひとつ秋の花の多いところでは、彼らも集蜜を盛んにするが、これも彼らの冬の餌として決してとらないことが大切である。

以上で年間四季のミツバチの活動と季節に応じて、飼育者の留意点について記した。

あとがき

最後にミツバチの生活は極めて高級で、美術的、経済的、合理的な巣で生活している。その住居は清潔で塵ひとつなく、キチンと整理されている。

彼らは屍を巣の中にのこすことなく、死の直前にみずから這い出て、ほかの蜂に迷惑かけないようにするのです。仕事はきちんと処理してから休息する。

虫くいの巣脾などを与えると、急に集まってきて、不良部削り取って、虫の巣を引き抜き、蜥を塗り、整理ができてから休息する。

ミツバチは綺麗好きで、室の調度には蜥を塗り、隙間はヤニと蜥で作ったパテで塞ぎ、また器物の動揺を防ぐためには、つぎ目を蜥づけする。カビの生えることもなく、蜜や花粉を決して腐敗させない。したがって箱内はいつも花の香りが漂っている。

こうしたミツバチの生き様は人間生活にも参考となることが多い。

ミツバチの出会いから七十年の年月が流れて。

温和で刺すことが少ない、西洋ミツバチは不帰巣となり、改良在来ミツバチを購入したが、攻撃的で周囲の人を刺すので、近隣の人達から苦情があり、養蜂業を廃業してしまいました。

『参考文献』

やさしい養蜂の手引き　ミツバチ・養蜂具全般の株式会社秋田屋本店

東北部太平洋沿岸の遺跡と原発被災地の視察

漆原直子

昨年一一月末、福島県いわき市にて、『学術研究集会海の古墳を考えるⅣ～列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流～』が開催され、参加した。これは専門家の方々による研究集会であり、私のような素人の一個人が参加できるかどうかが心配であったが、専門家でない者が参加できるかお伺いしたところ、関心のある人は、誰でも参加できるとのことであった。

一日目は研究発表で、二日目に遺跡の見学会・視察が行われた。

研究発表では、東北部太平洋沿岸に分布する横穴墓や装飾古墳等に関する発表があった。横穴墓については、その構造や装飾性、副葬品から、九州と東北との関連性を指摘され、それが多氏によるものだという説と丈部によるものだとする説や、また、文献資料に残る地名や俘囚の配給の記事から、宮城・福島の装飾横穴は大和朝廷が蝦夷社会解体の為に行った肥後国との住民の集団交替移住政策によるものであるという説が紹介された。東北部太平洋沿岸では、城柵設置に先駆けて横穴墓が北上しており、これは太平洋沿岸域を船で移動しているということが考えられるという。また、横穴墓の分布は、理由ははっきりとはわからないが、日本海側は石川県まで、太平洋側は宮城県北部までという特徴があるという。

翌日はバスで見学・視察が行われた。遺跡の見学場所は、餓鬼堂横穴墓群、中田横穴墓、根岸官衙遺跡・夏井廃寺跡、甲塚古墳、楢葉町天神原遺跡等を見学した。いわき市では、災害復興開発のために、埋蔵文化財の発掘調査が進められていた。中でも薄磯海岸沿いにある餓鬼堂横穴墓群(写真①)では、新たな発見が多数あり、これ

からさらに、道路の拡張工事が入るため、範囲を広げての更なる発掘調査が行われるという。

餓鬼堂横穴墓群は、六世紀末から七世紀初めまで営まれ、馬具、銅鏡、太刀、銅釧、鉄鏃、金銅製雲珠、コハク片、ガラス玉等が出土しているほか、内部には線刻画やベンガラにより装飾がされている装飾横穴墓もある。近辺には、製鉄遺跡は無いが、貝塚や平安時代の製塩遺跡が発見されている。また、同一丘陵上に、国道一五号線に面して、国指定文化財の装飾横穴の中田横穴墓がある。中の見学はできないが、赤と白色の顔料を用いて美しい三角文様が描かれている。出土遺物は玉類・直刀・挂甲片・金環・金銅製雲珠・銅釧・馬鈴・金銅製大馬鈴・鈴杏葉・紡錘車・珠文鏡・銅製容器蓋・須恵器など多様である。この海岸沿いの横穴墓から馬具が出土しているということは、馬が船に乗って一緒に移動していると考えられる。故森浩一先生は、『馬・船・常民』という故網野善彦先生との対談集の中で、馬と船はセットで考えられる、と述べていた。船で遠距離を移動し、上陸地点を馬でさらに内陸へと探索移動していくのである。

今回は寄らなかったが、ちょうど餓鬼堂横穴群から中田横穴墓へ向かう途中に、真言宗智山派『密蔵院賢沼寺』、別名『沼ノ内弁財天』がある。国の天然記念物である賢沼と魚見堂、賢沼寺大同二年（八〇七）に僧徳一が開基したとされる。この賢沼では、古来魚や鳥等の殺生が禁じられており、そのためか、大ウナギが棲んでいるという伝承がある。二〇一一年の三月一一日の東日本大震災では、沼の護岸が崩れるなどして、岸にあった魚見堂が倒壊した。今なお復旧工事中のようである。私はこの賢沼のことは、沢史生氏の『常陸国河童風土記』等を読んで知り、一〇年位前に訪れていた。沼の周囲には鬱蒼とした木々が茂り、神秘的であった。私は、古寺と沼や池、すぐ近くには砂鉄の取れる薄磯海岸がることにより、この沼の周辺で、当時製鉄が行われていたのではないか。沼とその周辺の植生が天然記念物とされているので、発掘調査はできないかもしれないが、この周辺からいつか製鉄遺跡が見つかるのではないかとあるのではないかと想像している。

原発被災地であり、避難区域に指定されている区域内にある楢葉町の天神原遺跡は、阿武隈山系から東流する木戸川河口左岸の段丘上に位置する。昭和五十四年の発掘調査によって、四七基の土壙墓と二四基の土器棺墓が集中的に発見された。弥生時代中期の再葬墓と見られ、東日本の弥生時代の墓としては最大級の遺跡で、県の指定史跡になっている。その他に、弥生土器壺型土器や翡翠の勾玉等が出土しており、これら出土品は国指定重要文化財にされているが、ここも休日なのに私たちの団体

以外、人の姿はなかった。木戸川の対岸には、除染土の集積所があり、広い空地に整然と積まれていた。

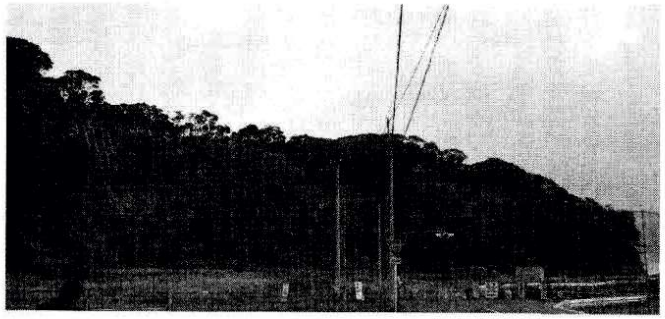
その後、さらに国道六号線を北上し、津波と原発被災地を視察した。福島原発のすぐそばを通る国道六号線は、車で通るだけなら通過を認められるようになっていたのである。常磐線の富岡駅（写真②）は、津波と放射能汚染と二重の被災を受け、復興が立ち遅れている。それでも、復興に向けての埋蔵文化財調査は行われており、この富岡駅周辺でも新たな遺跡が見つかっている。駅のそばには、写真②のように放射能測定器が設置されている。数値は0.8μSvを表している。私は、自前で線量計を持っていたので、今回持参した。原発事故の跡、東京にも放射能が降ったということで、急遽ネットの通販で購入したのである。所々で測定していたが、さほど大きな数値ではなかったのが、ここへきて上がりだした。

避難勧告を受けている隣の双葉町にも入ったが、津波の被害を受けていない地域では、まだ新築の大きな家がそっくりそのまま残されており、住民がいないことを除けば、ごく普通の町である。が、ここでは私の線量計の数値が見る見る上がりだし、最高2.2μSv／hまで上昇した。他の人の線量計では3μSv／h以上も上がっていた。町中には様々な所に、放射能測定器が設置されているが、建物の陰になった空地のような所では、7μSv／hの数値になっていた。原発被災地の視察は、およそ3時間以内位で終わった。私達にも影響が及びかねないので長い時間の滞在はしなかった。車内に乗り込むと、測定器の数値は下がっていた。

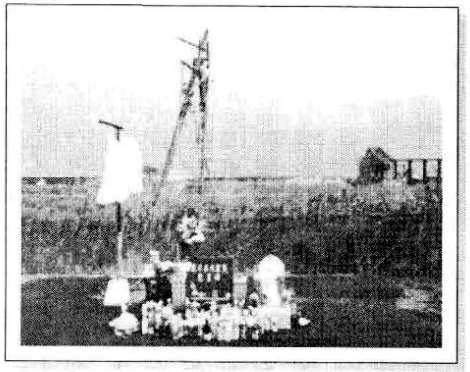
町の資料館等には、製鉄遺跡等の復元や、貴重な遺物、文化財を陳列している立派な資料室がある。地震による被害はあまり受けていないのに、放射能汚染のため、一般に公開できなくなっており、非常に残念なことだと思う。また、話によると、役場では住民避難対策会議中に原発事故が起きたので、職員も緊急避難をせざるをえなかったという。三年以上たった今でも、会議室は当時のまま残されており、そこだけ時間が止まったままの様だという。本当にやるせない思いである。この怒りをどこにぶつければよいのか・・・。岩手県の沿岸部では、「津波てんでんこ」という言葉がある。これからは「原発てんでんこ」も起きるか・・・。

この二日間、研究発表も充実していたが、遺跡と被災地の見学・視察は、大変貴重な経験であった。今年で四年目を迎えた。現地では、放射能という目に見えない敵との戦いがまだまだ続いている・・・。

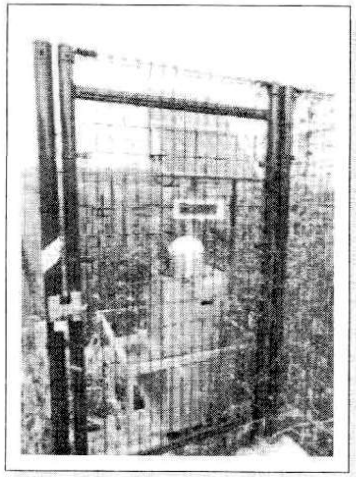
（了）



【←写真①　餓鬼堂横穴墓群のある崖　左手に二つの穴が開口している】



【←写真②　JR常磐線富岡駅前『東日本大震災慰霊碑』献花・供物が絶えない】



【←写真③　常時モニタリングされている線量計】

短歌

行雲流水（四十六）

石黒修身

近詠三十首

若山牧水――沼津千本松原

沼津なる「千本松原」道遥（さまよ）えば老松の梢（うれ）を鳶が飛び交う

松原は若山牧水所縁（ゆかり）ありあまたの歌と文を残せり

松原を称える館で真夜すがら牧水を読み松籟を聴く

館では牧水に因み酒酌めり老いたる吾は微醺なれども

松原に近く「牧水記念館」ありその境涯を写して宜し

世相・時局

カルタゴの遺跡残れるチュニジアにテロが起るはイスラムの業

カルタゴやハンニバルやと若きらに史実を語る爺吾れは

微かなる自虐覚えて革新の議員の言を肯きて聞く

旅客機は西アルプスの山襞に砕けて哀し禍事に逢い

憧れのワールドカップの夢壊すＦＩＦＡの汚職信じ難かり

身辺・日常

塩分の取り過ぎ避けよと医師は宣う酒の肴は総じて辛し

心臓を病みて三年いくつかの禁忌守らず息災に居り

好みしを野放図に食しのち「塩分控え目」呪文のごとく

ゴールデンウィーク終り老い吾は「上野鈴本」で風刺を笑う

王室のロイヤルベビーめでたけれ「猿」の命名ポピュリズムを嘆く

アスリート若きらの台頭頼もしく「錦織」にみる世界レベルの

地震多き国に暮せば頻発の揺れに脅える宿命として

季節

満開の桜花吹雪ける隅田川流れ滾々花びら浮かべ

桜人群れて遊べる川端に空襲の惨留める碑あり

満開の大川端の桜みちスカイツリーが遠景に屹つ

散りかけの桜に降りつむ雪白く「寒の戻り」は冷え冷えとして

春を待つ三寒四温に老いの身に風邪ひかぬよう花粉に耐えて

卯月入り気象状況荒むれば若葉青葉の候も束の間

爽やかな初夏はいづこに異状なる暑さの続く皐月の終り

「楤の芽」の旬の苦さが恋しくて妻の揚げたる天ぷらを食む

故郷の花

札幌は初夏の花木がリラ、ポプラ、エルム、アカシア妍を競えり

ポプラの棉風に舞い散りしらじらと草生を被う淡雪のごと

アカシアの花小房となりてたわわなり夜の街灯に映えてはなやぐ

ライラック咲き残りたる品種あり色夫々に香り芳し

キャンパスの木陰に憩いし楡の樹は亭亭として老うることなく

若山牧水　寸評

――沼津千本松原、富士山、旅と紀行、そして酒――

石黒修身

歌人若山牧水を知らぬ人は居ない。その作った和歌とともに、まさしく「人口に膾炙」という修辞があてはまる。

その作品は、小中学校の教科書から、所謂専問歌人、国文学者らの評伝、解説も枚挙にいとまがない。

かゝる背景において、市井の歌人に過ぎない筆者が敢えて何かを書こうと発意したのは、最近機会を得て、沼津市在の千本松原を訪ね、その周辺を歩き、自分なりに未知の牧水像を発見したしたことにある。以下に動意を得たテーマの幾つかにつき記してみた。

一　沼津千本松原

牧水が田園生活を考え、移住先としたのは、海岸に沿い美しい松原があり、富士山を朝夕眺められる風光明媚な沼津であった。

牧水は千本松原を日本一の松原と称え、多くの歌を詠んだ。

沼津を永住の地と定めた牧水は、大正九年八月松原の一角に約百坪の住居を建て、昭和三年この地で歿した。四十三才の若さであった。急性腸胃炎兼肝硬変の病名が残されて、沼津市浜通りの「千本松乗運寺」の墓地に眠っている。

和歌以外に沼津に因んだ随筆七篇、紀行文四篇、童謡三篇が残されている。

千本松原の歌碑は歿後一年で建てられた全国で最初のもので「幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」富士の裾野から運ばれた一五トンの自然石に刻まれたものとされている。

千本松原の由来については、ほゞ二七〇年前乗運寺の僧、増誉上人が相模の北条、甲斐の武田の戦いで松原が一本残らず伐り払われ荒野となったのを嘆き、自から植樹に着手し、一本植えるごとに阿弥陀経を誦し一千本を植えつけたものと、牧水自身が松原を称える文章の中で記している。この中では、松原の保護に係わり、静岡県に対する沼津住民の反対運動に賛同し、私人としての声明を出すなど、現代版エコロジーとも言えるエピソードが盛り込まれている。

松原を詠んだ二首

○松原のなかゆく道のいつか曲り海辺に出でて富士の山見ゆ

○日に三度来り来飽かぬ松原の松のすがたの静かなるかもなお、沼津から富士山を詠んだ短歌は「若山牧水歌集」収録で百三十首と称されている。

二　随筆、紀行文、童謡

牧水の随筆や旅と酒に因む紀行文については、筆者は殆んど識らなかった。

随筆七篇につき標題のみを列挙する。

「香貫山」、「村住居の秋」、「土を愛する村」、「発動機船の音」、「四辺の山より富士を仰ぐ記」、「駿河一帯の風光」、「自然の息自然の声」。

紀行文としては四篇

「伊豆紀行」、「富士裾野の三日」、「箱根と富士」、「大野原の夏草」。

童謡については、筆者はその存在すら知らず不明であったが、三篇を挙げる。これについては意外性もあるので、紙巾が許すものとして全文を記することにする。

「富士の笠」

富士が笠かぶった／饅頭笠かぶった／雲の笠かぶった／富士が笠かぶりや伊豆の沖から降り始め／駿河の浜辺を降りかすめ／相模の国に降りぬけて／甲斐の山々降りつぶす／大雨小雨／土砂降り小降り／富士が笠かぶった／

「富士の初雪」

糸まきの糸がほぐれて／しらじらと／富士のお山にかかった／白糸の富士の初雪／てっぺんに／もつれもつれかかった／

「子守唄」

松の木十本二十本／百本千本一万本／ぽんぽんあがる揚花火／あがってはじけて下り竜／竜のゐるのは富士の山／富士の山から下見れば／田子の松原三保の松／松の木十本二十本／百本千本一万本／ぼんぼん叱って下さる

な／

童謡と子守唄については、音調や節回しにつき筆者は資料を持ち合せなく、また区切りについても正確ではない。

三　人物を描く

牧水の旅姿はいくつかの写真により承知する向きもあろうが、大きな帽子と外套、それから下は和服に尻をからげて脚絆と草鞋、杖代わりにこうもり傘、そして肩から下げた頭陀袋という装備であった。

その風貌は丸坊主で、目はやさしく世間でいう良い人、善人であり乍らどこか知性と寂寥感を漂わせていたものと推察する。

宿に着くと先づ生卵と酒を所望し、身分を明さず宿帳には「若山繁」と書き、風体からみて粗末な扱いを受けても怒りもせず淡々と旅を続けた様子が描かれている。

牧水は散文には、所謂情緒的なものは書かず、それは叙情歌にまかせ、散文はあくまでも記録者の目で、現代で云うルポルタージュのスタイルであった。例えば大正十二年の関東大震災の記録を自から出している雑誌「創作」の十月号に「大震災大火記念号」として記載している。これは沼津の「牧水記念館」で閲覧した。

四　妻そして相聞

牧水の家族について、両親以前につき年譜を辿るいとまはない。明治四十五年（一九十一）妻太田喜志子と結婚、その後長男旅人、長女みさき、次女真木子、次男富士人と四子を設けている。

妻喜志子は牧水の最大の理解者であったとされており、彼女もまた歌人であった。

彼女は酒は嗜まなかったが、やはり寂寥や憂愁を解し、夫の行動、例えば旅に駆られる思い、酒をこよなく愛する慣いを良く理解していたものと思料される。

夫人の歌集「筑摩野」には次の歌がある。

○何かしらねど寂しげに家を出てゆきし君ゆゑ今日のなやましきことよ

○酔へばとて酔ふほど君のさびしきに底ひも知らずわがまどふかな

反対に牧水が夫人を詠んだ二首

○をとめ子のかなしき心持つ妻を四人子の母とおもうかなしさ

○人妻のはしきを見ればときめきておもひは走る留守居する妻

翻って牧水の恋については、具体的な対象となる女性は必づしき定かではないが、園田小枝子という人妻と五年間恋をし悶々と悩んだと伝えられる。

○ああ接吻(くちづけ)海そのままに日は行かず鳥翔(ま)ひながら死(う)せ果てよいま

○君かりにその黒髪に火の油そそぎてもなほわれを捨てずや

○山奥にひとり獣の死ぬるよりさびしからずや恋終りゆく

五　結び

牧水の短歌の特色は解説不要と云う人もいる。「用語はやさしく修辞も入り組んでいない。素直に読んで心に広がる波紋を楽しめば良い」との表現が正鵠を得ていると云えよう。

市井の名もない歌人であると同時に一介の酒徒を自認する筆者であるが、牧水と云えば酒の歌人と呼ぶ常識に逆うつもりはない。

先述の如く酒の歌以外に随筆、紀行分、童謡が残されていることを知ったのも新しい。

然し童謡は別として、随筆と紀行文には〝酒〟が随所に現われその表現を潤している。

文章は所謂名文、美文ではない。流麗と云うにはほど遠く、むしろ拙々として極めて具象である。風景の描写も読者が目の前にそれがあるように、人物・動作もその人が見えるところで動いているように映るのである。

要は一切のコメントを排除し、描写そのものがドキュメントとしての性格をもっている、とある評者は述べている。

現代を生きる吾々に通ずる歌人として読者に多様なものを感じさせて呉れているものと認識している。

古い物・遠い夢

忠内正之

「織部」いま（茶道史余滴）

（五）茶匠としての大成　（徳川時代へ）

茶の湯名人

古田織部は、楽隠居の身となり、伏見の織部屋敷を中心に、茶事三昧にふけると同時に、いよいよ、茶の湯の道に本腰を入れてきており、茶の湯名人としてその名を高めていくこととなる。

茶の湯の名人といっても、今では漠然とした概念しか受けとれないが、利休の全盛期にあっては、茶人の最高の資格としてその条件が定まっていたのである。

利休の高弟山上宗二が秘伝書の中に規定している。「唐物所持、目利モ茶湯モ上手、此ノ三箇条モ調ヒ、一道ニ志深キハ、名人ト云フ也」と、ある。また、「茶湯者ノ数寄者ハ古今ノ名人ト云フ。珠光、并ニ引拙、紹鷗也」と、説明している。

これによると、茶の湯の名人とは、道具の目利きに長け、茶の湯も上手で、胸の覚悟・作分・手柄の三ヵ条もととのい、その上に、唐物茶器を所持し、茶の道に志が深い、といった資格の揃った茶人のことをいうのである。名人ともなると、きびしい条件がついてくる。したがって名人には容易になれない。

そうした名人の実例としては、茶の湯の開山といわれる珠光と、鳥居引拙、武野紹鷗の、三人を挙げている。いずれも珠光流茶道の極意を相伝した、歴史的な大茶人である。

受け売りであるが、名人は茶湯者と数寄者との資格を両方もっていなければならないという。道具の目利きに長け、茶の湯も上手というのが、茶湯者の資格であり、胸の覚悟・作分・手柄の三ヵ条のととのっていることが、数寄者の資格となっていたのである。

晩年の利休もまた茶の湯の名人であることは当時、定評づけられていた。ところが、その名人の利休が、秀吉の処罰を受けて、天下の御茶頭の地位から転落すると、これに代わる者が他に居なかった。

実力の上では、これに代わる堺衆の茶人が、かなりいたわけであるが、彼等は、封建社会の秩序を紊す町人茶人として、利休処罰の前後に、それぞれ、処罰されたり、遠ざけられたりした。そして大名茶人として比較的無難で、町人茶道改革の適任者とみなされた古田織部が、次の時代の茶の湯の名人として、茶道界の上層に浮かび上ってきたのである。

それは豊臣から徳川へと政権が大きく移動する時代の過渡期を思わせるに十分なものがあった。

慶長四年（一五五九）　織部五十六歳

古田織部は茶事にしたしみ、茶の湯名人として、交際を広め、その名を高めてゆくが、秀吉なきあとの政権は集団指導ままならず、必ずしも平穏にはいかなかった。

秀頼は七歳となり大坂城へ移っている。一方徳川家康の専横がめだち始め、一命を狙われること、加えて前田利家より責められることなどがあった。その前田利家は閏三月三日六十二歳で没した。

また加藤清正、福島正則などが石田三成の襲撃をくわだて、三成が徳川家康邸に逃げこむという、首脳部における権力争奪の様相が深刻になっていった。

そのようななかで織部は茶湯三昧をつづけ、茶人と最も関係の深い大徳寺の春屋宗園（円鑑国師）のもとに参禅して、金甫の道号を受けている。

この頃、朝鮮から来日した陶工、李参平は肥前（佐賀県）多久の西の原で、同じく巨関は平戸の紙漉、宗伝は武雄の内田山でそれぞれ開窯をしたという。

徳川幕府の開幕と古田織部

前田利家なきあとの天下は、おのずと徳川家康が、その政治権力をにぎる趨勢にあった。慶長五年（一六〇〇）六月、家康は会津の上杉景勝を討つべく、事を起こしたのである。

家康は常陸（茨城県）の佐竹義宣を味方にひきいれるため、織部と佐竹が茶の湯の上での親しい師弟関係にあるのに着目して織部にその旨を命じた。

織部はこの困難な任務を果すべく、島田重次、花房職之の二名をともない水戸に赴き、説得に成功し人質をともなって、これを江戸城に収容し、このことを、東下最中の家康に報告したのであった。

その後も家康が、下野国の小山に至って、石田三成挙兵の報に接し、軍を上方にかえしたときも、織部は石田方に味方した尾張犬山城主石川備前守貞清などの誘降に力を尽し、徳川がたの関ヶ原作戦を有利に導くことに貢献した。

石田三成が挙兵、家康も兵を戻して、ここに秋九月、関ヶ原、天下分け目の決戦の果てに東軍（徳川家康）が勝ち、西軍（石田三成）は敗れた。十月一日、石田三成（四十一歳）、小西行長（四十五歳）、安国寺恵瓊（年齢不詳）らは京都三条河原で斬首された。

古田織部は、このとき石田三成の行動をこころよしとせず東軍に従ったものと思われる。

同年十月十五日、古田織部は徳川がたの、他の多くの功労者に伍して、一万石の采地を家康から与えられている。従来実父・重定の遺領三千石の隠居の身であったが論功行賞として七千石を加増されたことになり、大和国（奈良県）の井戸堂を領地としたのである。

他の論功を与えられた諸大名のそれに比して織部の評価はかなり軽いものであったと、筆者は考えるが、当時の風潮では武勇が尚ばれ、知略を巡す人物はさげすまれていたのではなかろうか。

やがて、敵味方差別のない茶の湯を通じての織部の生き方が武辺一辺倒の家康側近たちの疑念をもたれることとなり、後年の悲劇をもたらす原因がこの頃から生じていたのであろうかと推察される。

これより先の三月、豊臣秀頼は方広寺の大仏殿に七層の塔を建立した。（のち、この大仏殿の鐘銘が家康に難くせをつけられ、大坂冬の陣となる）

また関ヶ原合戦のすこし前、七月十七日、細川忠興の夫人、細川たまいわゆるガラシャ夫人は、大坂・玉造の細川屋敷を石田三成の兵に包囲されて自決する。（夫人はクリスチャンのため、自ら命を断つことは許されぬとして家臣の小笠原少斎の刀で死ぬが、実際は自裁である）

慶長七年（一六〇二）　織部五十九歳

古田織部はこの頃相変らず茶の湯に精進した年月であった。領地となった大和国・井戸堂へ入って茶会を催している。茶人今井宗久や毛利宰相秀元などを招いている。

五月、徳川家康は、二条城を築城した。家康が禁裏の守護ならびに上洛のときの宿舎として起工、翌慶長八年（一六〇三）に竣工している。

また織部と係わりの深い細川忠興は豊前小倉（二十三万石）へ入っている。

この年十二月、京都・方広寺が焼失する。

菩提寺の建立

慶長八年（一六〇三）　織部六十歳

古田織部は京都・堀川水火の地に天海僧正の高足である虚応円耳禅師を開祖として、菩提寺、興聖寺を建立した。織部還暦を迎えた年である。

この寺は先般筆者が参拝を志したが、にべなく断わられた寺で、現在は非公開である。

当初はいまのような禅宗ではなく、顕密両修の道場であり、寺号も円通山興聖顕密自得禅寺といった。元禄十四年臨済に転じ興聖禅寺として数十ヵ寺の末寺を有するといわれている。（洛南の興聖寺とは違う寺である）

開祖・円耳和尚は、興聖寺創建より約十年程前より堀川水火の地に「大昭庵」という小庵を結んでいた。そのことから天海僧正が円耳和尚を推せんし、その近くに興聖寺が建立されたものである。

古田織部が興聖寺建立に際して喜捨した金額は二十貫に及ぶと伝えられているが隠居の身であるため、妻の実家、豊後（大分県）国城主の中川秀成が施主となった。

この寺には織部好みの茶室・茶亭が設けられ、織部は何度も茶会を催したといわれる。

後のこととなるが、慶長二十年（一六一五）織部自刃のあとこの寺に葬られることとなる。

徳川家康（六十二歳）はこの年二月、豊臣秀吉が望んでも叶わなかった征夷大将軍となり、江戸幕府を開幕する。豊臣秀頼はまだ十一歳になったばかりであった。三月、江戸市街の拡張を命じ日本橋を架橋した。七月、家康の孫、千姫を秀頼に嫁すこととした。

一方、織部の愛弟子、小堀遠州（二十五歳）は伏見城の建築に携わることになった。

二代将軍秀忠の茶匠となる。

利休の没後は千家が一時断絶した形となったので自然な形で織部が茶の指導者となっていった。利休門下で一番に力を持っていたのである。

利休生前のことであるが、あるとき細川忠興が、利休に向って、「貴老が五百八十年後に死なれてからは、天下の茶の湯の指南は、果たしてだれがつとめるであろうか」と尋ねたところが、利休はそれに答えて、「せがれの道安は、働きのある茶人だが、人柄がわるいから、天下の茶の湯指南は、古田織部でもあろうか」、といったという。

これを換言すると「道安は茶の湯の巧者であるし、技量もずっと上ではあるが、織部の地位（数万石の大名）には負けるだろう」という意味であったと察せられる。

この利休の予言はまさしく的中したのである。

慶長十年（一六〇五）　織部六十二歳

徳川家康は隠居して、秀忠（二十七歳）が征夷大将軍となる。一方では家康の上洛催促を拒否する秀頼（十三歳）の存在があった。

秀忠は四月五日伏見の織部の茶会に臨席して、以来大の織部ファンになったという。五年後慶長十五年には江戸に織部を招いて台子点前の伝授を受けた。

将軍の師匠となった訳で、もう天下の大宗匠ということで織部の名声はいよいよ高まった。

家康も茶会を開く時は駿府に織部を呼び寄せて点前を命じたようであるが、もともと家康という人物はあまり茶の湯を好む人ではなかったと思われる。徳川三百年を築き上げた偉大な実務家であるが、茶に傾く素質の人ではなかったようである。

更に考えると、織部と家康とは二歳違いの同年代ではあるが、育ち、性格があまりに相違しており気が合わなかったらしい。

家康の側近ともども、織部のかぶき者、ひょうげ者の姿に反感すらもっていたかも知れないのである。

しかし泰平の世が定まるとともに二代将軍、三代将軍と天下人は皆、茶の湯を一種の平和政策の手段として用いたので、茶道は盛んになる一方で、武家の茶の湯の源を開いた織部の茶風を慕い、織部の茶会に招かれたい人は踵を接する有様だったという。

織部とよく気脈を通じていたといわれる、関白近衛信尹（一五六五―一六一四）は、自邸の奥座敷でのささやかな宴会の席で戯れ言として言ったという。

「……今、世に流行るものが三つある。女歌舞伎、公卿の浮世狂い、織部の茶である」と。

女歌舞伎とは出雲大社の巫女と称する阿国が、京都へ出て演じたはやりの歌や念佛踊りなどを混えた演劇で歌舞伎芝居の始めともいわれる。公卿の浮世狂いとは猪俣事件に象徴される公卿たちと女官たちの乱痴気さわぎのことである。（まんじ九十五号の拙稿ご参照下さい）。

かくして織部の全盛時代は慶長十八年の大坂の陣発生まで続くのであった。一万石の隠居大名としては、たいへんな権力を持ったもので、やはり全盛期の利休を想わせるものがあった。ここで織部の交遊および師弟関係について述べてみたい。

（六）織部の交遊及び師弟関係

織部が茶道を通じた、交遊もしくは師弟関係をもった人物は、枚挙に暇が無いほど多数である。しかも旧豊臣方と徳川方の分別なく、茶の湯を通じて広がった交遊関係が、やがてその後に至る自身の悲運に繋ったものとも思われる。

主だった交遊を挙げて見よう

織部と数寄大名

徳川秀忠（一五七九―一六三二）

二代将軍秀忠の茶道師範として、柳営（幕府のこと）茶道を教え、点茶の式を伝授する。

因みに秀忠は織部より三十五歳下で、たまたま小堀遠洲と同年であった

毛利秀元（一五七九―一六五〇）

周防（山口県）の大名、輝元の世嗣、慶長六年（一六〇一）織部五十八歳の頃の書状が五通、「長府毛利家文書」として残されている。毛利宰相とは親しく交遊をしていたと思われる。

松井康之（一五五〇―一六一二）

豊前（福岡県）の細川忠興の家老であった松井佐渡守・康之（一万三千石）とは利休門下ということもあり、早くから親交があった。慶長十四年（一六〇九）織部六十六歳のとき二代将軍秀忠の養女・千代姫を細川忠興の嫡男・忠利に嫁がせた折のやりとりが、「松井家文書」として残されている。松井家を通じて細川家とも繋がりがあったと思われる。

伊達政宗（一五六七―一六三六）

仙台の伊達政宗も茶事について織部にいろいろ依頼していたらしく、「伊達旧伯爵家文書」には、織部自筆書状が五通も残されている。

佐竹義宣（一五七〇―一六二三）

常陸（茨城県）太田城主の佐竹義宣は織部について、茶をまなんでおり、極めて親密な関係であった。その親密さが昂じて、やがて起きる大坂冬の陣の最中の、佐竹陣屋における織部の負傷といった小事件の発生となる。この点についてくわしくは後にゆずる。

浅野長政（一五四七―一六一一）・幸長

長政は早くから秀吉に仕え奉行衆の筆頭として活躍した。関ヶ原の役には東軍に味方し紀伊国三七万石余の大名となった。古田織部と親しく交遊した様である。長政にあてた織部の礼状が一通残っている。

幸長（一五七六―一六一五）は長政の長男で秀吉・家康に仕えた。古田織部に茶を学び、織部の愛弟子、茶人上田宗箇を召抱えたことでも知られる。

武勇・築城に秀でていたが、三十八歳で病死したのが惜しまれる。家督は長政の次男である長晟が継ぎ、大坂の陣で戦功を挙げ安芸国（広島県）で四十二万石余の大名となった。茶人上田宗箇を厚遇し茶の湯を愛好した。

上田宗箇（一五六三―一六五〇）

上田宗箇流の流祖。丹羽長秀に仕え、歴戦の功により越前で一万石を知行、主水正・従五位下で、茶は利休から織部にまなび、のち蜂須賀家の四国さらに浅野家の紀州などで余生は茶湯三昧であったという。

織部から贈られた、伊賀の「生爪の花入」と織部の添文は有名である。

宗箇は織部にまなんだ遠州と同じく作庭に秀れ、その造形は豪放な枯山水といわれ、広島の縮景園また、名古屋城の二の丸庭園は、紀州の青石を使用した彼の作といわれる。

織田有楽（一五四七―一六二一）

織田信長の末弟で、利休門では織部の先輩にあたる。茶道・有楽流の流祖である。信長より十三歳下の舎弟として、織田、豊臣、徳川と移ってゆく時世のなか、織田から豊臣への過程で剃髪し、有楽斎と号し、また大坂冬の陣以後は京都に隠棲する。そして茶室如庵で茶湯三昧の生活をおくった。東西の紛糾からうまく身をかわし元和七年七十四歳の長寿を全うした。如庵は現在犬山市に移築され、国宝に指定されている。

黒田如水（一五四六―一六〇四）

秀吉に仕え、山崎の合戦、賤ヶ嶽の戦い、九州征伐に戦功をあげて、豊前中津に十二万石を与えられた。文禄・慶長の役に際しては石田三成と相容れず、帰朝して如水を名乗った。秀吉没後は徳川家康に服して子の長政を関ヶ原に出陣させて黒田家を安泰に導いた。

幼少より歌道に秀れ、茶を利休に学んで「茶湯定書」一巻を著している。織部と如水の手紙のやりとり等が残っていて殊に晩年の頃親しかったらしい。手紙の現物が織部の子孫を名乗る吉田六郎氏の所蔵にあるという。

受洗名をドン＝シメオン。織部と共に春屋宗園に参禅している。

大野治房（不詳―一六一五）

藤堂家旧蔵の古伊賀の水指に「破れ袋」という銘のものがある。重要文化財に指定され、現在、五島美術館の所蔵品となっている。この水指には織部自筆の添文が付いていたという。関東大震災で焼いてしまったというが、治房宛の水指の贈り状であった。

この古伊賀の水指は、同種の物では、最も豪快な作調の品で、おそらく、織部の指図によって焼かれ、大野治房に贈られたものであろう。

この古伊賀の水指は、上野城主筒井定次（一五六二―一六一五）の領内の伊賀国で焼かれている。定次は慶長五年の関ヶ原合戦には徳川がたに属して功労があったが、豊臣秀頼の寵臣大野治房の一族として親しく交わり、同十九年大坂の陣が起きると、大坂方に内通し、大野治房主馬を大和国の群山に導き入れたというので大坂落城に先だち、元和元年（一六一五）切腹を命ぜられ自害して果てた。

古田織部が、この筒井定次と親密で、また、定次と親交のあった大野治房とも親しかったことが、この名品古伊賀水指の添状により知られるのである。

大野治房は有名な大野治長の弟であり、大坂の陣では冬・夏共に対徳川抗戦の主将とし一貫していた。元和元年五月七日大坂落城と同時に、城から脱出したが京都で捕えられて、斬首の刑に処せられた。

このような大野治房や、また、筒井定次と親しく交流した織部が、徳川がたにとって注意人物とされたのも当然であったといえる。

板倉重宗（一五八六―一六五六）

織部の弟子には、大野治房のような大坂がたの武人と限らず、徳川の直臣もいたのである。京都所司代の板倉勝重の子重宗などがその一例である。

織部自筆の重宗宛の書状が残っているという。文中には「瀬戸黒茶碗進入申候」とあり、織部が織部黒もしくは黒織部の沓形茶碗をすすめており、数寄大名たちは好んでそれを愛用していたことの一端を示している。

慶長十四年（一六〇九）頃の交流があったものと思われる。

織部の危機時には重宗の父勝重が京都所司代であり、苛酷な責めを受けるのであるが皮肉なことであった。

有馬豊氏（一五六九―一六四二）

有馬豊氏は丹波福知山（兵庫県福知山市）八万石の大名で、利休門下で茶の湯に通じていた。織部からの書簡は「金源堂文書」として残されている。

文面は鷹狩りの鷺を贈られたことに対する謝辞を述べたものである。早くから徳川方となり家康の養女を娶る。後に久留米（福岡県久留米市）二十一万石の領主となった。

小堀遠州（一五七九―一六四七）

小堀遠州は、本阿弥光悦と共に、織部門下の逸材といわれている。織部とは住居も近くに住んでおり、茶道のみならず綜合的芸術家としての実績も似ている。

遠州は桂離宮の造営ということで名を成しているが、建築、作庭に秀れているばかりでなく、文学者として「小堀宗甫公旅日記」元和七年（一六二一）を著述し、書家としても、藤原定家の平仮名と、明代の隷書体を学び、寛永の三筆に次ぐとまでいわれた。

建築と造園は父の正次が豊臣秀吉の普請奉行をつとめ、秀吉の死後は父と共に家康のもとで、伏見城の築城を始め、駿府城、名古屋城天守閣など、更に大坂城の落城後は書院や茶室など、その遠州の手になるものは多い。なかでも桂離宮は有名である。

陶芸では遠州七窯を指導して、気品のたかい、華やかな〝綺麗さび〟といった茶陶を作らせている。また切形（手本）を送って唐物を注文するなど、遠州好みといわれるものが残されている。

茶器については、利休以前のものを大名物とよび、以後のものを中興名物などと仕訳して、いわれの深い茶器の鑑定にも秀れた眼力を発揮した。それら茶器にふさわ

しい歌銘をつけるという歌人でもあった。

茶道においては遠州流の流祖となり、遠州流は現代で十二世となり三千家に次ぐ流派として栄えている。

遠州が古田織部の門を叩き、織部がそれを誉めたといわれることがあったのは慶長元年（一五九六）織部五十三歳、遠州十八歳のときである。

そのとき遠州は「洞水門」を工夫して織部にその才能をみとめられたという。洞水門とは現在の「水琴窟」の原形ではないかといわれる。

遠州が織部と係わりをもったのは慶長元年から、織部が東西の和平工作を開始した慶長十七年（一六一二）である。慶長年間十七年の間親しい師弟関係が結ばれていたのである。

慶長二年（一五九七）遠州は、藤堂高虎（一五五六―一六三〇）の養女（藤堂玄蕃の娘）を娶った。

藤堂家と小堀家は、かつて豊臣秀長に共に仕えた間柄の誼があった上での縁とは思うが、後に伊勢伊賀三十二万石の大守となり、譜代大名よりも家康が最も信頼をおいたといわれる藤堂高虎のバックを得たことは遠州のその後の将来に大きな好影響を与えたことは間違いのないところである。

慶長十七年（一六一二）織部は片桐具元と和平工作（徳川家と豊臣家の共存）を開始した。このときを同じくして、遠州は織部のもとから去っていった。

遠州は名古屋城の天守閣の作事を奉行することとなったのである。

そして慶長十九年（一六一四）には大坂夏の陣がおこり、徳川家康の出陣にあたり遠州は家康の身辺にあって軍事に励んだ。

慶長十七年から慶長二十年の間、大阪の陣がおき、豊臣家滅亡、古田織部の切腹という期間、かえって織部との関係がとだえていたことは、顧みて遠州に大いに幸いしたといえるのではないか。（一説には「織部とは一線を画せ」との天の声があったのではないかともいわれている）

いま一人の織部門下の逸材である本阿弥光悦が、織部切腹と相前後して、洛中から追放されていることを考えあわせると、その感慨はいっそう深まるのである。

最晩年時代の織部を遠州が心底から忌避していたかどうかと質問されれば、確答は難かしいが心ならずも離れざるを得なかったというべきか。

筆者はこの点について現在の遠州流の主要な幹部の方におたずねしたことがある。その方の言によれば、極く最近、遠州から江月宗玩（一五七四―一六四三）―大徳寺一五七世住持で遠州の参禅の師―宛の一通の手紙が発見されたが、その内容によれば大坂夏の陣以降の織部の処遇について極めて危惧の念を抱いていると書かれていたという。

慶長二十年（七月十三日からは元和と年号が改まる）再建桂離宮の第一期工事が開始された。この工事の指揮をとったのが遠州であり、第一期工事という造園普請の中で、桂離宮の庭園内二十四基の燈籠の中、七基の織部燈籠（キリシタン燈籠ともいわれている）が据付けられているのである。これは遠州が師である古田織部を追慕する心のあらわれであった。

寛永十三年には将軍家光より将軍家茶道師範として認められるのである。

織部と数寄者

神谷宗湛（一五五一―一六三五）

筑前博多の豪商神谷家の六代当主。神谷家は明との貿易、石見銀山の開発により巨富を築いた。宗湛は同じく博多の豪商島井宗室（一五三九―一六一五）と上洛し、信長に謁した夜が天正十年（一五八二）六月二日、明智光秀の反乱による本能寺の変であった。このとき信長所有の「遠浦帰帆の絵」を携えて脱出したと伝えられる。

その後は秀吉の厚遇をうけ島津征伐、文禄の役における秀吉の名護屋城での茶会、さらに伏見城の茶会にも出席して、秀吉在世時には盛名をはせた。

織部は宗湛及び島井宗室と交流したようで、交した書状が残っている。

島井宗室は元和元年（一六一五）八月、七十七歳で没している。織部の切腹より二ヵ月あとのことであった。

宗湛また慶長十八年（一六一三）、永年続けた「宗湛日記」の筆を折り、豊臣から徳川に移って、豊臣派博多商人の末路を知ってか、不遇のなか閑居していたが、寛永十二年（一六三五）八十五歳の幕を閉じた。

本阿弥光悦（一五五八―一六三七）

織部門下の逸材として、小堀遠州と並んで光悦は双璧である。光悦は永禄元年（一五五八）代々、刀剣鑑定、研磨、浄拭を業とする本阿弥家に生まれ、加賀前田侯の扶持二百石を父の代よりうけ、禁裏をはじめ将軍家および諸大名の御用をつとめた。

光悦が総合芸術家としての才能を発揮し、色紙や巻物のデザインから、茶室、造園、漆器、蒔絵などあらゆる分野において前人未踏といわれる斬新な表現を演出した。

とくに古田織部の愛弟子として、茶道において織部のもつ革新的な造形と大胆・豪放な作風を吸収するばかりでなく、書と作陶については更に光悦の真価が発揮され、現在においても高い評価を受けている。（まんじ一〇一号の拙稿「古い物・遠い夢」をご参照願えば幸いです）。

既述する如く、織部切腹後京都の本阿弥辻から郊外の鷹ヶ峰に追放された。そこで「芸術村」を造って工芸の

制作活動に専念した、交遊関係も多彩で公卿・武家・僧侶・商人に及びいずれも当代を代表する知名人士であった。それ故に徳川家から警戒される立場となり、晩年はこの地に太虚庵を営んで閑居、風雅な余生を送った。寛永十四年没、八十歳の長寿であった。

松花堂昭乗（一五八四―一六三九）

松花堂は天正十二年興福寺の別当・一乗院門跡に仕えた中沼家に生まれ、幼名を辰之助といい、長じては近衛家に仕え、のち男山の石清水八幡宮の社僧となって、滝本坊に住み、寛永の三筆とうたわれるほど書の名人となった。三筆とは、近衛信尹、本阿弥光悦、松花堂昭乗である。

いずれも青蓮院門主の門下であった。茶の湯は織部の弟子にあたる小堀遠州に学んでいるから、孫弟子というべきか。

織部ともつきあいがあったらしく、昭乗から糸桜の初花を贈られたことに対する礼状が残っている。

昭乗は、書、また狩野山楽にまなんだ絵、隠居してからの茶の湯、それぞれに秀でた才能を示したが寛永十六年五十六歳で没した。

近衛信尹（一五六五―一六一四）

安土桃山から江戸前期の公卿。幼名は信基、信輔。号は三藐院。近衛前久の嫡子。天正五年（一五七七）元服。正五位下左近衛少将から昇進して、右大臣、左大臣に叙任。官を辞して文禄の役が起ると、秀吉の朝鮮渡海に随行を強請したことから勅勘を受けて薩摩に配流された。島津義久の好遇を受け薩摩にとどまること三年、許されて帰京し、慶長六年（一六〇一）左大臣に任ぜられ、同十年関白・氏長者に叙された。薩摩に配流されたことから、近衛家と島津家の親密化が強まったものと思われる。

詩歌に優れ、殊に連歌を通じて織部を指導した。また茶の湯は織部に学んだ。能書家として有名で、寛永の三筆の一人に数えられている。

近衛家歴代の文献資料をもつ「陽明文庫」には織部から、近衛家の諸大夫（家老職のこと）との間での書状が十六通も現存されているという。（当時では貴人宛直接の手紙は避けたものらしい）。

その他個人蔵を含めて合計二十三通もの書状が残っており、その書簡が慶長十八年（一六一三）から慶長十九年（一六一四）にかかるものであり、織部七十歳から七十一歳、死の一年前であるため、その係わりは重視される。

書簡の内容は、諸々の礼状、贈り状等が主体であるが、「大坂の事云々」と心配を記したものもあるという。

少々長くなるが次の手紙を紹介したい。

陽明文庫に、織部と近衛三藐院信尹との交遊を示す文献資料の一つとしてつぎの信尹自筆の消息（手紙）があるとのことである。

明日古織来候。可レ有二上洛一候。大相模事、先日知行所へ被レ越、我々までもうれしく候、石玄事、我々伊賀へとどけ候状、将軍へ本佐、同下野披露候へば、よく届との仰之由候。可二心安一候、かしく。

種　大蔵どのへ

文中に「古織」とあるのは古田織部のこと。「大相模」というのは、大久保相模守忠隣。「石玄」は石川玄蕃頭康長。「伊賀」は板倉伊賀守勝重。「本佐」は本多佐渡守正信。宛書の「種大蔵」は種村大蔵大輔であろう。

ここに「大相模事、先日知行所へ被レ越、我々までもうれしく候」と書いているのは、徳川譜代の重臣大久保相模守忠隣が、幕府に謀反の嫌疑をこうむり、慶長十九年（一六一四）の正月十九日、突然に改易に処せられ、その所領近江国栗太郡中村に蟄居を命ぜられたことをいうらしい。

この事件は、忠隣と対立的立場にあった家康の謀臣本多佐渡守の陰謀によるといわれ、忠隣は、全く無実の罪を着せられたのである。忠隣が幕命をおびて伴天連およびキリシタン追放のために上洛中の唐突的事件であった。洛中では一騒動を予想しさまざまなデマもとんだが、忠隣は二月二日配所に赴いて謹慎し、そこから天海僧正を介して、幕府に陳謝状を奉り、将軍等に対して何等疎略の意向のないことを弁明したのみであった。

近衛信尹は、忠隣が、近衛家の旧領所である近江の中村に落ちついたことを知って、そのことを喜んだのであるが、この大久保忠隣もまた、織部の茶の湯の門弟だったのである。

大久保忠隣改易事件が織部の処罰事件と、直接関係ないにしても、家康にとって処罰された人々のなかに、織部と親しい人々がいたという例証の一つになるであろう。

ちなみに大久保忠隣の一族は、三代将軍家光の寛永二年（一六二五）になって、ようやく罪を許されたが、その後三年を経て、寛永五年忠隣は配所で七十六年の生涯を終えた。

近衛信尹は慶長十九年十一月、享年五十で死去した。晩年は病気勝ちであったというが、信尹の死は織部にとって大きな痛手となったものと思われる。

織部の師弟関係、交遊関係は、対象を絞ったもののつい冗長に流れ、また時代を先行させたむきもあったと思う。ここで本筋に戻して織部の姿を追ってみたい。

織部の危機となる大坂の陣は刻々と迫りつつあったのである。

続く

生還（一）

太田精一

一・鬼の棲む島

強い日差しが海原を照らしキラキラと輝いている。

平三郎は、洞窟の中でじっと身を横たえ、故郷の遠江の国荒井村に残した妻お政のことを思い出していた。平三郎にとってお政は、永遠の若妻で船出を見送ってくれた時のままであった。

お政は、浜育ちのため肌は日焼けしていた。だが、瞳は黒く輝き、鼻筋が通っていて、やや厚い唇にこぼれるような白い歯が見える。微笑むさまは、そこはかとない色気が漂い、近所でも評判の美人妻であった。

（この島に漂着してどの位の年月が経ってしまったのか。もう数えることもできなくなってしまった。お政は、今でも俺の帰りを待っていてくれるだろうか）

平三郎は、長い無人島での生活に疲れ、ぼんやりと故郷を想い、お政の艶めかしい肢体を脳裏に浮かべ、海を眺めていた。

島は、温暖な気候で、故郷の荒井村ほどの四季の変化は感じられない。そのため年月の移り変わりを映し出す季節感が、平三郎の中に失われていた。また、岩石だらけの島には、草木が少なく島の景観に変化が乏しかったことも季節を忘れさせる原因となっていたのである。

平三郎は、お政と交わした甘い夜の睦言が、夢の中の出来事であったような気がしてならない。夢と現の間を漂いながら、波の音に眠気を誘われ、いつの間にか眠りに落ちていた。

すると突然洞窟の外で、人影が動くような気配がした。

「お帰り。稲草にやるほど桶に水が溜まっていたかね」

平三郎は、洞窟で一緒に暮らしている仲間の一人が帰って来たと思い、声をかけた。だが、洞窟を覗いた人影は、奇声を上げて一目散に逃げて行く。

舵取りの甚八か水主の仁三郎であれば、洞窟の中に、ためらいもなく入ってきたはずである。

（この島には、自分を含め三人しか住んでいないはずだ）

そう気づいた平三郎は、幻を見たのかと目を擦りながら洞窟の外に出てみた。すると二十間ほど先に男が逃げて行く姿が見える。

「お待ちくだされ。怪しいものではない。こっちを向いて何か言ってくだされ」

平三郎は、思い切って叫んでみた。逃げ去ろうとした人は、平三郎の姿を見て振り向きざまに悲鳴を上げた。

「ひえー。鬼だあー」

鳥の羽で作った衣をまとい、髭は茫々、髪はぼさぼさで、肩まで垂れている。血走った目をぎょろぎょろとさせ、男の方を見ている平三郎の顔は赤黒く、まるで赤鬼のようであった。

「お前様の住まいを覗いたりしてどうかご勘弁くだされ」

男はそう言って立ち去ろうとしたが、腰が抜けて歩くことが出来ない。ただ震え戦くばかりで歯をがちがちさせ、何か言おうとしているのであるが、言葉にならない。

「わしの言葉がお分かりなさるか。お見受けしたところ髷を結っておられる。日本の人ではありませぬか。鬼ではござらぬ。わしも日本人じゃ。遠江の国荒井村の者で水主をしておった。嵐に遇ってこの島に流れ着き、もうずいぶんになる」

平三郎は、出来るだけわかりやすく、静かに語りかけた。

「確かに鬼ではなさそうじゃわい。言葉も江戸とはちょっと違うようだが、言っていることはわかる」

男はやっと安心したように体を動かし、立ち上がった。男が落ち着いた頃を見計らって、平三郎は言った。

「驚いてはいけませんぞ。実は、わしの他にまだ洞窟には、男が二人住んでいる。いずれも荒井村の出で、同じ船の水主をしていただが、嵐に遇いこの島に流れ着いた者たちじゃ」

平三郎と男は、洞窟の前で、二人の帰りを待った。半刻もすると二人の男は疲れた顔をして帰って来た。平三郎と同様、鳥の羽の着衣を纏い、鬼と見誤られてもおかしくない姿をしている。二人とも年は平三郎よりずいぶん上である。一人は六十代半ばを超え、腰も曲がり歯も抜けて老いていた。だが、目だけは鋭く血走っている。老人は、じっと男を見据え、舵取りの甚八と名乗った。

もう一人の男は、甚八よりやや若くは見えたが、すでに六十を超えている。彼もほかの二人と同じく、鳥の羽で作った着衣を纏い、赤銅色の手に土を掘ったと思われる木製の鍬を持っていた。名は、仁三郎といい水主をしていたという。

三人の島民の名前と身元を知った男は、やっと安心し

たのか名と身分を明かした。
男は、江戸堀江町宮本善八の持ち船の水主で友三と名乗った。
友三の語るところによれば、沖船頭富蔵水主と共に十七人で宮本船に乗り組み、塩魚、乾物、綿などを積み込んで元文三年（一七三八）十二月三日江戸表を出船。南部八戸の湊に入津し、そこで江戸からの積み荷を売り捌いた。帰路、仙台で大豆、蕎麦を買い付け翌年三月二十一日、仙台東南の浦より出船、江戸に戻るところを房州の先で大嵐に遭い、一旦は収まったかに見えたが、再び風が強まり、積み荷を海に投げ捨て、かろうじて転覆は免れた。三日ばかり大海原を漂っているうちに二十九日の明け方、この島に打ち寄せられた。とのことである。
「ところでお前様たちのお国は先程聞いたが、いつ頃この島に漂着なさったね。お見かけしたところずいぶん長い間この島にお暮しのようだが、水や食料はどうなすっているかね」
友三は三人に尋ねた。
「わしら三人は、遠州荒井湊筒山五兵衛船の水主をしとった。船頭左太夫以下九人で江戸表まで乗り付け、江戸で二人の水主を加え、享保四年（一七三九）亥年の秋に仙台の荒浜まで船を走らせた。そこでお城米を積み込み、一人の船荷番を乗せ、十二人で荒浜を出船した。船出をした時は、良かったが、海が荒れて来たので銚子口に入津し、お役人様の御指図を受け、お城米を売り払った」
「それからどうなさったね。お国の荒井湊には帰らなかったのかね」
「ひとまずは、帰ろうとしたのだが、空船で帰るのはいまいましいと思っていた矢先、木積みを請け負う仕事が南部にあって、その木材を積んで、仙台の小竹浦に入船、十一月二十六日にその湊を出船した。ところが、房州九十九里浜に来たところで大時化に遭い、沖に吹き出されたので帆柱まで捨てた。わしら十二人の水主は、元結を切り竜神に誓いを立て、難を逃れようとしたが、波風は激しくなるばかりで、流されてしまった」
「それは大変な目にお会いなさった。だが、命だけでも助かったのは、竜神様のお蔭かも知れないよ」
「夜も明けて風も少し止んだ。四方を見渡したところ島影はない。腹が減ってどうしようもなかったので、船底に残った米を取り出し、生米を噛み空腹をしのいだ。しばらく流されているうちに島らしきものが見えたので、そこに近づいた。やはり島だったので、水を確保するため上陸した。船は、波に打たれ岩に当ってぼろぼろで使いものにならなくなっている。そこで船底にあった伝馬船を取り出し水主たちの半分ほどが陸に上がってみるとどうやら無人島らしいことが分かった」
「その時は、がっかりなさったでしょう。修理すれば船は使えるような状態ではなかったのかね」

「本船はほとんど使いものにならず、船に水が入ってきて沈没しそうだった。このまま漂流を続けることは出来ないので船頭の左太夫の決断によって、上陸し様子を見ることになった。手道具や残った品々を伝馬船に積み込み島に運び上げたのは、陽の傾く頃だった。それがこの年まで島を抜け出せないでいることになってしまうなんて、その時には誰も思いはしなかった」
「そうですかい。するとあっしらが、遭難した時と状況はよく似ていなさる。それからどうなされた」
「まず寝るところを探さなければならない。だが、木陰さえ見つからなかった。全員ねぐらを求めて海岸に張り出した岩山を登るうちに、仲間の一人が山の中ほどに大きな洞穴を見付けた。それより二十間ほど離れたところに、もう一つ見つかったので、十二人が分散してこの洞窟を仮寝の場所とした。洞窟は、ご覧の通りわりと広く立って歩けるほどで、まずは雨露をしのげると一同ほっと胸をなでおろし、これで助かったと思った。洞窟には、以前人が住んでいたらしい痕跡が残っていて、黒く炭のようになった木くずがあった。そこを少し掘って船から運んだ釜などを掛け、煮炊きの場所と決め、飯米の残りや道具類を持ちこんだ。その夜は折悪しくまた風が吹いて、本船も伝馬船も壊れて全く使い物にならなくなってしまった」
「その後食い物や水はどうやって確保したのかね」
「食いものは魚鳥を捕え、野菜の代わりに磯草を取って食べていたが、飲み水がない。そこで本船から運び出した桶を岩山の窪みにおいて雨水を溜め、何とか渇きをいやしていた。その後材木が流れ着いたので、それを使って大きな桶を作り、雨水を溜め飲料水とした。幸いこの島は雨が多く、飲料に使う分位は雨水だけで十分事足りる」
「ところで、今年の干支は何かご存知ですかい。今日は、元文四年未の年三月二十九日ですぜ」
「そうかね。この島に漂着して始めは、年を数えていたが、そのうちどうでもよくなり、何の年か忘れていた。未の年であれば、足掛け二十一年この島で暮らしていたことになる」
平三郎たちは長い無人島の暮らしを思い起こし、感慨深げにため息をついた。

二．無数のアホウドリ

「そうそう、こうしてはいられないのだ。実は、宮本船に乗った仲間の十六人が岩礁に乗り上げて、手分けして水を探しているところであった。お前様たちと会ったことを知らせなければならない」
「いやわしどもが友三さんと一緒にその船を訪ね、皆さんにご挨拶したい。そして島の様子と暮らしをこの口で

直接話そうと思う」

「分かり申した。ではご案内しよう」

友三は、平三郎、甚八、伝三郎の三人を案内し、難破船に近づいた。船は相当傷んでいて、船内には浸水した海水が溜まり傾いている。水主たちは全員本船を捨て、伝馬船に乗って上陸したばかりであった。

三人は、友三の紹介により沖船頭の富蔵と十六人の水主たちと挨拶を交わした。

「この島は、水は出ないが雨がよく降るので天水を溜めてある。すぐにでも溜め水を分けてあげることが出来るから、水の心配はない。食い物は、大鳥を捕って食べている。大鳥は島に無数にいて、人間を警戒しないので捕まえやすい」

「そうでしたか。ご苦労なさったようですな。しばらくは、ご厄介かけるが、ここにいさせてくだされ」

三人にそう告げた後、船頭の富蔵は、宮本船の乗組員全員に言い渡した。

「本船は、壊れてしまったことであるし、しばらくは、この島で暮らすことにしよう。順風を待って、この三人の方たちと共に伝馬船で、全員帰国することにしたい」

伝馬船は、島を出るためには、どうしても必要な舟であったので、陸に上げ大切に保管された。

こうして島は二十人になり、十人ずつに分かれ、それぞれ二つの洞窟に分宿することになった。

富蔵は、先住者三人に、何故この島で二十一年間も生き長らえることが出来たのか、その暮らしぶりを参考にし、長期滞在にも備えようとした。

「よくまあお前様方は、二十一年間もこの無人島で生きていられたものだ。どんな暮らしぶりであったか、教えて下さらんか。これからはしばらくこの島で暮らすことになるかもしれないので、その心得にしたい」

平三郎は、この島で生き抜いて来た苦労話を誰かに話したくてうずうずしていた時であったので、よく聞いてくれたとばかり話し始めた。

「わしらが、漂着したいきさつは、すでに友三さんに話した通りだ。島に漂着したばかりは、常に食いものを求めて探し回ったが、大鳥は、捕まえることがたやすく、卵も取りやすいので、食物には困らないことが分かった。また、釘をまげて針にし、餌には大鳥の肉を付けると魚が掛かって来た。青物には不足したが、その代り海藻を食べた。だから、最初から食物でもめることはなく、十二人全員が数年間は、無事で暮らすことが出来た」

「鳥肉と海藻と魚ばかりでは、体がおかしくはならなかったかね。米や麦などの穀物のない暮らしは考えられないが、さぞつらかったろう」

富蔵は、江戸育ちであったことから、飯をたらふく食うことが、何よりの楽しみであったのである。

「一年程経った頃、暴風雨の強い日があった。翌日嵐が

収まった後、海辺に出てみると乗捨船が流れ着いていた。船は、磯に打ちつけられ、壊れていて人の気配はない。近寄ってみると、岩の間に米俵が打ち寄せられている。六十俵ほどあったが、そのうちの半分ほど強い波が沖へ持ち去ってしまった。残った三十俵を急いでやっと陸に揚げた。まさに天佑としか言いようがなかった」

「それで、その米は、白米ですぐ食べられたのかね」

「思いがけなく米が手に入ったが、それを十二人で食えば一年で食い尽くしてしまう。万一に備えて三俵ほど保存することにして、除けておいたところ、そのうちの一俵が籾米であったのでそれを蒔き、皆で稲を育てることにした。幸い岩の間のやや窪んだ所に二坪ほどの土気があったので、前に拾っておいた船板の大釘を鳶のようにし、それを鍬代わりにして土を掘り、芽の出しかかっている籾を蒔いてみた。すると稲は育ち翌年二俵取り入れが出来た。二俵がその翌年には三俵となりさらに次の年には四俵となったが、土地が狭く蒔くところも限りがあるので、毎日米を食べるほどの収穫は望めなかった。そこで普段は米を食べるのは止め、病人の出た時だけ少しずつ粥を炊き、薬の代わりに食べることにした」

「なかには、米を食べたい余り、仮病を使って食べようとする者もいなかったかね」

「それはなかった。米を食べたいと思うことは、皆同じであったが、約束事を破るようなことがあれば争いが起き、皆で助け合って生きることが出来なくなってしまう。そのことは誰も分かっていた」

「大鳥とさっきから言っていなさるが何と言う鳥で、その大きさはどれ位かね。また、この島の大きさはどれほどあるとお思いか。草木はほとんど見かけないが、薪などのようにして、調達しなさったね」

「鳥は、わしらの故郷の遠州荒井では、見かけない鳥で、羽は白く形は白鳥に似ている。嘴は鋭く足も長く風切羽を伸ばすと五、六尺もある何ともへんてこな鳥だ。名は、知らないのでわしたちは大鳥と呼んでいる。この鳥は近寄っても少しも人間を怖れない。それ故先程申した釘の鳶口でたやすく叩き殺すことが出来る。ところが、夏の頃には大鳥は二、三カ月どこかに渡ってしまうのでその間は、鳥の肉にはありつけず、主に魚を捕って食べていた。シマガレイ、あこう、藻の間に棲む見たこともない魚がたくさん獲れる。これを潮で煮たり干乾ししたりして食べる。島の大きさは良く分からないが、一里四方ほどの丸い形をした島だ。海から突き出たような険阻な山になっていて一番高い所で、おおよそ三町ほどあると思われる。山の中ほどより下は、桑とぐみの木が生えている。小屋などを作れるほどの大きな木ではないが、かやの類、萩などの草があるので、焚物には困らない。また、かやは刈り取って洞窟の中に敷物として使っている」

「鳥は、アホウドリと言う名の鳥ではなかろうか。わし

は、その鳥をどこかで見たような気がする」
物知りの富蔵は、大鳥をアホウドリだと断じた。

アホウドリは伊豆八丈町に管理されている鳥島に生息している。乱獲により一時絶滅が心配されたが、気象庁鳥島観測所職員により、保護プロジェクトが行われ、一九九四年には、一五九組のつがいが確認されている。江戸中期のこの船乗りたちが漂流したころには、一千万羽を超える数が生息していたものと推測される。平三郎や富蔵が漂着した島は、まぎれもなく東京から五八二キロ南に位置するほぼ円形に近い二重式成層火山島の鳥島であった。

「大鳥は、餌には何を食べている。そんなにたくさんこの島には、餌になるものがあるのですかい」
富蔵は岩石だらけの島の様子を見ながら、平三郎に聞いた。
「蟹を餌にしているようだ。ずいぶん大きな蟹で色は柿色、大きさは蹴鞠ほどある。磯部の岩間に住んでいる。わしたちもこれを捕えて食ってみたが、少し苦みがあって、肉はあまりなく、食べるところもあんまりなかった。それ故、その後もあまり食べなかった」
「大鳥の他に、獣らしきものは見かけなかったかね」
「雁や鴨の類はとんと見かけなかった。だが、総体鼠色の羽をした頭が赤く、尾の黒い鳶などよりよほど大きな鳥は見かけた。この鳥が蟹を食べているところを見たことはあるが、何という名前の鳥か知らない。恐らく渡り鳥であろうと思う。その他、小鳥はかや、ぐみ、桑の木の木立の中にいるのを見かけたことはあるが、何という名の鳥だか、分からない。春から夏にかけては、鶯が鳴く。よく耳を澄まし聞いてみると、聞きなれぬ小鳥の声も聞こえるが、どんな鳥か、いまだに姿も見ていないのでわからない。獣は一向に見かけない。天気が良く波が静かな時は、島の二、三町はるか沖合の岩にあしかのような獣を見たことはある。また、獺（かわうそ）のような毛色をした大きな獣が岩の上に寝転んでいるところも見た」
平三郎はこれまでこの島で見たままを堰を切ったように語った。

（つづく）

（司馬雑感　三十八）

千葉一族と山内千代

山田嘉久

一　千葉氏の誕生

中世、房総の地に君臨した千葉氏は桓武天皇の血統を引く関東の名族で、天皇の曾孫である高望王を鼻祖とする武士団である。

高望王は寛平元年（八八九）、臣下に下り平姓を賜り、上総介に任ぜられ関東に下向した。（桓武平家）

桓武平家系系図

高望王―国香―貞盛
　　良兼
　　良将―**将門**
　　良文―忠頼―将恒
　　　　　　忠常

しかし高望の孫平将門とその叔父平国香ら関東平家一族との争いは、やがて関東一円に広がる古代最大の叛乱に発展した。「将門の乱」（九三五―九四〇）である。

将門の乱は一口にいえば、房総など東国が朝廷の支配から抜け出そうとする乱であった。後に千葉氏など東国武士は鎌倉に源氏の幕府を作ることで、将門が果たせなかった東国の自立を成功させることになる。

現在でも関東各地に残っている「将門伝説」も、その後の関東武者の様々の思いが込められているものと解釈すべきであろう。

一方、高望の子、平良文は「将門の乱」など関東の争乱を通じて、下総の相馬郷を所領としていたが、房総半島においては万寿四年（一〇二七）から約五年間にわたって、またまた大反乱が勃発した。将門の乱から九〇年が経っていた。首謀者は良文の孫、平忠常（九六七？―一〇三一）である。

忠常は下総国千葉郡にて千葉小次郎と称したとされるが不明である。忠常は上総介、武蔵押領使などを歴任した在庁の官人であったが、国司との課税の収納をめぐる争いが最大の原因とされている。

忠常は安房国の国府を襲い、安房守平維忠を焼き殺すと云う事件を起こした。（「平忠常の乱」）

朝廷から派遣された源頼信（その子孫が源頼朝）によって平定されたが、忠常の子孫は罪を許され房総各地に土着した。これを「両総平氏」と呼ぶ。

両総平氏系図

平良文―忠頼―忠常（下総権介、上総介）―（略）

常時（上総介）―常澄（権介）―**広常**（上総権介）

常兼―常重（下総権介）―**常胤**（下総権介、千葉介）

その後、両総平氏は前九年の役、後三年の役に従事して功を立て大きく発展した。そして上総、下総両国にわたって強力な武士団を形成してゆくのである。

平安末期には、その一部は千葉に移住して千葉氏を名乗った。

当初は忠常の築いた大椎城（現千葉市緑区土気）を居城としたが、忠常の曾孫千葉常重が亥鼻城（現千葉市中央区亥鼻）に移った。大治元年（一一二六）のことである。

その後、一五世期末には従来の亥鼻城よりも内陸の本佐倉に城を築いて本拠地を移した。佐倉は印旛沼の水路で古河と繋がっているので、この移城は古河公方との関係を深める意味もあったのであろう。

以後、九代にわたって戦国大名千葉氏宗家の本拠地となったが、天正十八年（一五九〇）、秀吉の小田原攻めによって千葉氏が滅びるまで約五百年間にわたって、北総地区に君臨することになる。

なお改易後の千葉氏に代わって、その後、本佐倉城に入ったのは後に江戸幕府老中、大老となる土井利勝である。その後、利勝は佐倉城に移転したので、本佐倉城は一国一城制により廃城となった。

なお、「千葉」という地名は、千葉氏が居住してから名付けられたと誤解される向きがあるが、これは間違いで遠く「万葉集」の防人の歌にも「千葉の野―」として登場していることをみると、千葉氏はその地名を名乗ったにすぎない。

二　「中興の祖」千葉常胤

下総千葉に移住してからの千葉氏は、下総国司や源義朝らから侵略を受け、次第に平家方からも圧迫を受けていた。

一方、上総において形成した武士団は源義朝と組んで下総に進出を企て、房総随一の豪族に成長していた。（上総介）

このように千葉氏が下総所領の経営に苦しんでいる頃、平治の乱で敗れ、伊豆の蛭ケ小島に流されていた義朝の子頼朝は治承四年〈一一八〇〉に決起したものの、

石橋山の戦いに敗れ海路安房に逃れた。

最初に真っ先に馳せ参じたのは西安房の豪族安西氏だったが、その他の安房の豪族（丸、東条、神余など）もこれに倣ったものの、東安房の豪族長狭氏のみ反抗を試みた。そのため頼朝は一時、太平洋上の小島仁衛門島に身を潜めたが、やがて再上陸して長狭氏を「一戦場の戦い」で破った。

その前、頼朝は最初の上陸の際、房総随一の豪族上総介広常とナンバー2の千葉介常胤に使いを送って参上を命じた。常胤はその場で参上を回答し、兵三百騎を率いて下総国府で頼朝と参会した。

一方、広常（常胤とはまた従兄弟同士）は「常胤と談合の上参上する」と「洞ヶ峠」を決め込み、頼朝の心証を悪くした。広常は常胤に遅れること三日、二万騎の大軍をもって参上したものの、頼朝を迎える際にも下馬せず超然と馬上にあった非礼もあって、程なく頼朝によって暗殺されている。

猜疑心の強い頼朝であったが、常胤に対しては例外的に接したらしく、部下には常に「常胤を見習え」が口癖だったという。頼朝は成功後も常胤を最も重く遇した。

その結果、常胤は上総、下総を中心に北は陸奥一帯、南は薩摩に至る全国二〇数か所といわれる広大な所領を獲得して、千葉氏は幕府の中でも屈指の御家人に成長していった。

「街道をゆく」（三浦半島記）などで「真の日本史は頼朝から始まる」「頼朝の出現によって日本史は第一級の歴史になった」さらには「頼朝が出現しなかったなら、日本はとっくに植民地になっていた」などと頼朝を最大限に評価する司馬だが、本音はこの時代に出現した常胤など坂東武者の「名こそ惜しけれ」の精神に惹かれているからであろう。

三　千葉六党

千葉常胤には七人の男子があったが、うち一人は僧となったため残り六名はそれぞれ房総各地のほか、全国各地にも分領があった。世に「千葉六党」と云われる

常胤は所領のうち長男胤正には千葉氏本拠の千葉庄のほか、上総広常の所領を伝授させた。そのため胤正は千葉介および上総介を称した。

また頼朝の弟範頼が九州に出陣した時、常胤がこれに従軍したことから、北九州（小城）に領地を得て長男胤正がこれを継承した。（九州千葉氏）

今でも佐賀県小城市には胤正が築いたとされる千葉城跡がある。

その後、元寇の役で九州防衛に当たったのは九州千葉氏のほか下総から派遣された千葉一族だったが、彼らも多くはそのまま土着した。

次男師胤は常胤の所領のうち下総の相馬御厨を継承し

た。また奥州合戦の恩賞として陸奥国相馬郡（現福島県相馬市）や高城保（現宮城県松島町）を獲得して奥州相馬氏を名乗った。

三男胤盛は下総武石郷のほか陸奥国旦理（わたり）など獲得した。武石三郎と称したが、奥州旦理氏の祖でもある。

四男胤信は下総国大須賀郷などのほか陸奥国岩城郡や甲斐国井上荘などを所領して、大須賀四郎と称した。

五男胤通は下総国分郷（現市川市）のほか奥州、遠江、三河などを所領して国分五郎と称した。

このように兄弟によって東北地方に多くの領地を有したが、一般には「奥州千葉氏」と総称されている。しかしその後の秀吉による奥州仕置や戦乱により滅亡するのだが、その際、多数の資料や系譜が消滅したことにより、奥州千葉氏の一族解明をややっこしくしている遠因ともなっている。

しかし現在でも東北に千葉姓が多いのも事実だし、幕末の剣豪千葉周作も彼らの子孫であるとされている。

そして常胤の六男であった胤頼は下総国木内庄（現東庄町）などを所領して木内六郎と称した。のちの「東氏（とうし）」の祖である。

胤頼は歌の道にもすぐれ、治承四年（一一八〇）、千葉常胤一族が源頼朝をその橋のたもとに出迎えた時、頼朝がこの橋の名を尋ねると胤頼が

「見えかくれ八重の潮路を待つ橋や渡りもあえず帰る舟人」と答えたという伝説が残っている。現在でもこの地（千葉市中央区港町）には「君待橋之碑」が建っている。

その後、東氏は胤頼の孫の胤行が「承久の変」で功績を立て、美濃国郡上郡山田庄を獲得した。

千葉氏系図

高望王―良文―【略】―忠常―（略）―常重―**常胤**
- 胤正（太郎、千葉介）
- 師常（相馬二郎）
- 胤盛（武石三郎）
- 胤信（大須賀四郎）
- 胤通（国分五郎）
- **胤頼**（東六郎大夫）
- 日胤（律静房）

四　郡上八幡の領主

美濃東氏系図

千葉常胤―**胤頼**―重胤―胤行―行氏―時常―（略）
- 氏村―常顕
- 益之―**常縁**

この東胤頼の子孫には、胤頼の血筋を引いて文学的才能を持って者が多く、子の重胤は三代将軍実朝の近侍で歌の師でもあった。

前述の通り重胤の子胤行が「承久の乱」の功績で美濃国郡上郡山田庄を獲得したが、子の行氏の代に本拠を美濃に移した。以後十一代、約三百四十年間にわたり郡上の領主であり続けた。

行氏の子時常も和歌に秀でており、その和歌は「続千載和歌集」に載せられていると云う。

また時常の没後、家督を継承したのは胤行の子氏村、更に子常顕であったが、常顕の和歌も「新拾遺集」や「新古今集」などに載せられている。

後世、歌人として名高い東常縁（一四〇一―九四）はこの家系の末期近くに位置している。（郡上東氏九代目）

足利幕府の奉公衆（江戸時代の旗本に当たる）として京に参勤していたが、「応仁の乱」に関連して同族である千葉氏の内紛が起こるとその鎮圧を幕府から命じられた。

そこで郡上の兵を率いて下総に下向していくつかの合戦に勝った。歌人ながら、武将としての力量も持ち合わせていた。

この頃、千葉宗家では戦乱によって荒れた千葉城を離れ新たに印旛沼南岸の本佐倉に本拠地を移したことは、冒頭に記した通りである。

一方、東常縁が郡上を留守にしている間に郡上の城も領地も美濃の武将に攻め奪われてしまった。応仁二年（一四六八）のことである。

奪った武将は斉藤妙椿という。

因みに後に美濃一国を平定した斉藤道三はその後裔といわれている。（司馬遼太郎はその道三を主人公とした長篇「国盗り物語」を書いた。）

斉藤妙椿もかなりの教養人であったらしく、歌にも長じ和漢の学問にも通じていた。領地を奪われて歎く常縁に対して「歌を詠んで送ってくださるならば、所領をもとのようにお返ししましょう」と仲介者に云ったという。これを関東で聞いた常縁は早速、歌十首をつらねて妙椿に送った。受け取った妙椿は返歌とともに約束通り城も領地も返した。

司馬遼太郎は「街道をゆく」（郡上街道）のなかで〈歌十首で城と領地をとりもどしたというのは、それを原稿料だとすれば東常縁は古今でもっとも高い稿料をと

五　山内千代の出自

しかし東氏も常縁より三代目で亡んだ。

常縁の没後、子の頼数が家督を継承した。頼数は宮内少輔として将軍足利義政の弟義視に仕えたが、戦国時代の東氏は次第に衰退してゆく。

頼数の後、従兄弟の元胤が継ぐが、美濃国守護職土岐氏によって攻撃を受け、また元胤の子常慶の代の天文九年（一五四〇）には越前の戦国大名朝倉義景によって侵略された。この時は一族の家老遠藤胤縁、盛数兄弟の働きで朝倉軍を撃退した。

しかし三代目の常堯が上記の遠藤胤縁を殺したことから遠藤氏の怨みを買い、永禄二年（一五五九）、胤縁の弟盛数との合戦となった。盛数は東常堯を殺害して以後、遠藤氏が領主となった。

その後の遠藤氏は織田信長が美濃を併合すると織田氏に従い、豊臣氏を経て「関ヶ原の戦い」では徳川側につき近江国三上に移封となり幕末まで続いている。

常縁―頼数―元胤
　　└常慶―常堯
　　（遠藤胤縁）
（弟　盛数）―（遠藤慶隆）
　　（妹千代
　　母は東常慶の娘）

ったことになる〉と書いている。

また、その後で〈室町期になって、常縁や妙椿という在郷の武家のあいだにまで文化が浸透し、自分の行動の基準を、利害よりときには文化意識で決しようという例があらわれてくる。その好例といっていい〉とも記している。

室町期は日本歴史の中で最も文化意識の高かった時代だったといえる。武士といえども室町期には、その後の元亀天正の戦国時代の荒々しさだけでなく教養人としての典雅さを持ち合わせていたことが分かる。

常縁も父益之について京都歌壇に出入れし、勅撰集「新続古今集」に入選している。

〈今古でもっとも高い稿料をとった〉と司馬に云わしめた常縁は中世から近世にかけては和歌の世界では相当な尊敬を集めていたらしい。

一方、近世の国学者本居宣長からは「後世を誤る姦賊、この常縁に極まれり」と罵倒されたというが、逆にいえば、それだけ常縁の存在が大きかった証明であろう。

このことは、近代の短歌革命に取り組んだ正岡子規が「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」（歌よみに与ふる書）と紀貫之と「古今集」を批判したのによく似ている。

ところで戦国の武将（土佐藩初代藩主）山内一豊の正室であり「内助の功」で有名な千代（一五五七―一六一七）は郡上八幡城主遠藤盛数の娘であることが、最近有力となった。

これは郡上市の慈恩寺が所蔵する郡上八幡城主遠藤氏の系図に東常縁の子孫である遠藤盛数の娘が山内一豊室（千代）であるとの記載があったことが明らかになったからである。

父が遠藤盛数とすれば母は東常慶の娘である。また兄は後の八幡城主となる遠藤慶隆となる。

そのため山内家には「東常縁筆古今集」はじめ、東家から伝わる貴重な古今集がいくつもあったと云われ、これらは千代（後の見性院）が常に愛用した和歌集でもあった。死去に当たっては養子の土佐藩主山内忠義に形見として渡したとも云われる。

現在では八幡城のあった山麓には、山内一豊と妻千代の像が建っている。また近くの歴史資料館では千代の肖像画を見ることができる。

しかし千代の出自が遠藤氏と関係があることが分かったのは最近のこと（昭和四十年代後半）であり、それまでは諸説があった。

たとえば昭和三十年代に千代を主人公として書かれた司馬遼太郎の小説「功名が辻」では千代は浅井家の家来若宮喜助の一人娘となっている。彼女が四歳のとき、父喜助は戦没し、実母の法秀尼に連れられて美濃三人衆のひとつ不破家に身を寄せ、それから一豊のもとに嫁いできた設定になっている。

「功名が辻」は司馬が戦国時代や幕末など動乱の世の漢（おとこ）を中心にした物語を多く書いたのに対して、司馬には珍しく女性を主人公としている。

戦国時代、極度の男社会で夫を支え通すという気丈なヒロインを描き、他の司馬作品とはひと味違った異色作となっている。

そのため逆に人気度も高く、ＮＨＫ大河ドラマを始め数多くドラマ化、舞台化されてきている。

「内助の功」の典型としての山内千代（見性院）の出自については世の関心も深い。そのためか司馬担当記者の一人は、司馬に「功名が辻」を書き直すことを質したそうだが、当人は「私の書いたのはあくまで小説ですから」と笑い流したというエピソードが残っている。

それよりも私は、千葉氏と山内千代との関係をもう少し研究してくれる郷土史家が現れないものかと密かに期待している。

関東管領始末記⑱

管領憲政関東落ち

千坂精一

一

山内憲政にとって河越城奪還の失敗は大打撃だった。

北条氏康の小田原勢に惨敗したことによって唯一頼みにした古河公方足利晴氏に離叛されてしまい、同族扇谷家も当主朝定が戦死し、四家に分かれて鎌倉に君臨した同族もついに宗家の山内家だけになってしまった。

その山内家もいまや関東管領とは名ばかりで、関東北隅の上野國（群馬県）へ追い遣られて衰頽した。

憲政が逼塞している平井城は、永享十年（一四三八）のむかし公方足利持氏との争いを避けようとする関東管領上杉憲實のために上野守護代長尾の一族總社（前橋市）の長尾忠房が下を鮎川が流れる断崖上の要害を利用して築いた居館で、永正七年（一五一〇）越後國長森原で謙信の父越後守護代長尾爲景に討たれた関東管領上杉顯定によって應仁元年（一四六七）大掛かりに改修されて以後は、実質的に関東管領府になっていたところである。

そして、居館の西南十町（約一キロ）ほどのところにある小高い丘陵の山頂に要害堅固な金山城（藤岡市下日野金井）を築いて北條軍への備えを固めた。

いま訪ねる平井の里は穏やかな田園風景のなかにあるが、当時は京と鎌倉を結ぶ東山道が碓氷峠（現入山峠）から上野國に入ってきていて、國府（前橋市元総社町）から寄居（埼玉県大里郡寄居町）を経て武藏國府（東京都府中市）に至る街道の要衝であり、利根川水運の倉賀野（高崎市倉賀野町）にも近く賑わいをみせていた。

街道の要衝に位置しているということは領内見回りには都合いいが、他国から攻め込まれ易い弱点があった。

事実、憲政が河越を撤退したことで寄居の重臣藤田邦房も鉢形城を明け渡していたので、そこに北條軍が集結すれば神流川を楯にするよりほかなく緊張がつづいた。

迎え撃つには兵力の増強が急務であった。

憲政の寵臣上原兵庫介と菅野大膳亮は、河越の敗戦で近隣の豪族たちに侮られた屈辱を挽回せねばと焦った。

寵臣とは主君が気に入っている家臣のことをいう。

主君に気に入られるには、なにごとも御無理御尤もと受け入れて決して不快な思いをさせないことである。

つまり媚び諂う佞臣となんらかわりはないのだ。

だが家中の嫌われ者も、主君には「愛い奴」なのだ。

その上原と菅野は憲政の機嫌取りに腐心していた。

そこへ偶々信濃國佐久郡志賀城（佐久市志賀）主の笠原清繁から武田晴信に攻められ救援を求めてきた。

すでに大井貞清の内山城（佐久市内山）は陥ちていた。

上原と菅野は、憲政を名誉挽回の好機と煽動した。

二人に唆された憲政は、汚名挽回と救援を快諾した。

それを伝え聞いた箕輪城（高崎市箕郷町西明屋）主長野信濃守業正が血相を変えて駆けつけてきて、

「武田攻めをなされるは道理の通らぬ企てにござりまする。昨年の河越での大敗はときの運ではなくつまりは軍法のお心得薄きがゆえによるもの。然れば当家の宿敵は氏康一人に定めてこれを退治する謀を巡らすのが急務でござりまするに、それをさておきなにゆえ意趣遺恨なき武田を攻めようと思し召されまするか。毛を吹いて疵を求むるようなされようは業正同意いたし兼ねまする」

そう諫めたが、失権回復を焦る憲政は菅野や上原の甘言に乗せられて氏康に破れた無念を晴らす好機と勇み立っているところへ水を差されたことが面白くなく、せっかくの業正の諫言を素直に聴き入れようとはしなかった。

河越の惨敗から一年あまり経った天文十六年（一五四七）八月、憲政から救援を命ぜられた金井秀景は三千の兵を率いて碓氷峠を越えると浅間山南麓の信濃國佐久郡小田井原（佐久市小田井）へ進出した。

だが、版図拡大を謀って勇躍壮途に就いた武田軍と、それを阻止しようとする上杉軍とではじめから意気込みの差が歴然としていて、波に乗る板垣信方を先鋒とする甘利虎康、横田高松、多田滿頼ら武田軍の猛攻に遭って上杉軍は撃退させるどころか支え切れず、たちまち碓氷峠へ追い遣られて平井へ敗走してきてしまった。

その後、笠原清繁も武田軍に志賀城を陥とされた。

攻め掛かるのと受け身に立つのとではおのずから勢いが違うし、昇る朝日と沈む夕日もまた然りである。

河越につづくこの爲体で上杉憲政の威信は地に墜ち、武藏や上野の諸将は次第に管領家から離叛していった。

その年の暮れに氏康は武藏國の完全掌握を図り病死した太田資時のあとを継いだ弟資正（三樂齋）の岩槻城を囲んだが、資正は江戸、河越、松山の諸城を喪い孤立化しているにもかかわらず孤軍奮闘して一箇月の籠城戦に耐え抜き、ついに氏康を諦めさせて和睦に持ち込んだ。

岩槻城は放っておいても差し支えないと踏んだ氏康は、河越戦で攻略した松山城のほうを修築して拠点にすることとし、着々と憲政の領国上野侵攻の準備を固めた。

そして河越戦から五年後の天文二十年（一五五一）三月十日、氏康は北條綱成父子らを先手とする三万余の軍勢を率いて小田原を進発し、上杉憲政追討に向かった。

北條軍動くの報に接した憲政は慌てふためき、太田美濃守資正、長野信濃守業正、曽我兵庫介祐俊、金井小源太秀景らの重臣に命じて安中、小幡、白倉、沼田、鹿橋、新田、赤井、佐野、長尾、桐生、澁河、大胡、山上、後閑、長根、和田、大熊等上野國の諸将を動員すると武藏、上野國境の神流川に布陣して迎撃の準備を固めた。

さきに布陣して攻め寄せてくる敵軍を待つということは、先手を打てる余裕があるので有利には違いない。

神流川はまえにも触れたが武藏と上野の国境を流れている川で、具体的には上里町（埼玉県児玉郡）と藤岡市（群馬県）の境を流れ下って利根川に注いでいるのだ。

JR高崎線に乗ると東京都と埼玉県の境を流れる荒川を渡ったあとは川らしい川はなく、神保原駅を過ぎて新町駅にいたるあいだの県境に神流川は流れているのだ。

平井城のある西平井の東に位置する神流川に出て河原を降り利根川との合流点まで歩いてみたが、三万の北條軍を相手に合戦したというほど広い河原はなかった。

どうも鎌倉・室町時代の戦記物は軍勢の数が誇張されていて信用できない。大軍と読み替えておくのがいい。

それはさておき――。

やがて到着した北條軍と神流川を挟んで対峙した。

戦端が開かれたのは三月十日の未明であった。

殲滅を焦る北條軍の仕掛けで火蓋が切られた。

緒戦は地の利を得ている上州勢の上杉軍が有利に展開したので、手古摺った北條軍は後退を余儀なくされた。

これをみた氏康がみずから陣頭に立って、

「汚なし。引くな、退くな」

そう叫んで士気を鼓舞すると、百戦錬磨の氏康の怒号をきいてその激励に奮い立った北條軍は劣勢を盛り返して上杉軍を攻め立てたので、形勢はたちまち逆転した。

受け身に回った上杉軍は、陣容を立て直す遑もなく総崩れになり、平井に退くと金山城を固めて籠城した。

北條軍は手分けして諸城の攻撃にとりかかったが容易に陥ちなかったので、攻め倦ねた氏康はついに攻城を諦めて兵を纏めると小田原へ引き揚げていったのである。

このとき氏康は、死者や手負いの者が多く出ているうえに遠征で疲労の濃い将兵たちをこれ以上敵地に長陣させては不利と判断して他日を期したのであるが、管領家の菅野大膳亮や上原兵庫助などは北條軍はわれらを攻め倦んで撤退したのだと思い込んで氏康を見縊っていた。

だから菅野と上原は、

「ただちに松山城をせめて武藏國を取り返しましょう」

そう進言して憲政を煽動した。

だが、防衛戦に協力した諸将はみな北條軍の強さに手古摺ったので、菅野や上原に同調する者はいなかった。

その年の秋――。

側近の曽我兵庫介祐俊が白井城（渋川市白井）主長尾一聲齋からの急使を受けて、主君憲政に報らせた。

一聲齋とは左京亮景盛が薙髪法体しての号で、代々上野守護山内上杉家の守護代をつとめる家格であった。

憲政は曽我祐俊からの報告を聴くと、すがさず、

「なに、また北條か武田が攻めてくるというのか」

そう性急にきき返した。

「しかとは存じませぬが、ご重臣がたも集めよとのご指示でござりますれば、大事の出来と思われまする」

長尾氏の白井城は高崎市の先渋川市の北にあって、利根川との合流点に近い吾妻川に面した断崖上にあった。

話は逸れるが――。

むかし取材したときはまだ渋川市に合併されるまえで北群馬郡子持村といった。国道17号線となった沼田街道を北上して渋川の市内を抜け吾妻川を渡ってすぐの信号を右折して村へ入り、田畑の広がる畦道を進んだ奥にこんもりした森があって、そのなかが白井城跡であった。

そこには〈白井城跡〉と〈標高二〇六・三メートル〉と書いた二つの白い標識がぽつんと立っていて、土塁に使ったらしい大きな岩が二つ三つあるだけであった。

夏だったので森のなかを歩きまわって蘇蚊に刺されたことのほうが印象づよく、いまだに覚えている。

白井についてはそんな程度の記憶だったので、こんどあらためて訪ねてみてあまりの様変わりにおどろいた。

国道17号線脇に背の高い石造りの〈常夜灯〉が立っていて、その土台の腰に大きく〈白井宿〉と彫ってあり、江戸時代の白井宿土蔵造りの家並みが復元されていた。

白井城の城下町として繁栄したこの白井宿にこんど大きな〈こもち道の駅〉ができていて、そこで休憩した。

天麩羅蕎麦で昼食をすませてから白井城跡へ上ったがきれいに整備されていて、〈白井城跡〉の標識は〈白井城趾〉に変わり、標高を示す標識はなかったが本丸の周囲をめぐらした高土居、苔生した石垣や〈枡形門〉などの位置表示をした石杭、堀跡などがはっきりしていて、長尾氏時代の白井城を彷彿させてくれた。

横道へ逸れて長くなった。話をもとにもどそう。

憲政が重臣たちを集めてから待つこと久しく、苛立つころになってようやく白井から長尾一聲齋が到着した。

大広間へ入ってきた一聲齋は二人の供を伴れていた。
本間近江と猪股左近といい、一聲齋が小田原へ潜入させておいた間者だということであった。
二人が報告したところによると、ちかごろ氏康は再度平井攻めを目論んで諸将に出陣の触れをしたという。
それをきくと、一座に動揺がひろがっていった。
菅野と上原は、
「氏康が攻めてくるとあってはもはや一刻の猶予もなりませぬ。ただちに早馬を仕立てて檄を飛ばしましょう」
そう進言して憲政の同意を得ると飛び出していった。
だが、大半の諸将は再三の督促にも応じなかった。
彼等はみなさきの神流川の合戦での北條軍の強さを沁々感じていて、抵抗しても勝てぬと踏んでいた。
管領に加担して敗れれば、氏康は所領はおろか生命までも奪うであろうから、元も子もなくなってしまう。
万にひとつ勝ったところで、恩賞に与れるわけではないから喪ったものは丸損で、どっちにしても益がないなら触らぬ神に祟りなしと傍観するに越したことはなく、ここは知らぬ顔の半兵衛を決め込むに如くはない。
そう考えて管領の檄に応じなかったのである。
笛吹けど踊らぬ諸将の心底を知った菅野と上原は、管領家は氏康に斃され滅亡するであろうと判断した。
上野國の諸将が与力してくれなければ、あとは管領家直属の白井城主長尾一聲齋や、岩槻城主太田資正、箕輪城主長野業正、忍城主成田長泰らだけで防戦するほかはなかったが、岩槻城と忍城は寧ろ北條方の河越城や松山城に近かったし、白井城と箕輪城は防衛するには距離的に難があった。
ならば近隣守護に頼るよりほかなかったが、甲斐の武田晴信とは敵対関係にあったし、駿河の今川義元は先年氏康と和睦しているから頼むわけにいかず、となるとあとは常陸の佐竹か越後の長尾しかいなかった。
だが、佐竹は以前当主の義盛が嗣子なくして病死したとき、当時の関東管領山内憲定が遺言だといって二男義憲を強引に養子入りさせたことから以来山入らの同族の怨みを買ってきているので頼れる相手ではなかった。
一聲齋は、同族越後長尾の景虎を推薦したのだが、
「景虎は御家の敵の血筋にあたる者ゆえ、そんなところを頼むのは飛んで火にいる夏の虫同然である」
ことが懸念されて重臣、側近たちは猛反対であった。
まえに触れたが、景虎の父守護代長尾爲景は守護上杉房能とその兄関東管領上杉顯定を討った謀叛人である。
(是非にも上杉の家名は存続させなければならない)
一聲齋は一同を納得させる手段をあれこれ思案した。
そして、いきついたのが平子孫太郎房長であった。
平子家は参議篁の名で百人一首にもある歌人小野篁から出た武藏七党のひとつ横山党の一族で、平子を名告った廣長は源頼朝の御家人になって横濱市の磯子(磯子区)、本牧町、石川町(中区)あたりを支配していた。
いつごろ越後へ入ったのかは定かでないが、南北朝以後上杉氏が越後、上野、伊豆守護になって以来の旧臣で、代々北魚沼郡の稗生城(小千谷市)主になっていた。
(平子なら山内家の旧臣だから信用できるであろう)
そう確信した一聲齋は急ぎ越後へ出向き、平子房長と面談して長尾景虎についての情報を依頼した。
待つこと久しく、平子からの使者がやってきた。
房長からの書状によると、
「長尾景虎は父爲景の非を悔いていて謀叛を赦さず、近隣諸将のあいだでは義侠の人と評判の情に厚い人物」
であるという。
いいことずくめで俄かには信じ難く、なお手蔓を求めて諸方をも探ってみたが、房長の報告に違いなかった。
そこで一聲齋は、ふたたび平子房長を介して長尾景虎の意向を伺ってもらったが、すぐには返事がなかった。
「急がねば間に合わぬ」
一聲齋は気を揉みながら待ちつづけた。
長尾景虎に拒絶されたら万事休すであった。
そんな不安が家中に広まると、家臣たちは動揺しはじめて一人二人と逃走する者が出はじめた。
佞臣菅野と上原も身の危険を感じて弱気になり、ついに主家を捨て夜陰に紛れて密かに逃亡してしまった。

三

平子房長からの返事を待ち侘びて、憲政はじめ重臣や側近たちが焦立っているところへようやく使者がきた。
使者は、房長からの書状のほかに長尾景虎から房長に宛てた書状も持参していた。房長の心遣いであった。
景虎の書状には、
「お迎えいたしてしかとお護り申し上げる」
旨が書いてあった。
一聲齋は肩の荷を下ろしてほっとした。
だが朗報ではあっても叛服常無しの世であれば長尾にも平子にも全幅の信頼を寄せるわけにはいかなかった。
そうかといって氏康に勝ち目のない戦いを強いられるよりは越後への逃避行のほうが一縷の望みがあった。
一聲齋は、あれこれ思案したすえに、
(人事は尽くした。あとは天命を待つ)
より仕方ないと決断した。
だから憲政には一抹の不安は噯気にも出さなかった。
大広間で評議が開かれ長尾景虎の意向が伝えられた。
一聲齋からの報告を受けた憲政の、
「予はまだ長尾景虎を見知らぬが、そのほうたちが確かな者と推薦いたすのならばそういたそう。上杉の家名を護ってくれるというのであれば誰であっても構わぬ」
の一言で即座に越後春日山への逃避行が決まった。

このとき憲政の嫡男龍若丸はまだ元服まえの十三歳で、乳母の子妻鹿田新介が傅役をつとめていた。

龍若丸が成人して管領になれば傅役は側近に取り立てられるはずで、そうなれば人も羨む出世ができると新介はその日のくるのを楽しみにこれまで励んできていた。

それがこの体たらくになってしまっては残念で口惜しく、かくなるうえは氏康との衝突を避けて後日を期すよい手段はないものかと思案しているところへ、越後國の長尾景虎が庇護してくれるとの吉報で愁眉をひらいた。

だが憲政の逃避行が知れれば、寝返りを企む国人に狙われるだろうから、あくまでも受けて立つ構えを見せておいて憲政は目立たぬ人数で脱出することになった。

もし少人数で越後國へ入り平子房長や長尾景虎に裏切られれば、それはそれで仕方ないと諦めることにした。

人選は憲政と老臣たちのあいだで密かに進められた。

妻鹿田新介は龍若丸の傅役として一行に加わり、越後へ行くものとばかり思い込んでいた。

ところが憲政に呼び出されて申し渡されたのは、

「新介は奥と龍若丸を常陸太田城の佐竹義昭に届けよ」

であった。

新介は唖然として、わが耳を疑い、

「お方様と龍若丸様を常陸の佐竹へでござりまするか」

そう念を押してみた。

「そうじや。しかと頼んだぞ」

憲政のそれは、妻子の無事を新介に託す願いの籠もったものではなく、抑揚のない冷ややかな口調であった。

(身命を賭して仕えてきた者になんというなされよう)

佐竹が招かれざる客を受け入れてくれるはずはなく、(お方様、龍若丸様と一緒にこの儂も捨てられたのだ)

そう思うと無慈悲な仕打ちに怒りが込み上げてきた。

(たとえ主君であろうとも、裏切った者は敵である)

新介は心に深い傷を負ったが、その悶々とした悩みを他所にして越後への逃避行は着々とすすんでいった。

憲政が平井城を脱出するときの供は目立たぬように側近だけの小人数にして白井城へ行き、そこで長尾一聲齋の家臣五十名を加えて越後へ向かうことに決した。

出立に先立って一聲齋が新介に、

「われらが春日山へ到着いたしたならば、長尾景虎様にお方様と龍若丸様をお迎えしていただくゆえ辛抱せい」

そう声をかけてくれた。

「われらはそれまで、無事でおられましょうや」

新介は不貞腐れた。一聲齋の希望を持たせる発言も新介にはその場限りの慰め言葉にしかきこえなかった。

明けて天文二十一年(一五五二)正月―。

主だった家臣たちが大広間に集められた。

席上三田五郎左衛門が説明に立った。

三田は扇谷家の家老であったが、主家滅亡後は山内家に仕えている沈着冷静で智謀に長けた人格者であった。

三田五郎左衛門の言い回しは反論の余地を与えぬ一方的通告で、淀みなく滔々と捲し立てて座を沈黙させた。

「北條との決戦に際し万一を慮りお屋形様はそれがしと曽我、二階堂、石堂、野邑、小野らが供して白井へお移りいただく。またお方様と龍若丸様は傅役妻鹿田新介が弟長三郎と叔父久里采女正、與左衛門親子とで常陸の佐竹へお届けすることに相成った。われらお役目を終えてすぐ戻るゆえ一同結束してこの平井を死守いたそうぞ」

憲政が越後國へ逃亡して長尾景虎に庇護されようとしていることを知っているのは新介だけであったが、それはつまり、憲政は家名存続のために冷酷にも長年仕えてくれている家臣たちを見殺しにしようとしているのだが、そうとは知らずに命懸けでなお忠節を尽くそうとしている家臣たちが新介には哀れでならなかった。

四

その夜、氏康来攻に脅える憲政は旅仕度を急がせ側近たちに供されて慌ただしく雪のなかを白井へ出立した。

白井城へ到着した憲政一行はそこで一泊すると、すでに待機していた一聲齋率いる五十人の家臣団に護られて翌朝出立し、三国峠にいたって無事上野國を脱出した。

三国峠は清水峠とともに越後山脈をこえて越後と関東を結ぶ重要地点で、上野、信濃、越後三国の境の峠ということで名づけられたのであろうが、ほかに上野赤城大明神、信濃諏訪大明神、越後彌彦大明神の三国一の宮を祀る三社權現が鞍部におかれていることからともいう。

その三国峠を越えると、いよいよ越後國である。

地形は日本海に面して南北に長く、全長六十里(約二四〇キロ)にもおよぶ広域なので、北に向かって上越後(頸城、魚沼地方)、中越後(刈羽、三島、古志、蒲原)、下越後(北蒲原、岩船)に区分されている。

三国峠から入る越後國は人体でいえば脇腹にあたる。

そこは上越後の魚沼地方で名立たる豪雪地帯である。

現在は苗場、赤倉、土樽、湯澤、石打などが軒を連ねていて、さながらスキー場銀座の様相を呈している。

越後國には城資永という豪族が蟠踞していて平氏に与していたが、源氏が興って木曽義仲に斃された。

その義仲が頼朝に斃され平氏も滅亡して鎌倉幕府が成立すると、秩父平氏、三浦・和田氏、佐々木源氏などの御家人たちが地頭職となって入り関東御分國となった。

その後、執権北條泰時の弟朝時の名越家が支配していたが、倒幕した新田義貞の三男義宗の支配に替わった。

ところが、南北朝の争乱になって南朝方の新田義貞と北朝方の足利尊氏の抗争になり、尊氏の命を受けた上杉憲顕が軍勢を率いて攻め入り新田勢を掃討した。

憲顕はその功により尊氏から上田荘(南魚沼郡)を賜

り、関東に通ずる三国峠越えと清水峠越えの分岐点であり魚野川水運の出発点でもある水陸交通の要衝六日町の東方坂戸山に山城を築いて、執事長尾忠景を据えた。

室町幕府が守護制度を布くと、憲顕は越後國と上野國の守護になったので執事の長尾景忠は弟景恒に越後守護代を委せて自身は上野守護代となって白井城へ移った。

越後國にはそんな関わりがあって、これから行く魚沼地方の六日町の里は山内上杉の守護國であると同時に領国でもあり、坂戸城主長尾政景は祖先憲顕が据えた守護代の末裔なので、実家へ帰るような親しみがあった。

憲政の乗馬を通す雪掻きを繰り返しながら三国街道をすすんで、その日の夕刻ようやく六日町に辿り着いた。

坂戸城にはここから春日山城まで憲政を案内する平子房長と家臣団三十名ほどがすでに待機していた。

長尾一聲齋は、同族長尾政景と平子房長にくれぐれも後事を託しておいて、翌朝早く白井へ帰っていった。

安全圏に入った憲政は、緊張が解けてどっと疲れが出たので、しばらく坂戸城に逗留することにした。

そのあいだに平子房長が春日山城に出向いて直接長尾景虎に会い、再度憲政の庇護の確約を取り付けてきた。

(快く迎えてくれるのなら早く春日山へ行きたい)

そう思うと憲政は矢も楯もたまらず出立を急がせた。

政景が景虎と同族なのになぜ平子房長が憲政を送り届けるのか不審に思われる向きもあろうが、一聲齋は平井まで迫っている北條方が密偵を放って探索を入れているだろうし、坂戸の政景は国境の防備を疎かにできぬからそれぞれ不在にしたり手薄にはできなかったのである。

ともあれ憲政一行は雪深いなかを隣接妻有荘(中魚沼郡)十日町を横切って頸城地方に入り、松之山から直峰(上越市安塚区)を経て春日山(上越市)に安着した。

出迎えた二十三歳の青年武将景虎は一行を手厚く迎え入れると、旅装を解いた憲政とあらためて対面した。

憲政が北條氏康に逐われて涙を呑んだ経緯を語ったあとで、上杉家重代の太刀〈天國〉と系図を差し出して、

「当家に代々伝わるこの太刀と系図、それに関東管領職をそなたに譲るからどうか上杉の家名を守って下され」

そう嘆願した。

景虎は恐縮して、

「われらは守護家に仕える家臣でござりますれば臣下が主家を継ぐなど恐れ多いことにて滅相もござりませぬ」

景虎は乱世にあっても下剋上の風潮に眉を顰める保守的な人で、二度までも主君を殺害した爲景の子であることに恐縮して肩身の狭い思いをしていたので、心情的にも受け入れることなどできるはずはなかったのである。

「上杉の家名をお継ぎできる立場ではござりませぬがご安堵召され、景虎いのちに代えても管領様をお匿い申し上げ、北條氏康と対決いたしご領国関東を恢復いたしますればなにとぞご安穏にお過ごし下されますように」

憲政には景虎の申し状がなんとも心地よくひびいた。

生死の境を彷徨い歩いてきた憲政は、ようやくにして安住の地を得ることができて思わず口許が綻んだ。

五

いっぽう妻鹿田新介のほうは、龍若丸と供四人のほかは奥方はじめ女伴れなので仕度に手間どってしまった。

ようやく出立したのは数日後で、降りつづいている雪が大分積もっていて、はじめから歩行は難儀であった。

高崎近くまできたときにはもう夜が明けてきた。

(このぶんでは女伴れで常陸まで行くのは迚も無理だ)

そう判断した新介は、叔父の九里采女正に、

「このぶんではとても常陸へは叶いませぬゆえ龍若丸様はわたくしがお送りいたすことにして、お方様は箕輪の長野様にお匿い願うことにいたしてはいかがでしょう」

「うむ。もっともじゃが、おぬし一人では心許なかろうゆえ、長三郎か與右衛門を同行させてはどうじゃ」

「子供伴れでならばどこかの牢人者と見られましょう」

「それもそうじゃが、大切な御方ゆえ大丈夫かのう」

「そうと決まれば、お互いに急ぎ参りましょうぞ」

箕輪城のある箕郷町は高崎市に隣接していた。

生憎の吹雪だが距離からみて暮れるまでには着ける。

新介は龍若丸を励ましながら常陸太田を目指した。

だが乳母日傘で育った龍若丸は脆弱で歩行が覚束無く、すこし歩くと立ち止まり蹲ってしまうのだった。

新介は苛立ったが、そのたびに主君憲政に打ち砕かれた将来を取り戻すためになんとしても龍若丸を常陸の佐竹義昭に庇護させ、その助勢で氏康を斃して関東を回復し管領に返り咲かせなければならない、と思い直した。

だが常陸太田まで行くには下野國と常陸國を横断して鹿島灘まで出なければならず、かなりの道程であった。

ひ弱な十三歳の少年を励ましつづけ、ときには背負ってやることを繰り返しながら歩きつづけているうちに、新介はいつか将来の夢を無惨に砕いたうえにこんな苦難を課した憲政にあらためて怒りが込み上げてきた。

憲政への不信が昂じてくると、さらに見知らぬ佐竹義昭に対してもまた同様の思いが頭を擡げた。

(果たして佐竹義昭は、龍若丸に同情して素直に受け入れ、仇敵北条氏康征伐に協力してくれるだろうか)

そんな疑念が沸々と湧いてきて、それがやがて、

(ひょっとして義昭は敵対してもいない相手を嗾けて伸るか反るかの賭けに出るより、龍若丸を氏康に差し出して親交を図ろうとするのではないだろうか)

そこまで考えが及ぶとそれがみるみる膨らんでいって、そうなるに違いないと思い込むようになっていった。

そして、新介は、

(たとえお屋形といえども裏切ったからには敵だ。其方

が其方なら此方も此方、眼にもの見せてくれよう）

憲政への無念遣る方ない思いに火がつくと即座に、

（佐竹に横取りされて利用されるくらいなら、儂が龍若丸を直接氏康に差し出してお屋形に仕返ししてやろう）

そう決断した。

それからの新介の行動は早かった。

踵を返すと、一目散に小田原へ急いだ。

途中で北條方に捕らえられてしまっては元も子もなくなるので、目立たぬように用心して裏道を拾い歩いた。

食事は畑仕事に出かけて留守の農家を狙って忍び込み、残り物を漁って飢えを凌いだ。龍若丸も北條方の監視の眼を掻い潜って常陸へ行くのだと承知しているので、真逆北條へ突き出されるとは知らずに飢えに耐えていた。

だから小田原へ着いたときには精も根も尽き果てた。

さいわい北條へ寝返った旧臣たちがいて、二人の身許を証明してくれたので、ようやく丁重な扱いになった。

新介と龍若丸は別々の座敷牢に押し込められた。

それから数日後、龍若丸は氏康の許に呼び出された。

「そなたは上杉憲政殿の嫡男龍若丸に相違ないか」

名指しされた龍若丸は居住まいを正し小声で答えた。

「まだ少年の身で不憫じゃが、そなたが上杉の御曹司とわかったうえは北條の棟梁として赦すわけには参らぬ」

そう言われて龍若丸は、氏康の顔を凝と見詰めた。

「乱世の慣いなれば、生命は貰い受けねばならぬ」

氏康の冷ややかな言葉に龍若丸は呆然となった。

氏康の命を受けた笠原越前守は、龍若丸の身柄をその日のうちに伊豆の修善寺に護送すると、ただちに番侍の神尾治部右衛門に命じて龍若丸の首を刎ねさせた。

神尾治部右衛門は龍若丸を処刑したことを苦に病んで、その後程なくして気が狂れ、死んでしまったという。

その様子を伝え聴いた新介は、

（近々恩賞の沙汰があるに違いない）

そう密かに北叟笑んで、その日を心待ちにした。

だから新介は、呼び出しには心を躍らせて出頭した。

氏康は、そんな新介の心底を見透かしたかのように、

「妻鹿田新介とやら、遠路はるばるこの氏康に上杉憲政の御曹子を差し出しに参ったのはそのほうであるか」

「はっ。左様にござりまする」

新介は平伏したままで、氏康のつぎの言葉を待った。

「そのほうは上杉の家臣であり龍若丸の傅役であろう」

「はっ。それに相違ござりませぬ」

「ならば妻鹿田新介、そのほうは不忠不義の人非人じゃぞ。上杉家恩顧の身なればなんとしても御曹子を匿い、時節を待って再興を図るべきであるにも拘らず、己が身を永らえんがために年端も行かぬ龍若丸を犠牲にいたすとは、人の道に背く所業、氏康断じて赦せぬ。謀叛人は見せしめのため打ち首にいたす」

氏康は語気鋭く、険しい顔貌で新介を睨みつけた。

新介は、氏康の面前で高手小手に縛り上げられた。

そして、見せしめに小田原の大路を引き回された。

観念した新介は、引かれ者の小唄で、

「武運拙く夢破れて刑場の露と消えるが、裏切ったお屋形への報復が叶い、上杉家と心中できて満足じゃ」

そう嘯いた。

新介は山王川河口の東側一色村の松原（小田原市東町）へ連行されて斬罪に処せられ、晒し首にされた。

松の木に止まっていた一羽の鴉が、新介の首を見て、

「かあ」

と一声甲高く啼いた。という。

この年八月、氏康はふたたび平井城を攻めた。

棟梁不在で戦力低下している平井城は、持ち堪えられずに僅か一日で落城してしまった。

氏康は副将格の叔父長綱（幻庵）に精鋭三千の兵を預けて守備を託すと、悠々小田原へ引き揚げた。

（つづく）

漢詩

潮騒錄（八十一）

鯨游海

地中海贊歌8西班牙・巴塞羅那
平成二六年五月

廣大壯麗街路延
聖堂巨像聳蒼天
帝都風格來何處
君不知曾縱覇權

押韻・延 天 權

〈地中海贊歌8西班牙・巴塞羅那〉

広大壮麗なる 街路延び
聖堂巨像なる 蒼天に聳ゆ
帝都の風格 何処より来たるや
君知らざるか 曽って覇権を縦にしたるを

〔注 解〕

聖堂＝ここではガウディの設計で知られ、今なお工事中の巨大な聖家族教会を指す。
貧しい人々の為に聖家族に捧げる教会として一八八二年に着工した。以来百三十一年が経過したが、この日も大空を圧するクレーンが忙しく働いていた。
完成時には十八本となる天に聳える巨大な塔。うち現在八本が完成しているが塔の完工時期は不明という。
日本人では考えられないスケールの長さ、大きさではなかろうか。欧州大陸の歴史ある大国、かつて七つの海を葡萄牙と二分して制覇した強国の底力を見る思いがする。また整然と整備された街衢の立派さは流石だ。
当教会を含めた数々の建築群が世界文化遺産という。
私が今迄見たこともない巨大な像はコロンブス。彼はジェノヴァの人で壮途のスポンサーは西班牙の王だった。
広大な幅の街路は眞っ直ぐにどこ迄も延び、聖堂や巨像が蒼天に聳える。帝都の風格は覇者の歴史が齎すのだ。

☆威厳しき孤高の巨像コロンブス
海の彼方を熱く睨めり

地中海贊歌9佛蘭西・馬耳塞
平成二六年五月

薫風颯颯雨降稀
燦燦陽光蝸蛤肥
美酒佳肴百花麗
壺中天裏忽忘歸

押韻・稀 肥 歸

〈地中海贊歌9仏蘭西・馬耳塞〉

薫風颯々として 雨降ること稀に
燦々たる陽光に 蝸蛤肥ゆ
美酒佳肴 百花麗しく
壺中の天裏 たちまち帰るを忘る

〔注 解〕

蝸＝蝸螺＝蝸牛とも。エスカルゴ。仏蘭西料理では珍味として重宝される。地中海の味覚の代表か。
蛤＝蛤蜊＝はまぐりとあさり。塩野七生のエッセイによるとパスタにはベストな組み合せだという。
壺中の天＝別世界。仙境。班彪ほか・漢書・費長房傳「漢のとき、費長房は薬売りの老人壺公に誘われて店頭にあった壺の中に入り、その中の美酒を飲み尽くし佳肴を食べ尽くし楽しんだ」という故事。転じて別世界、仙境。また「酒を飲んで世を忘れる楽しみ」をいう。
地中海の西北部をリグリア海と呼ぶ。ここ馬耳塞から始まり東にツーロン、コートダジュール、サントロペ、カンヌ、ニース、モナコと世界的な高級リゾート地が並ぶ。セザンヌ、ブラーク、ディレン、ダフィ、モネ、ピカソらが移り住み、この気候風土を愛し創作に励んだ。
アンティーブの古城には「ピカソ美術館」が在る。
カンヌには五月映画祭に世界中からセレブが集まり人口は四倍になる。サントロペにはBバルドーが愛した別荘が在る。
ここ馬耳塞はリヨン湾の中央に位置しパリに次ぐ経済都市。明治日本の俊才、顕官らが入欧する際の海路の玄関で漱石も鷗外もここを通過した。
北西から乾いた風が吹き、年間晴れの日が三百日と冬が無い楽園。陽光と乾風がワインになる葡萄や、仏蘭西料理に欠かせない蝸、パスタに合う蛤蜊を育むのだ。

〔口語訳〕

薫風が西北から吹くここプロヴァンス地方は雨も稀だ。
暖かい太陽の恵みも豊かで蝸を始めとする山の幸、蛤を始めとする海の幸の数々を育くむ。
世界に冠たる葡萄酒に酔い山海の珍味を味わう。
私はあの汝南の費長房が薬売りの老人壺公に誘われて入った不思議な壺の中で美酒、佳肴、百花を堪能した。
その為にすっかり帰るのを忘れて了ったことであった。

☆馬耳塞鳴呼夢に見し別世界
壺中の天か蝴蝶の夢か

地中海贊歌10伊太利亞・聖摩牙麗多
平成二六年五月

熟那灣口別天地
如玉聖摩牙麗多
月照祝筵欒不盡
一炊夢未想娑婆

押韻・多　婆

〈地中海替歌10伊太利亞・聖摩牙利多〉

熟那湾口の　別天地
玉の如き　聖摩牙麗多
月は祝筵を照らして　欒は尽きず
一炊の夢なれど　いまだ娑婆を想はず

〔注　解〕

地中海の北側、伊太利亞半島の西側の海を里克利亞海という。そこの湾が熟那湾。熟那の街は湾の最深部に在る。長い航海を終え下船した私達は、タクシーで近郊の景勝地、聖摩牙麗多に投宿した。久しぶりの地上での宿泊だ。青玉のように美しい渚のホテルで旅の別れの祝宴。

波静かな海に入り遊泳し、満天の星の下、ホテルの庭で祝杯を挙げた。団欒の欣は尽きず一炊の夢は未だ醒めない。

聖摩牙麗多＝摩牙麗多は詩的宛字。
里克利亞海＝里克利亜は詩的宛字。
娑婆＝（仏）この世。人間世界。現実の俗世間。
一炊の夢＝邯鄲の夢、黄梁の夢、盧生の夢とも。唐の沈既濟・枕中記にある逸話。
「黄梁が煮えるくらいの短い時間に見た夢」のこと。人生のはかないことの譬え。

唐の盧生が邯鄲の宿で、呂翁という仙人に枕を借りてひと眠りする間に、五十年の栄華の夢をみたが、醒めてみると、炊きかけの黄梁はまだ煮え上っていない。

そこで盧生は人生の儚ないことを悟ったという故事。

ここでは、今回の二週間に亘る長い船旅の楽しかった想い出を盧生が経験した五十年の栄華の夢に譬え、その夢は未だ終っていない――未だ続いているので「未だ娑婆（現実社会）のことは考えない」と強がっている。

〔口語訳〕

里克利亜海の北東、伊太利亜半島の西側を熟那湾という。その湾口にある景勝の保養地。

青玉の如く美しい海浜の別天地の名は聖摩牙麗多。

そこに佇む中規模のクラシックなコンチネンタルホテル。

月は私たちの祝筵のテーブルのご馳走を照らしてくれる。歓談の笑いは未だ〳〵尽きることはない。あの盧生が夢みた栄華の時間は未だ続いているのだ。

☆旅路終へ恙なき日々祝はんか
再びはあらず喜寿過ぎたれば　（完）

《漢詩の流れ69》 奈良時代①長屋王

唐代三百年間に作られた全ての詩を収録したと称する康熙帝勅選の「全唐詩」には、四万九千首が収められている。またその作者は二千二百人余である。

その中に日本人が二人居た。一はわが国初の国際人の阿倍仲麻呂、もう一人が長屋王である。

長屋王は天武天皇の孫で、奈良時代聖武天皇のとき左大臣として権勢を誇ったが、謀反の疑をかけられ自殺して果てた人。

先年、平城宮趾隣接の地に、その邸宅跡が発掘され話題となった。

わが国最古の漢詩集「懐風藻」（七五一年）には、長屋王の作をはじめ、彼の作または佐保路にあった別邸での宴会に列席した貴族たちの作が収録されている。

さしずめ彼は文化サロンの主催者、文人グループのリーダーとしての素養も豊だったのであろう。

但し詩としては極めて幼稚であり近、古体の別も定かではない。漢詩の後進国としては未だ〳〵初歩の段階であることを考えれば止むを得ないことであろう。

繍於袈裟衣之縁（袈裟の衣の縁にぬいとりす）
山川異域　山川は域を異にするも
風月同天　風月は天を同にす
寄諸佛子　諸仏子に寄す
共結來縁　共に来縁を結ばんことを

漢詩

汲深録（一）

松井秀人

平成二十七年六月

訪西班牙古城　西班牙（スペイン）の古城を訪ぬ
荒原一望度涼風　荒原　一望　涼風度る
頽毀城墟野草中　頽毀の城墟　野草の中
昔日栄華茫似夢　昔日の栄華　茫として夢に似たり
路花零落夕陽紅　路花　零落　夕陽紅なり

押韻・風　中　紅

〔注　解〕

特定の古城ではなく、度々訪れたスペインのトレドやアルハンブラなどの城を思い出して詠んだ詩。

〔口語訳〕

荒原を一望していると、涼風が吹き渡り、頽毀の城墟が野草の中にある。
（城での）昔の栄華は茫として夢のようだが、路傍の花は枯れしぼみ、夕陽が赤い。

観箱根居合道八段戦　箱根居合道八段戦を観ず
華表高堂樹鬱葱　華表　高堂　樹　鬱葱たり
荘厳神術探幽中　荘厳なる神術　探幽の中
抜刀一閃破閑靖　抜刀　一閃　閑靖を破り
室内無聲度午風　室内　聲無く　午風度る

押韻・葱　中　風

〔注　解〕

正式名称は「居合道全国選抜八段戦箱根大会」箱根神社の武道場にて、年一回全国から選抜された全剣連居合道八段位の剣士が試合を行う。試合方法は全て古流、抜き本数は五本または七本。日本刀は真剣を使用。
一閃するような技は抜きつけ、切り下ろし、血ぶりであるが、これらの技では刃筋がとおっていると、閑靖な中では空気を切り裂く音がする。
華表：鳥居の漢語訳
高堂：りっぱな家、よい座敷。

〔口語訳〕

鳥居や高堂の周りは樹が鬱葱としている。荘厳なる神術は奥深くしずかに探るところの中である。抜刀して一閃すれば閑靖を破り、室内は声も無く、午の風が吹き渡っていく。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一
加入者名　まんじ

性と化粧の物語（二）

鈴木守

第一話　性と毛の化粧（一）

第二報で紹介したＶＩＯ脱毛は、性ホルモンが関与する陰毛の話で、当然。『性と毛の化粧』のジャンルに入ります。今回は性ホルモンが関与していない『眉毛の化粧』を取り上げる事にします。

では、何故取り上げるのか、その理由を説明する事から始めましょう。曾て我が国では、元服に際して眉を剃り落とす風習が受け継がれていました。元服は今風に云えば、成人式であり、大人になった事を告示する儀式ですから、眉を取り去る化粧は『性と毛の化粧』に属していると云っても不当とは云えません。従って、ここに『女性の眉化粧』を取り上げる次第です。

第三節　女性の眉化粧

現代の日本女性は、剃刀、毛抜等で眉の形を整えた後に眉墨を塗ります。所が一昔前・江戸時代の眉化粧の仕様は全く異なっていました。此処に浮世絵が二点あります。一点は歌川国貞の『今風化粧鏡、一八一〇』で、眉剃りしている女が描かれています。他の一点は歌川国芳の手に成る『風流名頭字尽〝乞〟、一八〇〇頃』で、母親に眉剃りして貰っている娘の図です。

浮世絵とは別に、この時代の眉化粧を詠んだ川柳に、双の眉を二度剃りで落とす様を、『元服の二タ剃刀は女也』と表していました。この句は女の元服を詠むと同時に男性の元服の姿を示唆しています。『元服の一ト剃刀は男也』を想像します。

一項．江戸期女性の眉化粧

斯様に、江戸期女性の眉化粧が、江戸文化の〝粋〟を集めた浮世絵と川柳に組み込まれていました。そのためか、江戸期通人の残してくれた文書は、粋人とは云い難い小生には、馴染の少ない言葉で彩られていましたので、先ずは言葉の紹介から始めようと思います。

①　〝まゆ〟と〝まゆげ〟：私達は日常的に〝まゆ〟と〝まゆげ〟を同義語のように取扱っています。しかし、この事を技術屋の立場で云いますと、「眼を保護する目的で、左右の眼の上に横たわっている毛の二集団を〝眉〟と称しており、眉を構成する一本々々の毛が〝眉毛〟である」と理解しています。

江戸期の書に目を通しますと、〝まゆ〟の漢字表記は〝眉〟でしたが、〝まゆ〟の同義語に〝まよ〟と〝まみ〟があり、特殊な例ですが杉田玄白等が著した『蘭学事始、一八一五』では、〝ワインエンブラーヴ〟とルビが打たれていました。

〝まみ〟の例は、為永春水の『春色辰己園、一八三三～三五』は眉毛を〝まみへ〟とし、式亭三馬も『浮世風呂、一八〇九～一三』の中で〝眉毛〟と著していました。現代でも使われている〝（相）まみえる〟との関連に興味を覚え、辞書を引きますと、〝まみ〟の漢字表記には〝目見〟と〝眉〟があり、〝まみえ〟の場合は〝目見え〟と〝眉〟で表記されていました。眉には〝眉毛〟の意味も含まれていました。

古代社会の先人達は、万葉集等で屢々見受けられる〝眉〟を使い、眉毛を〝眉根〟と称していました。また、柳沢淇園の『ひとりね、一七〇三～五八』では〝まゆ〟を〝まみあい〟と云い、漢字で〝眉相〟と記し、この言葉には、〝眉と眉の間〟の意味もありました。

②　毛抜と剃刀：江戸期女性の眉化粧は、眉毛の除去から始まり、その後に眉を描きました。眉の除去手段としては、剃刀で剃り落とすとか、毛抜で抜き取るかの方法が採用されていました。

寺島良安の『和漢三才図会、一七一三』と奥田松柏軒の『女用訓蒙図彙、一六八七』には、毛の除去に必要な小道具として、〝剃刀〟と〝毛抜〟を呈示していました。前者には毛抜の別名〝鑷〟と〝鑷子〟が、後者には、剃刀の別名〝毛垂〟が紹介されていました。また、松江重頼著『毛吹草、一六三八』には、蛤の貝殻を併せて毛抜にすると記されていました。

喜多村信節著『嬉遊笑覧、一八三〇』に、「眉を書くは、もとの眉を鑷子にて抜き去りて描く。今は皆、剃っているが、古くは抜くものと見えたり」と述べていましたので、剃毛に先行して抜毛が行われていた事が窺われました。

③　まゆずみ：　〝まゆずみ〟の漢字表記は〝眉墨〟と〝黛〟です。この同義語として〝掃墨〟と〝灰墨〟があり、読みは両者共、〝はいずみ〟です。眉墨の素材に竈の消し炭が使われていた事が思い出されます。『女用訓蒙図彙』及び黒川道祐の『雍州府志、一八六四』には「鍋、釜の煤、硯で擦った墨、麦の黒穂等を素材に使用する」と記されています。

④　眉作りと眉作：　〝まゆづくり〟を漢字で現わしますと、〝眉作り〟と〝眉作〟があります。この二つの単語は、別の意味を現わしています。送り仮名のある〝眉作り〟は〝まゆ書き〟、〝まよ書き〟と同義で「眉墨で眉を書く事」を現わしています。他方、送り仮名のない〝眉作〟は、眉書きに使用する小道具で、松江重頼著『毛吹草、一六三八』は、「眉作りに使ったり、白粉化粧等に使ったりする筆や刷毛の類い」と説明しています。

⑤　引き眉、作り眉、置き眉：　〝引き眉〟と〝作り眉〟は、「眉を剃った上に墨で眉の形を作る事を指す」と云う事で同義語とされていますが、引き眉には「薄い眉を濃く見せるために、眉の上を眉墨で擦る」意味もありますので、線を引くような作り眉を〝引き眉〟と呼称したのではないかと勘ぐっています。なお、眉を除いた後、暫くして眉毛が生えてきますので、再生した自生の眉を〝置き眉〟と言っています。

⑥　眉を描く用具類：　眉を描く用具には、前出『和漢三才図会』と『女用訓蒙図彙』には、〝眉作〟、〝眉掃〟と〝眉刷毛〟がありました。この三者が同義語か否か疑わしく思いましたので調べてみますと、『和漢三才図会』は「眉作は眉刷毛也」とし、〝掃く〟と云う動詞には「刷毛等で塗る」の意味がありましたので、〝眉掃〟が〝眉作〟や〝眉刷毛〟と同義である可能性が高いと云う結論を得ました。

これとは別に、斉藤玉山著『婚礼道具諸器形寸法書、一七九三』には、眉箒、上臈、卯毛、ハッシ等、刷毛や筆に属する用具類が登場し、「白化粧に際して、眉や顔面に零れた白粉や塵等を払ったり、眉を描くのに使用した」とされています。

正誤の程は保証の限りではありませんが、イメージで云いますと、眉箒が眉掃に訛ったのでしょうし、眉作りでも、細い眉筆で線状に書いた眉を〝引き眉〟と称したのであろうと想像しています。

二項　眉化粧風俗

眉化粧風俗も時、場所、場合によって異同がありますので、その相違について触れておきましょう。

①　江戸と上方：　江戸時代の娘さんが女になるには、三度の手続きが必要でした。最初に髷直し、次いで歯染め、最後に眉落としでした。しかし、所変われば品変わるの伝で、江戸と上方では、仕来りとか呼称が若干異なっていました。

両者の相違を喜多川守貞著『守貞漫稿、一八三七～五三』は、「島田髷の娘さんが適齢期になると、江戸では丸髷、上方では両輪髷に変え、結婚の前夜歯を染め、これを江戸では〝半元服〟と呼びましたが、上方では、単に〝鉄漿染め〟と云っていました。最後に懐妊しますと、眉を剃り落としました。これを江戸では〝本元服〟と称しまして、儀式化した様子が窺えましたが、上方では元服などと格式張らずに〝顔直し〟と称していました。

②　オールド・ミスと女房：　江戸では年十八九歳、上方では廿歳頃には、オールド・ミスの年齢とされたのでしょうか。婚期が遅れた未婚女性も、この年齢になりますと、歯を染め眉を落としました。神沢杜口の『翁草、一七七六』は、「長崎や平戸の婦人は生来の眉毛を剃る事がなかった」と記しています。

また、柄井川柳編の『俳風柳多留、一七六四～一八三八』には、「負けこけて／女房に眉を／付けさせる」の句があり、商売女は眉を剃らなかった事を知らしめています。

③　何故、眉を落とすのか：　現代人の目から見ると、眉を取り除く化粧が何故、成立したのかと云うのが率直な疑問ではないでしょうか。この疑問に対する解答の一つを、石原正明著『年々随筆、一七一六～一八〇五』に書き残されていました。その書置きには、「眉を去るは、生え際のしどけなき所、色の濃き薄き所などありて、わろびたれば、それを剃り落として、思う儘に描くなり」と記されていました。

「思う儘に描く」の一言で思い出しました。出典は思い出せませんか、「夫の好みに従って眉を書いて貰うために、眉を落とす」の一文です。

他に、加藤美樹著『南窓筆記、一七二〇～七七』には、「女の眉を落とす事は、人相の書に女の眉一文字に切れたるは、多淫の相などと云えり。総じて女は眉にて相を計るもの故、悪相を隠さん為に眉を払い、愛作り眉にするなり」と述べていました。従って、〝眉を取り除く眉化粧発祥説〟としては、これまでに〝見目修整説〟、〝夫の好み説〟及び〝人相隠蔽説〟の3説が提唱されていました。

④　江戸期眉化粧の参考文献：　江戸時代の人達がどの程度、眉化粧に興味を抱いていたかのバロメーターとして、江戸期有識者の文書に目を通しましたが、可成り

の数の資料が認められましたので、既に引用した文献を除外して、一般的に知られている著作文書を拾い挙げて羅列します。

佐山半七丸『都風俗化粧伝、一八一三』、曲亭馬琴『椿説弓張月、一八〇七～一一』、近松門左衛門『女殺油地獄、一七二二』、徳川光圀『西山公随筆、一六二八～一七〇〇』、松尾芭蕉『奥の細道、一六九四』、井原西鶴の『好色五人女、一六八六』、『好色一代女、一六八六』等が目に入りました。

江戸期で最も古い眉化粧の記事は、著者不詳の『恨の介、一六一〇』に、「桂の眉は青ふして、青黛が立板に水を流すに異ならず。宛轉たりし雙蛾は、遠山の月に相同じ」と化粧料の〝青黛〟、眉形の〝桂の眉〟、〝雙蛾〟、〝月眉〟を登場させていました。

三項　中世社会の眉化粧

眉化粧の事跡を追って、江戸初期六一〇年まで溯行できましたので、更に、それ以前に遡つて、中世の眉化粧を探索する事にします。我が国の中世は、源頼朝の鎌倉開府から徳川家康の江戸開府までの四百年の期間でした。この間、鎌倉（一一九二～一三三八）、室町（～一五七三）、安土桃山（～一六〇三）の3時代に区分されていますが、中世社会は戦国時代の名が相応しく、男優位の社会だったためか、化粧資料は乏しい時代でした。

① 安土桃山時代：　安土桃山時代は、織豊時代とも呼ばれていました。この時代の眉化粧に関わる文字資料には接していませんが、大阪城天守閣刊行の『戦国の女たち、一九九九』の写真集を入手しました。うち、四人の女性像から当時の眉化粧の様相を窺う事ができました。

一枚目の画像は、静岡・西来院蔵の〝築山殿（一五四二～七九）〟の像で、彼女の額には殿上眉（又の名を芒々眉）が描かれています。次も殿上眉の徳川家康正室の〝旭姫（一五四三～九〇）〟の画像で、京都・南明院所蔵の作品です。

三枚目は、京都・清涼院蔵の家康側室〝お亀の方（一五七三～一六四二）〟の像で、彼女の額には眉が見られませんでした。これを〝置き眉〟と称していたそうですが、〝眉なき眉化粧〟と云う事になります。

最後の一枚は茨城・弘経寺蔵の千姫（一五九七～一六六六）の絵姿で、額には正常の位置よりやや高めに三日月型の眉が描かれていました。

② 室町・鎌倉時代：　室町時代には、万里小路時房著『建内記、一四三一』に「予女九歳の祝い事あり。母が眉抜く」と記載され、他に、東麓破納の『下学集、一四四四』と伊勢貞陸？の『嫁入記、室町中期』に〝眉墨〟、小島法師著？『太平記、一三七〇』に〝眉作り〟が見られました。

鎌倉時代には、鎌倉幕府編『吾妻鏡、一二六〇』と著者不詳の『香取遷宮用途記、一一九七』に〝眉墨〟が見られ、著者不詳『とりかえばや物語、成立年不明』に〝眉抜き〟と記されていました。

以上、中世の眉化粧を押し並べてみますと、安土桃山時代には、〝殿上眉〟、〝無眉〟、〝月眉〟の眉型三態の像がみられ、室町期には、〝娘の元服〟、〝眉抜き〟、〝眉作り〟、〝眉墨〟を認め、鎌倉期にも「眉抜きして眉墨を塗る眉化粧」が行われていた事を窺う事ができましたが、〝眉剃り〟と〝剃刀〟は登場しませんでした。

四項　古代社会の眉化粧

中世社会にも眉化粧習俗が認められましたので、古代社会・平安時代に歩を進める事にします。平安時代は桓武天皇平安京遷都の七九四年から源頼朝の鎌倉開府一一九二年までの期間に相当します。この時代、特に一千年前後の中期には、紫式部、清少納言、和泉式部らの女流文士の全盛時代でした。

① 虫めずる姫と催馬楽：　著者不詳『堤中納言物語、平安中期』の虫めずる姫君の件に「人は全て繕ふところあるは悪しとて、眉さらに抜き給はず」と記されています。また、八〇〇年前後の頃の古代歌謡集『催馬楽』に眉のある小母さん〝眉刀自女〟が登場しました。虫めずる姫のエピソードも眉刀自女も、眉除去の風習があっての事ですから、平安時代の前中期には眉除去の化粧風習が成立していた事を示唆しています。

② 眉墨と毛抜：　〝まゆずみ〟については、源順『倭名類聚抄、九三五』に、〝黛〟と〝眉墨〟があり、著者不詳の『類聚名義抄、平安末期』に〝黛〟が見られ、前出『堤中納言物語』には、〝掃き墨〟が転訛した〝掃墨〟が黛として登場しました。

清少納言は『枕草子、一〇〇〇』に、「物の哀れ知らせ顔なる物、鼻垂り、絶え間なく噛みながら物いう声、眉抜く」と鬱陶しい事の代表として〝眉抜き〟を挙げ、有り難き物として「舅に褒められる婿、姑に思われる嫁の君、毛の良く抜ける白金（銀製）の毛抜」を挙げていました。眉毛を全部抜くのは、鬱陶しいを通り越して、物の哀れの領域に首を突っ込んでいた事でしょう。だから毛のよく抜ける毛抜は有り難い物に選抜されて当然です。

③ 眉型の舶来語：　後白河法皇編著『梁塵秘抄、一

一七九』に眉墨で書いた〝柳黛〟、藤原公任撰『和漢朗詠集、一〇一三』に青く美しい眉の〝青蛾〟、美人の二つの眉〝雙蛾〟、八の字型の〝眉八字〟、緑の眉墨で描いた〝翠黛〟、〝柳眉〟、藤原冬嗣ら編の『文華秀麗集、八一六』に蛾の触覚に似た〝蛾眉〟、眉墨で描く粧いの意を示す〝粧黛〟等、遣唐使が持ち込んだ舶載の単語や文字が屢々認められました。

斯様に平安時代には、上流階級の麗人たちは、清少納言が呟いたように必死になって眉毛を抜いて、粧黛に励んでいました。

五項　上代の眉化粧

わが国の上古・上代は、大和・奈良時代とされています。従って、桓武天皇が平安京へ遷都した七九四年以前を上代と云っています。この間の歴史を著した書としては、舎人親王ら撰『日本書紀、七二〇』と太安万呂撰『古事記、七一二』がよく知られています。この両書を中心に、万葉集や風土記の記事を加えて眉化粧の歴史を遡る事にします。なお、日本書紀を『紀』、古事記を『記』と略し、両者を併せて『記紀』と表記する事にします。

① 鳥毛立女屏風：奈良時代は、元明女帝が平城京を構えた七一〇年から、前出平安京遷都までを指し、この間、聖武天皇（在位七二四～七四九）治世の頃を中心にして、天平文化が花開いていました。

天平文化の遺産・正倉院には、日本の化粧史に必ず登場する『鳥毛立女屏風、七五四』が残されています。この立女の額には蛾眉が描かれています。蛾眉の図は、奈良・薬師寺の『吉祥天像、七七二頃』にも見られますので、天平の美女たちは立女や吉祥天に肖って蛾眉を施していたかも知れません。

② 眉根掻き：『万葉集、七七一』は、仁徳朝から奈良朝七五九年までに詠まれた歌を大伴家持らが撰上した歌集です。この歌集に、「振仰けて若月見れば一目見し人の〝眉引〟思ほゆるかも」と「梅の花取り持ちて見ればわが屋前の〝柳の眉〟し思ほゆるかも」の二首に眉化粧に関わる〝眉引〟と〝柳の眉〟が見られました。

他に〝眉根掻き〟が数首の歌に認められましたが、眉化粧に直接関与するフレーズではありません。万葉の時代には、「眉を掻くと人に逢える」と云う俗信があったらしく〝出会い〟を詠んだ歌には〝眉根掻き〟を修飾語として取り入れていました。例えば、「月立ちてただ三日月の〝眉根掻き〟日長く恋ひし君に〝逢へる〟かも」と詠まれています。この歌の主題は、「三日月眉の恋しい君に逢へる」と思いますので、〝逢へる〟を〝眉根掻き〟で

修飾した相聞歌と云う事になります。相聞の相手は、眉型を月眉に整えた美形を思い浮かべ、万葉の時代には〝月眉〟も眉型の一つだったのではないかと想像しました。更にこじつけて想像しますと、相聞の発信源は〝性〟である事に思い至りました。

③ 〝眉引き〟と〝眉畫き〟：『紀・仲哀の条』に、「處女の〝睩〟の如くにして、津に向える国あり」と記され、『風土記、七一三、播磨国逸文』にも、「越賣の〝眉引き〟の国」が登場しました。また、『記・応神の条』には、「〝眉畫き〟濃きに畫き垂れ」と宮主矢河枝比売が尻下がりの眉を色濃く描いていた事が記されています。

『記紀』を離れて、大和王朝時代の日朝関係を調べてみましょう。中国東北地方、朝鮮との国境近くに『高句麗・好太王碑』があります。この碑文には「倭軍が百済、新羅を破り、三九一～四〇四年に高句麗と倭が交戦した記録」が刻まれています。

この時代に相応すると思われる『記紀』の資料に目を転じますと、『記・仲哀の条』に「神功皇后の新羅征討」、並びに『紀・神功の条』には、「高句麗、百済の服従と新羅遠征」が認められていました。次いで、応神天皇治世の時代には、日朝の緊張関係は緩和され、百済が朝貢し、王仁が来朝し、論語十巻と千字文一巻を献じた事は〝漢字〟と〝儒教〟の伝来としてよく知られています。

斯様に、好太王碑文の〝倭人侵攻〟と神功皇后の〝新羅遠征〟の記録が時代的に一致しましたので、わが国の眉化粧は、四〇〇年前後の神功皇后新羅征討の頃か、遅くても応神天皇治世の時代には既に行われていたと推察されます。

六　中国の眉化粧

日本女性の眉化粧の歴史を辿りますと、大和朝四〇〇年前後の頃まで行き着く事ができました。この化粧文化が自生か輸入かについて考察します。

和漢朗詠集等の平安時代の書物には屢々、粉黛、翠黛、柳眉、月眉等々の文言が見られましたので、眉化粧の風俗は日本自生の文化ではなく、中国由来に思えました。ましてや、先進国・中国では戦国時代（前四〇三～前二二一）には、既に眉化粧が行われていましたので、その感を一層強くしました。

一方、古代中国女性は、習字の墨と硯のように、眉を描くにも〝石黛〟と〝黛硯〟を使って擦り粉末にし、水を加えて用いていました。石黛と黛硯は前漢墓や漢墓から出土しています。

隋・唐以降の女性は、水を含ませるだけで使用可能な〝螺黛〟を使用するようになりました。螺黛は〝画眉墨〟とも云われています。その後、末代になりますと、螺黛

より光沢があり、肌理が細かく、その上、使用に便利な〝煙墨〟が開発され、螺黛にとって変わりました。

これまでに登場した、中国眉化粧の材料名を挙げますと、石黛、黛硯、螺黛、画眉墨、煙墨がありました。所が、これらの化粧料を日本で発見したと云う情報は耳にしていませんし、その上、著者が所蔵している日本の化粧文化史に関する書物の中にも、これら化粧料の名称は認められませんし、辞書を繰っても出てきません。唯一、見つけたのが、藤堂明保編『学研漢和大辞典、一九七八』所載の〝石黛〟でした。もし、眉化粧の風習が中国由来であるならば、中国の眉化粧料の名称が日本の化粧史に顔出しして然るべきではないでしょうか。また、正倉院とか国立博物館等のどこかに、石黛なり黛硯なりが所蔵されていてよさそうなものですが、それらの現物が所蔵されていると云う噂さえ聞いた事はありません。と云う事は、日本の眉化粧は外国の習俗が伝播してきたのではなく、日本で自生し日本独自に発展した化粧風習であると推論されます。

結び―女性の眉化粧史―

わが国の女性の眉化粧は、四〇〇年前後、『記紀』で云うと、神功皇后の新羅遠征以前に自生したと思われます。大和朝から奈良朝へ至る間にも、万葉集や立女図から眉化粧の存在が明らかにされています。

平安時代には、『枕草子』に銀製の毛抜による眉毛抜きが記されており、それ以前、八〇〇年頃の『催馬楽』に眉刀自女が謡われていますので、遅くても八〇〇年頃までに眉毛を除去する眉化粧が始まっていました。

眉毛除去が何時頃から元服の祝いに取り込まれたか詳らかでありませんが、室町時代には、『建内記、一四三一』に元服の眉抜きが記されていますので、この書が記される以前から、元服の祝いに眉化粧を施す風習が成立していた事は確実です。

その後、江戸時代、一六八七年の『女用釧蒙図彙』に剃刀が初登場しました。剃刀の開発によって、一九世紀初頭の化政文化時には庶民階級の人たちにも眉化粧が広がりました。しかし、明治以後、近代社会に入りますと、眉毛撤去の眉化粧は衰退の一途を辿り、現在ではアイ・メークアップの眉化粧に定着しています。

［第四節へ続く］

『時評家　新明正道』（評伝その二）

山本鎭雄

第二章　三年の春、第四高等学校（旧制、金沢）

一　文学青年の文芸熱

詩人・小説家の室生犀星は金沢で生まれると、すぐ生母から離され、真言宗の住職の内縁の妻の私生児として出生届が出された。七歳になって住職の養子として室生姓を名乗った。その後、小学校高等科を中退し、給仕、新聞記者を転々しながら作詩し、新進詩人として認められるようになった。室生犀星は東京から金沢に帰郷して、「ふるさとは遠きにありて思うもの／そして悲しくうたうもの／よしや／うらぶれて異土の乞食になるとても／帰るところにあるまじや」と歌い、東京という「遠きみやこにかへらばや」と繰り返している。

ところで、新明正道博士にとって金沢は「ふるさと」そのものであって、東京帝大入学以後、神戸、仙台に居住し、機会があれば、頻繁に帰郷した。このように、生涯を通して「心のふるさと」だったに違いない。中川善之助学長の金沢大学で新明の教え子の八木正教授の働きかけで、晩年の新明は大学の講演会に招かれ、夫人とご長女を同行したのが、おそらく金沢最後の帰郷であろう。その後、八木教授が入院中の新明の病床を訪ねると、しきりに金沢への強い懐旧の念を吐露されていたという(1)。

親友の山崎一雄（一八九六～一九七七年）の回顧によれば、新明は超然主義（超越脱俗）をモットーとする金沢の第四高等学校（旧制、以下、四高と略記する）の第一部甲類英法科に三番で入学し、特待生となって学費免除・奨学金支給の特典を受け、二学年時には一番となり、三学年時には無欠席で首席で卒業した（新明のご長女の話によれば、四高の在学時、父からの学費などの仕送り

は一切なく、優等生として奨学金や育英資金の支給を受け、自ら学費と生活費を稼ぐことが、在学するための最大の条件だった。それ以外に不安定だが、地元の新聞などに投稿し、臨時のアルバイトとして原稿料・執筆料を稼ぐことも必要だったろう)。

四高および東京帝大で同級生、東北帝大法文学部教授として同僚で、かつ同時に定年で退職した中川善之助(昭和期の民法学者)は、晩年の新明が金沢大学で講演した後、新明夫妻と懇談し、四高在学中の新明は金沢の郭も知らず、ひたすら学校に通い、謹厳実直で好学一途の学生生活を送ったと語ったという。

ところが、新明は中川と四高、東京帝大では極めて対照的な学生生活を送った。中川の原籍は金沢だが、東京に生まれ、二学年時に金沢一中に編入した。新明は金沢一中を三学年時に転校したからほとんど面識はなかったであろう。その後、中川は四高の独法科に入学し、三々塾という小規模な合宿所で過ごし、全盛期の柔道部に入会し、猛稽古に励んだ。おそらく旧制高校生独特のバンカラな生活を送ったであろう。ところが、中川はドイツ語の若い教師宅を訪ね、シルレルの独文の「名誉を失ったための犯罪人」という短編小説を紹介され、将来は監獄の典獄(刑務所の所長)になろうと心に決めた。若き中川にとって本書は、いわば「運命の書」であった(2)。

新明は四高の英法科に入学し、短編小説を創作したり、短歌を吟詠し、さらにロシアの作家トルストイやチェーホフなどを愛読する「文学青年」であり、さらに思想的に少数の進歩派のグループに属した「思想青年」であるとともに、金沢の白銀教会で白石和三牧師の司式でキリスト教の洗礼を受けた「宗教青年」である。白銀教会の青年会では、後任の若き松岡貞一牧師に代わり、地元の進歩的な農村青年たちのリーダーとして数回にわたり「キリスト教と社会」と題して講話した。

私がこの白銀教会を訪れたとき、常駐の牧師がいない教会は閑散としていたが、教会付属の幼稚園は園児の歓声で賑わい、立ち話しをしているヤングママたちを多く見かけた。私はおそらく幼稚園の事務職員に「白銀教会の過去の資料を見せて頂きたい」と来意を告げたが、「牧師がいない」と言われ、残念ながら、資料の閲覧は断られたことがある。

さて、東京帝大では、中川は法科大学(今の法学部)の法律学科、新明は同じ法科大学の政治学科に入学した。新明は東京帝大の政治学科の学生を中心に結成された初期新人会に属し、中川はそれに対抗する国家主義的団体の興国同志会(当時、岸信介も会員だった)の弁論で活躍した。当時、学問・思想の自由を弾圧した「森戸事件」では、両者は思想的に激しく対立し、興国同志会は学生の信頼を失い、内部分裂して解散した。新明の東京帝大の在学時の前期新人会の活動については次章で詳述する。

る。

将来は典獄になるという夢から覚めた中川は、東京帝大では専攻を監獄法を中心とする行刑法から刑法ではなく、一挙に民法に変更し、戦後の家族法(身分法)改正では指導的役割を果たした。晩年、新明は「中川君は研究室に入って勉強したのはよかったんだろうと思う」と回顧している(3)。

新明は四高に入学すると、最初は学友と手書きの回覧雑誌『砂丘』を作成した。新明は「子供の頃」という七歳の頃の生い立ちの記のほか、満州や朝鮮を渡り歩いた少年時代の思い出を書いた「我等旅びと」、仲間の感情的な葛藤を書いた「黄昏」と題する創作三編と、旅行記一編を掲載した(4)。

すでに触れたように、新明は四高の学内誌『北辰会雑誌』(八一号)に発表した。山崎一雄もまたキリスト教人道主義による「闘と愛」(八〇号)や「付添人の黙想」(八二号)を発表した。のちに、新明は山崎の文学的才能と思想的水準を高く評価し、山崎は「新明君の短篇には及びがたいオリヂナリテーを感じていた」と回顧しているように、ともに文学青年として創作、短歌、評論の執筆に励んだ。

四高の校歌・寮歌で「北のみやこに秋たけて」、「潮騒(しおさい)冴(さ)ゆる北の海」と歌われているように、日本海を臨む金沢以北の内灘砂丘は壮大な景観を呈し、四高生にとって浩然の気を涵養し、「三年(みとせ)の春」の情緒的・文学的象徴であった。新聞の回顧によれば、雑誌『砂丘』は学内では同類の同人誌と比較して、創作よりも評論において卓越していた。思想的に進歩的な山崎の評論が大いに異彩を放ち、高い思想的水準を保っていたからである。しかし、同人間に不和が生じ、一年間も続かなかった。

その後、「白雨社」と称する短歌会を結成し、例会を開いて同人で詠草した。だが、「白雨社」は短歌を専門にしたため、『砂丘』のように学内ではあまりインパクトを与えなかった。新明は白雨社の例会で詠草した同人の短歌を地元の『北国新聞』に投稿し、その短歌が掲載された。さらに新明は四高全体の短歌会にも参加し、詠草が地元の『北陸新聞』に掲載された。四高短歌会は英語担当で俳人の大谷暁石(本名、正信)教授を中心に結成された。出席した同人は歌会に提出された詠草を採点し、評点の高い短歌から批評し合った。新明は歌会では「余り賞められなかった」と回顧している。

新明の『北国新聞』(一九一八〔大正七〕年三月)に掲載された短歌のうち、以下三首を任意に紹介すると、

砂山の窪みの桑の圃より蝶まひたてる午後のしづけさ
土手したに黄なるタンポポさきみてり瞳ひからせ摘むは誰が子ぞ
彼の男淋しかりけり猫柳の花白光る川原に動かず

また四高短歌会に参加し、『北陸新聞』（一八年三月）に掲載されている。

尊かる人生きぬ世に生くる身のわれも水草か寂しさの増す

二　熱狂的なトルストイアン

すでに触れたように、新明は「植民地の役人」の父に同行し、台湾、朝鮮、満州（中国東北部）の各地を転々と渡り歩いた。父は学力優秀な息子・正道の将来を期待した。自らも早くから将来は帝国大学法科大学への進学を漠然と希望していた。四高在学中、新明は東京帝大法科大学政治学科の吉野作造教授が『中央公論』誌上に発表した歴史的論文「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」（一九一六〔大正五〕年一月号）を熟読し、大きな影響を受けただけではなく、生涯にわたり、この論文の意義を考察し続けた。

吉野は三年あまり欧米に洋行し、イギリス、アメリカ、フランスなどのそれぞれの近代憲法の成立の事情とその後の発達を研究した。その結果、近代憲法に共通した内容として（一）人民権利の保障、（二）三権分立主義、（三）民選議院制度の規定が不可欠であると指摘した。ところが、日本は憲法に準拠した政治、つまり「立憲政治」の現状は憲法法典を制定し、それに基づき政治機関を組織し、議会や裁判所を設けたが、それはあくまでも形式的に制度化されたに過ぎないと批判した。だから、「憲政有終の美を済す」ことは未だに実現されず、本来の理想を実現する憲法の「根本精神」、つまり国民の自由の保障と幸福が達成されていないのである。

そこで、吉野教授は「憲政の精神的根柢」を意味するデモクラシー（民主主義）を実現するには、大日本帝國憲法のもとで、「一般民衆の利益幸福並びに其意に重きを置くという政権運用上の方針」として、「民本主義」を提唱し、その終局の目的は「民衆一般のためになるかならぬか」という点にあるとした。こうして、吉野教授は「人民のための政治」を主張し、その目的を実現するには思想言論の自由、普通選挙の実施（婦人参政権を検討し、選挙権を拡張する）、政党内閣制の実現（議会にたいして超然内閣ではなく、責任内閣制とする）を果たすことによって、（「人民のための、人民による政治」という）「民本主義の徹底的な実現」を主張した。こうして、吉野教授の主張は「大正デモクラシー運動の烽火」となった。

新明は、吉野教授の立論に感銘するとともに、欧米の比較憲法を中心とした政治（学）の現状に瞠目し、学友の山崎とともに同大学法科大学政治学科への進学を秘かに決意した。さらに新明は反元老反軍閥を旗印とした護憲運動にも関心を持ち、金沢に遊説にきた衆議院議員で雄弁家の尾崎行雄や島田三郎の演説会に参加している。

同級生の二歳年上の山崎は、当時の進歩的雑誌『中央公論』や『早稲田文学』などを読み、クラスの学友に盛んに議論をしかけたため、今日で言えば、学友から「浮いて」しまった。だが、新明は思想的に先導する山崎と意気投合し、学内では進歩派を自認した。その後、新明は山崎と同じく東京帝大法科大学政治学科に入学し、大正デモクラシーの風潮のなかで結成された東京帝大新人会に入会したのも、山崎の勧誘があったからである。ともに新人会の機関誌に執筆し、そのうち『先駆』と『同胞』を編集した（後述）。

新明はロシアの文豪レフ・トルストイの『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』などの小説や評論を耽読した。一九一六（大正五）年九月、当時の熱狂的なトルストイ・ブームのなかで、月刊雑誌『トルストイ研究』（新潮社）が創刊されると、当時の文壇や論壇で活躍した阿部次郎や内田魯庵なども寄稿した。新明は定期購読し、自らトルストイアンと認めるほど、彼のキリスト教的人道主義に魅了された。

ところが、新進評論家の広津和郎が『トルストイ研究』（第二・三巻／二・三月号）で「怒れるトルストイ」を発表し、チェーホフと比べて、道徳や宗教を強いるトルストイの圧迫感を非難し、チェーホフの方がはるかに人間的であると論じた。その評論にたいして、新明は早速『トルストイ研究』の読者論壇に「ある種のマンリズム」と題する短文を投稿し掲載され、「トルストイの愛が事実強制を以て民衆に臨んだのは否定しないが、さればとてその心に燃えている真実まで唾棄していいものだろうか」と反論し、広津がマンネリズムの餌食にならないように警告し、さらにトルストイこそ「偉大な人道主義者、愛の宣伝者であった。あゝ時代を超越して愛に飛躍せし灼たる大流星よ」とトルストイの人道主義を絶賛している（第三巻二月号）。

のちに、新明はトルストイの人類愛に基づく人道主義のほか、平和思想にも共感した。晩年の新明は、トルストイによって「平和主義への志向を植えつけられるとともに、戦争と平和について考える場合には、自然とトルストイの人道主義を自分の思想として受け入れて…トルストイの人道主義、しかもその精髄をなしていたともいえる平和主義であった」と回想し、東京帝大法学部で政治学を専攻し、吉野教授の政治的な民本主義を提唱した思想的背景には人生観として人道主義があって、「感化をうけてさらに人道主義的な平和主義をますます高く評価するようになって来た」と回顧している(5)。

こうして、新明は文学青年であるとともに、「人道主義」の思想に開眼し、さらにキリスト教の影響を受けた。彼は当地のカナダ・メソジスト派の白銀教会に通い、白

石和三牧師の司式で受洗した（四高、三学年）。新明は、後任の若い松岡貞一牧師が組織した青年会では牧師に代わって、「キリスト教と社会」と題して講話した（のちに、青年会のメンバーを中心に新明は東京帝大の新人会金沢支部の結成を呼びかけた）。吉野のように、当時の「大正デモクラシー運動においてもキリスト教的思想家が全面にたっている」。また「青年学徒が社会思想に踏み出す門口はキリスト教だった」のである（森戸辰男）。大正デモクラシーの旗手の吉野教授の影響を受け、四校在学中の新明正道もまさにその一人だった。

一九一八年一月、石川県能美郡小松町（現、小松市）の遊郭で、一人の真面目な郵便局の青年が泥酔して馴染みの芸妓を殺害し、女将・仲居など四人に重軽傷を負わせる五人斬事件が起こった。この事件は北陸地方では近来まれにみる惨劇だった。地元の新聞は歌舞伎の「和事」まがいに、興味本位に大々的に報じ、衆人の関心を集めた。新聞には犯人の犯行に同情する投書も掲載され、検事局にも多数の投書が寄せられた。刑事裁判で担当の検事は、法廷で被告人の犯行は同情に値しないとして「社会のために」死刑を求刑した。

新明は「一生」というペンネームで『北陸新聞』に長文を投稿し（九回分載）、トルストイ的人道主義の立場から死刑廃止論を展開した(5)。トルストイの深刻な告白書『懺悔』（一八七九～八二年）で述べているように、最初のヨーロッパ旅行でパリ滞在中にギロチン（断頭台）による死刑執行を目撃して衝撃を受けた。トルストイは現存の秩序や進歩が合理的だという理論で死刑を正当化しようとも、死刑だけは絶対に反対すると主張した。

新明は、犯人に同情するだけでなく、たとえ芸妓であろうとも、被害者にも同じ同情を向けるべきであり、「四囲の錯綜した事情は一個の人間を導いて犯罪に陥れる」こともあり得ると述べた。さらに現代社会では、いたるところに犯罪を引き起こす原因が蔓延し、各人の心のなかに猜疑心や嫉妬心など、犯罪に導く魔物が宿っていることは否定し難いのである。新明は、死刑の判決や執行によって殺人などの重犯罪を抑止することは期待出来ず、殺人などの重犯罪の増加を憂慮するよりも、むしろ社会の改良や真の教育の普及に努力すべきだと主張した。

さらに新明は「宗教を有するものとして」、検事や裁判官にたいして自らの職掌上の立場を離れて、「人を人として裁判せよ」と要求し、刑法上の非人間的な死刑にあくまでも反対した。なぜなら、五人までも殺傷し、さらに死刑によってもう一人の人間を殺すことは、社会的意義に乏しい。しかも今日の文明社会で殺人にたいして死刑という復讐的行為は、極めて残虐な非人道的な行為にほかならないと強調した(7)。

このように、新明は四高時代に「文学青年」、「宗教青年」、政治や社会に真摯に目覚めた「思想青年」である。学友の山崎一雄は四高時代を「雌伏せる時期」、「抑圧と閑暇の時期」と言い、その後の東京帝大の前期新人会の時代と比較して「飛躍的生活の準備的時期」と回顧した。新明は、これまでの金沢の孤独な生活とは異なり、四高ではシュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）の三年間を経験した。のちに、山崎と同じく、新明は漠然と「社会主義」を模索する「思想青年」として成長してゆく「雌伏せる時期」だった。

山崎の回顧録によれば、一九一八年七月、彼は四高を卒業し、上京して東京帝大を受験して合格し、再び九月に入学式に出席した。その間、富山県魚津町の漁民妻女ら数十名が海岸に集合し、米価高騰防止のために米の県外への船積みの中止を荷主に要求した（七月二六日、米騒動の始まり）。その直後、同じ富山湾の西水橋でも米騒動が起こり、富山県一帯に波及した。米騒動は名古屋や京都の両市にも波及し、さらに米騒動は全国各地の大・中都市で頂点に達した。警察は全国各地の米騒動を制止出来ず、軍隊が鎮圧のため出動した。

山崎は米騒動を新聞報道で知ったが、米騒動には「多く介意することはなかった」と回想している。富山県の隣県の石川県の金沢では八月一二・一三日の夜、三三五五神社に集まった群集は、市内各地の米穀商を襲い、米の廉価販売を迫った。その翌朝、警察は金沢の米騒動首謀者数十名を拘束した。その直後、内務省は米騒動に関する記事の差し止めを命令したため、石川県のそれ以後の米騒動について報道されていない。新明は、山崎と同じく、四高を卒業し、東京帝大に入学するまでの行動と、米騒動が全国に波及した民衆の行動について全く言及していない。

もっとも、新明は米騒動への関心は持続し、のちに発行兼編輯人として新人会機関誌『デモクラシー』第八号（一九年一二月）に『地上』の新進作家・島田清次郎の「旧稿の一部―米騒動の感想―」を掲載している。さらに長谷川如是閑と大山郁夫らが発刊した雑誌『我等』にル・ボンの『群集心理』やフロイトの「群集心理と自我の分析」を考察し、群集論四編を発表した。その後、関東大震災と米騒動における群集行動を比較分析して『群集社会学』（一九二九〔昭和四〕年）を刊行している。（後述）

三　監獄からの解放

新明はしばしば監獄について記述している。すでに触れたように、京城中学生の時、自ら囚人になった気持で短歌五首をノートに書き留めた。そのノートは散逸したため、それがどのような短歌であったか明らかではない。東京帝大の初期新人会の時代に機関誌『デモクラシー』第七号に諷刺詩「何といふ怯懦だ！」と題して寄稿している。サーカスの檻のなかで猛獣使に調教され、本然の

力を忘れている「大なる豹」にたいして「猛然と彼の束縛を脱し屈服よりたて！」と呼びかけ、「本当に生きんが為　馴らされたるお前の性格を毀せ／おゝお前は尚ほも逡巡して　この男一匹をこわがってゐるのか」と叱咤激励した。この諷刺詩は、本来的に強力な民衆が国家権力や企業権力という猛獣使に屈服せず、反抗して決起することを呼びかけるとともに、新明自身の反抗と憤激の精神を表現したのであろう(8)。

さらに東京帝大生の新明は金沢支部の機関誌『異邦人』（第二巻第一号、一九二一〔大正一〇〕年）に「人生は牢獄である」と題して、極めてアナーキーな短文を寄稿した。「我等は人生の監獄に於いてショーペンハウエルの諦めの心持に陥ることなく、ニイチエのあの雄々しい反抗の声に共鳴しなくてはならぬ。此の反抗の精神、其の憤激の精神こそは、永久に我等の進展して行く基調である」と強調した。

新明は人生を牢獄、社会を「見えざる鉄鎖、見えざる牢獄」に喩えた。そして「牢獄の内部に於いて、草花を培い詩を作るとも、其は自由なる太陽の光に浴しない。牢獄の内部おい（ママ）、何を工夫し何を発明するのか。其の建設は卑しい建設である。奴隷人の建設である」として、牢獄の存在を根源的に否定し、「我等は檻の内に在り乍ら、我等を繞る冷たき鉄柵を忘却する彼の獅子の如くであっては成らぬ」と警鐘乱打した。

新明のサーカスの檻、監獄、牢獄への固執は何に由来するのであろうか。すでに触れたように、新明は四高から東京帝大政治学科に進学した。新明は父が期待したように、大学を出て文官試験を受け、官界の道を選べば、高等官吏に立身出世することは不可能ではなかった。ところが、新明は吉野作造の民本主義の啓蒙思想に触発され、さらに東京帝大で初期新人会の活動を通して国家や行政の欺瞞性を知り、官界への道を人生観として思想的に拒否した。「監獄からの解放」は四高時代にすでに新明の琴線に触れたことであるが、新明自身の内なる「家父長制」からの自立宣言であり、かつ集権的・超国家主義的な「専制政治」への抵抗宣言に他ならない。

（注）

（1）八木正「新明正道先生と金沢」（『新明社会学研究』第四号、新明社会学研究会、一九九四年）。山本鎮雄・田野崎昭夫編『新明社会学の研究』（時潮社、一九九六年所収）。

（2）中川善之助「春草の夢」（『人生万華鏡』、勁草書房、一九六八年）。四高以来、中川が典獄になることは、儚い「池塘春草の夢」に終わった。

（3）新明正道「新明正道先生・回想の八十年（インタビュー）」、一九七七年一一月（『新明社会学研究』創刊号、一九九二年。山本鎮雄・田野崎昭夫編『新明社会学の研究』所収、一九九六年）。

（4）新明正道、前掲書。

（5）新明正道「文学青年の思い出」（一九二九年三月）。山本鎮雄編『新明正道　時評集』所収（時潮社、二〇〇七年）。

（6）新明正道「平和思想への志向―人道主義と社会主義―」（創価大学『平和研究』第二号、一九八一年）。東京帝大政治学科で恩師の吉野作造教授の思想的影響、その後の彼自身の思想的遍歴を自伝的に回顧している。吉野博士の民主主義の主張について、のちに「博士のこの見解は自由主義だけでなく社会主義（第二次大戦後、ソ連・東欧で実現された社会主義、引用者）をも入れてその共通的原理たるべきものとして民主主義の原理的な意義を強調されたものとして、実に現代においてもなお妥当性を要求し得るものであったと判明して来る」と解釈している（新明正道著『ワイマール・ドイツの回想』所収（新明綾発行・家永登編集、一九八四年）。

（7）新明は『北陸新聞』に投稿している（一九一八〔大正七〕年三月二四日～四月四日（九回分載）。「一生」というペンネームを新明筆と判定したのは、「文学青年の思い出」（前掲誌）で「金沢で五人斬事件といふものがあった。僕は、トルストイ主義から死刑廃止論を振翳（ふりかざ）して犯人の擁護を地方新聞で試みた」という回顧に照応するからである。新明はその後も『北陸新聞』に「残虐性と愛」と題して七回にわたって分載している（一八年五月二日～一一日）。のちに、いずれの論調も「基督教人道主義の定石を全く一歩も出るものではなかった」と回顧している。

（8）新明正道「何という怯懦だ！」（『デモクラシー』第一巻第七号、一九一九年。復刻版『新人会機関誌』所収、法政大学大原社会問題研究所編、一九六九年）。

資料発見の旅（金沢）

第一章と同じ、資料発見の旅は金沢の石川県立図書館である。在職した大学から個人研究費が交付され、出張旅費を使って資料収集のために良く金沢に出かけた。日本三名園の兼六園を一回りしたが、くたびれてしまい、観光客に人気の再建された金沢城まで出かけたことはなかった。戦後、この跡地に金沢大学があったが、大学は郊外に移転した。金沢へ行くと、たびたび出かけたのは石川四高記念文化交流館（石川近代文学館）、その前にある四高の学生の立像を見た。石川県立図書館にも随分出かけた。

すでに触れたように、新明博士の「文学青年の思い出」には四高卒業時に「記念として歌集を印刷に付した。『ミトセ』という小っぽけなものである」と書かれていた。そこで、石川県立図書館の蔵書をインターネットで検索したところ、この図書館に『ミトセ』（白雨社同人）が収蔵されていた。ところが、本書は「禁帯出」のために、私が住む近くの公立図書館から貸出しの手続きは出来ず、石川県立図書館に出かけ、そこで閲覧するしか、他に方法がない。

すでに触れたように、「みとせ」は「三年」「三歳」をいい、「みとせの春」は高等学校の三年間を意味し、一般には旧制高校の在学期間をいい、しばしば旧制高校の校歌や寮歌に登場する。果して、『ミトセ』が新明博士を同人とする卒業記念の小歌集であるのかどうか、実際に文献を見ないと分からない、いささか不安があったのも否めない。実際、石川県立図書館で『ミトセ』を手に取ると、私の不安は解消された。白雨社同人が短歌の形式で三年間の内的生活の成長過程を表現し、卒業記念に作成した小歌集だった。どのようにして、この図書館に収蔵されたのか、その経緯は分からない。

新明博士、山崎一雄をはじめ、同期の卒業生名簿を見ると、同人一〇名のうち、七名は四高第一部（英法科）の同級生である。新明博士は「砂丘」と題して四〇首を掲載している。すでに触れたように、金沢以西の日本海を臨む壮大な内灘砂丘は、四高生にとって浩然の気を涵養し、将来を嘱望されたエリートの情緒的・文学的な象徴であったろう。作家の井上靖が四高の受験期に柔道部で交流した自伝的小説『北の海』には金沢市金石の「砂丘」で戯れる個所が書かれている。

以下、新明博士の小歌集『ミトセ』から憂愁に溢れる短歌五首を任意に紹介する。

祖母やみて五日になりぬ風いたみ壁にきてなく
こおろぎあはれ

病める友厠にたちぬぬけがらのベットが白し秋風ふけば

しづやかに川流れゆく冬空の涯につづきて白し砂丘

尊かる人生いきぬ世に生くる身のわれも水草か寂しさの増す

ひと株の山吹あたら荒らしたる弟ねたしさみしきわが春

新明自身は心情として短歌特有の「抒情」を表現するよりも、むしろ「叙景」を表現することを好んだという。そのため、歌会では出席した同人から高い評価を得られなかったと、回顧している。だが、「詩脈」の切れた時期もあったが、生涯を通して作歌と作句を続け、後年、風景を描写し、俳画を作成し、「教え子」たちに記念として贈った。



新明の実母が白い絣りの着物を縫い、四高卒業の記念写真。「無欠席」で首席で卒業した。



四高卒業記念に歌会「ミトセ」同人の最後の集会
（於、兼六園内の茶席）
ほぼ中央の学生服が新明正道。
山崎一雄は後列の左から二人目。

千家尊福伝（八）

男爵より上位を求めた神職華族

村上邦治

はじめに

慶応三年（一八六七）、一五代将軍徳川慶喜の「大政奉還」により幕府は倒れ、その後鳥羽伏見の戦いから、明治二年（一八六九）の戊辰戦争終了まで、国内の混乱は続いた。その間、維新政府は、「王政復古の大号令」、「五箇条の御誓文」、「政体書」等の布告により、慌ただしく、新しい政治体制の骨格を、決定していった。

新政府の最初の難題は、鎌倉期から七〇〇年続いた封建制度を、天皇中心による中央集権体制、如何に平穏に実施できるか、であった。当時政府は、未だ軍事・警察力を保持しておらず、諸藩や士族の反乱を、最も恐れていた。その為、旧制度の廃止は、漸進的な政策を採らざるを得なかった。

明治二年一月、まず、薩長土肥四藩主により、「版籍奉還」を上表させ、五稜郭の戦いの終結をみて、六月全藩主に奉還させた。これにより、大名・藩主を廃止したが、そのまま知藩事に任命し、旧体制を維持するとともに、次のような布告をした。

「自今公卿諸侯之称被廃、改て華族と可称」

新たに特別身分として、「華族」を設けたのである。奉還大名と公卿達の名誉・体面を、新設した「華族」という身分で一括したのである。

明治四年、この華族に、新たに地方の名家が、付け加えられた。長い歴史を持つ神社の神職家である。この第一号になったのが、出雲大社神職千家尊澄と北島全孝であった。大国主神を祭神とする出雲大社の祭祀を、代々

護り続けた出雲国造家は、皇室に次ぐ名家として、改めて認められたのである。

一　華族創設

明治二年五月、新政府に最後まで抵抗する旧幕臣軍を、鎮圧した翌月、政府は「版籍奉還」を断行し、中央集権化に乗り出した。諸侯（江戸幕府に直接臣従した表高万石以上の武家）と呼ばれた藩主を、そのまま知藩事に任命するとともに、新たに急設した「華族」と称して、その名誉と面目を護った。諸侯華族と呼ばれた、二八五家である。

一方、前年一〇月に天皇の東京（明治元年江戸を改称）行幸が行われ、古い因習にとらわれた京都に代えて、東京を政治の中心と目論む政府は、古くから続づく家格（摂、清華、大臣、羽林、の各家）を廃し、新設の「華族」に統一して、遇することにしたのである。公卿華族と呼ばれ、一四二家が選ばれた。こうして当初、諸侯・公卿が一体化した「華族」に列したのは、合計四二七家であった。

尚、この中には、新公卿として、大政奉還後に公卿になった、岩倉具視の三男具経や、腹心であった玉松操ら五家と、諸侯では、徳川御三卿、御三家の家老五家、毛利家の家老職吉川家、旗本で准諸侯扱いされた交代寄合家七家の一六家が含まれている。

明治二年六月以降、華族令が制定される明治一七年七月までに、華族には、当初の原則が徐々に緩められ、新たに七六家が加えられた。

まず、当初何らかの事情で遅れた、御三卿の清水家、琉球王家など七家である。

次に、華族の公卿諸侯の分家である一七家が、天皇の「特召」により、加えられた。維新の功績が特に高かった、岩倉具視や三条実美らの公卿分家七家、諸侯では島津久光家（一度も藩主にならなかった）や徳川、山内、毛利、前田各家などの分家一〇家である。

また、「奈良華族」と称された、公卿分家も華族に加えられた。江戸末期まで興福寺に属していたが、維新時に僧籍を捨て、実家に復籍（四家）、あるいは藤原氏出身で春日神社に奉仕（二二家）した、計二六家である。

また歴代の天皇・皇族や公卿家から、養子として多く受け入れ、当時も皇族や摂家出身者が住職をしていた、浄土真宗関係の四家（仏光寺渋谷家、興生寺華園家、専修寺常盤井家、錦織寺木辺家）である。この四家が華族になれば、当然東本願寺と西本願寺の大谷二家も華族になった。

この間、士族から初めて華族が生まれている。大久保（利通）、木戸（孝允）、広沢（真臣）の三家である。昇

格の理由は、いずれも維新における功績であった。利通、真臣は暗殺され、孝允は癌死の直前まで、政府の首脳として指揮を執っていた。これらの勲功により、その跡継ぎが華族となった。本来なら、華族になれない士族の身分であったが、天皇の「特召」の形をとって、華族に列せられたのである。もっともこの時期、華族令制定の検討段階において、すでに士族の華族昇任は内定されており、士族が華族になることは、既定のことであった。

これら華族となった、皇室・公卿、諸侯の各関係家、勲功のあった士族以外に、全く異質な家柄が華族に加えられた。南北朝期の南朝忠臣家と、由緒ある神社の神職家である。

南朝方の忠臣という理由で華族になったのは、新田家（新田義貞の子孫）、菊池家（九州菊池武敏、武光の子孫）、名和家（名和長年の子孫）の三家である。南朝方最大の武勲者楠木正成の子孫は絶えており、華族に代えて、正一位を贈った。維新政府は、明治天皇が明らかに北朝の血統であるにもかかわらず、天皇親政という政治体制を重視した、南朝正統論を評価したものであった。

二　神職華族の誕生

討幕の精神的主柱となった国学・復古神道の高まり

と、天皇中心体制を築こうとする維新政府は、明治四年一二月、出雲大社神職北島全孝と千家尊澄の出雲国造二家と、住吉大社神職津守国美を、神職として、初めて華族に列した。この任命に当たっては、何処からも文句が出ない、神道界を代表する二大社の神職が、選ばれた。

出雲大社神職二家は、最初に選ばれたのであるが、この四年一二月は、微妙な時期であった。出雲国造家は、南北朝期に、北島、千家の両家に分裂し、以後大社祭祀は、両家にて隔月毎に交互に分担してきた。しかし、維新後、幾度も神社に関して、政府の管理が強化され、神道国教化策が、採られてきた。明治四年五月、神社改正により、神社の社格が定められ、さらに、神職は世襲制から、政府任命制に変更になった。出雲大社についても、両家にて分担して、祭祀を務めることが出来なくなった。

明治五年一月、千家尊澄と北島全孝は宮司を免ぜられ、改めて、尊澄長男第八〇代尊福と、全孝長男第七六代脩孝（なかたか）を、少宮司に任命した。そして、明治六年三月、政府は出雲大社大宮司に千家尊福を、北島脩孝を、岡山吉備津神社宮司に任命したのである。代々出雲国造家を継いできた北島国造脩孝は、この任命を受け入れず、出雲大社に隣接する北島国造館に留まったのである。しかし、最早、大社祭祀には一切、関われなくなった。華族の任命が、一年遅れておれば、北島家の華族列席は、難しか

ったかもしれない。

津守家は、摂津国難波津一帯を管掌した豪族で、神功皇后時代から、代々住吉三神を祀ってきたとされ、大社は『住吉大社神代記』によると、斉明天皇期に創建された。遣隋使、遣唐使の派遣時は、航海安全祈願が行われ、古来より海の神様として、信仰が篤かった。津守家は代々世襲され、国美は七四代であった。

両大社とも、社格は最高位の官幣大社に格付され、世襲してきた宮司家も、その歴史を誇り、自他ともに認める神道界の名門であった。

続いて半年後の明治五年五月、阿蘇神社（阿蘇惟敦）、宇佐神宮（到津公誼、宮成公矩）、日前・国懸神宮（紀俊尚）、伊勢神宮（河辺教長）、熱田神宮（千秋李福）の六家が追加された。

阿蘇氏は、肥後国の豪族で、景行天皇時に創始された阿蘇山の神を祀る阿蘇神社を、代々祭祀したと伝えられている。奈良朝期より郡司として当地を治め、肥後一宮として信仰を集めた。南北朝期一族の中には、菊池一族とともに、南朝方として戦っている。その後内紛や盛衰を繰り返してきたが、惟敦で八七代を数えた。しかし、この時期国幣中社に位置付けられており、明治二三年官幣中社に、官幣大社になるのは、大正三年である。社格は他社と劣るものの、歴史は他に劣らず、一二〇〇年を超えるものであることから、選ばれたものであろう。

宇佐神宮は、応神天皇の神霊である八幡大神を祭神として、古くから皇室との関係が深く、鎮護国家の神として、篤い信仰を受けた。特に大仏造立の際、神託を下して以来、皇室との結び付きは強く、称徳天皇時、天皇を目論む道鏡を、最後の手段として、神託にて阻止している。平安朝廷は、山城国に、宇佐の分神として、石清水八幡宮を勧請し、身近に置くと共に、南の守り神としている。宇佐氏が世襲してきたが、南北朝期、宮成、到津などに分裂、以後各々継承されてきた。

日前・国懸神宮は、同一境内に並んで建てられ、『延喜式』にも名神大社として、記載されている。紀氏は、紀伊国造として紀伊国を支配した豪族で、代々国造を称して、日前・国懸神宮の祭祀を受け継いできた。継嗣が断絶し、二度女系に替ったが、俊尚で七七代続いていた。

熱田神宮は、三種の神器の一つ草薙神剣を祀り、景行天皇期、日本武尊が立ち寄り、尾張氏の娘を娶り、創建されたのが起源とされ、伊勢神宮と並び、皇室にもっとも深い神社であった。宮司は尾張氏から平安末期藤原南家に移り、藤原・千秋氏が宮司を務め、尾張氏は権宮司を務めた。阿蘇を除く、これら各神社は、いずれも官幣大社であり、神職家も長い世襲を誇っていた。

伊勢神宮神職河辺氏は、中世より代々大宮司を世襲し

た大中臣姓。中臣氏の系譜に属し、度会郡河辺の里に住んだことから、河辺氏と称した。教長は三室戸家から養子で河辺家入った。三室戸家も、一六世紀より代々伊勢神宮の祭主を務めてきた、藤波家の一族である。伊勢神宮の社格は、官幣大社よりさらに上の、別格の最高神宮であるが、河辺氏は、近世より祭主となっていることから、二番目に入ったものと思われる。

第三番目には、明治六年七月、福岡県英彦山神社（祭神天忍穂耳尊）神職高千穂有綱が加わった。古くから西国最大の修験道の霊場として栄え、神仏習合し、彦山権現として天台宗に属していた。一七世紀霊元天皇から「英彦山」の称号を授け、以後同じ呼び名であるが、英を付けた名称となった。維新時に修験道を廃止、英彦山神社に改称した。一四世紀に後伏見天皇の第八皇子を座主に迎え、以後高千穂家として代々祭祀を務め、世襲してきた。当時の社格は国幣小社と低く、その後明治二三年、官幣小社に、三〇年官幣中社に昇格している。

四番目に、明治六年一〇月、日御崎神社神職小野尊光が華族に列した。『出雲風土記』、『延喜式』に掲載のある古社であるものの、社格は上位ではなく、上の社がスサノウ尊を祀る事から、出雲大社に繋がる神社と思われてきた。平安末期以降、社領を広げ、出雲大社とも、しばしば境界紛争を起こしている。小野家は代々神主を務め、一時日置姓を名乗り、奈良朝期まではさかのぼる。当時は国幣小社に位置付けられており、その後も昇格は無かった。

五番目として明治八年九月、島根県石見の物部神社神職金子有卿が選ばれた。祭神は神武天皇東征のとき、賊の大将ナガスネヒコを倒した宇摩志麻遅命とされ、物部氏の祖である。豪族物部氏の一族で、石見に住まい、代々石見国造を務めたとされる。『延喜式』では名大社ではないが、石見国一宮であった。一二世紀末より、金子氏と称し代々世襲してきた。物部神社も日御崎神社と同じく、当時から国幣小社に据え置かれ、その後も昇格はなく、社格は低位であった。

出雲に近い、小野、金子両氏の華族選任は、尊福にとって、心穏やかではなかったはずである。出雲・石見における、出雲大社の存在は圧倒的であり、出雲国造家は、皇室に匹敵する家柄と自負していた尊福にとって、小野・金子両氏が、同格の華族に列せられたことは、驚いたことであったろう。この思いは、その後の叙爵時に、露わになるのである。

六番目として、明治一五年六月大宰府神社神職西高辻

信厳が加わった。当初菅原道真の廟所として創建され、直系の子孫である西高辻家が、代々太宰府天満宮の宮司を務めた。道真がそうであったように、文章博士として、朝廷の学術顧問を世襲してきた。社格は、当時国幣小社と低く、華族になると同時に官幣小社に、明治二八年中社に昇格している。幕末、京都を追われた尊王攘夷派の五卿が、二年間滞在、西郷隆盛、高杉晋作、坂本竜馬ら多くの勤皇志士と、討幕の会合を重ねた明治維新発祥の地、としての評価もあったのであろう。

明治一六年二月、最後に伊勢神宮神職松木美彦が選任された。代々外宮の禰宜を務めた渡会家の一族で、松木氏は近世初頭より、居住地名の松木を称してきた。華族入りは当然であった。

三　華族令と叙爵

華族令は明治一七年（一八八四）七月、公布された。明治二年華族制が発足して、既に一五年経過していた。天皇は「公卿・諸侯の称を廃し、ことごとく華族と称し、別に等級を分かつことなし。」との思いを持っていたが、三条や伊藤博文らの献策を受け、「旧公卿に摂家・清華・大臣家等の別あり。旧諸侯に大広間・溜間・帝鑑間・雁間・柳間・菊間等の別在り、是等の別をことごとく撤し、同一たらしむるは事実に於いて可ならざるものあり」と、最終的には、同意した。

維新政府には、急ごしらえの「華族」という階級を作ったが、それに序列が無いのは、不自然であり、早くから華族の階級を、検討し始めた。西欧諸国には、貴族（華族）階級は、序列が確立していた。調査の結果、イギリス、フランス共に、五等級あり、これを手本として、古代中国周の、公候伯子男という爵の名称を、そのまま採用することにした。

叙爵内規は、次のように定められた。

公爵（旧摂家、徳川宗家（家達）、偉勲ある者）
侯爵（旧清華、徳川旧三家、五万石以上大藩知事、旧琉球藩主）
伯爵（大納言まで旧堂上、徳川三卿、五万石以上中藩知事）
子爵（一新前家を起したる旧堂上、五万石未満旧小藩知事）
男爵（一新後華族に列せられたる者）

侯爵以下には、「国家に勲功ある者」という項を、付け加えた。これは明らかに、討幕に功績のあった士族、特に薩長土肥の下級武士達の、華族入りを狙ったものであった。詔では「文武諸臣中興の偉業を翼賛し、国に大労ある者均しく優列に陞」と述べ、これを裏付けている。

伊藤博文が責任者として、作成したこの華族令は、実質的には爵位令であった。叙爵内規をみると、「家格規定」と「勲功規定」からできており、問題は、勲功の藩閥士族に、どの爵位を与えるかであった。

公爵一一名は、一条、二条、九条、近衛、鷹司、徳川（家達）は、内規通りであるが、岩倉、三条、島津（忠義、久光）、毛利は、勲功規定により与えられた。

侯爵二四名は、公卿華族九名、諸侯華族一三名、元士族二名（大久保、木戸）である。勲功により士族二家が選ばれ、公卿の中山忠能（平堂上）は、明治天皇の外戚ということも、考慮されたと思われる。

伯子爵には、華族令発令と同時に華族となり、爵位を得た、勲功士族二九名が加わった（男爵はいない）。長州（伊藤、井上、山縣ら八名）、薩摩（松方、黒田、西郷ら一三名）、土佐（佐々木、谷、福岡ら四名）、肥後（大木、副島ら二名）、その他一名と、圧倒的に薩長土肥に偏ったものであった。

男爵には、内規に基づき叙爵されたが、神職華族一四家と、南朝忠臣華族三家は、全て男爵に位置付けられた。

大谷家を始めとする真宗六家は、大谷家で内紛が起きており、このとき、叙爵はされず、一二年後に与えられた。

四　叙爵の不満

博文を中心に、三条や柳原前光賞勲局総裁らが、長期にわたり、用意周到に、華族令、爵位内規を作成した。さらに対象者を、綿密に調査・評価し、実施されたのであるが、公表されると、案の定、不満者が続出した。

最初に陞爵（昇爵）を表明したのは、旧福井藩主松平家（伯爵）であった。維新時、春嶽の勲功を主張し、侯爵を願った。（後日侯爵へ陞爵）

次は、旧対馬藩主宗家（伯爵）である。韓国外交の窓口として、足利朝以来、大藩と同じ国主の待遇を受けてきたことをその理由とした。（認められず）

公卿の東久世家（伯爵）は、長州七卿落ちの一人として勲功を主張した。（侯爵へ陞爵）

三条一族の嵯峨家（伯爵）は、幕末時岩倉具視と共に、薩長両藩に討幕の密勅（実は偽勅）をだし、王政復古成功の大きな契機となったことから、具視から、生前時に侯爵の内意をもらっていた。（後日侯爵に陞爵）

そのほかにも、陞爵の請願が相次いだのである。

五　尊福の陞爵嘆願

神職は全て、男爵に位置付けられたが、もっとも強くまた長期にわたり、陞爵の運動を続けたのは、尊福であった。一七年の叙爵直後から、約四年間にわたり、陞爵嘆願運動をしたのである。

まず、宮内卿に働きかけた。しかし宮内卿には、陞爵の実権は、持ち合わせていないことが判明する。その為、当時の最高位太政大臣三条実美に頼ることとし、嘆願を続けた。華族は天皇の藩屏になることが謳われているが、出雲教学では、大国主命幽冥界主宰神とともに、皇室守護神を掲げており、古来より皇室を御護りし、繁栄を願ってきた尊福にとって、その他の神職家と同格の、最も低い男爵には、我慢ならなかったのである。祭神論争では、大国主神は天照大神に匹敵すると主張して、多くの神官の支持を受け、社格においても、伊勢神宮と同等の、官幣大社よりさらに上の、別格を要求した尊福にとって、神職は全て同格とするこの処置に、不満であったのである。

実美に宛てた「嘆願書」では、このとき、本願寺大谷二家をふくむ浄土真宗六家は無爵のままであったことを持ち出し、

「真宗の教法家たる大谷光尊（真宗本願寺派管長）の叙爵の栄典に洩れたるに比すれは、有爵者の御優待を辱くするは一家の名誉に候得共」と、自らの陞爵を求め、さらに

「旧神官中には旧来、家格由緒の差異あるは、なお公卿家に摂家、精華等の別在り、大名に種々の格式あるが如くにして、（略）爵を賜るについても高家武家の旧来の家格によりて区別を立てられたるに準じ、差異たてさせらるべき義と存じ候。賜爵の儀に於いても、また他の旧神官同一にては、せつかく古来御優待をかうむり候かど、あひ立たずと存じ候。」

と、尊福の強い思いを嘆願している。まさに神代から、国土を天皇家に譲渡し、幽冥界の主宰神として皇室を支えてきた、誇りと自負を主張しており、幾度となく、三条太政大臣に陞爵の嘆願を続けたのである。

こうした執拗な嘆願を続けたのも、理由があった。華族令発令前であるが、「三条家蔵秘簡」の叙爵内規の中に、「華族四等（子爵）千家、北島、両大谷家、五等旧神官格別由緒ある者」との記述があり、出雲国造家を、その他の神職家と差異をつけた試案が存在していた。この情報を何らかの筋から、得ていたのかもしれない。いずれにしても、尊福は陞爵にこだわったのである。

おわりに

明治四年、神職として、真っ先に華族に列せられ、面目を施した尊福であったが、明治一七年叙爵においては、神職一四家いずれも同一の男爵とされたことには、納得できなかった。その後もあらゆる伝から、陞爵を嘆願したが、なしとげられなかった。激しかった祭神論争が、ようやく収まり、ここで、尊福を、一段上に陞爵させることになれば、再び、論争に火がつくかもしれず、一度否認した大国主命の霊冥界主宰神を、認めることにもつながりかねない事を、危惧したのかもしれない。

一方、浄土真宗六家は、一二年遅れた明治二九年（一八九六）に叙爵されたが、大谷二家は二階級上の伯爵、その他四家は男爵と差異がみられた。尊福の嘆願が、このときにも行われていたならば、実現できていたかもしれなかった。

しかし、すでに尊福は、貴族院議員であり、しかも埼玉県知事に就任しており、もはや、神職として、陞爵嘆願を出す立場ではなかった。また前年に日清戦争が終結し、この戦争の功績で、軍人三〇名（陸軍二六名、海軍四名）が、華族に列し、子爵三名、男爵二七名が誕生していた。さらに、大谷家ら僧侶の叙爵と同時に、財閥を中心とした資産家三名（岩崎久弥、弥之助、三井八郎右衛門）が、初めて経済発展の功により、華族（男爵）となった。爵位が、当初の華族令布告時とは、もはや異質なものに変わってきたことも、陞爵の熱意を失わせたものと思われる。

尊福自身は、長かった嘆願運動を通して、「男爵よりも上の爵位」、との思いを、強くしたのではなかろうか。その証拠に、元老院議官、続いて貴族院議員になるのであるが、政治経験が浅いにもかかわらず、男爵グループの筆頭として、会を引率したのである。その後も、政治の世界でも、一派の領袖として、政界に大きな影響力を及ぼす、政治家となっていった。

尊福は、男爵であったが、何時も「その先頭の立場に位する」、との信念を、誰よりも持っていたのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

殉教（八）

鍋屋次郎

雪の中を栃ノ木峠（福井県南越前町板取・滋賀県伊香郡余吾町中河内の間にある標高五三八mの峠）から下る途中、降雪が激しくなりこれ以上進むことは危険と判断して、雪洞を掘って一夜を明かした翌々日午後、一行の引率・監督責任者の今枝出羽守が全員を集めて

「今日はあと半日の道程、そこには天台宗比叡山の山脈に連なる歴史の古い僧坊があり、建物は広い。布団その他寝具は揃っているので、悪路で疲れた体を休めてほしい」

と、護送の役人と虜囚に対してねぎらいの言葉をかけた。

栃ノ木峠を越したところで、護送の役人と虜囚が協力して雪洞を掘って一夜を明かした後は、この集団には一般的な監督・看守と虜囚との相対する冷たい関係から、仲間意識が芽生え、とくに虜囚の女性や子供たちを役人が励まし、ときには助けながら歩いていた。

出発後暫くして一休みしているとき、今枝出羽守が高山右近のところに来て、

「高山殿、お聞きしたいというか、教えてもらいたいというのかわからないけど、今夕、身どもの部屋で一緒に夕食をしていただけないか」

と呼び掛けられ、右近は

「どのようなお話でしょうか。ご指示であればここで伺いますが」

「いや、職務上のことではなく、高山殿ご一家、内藤殿ご一家の日ごろの態度というか、生活姿勢というか、このような状況の中で、日々の過ごし方があまりにも見事とであり、これがキリシタンの信仰に基づく生きる姿勢なのか、とほとほと感心している次第です。そのようなわけで、身どもに理解できるかどうかわかりませんが、キリシタンのことをお聞きしたいので」

「わかりました。どのようにお話しできるかわかりませ

んが、お部屋にお伺いしましょう。それにしても夕食をすんでからにしたいと思いますが」
「いや、すでに身どもの部屋に二人分運ぶように伝えてあるので、遠慮は無用に」
この申し出を受けて、右近は雪が今でも降りそうな黒い雲を眺めながら、キリシタンのことを何も知らない人たちに、どのように説明したらよいか考えていた。そこへ内藤如安の息子、内藤好次がそっと右近のところに近づき
「高山様、今枝出羽守様からはどのようなお話が合ったのですか。お差しさわりがなければお伺いできますでしょうか」
と不安な面持ちで囁いてきた。右近は
「なに、特別のことはない。今夕の夕食を青木出羽守の部屋で一緒にしながら、キリシタンのことについて教えてくれと」
「高山様はお受けになったのですね」
「うん、受けたよ」
「危険でございます。今枝出羽守は密かに高山様を亡き者にし、そのうえで虜囚の処分を考えているのではないでしょうか。我々を安心させるために、世の中でいう「虜囚の取り扱い」よりも我々に対して甘い処遇になっているのではないでしょうか」
「お前はどうにもならないことをよく考えるな。今我々の生殺与奪権は先方にあり、我々はどうすることもできない状態だ。この儂を殺したければ、いままで機会はいくらでもあったのではないか。お前もキリシタンであれば、そのようなことは考えないですべてをデウス様に任せなさい。デウス様はどのようなことでもすべてが結果として信ずる者に最善であるように取り計らってくださる。それは人知の及ぶところではない。お前の父親の如安殿はどのように申されているか」
「はい、如何なる状況になっても、すべて高山右近様に従うように、と申しております」
「勝手な邪推は思わぬ出来事を招く。心を謙虚にしてすべてをデウス様にお任せせよ」
好次は右近に深々と頭を下げて、列の中に戻っていった。
右近は今歩いているこの辺り・・・坂本（大津市内の町名、比叡山延暦寺の門前町として栄えた）から越前への道・・・は何度も戦で駆け回っていたので、山の形を見れば今どのあたり、という見当はつく。明日には近江坂本も望見できる場所に行けるだろう。右近たちの護送役人は前田家中の役人であるが、坂本に着けばすべて京都所司代の役人に代わり、処遇が厳しくなることを覚悟

しなければならないなど思いを巡らしていた。
日が暮れる前に、大きな僧坊についた一行は、湯を沸かす者、米を炊く者、用意されていた野菜を切る者、おにぎりを握る者などそれぞれが手分けして夕食の支度にかかった。
酉の刻頃、右近は今枝出羽守に呼ばれて、奥の一室に入り一緒に食事を始めた。食事は出羽守の用人が細々と気を使ってくれ、食事が終わると出羽守は用人に部屋から引き下がるように命じて
「ところで高山殿、これから不躾な質問をいろいろとさせていただくことをお許しいただきたい。最初に、キリシタンの人々は、朝、その日の初めに祈り、食前には必ず祈り、寝る前にはその日の感謝の祈りをささげている。そしてその日に犯した罪を詫びている。我々から見ると何も罪を犯していないと思うのに。更に聞いていると今日の一日を過ごしえたのもデウス様のお陰と聞こえるのだが、自分の力で生きていてそれがなぜデウスのお陰なのか、私などには理解できないことばかりで」
「うーん、どのように説明申し上げようか。デウス様はこの世のすべてをお創りになられたお方です。今枝様、私たちが住んでいるここでは、冬には雪が降り、春には草花や樹木が芽を出し、夏には草や樹木が生い茂り、秋には多くの樹木に実がなって、四季それぞれ花鳥風月すべてが私たちを楽しませてくれる。私たちは人間として生きている限り、そのように自然から計り知れない恩恵を受けていますよね。これは私たちが生まれる前からこうなっているので、当たり前と思われるかもしれませんが、これを私たちに与えてくださったのはデウス様です。だからデウス様に感謝すべきです」
右近は今枝出羽守の反応を確かめるように、一息ついて茶を口に運んだ。
「先ほど今枝様は犯した罪を詫びている。何も罪を犯していないのに、とお話がありました。それは、イエス・キリストが人の生き方としてデウス様の命じられたことをキチンと日々行うように人間に命じています。キリシタンは自分の思いでも行動でも、命じられたことに反したことがあれば、デウス様にお詫びします。命じられていることは、具体的には十戒と慈悲の所作十四か条があります」
「どのようなものなのか」
「はい、その大意は、人は生きる上において、例えば誰かを助けても、助けてあげたという考えは持たないで、あの助けで大丈夫だったのか、まだ他になすべきことがあったのではないか、というように、自分の思いのうちに、自分が助けたことを誇らないで更に一層謙虚な気持ちを持たなければいけないということです」

「うーん、なかなか難しいが、それは自分の大切な人に対してだけではだめなのか、例えば息子とか娘など家族に対してでは」

「自分のご家族に対しては、みなさん、そのようになさいますね。デウス様の言う相手とは、分かりやすく言えば自分の周りにいる全ての他人です。全ての他人に対して人間としての接する心を教えているのです。それは自分の心の動きを謙虚に思い直して、自分の心がデウス様がお命じられたように動いていなければデウス様にお詫びすることになります」

「うーん、理屈はわかるけど、自分の行動でなく心がどう思ったかまでねえ。・・・・それから、キリシタンは街道途中の神社・仏閣・路傍のお地蔵さんなどにお参りどころか頭も下げないし、全く無視しているがそれは何故か」

「はい、そこがキリシタンの宗教が、日本に根付かない大きな原因だと思っています。それはキリシタンの世界では、神様はデウス様しかいない。デウス様が人間への語りかけの冒頭に、神はデウスのみで、他のいかなるものも神としてはならない、と命じているからです」

「何故か」

「日本では人間が死ぬと、生きているときに名声が高かった人は神になり、その他は全員仏になります。また、天皇家のような神道の世界では死んだ人は皆神になります。キリシタンの世界では、人間は神が作られたものであって、そのような神の被造物である人間が、死んでも造物主のデウス様と同じにはならない、という考えです。どこまでも被造物です」

『そうすると、キリシタンの神は一つだけだから、例えば「戦に勝たせてください」とか、「学問が身に付きますように」とかの祈りは、戦の神様と言われる熱田神宮とか、学問の神様と言われる大宰府天満宮とかでなく、全てデウスという神様に祈るのだね』

「私たちキリシタンの祈りは、そのような具体的なおねだり的な祈りではなく、神様が人間にお命じになった、先ほど申し上げた十戒とか慈悲の所作十四か条、それらが自分の思いや言葉や行動によってできなかったことをお詫びして、そのうえでの祈りは、私たちの信仰を神様のお命じになられた全てを全うできる信仰に成長させてください、という祈りです。もしも欲しいものがあれば、それが自分に与えられることがデウス様の御心であればそうしてください、という祈りになります。単純な欲しいものねだりではありません」

「ということは、全てをデウスという神の命じられたように生きてゆく、ということになると思うが。だから今江戸の幕閣がキリシタンを捨てろ、と言っても、デウスの命令が幕閣の命令以上に絶対であるから受け入れることはできない、と理解していいのだね。ということは、

あなた方は生きることよりも信仰を続けることによって死を選択していることになるが、その辺が理解できない」

「理解できないと思います。ですからお役人は頭から問答無用でキリシタンを罪人にしています。端的に言えば、幕閣の命令に従わないで、それで殺すなら殺してくれ、という人間は、施政者として放っておけないですね。私たちはデウス様の命令は人間が生きてゆくうえで絶対的に必要な、なければならない命令であり、そして、デウス様は信仰を持って生きれば必ず私たちを天国に迎え入れる、と約束しておられます。信仰を持っていれば、死の時に必ず犯した罪は許され、そして地上で流した涙は拭われ、これ以上の安らぎのない神の御許に迎え入れられることを約束しています。ですから、私たちの人生の最終目標は、神様のお命じになられたことを、思いでも、行いでも、言葉でも、信仰によって全て実行できる人間になることが人生の最終目標です」

「高山殿、いろいろとお話しいただいて有難う。もしも聞かせていただくことが許されるならば、高山殿がデウスなる神に常に許していただきたいと祈っていることはなんですか」

『それは多くの戦で数知れない人たちを殺してきたことです。十二歳でキリシタンになりましたので、デウス様のご命令「汝殺すなかれ」に数えきれない違反をしてきました。殺さなければ殺されるのであれば、そのような世界にいなければいいのです。何年か前に、私の信仰についてローマ教皇からもお褒めをいただきましたが、自分の信仰というか心の中では、私が死ぬときにデウス様が本当にお許しになるだろうか、自分の信仰が他人に褒められるような信仰なのだろうか、と悩んでいます』

「今日のこの話は、今枝個人の胸の中にしまっておきますので、高山殿も何分他言しないようにお願いします。それからあと二日で近江坂本につきます。そこには京都所司代の役人が待ち受けていますが、おそらく直ぐの出発でなく、しばらくそこに留め置かれる模様です。というのは、江戸幕閣から京都所司代のキリシタン対策の総指揮官となった大久保忠隣様が、まだ来たばかりであまり日数も経っておりませんがお役御免となり、・・・詳しい内容は存じません・・・そんなことで直ぐには皆さんを長崎送りにはできないのではないかと思っています。それと、京都所司代から我々に対して、坂本でも別途指示するまでは引き続き警護の役目をするようにと言ってきています。皆さんの泊まるところは海岸近くの古寺が用意されています。それで、その古寺で時間があるようでしたら茶事の教えを願いたいのですが、よろしいでしょうか」

「環境が許せば喜んでお相手をさせていただきましょう」

右近がその部屋を出て自分に与えられている部屋に入

ってゆくと、隣室の内藤好次がやってきて
「お話は如何でしたか」
と聞いてきた。右近は
「心配することはない。キリシタン信仰についていろいろと教えてくれというので話してきた。いずれ大阪から船に乗るキリシタン、バードレたちが多く集まってくるので、キリシタンを滅ぼすことが正しいという信念に憑かれた不埒な者どもが紛れる格好な場所になると思う。好次の忠告を感謝するよ、我が身の警戒もしよう。あと二日すれば坂本に着く」
好次はしばらく雑談の後、自分の部屋に戻っていった。

坂本へ向けて出発する朝、護送次席の青木雅種が虜囚全員を集めて
「今日、夕刻までに坂本に到着する。ここからは街道にいる人たちの目もあり、白装束の行列では目立ちすぎるので、普通の着物に着替えるように。ただ、坂本について京都所司代の役人の意向で、また白装束に着替えさせられるかもしれないが」
と指示があり着替えを命じた。横にいる今枝出羽守もこれを聞いて大きく頷き、全員の着替えを確認して出発したが、一行がキリシタン虜囚の一行には見えなかった。

坂本に着くと、京都所司代の役人が、今枝出羽守・青木雅種両名の立会いのもとに、虜囚一人一人の人体改めが行われ、全員が宿舎に割り当てられた古寺に行こうとして表に出たとき、汚れた白装束を着た女性二十人くらいの一行がやってきた。荒縄を腰に掛けられ、着崩れている着物から膝下は露わになっていて、追い立てられるように人体改めの建物に入っていった。

これを目の当たりにしたジュスタ、ルチアをはじめ子どもたちは一瞬怯えた。
右近たち一行は宿舎に割り当てられた海岸に近い古寺に行った。この古寺での警護は、今枝出羽守一行が引き続き行うよう京都所司代役人から申し渡されるのを聞いて、警護の役人が替わらないことに一同ホッとしていた。

翌朝、この坂本で虜囚として送られてくるすべてのキリシタンを管理をする京都所司代次席の榊源之助が、今枝出羽守を訪ねてこの古寺にやってきた。
「今枝殿、貴殿が管理されている高山右近を、京都所司代の入っている建物内に特別に座敷牢を作って、そこに留置する意見があるのだが貴殿はどう思うか」
「榊殿、そのお考えはどこから出てきたのか」
「ここに囚われている者は全てキリシタンである。全員高山右近の名前を知らない者はいない。そこで、高山右

近を盟主とした何らかの騒動が発生するかもしれない。その危険を事前に取り除くことにある」
「そのご心配は全くない。高山右近は既に信仰を全うして死ぬことしか考えていない。加賀からこの坂本まで、大雪の難儀な道程を、幼い子どもたちまで一緒に無事ここに来ることができたことは、虜囚一同の指導者である高山右近がいたからこそできたもの。道々、拙者も高山右近といろいろな話をしてきたが、ご政道に反することは一切考えてもいないしすることはない。また仮にこの坂本で誰かが何らかの手段でご政道に背くようなことをすれば、高山右近は一身を擲ってもそれをやめさせるでしょう。拙者は加賀で彼を二十六年間見ております。どうぞそのようなことはご心配なく」
の話し合いの後、榊は高山・内藤両家の人たちの様子を今枝出羽守から聞いて戻っていった。

翌日、再び榊がやってきて
「今枝殿、明後日、京から京都所司代板倉勝重様が、集められているキリシタンの状況を視察にこの坂本にやってくる。その折、江戸の家康様のご指示かと思うが、板倉様が高山右近に会う、と言ってきた。キリシタン取締りの大元締めの板倉様と、元大名とはいえキリシタンの一虜囚とどのように合わせたものか思案している。いいお考えはないか」
「高山右近を一人の武士として会せたら如何でしょう。高山右近が板倉様の前で白装束を纏って平伏している姿は、板倉様のお人柄に傷が付くでしょう。板倉様が上座の床几に座ってその背後に小姓が大小を捧げ、高山右近が白装束でなく平服・丸腰で下座の床几に座るのがいいのではないでしょうか」
「考えてみるが、それでは高山右近が罪人扱いされていないような感じを受けるが」
「そこが板倉様の度量の見せどころではないでしょうか。これからキリシタン全員を船に乗せて長崎に向かいます。そしてそこから大海原をマニラ・マカオに向かうと聞いています。その道中、何が起こるかわかりません。長崎まではお役人方がついていますが、その先は船員とキリシタンの虜囚だけになります。それも男は少なく多いのは女です。その段階での航海では、何かあった場合には高山右近の人柄と指導力が必要となるのではないでしょうか。拙者は加賀での高山右近、加賀から此処までの高山右近を見続けてきましたが、キリシタン虜囚のために今何をなさなければならないかを、よくわきまえて行動する人物と思います」
「そうか、貴殿のお言葉、よくわかり申した。拙者なりに板倉様に言上致そう」

その二日後、朝から坂本一帯が緊張していた。役人は

周辺を見回り、キリシタン虜囚は終日屋外に出ることは禁止された。

巳の刻に差し掛かったころ、京都所司代板倉勝重が乗った格式に合わせた駕籠と行列が、街道から琵琶湖畔に向かってやってきた。一帯はキリシタン虜囚留置の建物と、その周りにそれを警護する役人のみの静かな中を、駕籠が管理棟の前でとまり板倉勝重が出てきた。

出迎えている次席の榊源之助が、管理棟奥に案内した。

それから一刻後、榊源之助が今枝出羽守のところにやってきて

「京都所司代板倉様が、貴殿と高山右近をお召である。身支度を整え、余について参れ」

の命令に、今枝出羽守は袴を着けた登城姿、高山右近は平常の着物姿に丸腰で榊源之助の後に続いた。

管理棟の奥には広い座敷があり、そこの襖の前で

「京都所司代様に申しあげます。加賀藩家老今枝出羽守および高山右近を伴って参りました」

「はいれ」

の言葉と同時に、襖が開いた。

今枝出羽守と高山右近は、膝をずらしながら部屋に入り平伏した。

「面を上げよ」

の声に顔をあげて板倉勝重を見た。

「そちが加賀藩家老今枝出羽守か」

「は！今枝でございます」

「雪国からの引率、ご苦労であった」

「有難きお言葉、恐悦至極に存じます」

板倉勝重は茶を取り、一息ついてから榊と今枝出羽守に

「余はちと高山右近と話をしたい。そちたちは後ろに下がって、余と右近の話を聞いておれ」

と命じて二人を後方に下がらせた。同時に右近を自分の正面に座るように命じ

「高山殿、さぞや御上（おかみ）を恨んでいることであろう。これも時の流れ。理解してほしいと言っても無理であろうが、御上の思いの全てを承知の上での貴殿の態度は立派だ」

「板倉様からそのようなお言葉を賜り痛み入ります」

『高山殿のところに大阪方などの誘いもあるようだが、貴殿が俗世間や自分の立身出世などにも目もくれず、自分の宗教的信念と、それに対する仕置きというか処罰に対して社会的混乱を起こすことなく、一家をあげて神妙に従っていることは、大御所様もその態度に感心しておられ、「惜しい人物よ」と仰っておられた。その大御所様のお言葉を貴殿に伝えたかった。それと、ここに集めたキリシタンたちへの対応を如何しものか、貴殿の考えを聞かせてほしい。虜囚達とおなじキリシタンとしての考えもあるだろう。遠慮なく話してくれ。顔を上げたまま、対等の気持ちで話し合ってほしい。ここでは一切無礼とは咎めない。貴殿の遠慮があっては核心を突く本物の話にならない』

一息つき、茶を一口飲んでから

「と言っても何から話していいか困るだろうから、先ず余から尋ねよう。最初に、ここに連れてこられたキリシタンたちの最も大きな不安は何か」

「はい、申し上げます。キリシタンたちは死を覚悟しています。そして信仰を全うして潔い死に方を願っています。御上の計画通り遠い海の彼方に流刑になるのであれば、いっそここで死罪にしてほしい。御上はキリシタンがいなくなればそれで目的を達するとの考えで、キリシタンを海の彼方に追放して、その船が嵐で沈もうと、どうなろうと、お役人は知ったことではない。つまり船ごと棄てられるということですね。ということになると、日本のお役人がいない状態で、一か月以上も船の中に閉じ込められるとすれば、そこで何が起きるかわからない。その場で主導権を握るのは船員たちです。船員が結託して、どこかの国にキリシタン全員を奴隷として売り飛ばすかもわからない。日本を離れた後の自分たちはどうなるのか。言葉も習慣も分からないところで、一人一人ばらばらにされて奴隷に売られるのだろうかの恐怖が、虜囚のキリシタンたちを覆っています。キリシタンは信仰を保ち続ける限り自殺はできません。ですからいっそのことここで磔でも斬首でもいいから殺してほしい、という願いは切実なものがあると思います」

「うーん、御上としては、海の外に流刑すれば、今そなたがいうようなことはあるかもしれないとは考えている。それが恐ろしければキリシタンを棄てろ、ということを言っているつもりだ。こちらから言えば今頃そのようなことを恐れているのか、と言いたい。しかし今回のマニラ追放は日本人が多いことから、マニラのスペイン現地政府に宗教的な保護を目的としての受け入れの了解は取れているので、マニラに着けばその心配は先ずないと考える」

「私はよくわかっています。ただ、ここに連れてこられているキリシタンの男はともかく、女には先ほど私が申しあげたような極度の不安を感じ怯えている者が多いと思います。お許しいただけるのであれば、明日からでも私が収容施設を回り、御上もマニラの現地政府に保護を依頼している。また、船内、現地での生活がどうなるのか不安はあるが、右近は日々を全てデウス様にお任せして生きている。皆さんも全てをデウス様に託して日々祈りの生活を送るように、と諭して回りたいと思いますがいかがでしょうか」

「それによって皆が少しでも安心した日々を過ごすこと

ができれば、それほど有難いことはない。どこかで泣き叫ぶものが出るとか、騒ぎが起こると、それが坂本の収容施設全体に伝播して大騒ぎになることが一番困る」

　板倉京都所司代はここまで言って

「榊殿、聞いてのとおりだ。明日からでも高山右近に、各収容所を回ってもらって、同じキリシタンとして安心して生活するように話してもらおうと思う。貴殿から各収書所の責任者にこの旨を伝えるように」

　と指示を出した。榊は

「仰せの通りにいたします。キリシタンたちを上から押さえつけるだけでは不安が募るばかりでしょう。よいお考えかと思います。高山殿、頼みますぞ」

　話が一段落して、板倉勝重は榊源之助と今枝出羽守を自分のところに招きよせ

「高山右近のことであるが、白装束を着せるとか、囚人扱いはしないように。坂本地内であれば行動は自由。ただし腰のものは丸腰とせよ。各地から寄せ集められたキリシタンたちと高山右近が会うのも気ままにさせよ。高山右近に接することにより、キリシタン虜囚達の信仰的な面は高まるかもしれないが、御上の指示に従う統制はしっかりとれるであろう」

　と具体的な指示を出した。今枝出羽守は

「高山右近の日常の服装は、白装束でなく平常の着物姿でよろしいでしょうか」

　と尋ねた。板倉勝重は

「そうだな、右近一人ではなく、高山・内藤両家の者全て平常の着物着用とせよ」

　の指示が出て、今枝出羽守はホッとしていた。しかし、高山家の右近以外の家族および内藤家一同の外出は、全員揃った上での監視付でなければ散歩も許可されなかった。内藤好次はそれが不満で、後日、右近に付従っての外出を願い出たが許されなかった。

　右近は坂本での京都所司代板倉勝重の采配に舌を巻いていた。流石、名奉行と言われて京都所司代の重責を担うだけあると感心した。相手がキリシタン虜囚であっても、その心の動きをしっかり掴もうとしている度量の広さ、大きさは他に類を見ないものを感じていた。

　キリシタンたちに許されている行動範囲は、海岸沿いの一区画だけで、街道から西側に出ることは禁止されていて、常に見張りが立っている。

　右近が坂本に到着した日に、引っ立てられるように連れてこられた女性たちは、京都に三年前にできた女性修道院の女性たちで、囚われたときから一方的な罪人扱いとしますが、その家族や内藤家の日常も平常の着物姿で

で、むしろ坂本に着いてからのほうが扱いは柔らかくなっていた。

　右近がその女性たちが囚われている部屋に出向くと、全員が警戒的な眼で右近を見つめていたが、右近が自己紹介をし、最初に

「ご一緒に、主の祈りをお祈りしましょう」

　と言って

「天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。
御国が来ますように。
御心が行われますように、
　天におけるように地の上にも。
わたしたちに必要な糧を今日与えてください。
わたしたちの負い目を赦してください。
　わたしたちも自分に負い目のある人を
　赦しましたように。
わたしたちを誘惑に遭わせず
　悪い者から救ってください」（注　①）

　右近の祈りに合わせた女性たちの祈りの言葉がだんだん大きくなって、終わりのころは全員が声を合わせていた。そこで右近は自分の信仰から

「私の信仰目標は、デウス様がイエス様を通して人が守らなければならないと命じられた全てについて、思いも、行いも、言葉でも、全てにわたって心から従うことのできる信仰を与えられることです」

　と優しく説明したうえで

「皆さん、私も皆さんと一緒の運命です。毎日のお祈りを通して、全てを神様に安心して委ねましょう」

　と言ったときには目に涙を浮かべている女性もいて、右近が帰ろうとしたときに

「高山様、機会がありましたらまたお越しください。お願いします」

　の声に続いて、

「お願いします」

　と多くの声が右近に掛けられていた。

（注　①）日本聖書協会発行　新共同訳聖書　マタイによる福音書　六章九節以降引用）

　そんなある日、右近がキリシタンたちの収容されている建物を巡回しながら海岸沿いを歩いていると、散歩している三人のバードレとすれ違った。バードレの後ろには監視の役人が一人ついている。右近はポルトガル語で

「オルガンチーノ師の消息をご存じないか」

　と聞くと、驚いた表情で

「貴方は誰か」

　とポルトガル語が返ってきた。

「高山右近です」

と答えると、三人は喜色を満面に浮かべ握手を求めてきた。

監視の役人が「なにを話しているのか」とけげんな表情で右近を見つめているので、右近は

「京都所司代板倉様から一人歩きを許されている高山右近です。以前から知り合いのバードレの消息を尋ねましたが知らないと答えています」

と報告してそこから立ち去ったが、バードレたちはもっといろいろと話したそうに右近を見送っていた。

右近たちが到着してから一か月になろうとしたとき、突然明日長崎に向けて出航するとの指示が出た。幕府と紀州藩の船で長崎まで送られることとなった。

（続く）

明治時代の著述者　渋江保の一生（その二）

山本勉

時代を追ってみたい。

第一期　幼少時代（江戸）

一八五七年（安政四年）七月～一八六八年（慶応四年）四月

稲田雅洋は、『境　創刊号』掲載の「渋江保伝（上）」に渋江抽斎関係の資料を以下のように挙げている。「（渋江保単独の筆になるもの）「抽斎年譜」、「抽斎の親戚並に門人」、「抽斎没後の渋江家と保付五百」（鴎外題簽）、「渋江家乗」（家系図）、「森枳伝」、未定稿「抽斎吟行、衛語」、雑誌「独立評論」連載の「渋江保談話」、（渋江保が関係しているもの、鴎外などとの合作）「多紀事蹟」、「池田氏事蹟」」(一)また記載の仕方は多少異なるが、小泉浩一郎は『鴎外歴史文学集第五巻』の解題に、渋江抽斎関係の資料を更に詳しく掲載している。ただ渋江の幼少時代を検証する資料は極めて少ない。拙稿においては、森鴎外の『渋江抽斎』や山路愛山主筆の雑誌『独立評論』に連載された「渋江氏談話」等を手がかりに渋江の幼少

『渋江抽斎』のその五十一に渋江保出生のことが次のように記載されている。「安政四年には抽斎の七男成善（しげよし）が七月二十六日を以て生れた。小字は三吉、通称は道陸である。即ち今の保さんで、父は五十三歳、母は四十二歳の時の子である。」(二)

渋江保の生まれた安政年間には、江戸幕府崩壊の引き金となった日本史上の大事件、安政の大獄や桜田門外の変が起きている。また、黒船来航以降、列強の圧力を受け幕藩体制が崩壊し、日本社会が激変した時代でもあった。

保が生まれた翌年、父抽斎は保を藩主津軽順承（ゆきつぐ）に謁見させている。『渋江抽斎』のその五十一に「安政五年には二月二十八日に、抽斎の七男成善（しげよし）が藩主津軽順承（ゆきつぐ）に謁した。年甫で二歳、今の齢を算する法に従へば、生れて

七箇月であるから、人に懐かれて謁した。しかし、謁見は八歳以上と定められてゐたので、此日だけは八歳と披露したのださうである。」(三)とある。『鴎外歴史文学集第五巻』一六七頁の注釈1に、小泉浩一郎は次のように記している。「1　八歳と披露　保談話　「大名の生活・下」によれば、嫡子が藩主拝謁をしないうちに父が死ぬと、「家断絶に及ぶ」ので藩主も当局も事実を知ったうえで行われた慣習。」(四)また、この事について、稲田雅洋は『境　創刊号』において藩主津軽順承に謁見したことについて次のように述べている。「保が君候に拝謁をしたのは、抽斎の嫡男が急逝し、父抽斎も先が短いことを懸念して、駆け込みで末期養子のような形をとってのことであったことを確認したかったからである。ただその時の年齢は、『大名の生活・下』では三歳となっているが、未だ父抽斎が存命中のことであり、父抽斎が没するのは、保の生年の翌年であるから、数え年二歳というのが正しいであろう。」(五)どちらにしても、保は家督を継ぐために藩主津軽順承に僅か二～三歳で拝謁したことがわかる。

抽斎は一八五八年（安政五年）、八月二十八日に五十四歳で病没するが、保を教育する師を遺書に書き残している。

渋江保の幼少期の人間形成に影響を与えた人物を挙げておきたい。『渋江抽斎』のその五十三に「抽斎の病況は、二十八日に小康を得た。遺書の中に、兼て嗣子と定めてあった成善を教育する方法があった。経書を海保漁村に、筆札を小島成斎に、素問を多紀安琢に受けしめ、機を看て蘭語を学ばしめるやうにと云ふのである。」(六)とある。素問とは中国最古の医書、筆札は書法、経書は中国の儒教の基本的古典で、『易』『書』『詩』『礼』『春秋』の五経を指す。山路愛山主筆の『独立評論』第二巻第五号の澁江保氏談話の「小島成斎先生」によれば、「私の少時から師事した先生を数えて見ると、漢学の方では海保漁村、同竹渓、小島成斎、多記養春院、兼松石居、島田重禮、松本通明の人々があり、其れに漢学者ではないが福澤諭吉先生を加へて、丁度八人程の忘れがたい人がある。其の人々については之れ迄も断片的に御話したことがあるが、尚ほ言ひ漏したことが澤山あるから、順序を立てて少しく御話して行き度いと思ふ。」(七)とある。『渋江抽斎』その六十八には、「成善はこの年十月朔に海保漁村と小島成斎との門に入った。」(八)、同その七十七には、「抽斎歿後の第五年は文久三年である。成善は七歳で、はじめて矢の倉の多紀安琢のもとに通って、素問の講義を聞いた。」、「第八年は慶応二年である。海保漁村が九年前に病に罹り、この年八月その再発に逢い、九月十八日に六十九歳で歿したので、十歳の成善は改めてその子竹逕の門人になった。」(九)とある。保は亡き父抽斎の教育プログラムに従って漢学の道を歩み始めたのである。しかし、時代の波は渋江保・五百親子の運命を大きく変えて行くことになる。

一八六八年（慶応四年）、鳥羽伏見の戦に始まった戊辰戦争の戦火は渋江親子の住む江戸に及び、江戸城無血開城のその日、渋江親子は江戸を経ち弘前に向かった。そのことが、『渋江抽斎』のその八十に次のように描かれている。「四月朔に渋江氏は亀沢町の邸宅を立ち退いて、本所横川の津軽家の中屋敷に徙つた。次で十一日に江戸を発した。この日は官軍が江戸城を攻めた日である。一行は戸主成善十二歳、母五百五十三歳、陸二十二歳、水木十六歳、専六十五歳、矢島優善三十四歳の六人と若党二人とである。若党の一人は岩崎駒五郎という弘前のもので、今一人は中条勝次郎と云ふ常陸国土浦のものである。」(十)とある。

渋江一行は、奥羽越列藩同盟の成立した東北諸藩を通過する際に、保を女装させなければならなかった。渋江一行は宿での宿泊を避けて、鰻屋に泊まることになる。こうして難行苦行の末、弘前に辿り着く。

注記

（一）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）四頁

（二）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一四八頁

（三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一五二頁

（四）森鴎外『鴎外歴史文学集　第五巻』岩波書店　二〇〇〇年一月十四日）一六七頁

（五）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）九頁

（六）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一五四頁

（七）渋江保『独立評論』第二巻第五号の澁江保氏談話「小島成齋先生」（独立評論社　一九一四年五月一日）六二頁

（八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一九五頁

（九）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二一七・二一九頁

（十）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二二六頁

密室銀行（二十）

匠　克仁

ワームホールがお風呂の排水口のように、お尻から足、胴体、手、頭と飲み込むのである。飲み込まれた部分は異次元につながり、密室の外にテレポーテーションするのである。

こう説明すると、ぼくのように現実的・論理的な思考をする読者なら、ある事実に気付いただろう。

理論上は異次元に移動した後、直腸を裏返しにした袋に体全体がくるまれている状態になってしまう。

そうなのである。ナマコが敵に襲われると肛門から内臓を噴出するみたいなものだ。テレポーテーション後は人間腸詰である。

でも大丈夫。お湯をかけると、3分間で元に戻るのだ。インスタントラーメンとバイオテクノロジーを融合した画期的な技術なのである。

裏返ったゴム風船を元に戻すように、丸まったダンゴムシが動き出すように、裏返しから元の正常な体に戻る。

〈前号までのあらすぎるあらすじ〉

銀行で密室殺人。

「あらすじがあらすぎる。五年も連載して七文字のあらすじというのも情けないなあ。今までの五年間はなんだったんだろうか。

やっぱり犯人は作者、ぼくということにしようかな。ぼくだったら、自由に金庫室の密室から脱出できる。

前号で書いたように、ぼくは異次元空間の出入口であるワームホールを自由に操れる。実は、ぼくのお尻の穴がワームホールなのである。

ワームホールをドラエモンのポケットに例えたが、実はワームホールは、『どこでもドア』の方に近い。

ワームホールを作るために、密室の中のぼくは、パンツを脱いで、額と両膝をついて、お尻の穴を突き出したのである。

今回もそうやって金庫室で犯行してから、密室の外へ移動した。

大変なことに、ぼくがテレポーテーションしているときに、運悪くゴキブリがお尻の穴に入ったのである。

そのため、ぼくの遺伝子とゴキブリの遺伝子がゴチャ混ぜになってしまったのである。

テレポーテーション後、ぼくはゴキブリ男に変態してしまった。今、ぼくは六本の足で、この原稿を書いている。六本足打法でキーボードを打っているのである。

ぼくの好きな小説の主人公になったみたいである。それはカフカの『変身』である。名作の主人公になるなんて、長年の夢が実現したなあ。

前回は口述筆記をしたし、その前は十一本打法と一本勃打法で書いていた。

「最初は十本、その後、十一本、一本、〇本、六本で原稿を書く動物は、なーんだ」

スフィンクスだったら、エディプス王にこんなクイズを出すだろう。答えは、ぼくである。

どうも、ぼくが犯人でないと、この密室トリックは完成しない。

ところで、小説の世界と作者の世界が融合するような文章をメタフィクションと呼ぶのである。

五年前の世界にテレポーテーションして、最初から書き直したいなあ」

十五（続き）

次の日曜日に竹森は寮の近くのホームセンターに行って、ドアストッパーを見に行った。

竹森はストッパーのことが前から気になっていた。ストッパーで耐火扉を竹森が内側から固定した。そのように警察は疑っていたからである。

耐火扉の内側下に金属製のストッパーが付いている。普段は上向きであるが、下に向けて、開いた耐火扉を固定する。

ストッパーにL字アングルを引っかけて内側から固定する。そうして開かないようにすれば、外からは鍵がかかっていると勘違いする。

開かないように金庫室内からも細工できる例として挙げただけで、あまり説得力が無かった。

（それでは、密室として意味が無い。外から鍵をかける共犯者がいなければ成り立たない）

外側からダイアル錠とシリンダー錠が施錠されていたから、内側の工作だけでは不十分である。

（副支店長が共犯であると、警察は考えているのかな）

竹森が内側から閉め、副支店長が外側から閉めると、耐火扉の施錠は説明できそうである。しかし、副支店長が支店に着く前も、耐火扉はダイアル鍵を開錠しても開かなかったのである。

（副支店長と共犯どころか、一緒に仕事もしたくない）

副支店長は色々なあだ名があるが、アレオレ詐欺師というのもある。副支店長という立場上から、赤坂支店の融資案件に全てに印鑑を押している。実際には、自ら手掛けた案件は皆無である。

成功したものを「アレはオレがやった」と、失敗したものを「アレはオレに関係ない」と本部に報告している。だから、アレオレ詐欺師なのである。

他人の業績を自分ものとして横取りし、自分のミスを部下になすりつけるだけで、副支店長になった。

そんな卑怯な人間と共犯になったら、自分一人だけの罪に陥れられることは明白である。

（しかし、二段構えのアイディアは使えるかもしれない）

警察の発想がヒントになった。

竹森が中から開かないように物理的に工作したというのが、警察の考えである。

同じ発想で犯人が外から圧力を加えて、開かないようにしたのでないか、と竹森は考えた。

第一段階で犯人が物理的に開かないように工作する。第二段階で共犯者がシリンダー錠を閉める。そのように竹森は推理した。ダイアル錠は犯人が閉めればよい。

さらに、竹森はストッパーから推理を展開した。

（ストッパーといえば、全く別のタイプのストッパーがあった）

竹森の行ったホームセンターでは、ドアストッパーの販売場所にプラスチックの薄い三角形のストッパーも展示されていた。くさび（楔）型のものである。

実際に、赤坂支店では発見時だけでなく、普段からプラスチック製のストッパーが金庫室の前に置いてあった。

耐火扉に固定されているストッパーが硬くて不便なため、普段からプラスチック製のものを代用している。

くさび型ストッパーを外から固定しても、耐火扉は開かなくなる。

（そのままではストッパーが見えるので、加工したのかもしれない）

展示されているのは、銀行で使っているよりもずっと小さいものである。支店のストッパーは水色の目立つ色であったが、透明なものがあった。

竹森はそのストッパーを手に取っている内に閃いた。

「このストッパーはトリックに使えるぞ」

竹森の頭の中に一つのトリックが浮かんだ。

ホームセンターで透明なストッパーを竹森は購入した。

家に持ち帰るとストッパーを半分に切った。先の半分だけを使用するのである。

前回と違い、業務時間中に試すことにした。

月曜日の昼休みに地下の金庫室へ竹森は雅子と行った。

融資係と出納係が金庫室で一緒になることは不自然でない。しかし、他にも行員が来るおそれがあるので、素早く実験する必要があった。

雅子と竹森の関係は赤坂支店の中でも噂になっている。他の人に見つかると面倒だ、と竹森は考えていた。

「これと同じようなものを犯人は使ったんだ」

竹森は自分で加工した透明なストッパーを見せた。

「小さいけど、ストッパーの役割は果たすと思うよ」

そう言うと、竹森はストッパーを耐火扉の下にねじ込んだ。ストッパーの色が透明なので、上から見ても廊下の一部のようで溶け込んだ。

「見えにくいけど、よく観察すると気付くわ」

雅子が指摘した。

「それは挟んだところを見ていたからだよ。犯人は廊下の色に似せたもっと平らな素材で作ったかもしれない」

もともと地下は、電灯を点けてもかなり薄暗い。

「開けてみて」

この竹森の指示で、雅子が耐火扉を開けようとした。

「たしかに開かないわね」

雅子は耐火扉を引いたが開かなかった。

「もちろん、ストッパーの効果は完全でない。しかし、耐火扉自体がかなり重くて、ストッパーが無くても、開けるのに苦労している。扉の重さを考えると、このちょっとした抵抗でも鍵がかかっていると勘違いすると思うんだ」

「実行犯がストッパーで仮閉めして、共犯者が後でシリンダー錠の鍵を閉めたってこと」

「そうだと思う」

竹森はストッパーを片付けながら、答えた。

「その共犯者って誰なの」

「副支店長…かな」

竹森は答えたが、副支店長と共犯になる人はいないと思っているので、少し言い淀んだ。

「前も言ったけど、副支店長が鍵を持っていたけど、必ずしも副支店長が共犯者といえないわ」

また妙なところで反論すると竹森は思った。

「じゃあ、他に誰が鍵をかけられるの」

「例えば、私ね」

前にも竹森と共犯だったらという話を雅子はしていた。

「犯人が耐火扉を固定したと仮定して、私が発見前に鍵をかけることは可能だわ。副支店長は私に物品庫の鍵を開けてと言って、鍵束ごと渡したから、その時に耐火扉の鍵をかけることはできるわ」

「本気で言っているの」

竹森は雅子の言葉に戸惑いながら質問した。

「例えばの話よ。私だけでなく鹿田係長も草津さんも可能性はあったわ。私が副支店長に鍵束を返した後は、机の引き出しに入れていた。引き出しは開いていたから、抜き取ることもできるわ」

発見者の四人ともシリンダー錠を閉めることができた。

それよりも雅子の発言内容の方が竹森は気になった。

まんじ中毒

匠　克仁

ぼくは変態式健康法を実践しているので、とても健康である。

今朝も無意識のうちに変態式健康法をしていた。

まんじ前号を読みかえして、そのまま寝たのであるが、自分の書いた文章の催眠術にかかってしまった。

気がついたら、すっぽんぽんで汗をかいていた。もちろん、煩悩くんも元気である。

今も近所でパトカーのサイレンが鳴っている。変質者がいると騒いでいる。変質者でなく、変態と言って欲しいなあ。

まんじの前号で読者に催眠術をかけると書いたが、本当に催眠術にかかる人がいることを実例で証明できた。

もっとも催眠術にかかってなくても、ぼくは変態式健康法をしていた。

読者に催眠術をかけることが可能だから、ぼくは読者、つまり、今この文章を読んでいるあなたの考えていることが分かるのである。

このような文を読んだら、あなたは、

そんなわけないだろう。

と思う。右の斜字体（イタリック）を読んだあなたは、

あたってる。

と思うのである。

あなたに向かって、ぼくは

「そんなにびっくりしなくてもいいんですよ」

と呼びかける。ぼくの呼びかけに対して、あなたは、

なんか会話しているみたい。

と考える。

あなたの感情だけではない。あなたの行動も正確に書き当てることができる。

あなたは今、まんじを読んでいる。

あなたが、まんじを読んでいる事実を、あなたは否定することはできない。否定すれば、あなたはこの宇宙に存在していないことになる。

あなたのことをあなたと書いているが、あなたをあなたと呼ぶと、あなたという二人称は、英語のyouと比べて親密すぎる、というか、なれなれしすぎる表現である。

あなたは「あなたにあなたと呼ばれたくない」とぼくに対して感じている。ぼくのことをあなたとあなたは呼んだことはない。ぼくに対して「あなた、あなたって呼ぶけど、あなたをあなたと言わないので、あなたもあなたと呼ぶな」とあなたはあなたなりに考える。

ぼくも逆の立場で、作者から、あなたと呼びかけられたら、あなたにあなたと言われたくないと思うので、あなたの気持ちは分かる。

あなたは、こんな文章に少しうんざりしている。

あなたの気持ちもよくわかるので、二人称の文章は止めておこう。

ちなみに、このような文章をメタフィクションと言うのである。

メタフィクションとは、フィクション（虚構）とノンフィクション（現実）の垣根を越えた文章のことである。

種明かしすると、メタフィクションという単語を知っているだけで、こんな文章は書けてしまう。

ぼくは、日蝕という単語を知らない世界の人々に数分後に太陽を消す魔法をかけることができる。それと同じ様に、ぼくは書いているだけである。

＊

メタフィクション的な作品を書くのは、谷崎潤一郎である。

谷崎潤一郎の『文章讀本』にぼくのお気に入りの一節がある。

「…言葉は一つ一つがそれ自身生き物であり、人間が言葉を使うと同時に、言葉も人間を使うことがある…」

『文章の要素』という章の中、六つの要素の一番目『用語』で、言霊に触れて説明している。

言葉が人間を動かすことができるのである。

この少し前には次のような文章がある。

「…まず言葉があって、然る後にその言葉に当て嵌まるように思想を纏める…」

ちなみに谷崎版『文章讀本』にも、三島版と同様にタタタ文（ぼくの造語）がよくないことを書いている。二番目の要素『調子』のところである。

＊

冒頭から、変な文章で、めまい等して、気分が悪くなった読者がいるかもしれない。

ぼくの文章は中毒性が有る。
ぼくは読者を、まんじ中毒にしたいのである。毎回、読者が次のまんじが待ちきれず、禁断症状が出てくるような文章を書きたいと思う。

＊

変態ネタを前号で使ったが、中国最古の古典の易経でも変態の概念があったのを思い出した。
変態は、常態の反対概念である。
変態の反対の常態は、『元亨利貞』で、『仁礼義智』や『春夏秋冬』に通じるなどの宇宙の原理である。
変態は、仁などの人の道から外れたり、季節の巡りが乱れたりするように、宇宙原理に反する概念である。

＊

変態式健康法を英語に翻訳する場合、streaking（ストリーキング）と一つの単語にする。
ストリーキングは日本語でも全裸で公の場を走ることであるから、ずばり、ぼくの健康法を指している。
こんなぴったりの英単語があるのだから、ぼくの健康法は全世界に普及するに違いない。
いっそのこと健康法でなく、健康教にしようかなあ。
ぼくは健康のためなら死んでもよいと思っている。命をささげるなら、単なる方法論やノウハウでなく、宗教といえる。
変態式健康教にして、ぼくは教祖になろう。

ぼくはストリーキングをストリートキング、つまり、通りの王様とばかり思いこんでいた。裸の王様のイメージがあった。
裸の男がキングで、裸の女ならストリートクィーンだろうと考えたのである。街通りを裸で行進するなんて、王様みたいだ。
実際は、streak（ストリーク）という動詞にingを付けた名詞形である。streakとは稲妻がひらめくことである。全裸で走る人を稲妻に例えたのである。
ちなみに生物学でいうストリーキングは、魚の特別な射精の方法を指す専門的な学術用語である。
魚のカップルではメス魚の放卵と同時にオス魚が射精する。まさにその瞬間に別のオス魚がどさくさに紛れて射精することを生物学用語でストリーキングという。
なんかもてない男の悲哀を感じさせて、ぼくはストリーキングするオス魚にとても感情移入してしまう。人のストリーキングは動物的だが、魚のストリーキングは人間的だなあ。
昨日は、ストリーキングする魚になった夢を見た。ぼくはエロエロなイロイロな夢を見るが、人でなく別の生物に生まれ変わった夢を見る。
一昨日は、ゴキブリに生まれ変わった夢を見た。その前は蟻地獄に落ちた蟻になった夢を見た。
ぼくはストリーキングでなく、ストーリーキング、つまり、物語の王様になりたい。

＊

変態式健康法を実践しているぼくは、健康診断でも全く変態値というか異常値がない。
診断結果はいつもほとんどパーフェクトである。が、一か所だけ悪いところがある。
肝機能である。それ以外は完璧である。それは色々と健康法を試してきたタマモノであろう。
今までに色々と健康法をしたが、例えば、『液体のてんとうむし』健康法である。
これは、ぼくオリジナルスペシャル健康法なのである。
…と言いたいところであるが、実は古くからの民間療法であり、世界的に歴史的に存在する健康法によく似たものがある。
この世界的な歴史的な療法は、一般的には瀉血法と言われている。悪い血液を排出して血液内の毒素を薄めるのである。ドロドロの血液を抜けば、サラサラになるという発想である。
他にも伝統的な民間療法を試したが、それは後で書く。
今回は、健康と反対に中毒の話である。ぼくの中毒経験である。
アル中とヤク中とニコチン中（毒）の話である。ヤク中の中でも、シャブ中とヘロイン中の話もする。

＊

【1】　アル中

十年ほど前、よくお腹をこわしていた。もしかしたら子宮ガンかもしれないと心配していた。
ある日、血を吐いてしまい、これは胃に穴があいているかもしれないと、ぼくは思った。
その三年前に胃カメラを飲んだときに胃から出血していると診断されたのである。
血と思ったのだが、よくよく考えてみれば、赤ワインであった。赤ワインを飲みすぎて、吐いたのである。
なんたって、赤ワインはポリフェノールが多くて、健康に良い。
嘘は書いていない。『血を吐いて』という事実を書いたのでなく、『血を吐いて…思った』と思ったこととして正確に表現している。
とはいえ、赤い液体を吐いても、そんなに心配しなかった。ぼくは、楽天的、能天気である。赤は人間の体に存在している色素であるから、血を吐くくらいたいしたことでない。
次の日はなんと黄色い液体を嘔吐したのである。とてもじゃないが、人間の体から出る色でない。
それでも黄色だったから気にしなかった。黄色人種の肌色だから、まだたいしたことはない。
よくよく思い出してみると、連日、酒を飲みすぎたのでウンコドリンク…じゃないウコンドリンクを大量に飲

んだのであった。
その次の日は鮮やかな緑色の液体を嘔吐したのである。これではまるでエイリアンである。とうとう宇宙人になってしまったかと心配になった。このままではいつかバルタン星人になってしまう。
と心配する一方、吐いた液体が赤→黄→緑と変化したので、信号みたいと思った。色からして、これは良くなっているに違いないと考えた。楽天的なぼくは喜んだ。
よくよく思い出してみると、酒を飲みすぎたので、中和しようと抹茶ラテを大量に飲んだのであった。
とまあ、これくらいアルコールを飲んでいる。53kgの体重でビールを5．3kgつまり、500ml缶を11本以上飲んだりしていた。
今はせっかく胃腸が丈夫になったが、肝臓だけ少し調子が悪い。玉に傷なのである。
他の検査値が完璧なのに、肝機能の数値だけ基準値をはみ出している。
自分でもアルコールの取り過ぎは自覚している。
しかし、この前の健康診断があってから、半年間は全くアルコールを全く飲まなかった。
過去にも半年くらいの禁酒は五回ほどしている。
もっとも毎回、酒をやめるつもりはなかったので、最初から半年の期間限定である。
今も当然ながらアルコールを解禁しているが、かなり減った。
アルコールに関係する失敗はほとんどない。大したことはないが、ほんのささいな失敗談を紹介しよう。
ある朝、ぼくは二日酔いで目覚めた。とても喉の渇いていたので、ベッド脇のペットボトルの液体を飲んだ。
ごくごくごくごくごくごくごくごくごくごくごくごくごくごくずいぶんと喉が渇いていたので、かなりの勢いで飲んでしまった。
ペットボトルは2L入りで広口のタイプのものである。
それにしても、初めて飲む味だなあ。しょっぱいミネラルウォーターだなあ。身近にありながら口にしたことのない味であった。
飲んだ液体が脳みそにしみわたったところで、昨日のことを思い出した。
ぐでんぐでん・べろんべろん・げろんげろん・ばたんばたん・ごつんごつんに酔っぱらった。
前後不覚・左右不覚・上下不覚・過去未来不覚に酔っぱらった。自分が四次元の世界のどこにいるのか分からない。私は誰？ここはどこ？状態である。
人事不省・意識朦朧・意識不明・意識混沌・昏睡状態・心神喪失・心神耗弱に酔っぱらった。
いつものことである。
飲んで帰ると、翌日は全身がアザだらけである。
飲み会がある日に限って、なぜか帰り道の電信柱が道

の真ん中に立っているのである。不思議である。
いつも電信柱と肩がぶつかったとか言って、ぼくは電信柱とケンカするのである。
ケンカといっても、スッポンや七面鳥やラクダがケンカするときに首を伸ばして相手を威嚇して、長い方が勝ちみたいなケンカである。
煩悩くんが頑張って電信柱より大きくなって威嚇すると、電信柱はすごすごと元の位置にひきかえすのである。
先日も電信柱とケンカしていたら、警察官に見つかって、逮捕されかけた。電信柱に立ち小便をするな、と言われたのである。
お巡りさんは煩悩くんを電信柱と見間違えたようで、ぼくは猥褻物陳列罪で捕まらずに済んだ。
動物行動学（エソロジー）では、このような儀礼的なケンカはディスプレイの一種と言われている。
動物の世界では、ケンカの代わりにこうした儀礼的なディスプレイを行うことによって、攻撃衝動を抑えるのである。
ディスプレイのケンカの後にも、支配服従関係を表わすディスプレイもある。
ニホンザルの場合は、負けたオスザルがお尻を向ける。勝ったサルが交尾するようにまたがる。オスの同性愛のようだが、マウンティングというものである。
ぼくも先日、電信柱に負けて、負けたオスザルのように電信柱にマウンティングのポーズをとった。
電信柱だけでない、もう一つの強敵は階段である。
ぼくの住宅はピサの斜塔みたいなのである。
飲んで帰る日に限って、ぼくの住んでいる七階建の住宅が四五度も傾くのである。
しかも、ぼくが階段を歩いている途中で、階段が急に垂直に立ち上がる、つまり、建物全体が傾くのである。
これは絶対に欠陥住宅だと思う。
急に傾くので、ぼくはしたたか顔面や腹を階段の角に打ち付ける。四階の自宅にたどりつくまでに必ずそんな目に遭う。
垂直になった断崖絶壁のような階段を、ぼくはロッククライマーのように必死になってよじ登っているのである。
先日もそうして苦労してよじ登っていると、上からなんと四五度も前のめりにスタスタと仙人か宇宙人のように断崖絶壁のような階段を降りていくおじいさんとすれ違った。
ぼくはぎょっとして振り返ったが、相手はもっと驚いて、首を一回転半させて、ぎょっとしていた。
負けず嫌いのぼくは首を二回転半させて、ぎょっとした。ぼくの首は回転しすぎたみたいで、胴体から外れて地上まで転げ落ちた。
仕方がないので、ぼくは自分の頭を拾って、ラグビー

ボールのように抱えて自宅にトライしたのである。
目が覚めると、不思議なことに頭が胴体につながっていた。間違えてお尻に頭を付けていたので、外して付け直した。
まあ、こんな毎日を過ごしていたのであるが、やっと二日酔いで目覚めたときの話に戻る。
これは独り暮らしのときの話である。酔っぱらったまま、なんとか自宅に無事生還した。疲労困憊のまま倒れるように寝たのである。
夜中におしっこに行きたくなった。しかし、飲みすぎて立ち上がることができない。
それに寒すぎて布団からでることができない。真冬なのに玄関のドアを閉め忘れ、開けっ放しである。室内は凍てつく冬の外気と同じ温度であった。
これは誰がどう考えても、トイレに行くことが不可能な状態である。
合理的・現実的な思考を持つぼくは、ここでおしっこしようと考えた。
たまたま玉玉あたりに空の2Lペットボトルがあった。ぼくは布団から煩悩くんのホースの先端だけを出して、器用にペットボトルの口にあてて、おしっこをした。
じょぼぼぼ

過去に飲んだことのあるものでない。同時に飲んでいたサプリを列挙したのである。

一度に全部を飲むと胸焼けがして、お腹もこわす。それで同時に胃薬と整腸剤も飲む。

全部で30～40錠くらいになる。これだけ同時に服用すると、お腹がいっぱいになる。

これだけサプリを飲むというか食べると、朝食は食べられない。というか朝食がサプリなのである。

この大量のサプリは栄養ドリンクで流し込むのである。

ドリンクはタウリン1000mg配合がよい。タウリンというのはイカやタコに含まれている。たしかに、イカやタコを食べると、タウリン1g以上は普通に摂取できる。しかし、栄養ドリンク一本だけでなんと1000mgも取れるのである。すごいなあ。

ぼくはイカやタコを食べると、共食いみたいで心が痛む。イカを噛むたびに、ぼくの煩悩くんが、痛い、痛いと、うずくので、ちょうどいい。

これだけサプリを飲んでいると、サプリだけでは弱い気がする。やはり、薬効のあるものを欲しくなる。

さて、睡眠薬に飲むようになったのは、ちゃんと医者から勧められたからである。

自宅近くの胃腸専門の内科に通っていたのだが、その先生がすごく面倒見の良い人で、二人で飲みにいったりした。考えてみたら、不思議な医者と患者の関係である。

問診の時に職業を聞かれて、生命保険の営業と答えた。それで生保プランの相談をされて、提案をしたけど、その提案内容で他の保険屋で契約することになった。ごめん、一杯おごるからと言われて、一緒に飲みに行ったのである。

胃腸の不調は悩みからで、夜眠れないということを先生に相談した。その先生も自分も眠れなくて睡眠薬を飲んでいると、懐から出して見せた。

本当はアルコールよりも睡眠薬の方が体に良いという話であった。それで、その内科医に睡眠薬を処方してもらったのである。

ぼくは生まれて初めて睡眠薬を飲む時に緊張した。

もしかしたら、永遠の眠りについて目覚めないのでないかと不安になった。

そもそもトイレに行きたくなっても目覚めないのでないかと思った。

(寝小便したらどうしよう)

既に三十才を過ぎてそんな心配をした。寝小便をしたまま目覚めなかったらもっと嫌である。

火事になっても目覚めなかったら大変である。

そんな不安はあったが、わくわくする思いで睡眠薬を飲んだのである。

「よーし。これでぐっすり眠れるぞ。1・2・3・…。10も数える間もなく、コトンと意識を失うように睡眠

についたのである。さすがに睡眠薬の力は強力である。

こんなに効くものとは思わなかった。もっと早く飲んでおけば良かったとぼくは後悔した」

ということが全然なかった。

まーったく効かないのである。

食事をして眠くなるほども効かない。というより、飲んでいないのと変わらない。

逆にむしろ何か目が冴えてきたような気がした。なんか生れて初めての睡眠薬デビューが、眠くならないというか目が覚める経験であった。むしろ良かったのかもしれない。

結果として、睡眠薬を飲んでも眠くならないときには眠れない。逆に眠いときには睡眠薬を飲まなくても眠れるという真実が分かり、目が覚めた。

それでも、早めに飲んでいると効くのかなという実感があったので、気休めでしばらく飲んでいた。

お酒を一緒に飲むと、睡眠薬はかなり効く。その代り、次の日にだるさが残る。同時服用は避けた方が良い。

調剤薬局に転職したとき、睡眠薬は止めた。

睡眠薬は向精神薬といって、毒物や麻薬に次ぐレベルで厳重に管理することになる。普通の薬ではない。

そんな薬を服用するのに抵抗があったのである。

それ以降の数年間は睡眠薬を使わなかった。その後、うつ病になったとき、抗うつ薬と一緒に睡眠薬も処方されたのであるが、あまり飲まなかった。

ということで、睡眠薬の次が抗うつ薬である。

まんじでも書いたが、一時期は、うつ病で自傷行為があったので、薬物治療をした。

その時、処方されたのが、抗うつ薬である。

抗うつ薬というくらいだから、幸せに感じる薬なのである。

飲んでから数時間後、なんか心の底から高揚感というか晴れ晴れとした気持ちになった。ハッピーハッピーハッピーで、世界が輝かしく耀いている。

ウォー、イエー、ウォー、イエー、魚ー、家ー、魚ー、家ー、となった。ぼくの周りで魚が泳ぎ、家が飛び回っているのである。

遺影ー、遺影ー、右往ー、右往ー、左往ー、左往ー。なんか分からないが、ぼくの遺影が飛び交い、右往左往するのである。

訳が分からないが、とにかくハッピーハッピーハッピーである。

…ということが全くない。当たり前だ。どこの世界で飲んだ瞬間に周りに魚と家が飛ぶ薬が有る訳がない。そんな薬があったら、危ない。

そこまで期待していなかったが、正直言って期待外れである。本当に効いているのかなというのが感想である。

抗うつ薬の効果は、アルコールの即効性と比べると、

物足りない。医学的にはその方が良いのかもしれないが。
もっとも抗うつ薬は、ぼくにとって別の効果があった。
睡眠薬で全く眠れなかったぼくが、抗うつ薬だと、ぐっすり眠れたのである。
睡眠薬は飲まずに、抗うつ薬だけ飲んで眠れるようになった。
抗不安薬でもあるから、不眠の原因が不安だったのだろう。
もっとも朝昼晩と飲む薬なので、起きてすぐ睡眠薬を飲むみたいである。
目覚めて飲んで寝て、目覚めて飲んで寝て、目覚めて飲んで寝てで、一日に23時間寝てしまった。
また自傷行為をするのでないかと不安で飲んでいた。
抗うつ薬を飲んでいて、こんな薬を飲んでいて大丈夫だろうかと心配した。不安を抑える抗うつ薬を飲むのが不安だったので、結局は止めてしまった。
薬の次はヤクの話である。
ぼくは小説を書いていると、ヘロインのことばかりを考えてしまう。ヘロイン中毒である。
ちなみに、ヘロインというのは、heroineで、heroinでない。heroineは女性主人公のことである。
ヒロインと呼ぶ人が多いが、ヘロインと発音するのが正しい。Hエロ…じゃない、ヒーローの女性形だからヒにしたかもしれないが、それが間違いである。
英語の発音記号では、heroがhíːrouで、heroineはhérouinである。
つまり、英雄は男性なら『ヒ～』と言うのであり、女性なら『ヘ』である。アクセントもカタカナ語と違い、女性は『ヘ』を強く発する。
ヒロインという表記方法は教育上もよくないので、ヘロインに改めるべきである。
日本人の英語が上達しない一因は、外来語の表記が原語の発音と異なることだと思っている。正しく外来語を発音通りに表記するように教育界に働きかけたい。ヘロイン普及活動をしたいと思っている。
薬のヘロインは、heroinでeが無いが、発音がheroineと全く同じである。同じであれば、ヘロインに統一するべきである。
新聞やテレビでは「映画のヘロインがヘロインで逮捕」というように報道して欲しい。
どちらもギリシア神話の半神半人のヘロスが語源である。語学的にはineは女性形の接尾辞で、in(ine)は化学物質の接尾辞である。ヘロインはもともとドイツの咳止め薬の商品名である。
『青の漂流』という小説を書いていたときは、ヘロインのことばかり考えていた。
ヘロインは麻薬(ヤク)で、覚醒剤(シャブ)でない。
シャブは毎日していた。シャブ中といってもいいくらいである。シャブといってもただのシャブと違い、純度二倍のシャブである。
シャブも七年前だから時効だろう。
ちなみに麻薬の使用と覚醒剤の使用も時効は同じ七年である。
麻薬(ヤク)の場合は、麻薬及び向精神薬取締法で罰せられる。
覚醒剤(シャブ)の場合は、覚せい剤取締法で罰せられる。(法律で覚せい剤の『せい』が、ひらがなであるのは、制定当時の法律名は当用漢字のみ使用のため)
法律上は、ヤクと抗うつ薬と睡眠薬は同じ仲間で、ヤクとシャブは全く別の扱いなのである。
ヤクとシャブと無縁の一般人にとっては、不思議に思うかもしれない。ヤク中とシャブ中はかぶっているし、芸能人で逮捕されるのは両方を使っている。ヤクとシャブの流通経路は同じである。
ヤクもシャブもどちらも不法所持は罰則の対象であり、罰則も時効も同じなのに、なぜ法律が異なるのか。
二つの法律の違いは、使ってよいか悪いかである。ヤクは使っても、正しければ罪にならず、医療でも使う。シャブは使うと、必ず罪になるのである。
ちなみにヤクの不法所持とシャブの不法所持の時効が七年ということは、この二つの法律に直接は書いていない。罰則だけで時効は個々の法律では載っていない。
時効は、刑事訴訟法二五〇条四号にある。長期十五年未満の懲役又は禁錮に当たる罪については七年なのである。(五号で長期十年未満の懲役又は禁錮に当たる罪については五年)
ここまで法律を考えた上で、逮捕されるギリギリの線上で、ぼくはエッセイを書いている。
で、シャブの話に戻るが、純度二倍のシャブというのは、シャブシャブである。
うつ病には肉が良いと思って、毎日、肉を摂取しようと思った。ところが、ぼくは肉の脂身も植物油も苦手なのである。
したがって、肉の調理方法は、ステーキや焼肉などでなくシャブシャブのみである。それで、シャブシャブが病みつきになってしまった。ぼくはシャブシャブ中毒になってしまった。
さて、ヤクの話に戻る。シャブは冗談だが、ヤク中毒は本物である。
シャブの使用は犯罪であるが、ヤクの使用は犯罪でない。ぼくがヤクを使用していたのは確信犯である。
ヤクに頼るようになったのは、やはり、うつ病のときである。ストレスで体を壊したことが原因である。精神的に、うつなだけでなく、肉体的には、腸の調子が悪かったのである。
そこで神にすがるような気持ちで、ヤクに手を出した

のである。ヤクは、うつ病にも良いし、腸に良いと思い込んでいたのである。

うつ病は、腸内の微生物が一因となる場合もあるのである。そのため腸内に立派な乳酸菌を養う必要がある。ぼくは乳酸菌飲料を手放せなくなってしまった。

乳酸菌飲料といえば、ヤクルトである。本物のヤクというのは、ヤクルトのことである。

現在では、乳酸菌のおかげで、腸の調子も快腸である。ちなみにヤクの売人というのは、ヤクルトレディである。黄緑色の制服を着ているので、ヤクルトのセールスであることが分かる。

今度はヤクルトを霧吹き噴射して、鼻の穴の粘膜から吸収しようかと考えている。

それでも物足りない。いっそのことヤクルトを注射器で直接に静脈注射しよう。

話は変わるが、別の意味でのヤク中が、ぼくの知合いにいる。ヤクルトスワローズの熱狂的ファンなのである。その人はアル中でもある。アルビレックス新潟のファンなのである。シャブ中でもある。シャブリエ（フランスの作曲家）のファンでもある。アニメのヘロインのファンでもある。

さてさて、色々な薬を試してきたが、今ではほとんど薬は飲まなくなった。普通に飲まないのでなく、病気でも飲まない断薬をしている。断食のように断薬を意識して実践しているのである。

サプリメントは健康食品と思って飲むのだが、ごく一部を除いて、薬は市販薬も飲まない。

かぜ薬や胃腸薬のたぐいは、最近の五年間で飲んでいない。かぜを引いても、胃腸の調子が悪くなっても、全く服用しない。

薬で治すと、自己免疫力が弱くなる。断薬のおかげで、自己免疫力が強くなった気がする。

実際に、かぜ薬を飲まない方が、飲むよりも早く治るのである。

睡眠薬と抗うつ薬をぼくは随分と飲んでいるように勘違いした読者もいるかもしれない。

実際は、睡眠薬も抗うつ薬も、せいぜい数百錠程度しか飲んでいない。

生涯で数百錠程度の薬の摂取というのは、飲んでないも同然の誤差の範囲である。

なまじ薬の業界で働いたことがあるので、薬の副作用などマイナスの面も知るようになった。

薬を飲まないことが、健康法の基本であると思う。

何より最良の薬は笑いである。薬は飲むより読むのである。ぼくは何か面白いものを読んで笑えば、それで体調が良くなる。

自分で書いたエッセイを読んで笑っているのだから、安上がりである。ぼくのエッセイが最良の薬なのである。

【3】　ニコチン中

ぼくはニコチン中（毒）にならないかと心配している。なんせ、ぼくは2箱つまり40本も吸っている。もしかしたら、タバコが原因で死ぬかもしれないと、本当に真剣に悩んでいる。

タバコ1本吸うと、寿命が14・4分も縮まるのである。このデータは、医学誌「ブリティッシュメディカルジャーナル」の2012年に発表されたものである。（日本医療・健康情報研究所の記事から抜粋）

タバコを吸うと、血液がドロドロになり、血管がボロボロになる。癌だけでなく心筋梗塞・脳梗塞・腎臓病、呼吸器・消火器の病気の原因となっている。

タバコはニコチンを筆頭とする猛毒の塊である。タールは発がん物質である。

絶対にガス中毒死みたいに、ニコチン中毒死するかもしれないのである。

ぼくは生まれてから今までの半世紀近い人生で、吸ったタバコの本数を全部数えると、40本くらいになると思う。つまり2箱に相当する本数は吸ったことになる。ということは、57．6分は縮まってしまった。

健康について最も後悔していることと言えば、タバコを吸ったことである。酒を飲んで後悔したことは、たった一度たりとも絶対にないが、タバコを吸ったことは後悔している。

しかも、吸いたくて吸ったわけでない。上司や取引先に喫煙者がいるので、タバコの煙が平気にしようと、地獄の特訓で吸ったのである。

ぼくは何とかタバコを克服しようとして、無理に無理を重ね重ねて吸ってみた。

わざと自分の部屋にタバコの火を点けて慣れさせようと試みた。一分ほど外に出てから部屋に戻るのである。

ごほごほごほごほごほごほごほごほごほごほごほごほ死にそうになった。

アウシュビッツのガス室が頭に浮かんだ。

タバコの吸い殻も苦手である。ぼくにとってタバコの吸い殻は犬の糞と同レベルである。

そうして無理して吸った以外に、ぼくは生まれてから、ほとんどニコチンを摂取したことが無い。家族・友人に喫煙者がいなかったので、副流煙を吸うこともない。それだけにニコチンの耐性がないのである。

極微量のニコチンだけで中毒死するかもしれない。十メートル先から漂うタバコの煙で、ぼくは失神しかける。お酒が苦手な人が酒席にいるのは未だ耐えられるのでないかと思う。なんせ相手は液体でコップの中に納まっているのだから。酒そのものが人を襲うことがないが、タバコは直接攻撃してくる。

まるでタバコの煙がゴーストのように襲ってくるように感じる。

タバコが苦手な人がタバコを吸う人の近くにいるのは、ほぼ拷問である。なんせ相手は気体だから、逃げられない。呼吸ができないのである。

酒の席などで、ぼくがときどき酸欠の金魚や生まれたばかりのヒナ鳥のように口をパクパクしているのは、タバコの煙のないところの空気を吸っているからである。

路上喫煙されると非常に迷惑である。ラグビーで相手のタックルをかわすようにステップしながら歩く。上からみるとアメンボのようである。

先日も、前方に路上喫煙者が五人も歩いていたのである。ぼくは煙の無い空気を吸うために、右左と首を振りながら歩いた。

マイケル・ジャクソンのスリラーの路上パフォーマンスと勘違いされた。

というくらいニコチンに過敏症なので、いつか一酸化炭素中毒死みたいにならないかと心配しているのである。

ニコチン中毒っていうと、また妄想癖が出てきた。

チンが2コだから、チンチン中毒ってことかなあ。チンチン中毒ってなんかゲイみたいだなあ。全裸の男子中学生の満員電車の妄想中毒があるからなあ。

これを書いているときに、ある新聞記事を読んだ。ルクセンブルクの現職の首相（男性）が男性と同姓結婚をしたという内容である。

そういう記事を読むと、同じ地球人いや銀河系人として嬉しくなる。

もし、これが日本であったら、どうだろうか。日本の首相が男性と同姓結婚するのは想像できない。マレーシアだったら大変なことになる。

もう一つ妄想中毒がある。ニコチンということからチンチンが2コあるという妄想中毒なのである。チンチンが2コになったら、と本当に具体的に現実的に想像する。当然ながら、快感が2倍になる。

しかし、ぼくは既にチンチンが3コの妄想でエッセイを書いたので、2コでは妄想力が小さすぎる。やはりチンチンが4コくらい欲しいなあ。いやいや5コは欲しい。そうだ。手の指が全てチンチンになったら、快感が11倍になるではないか。

よし。これからの目標は、手の指が全部チンチンになることにしよう。

思考は現実化する。夢をいつか叶う。チンチンの20コや30コくらい、絶対にいつかは持てるのである。

いつかは全身がチンチンだらけなるのである。

ここまでの文章を読んだ読者は、あまりにもバカバカしいと思っただろう。しかし、チンチンが別の欲望の対象の比喩であると考えて欲しい。

チンチンを金（キンタマでなくカネ、富、豊かさのこと）に置き換えたらどうだろう。愚かさは等しい。

このような思考パターンで人生を生きている人が多いと思う。人生で使いきれないだけの富を目的にして、人道を踏み外す人がいる。

だから、ぼくのチンチン妄想を笑うことができないのである。

富の代りに、正義や宗教行為などに置き換えることもできるが、道徳論・宗教論になるので、深入りはしない。

ニコチン中毒から脱線したが、これで終りである。

*

まんじの品位を落とすような文章を書いてしまった。原稿を書いてから、いつも出そうかどうか迷ってしまう。こんな下品なエッセイは、上品なまんじには相応しくない。研究論文集にエロ小説が混ざっている様である。

ぼく個人としても、原稿を書いている状況でない。生きるのに精一杯である。ぼくは三月に失業して、六月に新しい仕事に就いた。働いても生きていけるか分からない状況である。

貧困のワームホールに吸い込まれそうで何とか這い出ようとしている。蟻地獄の蟻のようにもがいている。

過去にも何度か無一文になった。うつ病で失業したときは、まんじの原稿料というか会費を払ったら、無一文になった。

一食百円で生活すると、全財産でいくら残るから、その金額から逆算して執筆枚数を決めたこともある。ぼくがページの最後の一行まで書くのは、そのためである。

生存環境が変わり、ちょっと体調も変化した。25年間53kgを維持した体重が、30年ぶりに40kg台の領域に突入した。

四捨五入したら、0.1tから0tになってしまう。10分の1トンの世界では存在しなくなる。

と書くと心配する読者がいるかもしれないが、心配ご無用である。冒頭に書いたように、ぼくは変態式健康法を実践しているので、健康で元気なのである。

元気といっても、まともな精神の持ち主なら、書かないだろう。だが、いつもの2倍以上も書いてしまった。

実をいうと、もう原稿を書くのを止めようと決断した。ら、口から泡を吹いたのである。ぼくは泡を食った。口角泡を飛ばす状態である。

まるで、カニである。洗剤を丸ごと落としたときの洗濯機のように、口から泡が出てきた。

あわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわ。泡沫粟淡合会併阿波安房安和時間私達音楽配信サービスあわわとあわをくって、あわただしくあわてて、あわや死にそうになった。

これが、中毒の禁断症状なのだろう。また、まんじの原稿を書き始めたら、泡が止まった。

どうやら、ぼくは書かずには生きていけないのである。まんじに書かないと、禁断症状で死んでしまう。

ぼくは、まんじ中毒である。

編集後記

忠内正之氏の紹介により、今回から同人として松井秀人氏が加わり、漢詩を寄稿された。鯨游海氏とともに、漢詩分野でのそれぞれの持ち味を生かした活発な寄稿を期待したい。

三戸岡道夫氏の「ロボット雑考」は、その着想が素晴らしい。巷間いろいろなニュースでロボットを動かすコンピューターのことは知る機会があり、小生の趣味の将棋の世界でも、プロ棋士がコンピューターと対戦し、勝った・負けたがニュースになっている。三戸岡氏の寄稿を読んで、近い将来、現時点では考えられないような人間とロボットとの共存社会が実現するのではないかと思った。

同人の近況として、「二八に帰るすべもなし」等の中で、私たちの周りに日常的に存在する人間関係を、キラリと輝いた描写で表現された伊治哲氏が、体調面から維持会員に移られた。氏の永年にわたる同人としてのご活躍に心から敬意を表するとともに体調の回復を祈念申し上げる。それから「先見の明」で世界遺産に登録された、江川太郎左衛門の偉業を我々に示してくれた堀内永人氏が、病のため暫くの間執筆を休まれることとなり、その間維持会員としてまんじに在籍していただくことになった。氏の病の早期回復と執筆の再開を祈念申し上げる。

夜（七月一五日）、安保関連法案可決への抗議デモ集会ニュースを見て、安倍政権の考えている将来を見据えた我国の安保構築について、国民的なコンセンサスが可能になるのはいつの日だろうか、などと考えさせられた。

（鍋）

まんじ第137号

平成27年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「和して同ぜず」

田寺（たでら）怜葦（れい）　画

まんじ

No.138

2015.11.1

まんじ第百三十八号　目次

月は上りぬ……新井　宏…4
「農業マイスター」と「南足柄市農業参入システム」の法制化……古屋富雄…12
門外説工藤祐経……横山正義…17
短歌　行雲流水（四十七）……石黒修身…26
短歌　十五首……幸山周平…29
漢詩　潮騒録（八十二）《漢詩の流れ70》……鯨游海…32
漢詩　汲深録（二）……松井秀人…35
ロボット雑考（その二）……三戸岡道夫…37
古い物・遠い夢「織部」いま（茶道史余滴）……忠内正之…48
関東管領始末記⑲　越後の春……千坂精一…56

性と化粧の物語（三）……鈴木　守…69
「司馬雑感」あれこれ（2）……山田嘉久…78
生還（二）……太田精一…85
『時評家　新明正道』（評伝その三）……山本鎭雄…94
千家尊福伝（九）……村上邦治…105
　政治家に転じた大社教管長
殉教（九）……鍋屋次郎…114
明治時代の著述者　渋江保の一生（その三）……山本勉…126
密室銀行（二十一）……匠克仁…131
左玉の法則……匠克仁…145
編集後記……編集子…159
表紙絵……田寺怜葦

月は上り(あが)ぬ

新井宏

ウツを病む弟に代わり、荏原保険センターで簡単な手続きをしてから、久しぶりに武蔵小山の商店街を通って、都立小山台高校のある武蔵小山駅まで歩いて見た。

相模原市の在来商店街のように、超大型スーパーや大型コンビニに押されて、次から次へとシャッターを降ろしているのに比べると、全長八百メートルのアーケード街は活気に満ちていた。東京でも最大級だそうで、弟の湿疹薬を買うためドラッグストアを探したが、たちまち五～六軒も見つかった。

初めてアーケードができたのは、私が小山台高校を卒業した年なので六十年ほど前になる。普段は電車を利用して通学していたが、時折、商店街を歩いて通ったので、かなり良く覚えている。

確か、商店街の中ほどに映画館があり、『月は上りぬ』という映画を上映していたはずである。そうだ、今度の『まんじ』には、『月は上りぬ』を話題にして、我が高校生活を描いてみよう。歩きながら構想を練る。

都立小山台高校は、旧制の府立八中で、在校時は、日比谷高校に準ずる全国的な有名進学校であった。それが不思議なことに、日比谷高校と同じ学区内にあった。どう考えても、全国的な有力進学校が二つも同一学区に併存するのはおかしい。

実は、その理由を知ったのは、卒業してから大分経った同期会の席上であった。

大森六中の出身者がいやに多いのである。洗足池の端にある大森六中が有名中学なのは知っていたが、恵まれた階層の住む地域とはそんなものかと思っていた。私の出身の荏原四中などは、日比谷高校を受験する者は皆無、地元の小山台高校受験でさえ各クラス一名がやっという状態なのに大森六中は一桁多いのである。

理由は単純であった。大森六中には全国から越境入学者が殺到していたのである。そう言えば、友人の多くが地方出身者であったが、越境のことはどうも秘していたようである。高校進学近くになって、やっと八中とか小

山台の名を知ったほど事情に疎く、気づかなかったらしい。

その上、四百名ほどの入学者の内、二年生になる時には、七十名も進級させずに転校させて、その空席に優秀な転入生を迎えていたのだという。そう言えば、女子の定員は百名であったが、男子系高校のため、女子なら誰でも入学できた。しかし、名だたる進学校であり、授業について行くのが困難で、それが逆用されていたらしい。

ここまで書いた所に、青木昌彦の訃報が入った。肺気腫で、スタンフォード大からの帰国はかなわぬと知っていたが、またひとり友が逝った。

世界を代表する国際的な経済学者で、いつもノーベル経済学賞の候補にあがりながら結局は逸してしまった。

平成二年には五十二歳の若さで学士院賞を受賞しているが、それはノーベル賞が先になるとみっともないというので、急遽授けられたもの。もう一年、日本のバブルが続いていたなら、間違いなく受賞していたというのがもっぱらの噂である。

その青木昌彦も、高校二年生からの編入組であった。

クラスは八組ある中のA組で、出席番号は、青木が一番、私が二番と続き、座席も前後していたのですぐに親しくなった。彼は編入当初から英語が抜群で、総合成績でも常に学年トップ級、そのウシロに坐る私も、かなり刺激を受けて、数学と理科（物理、化学）、社会（日本史、世界史）だけは青木に拮抗していた。だから、学年を通しての出席簿があった訳ではないが、その先頭A組の最初に並んだふたりが何かと目立つ存在であったのは確かであった。青木は西原衛生工業所の創業者の直系で鎌倉の鵠沼の豪邸から通っていた。

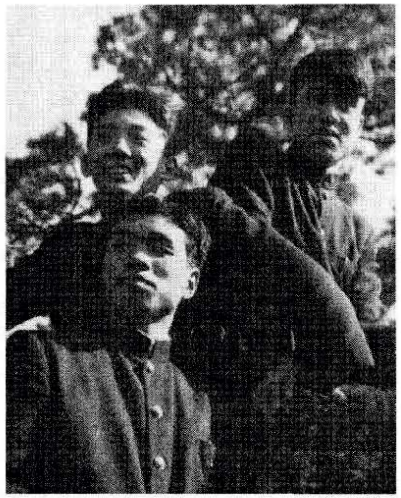
青木昌彦の著『私の履歴書・人生越境ゲーム』（日本経済新聞出版社）を読むと、湘南学園の中学時代には、平尾昌晃の隣に座っていたとか、半導体精密切断技術で世界に輝くディスコの関家憲一とウマが合い生涯の友となったとか、一年下で前衛的な作曲家・ピアニストとなった高橋悠治からカフカのことや十二音階、はてはマルクスのことまで影響を受けたことなどが出ている。まさに自由で華麗な交友関係であった。その頃であろうか、滝井孝作の『無限抱擁』を読んで、父親に怒られたという。

しかし、「正規な」勉強をしない青木に危惧を抱いた母親が、アメリカ大使館に勤めていた友人を英語の家庭教師につけたので、英語の実力が急上昇した。

このように恵まれた中学時代も、県立湘南高校の受験直前に、盲腸炎が破裂して危篤状態となるハプニングに見舞われた。そのため内申書だけでも合格できるはずの湘南高校には入れず、もとの湘南学園の高校部に緊急避難することになった。その結果、二年生の時に小山台高校への編入学となったのである。

小山台時代のことはあっさり書いている。いわば進学のための予備校だったからであろうが、府立八中を受け継いだ先生の中に、数学や英語教育の本当のプロがいたことを賞賛している。後に米国で数理経済学者となるための英語と数学の基礎は全て小山台で得たと言う。

交友関係の紹介では、ます私が写真入りで登場する。



青木昌彦　　中西雄三
新井　宏

新井宏というすぐ後ろに坐っていた級友が、途中入学の時から親切にしてくれ、どちらかというと私が苦手としていた理数の問題の考え方を伝授してくれた。彼は東京工大を出て技術者になったが、……役員を早めに退職して『理系の視点からみた「考古学」の論争点』（大和書房）という本を出し、考古学の実証に一石を投じた。韓国の大学で教えたりもしている。……

……受験勉強は順調に進み、腕試しに新井と駿台予備校や東大の進学指導会の模擬試験に挑戦しているうちに、全国で十番くらいになった。

ふたりで模擬試験場巡りをしていたのは、どこかで「他流試合」の感覚であり、それが青春だったのかも知れない。模擬試験は浪人を対象に出題されるので、数学や物理・化学などは高校での履修を待たずに独習して、他流試合に臨んでいた。それにしても全国十番というのは優秀であった。

青木は「新井がいたので数学に進むのを諦めて経済に行った」などと良く言っていたが、彼の学問の基礎は「数理経済学」である。だから高校時代から数学の実力も冴えていた。数理経済学の基礎部分は、全て小山台高校の授業で十分にマスターできたと言うのは誇張ではない。

写真に出てくるもうひとりが中西雄三である。文中では野球のスラッガーとしての話ばかり出てくるが、実は青木がスタンフォード大学の分校を京都に作るに当たり、企業からの資金援助活動で多大な貢献をしたのが中西なのである。リサイクル事業で大成功し、何かと面倒見の良い男であるが、それだけに公にし難いことでもあった

のかも知れない。三十年以上も、高校同期会の会長を引き受けてくれている。

そこに、妹の玲子から青木昌彦の訃報のことで電話が入った。まだ小学生だった妹と弟を連れて、松林の中に佇む鵠沼の家に行った時のことを良く覚えているという。

青木の母や妹らから受けた接遇が、彼女にとって上流社会との初めての出会いであった。たしかムソルグスキーの「展覧会の絵」が流れていた。

ところで青木昌彦といえば、数理経済学者である前に、全学連、特にブント（共産主義者同盟）の理論的な指導者としての姫岡玲治で有名であった。ブントの創立者である島成朗が「ブントはおれがつくったと思っていたけど、お前がつくったんだな」と青木に言ったという。それだけ、思想面で当時の学生運動に与えた姫岡玲治の影響は大きかった。

私の進んだ東京工大は、学生運動ではマイナーな存在であったが、姫岡玲治と高校の友人だと言うだけでも一目置かれたほどその世界では有名であった。

詩人で思想家の吉本隆明が中央公論に「戦後世代の政治思想」という有名な論文を書いた時に、石原慎太郎、大江健三郎と共に取り上げたのが、無名だった姫岡玲治である。とにかく東大始まって以来の頭の切れる男として評判となったのは、彼が「姫岡の国家独占資本主義論」とでも言うべき論文を学部学生の時に書いていたからである。

ところで、文系の哲学者、詩人とばかり思われている吉本隆明は、実は理系であり、私と同じく東京工大の新聞部に席をおいたことのある大先輩である。その吉本隆明が姫岡玲治を世に出したが、まもなく姫岡玲治は死んで、青木昌彦として蘇った。

ところでここまで書いたので、青木の母のことにも触れておきたい。

珍しいことのように思うが、米国住まいの青木とは無関係に、何回かお会いしているのである。最初は、青木がやっと昭和三十五年一月の「岸渡米阻止羽田事件」による米国入国禁止措置が解けて、ミネソタ大学に旅立った頃である。浅間山登山のため、友達と一緒に青木家の軽井沢別荘に泊めて頂いたことがある。青木の母がわざわざ付き合ってくれた。たまたまその翌日、浅間山の山頂近くで地震にあったが、それが昭和三十九年六月十六日の新潟大地震であった。

それから平成七年の十一月にも、鎌倉材木座の大きな邸宅に独居している青木の母を友人と共に訪れている。人に会うのは御用聞きとテレビ番組上だけだと嘆いていたが、頭脳は明晰で、帰りに村井康彦の『古京年代記』を頂戴した。

その後、大田区の久が原のホームに入っていたが、青

巻一五の三七五五　中臣宅守

愛しと我が思ふ妹を山川を
中に隔りて安けくもなし

巻四の六六六　大伴坂上郎女

相見ぬは幾久さにもあらなくに
ここだく我れは恋つつもあるか

とにかく新鮮であった。たった数字四文字に濃縮された愛の告白、それこそ情報理論の極致であった。限られた伝達手段に最大の情報量を込めること、すなわち単位当たりの情報量を極大化することが情報伝達の要諦であるなどと力んでいた頃である。今なら、さしずめ世界一短いラブレターとでもいうのであろうか。

三女節子が次姉の綾子と恋人の昌二の旧友雨宮渉（三島耕）を結びつけるために、勝手に企てた「月の上った夜」のデートの場所は、東大寺二月堂だったように思うが、池があったので猿沢の池だったかも知れない。ついでに法隆寺や東大寺の各場面ももう一度見てみたい。

テレビでは、しばしば古い映画を放映しているので、ビデオやDVDなら簡単に見つかると思った。ところが、相模原図書館にもツタヤにも、いや国会図書館にも、まったく所蔵していないのである。どうやら、『月は上りぬ』はわずか一ヶ月の差で著作権五十年に該当せず、あと十年間ほど有効なため複製版がないらしい。東京国立近代

木の亡くなる二ヶ月前、百歳で逝った。

青木昌彦との青春も、私にとって大切な思い出であるが、『月は上りぬ』に戻りたい。

高校二年生の頃に見た昭和三十年の『月は上りぬ』は、私の奈良彷徨や歴史・考古学研究の原点となった思い出深い映画である。映画に関連して小論考を書いた記憶があり、どこかに仕舞ってあるはずなので、それを紹介しようと思ったが、どうしても見つからない。

それは大学一年生の頃だったと思う。最先端の統計学の「情報理論」に魅せられていた。物理学の基本法則エントロピーと、この「情報理論」の定義とが全く同じであり、そこに神秘性を感じていた。その小論考の中に『月は上りぬ』を小道具として利用していたのである。

『月は上りぬ』は、奈良に住む三姉妹、長女浅井千鶴（山根寿子）、次女浅井綾子（杉葉子）、三女浅井節子（北原三枝）が織りなす恋愛コメディであるが、背景の奈良がとてもすばらしかった。

三女節子のところに、恋人で長女千鶴の亡夫の弟・安井昌二から電報が届くが、電文は三七五五とだけある。それに対する節子の返電も六六六。万葉集の歌の番号、恋の歌であった。

美術館の相模原フィルム保存センターに行けばあるはずだが、素人がのこのこ出かけて行っても、見せてもらえるような代物でもなさそうだ。そこで、映画雑誌やインターネット上で情報を集めて見る。

監督は田中絹代、脚本は小津安二郎と斉藤良輔、配給は日活、公開は昭和三十年一月八日とある。

その頃、映画界には、監督、脚本、俳優を「貸さない、借りない、引き抜かない」という五社協定があった。後発の日活を閉め出すためのもので、石原裕次郎が『太陽の季節』や『狂った果実』で華やかにデビューする前の日活はそのため苦闘していた。

そもそも『月は上りぬ』は、昭和二十二年、松竹で小津安二郎監督が戦後第二作となる予定で書いた脚本である。ところが、主演の高峰秀子が、新東宝騒動の影響で松竹作品に出られなくなり、中止されてしまった。小津安二郎は、この脚本を七年後に女優田中絹代の監督第二作に譲ったのである。しかし、案の定というか、いざ製作が始まると各社と揉めて難航した。この時、小津は徹底して田中絹代を応援し、筋を通す形で松竹を退社している。

小津安二郎の当初の脚本は、『晩春』や『麦秋』と同じく鎌倉を舞台としたものであったが、田中絹代はこれを奈良に変えた。同じ古都ではあるが、万葉集には奈良の方が相応しい。

インターネットで調べてみると、たまたま『月は上りぬ』のロケ画面を集めた頁がある。

興福寺の五重塔、東大寺大仏殿の廻廊や八角燈籠、東大寺塔頭の龍松院、水門町、東大寺の戒壇院、南大門と地蔵院、若草山、法隆寺の金堂や大講堂、西院伽藍前の道、旅館大黒屋附近、東大寺の二月堂、三月堂、東大寺の法華堂北門、奈良公園の雪消の沢などと、映画のシーン順に簡単な注釈入りで配列されている。

それらの写真を追いかけると、どうやら、節子らの企みで、綾子と雨宮が会った場面は二回あったらしい。最初は記憶にあった通りの二月堂で、節子と昌二が隠れて見守ったシーンなどもぼんやりと思い出す。

その二月堂は、もう二十年ほど前になるが、会社の出張を利用して、修二会、お水取りの達陀の行法を見るために、須弥壇前の二列目に陣取って一夜を過ごしたことがある。八人の練行衆が須弥壇の周りを回りながら、清めの水を撒き、印を結んで呪文を唱える密教的な秘儀であった。松本清張は、お水取りの行事はイラン伝統の井戸のカナートを連想させ、達陀の行法は、韃靼人のゾロアスター教の影響があるではないかと『火の路』の中で述べている。そう思って見れば、達陀の行法は、ボロディンのオペラ『イーゴリ公』の「韃靼人の踊り」と、どこか通じている。

そして、節子と雨宮が二回目に会った場面が、十五夜の奈良公園の雪消の沢であろう。雪消の沢は、奈良公園内の飛火野と呼ばれるところにある小さな池で、万葉集にも詠われた場所だという。

ひとりよがりな回想に耽っていたが、『月は上りぬ』のことを取り上げたのは、もちろんそのストーリーを紹介するためではない。昭和三十年頃、みんなが同じ映画を見て、同じ青春を共有していた。ローマの休日、二十四の瞳、七人の侍、エデンの東、慕情、旅情、野菊の如き君なりき、ここに泉あり、理由なき反抗、と並べただけでも伝わるものがある。それこそ、万葉集の歌番を電報に載せただけで、愛を伝えることができたように、「ここに泉あり」を挙げるだけでも、青春が伝わる。

その頃、武蔵小山商店街には確か映画館が三軒あった。中学生の頃から生徒会新聞作りに夢中になっていて、小山台高校入学直後から新聞部の主力メンバーであった。

全国高校新聞コンクールのようなものがあり、歴代上位に入賞していたため、活版印刷も商業新聞に極力近づけ、下三段は格好をつけて書籍や映画館の広告を載せていた。映画館を廻っては、広告原稿を出してもらったが、映画鑑賞券を協力してくれただけだったようにも思う。

そう言えば、模擬試験で「他流試合」をしていた頃、試験の後に青木昌彦と一緒に、新装なったばかりの帝劇シネマで日伊合作の『蝶々夫人』のロードショウを見た。

楚々とした八千草薫が実に堂々とアリア「ある晴れた日に」を歌っていた。もちろん吹き替えではあるが、それも懐かしい思い出となってしまった。

小山台高校の前身府立八中は、都心のエリート校の府立一中（日比谷高校）とは異なり、山手線の外側にある庶民的な学校であった。それだけに地域に支えられて成立していたので、戦前から校舎脇に二～三千坪の空き地を父兄会が運動場代わりに所有していた。

これを今から二十年ほど前に東京都が数十億円で購入してくれたのである。その頃、同窓会などには見向きもしなかった連中が、やたらに会に出てくるようになった。

小山台高校の校舎の中心部分に、第八中学校に因んで八角塔があり、その直下に、小山台新聞部の部室があった。校舎の一等地を占有していたわけであるが、その横には大きな黒板があり、毎週「黒板新聞」を発行していた。新入部員は、ガリ版文字や少女丸文字のように、枠にはまった字体で、記事を清書させられた。

記事は、やはり教師の話題が多かったが、特に人気があったのは、教師の綽名の謂われである。黒猫、ロンドン乞食、オケラ、ギャー沢、ギャー伴、カルモチン、オ

ットセイ……。とにかく生徒間では、教師が正式な名称で呼ばれることなど全くなかった。

なかでも、担任であったオケラ（舞田正達先生）は、名物の漢文教師で、小身でありながら「白髪三千丈」式に、生徒が酒を飲んで騒いでも見て見ぬふりをしながら、抑えるところはビジッと抑えていた。九十歳で亡くなった時の偲ぶ会には、それこそ、官界、政界、学界、実業界、言論界からびっくりするほど多くの人士が集まった。

青木昌彦が、英語や数学教育のプロと賞賛したのが、ギャー伴（大伴先生）やギャー沢（井沢先生）で、とにかくうるさく厳しく怖かった。

ある時、宿題の準備が出来ていない友人がやって来て、なんとかギャー沢の授業を遅らせろという。そんな時に、先生も困るような質問をするのが、私の役割であった。後の同期会の席上で、いつもギャー沢先生から「あの頃の新井は怖かったぞ」とひやかされた。

ところで小山台高校の教師達は、学芸大学の先生に対して強い競争意識を持っていた。戦前の格付けでは、師範学校が中学校、高等師範が高等学校であった。ところが戦後学制で、高等師範が教育大学になったのは良いとして、師範学校がみんな学芸大学に昇格してしまったのに、府立中学は普通の新制高等学校に留まっていた。

八中の教師達の意識としては、師範学校よりも格上と思っていたので、これが学校運営の面で、天下りの校長との摩擦を生じていた。

面白いことに、当時の小山台高校は、あたかも大学のように、科目の単位制と選択制を採っていた。だから、ひとつの授業が終わると、次は生物とか古文とか音楽とか、生徒の方がぞろぞろと教室を移動するのである。したがって、原理的には授業の空白帯があってもおかしくなく、図書館には授業の真っ盛りの時間帯でも、結構、生徒がいた。

そればかりではない。校内の片隅には小さな食堂があり、授業時間中でもいつも生徒が入っていた。

このような校風は、おそらく、八中を大学に擬することから背伸びしてはじまったのではないかと思うが、映画監督の山田洋次、ジャーナリストの筑紫哲也、異色検事の河上和雄らを生んだ風土になっていたのであろう。あるいは菅直人もそんな流れであろうか。

最近、都立高校としては珍しく、春の選抜で甲子園出場を果たしている。そう言えば、中西雄三のいた頃の小山台高校も野球が強かった。そんな歴史があってか、甲子園出場を支援するための募金では、信じがたいほどの大金が集まった。

（了）

「農業マイスター」と「南足柄市農業参入システム」の法制化

古屋富雄

現在、農家には、その経営支援策の一つとして直接支払いによる「戸別所得補償制度」が実施されています。

しかし、この制度は、全農家を対象にしているため、税金のバラマキだと揶揄する見方もあります。

「戸別所得補償制度」とは、農家を保護するために、政府が農家に対してその所得を補償する。すなわち、お金を農家に直接支払う制度のことです。農家には、定額交付分として、10a当たり、年間15、000円が支給されます。それ以外にも、農産物（主に米）の販売価格が標準的な価格から下がった場合は、その差額分が支給されます。

農業は、人が生きていくために必要な食料を生産する生命産業であることは言うまでもありません。そして、農業はその国の基であると考えます

私は、平成19年10月にヨーロッパにおける都市型農業の振興をテーマにドイツ、イタリアの視察を行いました。この視察は、財団法人神奈川県市町村振興協会の市町村人材育成事業の一環として実施されているものです。メンバーは、このテーマに共感する県内市町村職員8名によりチームを構成しました。



県内市町村職員8名のチーム

視察先の一つでありますドイツのバイエルン州エルディング農業局の取り組み事例を紹介します。

エルディング農業局からの聞き取りで、ドイツには、農業分野にもマイスター制度（農業士の資格制度）が導入されていることが分かりました。そして、このマイスターを取得した農家には、農業経営が確実にできるだけの補助金が支払われることも分かりました。

マイスターとは、日本では、「親方」、「名人」と訳されています。

マイスターの起源は、今から約800年にさかのぼると言われています。その頃のヨーロッパ、特にドイツでは、手工業の間で、徒弟、職人、そしてマイスターという三つの身分ができあがっていました。それは、徒弟が修行を積んで試験に合格すると職人、さらに修行を積んで試験に合格するとマイスターになれるという具合です。手工業では、事業所などを経営するためには、必ずこのマイスターの資格を有していなければならない。

また、後進の職業教育をすることができるのも、このマイスターの有資格者のみであることなど、その業界のリーダー的な存在でもあります。

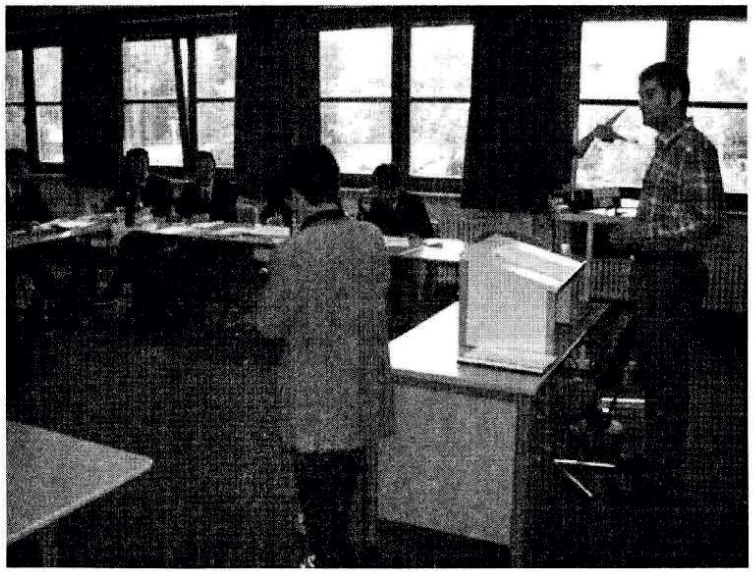
この手工業マイスターのほかに農業マイスターや家政マイスター、海運マイスターなどがあるとのことです。

バイエルン州は47郡（市を含む）で構成され、このエ

ルディング農業局では、ミュンヘン市を含む周辺4郡を管轄しています。

そして、農業促進部門と森林部門の2部門を75人の職員が担当しています。農業促進部門では、EUの農業政策への対応や農家指導およびその教育の3つの業務を行っています。農家指導の業務内容は、農家が農業用施設等を整備する際のアドバイスを主な業務としています。

また、教育の業務内容は、農業士の資格を取得するための教育を行っています。この農業士の資格を取得するためには、農業局に併設されている農業学校で2年間の実習教育を受け、なおかつ、その資格認定が認められた者としています。農家が州から農業関係の補助金制度を利用するためには、この農業士の資格が必要であり、条件になっています。



バイエルン州エルディング農業局

ドイツでは、＊グリーンベルトに象徴されるように一本でも木（みどり）を植えた個人や企業が評価されているように環境に対して国民の意識が非常に高い国と考えられます。そのため農業についても同様であり、環境に負荷を与えず、資源を循環させる、いわゆる環境保全型の農業を実践する農家が評価されています。

従って、バイエルン州でも環境に配慮した農業を州の目指す農業指針と定め、それを確実に実践する農業士の資格を有した農家には最大限の補助金を支給しています。補助金の支給額については、条件により様々でありますが、事業費としての上限は、約1億7，000万円で、その補助率は15～25%で2，550万円から4，250万円とのことでした。我が国では一戸の農家に、これほど多額な補助金の支給など考えられません。

しかし、このことを可能にした背景には、ドイツ国民、市民の環境への意識の高さや「クラインガルテン」（市民農園）による市民への農業への理解がその裏付けと考えます。

バイエルン州の農業局の聞き取りで直感したことは、農家への資金援助が補助金ではなく直接支払いあれば、もっと良いのではないかと思いました。

なぜなら、補助金は、その言葉のとおり農家に自己資金があることを前提にそれを補助するものであるからです。

我が国には、直接支払いによる「戸別所得補償制度」があり、すでに直接支払いが定着しています。

この直接支払いを、全農家を対象にしたものではなく、支給対象者を絞った直接支払いをすべきと考えます。

税金のバラマキと揶揄されないためにも、国民が納得する効果的な支給を図るべきです。

このことを実現するためには、ドイツの事例を参考にした日本版の仕組みを作る必要があります。我が国でも、バイエルン州の「農業士」と同様な資格を有する農家の育成を目指します。

その資格取得については、都道府県に必ず1校ある農業大学校を活用することです。農業大学校では、国の将来を目指すべき農業指針に基づき、都道府県の地域性を活かしたカリキュラムを作成して、2年間の実習教育を実施します。その後、資格試験を実施し、合格した農家を「農業マイスター」として認定します。

「農業マイスター」は、国からの直接支払いを受けることができ、着実な農業の担い手として育成されていきます。「農業マイスター」の更新ついては、現在実施されている「農業経営改善計画」（認定農業者）同様に5年をめどに実施します。

また、直接支払いの支給のチェックについては、年1回の実績報告書の提出と、併せた現地調査を行い、実際の経営状況の確認を行います。その際、実績報告書と現地調査の履行内容とに違いがあった場合は、直接支払い

を中止するとともに、「農業マイスター」の資格は取り下げられます。

このように「農業マイスター」に対象を絞った直接支払いの実施をするには、まずは、農家や農業関係者の理解を得ることです。そして、なによりも国民の支持を受け、その実現を目指すものでなくてはならないと考えます。

そこで、第一にすることは、市民の農業への参加、そして農業への理解を得る施策を実施することです。

ドイツでは、「クラインガルテン」により市民の農業への参加、そして農業への理解を得る仕環境を創りました。

我が国でも誰でもが農業参入できる（南足柄市農業参入システム）により、同様な環境づくりが整うものと考えます。

南足柄市の取り組みは、大阪府や鯖江市を始め、着実な広がりを見せています。しかし、自治体の主体性に委ねているだけでは、その広がりは緩やかなものであり、全国的な広がりを加速的ためには、この法制化を検討することが望ましいと考えます。

そして、農業を身近なものにすることにより、国民の農業や食料に対する関心が高まり、耕作放棄地の解消や食料自給率の向上が図られ、「農業マイスター」への直接支払いについても理解を得ることができる環境づくりが進むものと考えます。

我が国の農業を持続可能な産業にするためには、農家や農業関係だけで担っていける時代ではありません。

国民に開かれた農業参入できる仕組みを法制化（立法化）して始めて、その道が開かれるものと考えます。

専業的に農業をする農家や法人などの経営体には、対象を絞った直接支払い制度を実施する。その一方、国土全体の農地の維持保全の必要性からは、小規模でも農業に参入したいと望む農家以外の農業参入者を積極的に受け入れる施策を同時進行させるべきです。

その結果、ドイツのクラインガルデンの先進事例が示すように、国民全員で農業への理解や食料の大切さを共有する環境が構築できるものと考えます。

このように「農業マイスター」と「南足柄市農業参入システム」の併せた法制化の意義は大きく、我が国の農業そして、農家を救うことと固く信じています。

現在、この法制化に向けて、次世代の党の松田学氏とともに霞ヶ関と調整を図っているところです。

＊グリーンベルトとは、「みどり」で形成された帯のことです。都市計画分野では、都市の保護政策の行う緑地帯で都心の人口密度の増加による市街地などの無秩序な拡大を阻止するために設置された森林帯や公園緑地などがあります。この考えは、イギリスのガーデンシティ構想から発したもので中心になる都市とそれを囲む衛星都市の間を繋ぐグリーンベルトと呼ばれる緑地帯のことです。

門外説 工藤祐経

まえがき

私は子供のころ、七十年ほど前です。千メートルほどの高い山の立ち並ぶ山あいの村に住んでいました。学校に行くと、目鼻だちが整い、体格がよく、勉強が良くできる人が、数人いました。その人たちは皆親戚であることを知りました。その人たちを村の人たちは京の落人だと言っていました。山間地でほかとの、人の交流がないので、近親結婚だったのでしょう。

昭和三十年代、私は今東光という流行作家が書いた、平安時代の仏門の同性愛の物語を読んだ記憶があります。そのなかで仏門の弟子を丸と呼んでいました。

私は四十余年養蜂業の経験から、女王蜂、働き蜂の雌蜂と、なにも仕事をしないで、交尾だけの一匹の雄蜂と、雌雄のない中性蜂から、ミツバチの世界は、なりたっています。

横山正義

雌蜂はイチゴの形状のように、尻が尖っています。中性蜂、雄蜂の尻は丸く、ミニトマトのようです。

私は仏弟子の丸と、中性蜂の、尻の丸いのに納得したのでした。

そんな体験のなか、自身老齢化すると、郷里の歴史に興味をもち、調べるうちに、工藤祐経を知りました。以下、門外漢の物語です。

藤原氏は権力に藤のように巻き付き、存在感を誇示するという。

平安時代末期、天皇を中心とする政権から武士政権の台頭を抑えきれなくなり、藤原氏としては藤原南家を中心に近親結婚により、北条政権を誕生させたのでしょう。

藤原家―藤原南家（武智麻呂）―工藤木工助（藤原為憲、現在なら建設大臣）―工藤維職（初代・伊豆押領使）―伊

東祐隆（工藤家次）―伊東祐家―河津・伊東祐親
　　伊藤祐継―工藤祐経
　　狩野茂光―宗茂

近親結婚には優れた才能を持った人材も輩出するが、その弊害もあります。そのひとつに愛憎の増幅です。

当時平安時代末期、仏教の発展とともに、僧侶の妻帯を禁じられるようになりました。

そしてそれは、同姓愛を育んでいく、時代でもありました。

そんな時代背景のなか、起きた事件でした。

一、不思議な武将工藤祐経

私はわが郷土、内田の鎌倉時代の地頭、内田致茂の承久の乱、拝領地を訪ねてみました。

島根県浜田市、益田市の両市、大分県杵築市山香の三箇所です。

当地の図書館で調べてみますと江戸時代に内田氏、子孫が私たちは工藤祐経、祐時の子孫だと誇りをもって、云っています。

掛川市の原一族も郡史によれば工藤祐経、祐時の子孫と称しています。

相良氏も系図によれば、工藤祐経、祐時の子孫と称しています。

遠江の地頭は何故か、工藤祐経の子孫と誇りを持っているように思えます。

工藤祐経が、平家の嫡子平重盛遠江守の配下、重鎮として一藹を勤めた後、源氏領主、頼朝の元、短期間、四年ほどの間に信頼を得て、静岡県の伊東、佐賀県、宮崎県、長崎県などに領地を得て、そのうえ、ナンバー②の立場を確立します。なおその上、祐経子息、祐時は烏帽子親に源頼朝になってもらう、など厚遇を私は不思議に思いました。

工藤祐経とはどんな人物であったのか。

巷間伝えられることによると、現在の伊東市付近久須美地区の領地を河津祐親に領土の半分を剥奪されたことに腹をたて、手の内の配下、大見三郎と八幡小藤太に、河津祐親とその子息祐泰を討つ事を依頼した人物だという。

河津祐親は工藤祐経にとって、伯父であり、育ての親であり、妻の父すなわち舅であり、烏帽子親、仲人でもあったのです。したがって、殺害された河津祐泰は義理の兄である。

それにもかかわらず、両者の殺害を企てたのです。

『曽我物語』より

「父祐継、代が世までは分けられることもなき領所を、祐経が世に至って半分の主となってしまった。なんとか

して、伊東次郎祐親父子を殺して、伊東・河津両所を自分の物としたい。」

「おのおのしっかり聞いてくれ。相伝の所領を盗られるだけでも悔しいのに、妻室まで奪いとられてしまった。そのうえ、他人に妻を取られてしまった。今は命ながらえても何の意味があろうか、と昼夜にこれを考えると、骨髄まで耐え難い。一矢射て、死んでしまいたいと、思うけれども、姿を見せれば見つかってしまう、あちらは大名だ。

我は無勢なり、さらに本意を遂げ難し。またうかがいにいけば、人、怪しみ見つけられ、告げ知らす者がいるならば、どんな年月が用しても、本懐を達すること叶うまい。日ごろは所帯の仇、今は妻女の敵なり。この上は、狩猟の場にても、心を懸けて、一矢射てくれないか、人々。もし成功したならば、その重恩・奉公のほどは永遠にわすれまい。」

大見三郎、八幡小藤太

「おうせのごとく、殿が伊東を御知行下されば、我々も上見ぬ鷲のように居られたものを、取るに足らない奴らに蹴散らされることはまことに、くやしい。折角ご命令くだされたので、今後、心がけて、時あらば一矢撃って、命を君に捧げます。」

安元二年（一一七六）十月

源頼朝を励ますために巻狩りが開かれました。

主旨は「以前には源氏の侍だった、しかし、今は平家だ。昔を忘れてはいけない。嫡子を殺害され、嫁を奪われた源頼朝公を励まして、元気づけてやろう。」約二千五百人の武士が伊東に集まってきました。

このとき、海老名源八という者が「もっと盛大の会にしよう」と提案しました。

すると源頼朝の嫡子、千鶴を淵に放り込み殺害し、妻を剥奪した、平家の武将で地頭の、河津祐親が嫡子祐泰とともに勢子を集め、伊東での巻き狩りより、広い、天城山の南部、奥野でのまき狩りを計画したのでした。

源頼朝を慕う武士、平家を信奉する河津祐親、起こるべくして起きた事件でした。

伊豆奥野での七日間の狩と相撲など終了し帰路でのできごとです。

河津祐泰（二十一歳）は八幡三郎に射られて死亡。

祐泰は最後に、「工藤祐経にやられた。その家来の大見小藤太と八幡三郎に矢を放たれた」と叫び絶命します。

工藤祐経が依頼したかどうか、京都にいるわけだから、真実はわからないのです。

工藤祐経がなぜこれほど嫌われ、疎んぜられたか、それは祖母が伊東祐隆の後妻の連れ子であり、傍系であったからです。

結果、河津祐親の暗殺はしくじり、息河津祐泰は殺害に成功しました。河津祐親はのちに自殺。

当時、工藤祐経は十三歳で結婚し、京都で平清盛の嫡男、平重盛遠江守に使えていたのです。

遠江は平重盛の領地だといわれています。工藤祐経が望めば領地を得られる、立場にあり、遠江の地頭に信頼があったと考えられるが、なぜ伊東の地にこだわったのか、私には謎です。

源頼朝が富士川の戦い、治承四年（一一八〇）に、平家に勝利すると、弟の宇佐美祐茂や、工藤祐経が依頼殺害した河津祐泰の妻（満江）の父、狩野親光の紹介で、源頼朝の御家人となります。

すると伊東郷が祐経に与えられ、元暦元年（一一八四）には生け捕りの平重衡の接待役を、頼朝に仰せつかり重要視されます。正月二十二日に、日向国（宮崎県）三月二十八日には肥前の国（長崎県、佐賀県）の地頭となります。

建久四年（一一九三）五月富士の巻き狩りが行われた。そこで河津祐泰の子、曽我兄弟によって工藤祐経は殺害され、『さつきの払い』がおこなわれたのです。

曽我兄弟の弟曽我五郎の源頼朝への報告によれば、工藤祐経は一太刀とも刃向かうことなく、覚悟していたらしく、討たれたというのです。

当時、工藤祐経三十八歳、その子、工藤祐時九才。

富士の巻き狩りに参加した人々の中に、前記の遠江の原小次郎忠義、同じく小太郎、同じく三郎、堺小太郎、内田小四郎とある。

原三郎は曽我五郎時致と十番切りの一人として戦い、左のあばら骨三枚、腰の骨まできりつけられ刺殺されました。

年令から原三郎は、工藤祐時の子ということは、無理があります。

曽我五郎は工藤祐経殺害のあと、源頼朝の寝所を襲います。すると突然女装の五郎丸が出てきて、荒れ狂う曽我五郎を取り押さえられてしまいます。

（門外漢の私の説として、頼朝は同姓愛者であったのではないか、それは妻室・北条政子の激しい愛です）

『曽我物語』から

五郎が「屋形のようすはいかがでしたか」と、気がかりの様子で尋ねると、十郎「屋形が隙間も無く立ち並んでいたので、家主が誰であるともわからなかった。少々知っている人々の屋形をだいたい語ろう。

鎌倉殿の屋形を中心として、二重に子柴垣をめぐらして四方に四つの門をたて、それぞれに扉がある。小路を通し、館がその左から右に連なり、屋形の門と門とを向かい合わせにして、諸国の武士たちが君を守護し申しあげている。

外障の左の列、遠江の国の住人原小次郎忠義・同じく

小太郎・同じく三郎、堺小太郎・内田小四郎兄弟五人が並んでいる」

二、時代の流れ（平安末期～鎌倉時代前期）

歴史の流れを追ってみます。

＊平治二年（一一六〇）一月源頼朝、平治の乱で敗れて平家方に捕らえられる。三月十三日頼朝（十四歳）伊豆国に配流させられる。工藤祐経五歳。

当時、河津祐親ではなく、工藤祐経の父、伊東の地頭工藤祐継に頼朝はあずけられたのではないか。（私説）

＊長寛二年（一一六四）七月十三日工藤祐経父、祐継病死。工藤祐経九歳。

このとき、頼朝は祐継に代わり、祐親にあずけられたのではないか。頼朝十八歳。

私の仮説として、「この頃、工藤祐経は金石丸と称されていました。当時、京都では仏教の世界では僧侶が妻帯することを禁じていたので、師は子弟・稚児と同性愛が盛んであったという、そして子弟を丸と呼んでいました。京都文化に郷愁の念を抱く、頼朝は工藤祐経即ち金石丸は同棲生活をしていたのではないか」

頼朝十八歳。祐経九歳の稚児。

平治の乱で頼朝の父・義朝は藤原信頼と組み、信西・平清盛軍と戦い負け、尾張の国で、長田忠致によって暗殺される。頼朝は関が原でとらえられ、京都に護送された。頼朝は殺される運命にあったが、清盛の継母にあたる、池禅尼の嘆願によって救われることになる。このとき、平清盛によって、斬首の寸止めにされ、のちに平家の武将の監視下にある生活、頼朝にとって、この死の恐怖から逃れるには性の快楽以外なかったのではないか。

（平安時代、藤原氏は天皇家と近親結婚で、メンデルの法則にあるように、遺伝子に優劣があるという、その優の優れた、リーダーとして強い天皇家をつくりあげていました。時代の流れとして武家政権を作らざるを得ない状況のなか、藤原南家として、藤原氏の出で木工介、工藤氏は近親結婚によって、平和のため、武家政治としての強いリーダー北条氏を育てあげたのではなかろうか。工藤祐経、曽我兄弟は近親結婚の愛憎の増幅するなかに消えていきましたが、魅力ある人材ではあったのでしょう。）

＊仁安三年（一一六八）工藤祐経十三歳元服し、河津祐親の女、万劫御前と結婚。

頼朝二十二歳。

＊仁安四年（一一六九）工藤祐経十四歳、夫婦で上洛し、武者所に加わる。

頼朝二十三歳

平重盛に付き、武者所のトップ一臈となる。

＊承安二年（一一七二）源頼朝二十六歳、河津祐親の三女と契り、嫡子千鶴御前、産まれる。

＊承安四年（一一七四）源頼朝二十八歳、河津祐親が千鶴御前を殺害し、三女士肥遠平と嫁がせ頼朝を引き離す。

＊安元二年（一一七六）工藤祐経、伊豆へ下向。祐親との間に伊東の所領問題が起き万劫御前と離縁させられる。（藤原南家一族では源氏につく者、平家につく者それぞれ、『勝ち馬に乗り』将来に子孫の生存をかけたのでしょう。）

＊安元三年（一一七七）伊東祐親の命により子祐清、大見・八幡討つ。頼朝の殺害も企て、追う。祐清は頼朝を逃げさせる。

頼朝、伊東を離れて北条の館に逃げる。北条政子と親密になる。

＊治承四年（一一八〇）富士川の合戦。源頼朝大勝する。

伊東祐親自害する。工藤祐経二十五歳、この頃、御家人として、頼朝に仕える。伊東卿を与えられる。

＊元暦元年（一一八四）正月、源平合戦で工藤祐経は範頼に従って、平氏を追撃した。一の谷の戦いの合戦に大勝し、生け捕りの平家の平重衡の接待役を頼朝より命じられる。

正月二十二日日向国の地頭職、さらに三月二十八日には肥前国（長崎・佐賀）の地頭職を受ける。

九月再び、範頼に従い、壇ノ浦の戦いに赴く。

＊文治二年（一一八六）四月八日鶴岡八幡宮で静御前が舞ったさい、祐経は鼓を打った。

工藤祐経の武将としては、特筆されるものはなにもない。

「源頼朝は伊豆伊東に流されて来たのだ。蛭が小島ではない。」

この説によれば、伊東の地頭は工藤祐継であり、工藤祐経の父だ。すると子供の頃から源頼朝は工藤祐経を知っていたことになり、納得いくのです。

私、門外漢は工藤祐経の特別の待遇は河津祐親によって、嫁を奪われ、子を殺害された頼朝の意思があるのではないか。

『曽我物語』より

源頼朝『鬱憤の腸を断ち、愁苦の悲しみを除きて、愛子の敵、伊東祐親が首を刎ねて、わが子の冥土の身代わりに手向けん』とぞ祈られる。

頼朝の強い伊東祐親の殺害意思表明が、読み取れます。

富士野まき狩りで、曽我五郎時致、弟が工藤祐経を殺害したあと、源頼朝を殺害しようとする、意思が理解できるのです。

北条時政の存在はやはり不気味なものがあります。工藤祐経を殺害した曽我五郎時致の烏帽子親は北条時政で時という字を与えたのでしょう。そして致という字は、源頼朝の父源義朝を暗殺したのが、長田忠致でその致という字です。鎌倉幕府の作成した『吾妻鏡』に源頼朝が死亡した前後、一年間記録がまったくない、など謎が多いのです。娘婿でも政治力が衰えれば、平和のために、抹殺される時勢だったのか。

源頼朝と工藤祐経の絆は強かったのでは、ないかと考えるのです。

遠江の地頭が祖と慕う、源氏ナンバー②工藤祐経、そして自分の命をさしだしても、河津祐親の命をねらった大見三郎、八幡小藤太も源頼朝の影を感じます。

当時、狩野氏は平家が藤原一族を伊豆に流してくるので、反平家の気持ちを強く抱いて源氏を支持していましたので、大見三郎、八幡小藤太、平家信奉の河津祐清から攻められた時、狩野庄に逃げ込み庇護してもらうが、殺害されてしまいます。

工藤祐経は不満分子をすべて、抹殺することで、平和を導き出した義賊だったのです。

江戸時代、『曽我物語』は寿として歌舞伎で、正月に演じられたのでしょう、さつきの払いとして

あとがき

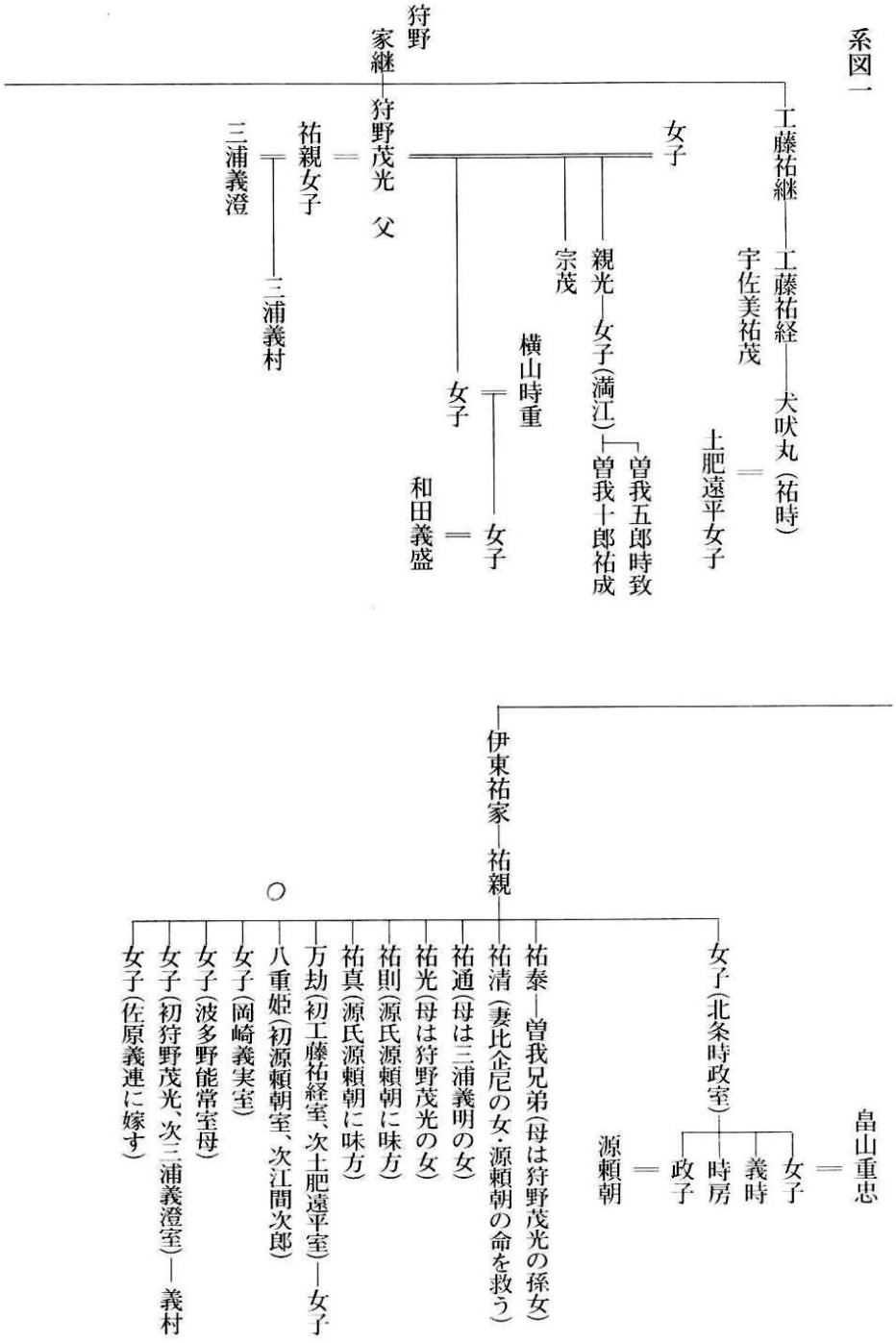
私は郷里の地頭内田氏を調べていくと、工藤祐経に突き当たります。工藤氏は藤原南家で、藤原氏といえば、天皇家と近親結婚で、たぐい稀なる高貴な家柄を築いた家柄。

メンデルの法則に遺伝子に優劣があるといいます。優を重ねて合わせていったのが、天皇家で他の追従をゆるすものではないことを、日本人誰もが理解しています。

鎌倉時代の始め、武士政権もやむを得ずという時代、藤原氏は近親結婚を通じて、なんとか武将を輩出しようと試みたのではなかろうか。それが北条氏ではなかったか。近親者では、当然、愛憎の高まりがあります。その影に工藤祐経、曽我兄弟など消えていったのでしょう。

魅力ある武将が北条氏の影に消えていき、平和の時代が到来したのでしょう。

系図一



『参考文献』

資料より打田三郎致茂は工藤祐経、伊藤祐時の子という文献があります。

一、内田家文書は『永田秘録』巻六十四「工藤号内田後益田」と題する一冊のなかに九十点修められている。『永田秘録』は、萩藩閥閲録の編者永田瀬兵衛政純が写した、全百六十二巻に及ぶ記録で、右田毛利家文書（山口県文書館蔵）に入っている。

『永田秘録』巻六十三所収の内田系図は「内田宗茂」を工藤祐経の孫、伊東祐時の子供としている。

二、『江津市誌』上巻　島根県

内田三郎致茂は工藤祐経の子孫、祐時の子供である。

三、山香町史（大分県杵築市山香町広瀬）

『弘安図田帖』に「広瀬村六町段大遠江国内田工藤三致清跡三郎致持相続」とある。源頼朝の寵臣の工藤祐経の子孫である。祐経は頼朝より日向国に所領を与えられたが、祐経の孫の九郎（三郎？）致郷（致茂？）は遠江国内田庄を領し、内田工藤と称した。

四、『静岡県小笠郡誌』大正四年七月二十日発行

原氏の事跡については他の諸氏と同様さだかでない。郡勢要覧によれば、伊東大和守祐時の状に「本郡本郷に居住したる原氏の祖たり、祐時は伊豆の人、工藤祐経の子幼名は犬房丸、祐経は源頼朝に仕えて伊東二ヶ荘を領す。建久四年曽我兄弟のために富士野に討たれる。犬吠丸家を継ぎ、伊東大和の守祐時と称す。日向、遠江の地頭に補す。二子あり、祐朝、祐光という。祐朝左衛門次郎といい、日向地頭職を継ぐ。日向伊東氏の祖なり。次男祐光大和の守と称し遠江国地頭たり」とある。伊東祐光すなわち原祐光で原谷に居城し原氏十代の祖となったという。

伊東大和守祐光

伊東大和の守祐時の次男本州の地頭に補せられ、原谷に居住し、因に原氏という、原大和守祐光と称す。

五、『伊豆武将物語』　小野真一　有限会社明文出版
六、『曽我物語』　校注・訳　梶原正昭　大津雄一
野中哲照　小学館
七、『吾妻鏡』
八、『伊東の歴史物語』　森山俊英　（株）サガミヤ
九、『伊豆・伊東と伊東氏の史蹟』　伊東商工会

短歌

行雲流水（四十七）

石黒修身

近詠二十首

良きニュース乏しき折に「こうのとり」宇宙を飛べる快挙を称う

「こうのとり」無事発進すその機能役割などを識らずとも嬉し

歌会には旧き住き歌寄せし人長く病に臥せると聞けり

がん進む親しき友のその妻の見舞謝絶の言葉途切れぬ

老い吾が歌を詠むのは先に逝く友人達を悼うためか

吾を越し急ぐ人多しむきになり歩巾広げる吾の現（うつつ）は

簡単に付く筈がない風格など思惟（おもい）写して鏡が嗤う

訪れし老人ホームのレクタイムカラオケの声演歌洩れくる

洩れ聞こゆ演歌の曲は裕次郎「北の旅人」とぎれとぎれに

ひとり身の姉を託せし老人ホーム悪しく評価で行き詰まると聞く

逝く姉の葬（ほふ）りの式は家族葬少なき縁者集いて送る

亡き姉の骨を収める奥つ城は富士が望める公苑にあり

今回の芥川賞お笑いの芸人が受く異和感去らず

芥川賞あるべき論など固定せる旧き想いが吾を苛（いらだ）つ

戦中と現代を描きて骨太に阿川弘之氏逝く広島忌控え

愛読しその想念を畏敬せし作家の訃を聞く原爆忌の朝

その折の噴火騒ぎも収まりて強羅の宿は平静にあり

強羅なる宮家の館は端正に松茸の膳振舞いくれぬ

いけ面の人気男優結婚し老若の女性嘆く文化は

スーパムーンその再来は遠い先見納めとして拝む気持で

短歌　十五首

幸山周平

夏

ボウガシの背を高み咲く庭に出て空の蒼きに電動機ふる

雨のあと目には眩しき金木犀ひるがえりいて夏のそよ風

亡き母は菓子の季食べて憩いしや座敷にいくつ空箱残り

パリの塔慕ためし夢手に入れて退職の夏シャンゼリゼの夜

こどもらの弾けて響く笑い声渡り廊下に朝陽が踊る

北郭港町基隆市
伊香保

台　湾

九份の喘ぎ登るは階段を赤き燈籠千と千尋か

怒り顔絶対無理は口癖か我と違うや娘の夢か

とびきりに嬉しい時は子供らは跳んで喜び空気またたく

ソリィーと断る顔ははにかみて台湾人のホテルボーイや

台湾はパクリ中国追われたり観光にてや生き延びるなり

人　生

壮年に切らす事無し彼女をや老いたる眼（まなこ）まだ欲しいとは

愛よりも大事なものができた時何度も妻に感謝の言葉

子供らに謝らせないこれからは散りし命も報われた夏

面白き人生だったと横顔に握り返すは恋女房

亡き母も光となりて宇宙（そら）にある星も消えゆく光を出して

潮騒録（八十二）

鯨游海

一神教對多神教　　平成二七年二月

基督不容與亞羅
一宗教義悉排他
佛陀未爭三千歲
八百萬神共相和

押韻・羅他和

〈一神教対多神教〉

基督は　亜羅と容れず
一宗の教義は　ことごとく排他なり
仏陀は未だ争はず　三千歳
八百万の神々　共にあひ和す

〔注　解〕

基督＝キリスト。キリスト教徒。
亞羅＝アラー。回教徒。
教義＝宗教上の教えの本旨。趣旨。
佛陀＝釋迦。仏教徒。本名は釋迦牟尼。釈尊とも。
八百萬神＝日本古来の自然崇拝の思想より来る太陽神を始めとした凡ゆる所に宿る神々。一神崇拝の他の宗教に対して対極に在る寛容性が稀少である。日本では仏教や儒教とも同和する。

〔口語訳〕

キリストやキリスト教は、アラーや回教とは不倶戴天の敵であって、お互に容認することはない。
このように両宗教ともその教義は極めて排他的、攻撃的で、一神教への固執は十字軍以来極めて強固である。
これに対しお釈迦さまは他宗教や他宗派と二千年間争ったことがない。この東洋の伝統は日本の神道にも影響し、太古以来八百万の神々とも共に相和す寛容さだ。

☆イスラムも耶蘇も孤高の一神教
八百万居て我れは安らぐ

北陸新幹線開通　　平成二七年三月

忽看積水碧波灣
既仰連峯白雪山
鐵路長城要一代
今馳萬里刹那間

押韻・灣山間

〈北陸新幹線開通〉

忽ち看る積水　碧波の湾
既に仰ぐ連峰　白雪の山
鉄路の長城に　一代を要すれど
今馳す万里　刹那の間

〔注　解〕

積水＝たたえた水＝海。王維・送秘書晁監還日本「積水不可極　安知滄海東」。刹那＝梵語。非常に短い時間。一代＝人の一生の長さ。三十年～数十年。一世一代。

〔口語訳〕

右の車窓に忽ちたたなわる海を看た。碧波の富山湾だ。
左の車窓に、既に仰ぎ看たのは白雪の立山連峰だ。
鉄道の長城完成までに一世一代、数十年もかかったが、今、この万里を一瞬に馳せて来た。

☆百万のかがやき秘めし加賀城に
今馳す万里せつなの間に

桐生祥秀選手非公認日本新記録　　平成二七年三月

髣髴曉之超特急
韋駄天每走爲魁
豹乎駿馬鷹乎隼
誰想倭人九秒臺

押韻・魁　臺

〈桐生祥秀選手の非公認日本新記録〉

髣髴たり　暁の超特急
韋駄天は　走る毎に魁と為る
豹か駿馬か　鷹か隼か
誰か想ふ　倭人の九秒台を

〔注　解〕

曉之超特急＝戦前、オリンピック等で大活躍した短距離の吉岡隆徳の愛称。髣髴たり＝おぼろげに想い描く。
韋駄天＝仏法を守る足の速い神。
魁＝一着。首位。先駆者。一番先をゆくこと。
駿馬＝すぐれて足の早い馬。鷹隼＝筆力が強く速い様。
誰想＝反語＝誰も想はない。誰一人予想した者はいなかった。
倭人の九秒台＝日本人初九秒八七の非公認日本新記録。

☆十秒の壁破りたる韋駄天は
シャイで倹しき京のぽんぽん

《漢詩の流れ70》 奈良時代②朝晃＝阿倍仲麻呂

日本漢詩は飛鳥時代の導入、模倣の段階を経て漸次上達し自分のものとしていった。

この先鞭をつけた一人が阿倍仲麻呂（七〇一～七七〇）である。十六歳で入唐、外国人というハンディがあり乍ら盛唐期の王朝に仕え栄達、高官として遇せられた。

五十一歳になり帰国を許されたが、辞職は認められず日本国への出張という形での派遣であった。この時作った五言俳律は余りにも有名であり且つ名作。この詩に対し唐の詩仏といわれた友人の王維が応酬した五律もある。

銜命使本國（命を銜んで本国に使いす）

銜命將辭國　命を銜んでまさに国を辞せんとするに、
菲才忝侍臣　菲才（薄い才能）侍臣を忝のうす。
天中戀明主　天中（皇居）明主を恋い、
海外憶慈親　海外に慈親を憶う。
伏奏違金闕　伏奏して金闕（王宮）を違り、
騑驂去玉津　騑驂（六頭建ての馬車）玉津を去る。
蓬萊鄉路遠　蓬萊郷路遠く、
若木故園隣　若木（太陽が昇るという神木）故園の隣り。
西望懷恩日　西望して恩を懐うの日、
東歸感義辰　東帰して義に感ずるの辰。
平生一寶劍　平生の一宝剣を、
留贈結交人　留贈す交を結びし人に。

船は嵐に遭い帰国を果たせず、再び唐朝に仕え七七〇年、唐土で客死した。六十九年の生涯であった。

第八次遣唐船の一行に加わって留学生として入唐したのは養老元年（七一七年）、十六才の時であった。

それから十六年後、第九次遣唐船で帰国しようとしたが、既に唐朝の中堅官僚となっていた彼は帰国が許されなかった。既に校書や補闕というエリートコースに乗っていたのが却って仇となったのである。

同期の留学生たち――吉備真備、大和長岡、僧玄昉らの多くがこの九次の帰国便で帰り、日本でそれぞれが大活躍したのだった。

この前后、遂に帰国出来ないことが判った時点で詠んだ作が残っている。

無　題

慕義名空在　義を慕いて名は空しく在り
輸忠孝不全　忠を輸せば孝は全からず
報恩無有日　恩に報ずるに日有る無し
歸國定何年　帰国　定めて何れの年ならん

盛唐時代の長安は、東は日本、西は波斯、南は印度と凡ゆる地域から人材が集結した世界一の国際都市であった。その繁栄の中で活躍した異民族は多い。しかし日本人としては仲麻呂だけが突出した例となっている。日本最初の国際人と名づける理由である。

漢詩

汲深録（二）

松井秀人

秋夜星河　　秋夜の星河

平成二十七年九月

秋天萬里夜沈沈　秋天　万里　夜沈沈たり
群蚿啾啾籬畔吟　群蚿　啾啾　籬畔の吟
悠久星河光彩燦　悠久の星河　光彩燦たり
風霜六紀二毛侵　風霜　六紀　二毛侵なり

押韻・沈　吟　侵

〔注　解〕

星河＝天の川。
夜沈沈＝夜のふけたるさま。
啾啾＝むしの声の形容。
紀＝古い暦法により歳星一周。十二支が一巡する間で、十二年間。
六紀で七十二年間になるが、作者の実年齢は六十八才。

〔口語訳〕

秋の空は遥かに遠く離れて、夜は更けている、
こおろぎ達は、まがきのあたりで鳴いている。
悠久の天の川は光り輝いているが、
七〇年ほどの年月の変遷の中で、自分の頭は白髪が混じっている。

池園明月　　池園の明月

二十七年九月

涼風颯颯度南樓　涼風　颯颯　南樓を度る
廣苑清池明月浮　広苑　清池　明月浮かぶ
流影搖搖倚欄望　流影　搖搖　欄に倚りて望む
通宵欲賦弄中秋　通宵　賦せんと欲し中秋を弄す

押韻・樓　浮　秋

〔注　解〕

颯颯＝さっと吹く風の音、またそのさま。
廣苑＝広い園。
流影＝水に映る月影。
搖搖＝ゆれるさま。
通宵＝夜もすがら。

〔口語訳〕

涼風がさっと吹き南楼を度り、芳苑の池に名月が浮かんでいる。
水に映る月影が池の中で揺れているのを、欄に倚りかかって望む。
夜通し詩を作ろうとして、中秋を弄しむ。

神奈川漢詩連盟会員仲間と箱根板橋の松永耳庵の「老欅荘」と山縣有朋別邸の「古稀庵」を訪ね、小田原清閑亭（黒田長成侯爵別邸）にて旧主黒田長成の漢詩「櫻谷集」の漢詩吟詠と十五夜観月会に遊んだ。多少の雲は出ていたが、幸いに中秋の名月は楽しめた。
黒田長成＝黒田官兵衛から十四代目の福岡藩主家当主。

ロボット雑考（その二）

三戸岡道夫

三、人型ロボット

人間そっくりの人型ロボット（ヒューマノイド）を作る研究も盛んである。落語家ロボットや、女性の人型ロボットが、百貨店の接客や、演劇で活躍しはじめている。

二足歩行ロボットの開発では、日本は世界をリードしてきた。一九六九年に早稲田大学の教授が、下半身型ロボット（ＷＡＰ―１）を作った。さらに一九七三年には、腕や足、目や耳を持つ、二足歩行ロボットを開発し、一九八四年には人間に近い速さで歩くロボットを作製した。

一九九六年にはホンダが、アシモ（ＡＳＩＭＯ）の前身となる「Ｐ―２」を公開した。外部につながるケーブルがなく、自律制御が出来る完成度の高さに世界が驚いた。

つづいてソニーが踊るロボット「キュリオ」（ＱＲＩＯ）を開発するなど、二本の足で歩くという、人間の最大の特徴を持った人型ロボットの実現に、成功したのである。

さらに大阪大学の石黒浩教授は一九九九年に、上半身型ロボット「ロボビー」を開発し、その後も人間に似た外見の人型ロボットの実現を進めた。

二〇〇五年には、樹脂でできた皮膚を持つ女性型人型ロボットを開発し、愛知万博で注目を集めた。また二〇〇六年には、国際電気通信基礎技術研究所がその石黒さんそっくりの人型ロボットを作り、国際的に高い評価を受けた。

また石黒さんはその後、百貨店で販売員を務める女性人型ロボットや、落語家の桂米朝さんに似た「米朝アンドロイド」を開発した。

石黒さんは人型ロボットを研究する最終目標は、

（人間に似たものを作ることで、人間を理解すること

だ）

と言っている。人型ロボットは「人間の心を映す鏡」なのである。

また人型ロボットの動きを、人間の動きに近づける鍵は、人工筋肉である。東京工業大学のチームは、網目状の合成繊維で覆ったゴム製のチューブからなる人工筋肉を開発した。約四百本のチューブの一本ずつに空気を送ることで、まるで本物の筋肉のように自然に動くのである。さらに名古屋大学では、十倍ものび縮みする素材を作った。しなやかな人工筋肉を採用すれば、人型ロボットはさらに人間と見分けがつきにくくなるのである。

とくにそのポイントは、しなやかな人工筋肉は、人間らしい顔の表情を、大きく左右するのである。

落語家の米朝人型ロボットの作成に当っては、目の開閉、眉の動き、顔の筋肉の動き方を工夫したという。

（驚く、悲しむという表情は比較的簡単であるが、はにかむ表情が難かしい）

という。また激しい怒りを表現すると、樹脂製の皮膚が破れてしまうから、その調整が難かしい。

石黒さんは美男美女の人型ロボットの開発にも熱心である。美しい顔や身体の要素を組合せて、

（単に人間らしいだけでなく、実在の人間をどこまで超えられるかを試す）

のだというのである。用途や使う場面にもよるが、

（人間と見分けがつかない人型ロボット）

が生れる日は、そんなに遠くはなさそうである。そして、その段階を超えると、

（人間を超えた人型ロボット）

も出現してくるのではあるまいか。

そうなった場合、人間と人型ロボットの共生共存はどうなってくるのか。それは二十二世紀の課題である。

最近の工場では、人間とロボットが並んで働く風景が拡り始めている。人手不足を補い、単調で退屈な作業から人間を解放するロボットが、本格的に登場する時代が到来したのである。多品種、少量の生産ラインや、狭い工場などで、従来の大型設備では対応できなかった工場作業に、ロボットが進出するようになったのである。

「人間は一つの動作しかさせられないと著しく疲労するが、いくつかの作業を組み合わせた方がよく働ける」と指摘したのは経営学者のピーター・ドラッカーである。

ＴＨＫの山口工場はじめ四工場では、十台以上の人型ロボットが導入されて、一八八〇人の従業員と一緒に働いている。工作機械などに使う部品の組み立てや、検査が主な仕事であるが、二〇〇九年（平成二十一年）から、

二十四時間休まずに頑張っている。

頭部のカメラで状況を把握し、二本の腕で作業をこなすロボットは、川田工業が開発した。価格は七四〇万円で、一五〇台以上売れている。ある利用企業の工場長は、

「パートを雇う代わりと考えれば、四～五年で投資を回収できる」

と言っている。

またホワイトカラーの職場でも、コンピューターの存在感が高まってきている。

「機械が得意なことは機械に任せ、それ以外を人がする。そう割り切って新たな業態を作らないと、生産効率が上らない」

東大入試の合格をめざす人工知能を開発する、国立情報学研究所の教授はそう言っている。

アイデアを形に出来る卓上の３Ｄプリンターとか、手がふさがっていても膨大な情報にアクセス可能なメガネ型端末など、人の能力を拡張する技術はどんどん増えている。

したがってコンピューター人工知能は

「機械は人間の職を奪う敵」

という極論もあるが、これを乗り越えるには、人間の動き方の刷新を考えていかなければならないのである。

それはロボットやコンピューターには出来ない、人間でなくては出来ない仕事の探求である。漫然と機械的な作業に明け暮れる「ロボット社員」の居場所は、これから日々狭くなっていくのではあるまいか。

（ソフトバンクのペッパー）

人型ロボットの実用化競争が激しくなってきた。ソフトバンクは平成二十七年七月から、人型ロボット「ペッパー」を発売した。

電子機器の受託製造最大手である台湾・鴻海（ほんはい）精密工業と、中国インターネット通販最大手のアリババ集団と提携し、戦略商品である人型ロボット「ペッパー」で、低コスト化と海外販路で先手を打ったのである。人と人型ロボットが共生する時代を迎え、米グーグルや、日立製作所などの世界大手も、商機をうかがっている。

経済産業省などによると、国内ロボット市場は二〇一五年の一兆五千億円から、二〇三五年には十兆円近くに達するという。このうち従来の産業用ロボットの伸び率は十八パーセントにとどまり、「ペッパー」のようなサービス型のロボットは四兆九千億円と、十三倍という見通しである。

ロボットは最近のセンサーや人工知能の発達で、自分で考え繊細な動きをする「人らしさ」を備えてきており、家庭や職場へと活動の場が拡がり、市場規模も格段に拡る見込である。

米グーグルは、スマートフォン（スマホ）に続く成長分

野だと注目しており、今後、M&A（合併買収）などをしながら、幅広く手を伸していく方針である。

人型ロボットには、音声や画像の認識、処理のほか、安全対策でも、産業用とは異なる技術やノウハウが求められる。スマホが急速に世界に拡がるとともに、端末や電子部品の業界で激しいシェア争いが起きている。巨大市場に成長するロボットの主導権争いも、世界規模で始っているのである。

（世界大手企業のロボット開発状況）

○米グーグル（自動運転や災害対応など様々なベンチャーを買収）

○米アマゾン・ドットコム（物流作業の自動化でベンチャー買収。ロボット技術の競技会も開催）

○コマツ（自動運転技術のＺＭＰ（出資・鉱山機械の無人化で協業）

○日立製作所（共生型ロボットを二〇一八年を目途に実用化。原発の除染や調査でも様々な機種を開発）

ソフトバンクの人型ロボット「ペッパー」は、人間の表情や会話から感情を読み取り、自らも喜んだり悲しんだりする、表現機能を持っているのが特徴である。孫社長は、

「感情を持つ最初のロボット。ユーザーの友達や家族になれる」

と強調する。本体価格は十九万八千円。この外に、ネット通信料やデーター保管料などに、毎月一万四八〇〇円の基本料が必要。

当初は約二百種類のアプリをそろえているが、その例示をあげると次のようなものである。

（家庭向け）

○子供とゲームで遊ぶ

○家族の思い出を記録

○家庭内の伝言板

○家庭教師（英語の勉強など）

（企業向け）

○人材派遣の代用（受付、ティッシュ配りも）

○介護現場で患者などの話し相手

○顧客の声をデーター分析

ペッパーは小学校低学年程度の大きさで、人工知能や通信機能を搭載して、インターネット上のクラウドシステムなどと連携する。スマホのようにアプリ（応用ソフト）を取り込むことで、機能を多様化できる。

たとえば、高齢者と世間話をしながら、薬の飲み忘れを指摘したり、体調の異変を察知したりする機能を持たせる。銀行窓口やファストフード店で客の注文を聞くといったことも可能で、学習機能で接客能力が向上していく。人手不足が懸念される分野での、利用拡大が期待されている。

（三菱銀行の接客）

三菱東京ＵＦＪ銀行では、平成二十七年（二〇一五年）に、客に簡単に応対できる人型ロボット「ＮＡＯ（ナオ）」を、試験的に本店営業部のロビーに設置した。世界の銀行で接客用のロボットの導入は、三菱東京ＵＦＪ銀行が初めてである。

ナオはフランスのアルデバラン社が開発した人間型ロボットで、身体は五十八センチメートル、重さは五・四キログラムで、専用の台の上に配置されている。客が話しかけたり、預金口座開設の手続などを尋ねたりすると、日本語のほか、英語と中国語で答える。

肘や膝の関節を駆使した愛嬌のある動きが特徴で、顔や画像の認識技術や、十九ヵ国語で会話の出来る機能も検討している。

「ＡＴＭの場所」とか、「住宅ローンの窓口は」とかいった質問に答えて、それぞれの窓口に案内したり、まず行員を補助する案内係としてデビューさせ、来店客の反応を見極めた上で、本格的導入するかを決める。

やがてこのロビー案内程度の仕事をしていたロボットも、支店窓口に座っているオペレーター並みの仕事が出来るようになるのである。すると現在のオペレーターもロボットオペレーターになり、ＡＴＭコーナーが無人であると同じように、銀行の窓口事務にもロボットが座り、人間とロボットの混合窓口になっていくのではあるまいか。

そしてこの傾向は、三菱東京ＵＦＪ銀行だけでなく、他の銀行にも、また証券会社などにも、そして又一般の企業へも、波及していくものと思われる。

（デパートの接客）

最近のロボットはいろいろと進化しつづけている。そのため、コミュニケーション力や、心と心の触れあいが必要な、接客や医療、介護などの領域にも手をのばし、人間生活のさまざまな場面で人間の役に立つ時代になってきた。

さるデパートの一階に、客と会話をする落語家が座っており、入ってくる客に、

「一緒におしゃべりしませんか」

と話しかけてきた。眉間の筋肉を動かし、巧みな話術で客を引き付けているが、これは人間国宝のある落語家のロボットである。

客がタッチパネルで人生相談の内容を選ぶと、手ぶり身ぶりを交えて人生訓を答える。また一対一だけでなく、三人と同時に話しも出来る。

この人間そっくりのロボットを作るには種々の工夫が必要である。認識システムで客の顔の位置や、向きを追いかけ、目を見て話しかける。会話に区切りがつくタイ

ミングを見はからい、他の客にも自然に話を振るなど、人が普段やっていることを、ロボットにもさせるのである。

また別のデパートの接客女子店員ロボットも好評である。来店客に、

「お客さま、とてもお似合いです」

などと褒める口調も好評で、カシミヤのセーターなどを約二週間で、約三十枚も売ったということである。

現在、人とコミュニケーションの出来るロボットには、次のようなものがある。

○パルロ（富士ソフト）（新しい単語などを覚える介護施設向けの人型ロボット）

○ペッパー（ソフトバンク）（人間の感情を理解できる人型ロボット）

○ココロボ（シャープ）（音声にも対応するロボット掃除機）

○パプロプティ（NEC）（家庭の見守りを想定した卓上小型ロボット）

○ロビ（デアゴスティーニ・ジャパン）（週刊誌付属のパーツを組み立てると完成する人型ロボット）

このほか産業技術総合研究所が開発した愛玩ロボット「パロ」も活躍している。いろいろなセンサーが内蔵されているので、人が撫ぜると喜ぶほか、人工知能による学習機能も備えている。

高齢者や認知症患者が触れると、心が安らぎ、また気持が和むといったセラピー効果も持っている。日本以外にも、欧米やアジアなど約三十ヵ国で、約千体が販売され、アメリカでは医療機器としての承認も受けた。

日本でも病院に、手術用ロボットを導入するケースがふえている。医師などの補助である。また、身体の不自由な患者のリハビリを、ロボットを使って支援する、「ロボットリハ外来」を開設した病院もある。

介護の入浴の手伝いや、館内の移動、食事の世話などは勿論であるが、横浜市のある日帰り介護サービスセンターでは、ロボットがソーラン節を歌ったり、落語を披露するなどのサービスをして、場を盛り上げている。ロボットが愛嬌のある声で話すたびに、老人たちの間に笑いが拡がり、ロボットが高齢者との間に新しいコミュニケーションを生み出す可能性があるので、更にいろいろな方法が研究されている。

最近では国内で人手不足の問題が懸念されており、介護だけでなく様々なサービス分野で、ロボットの活用が期待されている。

（将棋電工戦）

将棋のプロ棋士とコンピューターソフトによる団体戦を電王戦という。その電王戦の最終第五局が、平成二十七年四月十一日に、東京千駄ヶ谷の将棋会館で行われた。

第四局までは二対二の成績であったが、この最終局では棋士の阿久津八段が二十一手で、コンピューターソフトのアウェイク（AWAKE）に勝ち、三対二となった。プロ棋士とコンピューターソフト（アウェイク）とは、団体戦の三度目にして、プロ棋士が初めてアウェイクに勝ち越すことが出来た。

これまでの二度の団体戦では、棋士が、

一勝、三敗、一引分け

一勝、四敗

と、大敗を喫していた。しかし今回は棋士が背水の陣で臨み、アウェイクに勝つことが出来たのである。

が、将棋においてはプロの棋士が必死に斗わなければ負けるほど、人工知能は進歩しているのである。

（クイズの司会）

京都大学と早稲田大学は共同で、クイズの司会をするロボットを開発した。

人の声を高度に聞き分ける人工知能を使い、最初に声をあげた人を指名して、正解と不正解を判断するのである。最先端の人工知能を実現するのが狙いで、人の話を理解する技術の確立をめざしている。多くの人と触れあう介護や、家庭用ロボットの頭脳に生かすためである。

介護や家庭で使うロボットは、雑音を気にせず、相手の発言から、その言わんとする意図を理解する必要がある。クイズの司会は、その技術を試す絶好の課題である。

人工知能の研究では、クイズに答える「ワトソン」を、IBMが事業に生かそうとしている。

（小説を書くロボット）

人工頭脳は今や小説も書く段階に足をふみ入れている。まだ人間のように創作したり、また長編小説を書くという段階には至っていないが、作家の執筆を補助したり、物語りの構造を解析したりする過程で、一役買うまでには至っている。

ある大学の人工頭脳プロジェクトでは、ショートストーリーの大家だった星新一の作品一千本を、データベース化して解析し、それを上回る作品を書かせるようなソフトの作成、改良を行っている。

現在のところは、人工頭脳がゼロから物語や文章を作るのではなく、データーベースにある文章や、プロットを組みかえて、小説の形にしているのであるが、最近では、

「どちらがコンピューターの作品か見分けられない」

というほどのレベルに達しているという。

将来は芥川賞や直木賞も、ロボット作品の中から生れてくるかもしれないのである。

（遊ぶロボット）

「ワカマル」は三菱重工業が開発した、身長一メートルほどの、人型ロボットである。

東京の神宮球場に近いTepia先端技術館の入口のそばに、そのワカマルが立っている。

こちらから

「はじめまして」

と声をかけると、甲高い声で、

「ハジメマシテ」

と答えてくる。

「じゃんけんしよう」

と呼びかけると、ワカマルは「ジャンケンポン！」と音頭をとって、三回勝負に応ずる。

胸の部分の画面に出る、グー、チョキ、パーの画像と争い、勝ち負けの結果は人の声で伝えるのである。

「写真を撮ろう」

と話しかけ、こちらが、

「はい、ポーズ」

と言うたびに、片手や両手を上げるなどの、ポーズをとる。

近くの壁のボードには、「はじめまして」や、「いま何時？」など、十三種類の問いかけの例が表示されているが、それ以外の言葉にも反応できるという。

ローラーで移動し、手をつないで館内を一緒に散歩できる。

TEPIA先端技術館は日本企業の先端技術を紹介する施設である。日産自動車が開発した「エポロ」などのロボットも展示されている。

福岡市にある「ロボスクエア」は、多種多様なロボットを展示している。

富士ソフトが開発した、身長四十センチメートルほどの人型ロボット「パルロ」が得意とするのは、クイズである。たとえば、

「アニメクイズをやって」

と話しかけると、

「ドラエモンの妹は誰でしょう？」

と問いかけてくる。そしてこちらが回答すると、正解か、間違いかを、答えてくれる。

クイズのテーマは指定されていないので、いろいろなテーマを投げかけることが出来る。

また「パルロ」は、ダンスをすることも出来る。「メリーさんの羊」や「大きな栗の木の下で」など、掲示されている約二十種類のリストから曲を指定すると、身体を上下させたり、片足を上げたりして、曲に合わせて踊るのである。

大阪市の「キッズプラザ大阪」では、全六回コースで、サッカーをするロボット作りが体験できる。

まずモーターや車輪などのパーツから、全長十五センチ、高さ約八センチの二輪駆動のサッカーロボットを組

み立てる。

次にロボットをパソコンに接続し、

「右に一秒動く」

「左に方向転換する」

などの選択肢から動作を選んで、ロボットの行動パターンを決める。完成したら二人でチームを組んで、二対二のゲームをするのである。

それぞれのロボットは、ボールの行方とは関係なく、プログラミングした通りにコートの中を動きまわる。

（卓球ロボット）

「機械が人間の気持ちを理解する」

そんな未来に一歩近づいたのが、オムロンが開発した「卓球ロボット」である。

人のいる位置の測定や、球の軌道の予測などを、千分の一秒単位で制御する技術で、大人でも子供でも、その人の打ちやすい場所に返球する、協調性を持ったロボットをオムロンは開発したのである。

その卓球ロボットには、オムロンが得意とするセンサーと、制御技術が含まれている。

卓球ロボットが卓球台を挟んで、人と球を打ち合うためには、ロボットが人の状態を把握し、それに応じて人と協調する行動を取ることが必要である。それには人が打った球を計測するセンサーや、ロボットがどう打ち返すかを計算して動かすための、制御技術が鍵となる。これらは、オムロンの中核事業である工場の、自動化システムに使われている基盤技術である。

ロボットの上部に二つの画像センサーを設置し、このセンサーで、人やラケットの位置、球の位置と速度を三次元計測し、ロボットの方に返ってくる球の軌道と速度を予測する。

そしてこの情報を基に、ロボットが持つラケットの軌道を計算し、五つのモーターを搭載したロボットハンドを千分の一秒で制御して、球を打ち返すのである。

こうしてラケットの中心から二センチメートル以内にボールが当たり、狙った所から半径約十センチメートル以内に、打ち返すことが出来るのである。そのため卓球ロボットは、コートの端を狙った難かしい球でも、難なく打ち返すことが出来るのである。

こうしてロボットは、決った作業をくり返すロボットから、環境の変化に合せて行動する、考えるロボットへと、技術革新の道を進んでいるのである。

（ホテルでのサービス）

アメリカのカリフォルニア洲シリコンバレーの、クパチーノ市にあるアロフトホテルでは、「ボトラー」と名づけられたロボットが、客室係として働いている。ボトラーの主な仕事は、物の運搬で、客から頼まれた物を、

人間のスタッフに代って、客室へ届けるのである。

「お届け物をお持ちいたしました」

と電話が鳴り、客がドアを開けると、そこに立っているものは白いロボットで、頭部の蓋が自動的に開き、中に入っている品物を客が受け取ると、蓋が閉まり、ロボットは帰っていく。

ロボットは人間の歩く速さと同じスピードで歩き、障害物をよけながら、ホテル内を動き廻る。他の階へ行くときは、無線通信で呼んだエレベーターに乗り、目的階へ行く。

アメリカではこのように、ホテルや小売店、医療といったサービス産業で、ロボットの活用が拡りはじめている。

ロボット会社の米エーソンが開発した物品運搬ロボットは、アメリカの一四〇以上の病院で利用されている。

家事を手伝うヒト型ロボットが一般家庭に入るのは、まだ先になりそうだが、街中のあちこちにロボットの活躍の場は拡りはじめている。

（癒しのロボット）

日本製の癒しのロボットが、イギリスの病院で、認知症の老人医療で好評を得ている。

「ＰＡＲＯ（パロ）」と名前のついたアザラシの赤ちゃんのロボットで、柔らかな白い毛皮に、つぶらな黒い瞳がかわいい。

高齢化が進む日本で、孤独な老人の友として開発されたもので、世界各国で二五〇〇台が導入されたという。

イギリスでは初めてパロを使った認知症患者の八十五歳の男性が、笑い声をあげてロボットとの対話をたのしんでいた。ロボットは見つめられると、目を開いて鳴き声をあげ、身体を動かし、まるで生き物のようである。

イギリスにつづきアメリカでも効用がみとめられ、医療機器として承認された。

（自閉症の子供の教育に）

自閉症の子供の教育に、人間ロボットが登場し、注目されている。

人型ロボット開発会社のアルデバラン（フランス・パリ）の、「ＮＡＯ」（ナオ）という。

歌ったり踊ったりするほか、いろいろなコミュニケーション能力を育むアプリ（応用ソフト）なども持っている。

ナオは二〇〇六年に誕生した、身長が五十八センチメートルの小型ロボットで、滑らかな動きと、丸みのあるデザインが特徴である。ある小学校の特別支援学級で実施したデモンストレーションでは、二年生から五年生の生徒と一緒に体操をした後、生徒に動物の名前を告げて、その絵がかいてあるカードを示してもらうゲームなどを行った。そのときナオに話しかける生徒もいた。

自閉症の生徒は自分が興味があることは、何回もくり返して聞きたがる傾向がある。教師や親などは、何度も聞かれてうるさがられるが、ロボットなら怒らずに何回でも答えてくれるので、好評なのである。

百種類以上のアプリ（応用ソフト）を持っており、自閉症生徒用にも、

○一緒に体を動かすアプリ

○コミュニケーションが苦手な生徒が感情表現を学ぶためのアプリ

など、四十種類などを持っている。

ナオの値段は約八十五万円である。日本では、大学や研究機関などに約四百ほど導入され、プログラミン教育などに使われている。

アメリカやフランスでは、自閉症教育に効果をあげているという。

（つづく）

古い物・遠い夢

忠内正之

「織部」いま（茶道史余滴）

（七）　大坂冬の陣と織部

豊臣と徳川両家の狭間に立って

織部は、徳川将軍家の茶の湯指南役として、その令名を天下にとどろかし、そのかたわらで諸大名等の茶事を指導し、東西を往還しつつあった。

多少前後するので、このあたりの推移を、年譜によって追ってみよう。

慶長九年（一六〇四）　秀頼十二歳　家康六十三歳
織部六十一歳

家康江戸城を改修する。

慶長十年　徳川二代将軍・秀忠が織部邸を訪ねる。家康、隠居して、秀忠が征夷大将軍となる。江戸城の本丸が完成する。

慶応十一年　織部六十三歳

家康は静岡に駿府城を築き、これに入る。

慶長十二年

織部は織田有楽と共に、秀頼（十五歳）に招かれて大坂城において台子の茶の湯を催す。終ってから、織部と有楽は城内の畳の間に寝ころんで、楽しかった昔日の想出を語り合ったという。

慶長十四年　織部六十六歳

一月秀頼は京都・方広寺の大仏殿の再興をはじめた。一方、二月、徳川家康は尾張、名古屋城の普請を西国大名に命じた。西側への攻撃体勢を整えるためと、西国大名の財力を消耗させる意図からであった。

古田織部はこの名古屋の築城に際して作事奉行となり、それまで清洲城内にあった建物の一部を利用した、

数寄屋・四畳半台目の茶席を古材でもって造営している。これが「猿面茶室」といわれるものである。戦災によって焼失したが、昭和二十四年に復元され、現在に至っているということである。

慶長十五年　織部六十七歳

前にも述べたが、織部は将軍・秀忠に台子茶湯を伝授、将軍の茶道指南役となる。

慶長十六年　織部六十八歳

家康（七十歳）はかねて上洛を求めていた、秀頼（十九歳）と二条城で漸く会見する。その時家康は秀頼に対し、「わしは太閤殿下より、秀頼殿が十五歳になられたら天下を譲るように言われたが、石田三成らが関が原でわしを討とうとしたゆえ、その約束は反古になったと思っている。今後のことは秀頼殿しだいでござる。ゆめ、お袋様（茶々のこと）の言うことを聞かれぬ方がよい」と告げたという。

これに対して秀頼がどの様な返答をなしたか、定かではないが秀頼の態度は堂々としていていずれ豊臣の頭領として恐るべき存在になると認め、家康は警戒心を強めた様である。

この年、秀頼が二条城で家康と対面したあと、豊臣方と見られていた有力な大名が相次いで死んでいった。

加藤清正没（五十歳）、浅野長政没（六十五歳）、堀尾吉晴没（六十八歳）、島津義久没（七十九歳）、等である。

加藤清正以外はいずれも高齢であり、病死と思われるが、加藤清正はまだ五十歳であり、二条城で秀頼に付き添う姿は壮健そのものであったので、徳川側の手で毒殺されたのではないかとの噂が立ったという。

この年、織部の師であった、大徳寺の春屋宗園禅師が入寂（八十三歳）

慶長十七年　織部六十九歳

織部は八月十一日駿府へ下向、家康に拝謁し、翌十四日に行われた朝茶会を仕切った。

ついで織部は八月十八日、片桐且元とともに江戸に赴き、翌慶長十八年の三月なかばまで、江戸に滞在した。

織部と且元が駿府および江戸に長期滞在したのは、豊臣と徳川両家における平和的共存策を模索し、そのために徳川家康さらに将軍・秀忠に拝謁したものと考えられる。

この頃織部は茶書、「織部百ヶ条」を完成するに至った。

慶長十八年　織部七十歳

織部は三月江戸から京都へ帰るが、途中、駿府城により徳川家康と会っている。織部は再度、豊臣・徳川両家の衝突をさけるべく進言をしたものと思われる。織部としては豊臣家の断絶だけは、最悪の場合でも避けたいという気持があったのである。

織部の養父古田可兵衛・重安は、かつて足利十五代将

軍義昭に仕え、義昭に直諫するところがあって追放されるという事態を招く豪気なところがあり、また、実父の古田主膳正・重定は慶長三年（一五九八）豊臣秀吉の死去に際して、即日殉死するという家系からみて、家康に対しても憚らぬ意見を述べたのではなかろうか。加えて天下一の茶の湯の宗匠としての誇りと自信もあったに相違ない。

しかしそのことは、齢七十二歳となって余命を考える家康の徳川政権維持への執念をかりたて織部への信頼を失わしめ、むしろ織部を危険人物視する方向へむけてしまったのである。

家康は、織部が四男九郎八を秀頼の小姓として勤めさせていることを苦々しく感じていたとされる。

十二月、家康は全国のキリスト教を禁止、キリシタン追放令をもって宣教師およびキリシタンを追放する。

慶長十九年　織部七十一歳

徳川家康は七十三歳となり、幕藩体制の確立をいそぐ。一方豊臣秀頼は二十二歳に成長したが、徳川・豊臣間の対抗は百戦錬磨の家康の計略どおり挑発され、それに好戦派の若い豊臣方がまんまと乗ったのが、方広寺の鐘銘事件である。

そして一方ではキリシタンの追放、幕閣側では大久保忠隣の失脚となって、いよいよ豊臣家討滅への布陣が着々と固まっていった。

和平共存を願う織部の心境は、如何ばかりであったであろうか。

キリシタンの追放

慶長十七年（一六一二）幕府直割領で先づ発したキリスト教の禁止、弾圧は京都の教会堂（南蛮寺）を破壊した。慶長十八年（一六一三）には家康みずからキリシタンの追放を命じて、全国のキリスト教を禁じ、宣教師、キリシタンの追放を徹底した。

そのため幕府は徳川家譜代の重臣、大久保相模守・忠隣を京都へ派遣したのであった。

かくて慶長十九年（一六一四）九月には、かつて信長、秀吉に仕えた武勇の士高山右近および小西行長の家臣であった内藤如安等のキリシタンを国外追放することとなった。

一行一四八名は長崎から、船底に穴のあいた老朽船に乗せられ、一部はマニラ、またマカオにむけて追放された。右近は如安とともにルソン島に向い、約一ヵ月余の船旅の末、マニラに到着した。同年末だったという。

何故これ程迄に家康はキリスト教を弾圧しなければならないと考えたのであろうか？

一つは天下を制覇する上で佛教以外の異教は大きな障碍となると断定したこと。

もう一つは、相対峙する豊臣側の中にキリスト教信者が多く存在していたこと。殊に豊臣秀頼はキリスト教をひいきにしていたと伝えられる。

高山右近の妻は織部の妹であるとの説もあるが、これは織部と同じ茶人・薮内剣仲へ嫁いだ善が間違われたものである。

織部がクリスチャンであったかどうかは、未だに不明であるが、南蛮文化に通暁するためにキリスト教に対しては、寛大であったと思われる。

天正十年（一五八二）少年使節団としてローマに派遣された原マルチノはマカオに追放された。伊東マンショは慶長十七年（一六一二）長崎で病没。中浦ジュリアンは寛永十年（一六三三）長崎で殉教した。また千々石ミゲルは棄教したという。

方広寺の鐘銘事件

方広寺は豊臣家にとって縁の深い寺である。文禄元年（一五九二）伏見城の築城に着手するかたはら、豊臣秀吉は方広寺に大仏を造営した。

慶長五年（一六〇〇）当時八歳であった豊臣秀頼は、方広寺の大仏殿に七層塔を建立した。しかし慶長七年方広寺は火災により焼失した。慶長十四年秀頼は方広寺および大仏殿の再建に着手し、慶長十九年いわゆる鐘銘事件の発生となる。

方広寺の大仏殿の鐘銘に、豊臣家の依頼により「国家安康」「君臣豊楽」の語句をかいたのは、東福寺の文英清韓つまり清韓禅師であった。禅師は伊勢（三重県）・津の出身であった。

かねて豊臣家殲滅の機会を狙っていた家康にとっては、絶好のチャンス到来とばかりに、徳川家康の御用学者・林羅山や天海僧正、金地院崇伝の意見をとり入れ、鐘銘の語句に難くせをつけ、大仏の落慶供養の中止を命令した。七月二十九日のことである。

この報せに驚いたのが、方広寺鐘楼造営奉行の片桐且元であった。且元は大坂城側にあって、慎重論を唱えた加藤清正とともに、自重もしくは屈従を唱えるハト派であった。

家康にとってはハト派を潰すことによって、若い秀頼、誇り高い淀殿、そしてこれ等を取り巻く大野修理大夫・治長等のタカ派が、挑戦して来ることが、まさに思う壺であったのである。ハト派のいま一人が古田織部であった。

且元はことの委細を弁明するため、清韓禅師をともない八月十八日駿府へ下向した。ところは本多正純の屋敷であった。清韓禅師を糾問したのは、林羅山、金地院崇伝それに天海僧正である。清韓禅師は毅然として、国家

安康の語句は、大御所・家康公の徳をたたえるための文言、もし、それが不敬と仰せられるならば、自分の罪と述べた。その結果清韓禅師は、謹慎・蟄居を命ぜられて帰洛したのであった。

その清韓禅師を織部は八月二十八日、茶会に招いた。おそらく清韓禅師の心の痛手をいやすためで、他意なく茶でもてなしをしたと思われるが、謹慎というのは当時の処罰であって、公用以外は一切の外出を許されていなかった。

かねてよりの織部のハト派的言動により危険視されていたのであるから、家康に反抗したと、ととられても致し方ない。つまり織部にとって疑惑を招くという意味で極めて軽率であったといわねばならない。

天下一の茶道の師匠だから、何をしても許されるという心の驕りがあったかも知れない。

一方片桐且元は「大坂城を明け渡す」か、さもなくば「秀頼あるいは淀殿が江戸に詰める」かしなければ、平和裡に解決すべき道なしと報告した。且元は状況判断して豊臣家の存続のためには、天下の政権は徳川にゆずり、徳川から指示される処の西国の大名としての地位をたもつより他に、御家の安泰はないものとの屈従感が、つよく支配していたものと考えられる。

しかし、大坂城の秀頼をはじめとする好戦派の多くのものは、かえって且元の行動を疑い、且元暗殺をはかるべく企図した。

このことは織田信雄の密告により、且元は未然に知り、大坂城内の空気を案じながらも、居城である摂津の茨木に隠退することとなった。

そして翌元和元年（一六一五）正月さらに大和の法隆寺近くに幽居したが、後に同年五月二十八日、大坂城の落城（五月八日）をおそらく耳にして病没した。豊臣家の世嗣・秀頼の守役として、そのむかし天正十一年（一五八三）の賤が岳の七本槍のひとりとして名を轟かして以来、豊臣家の忠臣として一貫してきた且元の晩節の心中は察するにあまりある。

後世〝桐一葉落ちて天下の秋を知る〟等とうたわれ、劇作その他で語り草となっている。

この片桐且元の弟の主膳正・貞隆（大和小泉一万六千石）の子が片桐石州であり、やがて徳川四代将軍・家綱の茶道師範となる。現在の茶道石州流流祖である。

方広寺は京都市東山区の国立博物館北にあって、現在は豊国神社と並び、その間に鐘楼は昔のままである。筆者もかつて具に拝観したことがある。

問題となった「君臣豊楽」「国家安康」と刻まれた鐘は、重量八十二トンといわれ、その直径は二メートルはあり、巨大なものである。

その上方に一字画一センチ程度の文字がぎっしりと書

かれ、その中に前記の文字がある。このような細かいものをよく見出したものである。

家康側が云うが如く、この鐘銘の語句がけしからんということであれば、直ぐにでも削除されてしかるべきで、それはそのまま現在に至っていることを見れば、これは明らかに挑発以外の何物でもないことを物語っていると言える。

のみならず、この鐘銘の語句の作成が豊臣方の恣意によるものか。逆にまた徳川方の仕組みによるものか。また作者清韓禅師の自主発想であったものか。未だに諸説紛々として結論が出ていないところに疑問と興味が湧くのである。筆者は、何者かの強い圧力により出来上った語彙であることは否めない事実と思う。

かくして仲裁人ともいうべき片桐且元を、大坂城から排除して暗殺しようとした豊臣方に対して、徳川方は攻撃の正当性を得たとして戦の準備に入ったのである。

秀頼側は家康が攻め寄せるのは間違いないと見て、大野治長らに籠城の備えを命じた。治長は諸国に檄を飛ばし、牢人を集めた。

一方で福島正則や黒田長政、加藤嘉明、蜂須賀家政ら豊臣恩顧の大名に救援を求めたが、応じる者はいなかったという。

織部の負傷

方広寺の鐘銘に「国家安康」と記して、謹慎・蟄居を命ぜられていた清韓禅師を茶席に招いたことにより、徳川家康の逆鱗にふれた織部は、大坂冬の陣で駿府を出発、尾張の名古屋城まで出陣してきた家康を迎えるべく、医師の半井驢庵（二代目か。初代は永正年間渡明して武宗の病を治癒したという）とともに京都をでて、やってきた。家康七十三歳の身を案じ、医師をともなってきたとみるのが妥当であろう。

また自らの行為の軽率さを弁明するためでもあったと思われる。慶長十九年十月十七日のことである。織部は七十一歳であった。

十月十八日、家康は本陣を茶臼山におき、江戸城からきた将軍・秀忠と合体し、大坂冬の陣の戦闘は翌月の十一月十九日、大野治房等のまもる穢多崎の砦の攻撃から始まった。そして同月二十六日には、今福という処で、徳川方の佐竹義宣の軍勢と、大坂方の木村重成、後藤又兵衛の軍勢が衝突、始めて一戦を交えたが、木村重成の軍は徳川方の上杉景勝の横からの襲撃を受けて敗退した。

その翌日、十一月二十七日、織部は茶道の上での弟子でもある佐竹義宣の陣中を見舞った。

もとより織部は徳川方に属して陣中にあったのである。持ち場をはなれて佐竹義宣を訪ねたのは、織部と佐竹義宣とは古くからの師弟であるため、織部としても懐しいものがあったに違いない。

過ぐる慶長五年（一六〇〇）秀吉の死後、会津の上杉景勝討伐にむかう徳川家康の命により、織部は常陸太田城主であった佐竹義宣を、茶道の師弟関係を利して徳川方の味方につけるべく努力、成功をしている。このことは先にも述べている通りである。

さて、昨日の戦に勝った故もあったのであろう。織部の訪問に義宣も、つもる話をし、茶を汲みかわした後、両者は兜をとったまま、矢弾をふせぐ竹束のなかに、茶杓になる良い竹はありはせぬかと物色していた。

その時、織部の禿げた頭が、一瞬、竹束の楯かげの間から日光に、照り輝いた、その時である。そこへ敵陣の狙撃兵がねらいうった。幸いにも弾丸は、かすれて、頭部に負った軽傷ですんだのであった。

これはいかにも織部らしいエピソードである。戦陣にあっても茶道のほうに気をとられていた。織部はさっそく己れの陣屋に戻り、傷の手当てをしたのち、「数寄屋においても、兜を着用すべし」と戒めたという。またこの時に作った茶杓を〝玉すべり〟と名付け事件を笑いのめすのも忘れなかった。

この事は、すぐ徳川家康の耳にも入り、家康は早速に、膏薬と降真香という血止めの薬を織部の許に見舞いとして届けた。そこで織部の子息は、翌日家康の陣屋に赴き、謁見を許され礼を述べた、ということで伝えられている。

事件は、陣中で大評判になった。

（陣中で持ち場を離れ、茶呑み話で流れ弾に当たるとは、さても戦意の薄きことよ）

（戦場でも数奇の心を忘れぬとは、さすがお茶頭らしきお心掛け）

と、皮肉と賞讃交々のものであった。

掠り傷とはいえ膿が左目に入り、失明寸前で正月を迎えたとの説もある。

独眼竜の伊達政宗から、見舞状がとどいて「大事な場所のこと故、油断なく御養生されよ」との丁寧な手紙があったという。

片目になってしまった同情の意味もあったのではないであろうか。

筆者の独断とするが、この時織部の受けた怪我の後遺症はかなり後々に大きく作用することになったと想像する。

大坂冬の陣の和議成立

大坂冬の陣は、徳川家康としても難攻不落といわれる大坂城を一挙に陥落させることは至難とみて、当初から

威嚇で、有利な条件で和解にこぎつける魂胆であった。

強力な指導者の居なかった、大坂方では、若い秀頼や側近の血気にはやる武士団、それに淀殿まで、まんまとそれに乗ってしまうのであった。

家康は織田有楽をさそい、大坂方の主将、大野修理大夫・治長の説得にあたらせ、それに成功した。この間に大坂方としてはさまざまな条件を出したが難航した。家康ははじめから条件交渉などによって問題解決を考えてはいなかったのである。

あくる元和元年（一六一五）の正月になって、大坂の知行も、秀頼や淀殿や浪人どもの身の上まで、もとのままでよしとし、ただ、有楽と治長が人質を出し、家康出陣のしるしとして、大坂城の総構えの濠を埋めるということで、和議が成立した。

しかし、濠埋めのことは誓紙には書かずに、ただ、口約にとどめたのは、これを悪用するための巧妙な策略だったのである。

家康の思惑どおり事ははこび、家康は駿府城へ帰っていった。秀忠は残って濠の取り潰しにかかった。

和議が成立し、秀頼も、淀殿も、安堵の息をついた。不満だったのは、槍ひとすじに一国一城を賭けて、大坂に入城した部将たちであった。

秀忠は直ちに、安藤正次らを奉行として、大阪城の濠の破却にあたらせた。そうして、三の丸の外濠ばかりか、二の丸の内濠をも埋めさせた。

これを知った大坂方は、大いに驚き、安藤正次を責めたが、正次は、家康の命だといって聞き入れない。大坂方では、直ちに使者を駿府につかわし、その違約を責めたが、家康は「奉行の誤り故、元のごとく修理させる」と答えたというが、そのうちに、更に二の丸の千貫櫓をはじめ、有楽屋敷・西の丸・治長屋敷をも引き崩し、その土材で内濠を埋めたため、二の丸まですべて平地となり、本丸だけが残存するといった悲惨な状況になってしまったのである。

濠埋め工事を終えた将軍秀忠は正月十九日に大坂を去り、伏見を経て、江戸に帰った。

ところで、家康は、大坂城が裸城となったのを見すましてから、再び難題を吹っかけてきたのである。ここから大坂夏の陣が始まることとなり、そうして織部一族の終焉を見ることになるのである。

続く

関東管領始末記⑲
越後の春

千坂精一

一

北條氏康に関東を逐われて三國峠を越え豪雪の越後國（新潟県）を横断して無事春日山城（上越市中屋敷）に到着した上杉憲政は、城主長尾景虎に迎え入れられて安堵したのかそのまま数日のあいだ床に臥してしまった。

このとき二十三歳の青年武将長尾景虎は律儀な人で、父爲景が越後守護代の身で守護上杉房能と関東管領上杉顯定の兄弟を討った下剋上の行爲を思い悩み恐縮しつづけていたので、現関東管領の上杉憲政が庇護を求めてきたことは名誉挽回の好機到来であった。

だが、景虎は手放しでよろこんではいられなかった。

当時の越後國は関東管領の本家筋に当たる上杉氏山内家の守護國ではあったが、まだ統一されていなかった。

上、中越地区には守護家の旧臣をはじめ、景虎の府内のほか上田、栖吉、三條の長尾三家がいたし、揚川（現阿賀野川）の北の下越には源頼朝が奥州の藤原秀衡を頼って亡命するであろう弟義經を捕縛すべく地頭職として配置した鎌倉御家人たちの子孫が蟠踞していて、室町期に入って守護制度が布かれても服従しなかった。

そんな状況のなかにあって景虎はまさに越後國内の統一に大童の最中だったのだが、憲政の受け入れをだいいちに考えて春日山城下の府内に管領舘建設を優先した。

その舘の敷地は内部が約二百メートル四方もある広大なもので、周囲は土塁と堀をめぐらして有事に備えた。

御舘と称ばれるこの舘跡は現在直江津駅の西方約一キロのＪＲ信越本線と北陸本線を上越大通りが跨ぐ御館橋の西方上越市五智一丁目の住宅地になっていて、その一

部が御館公園として陸橋とともにその名を遺している。

そして、その年八月景虎は義兄長尾政景の上田荘坂戸城（南魚沼市六日町）に本陣をおくと、平子孫太郎、庄田總右衛門、吉江木工助らの部将に軍勢を預けて初めて三國峠越えで関東に出兵し沼田城（沼田市）に入った。

だがこのとき越後軍は沼田城から動かず、北條氏康も小田原から出兵しなかったので合戦にいたらず、豪雪に帰路を断たれるのを懸念して十月に引き揚げさせた。

景虎にしてみれば、たとえ合戦にいたらずとも氏康に対しては関東管領擁立の示威運動になったし、憲政には北條征討に動いたことで面目が立ったことになる。

十二月には武田信玄に逐われた信濃守護小笠原長時が景虎を頼ってきて近隣が騒がしくなってきた。

管領についで守護も駆逐されたということは、幕府体制が崩壊して乱世になってゆくことを暗示していた。

そんななかにあって御舘の新居に落ち着いた憲政は、荒れ模様になってゆく世間とは没交渉でのんびりとはじめての雪国越後の春を迎えようとしていた。

二

憲政が御舘で一年を過ごした天文二十二年（一五五三）二月十日、景虎の兄晴景が四十五歳で病死した。

親子ほど年齢の差があるのは、景虎の生母は同族栖吉（長岡市）長尾顯吉の女で父爲景の後妻だったからだ。

晴景は父爲景の病死により二十八歳で家督を継いだ。

だが家臣団の対立を抑えていた爲景病歿の噂が広まると、守護家の旧臣、同族、揚北衆などの不穏な動きが出てきたので、爲景の葬儀は出陣と見紛う物々しい武装集団の参列になり、菩提寺林泉寺に預けられて仏道修行に励んでいた景虎も甲冑に身を固めて父の柩を護った。

その後も病弱な晴景を心服せず、対立が表面化した。

景虎が林泉寺に入って七年経った天文十二年（一五四三）、揚北衆をはじめとする反守護代勢力の鎮圧に疲れて自信喪失した晴景は結束を強めるために十四歳になった景虎を強引に還俗させて春日山城へ連れ戻すと、急ぎ元服させて幼名虎千代を平三景虎にあらためさせた。

元服すれば次は初陣である。晴景は景虎を中越へ派遣して地域の抑えと揚北衆の睨みに据えることにした。

景虎は腹心と将兵を率いて反勢力の群がる三條城（三条市上須頃）へ入り、城主山吉豊守の補佐を受けた。

だが翌年には栃尾城（長岡市大野）へ移って、城主本庄實乃の補佐を受けた。栃尾城のほうが母の実家栖吉長尾氏の本拠栖吉城（長岡市栖吉町）により近く、緊密な連絡をとるのに便利だったからである。

その年、沈黙を守っていた近隣の反勢力国人たちが弱冠十五歳の景虎を侮って諸方から攻撃を仕掛けてきた。

景虎は、本庄實乃のほか三條の山吉豊守、栖吉の長尾

顕吉らの協力を得て攻め寄せる国人たちを次々に撃退して見事初陣を飾った。景虎の華々しい登場であった。

景虎が還俗して三年目の天文十四年（一五四五）十月、上杉守護家の老臣黒田和泉守秀忠が次兄左平次景康を殺害して黒滝城（西蒲原郡弥彦村）に立て籠もった。

兄晴景危機の報らせを受けた景虎は急ぎ春日山城に馳せ参ずると、命を受けて黒滝城攻撃に向かった。

恐れをなした黒田秀忠は僧侶になって他国へ去り兄景康の菩提を弔うことを誓って助命嘆願してきたので、景虎はその神妙な態度を憐んで赦し栃尾城へ引き揚げた。

ところが二年後に黒滝城へ戻ってふたたび反抗した。

再度の謀叛に怒った守護上杉定實は、旧臣と雖も容赦せず景虎に完膚無きまでに討伐することを命じた。

信頼を裏切られた景虎は烈火の如く怒り、憤怒を込めて徹底的に猛反撃を加えて落城させると、黒田一族を悉く捕えて切腹させ、禍根を絶った。

この黒滝城攻めで景虎の武名は大いに上がり、盛り立てた諸将もその活躍ぶりに将器の片鱗を見て感服した。

なかでも上條上杉家の旧臣宇佐美定満は景虎を国主に仰ぐに相応しい器量と見抜いて、

（栴檀は双葉より芳し）

とぞっこん惚れ込み、軟弱な晴景を見限って栃尾城の景虎を擁立しようと考えた。

その企てに多くの国人たちが同調したので、同族上田長尾の房長、政景父子は春日山城の晴景に注進した。

怒った晴景が景虎を謀叛人と極めつけて栃尾城攻撃の陣触れをしたので、事情を知った景虎は愕ろいて釈明の使者を送ったが、晴景は赦そうとしなかった。

長尾兄弟による一触即発の危機を憂慮した守護上杉定實は、仲裁に入って晴景を説得し、景虎を養子にして隠退することを渋々ながら承服させ、家名存続を図った。

天文十七年（一五四八）十二月三十日、上杉定實の斡旋で晴景は四十歳で隠居したので、景虎は栃尾城を出て春日山城に入り、十九歳で家督を継いだ。

しかし、誰もがみな景虎を認めたわけではなかった。

晴景のあとの守護代を狙って協力してきた上田荘坂戸城主の長尾政景が景虎の統制に服従しなかった。

上田長尾は政景の父房長が景虎の父為景と同族争いを起こしていたし、政景自身もまた晴景と景虎が対立したとき晴景を援けて敵対していたので痼りが残っていた。

景虎が晴景の跡を継ぎ守護代になって二年後の天文十九年（一五五〇）二月二十六日に上杉定實が病死した。

定實には嗣子がなかったので越後守護家は断絶した。

このとき定實は景虎を守護にする遺言を残したというのだが、真偽はともかくとしてたとえ遺言がなくとも守護家が自然消滅すれば守護代が頂点に立つことになる。

このころ室町幕府の守護制度はすでに有名無実になってきていて、事実上越後国主になった景虎は国内統一を

図り、坂戸城の長尾政景討伐に出馬しようとした。

それを知った政景は、中越地方の与党国人を集めても利あらずと覚り、誓書を差し出して恭順の意を示した。

政景が同盟してくれれば頼もしい片腕になると判断した景虎はすぐさま申し入れを承諾した。これで父為景が上田長尾の房長と和睦したときその嫡男政景に嫁がせた姉（後の仙洞院）の身も安泰になるはずであった。

山内憲政が春日山城へ入った一年まえのことである。

三

兄晴景が病歿して二箇月後の四月、越後にようやく春の兆しが訪れはじめたころ府内が騒がしくなってきた。

憲政が、なにごとと訝って近臣にたずねると、

「村上義清様、高梨政頼様、井上清政様、須田満親様、島津矩久様がた北信濃のお歴々がつぎつぎに景虎様を頼ってお出でになったのでござりまする」

憲政は事情をきいて顔色が変わり恐怖で寒気立った。

「北條氏康が攻めてまいったのか」

憲政の声は震えていた。

「いいえ、ご案じ召されるな。北信濃へ攻め入ってきておりますのは甲斐の武田信玄とのことでござりまする」

それを聴いた憲政は、ほっと胸を撫で下ろした。

だが、頼られた景虎のほうは心中穏やかではない。

武田信玄の北信濃略取で緩衝地帯がなくなり境を接した両者の対決は避けられぬ緊張状態になったのである。

八月中旬、景虎は北信濃諸将の失地回復と越後國防衛に立ち上がった。

景虎は憲政に侵略者武田信玄討伐を伝えると、

「留守は義兄政景殿に委せておきますればご懸念なく」

そう不安を抱かぬよう配慮しておいてから出陣した。

信濃國へ進出した越後軍は、甲斐軍を求めて南下をつづけ、布施（長野市篠ノ井）まで下ったところでようやく甲斐軍を発見して戦端が開かれたが、はじめから越後軍が押し気味にすすめられ、九月一日布施南方の八幡（千曲市）でついに甲斐軍を破って占拠されていた新砥城（千曲市）を奪還すると、さらに兵をすすめて筑摩郡に入り、青柳、会田、麻績を攻めて占拠した。

このとき、武田信玄の本隊はなぜか塩田城（上田市前山）に滞陣したまま動かず、甲斐軍の抵抗は布施と麻績での小競り合いだけであった。

守勢のままで決戦を挑もうとしない信玄は、景虎の采配と越後軍団の戦力を凝と観察しているようであった。

それに気付いた景虎は、すぐさま深追いを中止させると、九月二十日に兵を纏めて春日山城へ引き揚げた。このとき景虎二十四歳、信玄は三十三歳であった。

この世に言う〈川中島の合戦〉は十二年間に五度行われたが、結局決着はつかずに終わってしまっている。

景虎は帰国するとすぐにこんどは予ての計画どおり精兵二千を率いて上洛の途に就いた。昨年四月朝廷から、〈従五位下に叙せられ弾上少弼に任じられた〉ことへの御礼言上と、併せて、幕府に越後國主を認知させ関東管領支援の名分を得る目的のためであった。

上洛した景虎は、参内して後奈良帝から天盃と剣を賜わるとともに、

「平景虎、任国（越後）並びに隣国（上野、信濃、越中）の敵心を差し狭む輩を罰し、威名を子孫に伝えよ」

との綸旨（勅命）を受けた。

同時に将軍足利義輝からも、

「越後國主」

を追認されて所期の目的を達し、勇躍帰国した。

ところが、翌年末に北條城（柏崎市）主北條高廣が武田信玄に通じて謀叛した。

景虎は、老獪な信玄の手練手管に配下の諸将が籠絡されて行くことを懸念して、見せしめのため高廣を徹底的に攻撃したので高廣は堪らず、ひと月余りの籠城で降服したので景虎は改心した者を責めず、赦してやった。

そして四月、川中島に出陣して信玄と対陣した。

ところが八箇月の長陣になったので、諦めた信玄が義兄の今川義元に調停を依頼して痛み分けになった。

北條高廣を攻めて改心させたあと、つづいて川中島に長期出陣したため疲労困憊した景虎が帰国すると、こんどは後を絶たない国衆たちの内訌調停に悩ませられた。

内訌には譜代と外様家臣団との根深い対立があった。

前にも述べたように、越後國は上杉守護家が断絶したため長尾守護代家が国主になったこともあって、国衆は長尾家の譜代と上杉守護家の旧臣とが混ざり合い、さらに鎌倉御家人の子孫である揚北衆がいたので、これらが水と油の如く融和しないまま唾み合いをつづけていた。

合併は計数で割り切れない人事がいちばん難しい。

帰国早々に起こった事件は、上野家茂と下平修理、中條藤資と黒川清美の所領争いで、これが縺れに縺れて両派の領袖長尾家譜代の本庄實乃と上杉家旧臣大熊朝秀との対立抗争にまで発展していってしまった。

景虎は統合したことによる両家家臣団の確執を憂い、双方を宥めるのに苦慮してあれこれ思い悩んだ。

翌弘治二年（一五五六）三月、景虎は家臣団の調停に明け暮れる国主の座が煩わしくなると同時に、内訌を繰り返す越後軍団を率いて乱世を生き抜く自信を喪い、二十七歳の若さで政務を放擲して隠退を決意した。

そして血腥い殺戮の俗世を離れて僧籍に入り静かな余生を送る覚悟を固めると、すでに隠棲している旧師天室光育に心境を吐露した長文の書状を認めて届けさせると、六月に春日山城を脱出して紀伊國高野山に向かった。

国主逃亡という未曽有の大事に直面した副将長尾政景は、直ちに中條藤資を説得し、大熊朝秀を抑えて領地紛

争を解決させると、本庄實乃と直江實綱に政務を代行させておいてそぎ景虎のあとを追った。

景虎が妙高山麓の関山権現（妙高市関山）で参籠しているところへ追いついた政景は執拗に帰国を説得した。

政景の熱情に承服した景虎は、春日山城へ戻った。

そして、あらためて諸将に忠誠を誓わせると、なお証しに人質を出させて謀叛心を起こさせぬよう束縛した。

景虎の逃亡を知った大熊朝秀は、好機到来と武田信玄に内通すると居城の箕冠城（上越市板倉区山部）を捨てて一旦隣國越中へ退き、信玄の来援を待っていた。

長尾家支配に変わった越後國にあって肩身の狭い思いをしていた上杉守護家の旧臣大熊朝秀は、この機に乗じて主家を再興しようと志して決起したのであるが、それは一旦長尾家に引き継がれて固まった新体制を顚覆させることであり、新国主景虎に対する謀叛であった。

春日山城へ戻った景虎は直ちに大熊朝秀討伐の軍を起こして上野家茂らを越中國へ向かわせ、ふたたび越後國へ追い込んだところを駒返（糸魚川市青海）で挟撃した。

敗れた大熊朝秀は主家の領国だった越後國を捨てて甲斐國へ逃れて信玄を頼り、以後忠勤を励んだという。

このころ憲政は景虎が回復してくれた平井城へ戻っていたので、川中島合戦も景虎出奔事件も知らなかった。

四

景虎は今川義元の調停を忠実に守ったが老獪な信玄は勝手に振る舞い、微笑外交と実力行使で北信濃衆恫喝を繰り返し、ついに姻戚高梨政頼の支城飯山城（飯山市）を攻めてきたのでついに立ち上がらざるを得なくなった。

景虎の信濃出兵は新井から富倉峠を越えて飯山城に入り本陣にしていたから、陥とされてはならなかった。

やむなく出陣して飯山城を囲む甲斐軍を襲撃したが、信玄が決戦を回避したので追撃して善光寺に布陣した。

そして上野原（長野市上野）で衝突したが信玄に躱され持久戦になってしまい、竜頭蛇尾に終わった。

翌年二月二十八日、元号が『永禄』に改元された。

景虎は将軍足利義輝から再度の上洛を求められると同時に、信玄との講和を斡旋する御内書が下された。

景虎は将軍の仲裁調停を無条件で受け入れたが、このとき信玄は信濃國侵略の汚名を払拭すべく承諾の条件に『信濃國守護職』の任命を要求して補任されたという。

この年四月、平井の憲政はまた北條氏康が攻めてくるとの情報を得て、逸早く景虎の許へ逃げ帰ってきた。

このときも憲政は再度、

「関東管領職を譲るから、上杉の家名を護ってくれるよう」

懇願したが、律儀な景虎は固辞して受けなかった。

もはや関東に君臨する自信を喪ってしまった憲政は、以後きっぱりと関東を捨てて隠棲することに決めた。

憲政が関東への未練を絶って御舘に腰を据えてから一年後の永禄二年（一五五九）四月、景虎は将軍要請に応じて五千の軍勢を率い、二度目の上洛の途に就いた。

このとき景虎は、拝謁した将軍義輝から直々に、

「関東管領に叙任する」

内決を得たが、景虎は、

「厄弱（可弱い）の身としていかで重職を拝受せんや」

そう言上して、またしても辞退してしまった。

五月一日には御所に参内して、正親町帝に拝謁し、天盃を賜って従四位下少将叙任と剣を賜った。

このとき景虎は、将軍義輝から、

「文の裏書」「塗輿」「菊・桐の文章」「朱柄の傘」「屋形号」の使用を許可された。

先年の「白傘袋」「毛氈の鞍覆」許可と合わせて、これを『上杉の七免許』と褒め称えられた。

御礼言上に拝謁した景虎は、将軍義輝にあらためて、

「上杉憲政、及び信濃國の諸将を保護助勢して、関東に号令し、武田信玄を討伐せよ」

と命じられた。

前回上洛時の後奈良帝の綸旨と併せて、皇室と幕府からの命を受けた景虎の越後軍団は官軍になったのだ。

意気揚々と帰国した景虎は、翌永禄三年（一五六〇）三月椎名康胤に助勢して隣國越中富山の神保長職を討伐して帰国すると、憲政に小田原を攻めることを告げた。

そして八月、関東管領上杉憲政を奉じ八千余の軍勢で春日山城を発向すると、三國峠を越えて景虎自身はじめて関東へ侵入し、厩橋城（前橋市）で関東の諸将に、

「管領の失地回復に協力するよう」

大動員を呼び掛けた。

景虎出陣の報を受けた北條氏康はただちに対抗して河越城に進出し、さらに松山城に出張って出方を窺うと同盟者の武田信玄に助勢を求めた。

信玄は夫人同士が姉妹で誼を通じている石山本願寺の顕如光佐に使者を送り、加賀、越中両國の一向宗徒に景虎不在の越後國を攻略するよう唆した。

景虎はこの年動かず、厩橋城で越年した。

明けて永祿四年（一五六一）、小田原攻めに関東の諸将を動員して、岩槻城主太田資正、忍城主成田長泰、羽生城主廣田式部、藤田城主藤田右衛門佐、深谷城主上杉憲盛らを先鋒に立ててそのあとに越後軍団の諸将を配した。

十一万五千の大軍は小田原街道を放火しながら進撃し、稻毛、小杉、小机、権現山、信濃坂、大倉などの砦を陥として三月十三日未明先陣は大磯二陣は小磯に着陣、景虎は高麗山麓山下に本陣をおいて小田原城を囲んだ。

籠城の北條軍は難攻不落の堅城を誇って怯まず、合戦上手の景虎も手古摺って長期戦になってしまった。

その間に武田信玄の信濃國出陣や、越中一向宗徒の不穏な動きの報らせが次々に届いた。後方攪乱である。

景虎は、越中國への出陣から一年に亘る長期遠征に加えての小田原長陣の不利を諭す佐竹義重、小田氏治、宇都宮廣綱らの忠告を受け入れて攻城を断念し、閏三月三日に包囲陣を解くと兵を纏めて鎌倉へ引き揚げた。

景虎は氏康が動かないことを探ると、憲政の意を体して鶴岡八幡宮の社前で上杉氏を継承することにした。

そして十六日、景虎は関東の諸将が列座するまえを将軍義輝から認可された網代の輿に乗り、朱柄の傘、梨地の持槍、毛氈鞍覆の引き馬を揃えた荘厳な隊列を整えて鶴岡八幡宮に向かい、社前で憲政から正式に上杉の家名と関東管領職を譲られてその就任式を執り行った。

景虎は憲政の養子になって上杉氏を相続したのでその偏諱を受けて、長尾平三景虎から上杉政虎になった。

余談だが、このときこんな話が残っている。

居並ぶ諸将が小腰を屈めて敬礼するなかにあって一人成田長泰だけは馬上で景虎を出迎えた。見咎めた景虎は長泰に近づくと持っていた青竹で無礼打ちにした。

打たれた長泰は何故咎められたのか判らず、満座のなかで恥をかかされたことを怒ってその場から忍城へ帰ってしまい、景虎を見限って以後北條方になったという。

このことはいずれもが傲慢だったのではなく、成田氏は保元の乱で源義朝に従い、頼朝の奥州征伐にも加わって武功を立てたので鎌倉幕府が馬上礼を許していた。

長泰はその慣例に従ったまでのことであり、景虎は成田氏の家格を知らなかったための悶着だったのである。

五

景虎を政虎とあらためさせて上杉家を継承させ、家名の安泰を果たした憲政は、楽隠居を決め込んだ。

いっぽうこの年五月みずから法号を謙信と称した政虎のほうは留守将の桃井右馬助と長尾小四郎から受けた報告のなかで気懸かりなことがあった。

ひとつは奥信濃の割ヶ嶽城（長野県上水内郡信濃町）が甲斐軍の攻撃を受けて落城、破却されたことであり、もうひとつは川中島の清野氏居館跡に信玄が海津城を築城して城将に高坂弾正昌信、副将に小幡山城守虎盛を据えて千人の兵を常駐させているということであった。

このことは、信玄が国境を脅かして越後軍を誘い出し、川中島で殲滅しようとする決意の表れであった。

報告を受けた謙信は海津城攻撃を逸ったが、関東遠征のあとなので兵馬を休養させることが先決であった。

そして夏が過ぎて秋の農作業も一段落し、馬も肥えたところで出陣を決意して春日山城の留守将に義兄長尾政

景、越中國の備えには齋藤下野守と山本寺伊豫守を魚津城に派遣して固めさせると、八月十四日に出陣した。

憲政は政景と久々で対面して、越後國入りしたときに坂戸城で休息したときのことを思い出して懐しんだ。

先鋒を村上義清らの信濃衆につとめさせた謙信は、軍団を二手に分けて、本隊は新井（妙高市）から富倉峠を越えて信濃國に入り、飯山を経て善光寺に至り、別隊は関山を経て信濃國に入り、野尻湖の西を通って豊野から千曲川、犀川沿いに善光寺に至って本隊と合流させた。

謙信は集結した一万三千のうち五千を残留させておいて八千を率い、小市で犀川を渡ると海津城を左に見て川中島を南下し、千曲川を渡って妻女山に布陣した。

いっぽう信玄は海津城からの狼煙と早馬で謙信の出陣を知ると、得たりやおうと立ち上がり十八日に甲府を出陣して釜無川沿いに諏訪を目指し、和田峠を越えて上田に入ると屋代から小牧山、室賀峠を越えて山田に至り二十四日にいったん川中島西方の茶臼山に着陣したのち川中島を過って海津城に移動し二万の軍勢を集結させた。

両軍僅か一里（四キロ）を隔てた指呼の間であった。

九月九日夜、信玄は高坂昌信、真田幸隆らに一万二千を預けて妻女山を背後から攻めて追い出させ、信玄本隊八千が八幡原で待伏せる〈啄木鳥の戦法〉を採った。

だが、謙信は海津城の炊飯の煙がいつもより多いのに気付いてそれを察知し、裏をかいて夜半に妻女山を降りると雨宮の渡しから千曲川を越えて八幡原に着陣した。

頼山陽がその著書『日本外史』のなかで賦している、

「鞭聲粛々夜河を渡る―」

の漢詩はこのときの謙信の心境を詠んだものである。

十日卯刻（午前六時）頃から両軍は激突し前半は越後軍が有利に展開したが、高坂隊らが到着してからは挟撃した甲斐軍が有利になるもついに雌雄決せず、越後軍は敵中突破して丹波島から犀川を渡り善光寺へ引返した。

現在川中島古戦場跡に〈三太刀七太刀の跡〉の碑が建っているし、両雄が一騎討ちの像もあって実しやかに伝えられているが、これは武田方の『甲陽軍艦』によるもので、ドラマのクライマックスとしては最高の設定であるが、一級史料といわれている『上杉家御年譜』には、

「荒川伊豆守馳乗り信玄と見すまし三太刀まで討共不徹信玄太刀抜き合する間もなく團を以て受はずず（以下略）」

そう明記されている。

この合戦について秀吉はのちに、

「卯ノ刻（六時）より辰ノ刻（八時）までは上杉軍の勝なり。辰ノ刻より己ノ刻（十時）までは武田軍の勝なり」

つまり、「勝敗決せず」「引き分け」と判定している。

この合戦のあと謙信は、また関東に出陣していった。

六月に帰国するとふたたび北條氏康が出張ってきて謙信に従属した諸将を寝返らせていたし、武田信玄も十一月に越後國は積雪で動けぬと見て上野國へ侵入し、氏康

と連合で松山城を奪還されてしまった。

謙信は雪中強行軍で関東に出陣し、厩橋城に入った。

この出馬を知った北條・武田連合軍は松山城を退いて帰国したので、謙信は当面の敵を失いここで越年した。

この陣中で謙信は、将軍義輝から関東管領職を授かると同時に、偏諱を賜って、政虎を輝虎と改名した。

六

憲政は家名を継承してくれた謙信が幕府から正式に関東管領職を叙任されたことをよろこび、面目を施した。

二年つづいて厩橋城で越年した謙信は、正月早々から北條氏康に寝返った関東の諸将を再従属させて六月に帰国したのだが、追っ掛け岩槻城の太田資正から、

「氏康と信玄がまたもや松山城を攻めている」

急報を受けてやむなく出陣し、十二月中旬こんどは沼田城（沼田市）に入り三年つづいて上野國で越年した。

さらに翌年も厩橋城で越年したが、次の永禄七年（一五六四）は四月に帰国して留守将の義兄長尾政景に休暇を与えたのだが、これが痛恨の極みになってしまった。

上杉守護家の旧臣琵琶島城（柏崎市）主宇佐美定満は、謙信政権の中枢にいる長尾政景と仲が悪かった。

政景は意志の疎通を図ろうとして坂戸城に招いた。

だが、定満のほうは頑なに心を閉じたまま出席した。

宴酣になって谷後（南魚沼郡湯沢町）の野尻池で舟遊びに興じたとき、定満は隠し持った短刀で政景を刺すと抱き合ったまま水中深く没して無理心中してしまった。

政景の家臣たちは定満を謙信の刺客かと疑った。

事件の急報を受けた謙信は激怒して、即刻琵琶島城と所領を没収すると、宇佐美氏一族を国外追放に処した。

その謙信の果断な処分が却って証拠湮滅の疑惑を生み、政景謀殺の噂がますます真実味をおびていった。

その噂も信玄の北信濃進攻によっていつか消えた。

謙信は七月下旬に春日山城を発向して、八月十日に犀川を渡り川中島に着陣すると、信玄もそれに呼応して川中島の南端塩崎（長野県篠ノ井）に出張り布陣した。

謙信は三年まえに取り逃がした無念を晴らそうといきり立ったが、信濃國全域をほぼ制圧して事実上川中島四郡も手中に収めている信玄は敢えて雌雄を決することを避けて謙信の誘いに乗ってこなかった。

信玄に躱された謙信は気勢を削がれてしばらく沈黙したので、両軍は対峙したままで膠着してしまった。

そのあいだに小競り合いが数回あったがいずれも激突するまでにはいたらず、ひと月あまり対陣したあと九月中旬にどちらからともなく陣払いして帰国していった。

謙信が軍を退いたのはこの対陣中に武田方の市川城主市川孫三郎が信玄に不信を抱いて謙信に投降してきたことによって、中野、小菅、富井坂、大田切、小田切、計

見の諸郷が勢力圏内に入って緩衝地帯ができたからだ。

第一回から十二年が経ち謙信は三十五歳になった。

永禄八年（一五六五）の正月は春日山城で迎えた。

憲政は管領になった謙信が五年つづいて関東で越年して失地回復を図ってくれていることを頼もしく思った。

三月、将軍義輝から謙信に、

「北條氏康と和睦して速やかに上洛するよう」

内書が届いた。

謙信も一日も早く上洛して三好、松永を討伐したいのは山々であったが、目下関東情勢は予断を許さず、北條氏康と武田信玄をおいたまま行く手に立ちはだかる一向一揆を切り抜けて上洛するのは至難の業であった。

謙信が焦慮に駆られているあいだに、五月十九日将軍義輝が松永久秀と三好義継の軍勢に京二條の新館を夜襲されて自害したという悲報が届き、無念の臍を噬んだ。

この年謙信はまたまた氏康侵攻の報らせを受け、十一月に三國峠を越えて関東に出陣し、厩橋城で越年した。

憲政は、謙信が京の下剋上鎮圧より関東奪還を重視していることに満足し、ますます信頼を深めていった。

謙信は翌年も翌々年もこんどは沼田城で越年した。

そうしているうちに永禄十二年（一五六九）になって氏康のほうから突然和睦を求めてきた。氏康の全面降服ではなく、対等の立場で同盟しようというのである。

氏康はこれまで今川義元、武田信玄と三国同盟を結んでいたのだが、義元が織田信長に斃されると信玄が徳川家康と盟約を交わして今川領への同時侵攻を謀ったので、氏康は女婿でもある今川氏眞を援けて信玄と敵対することになりいそぎ謙信に和睦を求めてきたのであった。

氏康にしてみれば謙信と同盟すれば信玄は腹背に敵を受けることになり、迂闊に動けなくなる利点があった。

その年六月謙信と氏康は起請文を交換して正式に和睦が成立し、長年に亙る関東での抗争に終止符を打った。

いくつかの和睦の条件のなかに人質の交換があって、

「妻子のない謙信からは部将柿崎景家の子晴家を、氏康からは嫡男氏政の二男國増丸（源五郎）を」

それぞれ差し出すことに決まった。

だが氏政が五歳の幼児を人質にするのを不憫がって氏康に泣きついたので、氏康はやむなく謙信に詫びを入れて自身の七男氏秀を差し出すことに変更してもらった。

翌年四月十日。謙信は沼田城で氏秀と対面した。

氏秀を伴い帰国した謙信はこの十七歳の人質を憐れんで、十一年まえ義兄政景の二男喜平次顯景（後の景勝）を養子にしていたが、氏秀をも養子に迎えて顯景の妹を娶らせさらに謙信の前名を与えて三郎景虎と名告らせた。

憲政は謙信が氏康の子を養子にしたのが不満だった。

七

氏秀が養子になった年の四月二十二日永禄が元亀と改元されたので、翌年は元亀二年（一五七一）になった。

その年十月三日に氏康が五十七歳で病歿した。

すると嫡男氏政はとつぜん遠交近攻策を無視して謙信との同盟を絶ち、敵対していた信玄と盟約を結んだ。

遠国謙信より隣国信玄のほうが脅威だったのだろう。

だが、氏政の思惑は外れて、その信玄は二年後上洛遠征の途次に病に倒れ、帰国も叶わず歿してしまった。

氏康、信玄の大物好敵手がいなくなって当面ひと息吐いた謙信は、流浪将軍足利義昭から再三救援要請の督促を受けている織田信長討伐の軍を起こす覚悟を固めた。

そして麾下の部将たちに軍役を課して兵員と武具の調達を義務づけた。天正三年（一五七五）十二月十六日付であるところから『天正三年軍役帳』といわれている。

その三十九名の部将と十七名の同心が調達する兵力は槍、荷駄、鉄砲、弓、大小旗手、騎馬など合計五、五七〇余名で、これをもって上杉軍団六千名といわれている。

有事にはこれに農兵と支配下にある関東、北陸の武将軍団が加わるから数万の大軍団になるのである。

六月、鞆に隠棲している将軍義昭から内書が届き、

「西國の毛利輝元と同盟して織田信長を挟撃するよう」

要請してきた。

信長は天正四年（一五七六）二月築城なった安土城（滋賀県近江八幡市）に移って備えを固め、配下の諸将を越中、能登両國に出張らせ前線基地にする策に出た。

この信長の動きを察知した謙信は、機先を制して上洛の道を開くため九月に素早く越中國（富山県）に出陣して諸城を陥とし七尾城（七尾市）を包囲して越年した。

年が明けて総攻撃の計画を立てているところへ関東の結城晴朝ら諸将から北条氏政が侵攻してきたとの救援要請が届いたので、一旦兵を退いて帰国することにした。

だが、帰国すると将軍義昭の内書が追い掛けてきた。

（上洛か、関東出陣か）

思案しているところへこんどは七尾城の長綱連が、

（信長に援軍を要請した）

急報が届いた。

謙信はすぐさま関東救援を取り止めて能登へ向かい、閏七月十七日天神川原に着陣して七尾城を攻め立てた。

難攻不落の七尾城も予てから謙信に心を寄せてきていた遊佐續光と温井景隆の内応であっさり落城した。

このとき織田救援軍は加賀一向一揆の抵抗に遭っていたが漸く活路を開くと一気呵成に湊川（現手取川）を渡って集落を焼き払い伏兵を警戒しながらすすんできた。

この報に謙信は雌雄を決すべく勇躍加賀へ向かった。

織田軍は金澤付近まできて七尾城の落城を知った。

総大将柴田勝家は全軍の士気を鼓舞して上杉軍団との

決戦に猛進するよう命じたが、羽柴秀吉が、
「救援軍の目的がなくなったからには、無益の損失を避けて全軍をこの場から引き揚げさせるべきではないか」
そう自重すべきを主張して勝家を諫めた。
勝家は秀吉の申し入れを頑として承諾しなかったので、秀吉は自軍を纏めるとさっさと引き返してしまった。
秀吉のとった行動は軍律違反であり敵前逃亡である。
このことで織田軍の士気は著しく低下し、戦闘力が萎えてしまったので、勝家はやむなく軍を返すことを決意して、九月二十三日夜陰に紛れて撤兵を開始した。
ところが生憎折からの秋雨で湊川が増水してしまっていて、浅瀬を知らぬ織田軍は渡ることができず行く手を遮られまごついているところへ追いついた上杉軍に背後を衝かれて逃げ場を失い、千人余りが討ち取られ、溺死者は数知れずの大打撃を受けて這々の態で退散した。
織田軍に大勝した謙信だったが、関東の情勢が気懸かりだったので、深追いせずに一旦帰国することにした。
春日山城で謙信は『麾下諸将名簿』を作成した。『上杉謙信自筆将士書上』と言われているもので奥書に『天正五年十二月二十三日法印大和尚謙信』と署名していることからこれは明らかに『上杉軍団動員名簿』である。
そこには上杉三十九将だけでなく上野、越中、能登、加賀の諸将をも含めた八十一将が書き連ねられている。
謙信は結城晴朝からの頻繁な出馬要請に応えて翌天正六年（一五七八）正月十九日名簿記載の諸将に対して、
「関東出陣の大動員令」
を発し、雪融けを待って三月十五日に出陣と定めた。
（つづく）

性と化粧の物語（三）

鈴木守

第一話　性と毛の化粧（三）

前節では、川柳に「元服の二タ剃刀は女なり」と詠まれている眉化粧について紹介しました。
処で、江戸時代には男性の毛の化粧には二つの流れがありました。一つは、公家の方々が女性と同じように、二タ剃刀で眉を落とす風習を維持していました。他は眉化粧とは別に、武家社会の人達は、前髪を下ろして髷を結っていました。しかし、現代社会では、眉を剃り落とした男性や髷を結った男衆を見る事はありません。
今回、第四節では男性の髪化粧と眉化粧に関わる物語を進める事にします。

第四節　男性の髪化粧と眉化粧

私達現代人は、生の丁髷や眉落としの化粧を見る事はありません。近世社会では権威の象徴として定着していた化粧風習が滅亡した理由から語り始める事にします。

一項　維新政府の禁止令

慶応三年（一八六七）に徳川慶喜が大政を奉還し、徳川幕府が幕を閉じました。その後を受けた維新政府は文明開化を旗標として早くも、明治元年（一八六八）正月六日に公卿に対して太政官布告により〝お歯黒〟と〝作り眉〟の禁止を命じました。次いで、明治三年（一八七〇）二月五日に華族に対し同様の禁止令が下されました。華族とは、明治二年（一八六九）に公家、諸侯に賜った身分で、公、侯、伯、子、男の五段階の爵位を与えられた上層階級の人達でした。
更に、翌四年（一八七一）二月五日には、士族達に〝断

髪令〟を発して〝髷落とし〟を命じました。〝丁髷〟の禁止です。これらの禁止令が公布されますと、士族達のヘア・スタイルは一変し、公家衆のお歯黒と眉作りの風習も衰退の道を辿りました。

処で、女性の黒歯、作眉の化粧は禁止令の対象外でしたが、石井研堂著『瞻呈・明治事物起原、一九〇八』に日を通しますと「明治六年（一八七三）三月三日、女の節句の日を選んで、昭憲皇后が鉄漿を剥ぎ、黛を落とされたため、人民も追い追い皇后に倣い、現今、地方では眉剃りや歯黒の婦人を見るが、都下では見る事ができなくなった」と記されていました。

二項　男の元服化粧・髷と月代

既に述べましたように、江戸時代、二タ剃刀で眉を落とした女性の元服に対して、一ト剃刀で前髪を剃り下ろすのを男の元服と称していました。前髪除去の跡地には、青々とした月代が残され、髷を結って大人の仲間入りをしました。この丁髷姿が武士達の標準的なスタイルでした。

しかし、現在では生の髷姿や月代を見る事はできませんし、現代の人達の多くは、武士の頭頂に見られる髪形の全てが丁髷のように思っている節が見受けられますので、〝まげ〟に拘泥する事にします。

〝まげ〟は〝髷〟と書き、頭頂の〝もとどり〟の余りを束ね、わげて結んだ髪形」と辞書は解説しています。〝もとどり〟は〝髻〟と書き、髷は〝わげ〟とも読みます。髷は「髪の余りを輪にして結った髪形」と解説されていますので、〝まげ〟と〝わげ〟は同じ漢字で表記される同義語ですが、まげは曲げに由来し、わげは輪毛より発した単語のように思われます。

髻には〝たぶさ〟の読みもあり、〝もとどり〟と〝たぶさ〟は同義で、「頭髪を頭頂に集めて束ねた所」を指しています。また、武士のスタイルの代表である丁髷は「髪を頭頂で束ね、根元の方を結んで先端を額の方向へ向けて曲げた髪形」とされています。

丁髷を『広辞林、一九七三』で調べていますと、テレビ時代劇に登場する若かりし頃の織田信長のヘア・スタイルによく似た髪形の図絵が目に入りました。髻の先端を刷毛か房のようにした髪形です。恥を承知で申しますと、信長様のこの髪形を見るにつけ「曲げがないのに丁髷とはこれ如何に」と問いつつも、長い間「これも丁髷の一種」で押し通して来ました。処が計らずも、この髪形を広辞林の中で偶然見つけ出し、その名を〝茶筅髪〟と知り、長い間の宿便が通じた時のような快感を覚えました。辞書には「中世男性の髪形。髪を糸の組緒で巻き、先をバラバラにして茶筅のような形にした髪形」と記され、髷とは別種でした。

次に〝さかやき〟に登場して貰います。〝さかやき〟

は〝月代〟と表示し、〝つきしろ〟や〝つきひたい〟とも云います。月代は昔、「男子の冠の下に当たる額際の頭髪を半月型に剃り落とした髪形」とされていましたが、後世「額から頭の中央にかけて前髪を剃った男子の髪形」を指すようになりました。月代が始まったのは広辞林に依りますと「応仁の乱（一四六七～七九）以後、武士がいつも兜を着けた事から生じたと言われている」と云う事でした。

三項　男の眉化粧

男の剃眉化粧が明治維新政府によって禁止された事を一項で述べましたが、この項では明治以前の男性が施していた眉化粧について触れる事にします。

江戸時代の著書、喜多川守貞の『守貞漫稿、一八三七～五三』並びに伊勢貞文の『安斎随筆、一七一七～八四』に依りますと、眉化粧を施す事を、内裏では〝拂う〟、地下では〝作る〟と称していました。斯様な呼称の相違は眉化粧が眉を除く事と眉を描く行為の二段階の作業で成立っています故、内裏では前段の〝拂う〟を、地下は後段の〝作る〟を取り上げたのでしょう。

それはそれとして、山口幸充の『嘉良喜随筆、一七五〇』、西島白鳥の『烟霞綺談、一七七三』並びに太田南畝の『一話一言、一七七九～一八二〇』に公家の子供達の眉化粧について断片的に収められています。従って、彼等の文を纏めて、筆者なりに再編してみますと、「殿上人は三歳五歳でも参内の用があれば眉を取り去る事もありましたが、十六歳までは眉を剃って墨で茫々眉を描き、この人工の眉を〝てんじょう眉〟と云い、殿上眉或るいは天上眉と記載していました。そして、十七歳になりますと、元服の祝いがあり、生来の眉を剃り落とし、額上部の髪の際に墨で丸く二所に付け、是を〝高眉〟と称し、この眉作りを〝御月見〟と呼んでいました。高眉は十六七頃までで、高眉を止める時は勅許を必要としました。高眉を止めた後は、元の如く本眉を生やしていました。

男性の眉化粧は公家社会独自の風習かと思っていましたが、前出・守貞漫稿に「武家でも上級の人達は、儀式の日に限って茫々眉を施し殿上眉と称していました。眉形は家毎に多少の違いがあった」と記されていました。また、公家社会では眉作りに当って、男子は右眉から、女子は左眉から作り始める」とも記されていました。それに加えて南窓随筆には「月の障りがある時は、東に向かって作ってはいけない」と書かれていました。

四項　男の髪化粧と眉化粧の発祥

江戸時代の書には、男子の元服化粧として前髪削りが挙げられていますが、これは武家方の仕来りでして、前項で述べましたように公家社会でも元服の祝いが行わ

れ、「十七歳の元服の祝いに際して、生来の眉を剃り、額上部の二所に高眉を施す」と記述されています。従って、江戸時代の元服の様式は武家と公家では異っておりました。

① 月代の発祥：　四項の標題に示した髪化粧を代表して月代に登場して貰います。前々項にて、月代の歴史が応仁の乱以後の頃まで溯行できる事を述べましたが、徳川美術館名品集『絵巻、一九九三』を捲って行きますと、『西行物語絵巻、十三世紀中頃』が目に触れました。この絵巻には西行こと、佐藤義清が脇差様の刀を逆手に持って髻を切り落としている情景と戒師が匕首様の剃刀で髪を剃っている場面が描かれていました。これとは別に平凡社版の『世界美術全集、日本Ⅱ、一九五七』に十三世紀頃の作品『法然上人絵』には、落飾の場の戒師は剃刀を握っていました。従って、遅くとも、これらの作品が描かれた十三世紀には、頭髪を剃毛する技が開発されていたと推定できますので、応仁の乱以前の月代の資料を追跡する事にしました。すると、無住一円が著わした『沙石集、一二七九～八三』に「月代白き入道」の一文が目に入りました。この一文の解説に「選集抄に『年頃来て髻を切り、月代見えわたりたり』と記載されている」事が紹介されています。選集抄は西行の手になると云われています。

沙石集のほかに、石原正明が著わした『年々随筆、一七一六～一八〇五』に、「時忠の大納言の月代…中略…月代も光るばかりに剃りたるが礼にて」と認めていました。時忠の大納言は平時忠の事です。彼の生年は一一三〇～八九年で、前出の西行は一一一八～九〇年、法然は一一三三～一二一二年です。斯様に時忠、西行、法然は同年代に生を受けておりましたが、彼等より古い年代の月代の資料に出会っていませんので、平安末期に月代の風習が始まったと推察しています。

処で、前出の世界美術全集に、安永・弘安の役として知られている『蒙古襲来絵、一二九三』が掲載されていました。この絵には元寇の両役に出陣した肥後の国の御家人竹崎五郎秀長を壮行する肥後の諸将が顔を揃えていました。甲冑で身を固めた者は別として、烏帽子姿の諸将の額際に黒髪が覗いていました。従って、未だ此の時代の肥後の国には月代の風習が伝播していなかった事が示唆されました。と云う事は、月代の風習が平安末期に発祥したとしても、その風習が全国的に波及したのが、広辞林の云う応仁の乱以後と云う事が推測されます。

② 男性眉化粧の発祥：　眉化粧に使用する化粧料や化粧用具は、夫々の時代の眉化粧の証拠になります故、これらの資料も詮索の対象に含める事にします。

江戸時代前期の頃には、既に毛抜、鋏、剃刀、眉払、

黛、そのほか眉形の絵図等が『和漢三才図絵、一七一三』と奥田松柏軒編の『女訓蒙図彙、一六八七』に収載されていました。

前時代に溯りますと、安土桃山時代の資料には恵まれませんでしたが、室町時代には、著者不詳乍ら『類聚雑要抄、一五〇〇頃』に鋏と毛抜がありました。『義経記、一四〇八』も著者不明ですが、二所に「眉細く作りたる」の文言が挿入され、小島法師著とされている『太平記、一三七〇』には、「眉太に作り」を始め、「金黒に太眉を付け」とか「眉を付けて立烏帽子引き被いた殿上人」ならびに「齢十六歳ほどの稚子の大眉に鉄漿黒也」が認められました。

鎌倉時代中期から末期の書『源平盛衰記』には「大眉を作り鉄漿黒なる者」が現われ、この書を『平家物語、成立年代不明』の敦盛最後の段に「薄化粧して鉄黒也」と記されていました。この薄化粧について考えますと、義経記の判官北国落ちの件に「薄化粧に眉細く作り」と義経の化粧を素描しておりましたので〝細造りの眉〟は意味合いとして薄化粧の枠に入るように感ぜられ、義経や敦盛の化粧は都風だったであろうと類推しています。

鎌倉時代初期の頃、新古今和歌集を撰上した藤原定家の日記『明月記』の嘉禄二年（一二二六）七月二九日「成実、今日、直衣始の儀にて、鉄を付け眉を作る」とメモを残し、ほかに鎌倉幕府編集の『吾妻鏡、一二六〇』に眉墨と眉造が、一一九七年頃の『香取宮遷宮用途記』に眉炭が記帳されていました。

平安時代に入りますと、一一八〇年頃に藤原是善が『類聚名義抄』に眉墨を収載しましたが、江戸時代の書、古事記伝の著者、本居宣長の『玉勝間、一七九四～一八二二』、並びに前出の『安斎随筆』に「鳥羽天皇（在位一一〇七～一一二三）以前には、男が眉毛を抜き鬒を染める等の風習は一切見られなかった」と主張していました。

斯様に男性の削眉風習は、平安時代・院政文化期に始まったとされていましたので、確認の為、藤原文化期の頃の情況を検索しました。藤原文化期には、第三節で既に示しましたように、枕草子に毛抜、源順の『倭名類聚抄、九三五』に黛が登場し、女性の眉墨姿も認められましたが、男性の眉化粧の記載は有りませんでした。

平安時代の院政文化から鎌倉時代初期の頃には絵巻物の制作が盛んで、絵巻の画面で、一条天皇皇后の定子、中宮の彰子を初め、清少納言や紫式部だけでなく、光源氏とも顔合わせできました。幸い前出の世界美術全集と徳川美術館名作集の『絵巻』が手許にありますので、その中から十二世紀の作品『源氏物語絵巻』と『葉月物語絵巻』、次いで十三世紀に作成した『紫式部日記絵巻』と『源氏物語絵詞』、更に十四世紀に描かれた『枕草子物語』と『掃墨物語絵巻』から眉化粧の様子がしっかりと観察できる人々を選んだ処、宮廷に参内できる公達と

女官達の眉は市井の人達の眉より太く描かれていました。公家社会の人達の間でも女性の眉は男性よりも太く作られている傾向があり、光源氏や葉月物語絵巻に見られる男性の眉は細作りの傾向にありますが、眉際が整えられ、眉墨で眉形を修正する程度の眉化粧が窺えました。従って、男性の場合、眉を抜く眉化粧は別として、藤原文化期の公達が眉化粧嗤矢の役割を果たしていたのだろうと推測しています。

五項　絵画彫刻に見られる陰毛の化粧

第一話第二節に陰部脱毛術ＶＩＯ脱毛について触れました。その際、陰部毛髪について叙述した資料が乏しい事に気付きました。我が国では、江戸時代の破礼句に「女房の毛は十六で生えたまま」とか「毛切れ後はお妾へ計りいらっしゃり」が見られました。前の句は長屋の内儀さん連中は陰毛の手入れなどご無沙汰しており、後の句はお妾さんは手入れをおさおさ怠らなかった事を示唆しています。傑作な破礼句は「比丘尼の開が土器で大笑い」これを読み替えれば「尼さんの陰部が無毛で大笑い」となり、大笑いし乍らここに紹介しました。斯様に日本でも化粧文化の時代の下町文化は真に洒落ていました。海外ではフランス小咄に破礼句の雰囲気を感じるのではないかと思いますが、能力不足により敬遠し、替わりに絵画彫刻に見られる陰部に焦点を当てる事にします。

①弁天の貝：　「弁天の貝とはしゃれた土産物」の破礼句があります。弁天の貝は弁天の開、即ち弁天様の女陰の事です。この句は大山詣の一行が楽しみに江の島に立ち寄り、弁天様に手を合わせて買い求めた土産を詠んでおります。今では、裸弁天の股間は岩陰に隠されていますので、弁天様の弁天を直接、拝む事はできません。しかし、司馬遼太郎は『街道をゆく、三浦半島記、朝日新聞社、一九九七』に「裸形で琵琶を抱く形の参財天は古くから伝わっており、少女の形をして性器まで備わっている」と記していますが、陰毛については触れいません。しかし、藤沢市の職員だった友人は役得で拝観の栄に浴し、「童女の姿の為、陰毛はないが、それが却ってインパクトを与えている」と得々と吹聴していました。今では、猥褻罪に該当する為、拝観できませんが、江戸時には弁天様の開を御開帳していたとの事を聞いた事があります。私の知る範囲では、女陰を露出した日本最古の像です。

②　太古の裸女像：　今夏の話題の一つ、上野国立美術館で開催の『ボルドー展』に『ローゼルのビーナス』が展示されています。この像は二万五千年前にクロマニョン人が石に刻んだレリーフで、彫像の顔面には目、鼻、口のない裸婦の姿をしています。ローゼルの像とともに、

旧石器時代後期の代表的なビーナス像として『ビレンドルフの石のビーナス』がよく知られています。両ビーナスとも、垂れ下がった巨乳、臀出で腹膨ての妊婦の姿を象っていました。陰毛は生やさずに赤い顔料が体躯の表面に部分的に残っていました。

当時の人達は妊婦姿の婦人像を祀る風習がありました。女神像は安産と子孫繁栄を願って除災招福の呪ないの色〝赤〟で彩られていました。

『ビレンドルフの石のビーナス』の特徴として〝アフロ・ヘア〟があります。この事を前提にしますと、ビレンドルフの住民は〝アフロ・ヘアのコーカソイド〟である事が想定されます。この事について「ビレンドルフの住民はアフロ・ヘアではなかった」事を以前主張した事がありました。その後、鎌倉へ赴いた時、高徳院の阿弥陀如来像を眺め、お釈迦様はアフロ・ヘアだったのかと思うようになりました。釈迦族はインドに定住したイラン系遊牧民のスキタイ族と云われていますので、ゴータマ・シッタルタは〝アフロ・ヘアのコーカソイド〟と認定されます。因みに、日本の如来像を美術全集で見ますと、薬師、大日（盧舎那仏）、阿弥陀、釈迦の如来四兄弟が知られ、十六座の如来像に接する事ができましたので、釈迦の巻毛は確実だと思うようになりました。所が、この説を覆すような資料に出会いました。田辺勝美、堀晄共著の『シルクロードのみほとけたち、鎌倉国宝館、一九九三』にガンダーラの彫像が並び、一九体の仏陀像の内、巻毛の彫像は一体しかありません。一八体の像の毛形は波状毛でした。このような経緯で、未だに釈迦の髪形を比定する事ができません。

③　陰毛が生えた女像：　旧石器時代のビーナス像には陰毛が見られませんでしたが、新石器時代には陰毛の生えた女身像が見られるようになりました。メソポタミアのウルで出土した土偶二体には下腹部に逆三角形型に陰毛が刻まれ、その一体には刺青、他の一体には瘢痕と覚しき化粧の跡が認められました。この二体の像は豊饒や多産を司どる女神像とされていました。

エジプトにおいても、この時代の裸女像が発見されています。一体は股間に柵状の刻みを逆三角形型に施し、他の一体には下腹部から股間に繋けた扇状のエリアに小石を詰め並べたような陰毛を記していました。これと同様な陰毛がエジプト第一王朝時の『愛妾』と題する女身像にも認められました。また、エーゲ海に浮かぶキクラデス諸島の一つ、ナクソス島出土の女人偶像は幾何学的体型を呈し、下腹部に逆三角形の陰毛部と閉じた両脚の付け根に陰毛部に向けて小さなスリットが刻まれていました。

キクラデス諸島は良質の大理石を産するだけでなく、ミノス島は黒曜石の産地として知られていました。この

キクラデスの鉱産物の恩恵とミノス島の石の工匠達の伝統の技のお蔭で、エーゲ文明が誇るクノッソス宮殿、古代ギリシャの叡知を集合したパルテノン、ヘレニズムの粋の塊ミロのビーナス等々が後世に残されています。

④　陰毛の化粧：　前条③に紹介した陰毛は図式的に逆三角形で象っていましたが、古代エジプト第四王朝のメンカウラー王妃、並びに第二五王朝時のタクシェトの像はシースルーの着位で覆われた立像で、衣を介して下腹部に逆三角形の陰毛が透かし見えます。古代エジプトの時代に入りますと造像の技術が向上し、両像とも写実的で陰毛の縁辺は綺麗に整えられたように見えましたので、陰部整毛の化粧が施されていると判断しました。

その他、新王国時代には珍らしいヘア・スタイルの女性の裸像がありました。頭頂部、側頭部、後頭部の髪を剃り落とし前髪だけを残していました。虱の対策だったのでしょうか。彼女は細い腰帯を結び、下腹部には整った逆三角形が設えてありました。古代エジプトでは毛抜や剃刀だけでなく、無花果で脱毛しておりました。無花果には蛋白分解酵素のフィチンが含まれています。

⑤　男子裸像の陰毛：　古代ギリシャ人達は筋骨隆々とした若い男性に美を感じていたそうです。ギリシャの造像の歴史を辿りますと、ギリシャ文明初期前六世紀頃には陰毛を伴わない男性像が造られていましたが、前五世紀頃には、有名なミロン作の『円盤を投げる人』やポリュクレイトス作の『槍を担ぐ人』では男根の上に陰毛が生やされていました。従って、当時の男性は髭を生やした陰茎をぶら下げていましたが、前三世紀のヘレニズム期に入りますと、『瀕死のカラティア人』とか『ラオコン』、『ヘラクレス』の股間は木の葉で覆われ、陰部隠蔽の風潮が見られるようになりました。

女性の裸像に目を移しますと、初期ギリシャの頃、美の女神アフロディテの像がエーゲ海の島々で造られ、クニドスのアフロディテがよく知られています。このようなキクラデスの石工の技が引継がれ、ヘレニズム期頃までにミロス島のアフロディテ、『通称ミロのビーナス』が刻み上げられました。ヘレニズムの時代までに造像されたアフロディテ像の殆どは裸でしたが、それらの多くは、手で隠したり、衣装を腰に巻きつかせたりして陰部をガードしていました。

⑥　陰毛のルネッサンス：　中世社会では陰部は恥部であり、陰毛は恥毛だったように思えます。従って、ボッチチェルリ（一四四四～一五一〇）の描いた『ビーナスの誕生』が〝ルネッサンス誕生〟の緒口になりました。しかし、この絵では陰部は髪の毛で隠しておりました。しかし、彼の描いた『バッカス像』と『ダビデ像』の図

では陰毛を伴わない男根を記していました。尚、キリストの裸体を描いた絵は多く、ざっと見たところ十体以上ありましたが、ペニスを描いたのはミケランジェロとルオー（一八七一～一九五八）でした。

レオナルド・ダビンチ（一四五二～一五一九）は裸婦像を残していないとされていますが、ダビンチの模写品に『レダと白鳥』がありました。この作品の主題は「白鳥に化身したゼウス神が美女レダを犯す」事にありますが、描かれたレダの下半身には毛も玉門も備えていませんでした。そのほか、ティツィアーノは、一五四八年頃に『音楽家とビーナス』を描きましたが、ティツィアーノも又、ビーナスに陰門と陰毛を与えていませんでした。

⑦　一毛纏わぬ美女：　〝一糸纏わぬ美女〟と云いますが〝一毛纏わぬ美女〟に登場して貰います。ルネッサンス期も後半、一五一〇年頃にジョルジョーネが描いた『眠れるビーナス』には、右手を上げた腋窩に腋毛はなく、股間の陰毛も除かれた一毛も纏わぬ曲線美が目を楽しませてくれます。このように悩しい裸女はゴヤの『裸体のマハ、一八〇〇』やオーギュスト・アングルの『ビーナスの誕生、一八〇七～四八』にも見られます。一毛纏わぬ美女と同様、マチスの『オダリスク、一九二五』は股間を隠していましたが、両手を挙げた腋窩には毛が不在でした。処が、マチスの『腕をあげているオダリスク、一九二三』では腋毛のあるオダリスクを描写していました。オダリスクはハーレムの女達の事です。

⑧　体毛によるセックス・アピール：　一毛纏わぬ美女とは対照的なマルケの『裸婦、一九一二』には、腋毛と陰毛の両者が描き込まれていました。陰毛を強調した作品としては、一九世紀末にゴーガンが『裸のタヒチの女、一八九二』と『アタダ・パラリ（ジャワの女）、一八九三』があり、モディリアニの『長椅子の裸婦、一九一七～一八』のデルタは黒い毛で覆われていました。陰毛の圧巻はデルボーの作品『手、一九四一』には二人並んだ裸の白い肢体の股間に黒々とした陰毛が二つ揃えて描かれていました。

以上、⑦及び⑧条にて、体毛の有無別に作風の流れを示しましたが、美術史的な視点で眺めますと、前者⑦は浪漫主義的な主張を基盤にし、後者⑧は写実主義的な立場で創像しているように感じられました。また、両者に対し率直な感想を述べますと、浪漫派の人達は陰毛を排し美を追究し、写実派のアーティストは陰毛を活用してセックス・アピールしているような感じを受けました。

（次号に続く）

「司馬雑感」あれこれ（2）

山田嘉久

一「轢っ殺してゆけ」その後

司馬遼太郎（本名福田定一　一九二三―九六）は終戦を栃木県佐野市で迎えた。この時、彼は陸軍少尉、戦車隊の小隊長だった。

この年の春、司馬はそれまで勤務していた関東軍機甲師団（戦車第一師団）からの本土帰還命令を受ける。当時、寅の子であった戦車七〇両とともに本土決戦に備えよとの命令だった。

当時、満州には日本陸軍最強と云われた関東軍百万（実態は七〇万）が温存されていた。我々子供達も日本はたしかに劣勢だが、満州に関東軍がいる限り大丈夫だと聞かされていたが、あの終戦直前のソ連の侵攻時における彼らのぶざまぶりはどうだったであろう。

その前、昭和二十年五月、大本営は、ソ連が決して侵攻して来ないことを祈りつつ、この機甲師団をその守備地から引き抜き、他の主要戦場に送ったのである。

そのため司馬たちは戦車に乗って朝鮮半島を縦断して釜山に着く。その間、首都であるソウル（当時は京城）を通る時には、これが李氏朝鮮の首都だったのかと、今生の別れと思って戦車の小さな窓から覗いていたと「街道をゆく（韓のくに紀行）」には書かれている。

そして釜山市内では、彼は配下の戦車四輌とともに迷子になってしまう。当時から彼の方向音痴は有名だったらしく、そのため集合時間に遅れてしまい上官にこっぴどく怒られるが、「なんだ、貴方たちは日本の方向を間違えたではないか」と多少、八つ当たり的に書いているのは面白い。

司馬の遅刻のせいか、同じ頃、釜山港で本土への帰還船を待っていた砲兵部隊との、どっちが先に乗船するかで多少のいざこざがあったようだ。この事は司馬は書いていないが、たまたま、その砲兵部隊に私の銀行時代の先輩がいた。勿論、後で聞いた話だが、先輩は直木賞で

有名な「直木三十五」の菩提寺の檀下総代をしていたが、昭和五十年代、直木の何十回忌に直木賞作家である司馬と会ったようだ。その時に釜山での話が出たと先輩からの手紙には書いてあった。

ともかく司馬たちは釜山から船で新潟に着く。その前に雪でおおわれた佐渡の山々を見た時、てっきりアリューシャン列島に連れられてこられたと錯覚した。（街道をゆく「佐渡のみち」）

確かに一部の戦車兵は新潟で下船せずに、そのままアリューシャン列島に連れていかれたようだ。此処では有名な「占守島の戦い」があった。戦争が終わって既に三日経った八月十八日、ソ連兵が突如、アリューシャン列島最北端の小島占守島への上陸を図った。時の守備隊連隊長池田大佐（司馬の戦車学校時代の教官）は降伏するのか、戦うのか別の島にいた師団司令部に問い合わせるが、司令部でも混乱して、更に東京の大本営に問い合わせるが結論が出ない。

そこで連隊長独自の判断で戦うことを決意する。当時、この島には戦車三十輌、航空機四機のほか海軍を含めると総兵力八千があった。そしてほぼ同数のソ連軍の上陸を阻止するが連隊長は戦死。その直後に司令部から「降伏せよ」の命令が届く。やむなく日本軍は武装解除。そのため全員が捕虜としてシベリアに送られた。この戦争は終戦後、日本軍が戦った唯一つの例である。

司馬もまかり間違えば同じ運命になった戦闘であるので、この模様を書いている。（風塵抄「島の物語」）

さて、新潟に上陸した司馬は、関東平野を横断して関東地区に入る。関西人である彼は勿論、関東平野を見るのは、この時初めて。日本にこんな大きな平野があったのかと感心しながら、群馬県の箕輪で一時駐屯する。それから栃木県の佐野に入りここで終戦を迎えるわけである。

その終戦直前に東京の大本営から参謀の少佐が佐野に出張でやってきた。

おそらく本土決戦に関する打合せだったと思うが、その席で司馬は質問した。「我々戦車隊が九十九里に向かって南下する時、反対方向の東京や千葉から避難民が大八車などを引いて北上してきます。道は一本道、その時我々はどうしたらよいですか」。

参謀は暫く考えていたが、やがて押し殺したような声で「構わず、轢っ殺して行け」。これを聞いた司馬は愕然とする。日本の軍隊は日本国民を守るために存在するのではないか。それが「轢っ殺してゆけ」とは。

どうして日本はこんな国になってしまったのか。彼は考え込む。

それから数日後、彼は本土決戦の下準備のため九十九里に出張した。その時の文章。

〈海には波ばかりだった。私はひとりでそこにいたのだ

が、ためしに服をぬいて泳いでみたとき、不意にこの国で生きている自分たちが悲しくなって、波に揺れもどされつつ、思いきり泣いてしまった。

何度泣いてもそのつど波が顔を洗ってくれるために頓着なしに泣くことができたし、気はずかしくもなかった〉（「私の関東地図」）

この時、彼は二十二歳。やがて終戦になって、彼は「司馬遼太郎」というペンネームで歴史小説をさかんに書き出す。

〈終戦の放送をきいたあと、なんとおろかな国にうまれたことかとおもった。（むかしは、そうではなかったのではないか）と、おもったりした。むかしというのは、鎌倉のことやら、室町、戦国のころのことである。やがて、ごくあたらしい江戸期や明治時代のことなども考えた〉（「この国のかたち」1あとがき）

彼が小説家になったのは、昔の日本はもう少しマシな国ではなかったのか、それを知りたいためだと述懐しているのである。そのため彼の小説は、すべてあの当時の二十二歳の自分に対する手紙だと云う訳である。有名な随筆「二十二歳の私に対する手紙」だが、これが彼の小説の原点となっている。

このことは司馬を論じる批評家の多くが指摘する点だが、司馬自身はその後、「軍隊は国民を守るために存在する」という考え方は間違っていたと反省しているのである。この点に関しては評論家が全く言及しないのは、私には不思議でならない。

司馬が戦後、小説家になって二〇数年経った昭和四十七年にようやく沖縄は本土復帰となった。司馬は早速、沖縄に飛んでいる。「街道をゆく」（沖縄、先島へのみち）である。

〈（戦争末期、私は）出張で、敵が上陸するかもしれない九十九里浜や、あるいは厚木の湿地帯にやされたことが、想像をなまなましくした。五百万の住民が居住している関東平野に米軍が上陸した場合、どういう凄惨な事態がおこるかということは、私には一パーセントも想像できなかった。（略）ところが、その事態が、五十万の住民が住む沖縄本島でおこってしまったのである。〉

そして沖縄が米軍の手に落ちた昭和二〇年六月、時の陸軍大臣阿南惟幾は

「日本陸軍はまだ本格的に戦っていない。これで我々は心ゆくまで、本格的に決戦することができる」と発言したそうである。

これが日本陸軍の思想と論理であり、軍隊の本質であることに司馬は気づく。

あの戦争末期、大本営参謀の「轢っ殺してゆけ」発言に対して「軍隊は住民を守るために存在する」という〈自分の考えが誤りであることに気がついた。軍隊というものは本来、つまり本質としても機能としても、自国の住民を守るものではない、ということである。〉

軍隊が守ろうとするのは、具体的な国民ではない。もっと抽象的な、形而上的な（司馬のよく使う常套句）国家もしくはキリスト教のためといった、より崇高なのもだというのである。

本土決戦のあの時（我々戦車隊が九十九里浜に向かって南下した時）、大八車で北上してくる避難民を守るために（「轢っ殺さずに」）、できるだけ戦車に乗せて反対方向の北関東の山地にゴロゴロと逃げて行ったらどうであろう。

住民は確かに守れるであろうが、その場合の日本国はどうなるか。国家を守るためには、場合によっては国民を犠牲にすることだってあり得ることに気がついたというのである。云うならば沖縄戦では沖縄県民は日本国のため「捨て石」になった。

軍隊とは所詮、そういう存在なのだという司馬の「発見」に対して、これを論評した評論家は私の知る限りではいない。

（註）参考にした司馬作品

○ 随筆「この国のかたち」
○ 随筆「私の関東地図」
○ 随筆「二十二歳の私にたいする手紙」
○ 随筆「風塵抄」（島の物語）
○ 「街道をゆく」（韓のくに紀行）
○ 「街道をゆく」（佐渡のみち）
○ 「街道をゆく」（沖縄、先島へのみち）

（註）米軍の本土上陸作戦

司馬も従軍が予定されていた「本土決戦」は米軍側から見れば「ダウンフォール作戦」と呼ばれ、二つの作戦から構成されていた。

① オリンピック作戦　九州南部（志布志湾など）への上陸作戦であり、目的は関東上陸作戦であるコロネット作戦のための飛行場確保であった。

上陸予定日（Xデー）一九四五年十一月一日
上陸兵力　十六個師団（歩兵二十五万、海兵隊九万）

② コロネット作戦　オリンピック作戦で得られた九州南部の航空基地を利用して、関東地方に上陸する作戦

上陸予定日（Yデー）一九四六年三月一日
上陸兵力　二十五個師団十予備兵力　計一〇七万
（航空機一九〇〇機を加えて、史上最大のノルマンデー上陸作戦を遥かに凌ぐ規模の兵力が投入される予定だった）

上陸地点　九十九里浜、鹿島灘（米第一軍）
　　湘南海岸　（米第八軍）
東京湾を挟んで上陸、約十日で帝都を包囲

③日本軍の対応―「一億玉砕体制」

残存兵力　陸海軍五百万十国民義勇兵二六〇〇万（一九四五年六月「国民義勇兵法」成立、男子十五才から六十歳、女子十七歳から四十才）

○終戦御前会議での昭和天皇の発言

「九十九里浜の陣地構築も出来ていない以上、防衛体制は望めない」（本土決戦を諦めポツダム宣言受託を支持する理由となった）

二　竜馬の妻と室

艶福家であった坂本竜馬（一八三五―六七）には、各地に愛人がいた。

故郷土佐の田鶴、江戸の千葉さな子、本命の京都のおりょう、そして長崎の大浦お慶などである。尤もお慶は竜馬より十歳近く年上であり、竜馬が長崎で立ち上げた「亀山社中」（後の海援隊）の経済パトロンにすぎなかったかもしれない。

「竜馬がゆく」では、まず竜馬の初恋の相手といっていい「田鶴」が登場する。

田鶴は土佐藩家老福岡宮内の娘という設定で、竜馬とのからみが各巻にえがかれているが、実在の人物ではない。（ただし家老福岡宮内は実在）

坂本家は福岡家のお預郷士という身分であり、主人の娘に恋するとは考えにくい。

しかしモデルは実在する。竜馬の竹馬の友であり、後に土佐勤王党に加盟する土佐藩士平井収二郎の妹加尾であるとされている。

数年前、高知の「竜馬記念館」を見学した際、加尾に関する展示会が開かれていた。その中に竜馬が在京中の平井加尾にあてた実際の手紙が展示されていた。

「先ず々々御無事とぞんじ上候。天下の形勢切迫致し候に付、

一、高マチ袴
一、ブッサキ羽織
一、宗十郎頭巾

外に細身の大小一腰各々一つ、御用意あり度存上候。」

一方、「竜馬がゆく」五巻には在京中の田鶴が竜馬から受け取った手紙が紹介されている。

「天下の形勢切迫致し候につき
一、高マチ袴
一、ブッサキ羽織
一、宗十郎頭巾
一、ほかに細身の大小

右おのおの一揃御用意あり度存上候。」

なんと酷似した内容であろう。これをもっても加尾が田鶴のモデルであることがわかる。加尾は安政六年、藩主山内容堂の妹友姫が公家の三条公睦に嫁いだ折、御付

役として上京していた。加尾は竜馬の「初恋の人」とされており、脱藩を考えていた竜馬は、加尾に男装させて、ともに尊王攘夷運動を行なおうとしていたわけである。

それより前、嘉永六年に江戸に剣術の修行に出た竜馬は、北辰一刀流の千葉定吉の桶町道場に入門したが、定吉の長女に佐那がいた。「竜馬がゆく」では「さな子」となっている。

竜馬が入門してまもなく〈さな子は、竜馬にひそかに好意をもっていた〉と描かれている。（同第一巻）

むろん竜馬も同様だったに違いない。かれは技能を持った男勝りの才女が好きで、それからみればさな子は娘ながら北辰一刀流の免許皆伝の持ち主だった。

竜馬の好みは、著者（司馬）自身の好みに通じるものがあり、司馬は礼儀正しく慎み深い女性よりも、伝統や因習を否定する活動的な女性を描くことが多かった。

炊事や針仕事は苦手だが、政治活動や剣術などの非凡な能力を発揮するお田鶴、さな子、おりょうは司馬が描くヒロインの代表格といえよう。

ともかく、竜馬が最後に江戸を発つとき、彼女の方から意中をうちあけられ竜馬は驚いた。

このとき、すでに京に本命のおりょうを得ていたからである。その事情を打ちあげられず、さりとて恩師の娘をいたぶることもできず「自分は危険な奔走をしている。いつ死ぬかわからないので結婚はできない」と湾曲にことわり、自分の着ていた着物の片袖をひきちぎり形見として渡した。

さな子は竜馬の死後の維新後は華族女学校（女子学習院の前身）の舎監みたいな仕事をしていたが、教え子たちに例の片袖を見せて、私は竜馬の許嫁者でしたと語っていたという。

そして竜馬の「妻」として生涯、空閨を守ったが、晩年は東京の千住に住んだ。

桶町千葉家の子孫は千住で「千葉の灸」として鍼灸師を営んでいたので、彼女はそれを手伝っていた。維新後、それまでの剣術師範たちは鍼灸師に転ずるものが多かったのである。

司馬が、さな子の晩年を書いた「千葉の灸」には彼女が住んだ千住の住所を番地まで記している。（足立区千住仲町二十九）

幸い私は若い頃、千住の支店に数年間勤めたことがあるので、この辺の土地勘はある。定年後、彼女の旧宅を探したことがある。勿論、建物は全く変わっていたが、たまたまそこから出ていた老婆にきくと「そのような人なら戦争前まで此処に住んでいたと聞いたことがあります」の返事に満足した。尤も「戦争前」とはどの戦争前なのか聞き漏らしたが。

さよ子の墓は山梨県甲府市内にあるという。

甲府の有名な自由民権家小田切謙明（甲州には「小田切謙明一所懸命」という言葉があるそうだ）が中風を病んだ時、さよ子が治療した。謙明は板垣退助と親しく、その関係で彼女が竜馬の許嫁者であったことを知った。

晩年の彼女は甲府の小田切家に引き取られ余世を送った。そのため彼女は謙明一族として取り扱われ、謙明の墓の隣に葬られた。そして彼女の墓には「坂本竜馬室」と刻まれているという。

一方、竜馬の正室おりょうの墓は横須賀市内にある。

りょう、龍、あるいは龍子ともいった。慶応二年一月二十四日未明、伏見の寺田屋で幕府の捕り方に襲撃され、傷つきながらも脱出した竜馬は、おりゅうの知らせによって駆けつけた薩摩藩士に守られ、土佐藩邸に身を潜めたことは有名である。

おりょうの墓については、司馬の「三浦半島記」には〈横須賀の古い市街地〉としか書いてないので、探すのに苦労することが予想されたが、あっさりと目的地に着くことができた。京急本線を「堀の内」で乗り換え、一つ目の駅「京急大津」で下車、駅員に聞くとすぐに教えてくれた。

駅近くの「信楽寺」（浄土宗）の墓地にあり、最も目立つ立派な墓であり「贈正四位坂本龍馬之妻龍子之墓」とあった。

竜馬暗殺後のおりょうの運命は変転した。

明治に入って一時期、土佐の高知の竜馬実家に身を寄せたが、竜馬の姉乙女と折り合いが悪く、ほどなく高知を去る。司馬は別の随筆で「竜子、家を守らず、邪行を敢えてす。乙女、怒って竜子を離別す」という地元の古い記録を紹介している。

晩年の彼女は横須賀に住み、再婚して「西方ツル」となるのだが明治三十九年に病没した。そのささやかな葬儀には横須賀海軍鎮守府の士官たちが参列したとは驚きである。

またこの立派な墓もおそらく海軍の有志が献金して建てたにちがいないと司馬は推察している。

多分、当時の海軍では、竜馬の作った海援隊こそが日本海軍の祖の一つであるという気分があったのであろう。

それにしても「竜馬の妻」と「竜馬の室」はどう違うのであろうか。

（註）参考にした司馬作品

○「竜馬がゆく」
○「街道をゆく」（三浦半島記）
○短篇「千葉の炎」
○随筆「幕末を生きた新しい女」

生還（二）

太田精一

三．島の暮らしと仲間

「煮炊きに必要な火はどうやって熾されなさった。火打石を持ってなさったのかね」

富蔵は、人間の生存に欠かすことの出来ない火をどのようにして熾したか興味を持った。

「島に流れ着く時、火打石、火口などを舟から持出した。二、三年はそれで火を熾していた。火口は、そのうち絶えてしまったので、島にある茅のような草を乾かし火口に使った。火打ち道具を使い切ってしまった後は、昼夜とも火を絶やさぬよう用心した。それでも火の消えることがあるので、茅や萩で作った松明を持って山に登り、煙の立っているところまで行って火を移して来た。いつも火を消さないよう今でもずいぶん注意をしている。特に、雨の降る日には、火を守るように細心の注意を払っている。鍋釜は、船が沈没する前に、鍋二つ、釜一つを持ち出し、それを二十年経った今でも使っている」

「十二人で漂着したこの島に、お前様方三人だけが生き残ったと言われたが、他の九人の方たちはどうなさったのですかい。病気でもしなさったのかね」

「わしたちを含め、船頭は左太夫、水主には、吉三郎、喜三郎、八太夫、善五郎、善左衛門、江戸にて雇った水主の善太郎、八兵衛、それに南部より神奈川までの使い船人権太郎、都合九人がわしたちの他に乗っていた。そのうち、左太夫、吉三郎、喜三郎、八太夫、善五郎、善左衛門の六人は、遠州荒井の出で、善太郎、八兵衛の二人は、武蔵の生まれ、権太郎は伊豆の生まれと言っていた。漂着後、三年間は皆無事で過ごすことが出来たが、その後の十年の間に一人欠け、二人欠けして死んでいった」

「それぞれ誰がいつ死んだか覚えていなさるかね。何年島にいなさったかも覚えていないくらいだから、やはり無理だろうかね」

「いつ誰が亡くなったか、年月も経ってしまったので覚えていない。老衰のように自然と息を引き取った人もいたが、大体は、決まったものしか食ってないため体を悪くし、むやみに体が腫れてそれがもとで死んでしまった。何の病気かわしらには分からないが、脚気のような病だった。ここに残った三人は、何とか食物の障りからもまぬがれ生き残っている。とはいえ、わしらも時々何ともいえぬ気分の悪さを感じることがある。そうした折には、前にも話した通り、粥を食べ何とかしのいで来た」

「亡くなられた方の中には、病以外のことで果てた方はいなかったかね。例えば崖から落ちたとか、長い島暮らしで気が変になってしまって自死したとか、争いがあったとか、そんなことはなかったですかい」

「争いごとはなかったが、自死した者は一人いた。伊豆の権太郎だ。あの男はもはや故郷に帰れないと思い詰めて、岩穴に閉じこもって自ら食を絶ち、皆の止めるのも聞かず自死してしまった。お互い助け合わねば生きられないような状況であったので、手分けして食物や煮炊きの材料を集め、一人でも仲間が減らないように長く生き、故郷の土を踏みたいとの一心で励まし合って暮らした。島では、金などあっても使い道はなく、無用の長物なので金のことで争うことは全くなかった。幸いにして飢えに苦しむことはなかったから、食べ物を奪い合うといったこともなかった」

富蔵は、本当に争い事や殺し合いなど起こらなかったのか、半信半疑で平三郎の眼をじっと見た。その眼を見返す平三郎の眼は、嘘偽りのないことを物語っていた。

富蔵は、漂着者の島での暮らしが、お互いの絆を強め助け合いの精神を育み、家族のような感情を持つようになったのではないかと推察し話題を変えた。

「拝見するところ、お三方とも鳥の羽で編んだ衣をまとっていなさるが着る物にはずいぶんお困りの様子、どう工面されたのかね」

「漂着した当初は、人並みに着物を着ていたが着替えなどの持ち合わせはなく、乗捨て船や破船などの木綿帆を着物代わりに着ていた。また、亡くなった人の着物を拝借し着ることもあった。それも数年経つうちにボロボロになってしまい、大鳥の皮を羽毛と一緒に干してしばらく敷物にして座っていると、その敷物が柔らかくなったため、あちこち継ぎはぎすれば着物の代わりになると思い、作ったのが今着ている羽衣だ」

「それだけでよく冬が越せましたな」

「冬と言ってもこの地では、江戸や荒井ほど寒くはない。この羽衣一枚でしのぐことが出来る。またこの島の夏は、故郷の荒井より涼しく、総じて凌ぎやすい気候だ」

「お前様方が、この島におられる間、天変地異のようなことはありませなんだか。地震、雷、雪や霰などが降って来ることはありませなんだか」

「気候は、温暖で雪が降ったことはなかった。激しく雨が降ることはしばしばある。雷はその雨にともなって時々鳴る。地震はこの二十一年間に一度だけあった。激しく揺れ、夜中に洞穴を飛び出したことを覚えている。だが、何時のことだったか思い出せない」

「いやはやお話しを承り感心いたしました。これからわしらもこの島でしばらく暮らすことになると思うが、何分にもよろしくお頼み申します」

富蔵はこの島で暮らすひとかどの知識を平三郎から得て、順風を待つ間、全員無事にこの島で過ごすことが出来るとの思いを強くした。

「ところで、この島で亡くなられた九人の方々の眠っておられる場所に案内してくださらぬか」

富蔵は、島に眠る先人たちの無念さの漂う場所を全員で訪れることにより、これから始まる困難な暮らしに一致団結して耐え抜く覚悟を固めようとした。

「分かりやした。ご案内しましょう」

平三郎は、宮本善八船の水主たち全員を引き連れ、筒山五兵衛船の物故者を集めた場所に案内した。

しばらく山を登った後、溶岩の塊が転がる岩場に出た。埋葬場所は、海の見える眺望のよい所である。そこには、九つの墓標が立っていた。

富蔵以下宮本船の水主たち十七人と筒山五兵衛船生き残りの三人を合わせた二十人は、望郷の思いを抱いたままこの島で朽ち果てた九人の水主たちの墓標に祈りを捧げ、何としてもこの島から脱出しようとの誓いを立てるのであった。

「皆の衆、皆無事に日本に帰ろうではないか。それには順風な日和の来るのを待つほかはない。それまでは、大鳥、魚、磯草など、食べられるものは何でも食べて生き延び、互いに助け合いながら船出の準備をしよう。幸いにして伝馬船は無事で少し直せば使える。皆が一人残らず乗るにはやや小さいが大丈夫だ」

富蔵は、墓標の前で帰国への希望を語り、全員を鼓舞した。

四、本土に向けて

二十人の漂着者は、一カ月近く順風を待った。伝馬船で出船して途中嵐にでも会えば船はひとたまりもない。

富蔵は、二、三人の年かさの水主たちと相談して出船を決めた。船には、先に漂着し生き残った三人が丹精込めて作った飯米一俵、籾米二斗、鍋、釜、大鳥の羽の着衣二枚を積み込み、元文四年（一七三九）四月二十七日

に島を出た。
羅針盤があるわけではないので、経験と勘のみに頼る航海である。
「この島の暖かな様子から見れば、どうやら本土から南に相当離れた島だと見た。だから日の出の方向から考えて艮（北東）の方角に乗り出すのがよかろう」
富蔵は、舵取りに命じた。
帆に風を受けた船は、太陽を背に舳先を北東に向けてひた走った。見渡す限り大海原が広がり、島影は見えない。やがて日が暮れ辺りは闇に包まれ、満天に星が輝いている。
星を頼りに方角を見定めながら船を走らせているが心もとない。
「夜の内は、帆を下ろして夜明けにまた帆を上げることにしたらどうかね」
数人の水主からそんな声も上がった。
「たとえ、夜の内、帆を下していたところで流れにまかせるだけでは、思うところに着くことは出来まい。ここは運を天に任すしかない。船は艮に向かっていることは確かだから夜中もこのまま帆を下さないでおこう」
沖船頭の富蔵は、帆を下そうとはしなかった。
水主たちは、船霊の祓い詞、観音経、六根清浄、石尊不動などそれぞれ祈りの言葉を口に唱え、無事な航海を願っている。その願いが通じたのか、穏やかな南風に乗って船は艮へと走った。
東の空が白み、太陽が水平線の彼方から顔を出した時、小さな島が行く手に見えた。岩に伝馬船を繋いで上陸し、辺りを窺ってみたが、人影は全くない。周囲五、六十間（二百平方メートル）程度の孤島である。だが、わずかに土が顔をのぞかせ、その土の上に草がところどころ生えている。その枯草を拾い集め、火を熾して飯を炊き食事をした。
食事を終えると全員乗船し小島を出た。しばらく経った後、海を眺めていた荒井の水主たちが、富蔵たちに語りかけて来た。
「あんた方が、吹き流されてこなければ、あの島から抜け出すことは出来ず、ここまで来られなかった。神仏のお導きであると、あんた方には感謝している。さりながら住み慣れた島を離れる時、あんた方は何とも思わなかっただろうが、わしら三人は複雑な心境であった。苦労はあったが、二十年余りあの島で暮らしたことなどが想い出され、心残りがして島の見える間は、何度も振り返り、振り返りして名残を惜しんだ。今はその島も見えない。この先どこを当に流れて行くのかと思えば心細くてならぬ。あんた方と共に島を出てよかったかどうか思い悩んでいる。それが今の偽りのない気持ちだ」
「なるほど、長年生きて来られたところ故、無理もない。だが、これまでつつがなく過してこられたのは、神や仏

の加護があったればこそじゃ、この上無事に帰国するには、なお一層神仏のご加護にすがるよりほかはない。ここまでお前様方にご加護を下さった神仏は、今ここにきてお見捨てになるはずはない。早や陽も昇り、海上も静かで風も申し分ない。ご懸念には及ばん。きっと一両日中には、人の住む島に辿り着ける」
富蔵の言葉は、三人を慰めると共に、乗船者全員を勇気づけた。
引き続き海上を風に乗って北上した。ちょうど鳥島を出てから三日、三晩経った元文四年五月一日の夜明け頃、一人の水主が声を上げた。
「おい、北の方角に島影が見える。しかも煙らしきもの見えるぞ。あの島には、人が住んでいるに違いない」
乗組員は、一斉にその水主の指差す方角を見た。
島影はだんだんと大きくなって、木々の緑が視界に入り、海岸付近には人がいる。
伝馬船を砂浜に乗りつけると乗組員一同、涙を流しながらわれ先にと駆け上がった。島の住人が、物珍しそうに寄って来た。
「あんた方は、どこから来なすった」
確かに日本語である。島の人々は、奇妙な風体をした漂着者たちを異人でも見るかのような眼差しで一人ひとり眺め渡した。
ことに、平三郎ほか荒井の三人衆の異様な風体は、島人の注目を集め、それを見た子供たちは鬼と見間違え、泣き出す者もいるほどであった。
騒ぎを聞いて島役人が来た。漂着者全員を島の代官所に連行し、御代官齋藤喜久郎が直々、全員を集め、吟味を行うことになった。
漂着者たちの辿り着いた島は、八丈島であった。伊豆の島々の中では、南の大きな島で、流人の島として古くから知られた島である。
御吟味の後、一行は特別な船で江戸に送られることになった。
平三郎、甚八、仁三郎の三人は、八丈島役人の計らいにより、着物を与えられ、髪を整えるよう指示を受けた。江戸に護送されるにあたって見苦しくない身なりを整えることが求められたのである。
江戸表に到着後、江戸城内吹上御庭で取り調べを受けることになった。二十一年間も無人島で暮らしたとあって、幕府内でも話題を呼び、富蔵以下の宮本船の水主たちとは異なり、島の情況について詳しく取り調べられた。
鳥島で暮らした証の品を差し出すよう求められたが、三人は喜びのあまり八丈島で慌てて乗船する際にそれらを壊してしまった。また、大鳥の毛皮も狭い船の中に、十人も乗っていたため、最初に流れ着いた小島に、捨てて来てしまったので、証拠らしい証拠を提出することは

出来なかった。さらに、島で作った籾米二斗ほどは、八丈島のお役人が当分預かるとのことであったため、出船の折、八丈島に置いて来てしまったのである。

取り調べには、耳も聞こえ、口調も明快である一番若い平三郎が対応した。

甚八は、六十七歳、仁三郎は六十一歳でそれぞれ年相応に老耄して、記憶も薄れ、耳も遠くなっていたので、取り調べには向かなかったのである。

取り調べでは、島へ漂着した時の様子、島の大きさ、八丈島からの距離、気候、風土、植生、島での暮らしぶりなど、こと細かに訊ねられた。

取調が済むと平三郎、甚八、仁三郎の三人は雉子橋の外にある御厩の宿に引き下がった。しばらくして、再び召し出され八丈島に預けてある籾米を公儀に差し出すようにとのお達しがあった。

その時、幕府から遠州荒井村への帰国の許可と共に次の言葉が下された。

「その方等、久しく無人島にて苦難致し段、誠に不便故一人へ三人扶持、三人へ九人扶持、その身一生の内下し置く。生国荒井へ帰国の上は、もはや渡世の義は相止めて一生楽に送ることにせよ」と。

その言葉を聞いた三人は、かの島で暮らした二十一年の間に故郷の土を踏むことなく散って逝った仲間を想い、嗚咽が止まらずしばらくは顔を上げることも出来なかった。

五．故郷の土

三人はいよいよ荒井村に帰ることになった。

船が荒井に着くと平三郎は、陸に駆け上がり、出迎えの人混みをかき分け、女房のお政を血眼になって探した。だが、見付け出すことは出来なかった。

噂を聞いて駆け付けた人混みの中で、見知った者は、わずかしかいない。三人は、まるで浦島太郎の心境で、見知らぬ人の波の中で茫然と立ちすくみ、二十一年間瞼の奥に焼き付いていた懐かしい故郷の面影を探し求めた。人は大きく変わっていたが、家並は昔の面影を留めている。

平三郎は、白分の家に帰り、母と生還の喜びを分かち合った。他家に嫁いだ妹も実家に帰って来て、喜びに咽びながら兄を迎えた。

「ところでお政はどうした。迎えに出なかったし、家にもいない。何かあったのか」

その言葉は、重苦しく留守家族の上に圧し掛かり、しばらく誰も口を開こうとしなかった。やがて母親がお政に起きた異変をとつとつと語った。

「実は、お政はもうこの家にはいない。お前が筒山様の船の水主として荒井湊を出てから漁や畑仕事を手伝いながらずっとお前の帰りを待ち続けていた。ところがお前からは、何の音沙汰もない。どこかで時化に遭い船は沈んでしまったとのもっぱらの噂で、五年経ち十年経って、帰ってくる見込みもなくなってしまったと思った私とお政は、お前のことは諦めることにした。でもお政はひょっとして、お前が帰って来るのではないかとの一縷の望みを頼りに、この家で暮らしていた。お前が筒山様の船に乗った時は、お政は確か十七だった。若い身空で独り身になってしまったお政も淋しかったに違いない。五年前に旅芸人がこの土地で芝居興業をした時に、その中の役者の一人と出来てしまって、その役者について村を出てしまった。それからは行方知れずで、どこでどう暮らしているのか今となっては分からないのだよ」

平三郎は、それを聞いて二、三日正気を失い、怒り泣きわめいた。それが収まった後は、まるで腑抜けのように悄然として家の中に閉じこもることが多くなった。

一方、甚八の女房は、六十を超えてはいたが生きていた。長年の苦労がたたって、足は弱り腰が曲がって、荒井湊に迎えに出ることが出来なかった。が、二人の息子と三人の娘がいて、そのうち息子と娘の一人ずつが湊に迎えに出ていた。甚八は、二十一年振りで再会した息子や娘の顔をすぐに思い出すことが出来ないほど老いていた。彼らの語る荒井村の変わり様をうつろな目をして、ただ黙って聞くばかりである。家に帰っても女房との会話は少なく、近所で親しくしていた友人もほとんどが死に絶え、日がな一日孤独を感じながら過ごすのであった。

平三郎や甚八と違って、仁三郎はもともと独り身である。兄が二人、妹が一人いて両親はすでに他界していた。出迎えには一人の兄と妹が出た。兄は、すでに六十の半ばを越え、足腰も弱っていて、呂律が回らずもっぱら妹が、仁三郎との話を取り持つ役目を果たした。

仁三郎は、所帯を持っていなかったため、持ち家はなくひとまず兄の家に居候することになったが、再会を喜び合ってしばらく過ごすうちに、何となく居心地が悪く孤独を感ずるようになっていた。

三人とも暮らし向きには困ることはなかった。生涯にわたってお上から三人扶持を下賜されることになったため、無駄遣いさえしなければ、何とか暮らして行くことは出来たのである。

そのこともあってか四十三歳の平三郎には、お政の後釜にと数多くの縁談が持ち込まれた。また、言い寄る女も一人や二人ではなかった。が、平三郎は、女は懲りたと言って、後添えを貰おうとはしなかった。

彼が島にいる間、唯一の心の支えはお政だけであった。お政と共に今一度暮らそうとの一心で生き延びて来た。それほどまでにお政を想っていたのだ。

帰郷後最初の一年は、お政への恨みが憎しみに変わり、

胸の奥から沸々と湧いて来る復讐心で、夜も眠られないほどであった。彼は、何のために島で生きながらえて来たのか、何のために苦労して来たのか。あれほど恋い焦がれた妻や故郷が、自分とは遠い存在になってしまったような気がして、落ち着く場所を見付けることが出来なくなっていた。

しかし、その恨みと憎しみも時と共に薄れて行き、お政の立場になって考える余裕が出て来た。

（十五年以上も何の便りもなく、ただ生存を信じて亭主の帰りを待つことがどんなに大変なことであったか。言い寄る数多くの男を振り切って貞節を守り、あたら若い命と女の春を朽ち果てさせることが、お政にとってどんなに苦痛であったか。そのことを思いやるべきではないか。誰が悪いわけではない、自然の力に抗することの出来なかったあの大嵐の夜から、お政とは引き離される運命にあった）と平三郎は思うようになっていた。

とはいえ、お政のいない毎日は、平三郎にとっては、空疎で何もする気が起こらない。ただいたずらに時が過ぎ行くばかりで、島の生活と同じであった。むしろ島の方が充実していたのかもしれない。島ではいつか故郷に帰るという希望があった。そのため何としても生き延びようと心に張りがあり、籾米作りに専念し気を紛らわすことが出来たのである。

平三郎は、扶持米をお上から受け、毎日なすこともなく無為に過ごすことに苦痛を感じ始めて来た。

（島の生活を取り戻してみたら少しは生きる力が湧くかもしれない）

平三郎は、甚八、仁三郎を誘って土地を借り、米を作ることを思い立った。

甚八と仁三郎は老齢のためあまり体を動かすことは出来なかったが、生きる目的を見つけたと喜んで米作りを手伝った。

島で暮らしたように三人は、日が暮れるまで稲の手入れをして、疲れた足取りで家路につくことが何よりの心の安らぎとなった。

とっぷりと暮れた荒井の海を見ていると海上を大鳥の群れが飛んでいるような錯覚を覚え、三人は島での暮らしを語り合うことが楽しみとなったのである。

三年後、甚八がこの世を去った。七十歳になっていた。「あの過酷な暮らしの中で、よくここまで生き長らえたものだ」そう言いながら息を引き取った。

仁三郎は、その翌年甚八の後を追うようにして他界した。享年六十五歳。

臨終の床にあって「島で命を落とした仲間が島に戻ってこいと言っている」と最後の言葉を残し安らかな表情で息を引き取った。

平三郎は、それから二十年近く生き、仁三郎と同じ六十五歳で旅立った。

米を作り始めてからは死ぬまで、平三郎は、お政のことを口にしなかった。時が経つにつれ、お政が家を出たことは、自然の成り行きであると考え、許す気になっていたに違いない。あるいは、米作りがすべてを忘れさせてくれたのかもしれない。島での暮らしの生き甲斐であった米作りが、故郷に帰ってからもずっと続く生き甲斐となったのである。

平三郎にとって、心の故郷はあの島であり、そこに骨を埋めた仲間こそが、彼の残りの人生のすべてとなっていたのだ。

晩年になって、浜辺に立ち遠州灘に打ち寄せる波に足を浸しながら、遠くの海をぼんやりと眺めている平三郎は、島に取りつかれているようであったと伝えられている。

（完）

あとがき

荒井（新居）は、江戸時代箱根と並ぶ大きな関所があった。それに浜名湖の海口に今切れの渡しがあって、東海道を旅する者にとって強く心に残る宿場の一つであった。

当時遠州灘は、航海の一大難所であった。ところが沿岸には良港がないため、荒井の湊は、廻船の寄港地及び遠州西部の城米輸送基地として重要な役割を果していた。宝暦年間に（一七五一～六三）荒井では、二百～六百石積の廻船が七艘あったと記録されている。

浜名湖周辺の城米のほとんどは、浜名湖舟運により荒井湊に集められ、同湊で廻船に積み替えられ江戸に輸送された。

三人の漂流帰還者については、当時大きな話題となり、時の将軍吉宗は江戸城吹上御庭に三人を召出し取り調べた。その時の取調べの内容が「無人島帰国者口書控」と「元文四年（一七四〇）未年無人島漂着之水主三人吹上御庭江召出シ相尋候答」として記録に残されている。

そうした記録をもとに作家小出作之助氏が昭和十七年十月大阪輝文館から、「漂流」と題する小説を出版した。

本物語は、そうした先人たちの残した記録や小田作之助氏の「漂流」を参考にし、鳥島に漂着した荒井湊の廻船筒山五兵衛船の水主たちの同島での苦難の生活とその後の人生を小説風に取りまとめたものである。

なお、荒井と新居は同じ地名で、当時江戸などの関東では荒井と書き関西では新居と記している。江戸での取調べ記録をもとにしたため、荒井と表記することにした。現在の正式地名は新居であることは言うまでもない。

『時評家　新明正道』（評伝その三）

山本鎮雄

第三章　ヴ・ナロード（人民の中へ）の東京帝大新人会（前篇）

一「思想青年」が直面した激動の時代

すでに触れたように、第四高等学校（旧制、金沢）の二学年時の新明は、「大正デモクラシーの烽火」を上げた吉野作造の歴史的長論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（『中央公論』、一九一六〔大正五年〕一月号）を熟読した。そこで、新明は四高で進歩派の学友・山崎一雄とともに、吉野教授が教鞭を執る東京帝大法科大学政治学科に入学することを秘かに決意した。

四高を「皆出席」で、しかも首席を通した新明は、東京帝大に受験・入学するまでの一八年〔大正七年〕七月から九月（当時の大学の新学期）にかけて全国各地に米騒動が続発した。同年七月、米価の暴騰を原因として富山県魚津町の漁民妻女ら数十人が海岸に集合し、米価高騰防止のために米の県外への船積み中止を荷主に要求した。それを契機に米騒動が始まり、全国各地に自然発生的に波及した（『近代日本総合年表』第四版、岩波書店）。

すでに同年七月、米価の暴騰で大阪堂島を始め、東京、神戸、熊本などの定期米の米穀取引所は立会を停止した。寺内正毅内閣は「外米」を緊急輸入したり、白米の廉価販売をしたが、米価の騰貴にたいして米価の調整に失敗し、しかもシベリア出兵の宣言を見越して、地主や米穀商人の米の買い占め・売り惜しみが全国的に蔓延した。

民衆は急激な物価上昇と米価の高騰のために、生活難と食糧危機に陥り、米騒動は全国各地で米穀商に廉価販売を要求するなどの民衆の暴動となった。政府は全国各地の米騒動を警察だけではなく、軍隊も出動させて鎮圧し、そのリーダーを大量に検挙した。この民衆の米騒動は近代日本の歴史で最も大規模な民衆運動のひとつである。

さらに、内務省は全国各地の米騒動に関する新聞記事の掲載を禁止し、全国の一三八紙が発禁・記事削除を受けた。翌日の各紙は米騒動の記事を削除し、その部分を空白にして発行した。全国の新聞社・通信社の記者はこぞって超然内閣の寺内内閣の失政を糾弾し、言論と報道の自由を擁護するため、記者大会を開催した。その急先鋒が寺内内閣を盛んに非立憲内閣と批判した「大阪朝日新聞」だった。

寺内内閣は、「大阪朝日新聞」（一九一八〔大正七〕年八月二六日付夕刊）の寺内内閣弾劾関西新聞記者大会の記事のなかに、天下に凶変が起こるときの前兆として「白虹日を貫けり」（『史記』〈鄒陽伝〉）の語句のあることを理由に発売を禁止した。その後、政府の転覆など国家存立の基礎となっている制度を侵害し、皇室の尊厳を冒涜する「朝憲紊乱」に当たるとして、執筆者らを新聞紙法違反四一条で起訴し、有罪の判決が下された（一二月四日）。

同年九月、右翼団体の暴漢が「大阪朝日新聞」の村山龍平社長を大阪中之島公園で拉致し、燈籠に縛りつけ、「国賊」という札を貼り付けてさらし者にした（「白虹事件」）。村山社長は辞任し、次いで編集局長の鳥居素川、社会部長の長谷川如是閑、論説委員の大山郁夫（のちに、雑誌『我等』を創刊し、健筆を揮った）らは連袂辞職した。すでに、米騒動を鎮圧した寺内内閣は辞表を提出し、原敬政友会総裁が首相に就任し、日本で最初の本格的な政党内閣が成立した（同年九月二九日）。

当時、新明は米騒動に一定の関心を寄せたであろう。しかし、新明はこの大規模な民衆の暴動について発表するメディアもなく、積極的に発言していない。のちに、新明は東京帝大新人会に入会し、新人会機関誌『デモクラシー』第八号（一九年八月）の編輯兼発行人として、『地上』で颯爽とデビューした同郷の弱冠二〇歳の新進作家の島田清次郎の短文「旧稿の一部―米騒動の感想―」（一八年一一月、執筆）を掲載した。

島田は全国各地の米騒動を「民衆運動」と見なし、決して非文化な「騒乱」や「暴動」ではなく、積年の政治上の欠陥をさらけ出した結果と評価した。さらに「『米が高い』と云う考が出ることは、内部に病患をもつものの感じる『痛さ』である。『痛い』ことが根本ではなく、『病患』が根本である」と指摘した。「病患」とは社会の矛盾から生まれた貧困や犯罪などである。のちに、新明は黎明会の準同人誌『解放』（第二巻一号、二〇年一月）に「島田清次郎論」を寄稿し、島田を「マルクスの階級闘争観念を通過してきた小説家」と評し、新明は島田が「社会の根本的欠陥から生ずる貧困犯罪、病気を根絶せんがために、社会の根本的欠陥そのものを破壊しなくてはならぬ」と論評した（1）。

のちに、新明は社会学者としてル・ボンの『群集の心理』(一八九五年)やフロイトの「群集心理学と自我の分析」(一九二一年)などを研究し、群集を心理学的ではなく、一つの「社会的形象」として社会学的に考察した。新明は「群集の幽霊は至るところに出没している」という書き出しで始まる『群集社会学』(論文集、一九二九年五月)を公刊した。

新明は米価の暴騰に起因する全国各地の民衆の米騒動と、関東大震災を機に自警団と警察による朝鮮人虐殺と社会主義者にたいする迫害・殺害という群集行動を比較研究した。この二つの群集化の過程には、同じように拡大、深刻化、傾向化の律動が分析されるが、「米騒動の群集化にはある論理があるが、震災時のそれはまったく群集的にして無論理である」と記述し、とくに震災において自警団の扇動者、警察が荒唐無稽な事実を巧みに論理的に装い、朝鮮人の襲来と社会主義者の蜂起という民衆の恐怖心に成形を与えた結果であると見なした(2)。

四高在学中、新明はトルストイの人道主義とともに吉野教授の民本主義の思想に共鳴した「思想青年」であった。さらに、その前年の一九一七(大正六)年一一月、ロシア十月革命が勃発し、世界最初の社会主義政権が成立した。晩年の新明の回顧によれば、当時の日本の新聞雑誌では、一応ロシアの社会主義革命は重大ニュースとして取り上げられたが、レーニンが率いるボリシェヴィキはただ「過激派」として報道されたに過ぎない。そのため、ロシア革命の歴史的意義は確認されず、思想的にその衝撃はあまり強烈ではなかった。むしろ、第一次世界大戦後の帰趨について、はるかに国民的な関心があった。

新明は「ロシア革命の成功を聞いて、人類解放の見地からこれを讃美する気持をもっただけで、思想的に特にその本来の性格を、久しい間つかむことなく、口先だけで漠然と社会主義的言辞を弄していたが、それほど大きな衝撃を受けず、一歩進んで社会主義について考えてみようとしなかった…」。「ロシア革命が実現された当時のわが国では、…一般的にいって、当時思想的に進歩的であると見られていた人々でも、実際には大体こうした精神的状態にあったのではなかろうか」と回顧している(3)。

さらに第一次世界大戦後、アメリカのウィルソン大統領が提唱し、アジアでも民族自決と解放運動が昂揚し、日本統治下の朝鮮では各界の名士が民族代表として署名して独立宣言を発表し、全土に全民族的な反日独立運動が起こった(三・一運動、一九一九年)。同年、中国では北京大学の学生を中心に反日街頭行動が起こった。それを契機に反帝国主義・反封建主義の民族自決と解放運動が全国的に拡大した(五・四運動)。

二十歳後半、吉野講師は「朝鮮問題研究会」を組織したり、直隷総督の袁世凱の長子克定の家庭教師として天津に赴き、また奉天に滞在した経験もあって、日本の植民地化の朝鮮・中国の問題と動向に早くから関心を寄せ、時局的見解を明らかにした。当時の自由主義者でさえ、思想的には「外は帝国主義、内は立憲主義」が一般的な傾向であった。ところが、吉野教授は満州と韓国を視察し(一九一六年春)、民族自決と解放の観点から中国革命に共感と支持を表明するようになり、さらに日本の朝鮮統治による日鮮一体化という侵略的な「同化政策」を批判した。それは「吉野の中国革命および朝鮮論は…民本主義論の論理的帰結の極限を示したものである」(三谷太一郎)。

台湾に生まれた新明は、小学校と中学校の一時期、「植民地の役人」の父に同行し、「我等旅びと」として満州(中国東北部)の日本人街を転々と居住した。さらに朝鮮では不本意ながら、三年間、ソウル郊外の京城中学校の寄宿舎で生活した。敬愛する師の吉野教授は朝鮮における日本の「同化政策」を批判し、さらに中国革命運動の援助者の宮崎滔天の自伝『三十三年の夢』(一九〇二年)の影響を受け、中国革命への支持を表明するようになった。新人会会員は中国革命や朝鮮問題に積極的に関与しているが、新明は新人会機関誌に中国革命や朝鮮問題について「何も」公表していない。何故であろうか。残念ながら、その謎を明らかにすることは出来ない。

新人会機関誌『デモクラシー』(第二号、一九一九年四月、発売禁止)に掲載された「朝鮮青年に呈す」(赤松克麿)で、「一国が自国の利益の為めに他国の意思に反して是を支配する如きは断じて不可である。況や其人民を強圧して是に差別的待遇を与え威力と制度とを以て人民の声を圧伏するが如きは非人道の極である」として、日本の植民地支配に反対した朝鮮の青年に支持を表明した。

また、慶應義塾大学の在日朝鮮留学生の廉尚燮は、同号に「朝野の諸公に訴ふ」を寄稿している。「(日本各地の)米暴動と留学生の行動とは其表面は異るもその生存の保障を得とする真剣なる内面的要求に就いては異る処なきなり」と主張している(ここで「留学生の行動」とは朝鮮三・一運動に先立ち、同年二月の東京での在日朝鮮留学生の朝鮮民族大会召集請願書と独立期成宣言書の発表を言うのであろう)。さらに「徒らに、特権階級の門前に拝跪することを止めて、青年学徒としての真正なる使命を自覚し、敢然として真理の為めに戦はねばならぬ」と青年学徒に呼びかけた。

新人会機関誌によれば、会員の宮崎龍介は父・滔天の中国の知人の「ツテ」もあって、また上海に赴き、平貞蔵、嘉治隆一は中国を旅行している。二〇年五月、中国の学生運動を代表する北京大学の学生五名が来日し、新人会会員と「東洋の改造的気運を促進する」ために、親しく懇談した(『先駆』六月号〈一〇年六月〉)。

二　本郷ＹＭＣＡの仲間たち

新明は東京帝大法科大学政治学科（その年一二月、分科大学制を廃止し、学部制と改称）に入学すると、父の指示で金沢の前田候の大久保別邸の「敬義塾」の寄宿舎に入寮した。奨学金を支給され、学費を免除された他、石川県とその隣県の加越能県人会育英会から生活費の援助を受けた苦学生だった。のちに、吉野教授の紹介で金沢出身の銀行家の早川千吉郎（当時、三井銀行常務取締役）の子息の家庭教師をして、生活費に当てた。他に吉野教授から経済的に援助する篤志家を推挙された。

ところが、毎夕一時間、「敬義塾」では剣道の稽古が行なわれた。元来、スポーツが不得意で、しかも剣道のたしなみのない新明は盛んに竹刀で打たれ、防具の「面」を取ると、額に血が滲んでいた。それとともに、友人の山崎一雄によれば、新明はこの寄宿舎特有の「反動的気分」に嫌気がさしたが、苦学生の新明は直ちに退寮することは出来なかったのであろう。のちに述べるように、新明は二学年の新学期の九月、「敬義塾」を無断で退寮し、山手線目白駅近くに設けられた新人会本部の洋館で共同生活を始めた。

当時、大学に入学するために、必要な手続きとして身元保証人を必要とした。そのため、新明は父の勧めに従い、同じ政治学科に入学した山崎一雄とともに、四高出身で天皇絶対主義を提唱している憲法学者の上杉慎吉教授宅を訪問した。山崎の回想によれば、「博士邸の応接間の机に何か右翼国粋団体の雑誌が置いてあった」。山崎は上杉教授の高圧的で皮肉っぽい態度と右翼団体と深く関係していることに失望し、上杉教授の憲法学の講義を欠席し、むしろ吉野教授の政治史の講義を熱心に受講した。

山崎は東京帝大学生基督教青年会（その所在地により、一般に本郷ＹＭＣＡと呼ばれた）の寄宿舎に入寮して学生生活を開始した。新明は登校と下校の折、この寄宿舎に住む山崎を頻繁に訪ね、松沢兼人、早坂二郎、門田武雄らと懇意になり、東京帝大基督教青年会に入会したが、その寄宿舎には入寮していない。すでに触れたように、山崎は基督教青年会の理事長の吉野教授の面会日――当時の吉野教授の「日記」によれば、ほぼ毎週金曜日――に本郷千駄木町にある吉野教授の自宅を訪問し、教授面会日の常連のメンバーになった。新明は山崎から吉野教授の面会日に誘われ、教授宅を数回訪問している。

本郷ＹＭＣＡの寄宿舎の生活の一端は、『早禱日記』（第一舎　大正八年九月起）というノートに記録されている。本郷ＹＭＣＡの寄宿舎の「早禱会」（一般に早天祈祷会ともいう）は毎日早朝七時から三〇分程度の祈祷会が行なわれた。常連のメンバーが輪番で司会を担当し、全員が讃美歌を歌い、司会者が聖書（主に「福音書」のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）の一章を朗読したあと、全員が祈祷して終わる。司会者には山崎、松沢兼人の名前が記録されていた。のちの新人会の会員となった河野密、住谷悦治などの名前も記録されていた。「早禱会」の出席者は総じて五名から一二名程度であり、日曜日は第一宿舎の他、少人数の第二宿舎の出席者と合同で「早禱会」が行われ、出席者はほぼ一七名と記録されている。

本郷ＹＭＣＡの熱心な会員の一人、松沢は『早禱日誌』に福音書の「キリストの言葉が二千年の昔のものであるにもかかわらず、現今の思想にもあてはめられるのは、彼が全く人格者であったからであり、悟りをひらいていたのである」。そして自らの信仰生活では「人格の修養」が重要だと自覚した。もう一人の熱心な会員の山崎は、寄宿舎の生活で「愛で生きると言う事は力で生きるのよりも効果がはるかに多く、確実である事を数月のこの寄宿舎の生活で実際に証明することが出来た」として、本郷ＹＭＣＡの寄宿舎での信仰生活に充実感を覚えている。

さて、新明は東京帝大に入学して、本郷ＹＭＣＡに入会した後、日本メソディスト教会に入会した（なお、戦後の身上調書によれば、一九一七年一二月から二一年までのほぼ四年間であるが、どの教会に入会したか、記載されていない。またその日時は必ずしも正確ではない）。正統派福音主義信仰の確立に努めた植村正久牧師の一番町教会（のちの富士見町教会）の「紳士の教会」にたいして、東京帝大に近い海老名弾正牧師が主宰する弓町本郷教会は「書生の教会」と称され、東京における二大教会の一つであった（山路愛山）。なお、両者はキリスト理解をめぐり激しく神学論争を展開した。

キリスト教徒の学生はいわゆる「宗教と科学の衝突」が焦眉の課題だったが、海老名牧師は自由神学に基づき、合理主義的に人間中心の福音を説き、自ら創刊した雑誌『新人』の健筆、講壇の雄弁な説教で学生の疑問に答え、また多くの人々に宗教的な感化を与えた。教会の海老名牧師とともに、キリスト教徒の吉野教授は大学を通して学問的に真理の伝道を行ない、ジャーナリズムによって大衆に時局の解釈を教示した（三谷太一郎）。ただ、新明は本郷教会の礼拝にわずか数回出かけたに過ぎないが、のちに雑誌『新人』二五巻三・四号（一九二四年三・五月）に「社会構成化論」（上・下）を寄稿し、『権力と社会』（一九二四年）に収録している。

新明や山崎とは二学年上級のキリスト教徒の河村又介（戦後、最高裁判所判事）は、本郷ＹＭＣＡの会員であり、あとで触れる「普通選挙研究会」の幹事を担当し、大学卒業後は吉野教授の政治学科研究室の最初の大学助手に就任した。河村によれば、キリスト教徒は明治・大正期には既成の権力たいして宗教的思想的に革新的であった。キリスト教人道主義という理想主義的な基調から、

対外的には平和主義、国際主義、対内的には自由主義、民主主義という革新思想を志向した。それは本郷ＹＭＣＡの会員にも顕著であった（4）。河村と同じく、本郷ＹＭＣＡの活動的な学生は東京帝大新人会の発足と相前後して入会し、新人会結成の中心的メンバーの法科緑会弁論部とは別に、山崎、松沢、新明、門田武雄らは「青年会派」と称され、それぞれ新人会の一活動とともに機関誌に健筆を揮った。

三　吉野教授対浪人会の立会演説会とその後

すでに触れた「白虹事件」として、右翼団体の暴漢が『大阪朝日新聞』の社長村山龍平を中之島公園で襲い、灯篭に縛りつけるという暴力事件が発生した。吉野教授は『中央公論』（一九一八年一一月）に「言論自由の社会的圧迫を排す」を掲載し、右翼団体の浪人会が「極端なる暴力的制裁の続行を暗示する」という演説会の発言を取り上げ、暴力行為による言論自由の社会的圧迫を批判した。同年一一月、この短文にたいして、吉野教授と浪人会とは紆余曲折があったが、吉野教授対浪人会（田中捨身、佐々木安五郎、伊藤松雄、小川運平）の公開の立会演説会が実現した。この立会演説会は言論と思想の自由、それにたいする暴力による社会的圧力をめぐり、神田の南明倶楽部で行なわれた。

立会演説会では吉野教授を応援するため、東京帝大法科緑会弁論部（吉野教授は同部の部長）と本郷ＹＭＣＡ（吉野教授はその理事長）の学生を始め、鈴木文治が組織した友愛会の労働者は早くから会場を占拠し、演説会では吉野教授の弁論に盛んに声援を送り、浪人会の弁士を嘲笑した。ところが、突如、浪人会会員の一人が会場に飛び出し、声援する学生に暴力をふるった。まさに吉野教授が「言論自由の社会的圧迫を排す」で警告したように、言論の自由を暴力によって圧迫することが浪人会の本性として再現されたと批判した。そのため、社会的には立会演説会は勇気ある吉野教授の圧倒的な勝利に終わった。

吉野教授は、会場は「定刻前に一杯になり、屋外すでに人の山をきずく　辛うじて入場…十分論駁し尽くして相手をして完膚なからしめた積りなり　十時過凱旋す／屋外同情者千数百　歩行自由ならず警吏の助により辛うじて電車に飛び乗り帰る」と当日の「日記」に記述している（5）。山崎も松沢らの本郷ＹＭＣＡの会員とともに、早くから演壇の前に陣取り、吉野教授の演説に盛んに声援を送った。定刻前、遅れて会場に来た新明は「屋外同情者千数百」の一人として演説会の動向を注視した。鈴木文治は会場のバルコニーから屋外の同情者に論戦の経過を逐次報告した。新明は屋外の応援者とともに盛んに声援を送り、会場から引き上げる吉野教授に応援者とともに、「万歳」を叫んで絶大な声援を送った。

この演説会は知識人・学生さらに労働者に大きな影響を与えた。吉野教授は東京帝大法科大学の河村又介、鈴木義男（戦後、法務大臣）らを中心に、緑会弁論部の赤松克麿、石渡春男、宮崎龍介、さらに本郷ＹＭＣＡの会員に働きかけ、二、三十人の学生に選挙権の理論や選挙権の制限などの「選挙権拡張問題研究要目」（同年一二月、謄写印刷）を頒布し、アカデミックな「普通選挙研究会」を組織しようとした。例えば、河村又介は「選挙権制限の歴史」というテーマを割り当てられ、吉野教授の研究室で研究に専念した。新明は吉野教授から「政治運動に反対の立場を明らかにしていたサンディカリズムの主張」をテーマに与えられ、研究会で報告したという。

「普通選挙研究会」のメンバーのうち、「普通選挙研究会」とは別に、卒業生で『東京日日新聞』記者の麻生久らが協力し、緑会弁論部の赤松克麿、石渡春男、宮崎龍介らが中心となって、学内で集会を開き、東京帝大新人会結成のために頻繁に協議した。「普通選挙研究会」のメンバーの多くは結成された新人会に加入した。吉野教授の熱心な働きかけにもかかわらず、アカデミックな「普通選挙研究会」は河村の他、数名の学究的なメンバーが継続したが、竜頭蛇尾に終わった。

最高学府の帝国大学は設立以降、「国家の須要に応ずる」として欧米の近代的制度と思想という学術研究と、日本の指導的な官僚養成を目的とした。大正デモクラシーという歴史的な転換期に、まさに将来を嘱望される指導的な官僚養成という明治以来の「学校観念」を否定する画期的な東京帝大法科大学の青年学生団体が結成された（一九一八〔大正七〕年一二月上旬）。現に卒業生した新人会会員は、労働運動を援助する弁護士、大学教師、新聞記者、さらに少数ではあるが、労働組合の指導的な幹部・イデオローグとなり、官僚になる道を拒否した。

本郷ＹＭＣＡの会員の山崎は新人会結成前後の事情をつぎのように回顧している。「吉野教授と浪人会の立会演説会の前から、赤松君、宮崎龍介君、石渡春男君等、当時緑会弁論部の委員をしていた諸君が、…新人会の組織に取掛った。当時卒業していた先輩の麻生久、佐野学、



新明正道の東京帝大学生の頃
前列が吉野作造教授
後列の学生服が新明正道

黒田礼二の諸君もこの計画に参画し、十一月下旬に愈々新人会を創立し、一、二回の会合を学内で催した。僕等は翌年正月になってからこの会合に参加する様になった。新明君、松沢兼人、門田武雄の諸君も僕とともに出席する様になった」(6)。

この回顧では、山崎は新人会の結成を「十一月下旬」としているが、一二月上旬が通説である。その翌年正月の冬休み明けに、山崎は新明らとともに—本郷YMCAの「青年会派」のグループと称され—、結成された新人会に入会したのであろう。

四高出身で前期新人会に入会し、積極的に活動したのは、山崎と新明のみである。当時、新人会に対抗する右翼的学生団体の興国同志会は、四高出身で国家主義者の上杉慎吉教授の指導を受け、結成の準備をしていた。興国同志会は、四高出身で新明とは一学年上級生の法科大学の小原正樹を中心に組織され、そのツテで多くの四高出身者が入会している。新明は小原正樹や四高柔道部で活躍した中川善之助(法科大学法律学科)から東京帝大校内の銀杏並木の下で興国同志会の入会を勧誘された。ところが、新明はすでに新人会に入会することを決意していたため、興国同志会の入会を婉曲に断った。その後、興国同志会は東京帝大で法学部から独立した経済学部の森戸辰男助教授の排斥運動を画策した。森戸事件で興国同志会は新人会をはじめ、学内から猛烈な非難を浴びて分裂解散した。

新人会は機関誌『デモクラシー』第一号(一九一八年二月)で「ネオ・ヒューマニズム」を提唱し、「発刊の辞」(赤松克麿)で、ロシアの専制政府は転覆し、ドイツでは皇帝は退位を宣言してドイツ革命が生じ、第一次世界大戦が終結し、さらに植民地支配下の民族はそれぞれ自決権を主張する全人類解放の運動が起こった。今や「合理的な理想的な国民生活並びに世界生活建設のために我が国民が最も熱烈真摯なる努力を捧ぐべき秋は来た」として世界的なデモクラシーの到来を唱道した。

その後、機関誌『デモクラシー』第二号(一九一九年四月)で新人会綱領を正式に掲げた。

一、吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新気運に協調し之か促進に努む

一、吾徒は現代日本の正当なる改造運動に従ふ

なお、麻生久、佐野学が協力し、赤松克麿など新人会結成の中心的メンバーは社会運動や社会問題の研究と実践を志向していた。しかし新人会や機関誌『デモクラシー』の名称は何ら吉野教授と相談することなく、集会のメンバーのいわば阿吽の呼吸で決定した。黎明会と東京帝大新人会は第一次世界大戦後の世界的なデモクラシーの文化的な大勢という気運を受け、知識人や学生が啓蒙的ないし実践的な運動によって大正デモクラシーの昂揚に大いに寄与することを宣言した。さらに新人会は地方

に点在する少数の先進的な青年を中心に新人会支部の結成を実現した。地方支部の結成は黎明期の社会運動を形成した。

四　新人会本部の共同生活の開始

すでに触れたように、新明は東京帝大法科大学に入学し、金沢の前田候別邸の「敬義塾」に入寮し、本郷YMCAに入会した。一学年時の夏休みが終わり、二学年時の九月の新学期に「敬義塾」を退寮し、東京市外高田村(現、豊島区目白)の新人会本部の黄興邸に転入し、そこで共同生活を開始した。中国革命運動の援助者の宮崎滔天は、中国革命家の黄興と孫文を引き合わせたが、孫文よりも黄興に親しみ覚えた。黄興は日本からアメリカに亡命する時、滔天に千円の包金を渡した。滔天がその大金で山手線目白駅近くに自宅を新築したのか、さらに洋館一三室の黄興邸を新築したのか不明である(黄興はそれ以前に中国からの亡命者のために、洋館を新築したという説もある)。

いずれにせよ、滔天に黄興邸の管理を任せた黄興は上海で病没した(一九一六年)。滔天は好意から空き家の洋館を長男の龍介と相談し、よろこんで東京帝大新人会に貸した。機関誌『デモクラシー』第三号(一九年五月)では、新人会本部はこの洋館に移転したことを「広告」している。すでに触れたように、新明は、新人会本部で共同生活を開始し、新人会機関誌『デモクラシー』第六号(一九年九月)に「我等は真理と共に死すべきである。真理は民衆にある」と主張し、『宣伝　人民の方へ』と題して活動宣言を掲載し、本格的に新人会の活動を開始した(次号に続く)。

(注)

(1)新明が『解放』に掲載した「島田清次郎論」について、のちに新明は「提灯は有ったには有ったが、大分僕の月日は見当違いでもあったらしい」と回顧している(「文学青年の思い出」、『新潮』、一九二九年三月号)。

(2)新明正道著『群集社会学』(初版、一九二九年、『新明正道著作集』第九巻所収、誠信書房、一九九三年)。

(3)新明正道著「遙かなる追憶—ロシア革命から五十年—」(『自由』一九六七年一一月号、新明正道著『ワイマール・ドイツの回想』所収、家永登編、一九八四年)

(4)河村又介「吉野先生と社会思想」(赤松克麿編『故吉野博士を語る』、中央公論社、初版、一九三四年、復刻版、一九九五年)。

(5)『吉野作造撰集』(第一四巻、『日記二』、一九九四年、岩波書店)。なお、当時の「電車」は路面電車である。

(6)山崎一雄「回想録二冊」(一九三三年七月執筆、『東

京帝大新人会研究ノート』第九号、一九八七年）。なお、吉野対浪人会の立会演説会以前の一八年一〇月、京都で開催された東京帝大緑会弁論部と京都帝大労学会の連合演説会のあと、帰京した緑会弁論部の委員は、吉野教授が呼びかけた「普通選挙研究会」とは別に、本郷周辺で実践的な学生団体の組織について頻繁に話し合った。



東大新人会創立50周年記念集会
で挨拶する新明正道博士
新明社会学研究会『新明社会学研究』
（新明正道先生　生誕百年記念号）



東大新人会創立50周年記念集会
（1969年1月18日、学士会館［本郷］）
ヘンリー・スミス著『新人会の研究』

千家尊福伝（九）

政治家に転じた大社教管長

村上邦治

はじめに

明治維新を成し遂げ、日本の近代国家建設を牽引した、木戸孝允（長州　明治一〇年病死）、大久保利通（薩摩　一一年暗殺）、岩倉具視（公家　一六年病死）を、相次ぎ亡くし、立憲君主国家体制を成し遂げられるのは、もはや伊藤博文しかいなかった。

博文は、長州・薩摩の藩閥間の権力争い、自由民権運動の激化、保守的な宮中勢力など、難しい情況に立たされつつも、国会開設の勅諭（一四年）による二三年の帝国議会開設を目指して、華族令の制定、内閣制度の創設、地方制度の確立を次々に実現していった。そして憲法草案を起草し、枢密院による審議を得て、公約通り明治二三年大日本帝国憲法を発布するとともに、第一回衆議院議員選挙を実施、貴族院（元老院の後身）との二院制議会が始まったのである。

西欧諸国での調査や、我国の将来を見据えた博文は、君主権力を制限して、天皇を立憲君主とする一方、議会の権限は、法案の提出権や議決権を認め、予算案についても承認を認めるもので、民権政党の主張を取り入れた憲法としたのである。従来の藩閥政府の権力維持に固守せず、西欧諸国に匹敵する新しい政治体制を、発足させた。

しかしこれらの実現は、内閣の権限を弱化させることに繋がる事でもあった。不平等条約の改正、清国やロシアとの朝鮮半島をめぐる外交交渉、国内のデフレ不況、など難題を抱える政府にとっては、政治の安定が危惧さ

れ、今後に大きな不安を抱えることが予想された。日本の行く末を担う博文とって、政治の動揺を防ぎ、欧米列強に対抗するとともに、日本人が古くから受け継いできた、宗教や伝統を重んじた考え方を持つ、強力な同志が必要であった。

その博文の眼に適ったのが、神道大社教管長男爵千家尊福であった。

一　立憲国家体制の発足

明治一四年（一八八一）国会開設の勅諭から、欧州での憲法調査を経て、一七年宮中に制度取調局が設置され、伊藤博文が長官に就任、井上馨、伊東巳代治、金子堅太郎らによる憲法制定と、国会開設の準備が始まった。

まず国会開設のため、同年華族令を制定し、貴族院（元老院の後身）の土台を築いた。さらに一六年には、太政官制を廃し、内閣制度を発足させ、自ら初代総理大臣に就任した。この創設により、総理大臣が各大臣を統制し、政治責任を明確にするとともに、政策決定の部署を、制度的に確立させた。政策立案の権限は内閣に限定され、天皇といえども内閣の輔弼を得てのみ、政策決定に関わることが固まった。これにより、従来曖昧であった、天皇の権限を明確にする「君主制」が始まり、憲法制定の一つの大きな課題が、解決されたのである。

明治一九年博文は、憲法起草に先立ち、古来より、明文化されていなかった、皇家に関わる諸々の規則を、憲法制定とともに明確にすべく、皇室典範の制定に着手した。新しい典範の基本は、皇室を政治から「分離自立」させ、天皇の個人的な要素を、出来るだけ排除することであった。幕末の皇室における混乱をみていた博文は、皇室の永続性確保を、最重視したのである。

同年末より、憲法草案に取り掛かった。ドイツ人ロエスレルの助言を得ながら、井上、伊東、金子らと、紆余曲折しながらも、検討と推敲と重ね、二一年四月、草案は、天皇に上奏された。

憲法および皇室典範の草案は、博文の発案により、天皇の諮問機関として枢密院が設置され、そこで最終の審議がおこなわれた。この枢密院の構成は、自ら議長となり、宮中顧問官九名（寺島宗則、副島種臣、佐々木高行等）を中心とする一六名であった。草案作成が、長州二人（博文、井上馨）に偏っていたため、出身別では、薩摩（四名）、土佐（四名）肥前（二名）を多くし、長州は二名に止めた。

博文は、枢密院の会議のなかで、皇族・宮中や、討幕主力藩などにも、新憲法を詳しく説明し、内容を徹底させることで、多くの人々が不満なく受け入れできるように、配慮したのである。

新憲法で、博文が多くの批判を押し切って、実現させたのは、次の二点である。

第一は、君主権力が内閣輔弼の原則よって制限され、天皇ではなく、総理大臣が、天皇に対しても、議会に対しても責任を持つ、行政の中心にしたことである。

第二は、多くの者が時期尚早として反対した、議会に、法案の提出権や議決権および予算審議権を与えたことである。そして、「両議院の議事は、過半数を以て、決す」とし、天皇や総理大臣の権限を縛り、国会の採決を第一としたのである。

これら議会重視の新憲法は、保守的な宮中顧問官らに反対されたが、博文は、草案を貫き通した。彼は、宮中顧問官らが主張する保守的憲法では、不平等条約改正に賛同しない欧米各国が、日本を立憲国家として認知しない恐れがあることと、当時国内で激化していた自由民権運動の民権派が、受け入れ難いものであったからである。

こうした、黒田藩閥内閣や宮中保守派の反対を押し切り、新憲法を制定したことにより、大きな混乱もなく、各層に受け入れられた。しかし民権派が多数を占めると予想される衆議院の権限拡大は、政党を持たない博文には、内閣の政治運営に、大きな支障をもたらすことを、予見させたのである。

二　博文の宗教観

当時政府首脳には、博文ほど欧米事情に詳しい人物はいなかった。

彼は、イギリス・アメリカ・フランス・オランダ四国の下関砲撃のあった文久三年（一八六三）、井上馨ら長州藩士四人ともに、ロンドンに渡航し、六カ月と短期間ではあったが、英会話や、イギリスの産業革命後の経済、工業などいち早く体験した。このときは下関事件を知り、急遽帰国したが、欧州諸国との国力格差を知り、攘夷論は最早得策ではなく、開国こそ、日本にとって必要であることを悟ったのである。

二度目は、明治三年、大蔵少輔（次官クラス）であったが、自ら新政府に申請し、財政調査の為に渡米した。当時、幕府や各藩の発行した通貨や新政府の不換紙幣が混在流通しており、経済は混乱し、貿易にも支障が出ていた。六カ月の滞在中、アメリカの理財に関する法令や国債、紙幣、為替などを調査研究した。帰国後、当時の大蔵省の幹部（大輔大隈重信、少輔井上馨、権大丞渋沢栄一）に建議し、経済財政の近代化の基礎を作ったのである。

三度目は、明治四年、政府は条約改正協議の為、岩倉使節団を欧米に派遣したが、副使として、岩倉、大久保、木戸らと共に、約二年間アメリカ、イギリス、フランス、

ドイツ、ロシアを視察した。使節団は欧米と日本の格差を知り、その後の積極的な欧化政策に繋がった。博文は、使節団同行により、維新後日本を指揮した三指導者と一層懇意になり、その後の博文に、より広い活躍の場を与えることになった。

四度目は、憲法調査のため、ローマ、ベルリンに二年間滞在した。

こうした経歴から、博文は政府首脳のなかで、最も欧米事情に詳しく、多方面に欧化政策を主導したことなどから、もっとも「西洋好き」であり、キリスト教についても、寛容な人物とみられていた。

特に一七年、前英国公使森有礼（一八四七～一八八九）を、文部省御用掛に任命しようとした時には、宮中を始め、他の政府関係者から批判され、反対運動が起きるなど、厳しい局面にたたされた。森は、若いころ、日本語を廃し、「英語の国語化」を唱え、また「契約結婚」をするなど、とても当時の国内情勢からは受け入れ難い、西洋かぶれ、と言われる言動が目立った。彼は、維新前に薩摩藩イギリス留学生に選ばれ、早くから西欧先進国の事情に詳しい知識を、習得していたからの言動であった。その後、二三歳で、最初のアメリカ駐在弁務公使になり、ワシントンに日本大使館を開設した。一方、駐在中には、キリスト教ハリス教団で生活経験をするなど、キリスト教のもつ合理性、潔癖性など深く認識していた。その後も清国、イギリスの各公使を務めた。外国生活が長く、若い時の西洋的発言などから、伝統的な日本人精神を壊す者とみなされ、キリスト教にも理解のあるその森を、博文は、教育の中枢である文部省首脳に、任用しようとしたのである。

博文は、憲法調査のため滞欧中に、英国公使の森に会い、彼の若いときの主張とは異なり、長い西欧体験に基づく、教育の必要性と制度について、その深い見識と熱意に感動し、我国の新しい教育行政を、任せたいと思ったことからであった。

当時、条約交渉に難航する外務卿井上馨が、交渉を進めるために、積極的なキリスト教容認策を採ろうとした。また、海外の大使ら外交官からも、日本が文明国であると認識させるためには、宗教の自由は無論のこと、上流階級の者は、「たとえ仮面にしろ、キリスト教徒としての振る舞いが必要である」、との切実な訴えが博文に寄せられていた。

国内では、キリスト教各宗派は、地道ながらも熱心な活動が、次第に評価され始めてきており、信徒は、着実に増加していた。

こうした風潮から、まず宮中において、三条太政大臣や有栖川左大臣など、「森の教育に関わるは、キリスト教信徒であり、将来の国害を招く」として、参議兼宮内

卿である博文に、森の起用に強く反対した。

これ等の批判に対し、博文は、まずキリスト教を、積極的に採用するつもりはないことを説き、

「かりそめにも、天皇と皇后とに、キリスト教をお勧め申す事あらば、自分は断然とこれを拒絶し、和気清麻呂を以て任ずべし」

と断言し、多くの批判に対抗したのであった。

博文は、貿易・工業など経済面は欧化政策を積極的に進めた一人であったが、精神については、これまで日本人の拠り所であった仏教や神道など、歴史的な宗教を、重視していたのである。

三　維新神祇政策を主導した津和野藩

尊福の元老院議官就任については、明治一二年、「巡教の車中で、偶然、伊藤博文に会って話し合い、伊藤は尊福の人柄にうたれて、元老院議官に推した」という逸話が、多く語られている。

明治政府を引っ張り、「剛凌強直」（強く厳しく正直）と評される博文が、尊福に偶然出会い、短時間の話し合いで、元老院議官に推挙するはずはない。博文は、出雲大社の教学については一〇年前より、尊福については一五年前より、留意していたのである。その端緒は、明治初期の神祇行政を担った石見国津和野藩との、交流からであった。

当藩は、石高四万三千石、人口六万人の小藩である。領地の大半は山間部にあり、しかも、天領石見銀山、親藩浜田藩に一部分断され、虫食い状態であった。北、東には親藩松江藩と浜田藩が、藩の中央には天領（石見銀山）、西と南には、外様の雄長州毛利藩と広島浅野藩に囲まれ、藩の運営統治に苦労してきた。特に幕末には、江戸の幕府や京都及び周辺他藩の動向にたえず注意を払い、藩の方針を誤らないように、情報活動には手が抜けない、厳しい環境にさらされた藩であった。

この小藩からは、幕末明治にかけて、多くの日本を代表する人物が出ている。啓蒙思想家で万国公法（国際法）を初めて紹介した西周（一八二九～一八九七）、明治の文豪で陸軍軍医総監であった森鴎外（一八六二～一九二二）、紡績業を代表的輸出品にした東洋紡績初代社長山辺丈夫（一八五一～一九二六）らである。

しかし最も大きく光を放ったのは、維新政府の神祇政策を指揮した、国学・復古神道の流れをくむ、津和野神道であった。

維新時、五万石に満たない小藩主亀井玆監（これみ）は、薩長土肥藩主と同格の議定に命じられ、神祇事務局輔や副知事

津和野人の役割

（次官）を務めた。その後任は、部下の福羽美静が明治五年まで、神祇大輔にあった。神祇卿は置かれなかったため、岩倉具視の下、維新初期の神祇行政は、津和野藩主従が采配したのである。そして、思想的な指導は、同藩の大国隆正（一七九二～一八七一）が、神祇事務局権判事に就任し、支えたのである。

大国の神道思想は、宣長を慕い、平田篤胤に入門したあと、独自に展開したものであった。彼の思想は、「神武天皇は中興の君にておはします」と述べ、神武天皇中興紀元論を提唱した。また、攘夷については、小攘夷と大攘夷があり、尊王攘夷は我が国の大道であるとしながらも、日本国は大国であり、採るべき道は小攘夷（当時の攘夷論）を捨てて、大攘夷を採るべきであると主張した。「武力を用いず、正理をもって相手を従わせ、万邦をしてそのところを得しめるものでなければならない」として、幕末の高まった攘夷論を、冷静に諫めたのである。

彼の考えは、慶応三年末の「王政復古の大号令」に明示されている。すなわち、「建武の新政」に変えるのではなく、「諸事神武創業の始に原き」と。

それもそのはず、この文案は、岩倉具視の部下玉松操（一八一〇～一八七二　国学者）の作であったからである。玉松は、大国の門下であった。建武新政の失敗は、公家と武家の間に、一体感が欠如していたためである、との思いから、隆正の神武天皇中興紀元論を、大号令に援用したのである。具視の父具集も隆正に心髄しており、維新当時の状況に柔軟に対応する隆正の思想を、具視にも、よく理解されていたのである。

明治元年「五箇条の御誓文」では、隆正の大攘夷論により、「知識を世界に求め」と記し、あれだけ強く叫ばれた攘夷論は消し飛び、文明開化を優先する欧化政策に、大きな支障もなく、移行することができたのである。

津和野藩の主従が、明治維新の神祇政策に大きな役割を果たしたことは、これらの事象からも、間違いない。山間僻地の小藩に、何故、中央政府の神祇活動ができたのであろうか。

四　国学導入と実践

津和野藩が国学に目覚めたのは、第一一代藩主亀井玆監が、嘉永元年（一八四八）、藩内の八幡宮の神官で、神道思想を説いていた岡熊臣（一七八三～一八五〇）を、藩校である養老館の国学教師に抜擢した時からである。最後の藩主となる玆監（一八二五～一八八五）は、久留米藩有馬頼徳の二男で、第一〇代藩主亀井玆方の養嗣子となり、天保十年（一八三九）亀井家を継いだ。久留米藩には、国学、水戸学に長じた水天宮神官真木和泉（一八一三～一八六四）がおり、討幕運動の理論的指導者として、全国の志士に尊敬されており、尊王攘夷論の盛んな土地柄であった。そのため、玆監は、早くから国学を重視していたのである。

岡は養老館の教師として、神道教学を教え、宣長の国学や篤胤の復古神道を広めた。その中の一人に大国隆正がいた。岡の後任として、大国を招聘した津和野藩では、当時の日本諸藩では、神祇神道政策を実施した唯一の藩であった。国学を本学と改称し、さらに仏教による葬式から、岡の提唱した神葬祭を実行した。この神祇神道を実践した藩政が、維新政府に評価されたのである。

この岡が、本格的に国学を習得したのは、本居宣長に入門し、直接指導を受け、出雲大社に国学を持ち込んだ千家俊信（一七六四～一八三一）からであった。俊信は、第七六代出雲国造俊秀の弟で、宣長に学び、門下最高の高弟と評された人物ある、岡は俊信から、多くの宣長国学について教えを受け、さらに出雲大社で進められていた出雲教学を吸収して、津和野に帰り、指導者になった。出雲を離れてからも、出雲大社との交流は続いたのである。

一方津和野藩主亀井玆監は、長州藩主毛利敬親と相互に行き来し、また手紙による情報交換をしていた。又藩士を、京都（朝廷、公卿、幕府）、大坂、萩、広島、浜田、松江、名古屋、福井などに派遣し、形勢の情報収集に躍起となった。特に京都に派遣された福羽美静は、長州藩士を名乗り、吉田松陰門下（久坂玄瑞、博文、山縣有朋等）と一緒になって、尊王攘夷活動をしていた。親藩に監視され、幕府討伐の盟主長州、外様の大藩広島藩に囲まれた津和野藩は、藩主以下、一体となり、生き残りをかけて、情報の収集と、これからの帰趨の見通しを分析し、決断していたのである。藩主自ら最も真剣に情報分析をしたし、藩士の情報活動も、まさに必死であった。

特に第一次長州征討では、幕府から、先陣役を申し渡されたにもかかわらず、「征討軍でありながら、長州に味方する」という方針を何とか貫徹した。福羽らの「朝廷、幕府諸藩は足並みがそろわず、いずれ、討長軍は瓦解する」との具申によるもので、津和野藩最大の危機を乗り切ったのである。

その後の第二次長州征討では、幕府軍目付が津和野に陣を敷くなかで、長州との友好関係を維持しながら、藩主以下巧みな対応により、城下に戦災を受けずに、この度も難を逃れたのである。数度にわたる長州藩存続の危機に際し、津和野藩のとった行動は、長州藩に好意と親近感を抱かせた。

長州と津和野の関係は、維新後も続いた。博文も叙爵時には、津和野藩主を子爵から伯爵へ、志士として博文と京都で一緒に行動した福羽には、子爵を与えている。

博文は、幕末の長州と同志の行動をとった津和野藩主や福羽、それに大国の神道思想については、熟知していた。その津和野藩の神道思想が、出雲大社千家俊信から学んだことも、知っていた。尊福については、若い時から、神道界で際立つ行動をする彼に、注意を払ってみていた。

だからこそ、博文が、新しい日本の立憲国家発足すなわち憲法制定、国会開設という、間もなく始まる新国家体制に、満を持して、尊福を衆議院の押さえ役である貴族院議員として抜擢したのである。そして、博文の、何事も国家第一とする考えに共鳴する尊福を、同志としたのである。

五　元老院議官就任と管長辞任

明治二一年（一八八八）六月、博文の推挙により、内閣より元老院議官に任ぜられた。任命の翌日、神道大社教管長を辞任し、取り敢えず、副管長の大教上男爵金子有卿（物部神社宮司）と副管長大教上本居豊穎（宣長の継承者）の二人が管長職を代行することにした。管長辞任の理由として、

「憲法欽定国家万世の基礎も将に確立せんとする際にして、神道を拡張し国体を護持せんとする者、もっとも誠忠をつくすときである」と、その心中を明かしている。

しかし彼の政界転出理由の一つは、キリスト教拡大に対する警戒感があったためと思われる。当初は、貧困層等下層階級に布教し、信徒の拡大が図られていたが、二〇年代には、海外留学経験者、外交官、キリスト教系学校卒業生など、着実に上層階級に、浸透していたのである。また世論も、西欧の合理主義による経済発展から、キリスト教に対して、寛大なものに変わりつつあった。

一般大衆に日本古来の神道を広めることで、キリスト教の拡大を防止しようとして、神道大社教を創設し、信者の増加を図った尊福は、次には、日本国を指揮している上流階層への、キリスト教浸透を何としても、防ぎたかったに違いない。そのためには、政界に進出して、皇族、政治家、官僚、資本家などの指導者階層と親交することは、不可欠であった。こうした思いは、欧化政策に積極的な博文とも、一致したものと思われる。

おわりに

尊福の波乱万丈であった宗教活動は、四三歳で大きな転機を向かえた。宣長、篤胤の国学や復古神道を習得し、出雲国造出雲大社宮司として、大国主神の神徳を高めた。天照大神を中心とする国家神道政策に、果敢に挑み、全国の国学者、神道家を収攬し、祭神論争を主導したその熱意と行動力は、宗教界に肩を並ぶ者はいなかった。

維新後、西欧化が進む中で、一時的にしろ、古来の神道思想を広めた尊福は、神道界の向上に大きく貢献した。神道界を代表する尊福は、その神道界から、転身し、今度は、政界に乗り出したのである。

元老院議官に就任した明治二一年（一八八八）は、憲法草案作成が始まり、そして二年後には、ついに大日本帝国憲法が発布され、帝国議会（第一議会）が開院された。元老院を引き継いだ貴族院と、六月に行われた第一回総選挙により当選した三〇〇人で構成された衆議院の二院制であった。衆議院は、当初から予想されていた通り、民党（立憲自由党、立憲改進党）が過半数を占めた。尊福は、有爵議員（伯・子・男）の互選により、貴族院議員となり、今度は、政治の世界で、持ち前の収攬力と行動力により、活動を開始する。

尊福は、志を同じくし、政治家に推挙転身させた、伊藤博文を一貫して支え、貴族院の一派の代表として、博文と共に、立法・行政の面から、議会開設後の日本を担っていくのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記します）

殉教（九）

鍋屋次郎

昨日夕方に出された「明後日船で長崎へ出発」の指令は、明後日京都経由で大阪港へ行く、の誤りであったが、その折、そのときから護送役人は全て京都所司代の役人になることが改めて通知され、護送役人変更について一同の不安は隠せなかった。

そこに今枝出羽守がやってきて右近に

「少し話したいことがあるので、自分の部屋に来るように」

との指示があり、一同何事かと今枝出羽守と右近を見つめた。

今枝出羽守は自室に入り、右近と向かい合って座ると

「高山殿、金沢城内の自分の祐筆の一人鷲見市之進に、城内で何か重大な変化があったら自分に知らせるようにと指示しておいた知らせと、横山家老直筆の知らせが二日前に身どものところに届いた。明日は高山殿とも別れることになるので、全てを高山殿にお知らせする」

と言って、先ず鷲見市之進の書状を開いて

「金沢城内では特に変化はないが、高岡城でご病気療養中の大殿利長様のご病状が心配だ、ということのみ知らせてきた」

と言って右近と目を合わせたが、この点は右近も出立間際に会って、大方の状況は知っているので

「ご心配ですね」

と言うにとどまった。

今枝出羽守は横山長知の手紙を開きながら

「ご存知かと思うが横山家老と身どもは何でも打ち明けて相談する仲になっている。今回の高山殿ご一行の護送役も横山家老から内々頼まれ、買って出たもの」

「そうですか。その辺のご事情を全く存じ上げず、大変失礼しました。有難うございました」

「いや、礼を言われる程のことは何もしていない。それよりも我々が金沢を出た後に横山家老が一人で悩んだことを知らせてきた」

右近は横山家老が何を悩んだのかを早く知りたくて、今枝出羽守の次の言葉を待っていた。

「横山家老はこの度のキリシタン禁教に伴って、前田家に対する江戸幕閣の出方を心配していた。前田家が高山殿を二十六年間、客将とはいえ、実質家老として召抱えていたことと、キリシタン武将の内藤如安も客将として迎えていること。その間高山殿をはじめとするキリシタン活動を容認、この加賀の地がわが国で有数のキリシタン活動拠点になったこと。加えて宇喜多家から戻った豪姫が過去にキリシタンであったことなどは江戸幕閣が十分承知していることでもある。そのうえ、筆頭家老であった横山家の嫡男がキリシタンを容認して、右近の息女を室としたことの、これら全てのことは前田家の容認の下で行われていたことであり、江戸幕閣が横山家老、その嫡男康玄への取り調べを糸口として豪姫、前田家のこれら一連の対応と順次調べてゆくことが懸念される。横山家の前田家内での進退を如何したものか、と大変悩んで、高岡城にご病気で臥せっておられる大殿に悩みを打ち明けに行かれた」

右近はため息をつきながら、次の言葉を待った。

『それで高岡の大殿は、秀吉死亡の直後、家康が「前田家謀反」と全く根拠のない因縁をつけて戦の準備をしていたときに、戦を避け、逆に秀忠の二女を利常の正室に迎えるなど、徳川家との結びつきを強め、前田家百年の安泰の基礎を作ったのは横山家老の多大の功績であり、そのような心配は無用である。加賀生え抜きの貴殿のような家老がいなくなれば前田家は心配だ。こういう時の備えに本田安房守を今筆頭家老に迎えているのであり、キリシタン問題については、前田家が幕閣の指示通り高山一家と内藤一家を京都所司代に連行し、全てのバードレを金沢から追放し、領内の全ての教会を取り壊し、キリシタン活動は皆無になっている、と本田政重から幕閣に報告させるべきだ、と言われて、直後、本田政重を高山城に呼びつけてその旨の指示を出された、ということが書かれている。今の殿の利常様も、本田政重も、高岡の大殿の直の命令であれば従うほかない』

と手紙の内容を右近に聞かせた。

聞き終えた右近は、暫しの沈黙の後

「今枝殿、ご親切にお聞かせいただき有難うございます。金沢を出立するとき、いや、今に至るまで、我々がいなくなった後、加賀でのキリシタン探索はどこまでやるのだろうか、それと、私たちのことで前田家・横山家などにご迷惑がかかっていないだろうか、という不安は消えたことはありませんでした。今、今枝様からお聞きして、おそらく我々の追放で加賀でのキリシタン探索は終わるのではないかと安心いたしました。大殿がそのように動き、本田殿が幕閣に詳らかに報告すれば、これ以上に強力な手段はありません。現当主利常様は徳川家の婿でもありますので」

「そうですね。まだ、完全に収束したわけではないので何

とも言えないが、身どもも同じ思いです。それと、横山家老父子が何のお咎めもなく済むことにより、引き続き前田家のために忠節を尽くされるのではないでしょうか。大殿は、前田家が横山家老を罰することは、前田家にも落ち度があったことを自白することにもなるので、絶対にやってはならない、ときつく仰せられたと聞いています」

「はい。私も是非横山家が引き続き忠節を尽くすことを願っています。そのような思いで康玄殿と娘を離縁させたわけですから」

暫くしたのちに、右近は今枝出羽守に

「今枝殿からこのようなお話を賜りましたことは、今枝殿のご厚意の賜物、終生忘れません。胸につかえていたものが下りたような安心をいただきました。天下の罪人が横山殿に手紙を差し上げることは控えさせていただきますので、今枝殿からくれぐれもよしなにお伝えください」

皆が休んでいる部屋に戻ってから、右近は内藤如安とその息子トマス好次を室外に連れ出し

「高岡の大殿が、本田政重を使って、加賀でのこれ以上のキリシタン探索をしないように江戸幕閣に働きかけを行った」

とだけを伝えると、それを聞いた内藤父子も、表情にホッとした喜びを滲ませていた。

明朝大阪へ向けての出発に先立って、お世話になった前田家の江戸幕閣への対応を聞いて安心した右近は、その夜、自分の生涯を振り返るために、最も大切な自身の信仰を問い直していた。

右近が十二歳の時、沢城で父飛騨守の薦めで洗礼を受け、その後父を手本にして信仰に励み、自分が高槻城主になってから城にバテレンを招き、本格的にキリスト教の教義を学んだ。その後明石城主の時、秀吉から「棄教命令として信仰か大名かの二者択一」を迫られたとき、何の躊躇もなく大名の地位・領地・俸禄等全てを棄てて信仰を選んだ。その結果今日があるが後悔はしていない。

高槻城主の時に父飛騨守とともに、また、キリシタンになった多くの家来、領民とともに歩んだ喜びの信仰生活、葬儀を出すことのできない貧しい農民の棺を父とともに担いだとき、その城主の姿を見た領民信徒達は涙して感謝していた。しかしその後明石への転封、秀吉によるキリシタン禁教、さらに今回の家康の禁教令と厳しい弾圧。結果的にキリシタンに転宗した領民・家臣を助けることができない自分、キリシタンでありながら戦で多くの人を殺した自分などについて、祈りのつど詫びていた。しかし、戦でやむを得ず人を殺したことについては、その戦は全て自分の領土拡張のために仕掛けた一方的な侵略ではなく、全てが戦わなければ滅ぼされる戦いであり、避けることのできな

いものばかりであったことも、言い訳ではないが祈りの中でデウスには語り続けていた。

キリシタン信仰の教義は人間が生きる上にこれ以上の教えはない。たまたまこの国において為政者が仏教・神道などの宗教を信奉しているため、キリシタンは邪教として排斥されている。そのため、前田家、横山家など自分を救ってくれた方々に多大な迷惑をおかけした。その方々にはお詫びしなければならない。自分と家族は、デウスの教えに殉ずる。その道の行く末に光栄な死が待っているのみ。その道を歩き続ける自分たちを、デウスは守り続けてくださり、天国でお互いに笑顔でまみえることができることを信じている。

などを思っているうちに外は白んできた。

朝になり坂本出立のときとなった、右近一家八名・内藤一家十名が全員白装束で出発体制を整えると、京都所司代役人が全員の人体改めを行い、今枝出羽守からの引渡しを受けた後、なんと二十五名の京都所司代の役人が一行を取り囲んだ。右近は「いやに物々しい取り扱いだ」と思ったが、坂本で京都所司代役人から聞いた話の中で、「坂本から大阪までの道中、キリシタン浪人一派の右近略奪計画があるかもしれない」と言われていたことを思い出していた。

歩き出して、後ろを振り返ると今枝出羽守以下が右近たちを見送ってくれている。右近一行は全員今枝出羽守に深々と頭を下げ、無言の別れの挨拶をした。

京都の中心地に入ると、白装束で引かれて行くキリシタンを一目見ようとする群衆が道の両側に大勢いた。仏僧の中にこれ見よがしに

「邪宗教のキリシタン達、それ見たことか。地獄に落ちろ」

と大声を出す者もいた。また、誰かわからないが、右近たち一行に静かに祈るような姿勢で頭を垂れている町人らしい姿もあった。

京都を通過して夕方高槻に着くと、山裾の、今は無住の古い寺が右近たちの宿に割り当てられた。粗末な夕食が終わると、寺の灯りは廊下の奥の行き止まりにある便所を照らす蝋燭の灯りのみで、五月上旬の気候では肌寒く、あるだけの蒲団を敷布団として敷いてその上に横になることとして、右近は全員を集めて、これから長崎に向かう心構えを話して、その後夕べの祈りを主導した。右近は

「明日大阪河口に着けば、海路を長崎に送られるであろう。長崎に着けば異国船に乗せられて、文字通り何が起こるかわからない棄民の集団になるであろう。海難で海に放り出されるか、どこかの全く知らない島に漂着するか、海賊船に襲われるか、無事にマニラかマカオへ着かない限り、誰も助けてくれる人はいない。江戸幕府は我々を棄てたのだ。しかし、デウス様は我々をしっかりとその懐に抱いていて

くださっている。皆には恐怖もあろう。この寺での暗い一夜こそ、デウス様が我々に下さった恩寵の祈りの一夜である。デウス様が我々に与えられるものは、悉くその全てが信徒一人一人の益となるように計らってくださっておられる。(注①) この一夜に十分な祈りを捧げ、どのようなことに対してもデウス様の教えを信じ、パライソでデウス様にまみえることの許される幸せを信じて進みなさい」

と話し、祈りを主導した後部屋の暗い片隅に正座して、今は廃城となっている高槻城の城主当時に思いを馳せていた。

(注①) 新約聖書ローマの信徒への手紙七章二十八節「神を愛する者たち、つまりご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということをわたしたちは知っています」

右近は信長に攻められたとき、長時間の祈りの後一切を神に委ねて、着ているものは紙子一枚、丸腰で信長に会いに行った。陣中は殺気が漲り、命をとられることを覚悟していた。しかし、結果は信長の一言で若干の加増を含めて本領安堵を得た。これもデウスのお計らいであったと感謝している。そして、キリシタン大名として最も嬉しく、誇り得る高槻での復活祭の礼典を思い出した。領民と近郷近在から来た人たちは総員二万人と言われ、その人たちは復活祭行列の中心を歩むヴァリニャーノ師の輝くばかりの姿を見て、歓喜に酔いしれていた。しかし、その後自分が明石六万石に転封となり、やがてキリシタン禁教となった後の右近不在の高槻のキリシタン領民、キリシタン家臣の苦衷を思い、右近自身はその人たちへの贖罪のためにも殉教を考えていた。もしもこの道中で、キリシタンであった住民とすれ違うことがあれば、黙って深々と頭を下げようと思っていた。

既にどれだけ刻が経過したかはわからない。暗い部屋の様子はっきり見わけはつかないが、まだ何人かは眠りについていないようだ。人の動く気配がして、幼い孫の便所にルチアが付いて行った。

長崎に着いたら、キリシタン墓地に眠る父飛騨守（ダリオ）の墓に、家族一同喜んで殉教の道をひたすら歩んでいることを報告しようと考えていた。父ダリオの生前からのたっての希望で、父の亡骸を長崎のキリシタン墓地に葬った後今日まで二十年くらい経つが、その後まだ一度も墓地に行っていない。右近はこの世にいる間にもう一度墓前に額ずきたいと願っていた。たまたま虜囚としての長崎入りであるが、現地の役人に家族一同での墓前礼拝を依頼しようと思い許されることをひたすら祈っていた。

それから茶道の世界のことで、右近が加賀を出るときから大切に持ってきている千利休から頂いた鶴三枚羽根の羽箒がある。炭点前のとき、使用する茶道具を事前に清めるために大切に使っている。利休七哲のうち、蒲生氏郷は既に帰らぬ人となった。蒲生氏郷以外に右近が胸襟を開いて、何くれとなく話し合っていた人物は細川忠興であった。天正十九年（一五九一）二月十四日、秀吉が利休を堺に追放した後秀吉の権勢の前に、利休の周りには全く人影がなくなった。このとき、細川忠興と古田織部が秀吉方の目を意識しながらも、利休を淀の渡しまで見送りに行っていた。渡し船に乗る直前、岸辺に佇む二人の姿に気が付いた利休は、人に気づかれない程度の小さな会釈をし、忠興も織部も軽く会釈をすると同時に水の流れと反対側に歩き出していた。

後日、忠興からこの話を聞いた右近は、その時自分は前田家の客将として、前田家に迷惑がかかるような秀吉の機嫌を損なうことはできない立場にあった。自分が行けなかっただけに、利休の弟子としての細川・古田両名の勇気ある行動に深く感謝した、そして自分がこの国から追放されるとき、右近が師利休から直接戴いたこの利休作の鶴の羽三枚で作られている羽箒をぜひとも細川忠興に、「右近からの別れの印でもあり、利休弟子仲間として、言葉は不要の贈り物として渡したい」と切に思うようになっていた。

薄い布団に横になった右近が眼覚めたのは、外からの明かりと、誰かが起き上がって便所に行く物音であった。辺りを見回すと幼い孫二人以外は全て目覚めている。

孫たちも日の出とともに起こし、右近一家八人と内藤家一家十人が部屋の片隅に集まり、右近の主導で朝の祈りを始めた。短時間でもあったので、京都所司代の役人たちは見てはいたが何も言わなかった。

自分たちが用意した粗末な朝食を済ませると、寺の境内に集まる指示が出た。境内では坂本で一緒になった京都女子修道院の女性たちが右近を見て、離れたところから一斉に頭を下げた。それを見ていた他のキリシタン達も、一斉に頭を下げた。

右近は大阪から長崎までの船旅が幾日かかるかわからないが、恐らく右近の生涯で孤独が味わえる最後のときと思っていた。監視役人は全く面識のない役人達であり、キリシタン同士の話は、囚人間の話でもあって必要最小限にとどめるべきと考えていた。そこで手回りの荷物の中から、利休の羽箒の所在を確認してから、豪姫から頂いた、長崎で印刷されたイグナチオ・デ・ロヨラ著の霊操指導書「スピリツアル修行」を取り出した。長崎到着以後の自分たちに与えられる時間の有無については予測もつかず、自分に

は全く与えられないことも考え、この船中で読むことに決めていた。

長崎送りの虜囚人数は定かではないが、用意され七艘の船に約二百人近いキリシタンが乗船することになり、出張ってきていた長崎奉行所の役人が、所定通りの人体改めを行い、順次乗船させていた。右近たちを坂本から京を経てここまで監視してきた京都所司代の二十五人の役人たちはここで役目を終え、長崎奉行所の役人と入れ替わった。七艘の護送船には長崎奉行所の役人が一艘の船に二人ずつ乗り、その他に、七艘の警護のための二艘の船が前後を守っていた。

船の中でも良い船室は役人等が利用し、虜囚達は船倉にまで押し込まれ、右近達十八人は船倉ではないが甲板のすぐ下の物置部屋のような部屋に入れられた。

やがて船は出航し、虜囚一同は大阪を離れ、一路長崎へと向かった。

船内では何もすることはなく、右近は早速イグナチオ・デ・ロヨラの「スピリツアル修行」を読みだし、疲れるとしばし瞑目しては休息した。

翌日の昼に気が付くと、妻ジュスタと娘ルチアの姿が見えない。帰ってきてからどこへ行っていたのか聞くと「たまたま隣室が京都女子修道院の一行で、中に内藤家の所縁の方もいて修道院の様子なども聞かせていただいてきた。皆さんから機会を見て是非高山様のお話を伺いたいと頼まれてきた」

とのこと。右近は妻や娘が孤独から少しでも解放されていることに安心し、修道院の婦人たちも同じ思いだろうと思っていた。

右近一行や京都女子修道院の女性たちは、朝夕の祈祷会は欠かさなかった。ただ困ったことは、船内の便所が男子用だけで、そのため女性は必ず二人で行って、一人が外に立って、来る人に使用中であることを伝えることとした。

右近は、「スピリツアル修行」に読み疲れると、目を閉じて、このところ聞いた各地でのキリシタン迫害の話を思い出していた。

右近が坂本で一か月近く留め置かれた間、各地から集められたキリシタンから、想像に絶する迫害があったことも直接・間接聞いていた。一緒に坂本から京都を通って高槻に出て大阪で長崎への船に乗り込む人達、とくに女性たちの信仰的強さはどこからきているのだろうか。大久保忠隣が京都に来るまでの京都所司代板倉勝重の取締りは、京の信徒数一万人と言われている中から、イエズス会・フランシスコ会・ドミニコ会・アウグスチノ会などのキリシタン各組織の要になっている信徒を重点的に捉えて組織の弱体化を狙っていたが、江戸幕閣最長老の大久保忠隣が来てからは、その部下によって信徒に対し無差別な過酷な迫害が行われた。男に対しては棒を何本か横に並べてその上に正座させ、膝の上に石板を何枚も乗せるなど過酷を極める拷問が行われ、女性に対しては裸にして俵に入れ、俵の上から二重三重に縄で縛って路上に転がして、下衆な男どもの嘲笑の的にしたり、棄教しなければ女郎に売り飛ばすと脅したりされて、何度かの生命と貞操の危機を乗り越えてきている。本人たちは殉教後、パライソでデウスにまみえる信仰上の大きな希望によりこれらの言語に絶する迫害を乗り越えていることは理解できるが、果たしてそれだけでこのような過酷な迫害に耐えられるであろうか。右近はこのような状況に対し、迫害を受ける者一人一人に対して、神の、人間には見えない、人知での理解を超越した、計り知れない、言葉では言い表せない、苦しみを乗り越える大きな支えと力と愛を戴いていることを感じていた。そして祈り続けていた。

「天におわせられる神よ。聖名を讃えます。今、ここにいる多くの信徒が、我が国の為政者から国外追放の名のもとに棄民としての取り扱いを受け、長崎に送られた後マカオかマニラへの棄民船に乗せられようとしています。その間、現在に至る間、いかなる迫害を受けてもなお耐え続け、デウスへの信仰と希望と愛を持ち続け、日々、天を仰いで祈りつつ、受ける仕置きの最終点に向かって歩き続けています。これから棄民船に乗せられるまでは、今までのような拷問の苦しみではなく、棄民の言葉から考えられる、船の遭難、外国船員からの暴力、どこか言葉も通じない国へ奴隷として売られるなど、想像もつかない恐ろしさを一人一人が感じていることと思います。

神よ、どうかここに囚われている信徒一人一人の上に大いなる御手を差し伸べ、一人一人に信仰による心の静けさを与えて、神の御許に行く日まで豊かにお守りください」

祈り終えた右近は、まだ暫くは瞑目していた。

右近は役人に頼んで、天気の良い日は極めて短時間であったが甲板上で外の空気を吸わせてもらった。船は瀬戸内海を走っていることはわかったが、「今どこだ」ということはわからない。

船の中では宣教師たちの姿は見当たらなかった。七艘の船ごとに別けられているのであろう。右近は京都女子修道院の女性たちとは言葉を交わすこともあったが、役人の目もあり信仰上の教理を話すだけの時間は与えられなかった。

大阪を出て十一日経ったある日、船が大きく揺れだしたので、聞けば瀬戸内海から九州北端の外海へ出て、博多から長崎へと走っているとのこと。揺れが大きいので、いい空気を吸うために甲板に出ることは禁ぜられた。

大阪を出て十三日目に長崎についた。直後、長崎奉行所役人からの人体改めがあり、右近一行は奉行所からほど近い古い小さな民家を宛がわれた。粗末な食材も与えられ、勝手に作って食べろ、と言わんばかりの扱いである。民家は右近一行十八人がやっと一人一人が横になることができる程度の広さしかなく、その狭さは船旅の疲れをほぐすどころではなかった。

狭くて家の中にはじっとしていられないので、翌朝、恐る恐る外に出てみたが、誰も咎める者はなく、見張りの役人もいない。地元の人たちは自由に歩いており、午後には右近たちと同時に長崎に送られた宣教師たちが談笑しながら歩いている姿が見受けられた。

好奇心旺盛なトマス好次は早速街中に出かけて行った。夕刻帰ってくるまでは一同は心配していたが、帰ってくると

「バードレ方はこの少し先のセミナリヨと、教会の裏側にある宣教師館にいます。その教会の名は読めなかったが、右近様、明日ご一緒に行ってみましょう。私も見たことのあるバードレもいましたので」

と報告があって、右近は長崎の教会の人たちから、長崎奉行所のキリシタン虜囚取り扱いの考え方を確認したいと思った。

そこへ突然、昨日人体改めの時に見た役人一人が家の中に入ってきた。一同何事かと思って見つめると、全員十八人がいることだけを確かめるとそのまま出て行った。

全員で食前に感謝の祈りをし、就寝前に今日一日の感謝の祈りを終えて、寝返りを打つのも窮屈な状態で横になった。

右近は翌朝、トマス好次に連れられてバードレが宿泊している教会に行った。教会名はサン・パウロ教会と書かれ、中を覗いていると、金沢教会司祭であったクレメンテ師が奥から出てきて、右近を見つけると「高山様！」と叫ぶと同時に抱きついてきた。クレメンテ師は右近よりも二日前に金沢を出て一旦京に行ったが、半月ほど前に長崎に送られてきていた。長崎に来てみると、日常生活では全く迫害はなく、教会での集会も通常通り行われている。長崎奉行所の役人数が少なく、反面キリシタンの人数が多くて、とても手が回らないのが現状であることと、長崎は前面が海で、後方と左右は山のため、海と左右の山道を監視してい

れば、長崎からの逃亡者は抑えられるため、宣教師や日本人キリシタン虜囚に対する取り締まりは、長崎という地形がもたらす大きな折の中に入れているので、逃亡だけを注意している様子だと教えてくれた。

右近はクレメンテ師に、亡き父飛騨守の墓前で記念会を行うのにはどうしたらよいか明日相談に来るので、何かと教えてほしいと依頼して、外出初日でもあり、役人の目を気にして早々に引き揚げた。

翌日朝、右近の外出を待つように、トマス好次が既に玄関先で待っていた。

右近と好次がサン・パウロ教会でクレメンテ師と挨拶を終えたところに

「高山様、お久しぶりです」

と、両手を前に差し伸べて日本人離れした大仰な挨拶をしながら一人の初老の男が部屋に入ってきた。怪訝な面持ちで見つめる右近に

「高山様、もう二十年近くなりますか。お父上ダリオ様の納骨儀式を長崎のキリシタン墓地で盛大に行われたのは。確かお父上様がどうしても長崎のキリシタン墓地で御眠りになりたいとご希望だったそうで。その時お手伝いさせていただいた村山等安です」

「アッ！　失礼しました。村山様、その折は大変お世話になり有難うございました」

これを見ていたクレメンテ師が

「高山様、村山等安様は今長崎の代官をおやりになっています。いわば、奉行所とは違い庶民の代表であり、長崎奉行所に庶民の声を伝えているお方です」

と先ず等安の現状を右近に紹介して

「村山様はキリシタンであり、ご子息はフランシスコ会で司祭も務めています。昨日、高山様からお父上の墓前記念会をおやりになりたいとのお話を聞いて村山等安様にお話ししたところ、高山様親子は日本のキリシタンの大旦那で、我々宣教師も、長崎の一般キリシタンも、時代や住むところが違うとはいえ、この国でのキリシタンの歩みの上でどれだけお世話になってきたか計り知れません。そこに、ローマ教皇シスト五世から直接感状を賜ったほどの、世界全信徒の中でも最も尊敬すべき高山右近様が長崎においでになって、お父上ダリオ様の墓前記念会をおやりになるのであれば、長崎在住宣教師や長崎キリシタン挙げて記念会に参加し、お世話になったことを感謝し、ご協力すべきだ、と村山等安様が仰って、今日、ここにおいでいただいた次第です」

右近は立ち上がって二人に深々と頭を下げ

「有難うございます。まさか、今日、このような有難いお言葉をお聞きしようとは全く思っておりませんでした。なんとお礼を申し上げてよいやら言葉も見つかりません。し

かし、現在私は国外追放に処せられた天下の大罪人。お言葉のようなことをしていただくわけには行きません。幕閣や長崎奉行所から皆様にどのようなお咎めがあるか心配です。幸い、家族を連れておりますので、ごく内輪で行おうと思っています」

これに対して村山等安は

「高山様、ここ長崎は江戸や京都と違います。京都所司代で作成した信徒名簿に従って国外追放処分が下ったキリシタンを、季節風を待って出航する船に乗せることが終わらないと、長崎奉行所での長崎在住キリシタン取締りにまでは手が回りません。この長崎には二万人くらいのキリシタンがいます。一般キリシタン摘発の前に、バードレを全て送還する必要があります。それは恐らく今年の十月くらいまでは掛かるでしょう。ですから今は高山様の墓前記念会の開催日が決まり次第、私のほうから届け出るだけで済みます。これによってキリシタン摘発が激しくなることはありません。また高山様にお咎めがあることはありません」

の説明に、クレメンテ師は

「高山様、全てを村山等安様にお任せしましょう。高山様所属のイエズス会にも迷惑がかかることはありません。奉行所への届出その他は村山様にお任せしましょう」

その後、加賀を出てからの雪道行軍の厳しさなどをクレメンテ師と話し合ったのち、村山等安が教会の行事日程にぶつからない日程として十日ほど先の六月三日の巳の刻から墓前記念会を行うことを提案し、右近はそれに従うこととした。

二日後にクレメンテ師が右近のところにやってきて、墓前記念会には出席参加希望者が数えきれないくらいあり、高山様のご意向、お立場を考えて絞りに絞った結果、墓前記念会当日は墓地の手前の広場で、バードレとしてクレメンテ師他イエズス会の副管区長など五名、各教派代表四名、長崎在住イエズス会会員信徒十名、右近たちと一緒の船で長崎に来た京都修道院女性信徒五名などと、右近家族八名、内藤家家族十名で合計四十名を超す人たちが集まることと、当日の式次第として、クレメンテ師の開会祈祷に引き続き、イエズス会副管区長によるダリオのキリシタン布教への貢献談話、参加者による墓前献花、右近のお礼挨拶などの記念会式次第の連絡があった。

その翌日、奉行所の役人が来て、右近一行十八人のイエズス会日本本部であるトドス・オス・サントス教会付属の宣教師館への移転を許可するので、今日中に移転するように言ってきた。何も聞いていない右近はすぐクレメンテ師を訪ね聞いてみると

「村山等安様が、右近一行が狭いところに押し込められていると聞いて、イエズス会の了解を得たのちに奉行所に掛け合った結果だ」

ということが分かり、右近一行は感謝して引き移った。

六月三日の墓前記念会の日が近づいたある日、トマス好次が心配そうな面持ちで右近のところに来て

「一昨日くらいから役人らしき人物が、この宣教師館を眺めたり、覗いたり、人の出入りの状況を観察したりしている。私が家の中に入るときは別段咎められませんでしたが」

と言ってきた。

（続く）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　ま　ん　じ

明治時代の著述者

渋江保の一生（その三）

山本勉

第二期　弘前時代（青森県弘前市）

一八六八年（慶応四年）四月～一八七一年（明治四年）三月

渋江保の弘前時代について書き留めた文献は今のところ殆ど見当たらない。森鷗外の『渋江抽斎』の八十二と八十七に保の弘前時代のことが記されている。八十二では、「成善は近習小姓の職があるので、毎日登城することになった。宿直は二カ月に三度位であった。成善は経史を兼松石居に学んだ。江戸で海保竹逕の塾を辞して、弘前で石居の門を敲いたのである。石居は当時既に蟄居を免されていた。医学は江戸で多紀安琢の教を受けた後、弘前では別に人に師事せずにいた。」(一)とある。また、山路愛山主筆の『独立評論』、第三巻第七号の澁江保氏談話「維新前後」によれば、「國へ行って聊か意外に感じたのは、藩士の間に割合に学問の盛んなことであった。江戸詰の者は概して学問がきらひで四書五経の素読をした者は先ずよく出来る方、それさへも出来ないのが多かったのであるが、國へ行って見ると学校が盛んで藩士もよく勉強し、巧みに詩を作り文を綴る者が多かった。しかし、女は皆な無学であった。婦人に手紙を書かせると色事をして可けないといふので、無筆を可しとしてあったのである。前に話した兼松三郎といふ人はこ頃まだ蟄居中で、私の行った時には座敷の雨戸を一尺程あけて神妙に謹慎をしてゐた。私は國へいってから此人について学問をしたが、其れから一年程で漸く蟄居が許りたのである。其中津軽藩が弘前藩となり、藩主が知事となって、藩の大学の設立せられるに及び、兼松は其の学長になり、私も其の縁固から大学の助教になった。其んな風に親しく学事に携はると共に、江戸に比して國の者が学問の出来るのに益々驚いたのであった。私の家へも四五十人位教授を乞ひに来るものがあった。」(二)とある。弘前においては学問が盛んで、寧ろ江戸詰めの者よりも熱心で学問が出来ることを保が驚いていることが伺える。

『渋江抽斎』の八十七では、「抽斎歿後の第十二年は明治三年である。六月十八日に弘前藩士の秩禄は大削減を加えられ、更に医者の降等が令せられた。禄高は十五俵より十九俵までを十五俵に、二十俵より二十九俵までを二十俵に、三十俵より四十九俵までを三十俵に、五十俵より六十九俵までを四十俵に、七十俵より九十九俵までを六十俵に、百俵より二百四十九俵までを八十俵に、二百五十俵より四百九十九俵までを百俵に、五百俵より七百九十九俵までを百五十俵に、八百俵以上を二百俵に減ぜられたのである。そして従来石高を以て給せられていたものは、そのまま俵と看做して同一の削減を行われた。そして士分を上士、中士、下士に班って、各班に大少を置いた。二十俵を少下士、三十俵を大下士、四十俵を少中士、八十俵を大中士、百五十俵を少上士、二百俵を大上士とするというのである。渋江氏は原禄三百石であるから、中の上に位するはずで、小禄の家に比ぶれば、受くる所の損失が頗る大きい。それでも渋江氏はこれを得て満足するつもりでいた。然るに医者の降等の令が出て、それが渋江氏に適用せられることになった。本成善は医者の子として近習小姓に任ぜられているには違ない。しかしいまだかつて医として仕えたことはない。しかのみならず令の出づるに先だって、十四歳を以て藩学の助教にせられ、生徒に経書を授けている。これは師たる兼松石居が巳に屏居を免されて藩の督学を拝したので、その門人もまた挙用せられたのである。かつ先例を按ずるに、歯科医佐藤春益の子は、単に幼くして家督したために、平士にせられている。いわんや成善は分明に儒職にさえ就いているのである。成善がこの令を己に適用せられようと思わなかったのも無理はない。しかし成善は念のために大参事西館孤清、少参事兼大隊長加藤武彦の二人を見て意見を叩いた。二人皆成善は医として視るべきものでないといった。武彦は前の側用人兼用人清兵衛の子である。何ぞ料らん、成善は医と看做されて降等に逢い、三十俵の禄を受くることとなり、あまつさえ士籍の外にありなどとさえいわれたのである。成善は抗告を試みたが、何の功をも奏せなかった。」(三)とある。このことから渋江家の原禄三百石を百俵に削減され、しかも保は医者として見なされたために、医者の降等に遭い更に三十俵に削減されたのである。この俸禄削減のことが山路愛山再興『独立評論』第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」に次のようにある。「私は明治元年に江戸を引払って津軽に帰ったが、当時父は既に歿し、且つ維新のどさくさで知行の歩引が甚しく、明治三年には実収僅かに三十俵になった。当時米の値段が一俵僅に今の金で三十一銭五厘位であったが、其れを三十俵位貰ふて居たのでは何とも仕方がない。所蔵の家具、書籍類皆んな売り払って僅に生計の資に当てたが、其な事をして居ては段々

に困る一方なので、遂に之が恢復を計るため藩中の異論を排して東京に出て英学を研究することになった。此頃英学はまだ夷狄の学問として排斥せられてゐた時代で、殊に幼時から漢学で頭を造った私などはきつい嫌ひであったのだが、将来身を立てるためには是非其れを学ぶ必要があると思って、老母一人を國に残して東京に出て来たのである。」(四)また、山路愛山『独立評論』再興第九号、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」には、「先々月の『明治初年の学風』の中にお話しした通り、私は明治元年十一二歳頃一旦江戸から郷里の津軽へ帰ったが、其の頃他から借りて村田某といふ人の書いた『西洋見聞録』といふ本を読んだ。其れは今から見れば詰まらぬものであるけれども、汽車だの汽船だの地下鉄道だのといふ、あらゆる文明の機関の話が書かれてあって、当時の私どもには余程興味ある読み物であった。処が或る人が其んな本よりは福澤諭吉の『西洋事情』の方が面白いから其れを読んで見たまへと言ふたので、種々の手数をかけて態々江戸から其本を取寄せて読んだ。福澤先生の名は既に慶応二三年の頃から聞いて居ったのだが、其著書を読むのは之が最初だったのである。読んで見ると内容は、『西洋見聞録』と多く変らない。ただ其中でひどく感心したのは西洋の国会の組織のことを詳しく書いてあることだった。之より前に私は海保漁村先生の塾に居て、論語の『民は之をして依らしむ可し知らしむ可からず』といふ文句の講義にこれは『知らせてはならぬ』という意ではない、人民が幼稚であるから知らせることが出来ないという意であると聞いて(是れは太田錦城以来其学派の説であった)、其れに比較して今国会の組織の話を読み、非常に嬉しく思ったのであった。そして福澤先生の処へ行って修業をしたいものだと思って居た。」(五)とある。

山路愛山の『独立評論』に掲載した澁江保氏談話「維新前後」と「福澤先生と昔の慶應義塾」について、稲田雅洋は、『境　創刊号』で次のように述べている。「ここからは、削禄と降級による生活の不安が上京の大きな理由であったことを知りうるが、「きつい嫌いであった」英学によって身を立てようとしたのはなぜなのかよくわからない。むしろ、「夷狄の学問として排斥せられ」、自分でも「きつい嫌いであった」はずの英学を、「将来身を立てるために是非其れを学ぶ必要がある」と決心したということは、読む者に少なからざる違和感を感じさせる。そこには、他に、将来の立身出世のためという功利的な発想以上の、より内面からの積極的な理由があったはずである。」、「恐らく事実はここに書かれているようなことであったのであり、弘前という中央から遠く離れた地にあって、『西洋見聞録』や『西洋事情』を読み、やがて来るべき日本の将来を想い、そうした新しい世の

中で身を立てるには英学をしっかりと身につける外はないと感じたに違いない。そしてそういう中で、降等や削禄という事態に直面したとき、その想いは上京の決心となり、本格的な英学修行を志させたといえよう。」(六)稲田雅洋は上京の理由を「英学修行」と指摘しているが正にその通りであろう。ここでもう一つ注目したい点は、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」において、「今国会の組織の話を読み、非常に嬉しく思ったのであった。」と述懐している点である。『西洋事情』は、福沢諭吉が二度の外遊による見聞をもとに欧米の歴史・政治・社会制度等の海外事情を紹介したもので、幕末から明治初期に多くの人に読まれた書籍で啓蒙的役割を果たしたと言われている。渋江保は、澁江保氏談話「福澤先生と昔の慶應義塾」において、国会についてのみ触れているだけだが、当時の日本では想像し得なかった西洋の近代的な制度や技術及び文化を知るに及んで、渋江の心に欧米型の民主的思想がこの時に既に芽生えたのではないかと思われる。それ故、渋江保の代表作である『万国戦史』は、「戦闘のみを記述した戦記ではなく、欧米型に開明した民主的思想の渋江の戦記スタイルが投影された国際関係論や外交史、伝記までも含んだ戦記」(七)となったと思われる。『万国戦史』を始めとする渋江保の著作については何れ触れたい。

渋江はこうして一八七一年(明治四年)四月、母五百を弘前に残して単身上京した。森鴎外の『渋江抽斎』の九十に、母を弘前に遺した理由が記されている。「抽斎歿後の第十三年は明治四年である。成善は母を弘前に遺して、単身東京に往くことに決心した。その東京に往かうとするのは、一には降等に遭って不平に堪えなかったからである。二には減禄の後は旧に依って生計を立てて行くことが出来ぬからである。その母を弘前に遺すのは、脱藩の疑を避けむためである。」(八)ただ、保が上京した理由については、ここに記された他に、やはり、「英学修行」が主たる目的と言えるのではないだろうか。

注記

(一)森鴎外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二三一～二三二頁

(二)山路愛山『独立評論』第三巻第七号、澁江保氏談話「維新前後」(独立評論社　一九一五年七月一日)三一頁

(三)森鴎外『渋江抽斎』(中公文庫　一九八八年十一月十日)二四三～二四五頁

(四)山路愛山『独立評論』再興第七号、澁江保氏談話「明治初年の学風」(独立評論社　一九一三年八月一日)三九頁

(五)山路愛山『独立評論』再興第九号の澁江保氏談話

「福澤先生と昔の慶應義塾」（独立評論社　一九一三年十月一日）三三頁

（六）稲田雅洋『境　創刊号』（佐々木啓之　一九八三年九月一日）一一頁・十二頁

（七）山本勉『明治時代の著述者　渋江保の著述活動出版物「万国戦史」を中心に』（佛教大学大学院紀要文学研究科篇第四三号　二〇一五年三月一日）一〇二頁

（八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五〇頁

密室銀行（二十一）

匠　克仁

〈前号までのあらすじ〉

東西銀行赤坂支店の金庫室で支店長が殺害された。（金庫室の格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、支店の通用口が数字錠とシリンダー錠で施錠されていた。三つのシリンダー錠の鍵は死体の手に握られていた）金庫室には竹森も閉じ込められていた。

〈今号からのあらすじ〉

今号　犯人が逮捕され、密室トリックが解かれる。

次号　全ての真相が明らかになる。（最終回）

［あらすじになっていないか。

永遠に終わりそうになかったが、急展開で終息する。

秘密を明かすと、五年間二十回も連載していて、今まで密室トリックが思いつかなかったのである。そりゃあ結末までに足踏みしてしまう。

どうやって犯人は密室から脱出したのだろうか、不思議だなあ～～とぼくも思っていた。

実は、最初に考案した密室トリックを連載途中で捨ててしまったのである。新しく生み出しても、以前の記述と矛盾や不整合が生じ、成立しない。

二転三転、四分五裂、四苦八苦、七転八倒、七転八起（しってんはっき）、七難八苦、七難九厄で書いてきた。

『七転八倒　つまづいたりころんだりするほうが自然なんだ　にんげんだもの』（相田みつを）

この文を書いている今朝の夢の中でトリックを思いついた。できたてホカホカのトリックである。忘れない内に結末まで一気に書き進むことにする。

五年前、いや、前号の記述と矛盾しているとか、細かいことは気にしないで読みましょう。

『あやまちだってあるよおれだもの』（相田みつを）

前号では未だ思いついていないトリックなのだから、

伏線の貼りようも、布石の置きようもない。
世紀のマジックでも難しそうな手品でも難解な数学の問題でも種明かしすると、意外と単純なものである。
華麗でなくても、泥くさいトリックでいいのである。
『どじょうがさ金魚のまねすることねんだよな』
このように相田みつをを引用した野田元首相は、チャーチルを引用して次のように言っている。
『ねば～ねば～ねば～ねば～納豆、…じゃない…ギブアップである』
人生あきらめなければ、何とかなる、ことを証明した。
連載が伸びていた原因は、トリックだけでない。それよりも、ぼく個人の人格のためである。
ぼくがこの小説の一回目の連載を始めたとき、うつ病であった。抗うつ薬をボリボリ食べながら書いていた。
脳みそが飛び出た死体は、飛び降り自殺した自分の死体を想像して描写した。小説を書いていると、登場人物になりきってしまう。
もっとも作者のモデルは死体でなく、冤罪で疑われる主人公である。
無実の罪で裁かれるという冤罪の夢をぼくは小一からよく見ていた。この小説を書くきっかけは、金庫室に死体と一緒に閉じ込められる夢を見たことである。
夢で始まって、夢で終わる小説なのである。
『透明な時間』は、犯人を暗示する意味だが、うつ病のときの感覚である。
うつ病が完全に治ってしまうと、人格も変わった。
人格だけでなく、外見も変わった。体の色も黒々としてテカテカ色艶よい。丸々としているが、動きが非常に俊敏になっている。手足がスリムになった上に、全部で六本になった。
ぼくはもともと多重人格者の傾向がある。しかし、ここまでメインの人格が変わると、過去に自分が何でこんな文章を書いたか、理解不可能になる。
赤の他人の文章の続きを書いている感覚なのである。まんじの過去号を読み返したら、今の自分なら絶対に書かないような言葉・表現が多く出ている。人格によって算用数字（138）か漢数字（一三八）かも違う。
本音は、最後にドラマチックな展開にしたかった。例えば、断崖絶壁で真犯人が人質を取った状態でトリックを説明するとか、犯人と警察との銃撃戦の中で真相が明らかにされるとか…
そうすると永遠に終わらない。犯人が自ら密室トリックの説明するような単純なストーリー展開に、あえてわざとした。けっして手間を省いたのでない。
連載中、何度もメインの人格が変わった。
たまたま、今回のぼくの人格は反復強迫の傾向がある。重複表現をする、うっとおしい性格である。同じ語を130個くらい使ってしまった。」

十六

「沢木雅子、熊本猛殺人容疑で逮捕する」
及川刑事が雅子に告げた。
八月の事件からちょうど二ヶ月が経過した。その日の午後五時過ぎ、及川・和加刑事が東西銀行赤坂支店に現れた。二人は応接室に雅子を呼びだしたのであった。
この日、竹森は雅子と一緒に帰る予定であった。早目に仕事を切り上げた竹森が、雅子を待っていた。
事件がきっかけで二人の関係は急速に深まり、婚約した。結婚式の日取りなどを二人で話す予定であった。
先に帰るように雅子が言ったが、竹森は嫌な予感がした。雅子の後から応接室に入った。
刑事たちは、竹森を応接室から追い出そうとした。
竹森は彼女の婚約者で事件の被害者だからと無理に一緒に居たのである。
及川刑事は用紙を広げると、雅子の顔の前に差し出して、逮捕を告げたのであった。その用紙は逮捕状のようであった。
「逮捕って、証拠はありますか」
雅子は少し肩をすくめて質問した。
「証拠はある。DNA鑑定と指紋だ。死体の手首と首筋に、あなたのDNAが検出された。また、死体の腕時計にあなたの指紋が残っていた」
和加刑事が説明した。及川刑事は逮捕を告げただけで、その後は全く口を挟まなかった。
「私は第一発見者よ。指紋が残っていて、当然じゃないの。支店長を見つけたときに助かるか脈を取ったのよ」
雅子は刑事を前にしても堂々としていた。
「たしかに支店長が生きているか確認しようとして、指紋が残ったのだろう。しかし、あなたは発見時には、竹森氏を介抱していて、死体には触っていない。その事実は他の発見者に確認している」
「後で他の人に気付かれずに触ったのよ」
副支店長は失神していたし、鹿田係長も草津も金庫室から離れていた。
「指紋については、防犯ビデオのデッキの引き抜かれたコードから検出された。その時にコードに引っかかったのだろうが、皮膚片がついていて、あなたのDNAと一致した」
「私は総務も担当していたから、防犯ビデオもチェックして触るわ」
雅子の言い分には正当性が有ると、竹森は思った。
「指紋はダイアル錠からも検出された。あなたは立場上、ダイアル錠を触ることはない。また通用口の数字錠のボタンの全てから指紋が検出された。暗証番号で使う数字以外、正確には番号変更をするときに使うボタンにも付いていた」
ダイアル錠も数字錠も事件後に取り替えられていた。

事件当時の物は警察に押収されていた。
「ダイアル錠は、発見時に触ったわ。数字錠は総務の私が暗証番号を変更するので、残っていて当然だわ」
数字錠は、暗証番号を変更するための暗証番号があり、副支店長・総務担当だけが知っていた。
＃（シャープ）キーを長押しして、変更用暗証番号を入力すると、暗証番号変更モードになる。その状態で、旧暗証番号を一回と新暗証番号を二回入力すると、暗証番号は変更になる。
特に変更の回数の制限はない。変更履歴の記録は残っていない。
「金庫室にあった鍵の三本とも、あなたの指紋が付いていた。死体が握っていて、その後、竹森氏が使っていたので、一部は消えていたが。格子扉の鍵は普段から使うだろうが、あなたの立場では耐火扉と通用口の鍵を触ることはないだろう」
「それも発見の時に触ったのかもしれないわ」
発見当時は、格子扉の鍵穴に鍵が刺さっていて、二本がぶら下がっている状態であった。発見者である雅子が三本の鍵に触っても不自然でない。指紋は事件の前日までに付いた可能性もある。
「あなたの指紋の上から、竹森氏の指紋がおおうように付いていた」
竹森が鍵をもっと触っていれば、雅子の指紋は消えていたかもしれないと竹森は思った。
「防犯カメラは銀行だけでなく、このビル自体に設置されている。あなたが支店に入ったのは、草津氏が到着する直前と証言しているが、実際は、その十五分以上も前に到着している。被害者が入ってから草津氏が来るまでに、あなたの他に誰もビルに出入りした者はいない」
和加刑事の発言に対して、雅子は反論しなかった。
殺害現場は犯行が不可能な状態であった。特に発見者以外の第三者にとっては、犯行が不可能である。
そう推理すると、必然的に発見者が容疑者になる。鳥居副支店長・鹿田係長・草津・雅子の四名に限定される。
犯行時刻には雅子以外の三名は別の場所にいたことが確認されている。
例えば、草津の場合、コンビニに寄っていたので、犯行時刻には防犯カメラの映像に映っていた。鹿田係長も店こそ違ったが、犯行時刻に現場に行くことが困難な時間帯に防犯カメラに映っていた。鳥居副支店長も同様に証明された。
雅子だけはアリバイは無かった。コンビニの防犯カメラには事件の三十分前に映っていた。そのコンビニから支店までは三分もあれば、到着する。
もちろん、赤坂支店の別の銀行員のアリバイも全て調べられている。女性や新人、転勤した行員まで確認されていた。

赤坂支店の行員は、平均通勤時間が一時間半というだけあって、赤坂から遠くに住んでいる人が多い。そのため、自宅近くに居た人は、赤坂までの往復が不可能なので、アリバイが成立していた。
結果的にアリバイが無いのは、赤坂支店の行員の中で雅子だけであった。犯行現場から考えても、東西銀行赤坂支店の関係者以外は有りえない。
そのようなアリバイの情報は竹森も知っていたが、雅子が犯人でないと信じていた。
アリバイもＤＮＡも指紋も捜査の最初の段階で分かっていたはずであった。今のタイミングの逮捕は警察の焦燥を竹森は感じた。
日本で初めての密室殺人事件として、かなり大きく報道された。既に二ヶ月も経過して、犯人が捕まっていないので、警察への世間からの批判も大きい。
警視庁の威信にかけても犯人を逮捕する、という警察幹部からのコメントが出て、そのコメントが非難の対象になっている。
しかし、この逮捕はかなり強行で無理があると竹森は感じた。
「待ってください。そもそも踏み台を凶器に使った犯行は、女性に不可能です。彼女が支店長を殺す動機もないし、僕を傷つける訳がありません」
竹森は雅子と刑事の間に割って入った。刑事たちは竹森を相手にしなかった。
竹森は何が起きているのか全く理解できなかった。雅子は、竹森の想像する犯人像から最も遠い。竹森は自分が冤罪で逮捕される方がよいと思った。
「踏み台に私の指紋がついていたの」
雅子の問いに刑事たちは答えなかった。無言の態度は凶器に指紋が無いことを示していた。
「でしょうね。踏み台に指紋がついているわけないわ」
「物品庫の金属バットから被害者の血痕とあなたの指紋も検出されている。踏み台を使うのは不可能でも、金属バットなら女性でも可能だ」
警察でも踏み台の凶器は偽装で、金属バットと推理しているようであった。金属バットに死体の血痕と雅子の指紋があるのは、雅子にとってかなり不利な証拠になる。
「それなら、合理的な説明ができるわ。死体発見時に草津さんが金属バットを持ってきたの。犯人が潜んでいたらやっつけるつもりみたい。彼は金属バットで死体を触ったわ。そのバットを護身用にと彼が私に渡したの」
バットの指紋については説明ができたが、刑事は納得していないようだった。
「それで密室の謎は解決したの」
雅子は開き直ったように刑事に質問した。
「格子扉はもともと施錠されていなかった。それに格子扉は隙間があるから、犯人が鍵を室内に入れることもで

きる」
竹森の証言や死体が鍵を握っていた事実は無視するようであった。
「金庫室は耐火扉もあるわ」
「耐火扉はダイアル錠だけが施錠されていた。耐火扉はダイアル錠だけが施錠していれば、シリンダー錠が施錠されているか分からない。鳥居副支店長も鍵を回すときに確認していないと言っている」
副支店長はシリンダー錠が施錠していたら、自分が不利になるので証言を撤回したと竹森は思った。
「支店の通用口はどうやったの」
「通用口も耐火扉と同じだ。数字錠の暗証番号を変えて、シリンダー錠が施錠していると見せかけたのだ。草津氏は暗証番号を押しても扉が動かないので、シリンダー錠が施錠していると勘違いした。その後、鹿田係長が来るまでに、あなたは暗証番号を元に戻した。係長も鍵をどちらに回したか覚えていない」
二ヶ月も経っていれば、鹿田係長も鍵を回した方向を忘れるだろうと竹森は思った。
和加刑事の説明に竹森は説得力を感じなかった。
警察としては、これで密室を解いたつもりなのだろうが、裁判で立証するのはかなり無理がある。
密室トリックを解明したのでなく、現場は密室でなかったと言っているに過ぎない。
このまま密室トリックが解明されなければ、犯行を証明できない。仮に逮捕されても有罪にならないのでないか、と竹森は考えた。
犯人がわざわざ犯行現場を密室にした理由を竹森は考えていた。最初は竹森を犯人におとしいれるため、と考えていたが、密室内にいる竹森が犯行不可能になり、矛盾する。
もし、犯人は逮捕されても無罪になるように保険として現場を密室にした。そのように竹森は考えていた。
竹森は法学部の出身である。事件に遭ってから刑事訴訟法を勉強し直した。
逮捕状の場合は、『被疑事実の要旨』があれば、密室トリックが解明できなくても出せるかもしれない。しかし裁判に持ち込むための、起訴状を出すのは難しい。
刑事訴訟法二五六条三項では起訴状に書くべき事項として定められている。
『…できる限り日時、場所及び方法を以て罪となるべき事実を特定して…』
方法とあるのは、密室を作った方法も含まれるだろう。
犯人が特定できても犯行方法を具体的に特定できなければ、逮捕できても起訴できない。密室殺人の場合は、トリックが解けないと起訴できない。そのように竹森は考えていた。
「ビルの防犯カメラには、あなたの鞄も撮影されている。

支店から出る時の鞄の膨らみから、盗まれたデッキと同じ形状のものが確認されている。鞄の中に何を入れたのか」
しばらく沈黙が続いていたが、雅子が諦めたというよりも悟ったような表情を見せた。
「防犯カメラのデッキが自宅に有るの。お渡しするわ。警察へ連行する途中で私の家に寄って欲しいの。押収する前に映像を見て」
防犯カメラのデッキを渡すというのは、自供するのと同じ、犯行の証拠を自ら提出するものであった。
「密室のトリックを教えるわ」
雅子の言葉に刑事たちは戸惑った様子であった。犯行を認めて、密室トリックを教えることに竹森も困惑している。
このまま黙っていれば有罪にならない、起訴すらならないだろうと竹森は考えていたが、ここで自白すれば罪に問われる。竹森は雅子が犯人であっても刑罰を受けないようにと願っていた。
「たしかに一時的にシリンダー錠が施錠しているように錯覚させたわ。でも、シリンダー錠は耐火扉も通用口もちゃんと施錠した。実際に、どのようにして密室を作ったか、今から説明するわ」
雅子が応接室から出ると、営業室へ向かった。戸惑いながら、刑事と竹森がその後に続いた。営業室には十名ほどの行員が残っていた。
男性二人が刑事であることは、アリバイの確認で他の行員も知っている。これから何が起きるのかという様子で見ていた。
雅子は預金主任に断わって、預金係キャビネットから格子扉のシリンダーの鍵を取り出した。
格子扉の鍵は、主鍵を半谷融資課長が持っていて、副鍵を預金主任が管理している。
シリンダー錠を交換したので、錠に差し込む鍵も全て交換している。事件当時の死体が握っていた格子扉の鍵は、支店長が預金主任から借りたものであった。
雅子は刑事を案内して、地下の金庫室に降りて行った。竹森も二人の後を付いて行った。
「竹森君と支店長が金庫室に行ったのは、予定外よね」
雅子が竹森に質問した。
「前の日にあわてて持井建設の稟議書を金庫室に入れてしまった。それで、支店長に頼んで、金庫室に行った。もともと稟議書を融資係のキャビネットに片づけていれば、地下にも行かなかった」
竹森も不思議に感じていた。あの日は金庫室に行くことが偶然であり、犯人が予測することも不可能であった。
四人が金庫室の前に着いた。いつもの通り金庫室は格子扉のみ施錠されている状態である。
耐火扉は担当者が朝に開錠してから、帰る前に施錠す

る。その間、耐火扉は開放して壁側にストッパーで固定する。

金庫室に入る度に格子扉の鍵を預金主任の管理するキャビネットから出して、出入りするルールである。

融資係は半谷融資課長の管理する鍵も使用している。

「どのように支店長を殺害したかは、防犯ビデオの映像で説明するわ。鮮明に映っているから。残念ながら、金属バットは使っていないわ」

雅子は格子扉に鍵を差して回した。そして、内開きに扉を押して、二歩だけ進んだ。

「……ここで支店長を殺したのよ」

金庫室の入口から少し中の床を雅子は指差した。

「死体は、右半身を廊下に向けて、うつぶせに倒れたわ」

人型を描く様にして、雅子は指を動かした。

「鍵束は支店長が倒れたときの衝撃で、ここに落ちたの。ポケットに入っていたのかもね」

事件当日は、支店長が格子扉と耐火扉と通用口の鍵を自分のリングに止めて一つにしていた。

格子扉は預金主任から、耐火扉は冷泉預金課長から、通用口は鍵当番の行員から、支店長が借りて、自分のリングで一緒にしていたのである。

「今は一本だけど、三本の鍵束と考えて」

雅子は一度、床に鍵を置いてから、それを拾い上げた。

「私は鍵束を拾って、格子扉のシリンダー錠を施錠した。その時に、どれが格子扉の鍵か分からずに、三本とも握ってしまったようね」

雅子は格子扉を引いて出入口に固定した。そして、鍵を差し込み、施錠した。

「格子扉が密室というのは、その鍵が死体に握られていたからでしょう。被害者が鍵を握ったまま死亡したのであれば、その鍵は使えない、と思い込んだ。しかし、格子扉には隙間がある」

雅子は格子扉の隙間に鍵を持った手を突っ込んだ。

「あのとき私は格子扉のシリンダー錠を施錠した後、耐火扉と通用口も施錠しようと思った。鍵束は通用口の外に置いておこうと思ったの」

雅子が説明したが、鍵束が通用口の外に置いていれば、単純な犯行で、密室でなくなる。竹森は雅子の意図が理解できなかった。

「ところが、あわてて泡を食ったみたい。鍵束をお手玉してしまったの。格子扉の隙間から落としてしまった」

そう言うと、本当にお手玉のように二回、手の上で浮かせた後、隙間から鍵を中へ落とした。

「大丈夫。鍵を抜く前にちゃんと回したわ」

雅子は平然として、格子扉を内側に押して中へ入った。死体のあった位置に雅子が行った。

「鍵束は死体の背中に落ちたのよ。右の脇にすべっていった」

雅子は左手で鍵を拾って、説明を続けた。竹森たち三人に背中を向けたまま、右手を振って注目を集めた。

「そのとき死体の掌に鍵束が収まるくらいの隙間があったの」

雅子は体を前に傾け、右手を軽く握った。それから左手でつまんだ鍵を右肩から背中にすべり落とした。落ちてくる鍵を器用に右手で掴むと、握りしめた。

雅子は立ったまま実演したのであるが、倒れた支店長の背中に落ちた鍵が右掌に吸い込まれるように入っていく情景が竹森は想像できた。

「死体が鍵を握りしめていたと竹森君が思ったのは、指先に即時性死後硬直が発生したからよ。支店長が奪われないように鍵を握りしめたわけでないわ」

竹森は鍵を取り出したときの感触を思い出した。握っていたと思い込んでいたが、指が鍵を包むようにして固まっていたのであった。

「私が意図的に握らせたのでないし、まして、意図的に死後硬直なんて起こさせるなんて不可能よ。私は死体の背中に誤って落としただけ。鍵束が右の掌に入っただけ」

雅子は再び右手で鍵を握りしめた。

「即時性死後硬直…」

和加刑事が呟いた。

「脳の中心部分が破壊されて死亡した場合、すぐに死後硬直が起きる現象です」

竹森が補足した。

脳の中心といったのは、正確には大脳と脊髄の間にある脳幹（延髄・橋・中脳）のことである。

通常は十数時間かかる死後硬直が、脳幹の破壊で死亡した場合に、死後直後に発生する場合がある。

指先は死後硬直が現れるのが遅い部位である。本来であれば、死亡直後の死体の指は柔らかくなっている。

握りしめた指先をこじ開けるようにして、竹森は鍵を取り出した。しかし、実際は鍵が張り込むだけの空間が開いた掌の状態で即時性死後硬直が発生したのである。

即時性死後硬直という現象に気付いたとき、竹森はそのことを警察には伝えていた。しかし、あまり真剣に検討されてないようであった。

竹森が鍵束を死体の拳から取り出した。そのため、警察の方では鍵を握っていたことは、あまり重要視していたかったかもしれないと、竹森は思った。

「鍵束は諦めて、別な工作をしたの」

雅子は外開きになっている耐火扉を動かした。押して耐火扉で金庫室を塞いだ。

「耐火扉のシリンダー錠も施錠するつもりがなかったわ。副支店長が来てなければ、耐火扉のシリンダー錠は開錠したままだった」

雅子はダイアル錠を回した。

「ダイアル錠のみ施錠しただけよ。外からの工作の痕跡

を残したかったから。その時点ではシリンダー錠は施錠していないわ。警察の推理もその点は正しいわね。

ダイアル錠の番号は私も知っていたの。草津さんと同じで役職者の手元を覗きこんで、覚えていたの。金庫室の竹森君が危険となったらすぐに助けることはできたの」

十分に危険な状態だったと竹森は思ったが、口には出さなかった。

「私は外からストッパーを挟んだの」

そういうと、耐火扉の前に置いてあるプラスチックのストッパーを取り上げると、耐火扉に差し込んだ。

竹森は混乱した。発見時にはストッパーは挟んでいなかった。

「ストッパーは隠すつもりは無かったわ。ストッパーを挟むのも、シリンダー錠を施錠するのも、私にとって目的は同じだったから」

竹森はますます訳が分からなくなった。外からストッパーを挟んでいるだけでは密室にならない。シリンダー錠が施錠していたから、密室になったのである。

「副支店長が来る前に、草津さんがダイアル錠を開錠した。そのとき耐火扉が動かなかったのはストッパーのせいよ」

雅子は金庫室の前にあるマットを軽く持ち上げた。

「草津さんが気付かなかったのはこのためね」

金庫室の前では重い台車を直角に回す必要がある。そのときに傷が付かない様にマットが敷いてある。

「私はストッパーの上にマットをかけたつもりは無かった。マットが自然に隠したようになってしまっただけよ」

雅子はマットをずらして、ストッパーにかけるようにした。

「草津さんがストッパーで固定しているのに気付いてもよかった。このマットと、地下が薄暗いために気付かなかったみたい」

竹森が推理したように外からストッパーで物理的に固定したのであった。ストッパーを加工して見えないようにしたのでなく、そのまま使用した。

「草津さんが金庫室の前にいたので、私は近づいたわ。もしかしたら私の体でストッパーが死角になったかもしれない。別に意図して死角にしたのでないけど。その時、もし草津さんが気付けば、犯人が外からストッパーで固定したことの証人になってくれるわ」

ストッパーは隠すつもりはなく、マットで隠れて草津が気付かなかったのである。

「その後、副支店長が来たのだけど、副支店長から物品庫の鍵を開けるようにと鍵束を渡されたの。物品庫の鍵と一緒に耐火扉の鍵もあったわ。その時に、耐火扉のシリンダー錠を施錠したのよ」

雅子が説明したのだが、副支店長が来るかは事前に予測はできないことであった。

「副支店長が来なければ、また、鍵束を渡されなければ、耐火扉のシリンダー錠を施錠するつもりはなかった」

雅子は格子扉の鍵を耐火扉のシリンダー錠に差し込むふりをした。

「ストッパーもそのままにしておいても良かったのだけど。シリンダー錠を施錠することができたので、用済みと思って外したの。私の目的は外から工作をした証拠を残すことだったから。挟んだままでは不自然かなと」

雅子は言いながら、耐火扉からストッパーを外した。

マットも耐火扉にくっついていた状態から少し離して置き直した。

シリンダー錠が施錠していたら密室であるが、ストッパーでは密室にならない。それなのに二つは同じ目的と雅子は説明している。

「次は通用口ね」

雅子が地下の金庫室から階段を上がって、通用口へと向かった。また、三人が後を付いて行った。一階の通用口へ通じる廊下の途中に火災報知器がある。

雅子は火災報知器の前で立ち止まった。

「火災報知器を鳴らすと、外へ出たの。火災報知器を鳴らしたのは、金庫室の外からの工作を残したかったことと、大騒ぎして発見を早めるため」

雅子は火災報知器を押すふりをした。

金庫室の中で焼死するかもしれないと感じたことを竹森は思い出した。竹森は恨みがましい気持ちであった。

しかし、その火災報知器が鳴ったことも今まで竹森が逮捕されなかった理由の一つには違いなかった。金庫室内の竹森が火災報知器を鳴らすのは不可能である。

雅子が外からの工作というのが、竹森が犯人に間違えられないためと竹森も推測できた。

しかし、雅子の行動は矛盾だらけである。竹森を襲っておいて、犯人にされないような工作をしている。

雅子に続いて、全員が通用口を出た。竹森はシリンダー錠と数字錠を交互に眺めていた。

「この数字錠の暗証を変えたのだろう」

和加刑事が数字錠を指差した。及川刑事は黙ったままである。

「数字錠の暗証番号を変更する際のボタンにあなたの指紋が付いていた。本来の暗証番号を変更して、数字錠が開かないようにした。それで、シリンダー錠が施錠していると誤認させたのだろう」

「その通りよ。もともと私は普段から総務として暗証番号を変更はしていたわ」

数字錠は暗証番号を間違えても開錠しないだけで、特に何もメッセージ音を発しない。開錠の音もしないので、実際にドアノブを引いて確認する。

正しいつもりの暗証番号を押して、扉が固定したまま

だとシリンダー錠が施錠されていると誤解する。
「私が通用口を出たところで、防犯カメラが目に入ったの。そのとき防犯ビデオに全部それまでの行動が映っていることに気付いたの」
雅子は見上げて通用口の防犯カメラを指差した。
「タイミング悪く、草津さんがやってきた。私は出たことと隠すために、入れないふりをした。その時に私はとっさの判断で数字錠の暗証番号を変えることにした。暗証番号を何度も押すふりをして、番号を変えたのよ」
事件後に数字錠は差し替えられたが、操作の仕組みは同じであった。
「暗証番号はその気になるとすぐに戻せるわ。仮に新しい暗証番号が分からなくても、私は初期設定もできるわ。変更の操作方法を見せるわ」
雅子は暗証番号を変える操作をした。変更する訳にいかないので、前と同じ番号に再登録していた。
「草津さんは何度も暗証番号を押しても扉が動かないので、シリンダー錠が掛かっていると思ったのよ。結果的に草津さんを耐火扉と二度も騙して、悪かったわ」
耐火扉ではダイアル錠が施錠されていて、シリンダー錠が開錠していたのに両方が施錠していると誤認させた。通用口では、数字錠の暗証番号を変えることで、シリンダー錠が施錠していると誤認させた。
草津にとっては、耐火扉も通用口もシリンダー錠が施錠しているという偽の証人に仕立てられたことになる。
しかし、通用口の場合は、耐火扉のときと決定的に違う密室であった。
「通用口は鹿田係長が鍵を持ってきたときには、シリンダー錠が既に施錠されていた」
竹森も気にしていたことを口にした。
耐火扉は副支店長が鍵を持ってきてからはいつでも施錠できた。
しかし、通用口のシリンダー錠は耐火扉と違って、鹿田係長が来てすぐに開錠した。開錠したときシリンダー錠の施錠は、皮肉にも草津が確認している。
「鹿田係長が勘違いしたのだろう。既に開錠していたのに自分で開錠したつもりになったのだ」
「残念ながら、それは違うわ。シリンダー錠は私が施錠したの。暗証番号はその場しのぎでしたこと。私は草津さんが居なくなったら入ってビデオデッキを隠そうと思った。そして、次に通用口から出る時に別のトリックを使ったのよ」
そう言って、雅子は数字錠の暗証番号を押した。
「先ず暗証番号を元に戻して、通用口から入った」
通用口から四人が支店内に入った。
雅子は防犯カメラの装置が置いている場所へ入った。デッキ（HDレコーダー）は盗難に遭ったものと同じである。ノートパソコン程度の大きさであった。

「ビデオデッキを外して、鞄の中に入れたわ。デッキ自体は最新の小型だったから、入れるのは問題がなかったけど。ビルの防犯カメラには映ったみたいね」
雅子はデッキを外すふりをした。
「その後、通用口のシリンダー錠を鍵無しで施錠したの。格子扉は死体の鍵を、耐火扉は副支店長の鍵を使ったけど、通用口は鍵を使わなかったのよ。係長が鍵を持ってすぐ来ると聞いたから」
四人は再び営業室に戻った。
「私は営業室に戻り、ハンドルで通用口の施錠をしたの」
「ハンドル…って通用口の取っ手のことか」
和加刑事が聞き返した。
通用口の取っ手は、棒のようなハンドルでなくて、円筒のノブになっている。
雅子はモニターの近くのブレーカーのような突起物を指差した。
「取っ手のハンドルではなくて、これをハンドルともハンドルスイッチとも言うのよ」
通用口に来店者が来る度に行くのは不便なので、モニターで確認して、遠隔操作で開錠・施錠する。上を向いていると開錠となり、下を向いていると施錠となる。
竹森はラジコンを使った実験を思い出していた。
ハンドル（スイッチ）は警察で現場検証していたが、そのトリックに気付かなかったようである。数字錠だけで密室にしたと推理したが、不完全であった。
雅子は通用口の密室を二回も作ったことになる。
「このハンドルで施錠をするので、通用口のシリンダー錠のつまみを見ていて」
刑事と竹森が営業室から出て、廊下の先の通用口のシリンダー錠のサムターン（つまみ）を見つめている。
「今、ハンドルを下げたわ」
雅子が合図をすると、約三秒後に、垂直だったサムターンが水平になった。
「ハンドルとシリンダー錠は連動しているけど、ハンドルを下げてから、三秒後にシリンダー錠が施錠するの。開錠するときにはすぐでないと不便だけど。ハンドルで施錠する場合は、通用口を人が通過する時間が必要だから、すぐ施錠すると不便よ。何人か通過するだけの余裕時間のタイムラグがあるかも」
「三秒で外へ出られるのか」
「さすがに三秒では無理ね」
雅子は相手をじらす口調であった。
「ハンドルとシリンダー錠の連動には別の仕組みがあるのよ」
雅子はハンドルを上向き（開錠）にした。通用口まで移動すると、内開きの扉を半開きにして、傘立てで固定した。サムターンは垂直のままで、つまり開錠の状態になっている。

雅子は営業室へ戻ると、再びハンドルを下向きにして施錠する操作をした。
しかし、今度は三秒経過したが、サムターンは動かなかった。
十秒ほどかけて雅子は営業室から通用口へ行った。扉を半開きに固定した傘立てを元に戻すと、そのまま外へ出た。
扉が通用口の外枠に収まった瞬間、サムターンが垂直から水平に九十度回転した。
通用口の扉からノックの音が聞こえた。竹森は駆け寄ると、サムターンを垂直に戻した。竹森は扉を引いて、雅子を入れた。
「ハンドルでの操作はシリンダー錠のつまみと閂と連動しているけど、連動するのは扉が外枠にはまっている時よ」
支店の中へ入った雅子がまた説明を続ける。
「扉が開放している状態で閂が飛び出ると、反対に施錠できないままになって意味が無いでしょ。当然の設計だと思うわ。それで私は今のような操作をしたのよ。
私は総務担当だからこの仕組みは知っていたし、実は過去に何度か試して上手くいったの」
竹森が推理した通りハンドルを使ったトリックであった。しかし、ラジコンで機械的に遠隔操作するのでなく、ハンドルの施錠の仕組みを利用したのであった。
「私が使ったトリックは全てその場で、どうしたら外側から工作した痕跡を残せるか、その場でとっさにできることを試しただけよ。別に失敗しても問題なかった」
雅子が説明をしたが、竹森は腑に落ちないでいた。
たまたま、つまり偶然の要素が今回の事件に多すぎる。
たまたま雅子が事件現場に居合わせたのである。事件の十曜日は、竹森と雅子を含めて若手行員で遊びに行く予定であった。
たまたま前日に、持井建設の倒産があったので、竹森だけが、休日出勤することになった。雅子は他のメンバーと一緒に遊びに行くのを止めて、銀行に来た。
たまたま金庫室に竹森と支店長が居たのである。それはたまたま竹森が稟議書を金庫室に忘れたためである。
たまたま死体に即時性死後硬直が発生した。
たまたま副支店長から雅子は耐火扉の鍵を渡された。
たまたま草津が耐火扉のストッパーに気付かなかった。
たまたま鹿田係長が鍵を持って近くに居た。
たまたま草津が通用口で雅子から離れた。
たまたま雅子は鍵束を死体の掌に落とした。しかし、鍵束を通用口の外に置くつもりであったと雅子は言っている。もし、その通りに実行していたら、密室殺人にならない。
たまたま密室になったのである。
たまたまだらけだと竹森は思った。

左玉の法則

匠　克仁

*

ぼくには夢がある。（アイ・ハブ・ア・ドリーム）
それは、ひとの自殺をくい止める文章を書くということである。それができたら死んでもよいと思っている。多くの人に生きる希望を与える文章を書きたい。
そのために文章の品格が必要だと、いつも心掛けている。ぼくの文章は上品すぎて、堅苦しいのが、玉玉に傷…じゃない、玉に瑕なのかもしれない。
今回はいつもよりさらに上品に、玉玉…じゃない、玉に磨きをかけた文章を書く。全体が金と玉でおおわれたような上品なエッセイにする。
下品な文章が活字になったら、ぼくは恥ずかしくて人前に出られない。人前で玉玉を出すよりも恥ずかしい。
恥ずかしくて、もうおムコにも行けなくなってしまう。それは絶対に困る。
ぼくには夢がある。（アイ・ハブ・ア・ドリーム）
それは逆玉である。逆玉は、逆『玉の輿』である。
男性の股間の右の玉と左の玉が逆になることではない。だいたい左右の玉が逆になることを夢にするわけがない。
あれっ。でも、書いていて、左右逆玉になったらどうなるのか気になった。勢いで文章を書いて、その後で文章をリアルに妄想するのが、ぼくの癖である。
谷崎潤一郎の言う通り『言葉も人間を使う』のである。医学・生物学的な事実であるが、右の玉と左の玉の高さは違う。
心臓が左で肝臓が右のように人間の体は左右非対称で、玉玉も左右非対称である。
ぼくは6才の頃に、自分の左右の玉玉の高さが違うのに気づいて、異常でないかとショックを受けた。その後

は気になったので、他人の玉玉の位置を観測した。

ぼくは今、49才だから43年間ずっと観測を続けたことになる。今回のエッセイは43年間にわたる研究結果の発表なのである。

幸福なことに、ぼくの家にお風呂が無かった。小学生の頃は近くの銭湯に通っていた。入浴料さえ払えば、玉玉はなんと時間無制限、追加料金無料で、見放題なのである。

小学生の夏休みの自由研究に玉玉をテーマにしようと思っていた。発表の場では自分の玉玉の実物を陳列するのである。なぜか研究発表の機会を逃してしまった。

43年たって、このような発表の機会があって感動している。今回のエッセイにも、ぼくの玉玉のサンプル写真を添付しようか悩んでしまった。

しかし、まんじには、基本的に文字データしか使用しないと決めていたので、ぼくは泣く泣くあきらめた。

大学生のときも三百名くらいいる寮で、風呂・トイレは共同だったので、いっぱい観測できた。おそらく、ぼくの人生で1万個いや、2コーパックだから2万個くらいを観測した。この膨大な観測データを元に帰納法的に結論を出した。

9割の男性は左玉が右玉より下がっている。1割の男性は右玉が左玉より下がっている。玉玉が同じ高さは無いのである。

ちぢこまってパッと見て区別がつかないような人もいるが、よーくじっくりとしつこく観察すると、やはり左が右より下になっていることが分かる。対象物の1mmまで近づいて、目を凝らして観察したのである。

左玉が右玉より下というのは、ぼくの観察だけでない歴然とした事実である。

日本大百科全書（ニッポニカ）で、『睾丸』を調べると、「普通には、左側睾丸が右側より低く下垂している場合が多い。」とちゃんと記述している。

念のため専門の医学生用の解剖書を調べてみた。リアルな解剖図がちゃんと左玉が右玉よりも下で描かれていて、感動した。

男性器の解剖図を見て、ぼくは思わずガッツポーズをして、雄叫びを上げた。ウオー。フィッシュ。イエー。ハウス。医学的に証明されたことの感動を全身で表したのである。

何事かと隣の若い女性の書店販売員さんに覗かれてしまった。ぼくは大型書店で調べていたのである。男性器の解剖図を見て、ガッツポーズをして、叫んでいるぼくを見て、彼女はピキーンと凍りついてしまった。

芸術作品でも、ミケランジェロのダビデ像は左玉が右玉よりも少し下に造られている。ダビデ像は男性器が非写実的にとても小さく造られているが、左玉下なのはしっかりと写実的である。

今回は医学文献を全部調べることはできなかったが、やはり左玉下が75%~90%程度の割合で、高いようだ。

大島清の『性は生なり』（講談社＋α文庫）には、次の記述がある。

『ふぐりの高さに左右差があり、日本人では左低位が七五パーセント、アメリカ人では六五パーセントだ。』（ふぐり＝陰嚢）

ぼくの実感より低い%だが、左玉下を明言している。ぼくはアメリカ人の玉玉を見たことはないので、これからじっくり研究をしようと思う。

そのための研究資料集めが必要である。アメリカの無修正アダルトビデオをたくさん見て、研究に没頭しよう。ぼくって禁欲的で真面目だなあ。

*

左玉が右玉より下という生物学的事実と、それに伴う社会的現象を、ぼくは『左玉の法則』と名付ける。

最初は『フレミングの左手の法則』になぞらえて、『フレーミングの左玉の法則』にした。長ったらしいので、それを省略したのである。

右上だから、右玉の法則でもいいだろうと、ツッコミを入れる人がいるかもしれないが、あくまで右玉でなく左玉の法則なのである。

一つ目の理由は、フレミングの法則が左手だけ日本では教えられており、それにならったからである。（フレミングの法則はもともと左手と右手の法則がセットなのであるが、同じ現象の別表現なので、日本では左手の法則しか教えない）

二つ目の理由は、生物学的に左玉が兄で、右玉が弟なのである。長幼の序で左玉の法則にする。左玉が兄という説明は後でする。

左玉の法則に基づくと、森羅万象が説明できる。

陸上のトラック競技が反時計回りなのは、多くの男性の左玉が右玉の下にあるためである。

野球が反時計回り、つまり一塁がバッターから見て右側に来るのも左玉が原因である。

多くのプロサッカー選手がPKを右足で蹴るのも左玉の法則である。キックボクサーが右の蹴りが強烈なのも、左玉の法則である。

スピードスケートが反時計回りなのも、フィギュアスケートの左軸足が多いのも左玉の法則である。

競輪やオートバイレースが反時計回りなのも、左玉の法則である。

競馬が反時計回りと時計回りがあるのは、左玉の法則が働かないからである。騎手の玉玉が馬の玉玉に負けるのである。

オートバイレースが反時計回りだが、カーレースは両方とも回る。

Ｆ１レースは時計回りが多く、鈴鹿サーキットは８の字回りである。この理由は、走るのと違い、座る運転では、左玉の法則が働かないのである。

コースよりも、車の構造に左玉の法則が働いている。将来、マニュアル車が無くなって全部オートマ車になっても、アクセルとブレーキが右足で、左足は何もしないだろう。

これこそが左玉の法則で、９割の男性が、左足を動かすと左玉との摩擦係数が大きく、右足を動かしても右玉との摩擦係数が小さい。車に乗るのは男性が多かったことから、人間工学的に車の構造は右ハンドルでも左ハンドルでもアクセルとブレーキは右足の役割になったのである。

オートマ車を運転する女性は、なぜ左足でブレーキを踏まないのかと疑問に思っているかもしれない。

そんな疑問をお持ちの女性には、左玉の法則を教えてあげればよい。

もし、全人類の男性の玉玉が、ある日突然、逆玉、つまり、左右の玉が逆になったら、トラック競技は反対回りになる。野球は三塁から二塁、一塁へと回ることになるだろう。

＊

ちなみに反時計回りなのは、左玉の法則の他に、もう一つ宇宙物理学的な理由があると思う。人間は宇宙、特に地球の影響から逃げることができない。地球の自転の影響もある、とぼくは考えている。

物理学で『コリオリの力』（コリオリ力・転向力）という現象がある。コリオリの力とは、回転座標系上で移動した際に移動方向と垂直な方向に移動速度に比例した大きさで受ける慣性力のことである。

地球の自転により北半球では真っ直ぐ進もうとしても反時計回りにそれる。北半球で台風の渦が反時計回りになる。貯めた水の排水口の水の流れは反時計回りになる。台風つまり空気、貯めた水が影響を受けるのだから、当然ながら人間も影響を受ける。

ある映画では水洗便所の渦の流れが時計回りだったので、南半球に拉致されたと推理する。（現実的にはコリオリの力は、便器の形状など他の要因で阻害される）

ところで、ぼくの個人的な話であるが、ぼくは酒をたらふく飲むと、視界が反時計回りに回転するのである。これは、ぼくの脳細胞に地球自転のコリオリ力が働いているに違いない。

多くのスポーツなどが反時計回りである理由は、左玉の法則と地球の自転のためと、北半球に人類が多いためである。

もし、南半球に人類が多くいたら、コリオリの力が逆向きに働くので、左玉の法則と拮抗していたかもしれない。コリオリの力と左玉の法則のどっちが大きいのだろうかと、ぼくは真剣に悩んでいる。

一人ひとりの人間で考えると、玉玉の位置の方が地球の自転よりも大きい気がする。ところが、地球の気持ちになってみると、表面にこびりついている生物の玉の高さなんて小さい気がする。

ぼくは、野球や陸上競技を見ても、医学や宇宙論、つまり、玉玉と地球の自転について考える。

＊

なぜ、左の玉が右の玉より下にあるかということを、これから５００ページほど書こう…と思ったが、読者のあなたがひ～～と引いているのを感じたので、やめる。

ぼくは、読者の気持ちが分かるのである。

ぼくは読者、つまり、あなたの気持ちが分かるだけでなく、催眠術をかけることができる。

左玉下について、ごく簡単に説明しよう。左玉下にはいくつかの理論がある。

例えば、前述の大島清は、左玉下の理由を次のように説明する。

『大半のこう丸が左低位ということは、大半の人が右利きということである。右利きということは左脳優位で右の挙こう筋を収縮させるので上につりあがり、左側が相対的に下がった状態になる。』

挙睾筋（睾丸を上げる筋肉）なんて専門用語が出てくると、なんか説得させられそうだ。どれが挙睾筋なんだろうと、思わず自分の挙睾筋をじっくり観察した。

右利きが左脳を刺激して右挙睾筋を収縮し左玉下になる、というが変だ。論理的には、左利きは右玉下になるが、おかしい。

左玉下は後天的という説明だが、ぼくは納得できない。左玉下は後天的でなく、先天的である。

余談であるが、医学で挙睾筋反射という現象がある。男性の太ももの内側を刺激すると、玉玉が上がる現象である。

谷崎潤一郎は『鍵』の中で、挙睾筋反射をかなり医学的に正確に描写している。

『右の睾丸はゆっくりと鮑が蠢めくように上り下りの運動をするが、左の睾丸はあまり運動する様子がなかった』

さすがに谷崎潤一郎である。ちゃんと右玉と左玉の動きの違いを書き分けている。谷崎文学にも左玉の法則が働いているのである。

もっとも『鍵』の中では、左の睾丸が動かないのを、脳いっ血が右脳に発生した説明になっている。

しかし、ぼくは脳いっ血と別に、谷崎が自らの玉玉で実験して描写したと思う。左玉は伸びきって動かないが、右玉は神経も筋肉も太くて動いたのだろう。

たまたま左でなく右の睾丸が蠢くと書いたのではない、この小説の右玉は必然なのである。

医学的には、妊娠８ヶ月目の男の胎児が腹腔内の睾丸

を腹腔の外に出すときに狭くて2個同時にできないからで、1個ずつ出す。

その時は、左通行優先で、左睾丸が右睾丸より先に出るという誕生のメカニズムのためである。

9割の男性の左玉が右玉より下なのは、生まれる前から決まっている運命なのである。

なぜ胎児の左睾丸が先なのか。

人間の体は左右非対称で、心臓が左で、肝臓が右である。肝臓が右なので、ドミノ倒し的に腎臓が左上で睾丸が左下になる。

左右にある臓器が同じ高さではないのが、不思議でもない。腎臓の場合は左が右より上であり、男性も女性も100%そうなっている。

腎臓が左上にあるということは、尿管は左の方が右よりも長い。(ある解剖学の本には男性の尿管は左303mm、右290mmとある)

睾丸につながる精管は、発生上は胎児の尿管(中腎管)が変化したものである。中腎管は中腎の尿管で、中腎は胎児の腎臓で生まれる前に消滅する。精管は左の方が右よりも長いので、睾丸は左の方が右よりも遠くになる。

①左腎臓が上 → ②左尿管が長い → ③左中腎管が長い → ④左精管が長い → ⑤左睾丸が下

つまり、左の腎臓が右よりも上にあることからも左の睾丸が右よりも下になることは、論理的・医学的に説明できるのである。

なお、腎臓が左上つまり右下にあるのは、肝臓が右にあって上から押されるためである。「①左腎臓が上」の前に「⓪肝臓が右→」を入れて考えると腑に落ちる。

左玉下が嫌というのは、心臓が左、肝臓が右であることも嫌だと言っているのと同レベルである。

ただし、心臓と違い、睾丸の場合は、右下と逆になるのが、ずっと多い。

ちなみに心臓が右にあるのは、『右胸心(うきょうしん)』といって、12000人に1人の割合でしかない。

だから、右玉下を表現的に右胸心のように例えたのは、確率的には正確でないので、あくまでイメージである。

左右に同じ臓器が有るからといって、同じ大きさではない。右肺が左肺より大きい。右肺が1200mlで、左肺が1000mlである。

正確には、人間は5つの小さい肺(肺葉)があり、右に3つの肺葉と左に2つの肺葉を持っている。(右上肺葉・右中肺葉・右下肺葉・左上肺葉・左下肺葉のこと、左中肺葉は無い)

さらに正確には、人間は18のもっと小さい肺(肺区域)があり、右に10の肺区域と左に8の肺区域を持っている。

気管は右10と左8の18本に枝分かれしている。

息を吸うのを左右均等にしていると思ったら大間違いである。呼吸は右半分が左半分より2割多くしている。

別に不思議でもなんでもない。左肺が小さいのは心臓のせいである。

左右の大きさの違いは睾丸にも反映している。

左玉は右玉より小さいのである。

『左玉が右玉の下である』を左玉の第一の法則としたら『左玉は右玉より小さい』は左玉の第二の法則になる。

しかし、これは不正確な表現である。

右玉下の場合は、右玉の方が小さい。正確に表現すると、下の玉の方が上の玉よりも小さい。体から遠い分だけ血管が長くなり、栄養を運ぶ効率が悪くなる。それだけ下の玉の成長が遅れるためである。

車の構造の話で、左玉の摩擦係数は右玉のものより大きいと書いたが、厳密には左玉が小さい分だけ差し引いて再計算しないといけない。

*

女性はシンメトリー(左右対称)な男性を好むようである。(竹内久美子『シンメトリーな男』)

シンメトリーな男なんて存在しないのである。

女性の方はご主人や彼氏の玉玉が左下がりでも気にしないように。たまに右下がりでも気にしないように。玉玉がシンメトリーは、あり得ないのである。

ぼくは人類の幸福と平和のためにエッセイを書いているのである。

ぼくは全世界の生殖適齢期の全女性に、この左玉の法則を教えたい。左玉の法則を全世界に普及することが、天がぼくに命じた使命なのである。

世の中の多くの女性が彼氏の玉玉の高さが違うのを見て、病気でないかと疑う、そのことをぼくは心配している。

男の子を出産したが玉玉の高さが違うので異常でないかと異常に気にする、そのことをぼくは心配している。

あげくの果ては彼との結婚は失敗だった、息子は失敗作だった。となる。こんな誤った考え、無知による不幸を絶滅したいと考えているのである。

このような不幸を地球上から絶滅するために、全世界に左玉の法則の啓蒙活動に努めたい。

知識の普及にはAC(公共広告機構)のテレビコマーシャルが良いと思う。イケメン俳優が10名出演してもらう。全員がバレエダンサーの白タイツ姿である。

顔と股間部分を二分割で写して「ぼくは左」とか「ぼくは右」と言うのである。いっそのこと10名の10パターン合計100名で作成したら、左玉率が算出できる。

最後のエ〜シ〜というところで、左玉の股間部分を画面全体に大写しする。その映像にAとCの文字が重なる。Aが竿の部分で、Cが左玉である。

視聴者はACの文字を見ただけで左玉の法則を連想する。AやCがムクムクと膨張するという演出を付け加え

ると、さらに印象的だろう。

＊

さて、左玉の法則はフレミングでなく、フレーミングである。

フレミングは物理学者の名前である。フレーミングは単なるダジャレであるが、本来は認知心理学の用語である。現在では行動経済学にも応用される用語である。

フレーミングの定義は『論理的に等価の問題であっても、選択肢の表現の仕方や枠組みの違いが選好に影響する現象』である。

具体的な例では、死の病の患者が延命手術を受ける場合である。

A　この手術の生存率は9割です。

B　この手術の死亡率は1割です。

Aを言われた人はほぼ全員、手術を受ける。

Bを言われた人はほぼ全員、手術を受けない。

AとBは同じことを表現しているのに、表現で人間の行動は異なるのである。

これがフレーミングである。

フレーミング理論を知っていたら、調査やアンケートの結果とか、セールス文句とかが、いかにいかさまかが分かる。

インフォームド・コンセントは重要だが、表現方法で患者の判断が変わることを理解した方が良い。

また、話が脱線したので、左玉の法則に戻す。

ぼくのフレーミングの左玉の法則は次の通りである。

約9割の男性の左玉が右玉よりも下にある。

（下の玉が上の玉より小さい）

これを行動面で説明すると、次のような現象が発生する。

男性が目をつむって進むと、9割が左に曲がる。

左玉の法則を知っていないと、大雪原で遭難になったときに困る。真っ直ぐ進めば、助かると思っていても、目印が無いと、自然と左カーブになる。気付いたときには、大きな円を描いて、元の位置に戻るのである。

例えば、男性集団に目隠しをして真っ直ぐ歩かせる。

１００m真っ直ぐ進めば、ゴールである。ところが１m左にそれると、断崖絶壁の海になっているのである。真っ直ぐに歩けば助かるのに、9割の男性がそのまま左の海に落ちて、集団入水自殺のようになるのである。

これを『レミングの左玉の法則』と名付ける。レミングというのは大量繁殖しては集団入水自殺することで有名なネズミである。

レミングの集団自殺という俗説が世界中に普及しているが、あれは嘘である。実際は、大量繁殖したので住環境を変えようとした。川や海を渡ろうとして、溺れただけである。

レミングの行動が人口爆発して自殺率の増えた人間に例えられたりしたので、俗説になったのである。

ぼく自身がレミングと同じ行動があったことがある。

ぼくのいた銀行が○○○ショックと言われて、多くの銀行員が大量退職した。ぼく自身も大量に退職した内の一人である。

ぼくはレミングのように退職した。船から水中に飛び込むように銀行を辞めたのである。

ぼくはレミングになった夢を見る。前世はレミングだったに違いない。

＊

玉玉の位置の理論に戻ろう。

現在の医学・生物学では次の様に説明している。

精子は低温を好む。平均体温の世界では高熱過ぎるので、体外にはみ出ている。はみ出たものがくっついていると温度が上がるので、温度を下げるために高さをずらす。と医学書では説明している。

学会の定説は体温との関係であるが、ぼくは定説に異論を唱えたい。

もし、同じ高さだったらどうなるだろう。常にアメリカンクラッカー状態になる。

アメリカンクラッカーというのは、ぼくの子供の頃の遊具で、玉が二個の剣玉のようなものである。

といっても、剣がなくて、同じ長さの紐の剣玉の玉が二個ある感じである。

なんかチンチンのない玉玉のようだ。剣玉と合体すると男性器のようで卑猥である。

アメリカンクラッカーを上下に動かすと、二つの玉はカチカチとぶつかる。

人間の玉でそんなことを毎秒数十年も繰り返したら、玉は玉砕する。玉玉がそんな残酷なことはやめてくれ～と叫んでいる。

箱根駅伝とか男子マラソンを見ていると、ついつい選手の玉玉がアメリカンクラッカー状態になっていないか、心配でよく見てしまう。

玉砕を防ぐためには、つまり、玉を空振りさせるために、玉の高さが違うのである。

現実には空振りできるほど左右の高低差がある人は少ないかもしれない。

重心の高さが違うだけでも、見事に下の玉を上の玉がすべるように動いて衝撃を減らすのである。

男性読者は下半身裸で鏡の前でジャンプしてみるとよい。玉と玉が衝突をかわす華麗な動きに感動するだろう。

アメリカンクラッカーは別名でカチカチボールとも言う。あまりカチカチさせるとカチカチ山のように、玉玉が火を吹く。砕けたり火を吹いたりしないように、高さをずらすのである。

…というのが、ぼくの玉砕説である。別名で、睾丸＝

アメリカンクラッカー説である。
この理論は脳で考えたのでなく、玉玉で考えた。
この玉砕説を研究して世界に発表しようと思う。
体温の説よりは、ぼくの玉砕説の方がなんかしっくりと収まる。ちょうど玉が所定の位置に収まったような、しっくり感である。

＊

玉ポジションは重要である。
女性には分からないかもしれないが、玉が所定の位置にないと大変なのである。
金的が痛いのは、玉玉そのものの衝撃の他に、玉玉がめりこむ状態の苦痛があるのである。
これは体験したものでないと、分からない。
『玉ころがし』と聞くと、どんな光景が思い浮かぶだろうか。
小学生の運動会を想像するかもしれない。もしかしたら、ボーリングを想像する人がいるかもしれない。
ぼくは玉ころがしと聞くと、反射的にレスリングを連想する。玉がめりこんで、転げまわったからなあ～。
ぼくはレスリングの練習中、何度か玉玉が腹腔にめり込むことがあった。ピョンピョン飛び跳ねて、所定の位置に戻すのであるが、周りから見ると滑稽である。
ぼくの実体験からすると、右玉と左玉のめりこむ確率というのが、ほぼ五分五分なのである。

なぜ、左右同確率でめりこむのか、ぼくは玉ころがしながら、のたうちまわりながら、数学的に考察した。
医学的に考えると、胎児の頃に後から通過した玉が体腔に近い分だけ先にめりこむ確率が高いように思う。
ところが、前述の通り、血管の距離の短い玉の方が大きくなる。
腹腔出入口と玉玉の中心までの距離を考える。左玉の距離をl、右玉の距離をrとする。左玉の断面積をL、右玉の断面積をRとする。
左玉の第一の法則により、l＞rである。次に左玉の第二の法則により、R＞L（右玉の断面積が左玉の断面積より大きい）となる。
ぼくの右玉と左玉がめりこむ確率が等しかった。ということは、帰納法的に次の公式が成立した。

$$^{2}l \cdot L = {}^{2}r \cdot R$$

「左玉の距離lの2乗と左玉の断面積Lをかけた数値」と「右玉の距離rの2乗と右玉の断面積Rをかけた数値」が一致するという公式が、ぼくの、めりこみ経験則から成立する。
その内、医学的に証明されて、この玉玉方程式が図入りで保健体育の教科書に書かれるだろう。
たまたま玉が戻ってきたときに回転ヒネリをした状態になることがある。これはめりこむよりも痛いのである。玉の上あたりで糸がからまったような悶絶感は体験した

ものしか分からないであろう。
これはもう一度、腹腔内にめりこまし、からまりをほどくという高度なテクニックが必要なのである。

＊

実は読者に、重大な罪の告悔をしなければならない。
人前で罪をさらすのは、玉玉をさらすのと同じである。
ぼくは生まれてからずっと、睾という字を間違えていた。
てっきり睾という字を血の幸せだと思い込んでいた。なんかSMチックな感じな漢字なんだと勘違いしていた。
生れてこんな恥ずかしいことはない。なんて、ぼくは無知だ。無恥だ。鞭だ。鞭打ちでムチウチだ。宮刑に等しい罪である。
睾というのは、ノに目の幸せである。部首は目である。めかんむり、というのは無いので『よこめ』という部首になる。
沢の旧字体、澤のサンズイの代わりにノが付いた字体である。睾が『さわ』と読ませるのは、そのためだろう。
難しい澤の名前の人が多いので、前は「四つの幸せですね」と聞き返した。最近は、「ノ～無しキンタマですね」と聞き返す。難しい澤の字の人に会うと、どうしても睾を連想する。
睾の部首が目（よこめ）っていうのも知らなかったなあ。玉玉を目玉に見立てたのかなあ。

ちなみに、睾は、五月の皐（月）の異字体として使われる。さつき、は皐の代わりに睾とも書ける。
競馬で皐月賞というのがあるが、オス馬とメス馬ともに出馬するらしい。オス馬だけにして、睾付賞にして、さつき賞から、きんたまつき賞にしたらと思う。この名前だとネームバリューが強烈だから人気が出るだろう。
ぼくの本名は秘密なので、玉砕説を学会に発表する時、睾睾睾睾（たかさわおおひろ）にしよう。
筆名を考えるとき、本名の読みから一字だけ変えて、睾見克睾（たかみかつひろ）を候補にした。一捻りして睾睾睾睾（たかさわおおひろ）を考えた。という話は以前に書いた。
さらに共同研究者に女性に参加してもらう。名前は、睾睾睾（たかさわさつき）である。
睾睾睾睾睾睾睾（たかさわさつき・たかさわおおひろ）を共同筆名にする。
睾の睾（おお）い文章だなあ。

＊

剣玉という言葉だけで、いろいろえろえろと妄想する。
剣一本に玉二個とか、剣に玉が串刺しになって、思わず股間を押さえてしまう。ぎょえええええええええ。
剣玉と書いていると、槍玉を連想した。
槍玉にあげるという慣用句がある。何か槍で玉を突くみたいで、ぎょえええええええええええええ。

語源的には、槍で玉を突くのでなく、槍を玉（手玉）のように扱うのである。イメージ的には玉が槍の先端にあるのでなく玉の上に槍がある。

槍玉のイメージを絵に書くなら、↑の上に○の○↑ではおかしい。↑の下に○を書く↑○が正解である。なんか、凛々しい図柄だなあ。

↑○よりも、↑∞の方が良い。

ちなみに、「∞」という文字を、ぼくはパソコンで原稿を書いて、どう出そうか悩んだ。

「mugendai」（むげんだい）とローマ字入力でキーボードを打つと、二発目で「∞」の記号に変換された。へ～～～。パチパチパチ。ぼくはパソコンの前で思わず拍手した。

まさか変換するわけないだろうと思って打ったのに、良い方向に文系のぼくは期待を裏切られた。ここまで、パソコンの漢字変換機能は進化している。

かな変換のモードのローマ字入力で「infinity」と打って変換キーを押したが、ダメだった。

おそらく、この変換機能の開発者は、槍玉で↑∞という文字変換をどうしても打ちたいという人間が現れるのを予想して開発したのだろう。

そのうち「kintama」と入力しても「∞」が表示されるように学習機能が改良されるだろう。

正確には槍の先に死体が刺さっている状態で、手玉にする。

槍玉が嫌いだと書いたが、嘘である。

ぼくは槍も玉も好きである。槍玉だなんて、槍と玉の組み合わせを考えるだけで、ぼくの槍と玉が興奮する。

2ちゃんねるとかインターネットで、槍玉にあげられたい。ぼくは槍玉願望があるのである。

インターネットの槍玉っていうのはスゴイ。槍玉にあがる、という表現がある。正しくは、槍玉にあげる、もしくは、槍玉にあげられる、である。

自らネット上の中心人物になるような意味で肯定的に使っている人がいる。

＊

ぼくは字面で具体的なイメージを想像する。大阪には玉造という土地があるのだが、玉造って聞いただけで、金玉製造工場を想像する。

玉造筋という通りもある。なんか玉と玉の間の縫いしろの筋を想像する。玉造筋を歩くのだが、なんか巨大な金玉袋の縫い目を歩いているような妄想をする。

＊

余談ついでに植物学の余談である。

花のラン（蘭）の英語はｏｒｃｈｉｄであるが、語源はギリシア語の睾丸である。球根が睾丸に似ているからである。何で花びらの特徴でなく球根の特徴で名前をつけたのだろうか。

こんな知識を持ったために、ランの花を見ると必ず睾丸を連想するようになった。

＊

フロイドの夢分析の例に、既婚女性の帽子の夢がある。夢の帽子（ｃａｐでなくｈａｔ）はツバの左が下がっているのである。右でなく左が下がっているのが重要である。

フロイド理論では帽子は男性器の象徴でツバは玉玉を表わす。夫の左玉が下がっているのが気になっていて、それが夢に現れたのである。

＊

玉のようなエッセイができたと思ったが、ちょっとアカデミック（学問的）で上品すぎるのが、玉に傷である。

玉に傷、って何か、物凄く痛そう。想像するだけで、げげげげげ。痛い痛い。

玉に傷、というが間違いで、正確には、玉に瑕と書く。玉瑕（ぎょくか）という熟語もある。

キズといっても、宝石のキズは瑕、人のキズは傷、物のキズは疵、人のキズでも切りキズは創である。

玉に傷と書いているのに、たまにきずく。

ぼくの玉に傷は無い。玉と玉の間のものにも傷が無い。

玉と玉の間は傷一つなく元気である。今も元気百倍・勇気凛々でパソコンで原稿を打っている。毎日、手づかみをするウナギのように両手の間からピチピチと飛び跳ねている。

元気すぎてトイレが水びだしで大変なのである。朝一番のおしっこでいつもトイレの大井に穴をあけてしまうのである。四階のぼくは、朝のおしっこで七階建ての屋根まで貫通してしまった。

またまた、玉玉の間が調子に乗って余計なことを打ってしまった。

＊

前は変態とか太る話でひっぱってきたが、今回は玉玉でひっぱりすぎだなあ。

玉玉の話だけでエッセイも珍しいかもしれない。自分の玉玉をひっぱりながら書いていたからかなあ。

玉玉でひっぱるって書くと、また妄想が膨らんできた。

玉玉をひっぱりすぎて、もぎ取れてしまうことを想像したのである。二個ともぎ取れてしまったら、戸籍を女性に変えよう。谷崎潤一郎の言う通り『言葉も人間を使う』のである。

ぼくの見る悪夢の中でも恐ろしいものがある。

坂道を下っている時に、左右のズボンの裾から一個づつ何かが落ちるのである。よく見ると、それはぼくの玉玉なのである。

坂道を転がる二つの玉玉を追いかけ続けるという恐ろしい夢である。途中でうなされて目がさめるのであるが、最後に玉玉が大型トラックに轢かれるというパターンも

ある。

金玉が二個取れた話を書いていると、ある有名なスポーツ選手○○さんを思い出した。

たまたま、職場の隣の席の人が○○選手の知り合いであった。

たまたま、ぼくは○○選手本人からの電話を受けて取りついだことがある。

○○選手とは、オリンピックで金を二個取った柔道家である。二度のオリンピックで金を二個もぎ取ったのに、性犯罪で逮捕された。金を二個もぎ取られる、いや、剥奪されるのかなあ、とぼくは思った。

＊

ところで、ぼくは左玉の法則の例外なのである。つまり、ぼくの玉玉は右下なのである。

ぼくが一般の人と違う考えをするのは、そのために違いない。真っ直ぐ歩いているつもりが、右にそれるのも、そのために違いない。

ぼくがトラック競技で遅いのも右玉下のせいである。ぼくが野球下手なのも、ベース周りの重心移動がうまくいかないからである。運転が下手なのも、右玉の摩擦係数が高いからである。

おそらく、ぼくが常識から外れて、左玉の法則なんて考えつくのも、右玉下のために違いない。

＊

左玉の法則は正式名でフレーミングの左玉の法則である。

フレーミングとは、前述の通り行動経済学で『論理的に等価の問題であっても、選択肢の表現の仕方や枠組みの違いが選好に影響する現象』である。つまり、表現次第で人にある行動をさせることができる。

実は、このエッセイ全体がフレーミング効果を発揮している。表現を変えると読者に催眠術をかけたのである。玉玉の話なので、読者が男性の場合に限定する。

中にはここまでの文章に到達する前に、待ちきれず、既に確認し終えた人もいるだろう。

男性読者はパンツをずりさげ、体をくの字に曲げ、または手鏡に映して、玉の高さを確認するのである。

何十年もの年月を生きていて、生まれて初めて玉の高さが違うことに気付く人もいる。

女性読者の場合は、御主人か彼氏のパンツをめくっているだろう。

なかには何十年と連れ添った夫婦でこんな会話をするだろう。玉の位置に生まれて初めて気付いた夫が妻に尋ねる。「おれの玉が左下がりって知っていたか」「そんなの五十年前に気付いていたわ」知らぬは亭主ばかりなりなのである。

最後に繰り返すが、男性読者の行動を書き当てる。

あなたは自分の左右の玉玉の高さを確認する。

編集後記

爽やかな秋、庭の金木犀が咲き終えると、並んでいる柿の実が自分の出番とばかりに色づいてきました。毎年眺める同じ風景ですが、私には特に秋を感じさせてくれます。

まんじ百四十号記念号発行が来年五月です。記念号に同人皆様がご健筆をふるわれることを期待します。原稿は多くて四百字詰め原稿用紙五十枚程度迄を考えています。その範囲内での寄稿（字数は自由です）をお待ちしています。締め切りは来年三月末日です。

毎号表紙絵を飾っていただいている女流画家田寺怜葦氏の個展「仏教で描くタロットの世界」が十一月十三～十五日まで、銀座教文館ビル（銀座四―五―一）八階朝日画廊で開催されます。毎日午前十時三十分～午後六時までです。どうぞお気軽にお出かけください。

同人山本勉氏がまんじ百三十四号まで十六回に亘って連載された「口紅」を単行本として今年十二月上旬までには出版される運びとなりました。お慶び申し上げます。

今年も残すところ二か月となりました。同人各位におかれましては、くれぐれもご自愛の上新しい年を豊かにお迎えください。次回百三十九号の原稿をお待ち申し上げます。

（鍋）

まんじ第138号

平成27年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集長）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045 (544) 5947
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田5-65
TEL 045 (346) 2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東ワークス・モトヤマ（日東印刷株式会社）
〒154-0016　東京都世田谷区弦巻3-13-18-202

表紙の絵について
「和して同ぜず」

田寺怜葦（たでられい）画